

東方不明録 一 「超越者」の幻想入り一 / THE TRANSCENDEND MEN

タツマゲドン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

約40億年前、地球で「生物」が誕生し長い年月を掛けて「進化」し始める

約600万年前、「知識」と「感情」を持つ「人類」が誕生

人類は更にそれらを磨いた

だが人類には別の「変化」が起こり始めていた

第三次世界大戦の終戦と同時に西暦が終わり、地球歴0017年

幻想郷に危機が迫っている

だが誰も知らない

突然記憶を失った少年が幻想郷に迷い込んだ

彼には人間や妖怪すら凌駕する「力」があった

彼には人間や妖怪にある筈の「感情」が無かった

彼は幻想郷の住人として暮らし始め記憶を取り戻そうとする

記憶が戻った時、彼は知るだろう

自分の正体、外界で起こっている事、幻想入りした「理由」、そして幻想郷の存亡に関わる計画

「エネリオン」「トランセンデンド・マン」「ユニバーシウム」これらを巡って幻想郷は波乱に包まれる

彼が全てを知り彼の失った記憶が全て戻る時世界の全てが変わる

「超越」せよ

目次

I n t r o

0 幻想入り | 1

| 2 赤霧異変

1 紅い霧 | 20

2 時間は止まらない | 26

3 内に潜む者 | 32

4 無感情 | 39

5 冷静 | 45

6 紅い悪魔再び | 51

7 黒い霧 | 58

8 異変の終わりと | 64

9 記憶 | 71

| 1 春雪異変

10 冬が来た | 79

11 春が来ない | 87

12 誰も気付かない | 95

13 死 | 100

14 迫り来る者 | 105

15 もう一つの戦い | 111

16 逆転 | 119

17 僅かな勝機 | 125

18 偽名 | 132

19 悪夢 | 138

0 永夜異変

20	ディックシリーズ	143
21	動き出す者達	149
22	4人の侵入者	157
23	欠陥品	164
24	6人の外来人	172
25	3つの戦い	180
26	二人の少年	188
27	切り札	196
28	決着	204
29	目的	211
0・5	設定集(く永夜抄)	218
0・5	幻想郷の休日	
30	花見に行こう	226
31	真紅の花を咲かせろ	233
32	2機の戦闘機	239
33	気ままな半日	246
34	ゲームをしよう	253
35	じゃあいつそ、飛行機無しで飛べば？	260
36	Furious Tenshi	268
37	灼熱の畑	274
38	殺したくないんだ	282
39	楽園の素敵なザイオン	290
1	風神録	
40	攻撃	296
41	強大な力	304

6 5	予感	526
6 4	受け止めてみる	515
6 3	感情と理論	505
6 2	感情	496
6 1	二つ名	490
6 0	見えない戦い	480
5 9	届かない声	471
5 8	呼ぶ者	462
5 7	乱れる日常	452
5 6	日常風景	444
2 地霊殿		
5 5	嫌だ	434
5 4	死体	424
5 3	伝えなくては	414
5 2	何の為	406
5 1	目覚め	396
5 0	集まる者達	389
4 9	決闘	379
4 8	動き出す者達	371
4 7	鎧	362
4 6	疑問	353
4 5	クローン	344
4 4	黒い男	334
4 3	人形	325
4 2	黒い掃除機	315

8 7	過去	739
8 6	驚け	727
8 5	搜索	716
2. 7 5	破壊神録	
8 4	W o k e U p	709
8 3	蛇と酔	700
8 2	地獄から来た男	691
8 1	蕎麦	683
8 0	値段では無い	676
7 9	拘り	668
7 8	はたらくトランセンデンド・マン	661
7 7	三本揃えば文殊の攻撃	652
7 6	新メニユー	644
7 5	W a k e U p	637
2. 5	幻想郷の休日2	
	設定集（〜地霊殿）	623
7 4	メッセージ	616
7 3	遺品	608
7 2	変化	595
7 1	不完全	585
7 0	破壊	574
6 9	願望	566
6 8	未知なるもの	557
6 9	衝動	545
6 6	光	535

93	92	91	90	89	3	88
イカリ	飛倉	飛倉	宝船	予兆	星蓮船	受け入れ
794	787	780	772	760		750

I n t r o

0 幻想入り

西暦1999年よりも昔

ある科学者が超能力を研究し、その末研究が成功に終わることは無かった。

西暦2000年

世界が二度目のミレニアムを迎えると共にある組織が結成した。

だがその存在を知る者は当事者達以外に居なかった。

西暦2026年

1つのベンチャー企業が世界初の有人火星探査に成功した。

火星では驚くべき発見が多数なされたが、詳細は極秘扱いされた。

西暦2045年

世界でも有数の科学技術系企業「ペルセウス」社が世界において一際影響力を持つ様になった。

また、暗黒物質・暗黒エネルギー研究の過程で、ある素粒子実験施設にて新素粒子「エネリオン」が発見された。

西暦2050年

地球上で天然に存在する新物質「ユニバーシウム」が発見され、地表には殆ど存在しない事やマントル・核部には「鉍脈」が存在するとまで判明した。

西暦2060年

当時のアメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市で特殊爆弾による大規模テロが発生した。

何者の計画なのかは不明、当時の人口1200万人の内即死の死者が400万人以上で、残りは何かしらの軽重傷を負うか重傷によって死亡した。

この頃、ある組織が手に入れた超能力研究の記録を元に超能力の存在を証明し、超能力者を開発する研究も進められた。

いつからか超能力者達は「トランセンデンド・マン」と呼ばれ、次

世代の兵器として期待が高められた。

西暦2070年

ある発展途上国間の争いが戦争に発展し、やがて世界中に広まった。

その戦争は後に「第三次世界大戦」と呼ばれ、全ての国が戦争に巻き込まれた。

新素粒子「エネルギー」の研究過程で、とある素粒子実験施設において新素粒子「インフォームオン」が発見された。

他にも、「エネルギー」、「インフォームオン」、「ユニバーシウム」、「トランセンデンド・マン」それぞれが関係性を持っている事も発見された。

西暦2085年

「第三次世界大戦」は核兵器が使用される事は無かったが、15年間で地球人口は激減し90億人から30億人にまで下がった。

西暦2100年

「第三次世界大戦」によって全ての国家が崩壊した。

この時点で人類の総人口は10億人。

地球歴0001年（西暦2101年相当）

西暦が廃止され「地球歴」なる新たな暦が使われた。

ある組織によって管理社会化が飛躍的に進んだ。

政策に反対する人民も居たが、組織効力と武力によって弾圧された。

地球歴0010年

ある人物がその組織に反対する者達をまとめる勢力を結成した。

それから両組織間の戦争が始まった。

地球歴0017年。

ある施設にて二人の軍人が廊下を歩いていた。

一方は40代半ばの中年だが、もう一方はまだ20歳にも達していない少年だった。

二人とも暗い緑を基調とした軍服を着ており、左胸に「EMO」と書かれた刺繍が縫い付けられている。

「スペースボム」と起爆の仕方は覚えてただろうな。」

と年配の方。

「はい。デイツク中佐、質問が有りますが、「バーストポイント」はどうやって?」

と少年の方。

双方感情の籠っている様子を見せない抑揚の無い声だ。

ただし年配の方は威厳を醸し出しているのに対し、少年の方は何の意思も無いただの最低限の喋りだ。

「私とした事が、言い忘れていたな。起爆装置同様、この端末に「バーストポイント」を示すマップを搭載している。ちなみに他にも色々機能はあるが、説明の必要は無いだろう。」

デイツク中佐と呼ばれた男性は思い出した様にそう言うのとポケットから携帯端末らしき物を取り出し、もう一人の軍人に手渡した。

「はい。」

二人は歩いていくと、やがて、広い部屋へと辿り着いた。

部屋には中央に量子加速器か核反応炉の様な物がある。

「テレポルトの際は乗り物酔いに似た症状が現れるそうだが、短時間で治る。そのような症状が出たらまずはコンディションを整えるまで行動を起こすな。」

「はい。」

少年は最低限の返事をする、量子加速器らしき物に乗り込んだ。

「よし、起動しろ。」

「はい、では「スペースマシン」起動……異常無しです。」

技術者の一人が量子加速器の様な外見をしたスペースマシンと呼ばれる物を起動し、パネルを操作し徐々に出力を上げていく。

スペースマシンは、始めはほんの少し程度の光を発していたが、徐々に光量は増していった。

やがて照明器具の光など必要無い程輝いていた。

「エネルギー」量、誤差範囲内。異常なし。テレポート実行します。」

技術者は操作パネルにある【テレポート開始】のボタンを押した。白く激しい閃光が辺り一帯を襲う。

閃光が止んだ瞬間、そこに少年の姿は無かった

「成功か？」

デイツク中佐が技術者に問う。

技術者はモニターの数値やグラフを見ながら、

「観測データによれば今までで異常は有りません。「エネルギー」値も理論の誤差範囲内です。確実に成功でしょう。しかし、ついに起動しましたな、「ユニバーシウム・マイン計画」が。」

と言った。

「ああ、これが成功すれば人類はエネルギーの不足を心配する必要は無いし、「反乱軍」を短期間で制圧出来るだろう。」

嬉しがるその声にも抑揚は無かった。

まるで視点を何か一点だけに見据えている様な……。

同じ頃、人類進化の段階で捨てられた物が最終的に行き着く場所「幻想郷」にて。

「今日も全然参拝客が来ないわねえ…… どうしてかしら。」

そう愚痴をこぼしたのは、ここ博麗神社の巫女である博麗霊夢だ。

「何かの本で読んだことがあるんだが、商売というものは自分の利益ではなく、他方の利益を優先すべき、だそうだ。」

今度は霊夢の親友である、魔法使いの霧雨魔理沙が言った。

二人は博麗神社の縁側でお茶を飲みながら雑談をしている最中だった。

「その本、馬鹿じゃないの。何で態々敵を儲けさせるのよ。戦っている相手に自分の武器を渡すようなものじゃない。」

「ま、まあ、あくまでその本を書いた奴が言っているんだから、別に考え方なんて色々あるんじゃないか。」

「まあ、それもそうね……。」

「それと私が思うことなんだが、お前は客の事考えていないから儲からないんじゃないか？」

「人の事考えていないのはあんたも同じじゃない！」

「こんな具合に会話がなされていた。」

談笑する二人は未来の事など気にせず今を生きていた。

突然、二人の正面から白い閃光が発生した。

「一体何?！」

「うわっ！眩しい！」

少しして閃光は消えた。

二人とも目を開け、閃光がした方向を見た。

魔理沙がある事に気が付いた。

「……………なあ、霊夢。あれ何だ？」

魔理沙が指を指した先には一人の男が倒れていた。

二人はその男に駆け寄って行った。

男はまだ10代後半位で少年と呼ぶ方が正しいだろう。

身長は170cm弱位、髪は青がかったような長めの黒髪だった。

服装は暗い緑を基調とした目立たなく動きやすさと丈夫さを重視したような服が、体全体を覆っていた。

胸には「EMO」と書かれた刺繍があった。

「おいっ！大丈夫か?!」

魔理沙が声を掛ける。

しかし返事は無く、瞼が開く気配も無い。

「……………息はあるわ。気絶しているだけみたい。魔理沙、彼を中まで運んで。私は布団を用意するから。」

霊夢は注意して見ながらそう言うのと布団を用意しに神社内へ戻った。

魔理沙が少し離れた所にリュックを見つけた。

「……………ん？このリュックもこいつのか？とりあえず持っていくか。さて、大変だな。」

大きなリュックには何が入っているのか、興味が沸いた。

魔理沙はリュックを背負い、少年を箒に乗せ、運んで行った。

同じ頃、幻想郷の何処かで。

『今情報が入った。「管理軍」の奴が来たらしいぞ。場所は分かるか？』

「ああ、こちらのレーダーにも結界を弄った形跡が映っている。調べて来よう。それでは通信を切る。」

『あまり目立無い様にな。こちらの存在がばれれば……………。』

「ああ、アイツにも言われているよ。それに、幻想郷にも混乱を招くからな。全く、対処する立場の事も考えてくれや。」

男は通信を切った。

視界が開いた。

瞼に映る暗闇が消え、代わりに景色が目流れ込んでくる。

見慣れない和風の一室。

自分は布団の中に。

隣には見知らぬ少女の姿が……。

「あ、起きたみたいね。大丈夫らしくて良かったわ。」

少年の隣に座る少女が言った。

黒く長い髪を後ろで纏めた紅白の巫女服姿だった。

少年は返事に対し何も喋らず首を傾げた。

「あなた名前は？」

少年は少し考え込み、

「……分らない。僕は誰だ？」

挙句そう返事したが、今度は少年が説明した。

年の割には落ち着いた、抑揚の無い、何の感情も無い、声だった。

「もしかして何も覚えていないの？」

「……ああ、何も分らない……君は誰だ？」

「私は博麗霊夢。ここの博麗神社の巫女よ。」

「博麗神社？分らない……説明を頼む。」

知らない単語を聞き質問する少年。

少年は未知の世界に居る筈なのに冷静だった。

「あなたが今いるこの世界は「幻想郷」よ。分かるかしら？」

「全然だ。難しくても良いから説明を続けてくれ。」

「簡単に言えば妖怪なんかの外の世界での存在が無くなった者達が最終的に行き着く所よ。外の世界から結界で遮断されているから普通なら外の世界から何かが入ってくる事は無いんだけど、稀にあなたみたいに外の世界から人や物が入ってくる事があるのよね。」

「要するに簡単に言えば僕は特殊な世界へと迷い込んだ、という訳か……なら霊夢、どうして僕は此処にいるんだ？難しくても良いから説明してくれ。」

「少し言わせて、あなた凄いわね。こんな時なのに冷静に状況把握出来るなんて。普通なら混乱してしまうけど。それで詳しい事はまだ分らないけど、仮説としてはいくつかあるわ。」

「続けてくれ。」

「まずはあなたの存在があなたのいた世界から認められなくなった事。これは昔はよくあったけど、今はあまりないわ。恐らく外の世界の文化が無くなってきているからかもね。」

少年が頷くのを見て霊夢が話を続ける。

次にスキマ妖怪が外の世界から勝手に連れてくる事。これがよくあるパターンなのよね。でもそれにしてもあなたは私たちの目の前

に突然現れたとき、それらしき痕跡がなかったのよ。」

素振りから見てこれも少年には思い当たる節が無いらしい。

「最後に何らかの拍子で結界が一時的に破られ、その間に入ってくる事。これはあくまで可能性としてで、第一結界が外部の物を入れるほど不安定になったことも無いから実際には全くないのよね。この3つが挙げられるんだけど、あなた何か覚えていることはないかしら？
どんな些細なことでもいいいわ。」

少年は考え、やがて口を開いた。

「覚えている事……駄目だ、何も思い出せない……………」

すると突然、障子扉が開き、別の少女が入ってきた。

「霊夢、これ近くに落ちていたリュックの中身なんだが………… おつ、
どうやら起きた様だな。」

癖のある金髪と金目、黒いワンピースの上に白いエプロン。

「ええ、でも何も覚えていないみたいなのよ。」

「へえ、それは大変だな。おつと、自己紹介が遅れたな。私は霧雨魔理沙。魔法の森に住んでいる普通の魔法使いだ。」

「そうか。よろしく、魔理沙。」

礼儀正しく挨拶をする少年だが相変わらず声に感情は籠っていない。
い。

「ああ、よろしくな。ところでこれお前と一緒に落ちていたリュック
なんだが、お前のか？」

少年はリュックを見つめ、観察すると、

「……………これは…………… 僕のだ。何故なのかは分からないが、そう思
う。」

確信しそう答えた。

「そうか、やつぱりお前のだったか。」

「ところで魔理沙、さっきの話の続きは？」

霊夢が言った。

「おつと、話が逸れていたな。このリュックに入っていた物をいろんな奴らに見せてみたんだが、皆がほとんどの物は何で出来ていて、どんな用途に使うのか全く分からないんだ。」

「本当？他に誰かに見せてみたりした？それからその入っていた物って何？」

「霖之助は留守だったし、阿求や小鈴にも見せたんだが2人ともまるで全く分らなかった。里の皆にも見せたんだが、分かる奴は誰一人いなかったぜ。中身は、これだ。」

魔理沙はリュックから色々な物を取り出した。

入っていた物としては、携帯端末らしき物、銃らしき物、刃渡り20cm弱のナイフ、サングラス、電子部品、工具類、その他、そして一辺2・5cmのルービックキューブラしき物。

大体の物は判明したが、このルービックキューブラしき物体だけは何に使うのか見当が付かない。

「僕は何をしていたんだ？」

他の2人も全く同じ考えだった。

「これ、外の世界の銃っぽいんだが、銃口に当たる部分に変な結晶らしき物に覆われていてさらに弾倉が全くないんだぜ。引き金を引いてみても弾は全く出なかった。このナイフにしてもこれ程の長さの物はあたしでも見たことが無い。狩りに使えるんじゃないか？この携帯端末らしき物は少し弄ってみたんだが、何の反応も無く、さらに他の物もそうなんだが、河童たちの工具でもどうにも出来なかったんだ。」

「へえ。ねえ、あなた何か思い出した？」

少年は少しの間黙ってから、携帯端末らしき物を取ると、

「何故だろう。何だか使い方を知っている気がする。」

と呟きながら液晶画面に指を当てた。

すると、画面が光った。

【指紋認証クリア アダム・アンダーソンと確認 端末を起動します】

液晶画面に文字が浮かび上がり、やがてホーム画面らしき画面が映った。

「アダム・アンダーソン、これが僕の名前なのか？……何故かは分からないが、そんな気がする。」

「アダムか。いい名前だな。改めてよろしく、アダム。」

「ああ、あと霊夢も改めてよろしく。」

アダムは霊夢と魔理沙と握手を交わした。

アダムは再び端末を見て何か思い出したように操作し始めた。

「…………… 確かこうしたら…………… 出たぞ、IDだ。」

画面にはアダムの顔写真や個人情報書類が載っていた。

氏名：アダム・アンダーソン

人種：トランセンデンド・マン

所属：地球管理軍TM特殊戦闘部隊

生年月日：地球歴0001年7月13日

血液型：B+

出身：ノースアメリカーロサンゼルス

総合戦闘値：44 (ランク：A 内訳 A：8 S：10 D：8

E：8 P：10)

他にも多少の事は書かれていたが、これだけしか今分かるアダムの情報が無い。

「そういえば僕は軍人だった気がする…………… だが他に分かる事が何も無いのが残念だ。」

「大丈夫よ。ゆっくりでもいいから少しずつ思い出していけばいいわ。」

「そうだな。それまでこの幻想郷で色々やってみるといいぜ。」

「ああ、きつと思いつけるはずだ。そう信じよう。」

「で、あんた金も泊まる宿も無いんでしょ。だったらこの博麗神社でしばらく暮らしてみたらどう？」

「…………… そうだったな。これから世話になるな霊夢…………… しかし、どうも変な気分だ。」

「変って、お前具合でも悪いのか？」

「いや、そうでは無い。僕には何か重要な使命があつてこの幻想郷という場所に来た、そんな気がするんだ。これもただの直感だが……………」

「ふーん、じゃあその使命を思い出せると良いな。まあそれは置いて、今からは生活に必要な物を買に行こうぜ。」

とアダムの疑問は解かれず、アダムは何処か引つかかった様な感情であったが、魔理沙の言う通り、里へと買い物に行く事になった。

「ここが里よ。」

「中々活気に溢れているだろう。」

「…… 個人的には何だか和むな。」

「ええ？そうか？」

「僕のいた世界は此処よりも遥かに科学技術が優れているからその為だろう。」

「なるほどな。てかお前、早速だんだん思い出ししてきたんじゃないか？」

「一般常識程度なら思い出し易いんだろうな。だが、自分自身についての記憶は思い出せない。」

アダムは霊夢と魔理沙と三人で一緒に人里へ来ていた。

勿論アダムの為の生活物資を買うためだ。

ちなみに魔理沙は特に理由もなく、暇つぶしとしてアダムと霊夢について来ている。

「着いたわ。ここは服を売っているの。仕立てもしているわ。」

「あとここでは外の世界から流れ着いた衣服なんかも販売しているんだぜ。」

「魔理沙良くそんなことを知っているわね。」

「というかお前がここに来ていないだけだろ。お前いつも同じような

服ばっかし着ているからな。」

「私に金が無いのは知っているでしょ。あんたにはあつて良いわねえ。」

霊夢が皮肉を込めて言った。

「心配するな。金欠なのはあたしも同じだぜ…… だけどフアツシヨンは大切だろ？」

「心配するな、って余計心配するわよ。服なんて体を包み、暑さや寒さを凌げればいいじゃない。」

「えー、そうか？ アダム、お前からも何とか言つてやれよ。」

「何故そこで僕なんだ…… 僕も霊夢の意見には一理あると思う。裝飾なんて必要あるのか？ 何でも作られた物の目的とは何かを考える事は重要だ。」

「えー？ お前もかよ…… というかさつきと入ろうぜ。」

追い詰められた魔理沙が言い出し、3人はようやく店へと入った。

「いらっしやい。よう、魔理沙。また来たのかい？ 霊夢、お前とは久しぶりだな。たまには来いよ。」

三人が中に入ると、店主の友好的な声が聞こえてきた。

店主は20代半ば位で身長185cm程、長い茶髪と手入れされた顎鬚が目立つ。

また、薄い黒のサングラスを付けていて、暗いが中の目が見える。

「ああ、私はちよつと暇つぶしだ。」

「要件は私じゃなく彼ね。」

和洋服店の店主は霊夢と魔理沙の後ろにいる少年に目をやった。

「見かけない顔だな。あんた外人かい？名前は何？」

「そうだ。名前はアダム・アンダーソン。よろしく。」

「俺は柏リヨウという。ちなみに俺も外人だ。よろしくなアダム。」

二人は握手した。

ただ、リヨウの日本的な名前に対し、顔立ちはステイツ系なのか、という違和感を心の中で思った。

「それで、どんな服がいい？」

アダムはしばらく考え込んだ。

「とりあえず下着は幾つか必要だな……… どんな服か……… そうだな、動きやすい服とか。」

リヨウは少し辺りを見回し、一つの服に目をやった。

「最近外の世界から流れ着いた服もあってな、これ、お前に似合うんじゃないか？」

リヨウが手に取って広げたのは、黒っぽくて目立たなく、丈夫そうな素材の服で、黒い革ジャンと暗い緑の長袖だが割と薄いTシャツ、デニムの長ズボンだった。

「このジャケットは通気性に優れていてな、動きやすさならこれが一番と思う。」

「成程、いいものだ。」

アダムは実際に着てみて言う。

「お前そのジーパン似合うな。」

魔理沙が言った。

「そうか？そういうえば僕はジーンズが好きだったような気がするな。」
「ふーん、やっぱり癖とか習慣とかは記憶がなくなっても残るものなのか？」

するとリヨウがその話を聞いていたらしく、

「記憶が無くなっても、ってじゃあお前はここに来る前に記憶喪失になつたのか？」

と聞いた。

「ああ、そうらしい。このリュックには色々外の世界の物があって、何か僕の過去が分かるかも知れないんだが、今の所分かった事はあまり無いんだ。」

「へえ、ならその中の物を見せてくれないか。俺も外来人だから何か分かるかもな。」

「ああ、構わない。今取り出すよ。」

アダムはリュックに入っている物を一通り出した。

リヨウはそれらを見てしばらく考え呟き始めた。

「これは…… ハンドガンか。良い奴じゃねえか。」

「でも銃弾や弾倉らしき物が無いんだぜ。」

「それがな、俺のいた世界は最近の技術だと銃は金属弾ではなく特殊なエネルギー、お前たちから言うところの霊力や魔力の類だ。それを利用する。それをビームに変換して発射するような仕組みになっているんだ。このナイフもその特殊なエネルギーを利用して非常に細かい振動を起こしたり、ナイフそのものの強度を上げたりする仕組みになっている。」

「すごいなー。外の世界がこんなに技術が進んでいたとは。月の技術にも匹敵するんじゃないか?」

魔理沙が感心した様に言う。

「だが、これは何だろうな。これだけは俺にも分からない。ルービツクキューブとしても一個なら分かるが、なんでこんな大量にあるんだ?」

だがリヨウが唸りを挙げたのは大量にあるルービツクキューブらしき物だ。

「いや、十分参考になった。ありがとう、リヨウ。それにしても、あの銃やナイフやはり僕は軍人だったのか?」

「そうだ。ところで霊夢、服の代金は前回の異変解決の件があってチャラでいいぞ。」

「本当?!ありがとう!」

「霊夢お前本当に金に困っているんだな…… 最近妙な噂を聞いた

ぞ。異変解決の礼金目的で自ら異変を起こしている、って聞いたけど本当か？」

「何よその噂。誰から聞いたの？」

「俺が今考えた。」

「馬鹿にしないでよ！金には困っているけど、だからと言って私が妖怪と同じ事をするわけがないでしょー！」

霊夢は怒ったのか、一歩一歩わざと ドシン と踏み鳴らす様な足取りで店を出て行った。

「アダム、私たちも霊夢の後についていくぞ。まだ買い物全部済ませてないからな。」

魔理沙のこの台詞で、霊夢に呆気にとられていたアダムが我を取り戻した

「……ん？ああ。それじゃあまたなりヨウ。」

「ああ、いつ来てもいいぞ。何なら中二服でも譲ってやるよ。自信作だぜ。」

アダムと魔理沙は店を出るとすぐさま霊夢を追った。

そんなこんなでようやく買い物を終え、アダム達は博麗神社へと帰った。

リョウはアダム達が店を出て行った後、二階の自室に来ていた。

リョウの目の前には個人用のコンピューターがあった。

勿論、幻想郷にはそんな物を作る技術は無い。

「ロウ、聞こえるか？」

リヨウは目の前の液晶画面の上の方にあるカメラを覗ながら言った。

『ああ、聞こえるがリヨウ、せめて名前を言えよ。』

液晶画面から人の顔が映り、そのロウという人物はそう言った。

ロウはリヨウと同じくらいの歳のアジア系の黒髪黒目の短髪の男性だ。

「まあそれは良いとして、お前がさっき言っていた通り、「管理軍」の奴らが一人送り込んでいたみたいだぜ。」

『やはりか。で、そいつはどうした？ 始末したのか？』

「それが、記憶を無くしているらしいんだ。何も知らないのに始末するのにもアレだろ？」

『成程、それなら上手く引き込めばこちらの味方になってくれるかもしれないな。』

「そいつはアダム・アンダーソンと言っていたが、出来ればそいつの事を調べてくれないか？」

『ああ、調べておこう。他に何かそいつについて分かる事は無いか？』
「それなら顔写真を撮っている。今送るぜ。あとついでに、この写真のルービックキューブみたいな物も何なのか分からなくてな、こいつも調べて欲しい。」

リヨウは付けていたサングラスを取り、縁にある端子部分にコネクタを取り付けた。

このサングラスは極小カメラが付いており、写真や短時間の映像を撮る事が出来る。

『ありがとよ。これならすぐ分かるかも知れんな。』

「サンキュー。それじゃあまたな。」

液晶画面には「チャット終了」の表示が映った。

「アダムの幻想入りを祝って乾杯！」

魔理沙のその一声で、アダムと霊夢と魔理沙の3人はアダムの幻想入り祝いの食事を食べ始めた。

「この棒は箸と言うのか。使い辛い食器だな。それにしてもいかにも美味しそうな料理だ。たぶんこんな料理は食べた事無いな。」

「へえ、じゃあお前の世界ではどんな料理を食っていたんだ？」

「うーん…… 何て言えばいいか…… 合理性のみを重視した様な…… 説明が難しいものだ。」

「もしかして和食つてのを知らないのか？」

「和食と言うのか。これに似ている料理はあるけど、そういった区別は僕の世界には無かったな。この黄色くて中に何か有る様な物は何だい？」

「それは天ぷらだぜ。外の衣はサクサクで中の具材と合うぞ。ちなみにこれの中身はエビだな。」

アダムは箸でその天ぷらを取った。つもりだったが、滑り落ちてしまった。

もう一度つかむ。が力が思うように入らず、取れない。

「違うわよ、箸はこうやって鉛筆やペンを持つようにして、こうよ。」
霊夢がすぐ箸の使い方を教える。

そして1分後

「こ、こうか？」

「そうよ、あんた上達が早いわね。」

「さてと、食べようぜ。」

アダムは先ほど取れなかった天ぷらを取り、口元に寄せ、一口食べる。

(美味しい。魔理沙の言った通り衣と具が見事に合っているな。)

「アダムはその美味しさに感激したのか無言で次々に食べる。」

「黙って食うなんてそんなに気に入ったのか?」

「他にも料理はあるわよ。この刺身なんかどう?」

「生魚か。僕のいた世界では生魚を食べる習慣はあまりないんだが、折角だし食べよう。」

「こっちの日本酒もどうだ?」

「日本酒... 酒という事はアルコールか。僕のいた世界だとエタノールのほとんどは燃料に使われているんだ。こういうった飲料用の物は規制が多く、値段も高いんだ。健康にも悪い。確か僕の年齢では飲む事が出来ない。」

「酒を燃やすだ?! 外の世界は思わないことに使っているんだな。折角だし飲んでみるよ。飲まないのは人生の半分を無駄にしている様なものだぞ。」

「たまには良いかもな。」

こうしてアダムの幻想入り初日は楽しく過ぎた。

―2 赤霧異変

1 紅い霧

アダムの幻想入りから1週間が経った。

そして、幻想郷では「異変」が起きていた

「これは雲、いや霧か？何れにせよ随分と赤いな。」

アダムの言う通り幻想郷では赤い霧が発生しており、その霧は幻想郷中を包んでいた。

「どうやら異変みたいね。」

「異変？良く起こるのか？」

「何者かの目的によって自然や環境が乱れたりする事よ。今回は今までにないタイプだから新参者の妖怪かしら？」

丁度魔理沙が博麗神社に来た。

「霊夢、やはりこれって異変か？」

「その通りのようね。」

「ブン屋から聞いたんだが、この霧が出る前に魔法の森のさらに北に赤い洋館が出現したんだってさ。」

「間違えなく異変の元凶ね。それじゃあアダム、異変解決に行くからあなたはここで待っていて。私たち専門家の出番よ。」

「分かった。二人とも気を付ろよ。」

「ああ、私たちは大丈夫だ。絶対戻ってくるからな。」

霊夢は宙に浮き、魔理沙は箒に乗り、2人は何処かへと飛んで行った。

「二人とも信じているぞ。さて、何しよう。」

アダムは神社内で暇を潰すのだった。

1時間後、アダムは霊夢達を助けようかと行こうか行くまいか考え込んでいた。

「嫌な予感がしてならない。やはりここは行くべきか。」

何故ならアダムは外が異様に暗い事に気が付いていた。

それは霧が少しづつではあるが黒くなっているからだ。

先程までは異様なほどに鮮やかな赤さだったが、時間の経過と共に赤に黒が混じっていった。

「霧がこれ程黒くなるという事は…… すまない霊夢、待つと言ったが、やはり僕は行く事にする。」

アダムは腰に銃とナイフを下げた。

そして、アダムは神社を飛び出し、そして霧の濃い方向、霊夢達が行った方向へと走って行った。

アダムは魔法の森を駆け抜けていた。

その猛烈な速さは時速72kmにも達する。

短距離走選手の2倍の速度に相当するが、エネルギー量で言えば2乗して4倍だ。

勿論“普通”の人間にはこんなスピードは出せない。

その事についてはアダム自身も驚いていた。

「かなり遠い様だな。しかし僕にこんな能力があつたとは。それに疲れをあまり感じないし、これ以上も出せそうだ。」

突然、アダムは立ち止まった。

少女がボロボロの姿で倒れていたのだ。

少女は金髪で見た目は10歳かそれ以下か。

「大丈夫か？」

アダムは声を掛ける。

しかし、その返事は予想だに~~け~~じなかつたものだった。

「グギャアアアアアアアアアアアアアア!!!」

少女はいきなり起き上がり、~~!!~~アダムを襲つて来た。

アダムはすぐさま躲す。

「妖怪か。思っていたより強そうだ。」

少女は爪を立て、アダムを斬り裂こうと突進した。

しかし、アダムにはかすりもせず、全ての攻撃が躲された。

(躲せる、これが、僕の力か。勝てるかもしれない。)

アダムは少女の薙ぐ腕ををしゃがんで避けると同時に少女に口キックを喰らわした。

少女がバランスを崩し、それをアダムは空中に蹴り上げた。

さらに、アダムは空中へ跳び上がり、連続で蹴りを決め、止めに1発、踵落としを決めた。

少女は成す術もなく地面へ叩きつけられた。

「終わりか？」

しかし、少女は何事も無かつたかの様に起き上がり、またアダムを襲い始めた。

「まるで効いてない。」

驚くアダムだが冷静さは保たれていた。

少女から連撃が繰り出され、しかも攻撃は前よりも速くなっている気がした。

少女の爪がアダムの膝をかする。

「くっ！」（戦いに慣れない。記憶が無いからか。）

少女はさらに追い打ちを掛けようと攻撃を仕掛ける。

襲い掛かる腕を掴み、肘打ちを炸裂させる。

突き出される爪をスウエーで避け顎へアッパーを決める。

アダムは避けるに避け、隙を突いては自分も反撃してみたが、まるで効かなかった。

アダムは少女の腕を横に反らしながらストレートを少女の腹に喰らわし、その隙に腕の連撃であらゆる箇所を攻撃を仕掛けた。

「ガッ！」

1つだけ少女が怯んだ箇所があった。

後頭部である。

「よし。一気に決めるか。」

アダムは少女が怯んだ隙に背後に回った。

ストレート、フック、アッパー、回し蹴り、蹴り上げ

アダムは更に空中に跳んだ。

肘打ち、裏拳、手刀、ナックル、一回転して飛び蹴り。

ちなみに、今までの攻撃は全て少女の後頭部に当たった。

少女はまた地面に叩きつけられた。

少女は起き上がったが、少女の視界にアダムの姿は無かった。

「はっ！」

アダムは背後から両足蹴りを決めた。

少女は成す術も無く吹き飛ばされ、俯せに倒れた。

「終わったか？……息はある様だが、別にどうでも良い。」

少女は生きてはいる様だが、起き上がらなかつた。

「妖怪がこれ程の力を持っているとは、予想だにしなかつた。さて、先を急ぐか。」

アダムは再び走り始めた。

1時間後、少女は起き上がった。

「……いてて。頭のうしろが痛い…… あれ？紅白と白黒の人間とほかにだれか戦ったような気がするけど、まあいいか。」

少女は気ままに何処かへと行った。

ちなみに、この少女はルーミアという人食い妖怪である。

アダムが走り始めて10分後、アダムの前には青髪の少女がいた。少女には羽が生えていた。

「最強のあたいの陣地に勝手に来てただですむと思うなー！」

「今度は…… 霊夢から聞いた情報からすると…… 妖精か。」

少女は右手にカードらしき物を持った。

「凍符「パーフエクトフリーズ」！」

少女がそう叫ぶとカードが光り、カードからは大量の光弾が出た。

アダムはそれらを難なく避けていき、少女に急接近したかと思うと、腹に肘打ちを喰らわした。

少女は何も言わず、その場で気絶し、倒れたのだった。

「ん？」

アダムは先ほど戦った少女に苦戦した事もあり、この少女が思ったより弱い事に拍子抜けし、呆然としていた。

「チルノちゃんー！」

すると、何処からか別の少女が来た。

見たところ敵意は感じられなかった。

その少女は緑の髪をしており背中に蝶のような羽が生えていた。

「チルノちゃんったらまた人に迷惑を掛けて仕方がないんだから……あの、すみません。この子が迷惑を掛けませんでしたか？」

緑髪の少女が尋ねる。

「この子の友達かい？僕は大丈夫だけど、すまない、それ程重症では無いが、君の友達を気絶させてしまつて。」

「大丈夫ならよかったです。チルノちゃんもこれでいきなり戦おうとする事に懲りて欲しいです。」

緑髪の少女は苦笑しながら言った。

「あの……私、大妖精と言います。それとこの子はチルノちゃんです。」

「そうか。僕はアダム。外来人だ。そうだ。大妖精、君に聞くが、黒髪で紅白の服を着た子と金髪で白黒の服を着た子を知らないかい？」

「あ、その人たちなら確か向こうの方へ飛んでいきましたよ。」

大妖精が指を指した先は他の場所よりも霧が濃く、色はまだ赤かった。

「そうか、ありがとう、大妖精。僕は今ちよつと急いでいるんだ。また機会があつたらよろしく。」

アダムは先を急ぐ事にして先程よりも速く、濃く赤い霧の方へ走つて行った。

2 時間は止まらない

「思ったより大きいな。そして赤みの彩度が高い様だ。」

アダムの前方少なくとも100メートル先には赤く巨大な館があった。

いや、「赤い」と言うよりも「紅い」と表現した方が感覚的には正しいだろう。

だが、アダムには「紅い」というフレーズが思いつかないらしい。(扉は5m、門番はあの女性一人だけか。何故か服がボロボロだな。恐らく霊夢達だろうか。という事はどうやら回復が早いのか。)

館の門番は赤毛のロングヘアでチャイナドレスを着た女性だった。(出来るだけ感付かれない様に侵入しなければな。)

アダムは遮蔽物に身を隠しながら館へと近づいて行った。

門まであと5メートル。

だが、

「……誰ですか？そこにいるのは。」

門番はアダムの存在に気付き、アダムの方へと近づいてきた。

(良く気付いたな。一旦引き下がるか、不意を突くか。)

アダムは感心しながら手っ取り早く終わらせられる不意打ちを選んだ。

門番がアダムの隠れている茂みに近寄る。

(今だ。)

アダムは門番に駆け込みストレートを掛けた。

直後、門番はアダムの方を向くも、アダムの拳は門番の腹に当たった。

門番は吹き飛ばされ、鉄の門にぶつかり、鉄の門もろとも倒れる。ここまではアダムの想定内だ。

だが、門番は不意打ちが効かなかったかの様にすぐに立ち上がった。

「い、一体なんですか?!まさかこの紅魔館へ侵入するつもりですか? そうだと言うのなら、この紅魔館の門番、紅美鈴が許しませんよ。」

「こちらも友人を助ける為に来たんだ。引き返す訳には行かない。」
(中々の防御力だ。簡単には行かないだろうな。)

二人は戦闘の構えをとった。

アダムは拳を握り、右手を体の前に、左手を顔の前に構えた。

美鈴は姿勢を低くし、両腕を前後に広げ、手は手刀の形をとっていた。

(極東格闘術に似た構えだな。)
「やっ！」

アダムの裏拳で戦闘が始まった。

しかし、受け止められる。

アダムはさらに裏拳3発、手刀、フック、ボディ、二連蹴り、ローキック、蹴り上げ、とまだまだ続けていく。

またしても全て受け止められ、仕舞には腕を掴まれた。

美鈴はアダムを投げ飛ばし、壁にぶつけた。

アダムは上手く受け身を取ったためか、ダメージはほとんど無く、壁もあまり壊れてなかった。

それからアダムは、駆け込み振り下ろしパンチ、ローキック、跳び蹴り4発、両足蹴り、とするが避けられた。

さらに、今度は美鈴へとラッシュの嵐を掛け、美鈴も同じくラッシュを掛ける。

一発のジャブが美鈴へ当たる。

アダムは追い打ちとして、ストレート、裏拳、回し蹴り2発、肘打ち、手刀、アッパー、踵落とし、と決まった。

美鈴はかなりのダメージを受けたものの、すぐに距離を置き、体勢を立て直した。

「中々やりますね。ですがあなたの動きは多少無茶苦茶な所があります。」

「忠告をどうも。」(技は効かない、ならば実力だ。)

するとアダムは低い姿勢になり、両手を地面に着き、右足を曲げ、左足を後ろへ伸ばす、スプリンターのスタートダッシュの構えだ。

ドゴーン!

この爆音は他でも無く、音速を越えた時に発する衝撃波だ。

この時に発するエネルギーは陸上選手の1156倍以上となる。音速を越えたアダムは美鈴へと襲い掛かる。

美鈴は動きは捉えているものの、速すぎて対応が間に合わない。アダムの頭突きが美鈴に炸裂した。

さらに、アダムは空中で前に回転し、跳び蹴りを4発喰らわせた。アダムは着地し、そしてラッシュを何十発も当て、最後にアツパ―で上に吹き飛ばした。

アダムは飛び上がり、蹴りでさらに上へと吹き飛ばす。そして、もつと高く跳び、両手を組んで殴りつけた。

美鈴は仰向けで地面に叩きつけられた。

直後、アダムの降下ラリアットが美鈴の腹に決まった。

美鈴は気を失った。

「倒せた様だな。しかし、霧が黒くなっているのがどうも気になる。あの色は光を遮るだけでは再現できない。」

アダムの言う通り、霧はよく見なければ色の赤みが見えない程、黒くなっていた。

「さてと、急がなくてはな。」（動きに無駄がある、か。覚えておこう。更に強くなれるかもしれない。）

アダムは紅魔館の玄関ドアの前にいた。

音を立てない様にそつと開け、中に入った。

（内部も赤いのか。変な趣味だ。）

アダムの言う通り、内部の壁や床は勿論、家具、小物、等全ての物が赤、いや、紅かった。

広間中央の天井にあるシャンデリアも紅く輝いていた。

突然、一本のナイフがアダムの目の前に浮いていたかと思うと、アダムの頭を目掛けて飛んで来た。

すかさず体を反らして避ける。

「ようこそ、紅魔館へ。案内致しましょうか？侵入者さん。」

正面階段にいつの間にかメイド服を着た女性がいた。

「この私、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜が歓迎致します。」

咲夜と名乗った女性はそう言い終えるとアダムの視界から消えた。

それと同時に、アダムの前方からナイフが数本飛んで来た。

アダムはナイフを避け、広間の中央へ移動した。

そして、アダムは玄関の前にいる咲夜を見つけた。

(いつの間にな？気配を感じなかった……。)

今度はアダムの左右からナイフが十数本飛んで来た。

アダムは避けながら、咲夜の方へと駆け込んだ。

しかし、咲夜はまたしてもアダムの目の前から消えた。

アダムは常人より遥かに優れた動体視力を持つというのに、咲夜が消える瞬間何が起こったのか分からなかった。

(瞬間移動か?)

アダムが振り向くと、咲夜は広間の中央の空中に浮いていた。

「やるわね、貴方。ここまで来たとなると美鈴を倒した、という事もあるよね。だけど貴方は負ける。何故なら私には「時を止める程度の能力」があるもの。」

(時を止める、成程、道理であんな瞬間移動が出来る訳だ。しかし、疑問があるな。止められるとしたら、何故自分だけ動けるのか。他にも色々疑問がある。時を止めている間に攻撃をしていない。)

アダムは咲夜へと飛び掛かった。

またしても咲夜は消えた。

「幻符「殺人ドール」」

咲夜の声があったと同時に今度は上下左右前後斜め全ての方向から

何十本ものナイフが飛んで来た。

アダムは直感的に腰に手を伸ばした。

掴んだ物は、自分のナイフだ。

アダムは自分のナイフで咲夜のナイフ数本を薙ぎ払った。

弾かれたナイフはそのまま重力の法則に従い、落下する。

そして、アダムはナイフを弾いて出来た隙間に体を投げ出した。

アダムはダメージを受ける事無く着地した。

「やるわね、私の得意技を何とも無い様に避けるなんて。」

(やはりだ、時を止められるなら何故その間に攻撃をしないんだ？…… という事は時を止めている間は止まっている物体に対して影響は及ばないという事か。)

咲夜はアダムをナイフで囲む。

アダムはそのナイフを弾き、弾いた所へ飛び込む様に避ける。

アダムは咲夜が消える瞬間を凝視していた。

これを繰り返す事数回、アダムは一つの可能性を確信した。

咲夜はまたアダムをナイフで囲んだ。

アダムは、今度は弾かなかった。

その代わり、アダムはナイフを両手の指の間に計8本掴み、自分のリュックに入れる。

そして、隙間を掻い潜った。

これが数回繰り返された。

不意に、アダムが咲夜から奪ったナイフ一本を斜め上へ、数本を上
に放り投げた。

残り数本はまだ投げていない。

咲夜は意味の分からない行動に少しの間だが気を取られていた。

アダムは咲夜の気が逸れたのを確認すると、今度は銃を持ち、数発
咲夜へと放った。

音速の5倍を誇る銃弾だ。

(速い！)

咲夜は我に戻ると“時を止めず”に突然迫ってきた銃弾を避けた。
安心していたのも束の間、突然上からシャンドリアが落ちて来た。

先程アダムが一本斜め上に投げたナイフがシャンデリアを支えていた鎖を切ったのだった。

(間に合わない！)

咲夜はこれも”時を止めず”に避けた。

すると、今度はナイフが数本、回転しながら咲夜に迫って来た。

先程アダムが上に放り投げたナイフが重力によって放物線軌道を描いて落ちて来たのだった。

(また間に合わない！)

咲夜はまたしても”時を止めず”にこれを避けた。

不意に後ろで気配がした。

振り向くとそこには咲夜の後方180度から投げられたナイフ数本が咲夜を襲っている最中だった。

このナイフはアダムが咲夜から奪った物で、この為に数本残していたのだ。

これも咲夜は”時を止めず”に避けた。

いや、その表現は間違っている。

咲夜は時を止められなかったのだ。

そして、咲夜は自分の後ろから首筋にナイフが当てられている事に気付いた。

「お前の負けだ、咲夜。」

3 内に潜む者

「悪いな。ただ、僕は友人を助けたいだけだ。」

「分かったわ。降参。」

咲夜は両手を挙げた。

アダムはまだ咲夜の首筋にナイフを当てている。

「一つ訊いてもいいかしら？」

「別に構わない。」

「何故、私は負けたのかしら？」

「少し長い話になる。まず咲夜、お前は時を止める事が出来ると言った。それには少なくとも膨大なエネルギーが必要だし、第一どうやって自分だけが動けるのか。僕はそう思った。」

まず咲夜はこの少年の考え方に驚きを受けた。

自分は自分の能力を受け止めるだけで疑問に思った事など無かった。

「そうして疑う内に、僕はある事に気付いた。時間を止められるのなら、止めている時に僕を攻撃した方が明らかに楽なはず。つまり、時を止めている間に僕をナイフで刺したりしないのは時が止まっている物には影響を与えることが出来ないからだ。」

「良く分かるわね……。」

咲夜の呟きが無視され、アダムの説明は止まらず更に続く。

「また、僕はお前が時を止める時、お前の周囲にエネルギーを感じた。僕の仮説が間違っていないならば、正確には時を止めるのではない。自分と動かしたい物をエネルギーバリアで包む事で時間から独立し、さらに時を遡る事によって相対的に時を止めているという事だ。時の止まっている物に影響を及ぼせない理由はそれだ。しかも、それならばバリアを張るために多少の時間が必要だ。僕はその僅かな時間突き、時を止めさせない様にしたただけだ。これがお前の負けた理由だ。」

「悪いけど私にはこれっぽっちも分からないわ。あと名前だけでも訊かせて。私を倒した者として覚えておきたいわ。」

「アダム・アンダーソンだ。」

咲夜は頭に強い衝撃を受けた。

アダムがナイフの柄で殴ったからだ。

咲夜は力なく倒れた。

「しかし不思議だ。何故僕は“見えない”筈のエネルギーを感じたんだ？」

「ここも広いのか。大量の本と巨大な本棚が幾つもある、図書館か？」

アダムは紅魔館の地下に来ていた。

辺りには大量の本があるだけだった。

「…… 近くに誰かいるな。隠れるか。」

アダムは右手にナイフを、左手には銃をどちらも腰のホルスターからそれぞれ持ち、また銃のホルスターとナイフの鞘をベルトに付け、身を本棚の陰に潜めた。

「フンフーン。」

鼻歌を歌いながら本棚の整理らしき事をしている、赤毛で背中と頭に羽と、尻尾が生えている少女がいた。

（異変の真最中なのに呑気な奴だ。さて、丁度良いし聞き出すとしよう。）

アダムはその少女の後ろへと近づく。

アダムと少女の距離は3 m。

しかし、少女は全く気付いていない。

そして、アダムは少女に飛び掛かり、動かない様に絞め、口を塞ぎ、ナイフを首筋に当てた。

「モゴモゴモゴモゴモゴ?!」

少女は必死に抵抗するが、アダムの力には勝てなかった。

「今から少し緩めるが、大声を出したらこのナイフがお前の首を切り落とすと思え。お前に聞く。この異変の首謀者は誰だ。そしてそいつは何処に居る。」

アダムの声はいたって本気であり、実際に逆らおうとすれば今にもナイフに斬られそうだった。

「……うう……げほげほ……レミアア・スカーレット様です。ここが一番上にいます……。」

「そうか。」

アダムはそう言うと、ナイフの柄で少女の頭を殴った。

当然、少女は気絶し、倒れた。

「小悪魔? どうかしたの?」

奥から別の少女の声が聞こえて来た。

その少女は長い紫髪で紫のパジャマの様な服を着ていた。

そして、少女は倒れている小悪魔と、傍にいる見知らぬ少年を見つけた。

「あなたもこの異変を解決しに来たの?」

(しまった! 気付かれたか。)

アダムは振り返り、右手にナイフ、左手に銃の戦闘態勢を取った。

だが向こうは戦闘態勢を取っていない。

「別にあなたと戦おうって事じゃないのよ。さつき戦ったばかりで疲れているし。私はパチュリー・ノーリツジ。このヴワル図書館の管理人よ。」

アダムは少女から敵意を感じず、単に質問しているだけの感じだったので、戦わない事にして答える事にした。

「僕はアダム・アンダーソン。君の言う通り異変を解決しに来た。」

「もしかして、あの魔理沙とか言った白黒の服を着た魔法使いの知り合いかしら。」

「そうだ。その子は何処へ行つた？」

「どうしても行く気なら教えるわ。後悔することになるかも知れないけど、いいかしら？」

「それでも良い、教えてくれ。」

「あそこに分厚い金属の扉があるでしょう。その奥よ。」

少女は奥にある金属のいかにも分厚そうな扉を指差した。

「分かった、ありがとう。しかし、やけに親切だな。」

「ええ、私はただの友人のわがままに付き合ってるだけよ。でもその先は気を付けなさい。私には入る勇氣も無いわ。」

（どんな所にも話の通じる奴は居るものだな。しかし、後悔するとはどういう意味なんだ？）

そして、アダムは扉を開けた。

「いてて……… 何て奴だ。まるで私の弾幕が全く効いていないみたいだ………」

魔理沙は目の前に居るコウモリらしき羽の生えた金髪の少女と戦っていた。

「わはは、すごいすごい魔理沙。中々壊れないね。」

「まるでこの霧雨魔理沙様をなめているみたいだな………」

少女は余裕で面白がっているが、魔理沙は今にも負けそうだった。

「でももう飽きちゃったから壊す。禁忌「レーヴァテイン」！」

少女のスペルカードは大地を焼き払う神の炎の大剣を生み出した。

「バイバイ！」

それを魔理沙に振りかざす。

魔理沙は疲労で躲せないのか、そのまま目をつぶった。

魔理沙は死を覚悟した。

ガキーン！

強い衝撃音。

しかし、何時になっても魔理沙を襲う衝撃は来なかった。

耳を澄ますと、ギシギシという金属が擦れる様な音が聞こえて来た。

魔理沙はそつと目を開けると、そこには親しい少年が相手の剣よりも遙かに短いナイフで、その剣を受け止めていた。

金属音は勿論、大剣とナイフの鏝迫り合いによるものだった。

「…… アダム！ どうして来たんだよ！ 私たちで十分って言ったじゃないか。」

「魔理沙、少なくとも今さつきはそんな状況では無かったはずだ。僕も何も考えずに来た訳では無い。それより魔理沙、ここから離れた方が良い。」

「わ、分かった。」

魔理沙はすぐさまこの場から逃げる。

一方のアダムは流石に短いナイフで相手の剣を完全に受け取れる訳では無いため、少し押される。

「お兄さんだれ？ 私はフランドール・スカーレット。」

「アダム・アンダーソンだ。」

アダムはそう言うのと鏝迫り合いからのミドルキックを見事に決めた。

フランはその為一瞬脱力し、その隙にアダムが追い打ちを掛けた。

ジャブ10回、アッパー、回し蹴り、肘打ち、裏拳、手刀。

フランは吹き飛ばされ、壁に激突した。

しかし、何事も無かったかの様に体勢を立て直し

「すごいねアダム。私しばらくアダムと遊ぶ！ 禁忌「クランベリートラップ」！」

四方八方から弾幕がアダムを襲う。

フランのスペルカードはアダムが予想していた以上に派手で強力な物だった。

「かなりの数だな。本気でやるか。」

アダムは左手で腰のホルスターから銃を取り、右手のナイフと共に構える。

左手の銃で射撃、右手のナイフで弾幕を弾く、という確実さを重視した戦法だ。

ナイフはアダム自身のエネルギーによって細かい振動を行ったり耐久力を上げる。銃もアダム自身のエネルギーを利用してビームを発射する、という物で、通常のナイフやマガジンが必要な銃よりも威力が明らかに高い。

一方、フランの戦法は、無茶苦茶だった。

避けられるはずの攻撃を避けず、自身の耐久力任せで、とにかく大量の弾幕を撃っていた。

勿論、アダムもそこに気付かない訳では無かった。

（威力と耐久力は大したものだ。だが、スピードはそうでも無く、動きは単調で隙が大きい。力任せといったところか。）

「どんどん行くよ！」「禁忌 フォーオブアカインド！」

少しの間、フランがぼやけて見えたとと思うと、フランの姿が4体にもなった。

「分身か？いや、全部本物か？」

2体のフランが正面からアダムを襲う。

アダムは攻撃の暇が無く、攻撃をひたすら避けるのみであった。

しかし、左前方から一発、右前方から一発喰らい、怯む。

さらに後ろから二体のフランがアダムの背中へと蹴りを二発喰らわした。

アダムは吹き飛ばされ、壁へ叩きつけられた。

4体のフランは、さらに追い打ちとして大量の弾幕を放った。

「不味い！」

アダムはギリギリ躲し、銃で応戦するも、あまり効かなかった。

そして、ついに弾幕に当たってしまう。

そこへ追い打ちとして一体のフランがストレートでアダムを吹き飛ばした。

アダムが吹き飛んだ先では別のフランが待ち構えており、アツパーを喰らわした。

アダムは天井にぶつかり、そして地面に倒れた。

(これでは勝てない…… いや、待てよ…… 可能性は薄いが、あれしか方法が無いな。)

アダムはそんな事を考えながら、起き上がった。

4 無感情

『中々やりますね。ですがあなたの動きは多少無茶苦茶な所があります。』

美鈴のそんな台詞がアダムの脳内を流れていた。

アダムは構えをとった。

(今は試すしか無い。)

それは、手を手刀の形にし、右手を体の前に、左手を右肘に添え、という様な構えだった。

「アダムってすごい！私の遊びでも簡単に壊れないなんて。」

4体のフランの内、一体が言う。

「遊ぶ？傍から見れば殺し合いの様なものだと思っただが。」

「私ね、495年もここに閉じ込められていの。だから今度は495年遊ぶんだ。」

(身体年齢は10歳弱、精神年齢はそれ以下だろうか。いや、恐らくこいつも人間では無く妖怪か。)

そんな事を考えていると突然、二体のフランがそれぞれ左右から襲って来た。

アダムは左右からの連続攻撃を何とか防ぐ。

左右のフランが同時にアダムの顔面を目掛けてストレートを繰り出した。

するとアダムはしやがみ、攻撃を避けた。

フランは反対側にいたフランのパンチを自分の拳に受け、自分も、反対側の自分も拳に強烈な痛みを感じた。

アダムはしやがんだまま、両腕を広げる様にして二体のフランを吹き飛ばした。

今度は正面からフランが力任せにと突進して来た。

アダムはフランの肩を押さえ、受け止めた、がフランの押す力が強く、少しずつ押されていく。

すると、もう一体のフランが後ろから爪で斬り裂こうと襲って来た。

アダムは受け止めているフランを押すのを止め、体を後ろに倒し、フランを投げ飛ばす。

投げ飛ばされたフランは、アダムを襲っている最中のフランにぶつかる。

(相手の攻撃が避けられなければその攻撃を利用すればいいだけの事だ。あの時言われた事は本当だった様だな。まだ僕には活かせていない力がある。そして柔をもって剛を制す、という諺を思い出した。更に相手の動きが単調な分助かったな。)

一体のフランが起き上がり、アダムの腹にストレートを繰り出していった。

アダムはストレートを横に避け、その腕を掴み、地面へ投げ倒した。別のフランが爪を立てて腕を振り回して来た。

アダムはその腕を小手で受け止め、そのまま受け止めた腕で肘打ち、裏拳を喰らわした。

今度はフラン二体が弾幕を放ってきた。

アダムはすかさず右手にナイフ、左手に銃を取り、ナイフで弾幕を弾き、銃口をフランに向けた。

アダムは一体のフランに集中的に銃を連射した。

その結果、何十発も撃たれたフランには大してダメージにはなっていないが、怯ませる事は出来た。

その隙を狙ってアダムはフランの元へと駆け込み、足払い、アツパー、跳び蹴り、を決めた。

しかし、もう一体のフランが、背後から空中にいるアダムを殴り飛ばした。

アダムは何とか受け身を取り、すぐ立ち上がる。

先ほどアダムを吹き飛ばしたフランが殴り掛かってきた。

アダムはそれをおうにか受け止め、さらに次々に繰り出される連続攻撃を避けていく。

すると、後ろから別のフランがアダムへストレートを喰らわそうと飛び掛かってきた。

アダムは空中に跳び上がり、避けた。

結果、ストレートは先ほど連続攻撃を仕掛けていたフランの顔面にクリーンヒットした。

直後、アダムは先ほどストレートを繰り返していたフランの頭頂部を踏みつける。

その直後、アダムの後方からフランがナツクルを決め、アダムは床に叩きつけられた。

4体のフランがそれぞれ、前後左右から襲い掛かって来た。

アダムは起き上がると同時に、地面についた片手を軸にして回転しながら蹴りを繰り返した。

蹴りは3体のフランに当たる。

残り一体のフランは蹴りを腕で受け止めていた。

アダムはもう片方の足を伸ばし、フランの足を掬う。

アダムは距離を置き、体勢を整える。

(……有効だが、かなりスタミナを減らしてしまったな。果たしてこれで暫くもつかどうか……)

4体のフランが起き上がった。

すると3体のフランが消えた。

「何故元に戻す？ 大人数の方が有利な筈だ。その事はお前にも分かる筈だ。」

「それでも全然攻撃が当たらないんだもん。今度はもつとすごい技にするんだ。禁忌「レーヴァテイン」！」

フランの手には少なくとも彼女の身長よりも1.5倍の長さのある大剣が握られていた。

アダムはすかさず腰からナイフを取り、構える。

ナイフからは超振動による甲高い金属音とエネルギーシールドの光の反射による青い光が放たれていた。

また、アダムはナイフを握った手から自分のエネルギーが吸い取られるのを感じた。

フランがアダムを薙ぎ払おうと剣を振り回した。

フランが剣を振り回すと同時に、アダムはその剣が伸びたのに気づき、しゃがんで避けた。

フランが剣を振り回す動作を追えると、剣は元の長さに戻った。
(さつきはナイフで受け止められたが、大剣だからな……それに伸びるとは予想外だ。見た所、伸びる時に質量は変化していない様だ。) フランは剣を振りかざした。
アダムは両手でナイフを持ち、フランの一太刀をどうにか受け止めた。

フランは続けて連続斬りを繰り返す。

アダムは攻撃を避けるに避け、最後の1撃をナイフで受け流し、フランに接近するが、フランの大剣が行く手を阻む。

アダムは距離を置き、左手に銃を取った。

アダムが引き金を引くと、アダムは銃を握った手からエネルギーが吸い取られる感覚を覚えた。

それと同時に、ピユウ、という小さいが甲高い音が鳴り、銃口からは青い光を反射する半透明の銃弾が、音速を超えるスピードで“衝撃波を出さず”に放たれた。

一発では無く何十発も。

その発射間隔は一秒に50発。

フランは剣の刀身が太い事を利用して、剣を翳して銃弾を防ぐ。

その隙に、アダムは横へと回り込み、ナイフを振りかざす。

しかし、フランの大剣によって跳ね除けられた。

直後、フランは剣を横方向に振り回した。

アダムはとっさに後退し、避ける。

だが、アダムは脇腹に焼ける様な痛みを感じた。

見ると、脇腹の部分にかすつたらしく、火傷と切り傷があった。

アダムは傷の痛みを我慢しながら構え直した。

左半身を前に出し、左手に握った銃の銃口をフランに向けながら左手を前に構え、右手に握ったナイフの切先をフランに向け、矢を引つ張る様に構えた。

フランが大剣を伸ばし、叩きつけた。

アダムはそれをナイフで受け止め、その隙にフランへと銃弾を発射した。

フランに対してダメージは余り無いものの、わずかに怯ませる事は出来た。

アダムはその隙を逃さず、足払い、蹴り上げ、アッパー、さらにラッシュの嵐を掛けた。

最後に一発、両足で蹴り飛ばした。

フランは体勢を整えようとしたものの、その前に壁に激突した。

フランは起き上がるが、視界にはアダムの姿は無かった。

直後、フランは頭頂部に強烈な痛みを感じ、さらに顔面から地面に叩きつけられた。

アダムは飛び上がり、降下キックを繰り出していたのだった。

フランは起き上がろうとするが、アダムはフランの首筋にナイフを当てた。

「お前の負けだ、フランドール。」

しかし、フランは降参を言うどころか、何か呟いている。

「……私は何もしていないもん……ただ遊びたいだけなのに……お姉さまは私をこんなところに閉じ込めて……」

アダムにはフランの声が段々大きくなっていくのが分かった。

アダムは何か得体の知れない感覚を感じ、フランから離れた。

アダムにはそれが何なのかは分からない。

「嫌だー！こんなところで永遠に過ごしたくない！みんなと遊びたい！なんでみんな私から離れるの?!なんでこんなところに閉じ込めるの?!もうこんなの嫌だ!!!禁弾「スターボウブレイク」!!!」

フランはこれまでよりも遥かに速く強力な弾幕を放った。

アダムは直感ですんでの所ですぐにか避けた。

狙いが逸れた弾幕は扉へと直進し、扉を破壊するだけに留まらず、エネルギーの大半を残したまま外へと向かって行った。

直後、アダムは直感的に腰から銃とナイフを抜きフランへと駆け込んだ。

そして、銃をフランに何十、何百発も浴びせ、ナイフをフランの左胸へと突き刺した。

アダムは自分に出せる最大限の力を使ってナイフを押し込んだ。

吸血鬼は胸に杭を打たれると死ぬ。

アダムはそれを知っているのか分からないが、アダムによつて突き刺されたナイフは杭の役目をするのに十分だった。

「なんで……………」

フランは涙を流しながら、眼を閉じ、力なく倒れた。

フランドール・スカーレットは死んだ。

アダムはそれを確認すると、ナイフを引き抜き、血を払った。

ちなみにアダムの表情に変化は無く、無表情のままだった。

まるで、彼は殺す事に慣れていくかの様だった。

「酷く手こずってさらに殺すしか方法が無くなるとはな。さて、異変を解決しなければな。」

アダムには殺してしまった、という罪悪感すら無かった。

彼は感情はあれど、感情よりも理論を重視する。

まるで、彼にとって死んで当たり前、の様だった。

彼にはそれはただの情報に過ぎない。

アダムは銃とナイフを戻すと跡形も無く破壊された扉へと向かって歩いて行った。

5 冷静

「パチュリー、この本借りていいか？」

「いいけど、ちゃんと返しなさいよ。」

「そういやパチュリー、お前も魔法使いなんだろう。外の霧どうにかしてくれよ。」

「霧はこの主であるレミア・スカーレットが発動させた物よ。私はそれを手伝っただけ。霧の解除は彼女しか出来ない様になっているわ。というか貴方も魔法使いじゃない。」

「私は戦闘用の物しか使えないぜ。それならそのレミアって奴に何とか言ってくれないか？」

「それこそ無理。彼女やるからには確実にやる、という気質なのよ。しかも派手に。さらに人の話を聞かないのよね。困った親友だわ。」

魔理沙は紅魔館の大図書館にいた。

アダムはフランのいた所から離れるとは言ったが、どこまでとは言及していなかった。

だからこの大図書館で好きな本やらを探しているという訳だ。

すると、アダム達のいる部屋から轟音が響いたと思うと、扉が突き破られ、そこから途轍もない威力の弾幕が途轍もない速さで飛んできた。

魔理沙たちはその場に伏せ、弾幕から回避したものの、弾幕は止まる素振りを見せぬまま、図書館の壁を突き破り、そのまま外部へと飛んでいった。

魔理沙たちはようやく安全だと思い、床から起き上がった。

「……………何が起こったんだ？」

「……………あの扉が破られた事なんて一度も無かったのに……………」
すると、破壊された扉から誰かがゆっくりと歩いて来た。

魔理沙とパチュリーにはその顔に見覚えがあった。

アダムだ。

「アダム！大丈夫か?!腹が切られているうえに火傷しているじゃないか！」

魔理沙が駆け寄って言う。

「僕は大丈夫だ。それよりここの最上階へ行くぞ。」

「待って、アダム。フランドールはどうしたの？」

パチュリーは壊された扉の奥から、まるで人っ子一人の気配さえしないのを察知していた。

「それなら僕が殺した。」

アダムはあっさりそう答えた。

まるで人殺し（この場合は吸血鬼殺しか）禁忌を覚えていない。

「おい！冗談だろ?!」

「…… 貴方、なんて事を！レミイに何て言えばいいのよ！フランは確かに貴方達にとっては悪魔かもしれない、でもフランはこの紅魔館の一員であつてさらにレミイにとつては紛れもない家族なのよ！私達はフランを恐れてはいるけど見捨てる様な事はしていないわ！大体、何故殺したのよ?!」

「奴を生かしておけばこの先異変解決の邪魔どころか脅威、いや、幻想郷中の脅威にすら成り得るだろう。攻撃はほとんど無効。あの威力の光線。暴れ出したら誰にも止められない。つまり暴走させない方が被害を最小限に抑えられる。僕は暴走しかけているのを止めるにはこれしか方法が無いと考えた。それだけだ。」

パチュリーの強い口調に対しアダムの声には全く感情と言う感情が無かった。

「…… 呆れて物も言えないわ…… 小悪魔、一応調べて来て。」

「は、はい……。」

アダムから受けたダメージをすっかり回復した小悪魔は破壊された扉へと急いで行った。

「嘘だろ…… そんな、殺すなんてダメだ!」

「なら魔理沙、君なら殺さないと仮定して暴走した奴をどう止める？君ではどうやっても無理だ、自身でも体験しているだろう。」

「それは……。」

魔理沙は言葉を失った。

「こんな所で議論をしている暇は無い。行くぞ。」

「あ、待ってくれよ！」

アダムは階段を上り始め、魔理沙がその後続いた。
アダムには何の感情も見えなかった。

「やるわね、あんた。」

「貴方こそ人間にしてはやるじゃない。」

霊夢は紅魔館最上階でこの主であるレミリア・スカーレットとの
戦闘を行っている最中だった。

レミリアは、水色の髪をしており、体型は十歳前後だが目つきや態
度は大人の物に似ている。

「さっさと決着を付けましょう。霊符「夢想封印」！」

「それはこっちのセリフよ。紅符「スカーレットシュート」！」

霊夢の弾幕とレミリアの弾幕がぶつかり合った。

レミリアの弾幕数発が霊夢の弾幕に当たらず、弾幕がかき消されて
来ないだろうと油断していた霊夢を襲う。

霊夢はそれに気づき、何とか躲した。

だが、レミリアがそこへスペルカードを唱える。

「消えなさい。神槍「スピア・ザ・グンニグル」！」

巨大な槍が途轍もない速さで霊夢を襲う。

「しまったー！」

霊夢は避け切る事が出来ないと思い、目をつぶった。

直後、ガキーン！という大きな金属音が鳴り響き、霊夢にグンニグ

ルが命中する事は無かった。

霊夢は目を開けてみると、そこに親しい少年の姿を確認した。

霊夢は少年の手にナイフが握られている事を見て、恐らくそのナイフで巨大な槍を弾いたのだろう、と思った。

「危なかったな。」

少年はアダムだった。

「おーい！大丈夫か？」

魔理沙が少し遅れて来た。

「アダム！何で私たちの所へ来たのよ。来ないでいいって言ったじゃない。」

「心配だから来た。外を見てみる。」

霊夢と魔理沙はアダムのその言葉を聞き、レミリアの背後にある巨大な窓の外を見てみた。

レミリアもアダムの話を聞いていたのか、窓の外を見た。

先程まで異様な程に紅かった霧は、その鮮やかさを失い、黒ずんでいた。

「ど、どうして？さつきまで紅かったのに……………」

「おかしいわね。こんな風にはならないはずだけど…………… まあいいわ。さつきと片付けようかしら。」

霧を広げたはずの張本人であるレミリアでさえ不思議に思った。が、どうでもいらしく、早速戦闘を再開させる様だ。

「なら僕が相手だ。」

「ちよつと、アダム?!」

「心配は無い。戦略はある。魔理沙と一緒に下がっていてくれ。」

「わ、分かったわ。あなたを信じるわ。」

「いいわよ。だけど戦いをつまらなくさせないで欲しいものね。ならば貴方からかかって……………」

アダムは躊躇なくレミリアへと飛び掛かり、跳び蹴りを顔面にクリーンヒットさせた。

アダムは着地して言った。

「戦闘において相手に隙を与えるのはどうかと思うが。」

「人の話ぐらい最後まで聞きなさい！」

レミリアは先程までの大人びた態度を捨て、アダムに体当たりを仕掛けた。

アダムは軽く（と言っても2 m程だが）跳び、レミリアの後頭部に蹴りを決め、そのままレミリアの反対側へと着地した。

「……………うぐ……………い、いてて……………」

レミリアは起き上がり、スペルカードを唱える。

「ならば本気で行くわ。喰らいなさい、天罰「スターオブダビテ」！」
アダムは右手にナイフ、左手に銃を握り、ナイフで弾幕をかき消しながら銃を連射し、さらには体を上手く捻りながら躲し、距離を詰めて来た。

互いの距離が縮まる分、互いの体感速度は速くなる。

アダムは冷静に判断し、上手く避けているが、レミリアは逆に焦つて来た。

ついにアダムの銃弾数発がレミリアに当たり、レミリアは怯む。

その隙にアダムはレミリアの腕を掴み、床に叩きつけた。

アダムは距離を置き、銃を連射した。

レミリアはアダムの弾をどうにかこらえ、立ち上がってスペルカードを唱える。

「レッドマジック！」

今度は、動きは遅いものの一発一発が大きい物だった。

アダムは弾幕をナイフで弾かず、後退しながら避けていく。

レミリアは逃すまい、と弾幕を放ちながら追いかけて来る。

アダムは後退する勢いで足を後ろの壁に付け、そのまま壁を蹴り、レミリアへと突撃していった。

レミリアは弾幕を更に放つが、アダムは体を上手く捻り、レミリアへ跳び膝蹴りを喰らわせた。

吹き飛ばされたレミリアはすぐには止まれず、窓を突き破り、何とか空中に停止した。

レミリアはすぐさまアダムへと鉤爪を前へ突き出した姿勢で突進した。

アダムは咄嗟に右手に銃を握り、一発レミアアへと放った。

レミアアはその一発でダメージはほとんど無いものの、突然の事だったので一瞬だが目をつぶってしまった。

その一瞬で、アダムはレミアアの腹にアッパー2発、蹴り上げ1発を決めた。

レミアアは蹴り上げにより、天井に叩きつけられ、そのまま床へと落ちた。

アダムは天井ギリギリの高さ（紅魔館は広いので、少なくとも10m程はあるだろう。）まで跳び上がり、降下キックを仕掛けた。

レミアアは間一髪の所で避け、距離をとった。

アダムの降下キックは不発に終わり、さらにはキックを仕掛けた右足が床を突き破り、めり込んだ。

レミアアはその隙を逃さず、アダムへ体当たりを掛けた。

アダムはめり込んだ右足を軸にし、レミアアへと回し蹴りを掛けた。

アダムの回し蹴りが、一足先に決まった。レミアアは吹き飛ばされたものの、何とか体勢を整えて着地した。

アダムはめり込んだ足を床から引き上げる。

「妹と同じで才能はあるが、隙が大きいな。」

アダムはまるで勝負が決まったかの様にそう言った。

6 紅い悪魔再び

「今何て言ったのかしら……良く聞こえなかったわ……。」

レミリアは目を見開いた形相でアダムを睨む。

しかし、アダムはまるでその事を無視しているかの様に

「要するにお前のその戦闘技術では僕には勝てない。それにお前には致命的な弱点がある。」

と言うのだった。

レミリアは紅魔館の主だけあって、それに見合う程に自分に対してのプライドも持ち合わせている。

今のアダムの台詞の様に、自分を馬鹿にしたり侮辱する様な言葉に對して非常に敏感で酷く怒りを感じる性格である。

「ふざけるな!!」

レミリアは己のプライドを捨て、アダムに飛び掛かり、顔面へストレートを繰り出した。

アダムは何という事無いかの様な表情でそれを受け止める。

というか実際に何という事無いのだが。

レミリアは止まらず、怒濤の猛攻撃を繰り出した。

アダムは後ろへ少しずつ下がりながら避けていく。

アダムは後ろへと退いている内に、背中に壁の感触を感じた。

レミリアもそれに気づき、勝利を確信したかの様にアダムへとストレートを送った。

アダムは体ごと横へと避けた。

レミリアのストレートはアダムがいた後ろの壁を突き破り、レミリアの肘から先が壁にめり込んだ。

アダムは後ろから裏拳をクリーンヒットさせ、その勢いによってレミリアの肩から先が壁にめり込んだ。

アダムは更に肘打ちを当て、その勢いによってレミリアは壁を突き抜けた。

「この野郎!!!」

レミリアは起き上がると、怒りに身を任せて大量の弾幕を放った。

(よし、想定通りだ。これなら確実に勝てる。)

アダムはまるで弾幕の軌道を予め知っているかの様に避けた。というか、実際に知っているのだが。

レミリアの弾幕を良く見れば、全てがアダムに向かって変則も無くただ直進しているのが分かるだろう。

これ程単純な攻撃は読まれ易い。

これがアダムの狙いだった。

アダムは避けながら右手に銃を握り、レミリアへと銃を連射した。一秒に50発。

それが5秒間。

銃弾の軌道が見えるならば、銃弾はレミリアには当たらない軌道である事が分かる筈だ。

レミリアにはアダムが放った音速の5倍の速さを誇る銃弾が、冷静に判断すれば動きを捉えられる程の動体視力はある。

しかし、冷静さを失ったレミリアにはその軌道を読む事が出来ない。

結果、無駄な動きが増え、250発中100発が当たった。

一方でアダムは今日立て続けに今回で5回目の戦闘であるにも関わらず、その冷静さは殆ど失っていない。

アダムの言うレミリアの致命的な弱点とは、自分自身の侮辱に対して敏感な事と、更にその短気さである。

「神槍「スピア・ザ・グングニル」！私はもう貴方を許さない。串刺しにしてあげるわ!!!」

レミリアの手には自身の身長の1.5倍程の長さの槍が握られていた。

アダムはそれに対応すべく銃を仕舞い、代わりにナイフを握った。

レミリアはアダムの心臓に向かって槍を突き出す。

だが、それはその槍よりも遥かに短く弱そうなナイフによって軌道を変えられ、躲された。

海の神が用いる神聖な槍がただのナイフに弾かれたのだ。

レミリアは諦めず何度も槍を突き出すが、それがアダムに突き刺さ

る事は無い。

アダムは難無く槍をナイフで払いのけていく。

今度はアダムが攻撃を仕掛けた。

ナイフは短いが、軽い分素早い動きが可能だ。

一方で槍は長いが、重くて動きが遅くなる。

結果、レミリアは防御だけで反撃が出来なかった。

アダムのナイフが槍を握る手を引っ搔いた。

「うっ！」

レミリアは痛みによつて槍を手放す。

アダムは続けてナイフを急所以外のあらゆる箇所を切ったり突き刺したりした。

「う……ぐがあああああ!!!」

レミリアは痛み能耐えられなくその場に倒れた。

「これで動く事は出来まい。」

「ふ、ふざけないで頂戴……私はまだ戦えるわ……。」

アダムはレミリアに付けた傷を良く見た。すると傷は少しずつ塞がり、やがて傷は完全に無くなった。

「成程、再生能力が高い様だな。だが、その様子だと痛みまでは治せない様だ。」

アダムの言う通り、レミリアはかなり息を切らしている上に痛みを我慢するように歯を食いしばっていた。

アダムは躊躇無くレミリアに急接近し、腹に膝蹴りを喰らわせた。

「うっ……ぐはあ！」

レミリアの口から血が吐き出された。

アダムはローキックを決め、レミリアを地面に倒し、拳を高く上げた。

「本当に亡くなられたのですね。あの外来人によつて。」

「そうよ。私にも信じられないわ。」

「そもそも妹様にまともに戦える方なんてお嬢様だけですもんね。あのアダムさんって人どれ程の力を持つているのか……。」

「あの人私に首を斬り落とすぞ、って恐喝していましたが、本当に怖いです……。」

上から順に咲夜、パチュリー、美鈴、小悪魔の台詞である。

丁度アダムがレミリアと戦っている最中、パチュリー、咲夜、美鈴、小悪魔の4人はヴワル図書館にいた。

そして、4人は一人の静かに仰向けに横たわっている少女を円形に囲んでいた。

少女の顔には白い布が一枚掛けられており、左胸にナイフで刺された跡があった。

少女の名はフランドール・スカーレット。言うまでもないが、先ほどアダムが殺した少女だ。

「お嬢様が知ると一体どんな顔をされるか……。」

「咲夜、レミィは今最上階でアダム達と戦っているはずよ。戦いが終わり次第ここに来るように言つて来て。」

「はい、分かりました……。」

咲夜は早速レミリアの元へ行こうとした。

だが、咲夜は何か妙な気配を感じた。

辺りを見回す。だがそれらしき物は見つからない。

「咲夜、どうかしたの？」

「い、いえ。何か変な気配を感じたので……。」

「ん？あれ？」

美鈴が何か呟いた。

「美鈴？」

「今、死体が、動きませんでした？」

四人はフランの死体を観察した。

そして、右の人差指がピクツと動いた。

パチユリーが呼吸と心拍を確かめる。

始めはどちらも弱々しかったものの、段々と強くなっていった。

「…… 生きている。生きているわ！」

四人共嬉しそうな声を上げた。

「でも、全然起き上がる気配がありませんよ？どうしてでしょうか？」

小悪魔の疑問を聞き、パチユリーが再び呼吸と心拍を確かめた。

「…… 妙だわ。心拍と呼吸が更に激しくなっていく。でも目を開ける気配がまるでないわね。」

パチユリーの言う通り、フランは瞼どころか横隔膜と心臓以外の運動器官は全く動いていない。

また、先程までであった左胸の傷は何時の間にか消えていた。

突然、何の前触れも無くフランの両目がパツチリと勢い良く開いた。

「妹様！大丈夫ですか?!」

咲夜が嬉しそうに言った。

だが、フランからは返事が無い。

「妹様？」

「…… ウググ……」

フランからはまるで獣の様な返事が返って来た。

声だけでなく目つきや姿勢もそれと似ている様な気がするのは咲夜の思い違いでは無かった。!!!!!!

「グガアアアアアアアアアアアア!!」

フランは途轍もない雄叫びと共に周囲の四人を吹き飛ばした。

そして、フランは高く飛び上がったと思うとそのまま天井を突き抜けて行った。

「…… どうなさいますか？」

「そうね、私はおろか咲夜やレミイでも、そして紅魔館の皆で一緒に

戦ったとしても無理かしら。」

「そんな……………」

四人はフランが突き抜けた天井を見つめながらただその場に立ち尽くしていた。

アダムはレミリアに止めの一撃をと腕を高々と上げていた。

レミリアには最早防御するという事など無駄だと悟っていた。

突然、アダムは後ろを振り向いた。

その直後、アダムの視線の先の床から何か突き抜けたと思うと、一人の少女がそこから姿を現した。

(何故だ？確かに僕が殺した筈だ。いや、脳にダメージを与ええなかったのが間違いだったか……………)

「グ……………グギャア！」

フランは以前の声と比べて想像も付かない様な声を上げた。

どちらかと言えば声では無く鳴き声なのだが。

「……………フ、フラン？まさか……………」

レミリアが弱々しく言う。

「お前、確かアダムに殺されたんじゃないやあ……………」

離れた所から見守る魔理沙も疑問に思ったらしい。

「ウガアアアアアアアアアアアア!!!」

フランがアダムへと爪と歯を立てながら襲い掛かって来た。

(学習しない奴だな、また正面から競り合いか。だが、奴からはまるで

理性を感じられない……。」

アダムは正面からフランの両腕を掴み、押し止める。

だが、力ではフランの方が勝っており、現にアダムは少しずつ押し返されていつている。

この点は先程の地下での戦闘と変わりはない。だが

(確実に以前よりも力が増している。一体どうなっているんだ。)

アダムはフランを押し止めた。

フランは外から力が加えられない事によって急ブレーキを掛けるが慣性の法則には逆らえず、前へと飛び出した。

アダムは、フランの足を掴み、ジャイアントスイングを決め、投げ飛ばした。

フランは壁に激突し倒れたもののすぐに立ち上がると、目の前にはナイフを構えたアダムが自分を斬ろうとしている最中だった。

ところが、フランは避けようとせず、腕にナイフを受けた。

アダムのナイフは超音波並の振動を起こしている高周波ブレードだが、そのナイフはフランの腕を斬り裂けなかった。

(何だと？以前は効いた筈だ。)

フランはアダムの顔面にストレートを喰らわせた。

アダムはそのまま吹き飛ばされ、その勢いによって窓を突き破り、そのまま外に飛ばされて行った。

フランの腕にはナイフによる切り傷は無く、ただナイフが突き立てられた部分が赤く腫れていただけだった。

その腕の腫れもすぐに無くなった。

フランはまたアダムを襲おうと窓の外へと飛び出していった。

「……………」

「魔理沙、アダムが危ないわ。私たちも行くわよ！」

「ええ?! 私は御免だ。私はアイツに殺されかけたんだぞ！」

「なら私だけでも行くわ。」

霊夢はそのままフランの後を追って行った。

「ちよっ、待てよ。全く、しょうがないな……………」

魔理沙も仕方なく霊夢の後を追って行った。

7 黒い霧

アダムはフランの攻撃によって吹き飛ばされ、その勢いによって窓を突き破り、しばらくは強烈な痛みで動けなかった。

如何にか痛みが耐えられる程度になると体勢を整え、紅魔館の庭園へと着地した。

（危なかったが、果たして勝てるだろうか……。あの力といい耐久力といい、まるで先程とは違う。そして理性を失っている様だ。）

アダムはナイフと銃を構えた。

丁度フランがアダムに追撃をぶちかまそうと壊れた窓から飛び出て来た。

アダムは銃をフランに向け、何十発と放った。

しかし、フランは避ける素振りを見せず、そのまま銃弾の嵐の中へと飛び込んで行った。

（以前は僅かだが怯んだはずだ。だが今はまるで怯むどころか注意さえ逸らせていない。）

フランは降下振り下ろしパンチを繰り出すが、アダムはどうにかそれを避けた。

アダムを外したパンチは地面に撃ち込まれ少なくとも直径3mはあるだろうクレーターを作った。

アダムはその隙を突き、フランの背中へ回し蹴りをクリーンヒットさせた。

だが、フランは吹っ飛ぶどころか怯んでさえいない。

フランはアダムの腹を殴り、アダムを更に遠くに飛ばした。

アダムは背中強い衝撃を感じ、やっと止まった。

フランが爪で斬り裂こうと接近しながら腕を振り回す。

アダムは体を後ろに反らして避け、それと同時にミドルキックを決めた。が、これもフランを怯ませる事が出来なかった。

アダムは続けてフランの腕を掴み、地面に投げ倒し、空中に跳んだかと思うとフランの腹に降下肘打ちを決めた。

だが、フランはまるで何事も無かったかの様に起き上がり、アダム

の頭を掴み、遠くへと投げ飛ばした。

アダムは空中で縦に大の字になる事で空気抵抗を減らし減速した。フランが追い打ちを掛けようと目の前に迫ってくる。

アダムは後ろに木があるのを確認し、その木を両足で勢い良く蹴り、反作用によってフランへと跳び込んで行った。

二人の拳と拳が空中でぶつかり合った。

辺りに激しい轟音が鳴り響き、危険を察知した動物や妖怪は逃げて行った。

アダムは拳の痛みを耐え、フランにアッパーを決めた。

フランは上空に1m程度しか飛ばされなかったが、アダムはその隙を逃さない。

蹴り上げ、正面蹴り、二連ストレート、ボディ、フック、アッパー。更に飛び上がり、空中二連蹴り、裏拳、手刀、肘打ち、掴んで地面に叩き落とす。

しかし、フランは何事も無かったかの様に起き上がり、アダムを地面に投げ倒した。

(何故効かない?)

倒されて仰向けになったアダムはフランの連続ラッシュを喰らう事となった。

一秒に何十発というスピードで一発一発が小さい程度のクレターを作るほどのエネルギーを持った拳がアダムを襲う。

アダムはその威力を持った拳をもろに受け、口から血を吐き、更にアダムの左腕からボキッ!と音がした。

「うおおああああ!!!」

アダムは痛みのみならず、自身の記憶の中では初めて悲鳴を上げた。フランが止めにと拳を高く上げた。

(もう駄目か。あの時の戦闘で僕の詰めが甘かったか……………)

突然、フランの後頭部が爆発した。

「グガアアアアアアアアアア!!!」

フランは悲鳴を上げながらその場に悶え倒れた。

(後頭部? そうだ。)

確かここへ来る途中に…………。

「おい、大丈夫か?!」

フランの後方から親しい者の声が聞こえた。

「魔理沙、今のは良い狙撃だった。」

爆発は魔理沙の弾幕によるものだった。

「役に立てて嬉しいけどよ、お前随分ボロボロだな。あの時はフランが負けたってのによ。」

そして、霊夢も空中から降りて来た。

「アダム、あなたもしかして腕が折れているんじゃない?!」

「ああ、その通りだ。霊夢、その太い木の枝を取ってくれ。」

「え?分かったけどどうするの?」

霊夢はアダムに指差された木の枝を取った。

長さは30cm、太さは2〜3cm。

するとアダムはジャケットを脱ぎ、畳んでリュックに仕舞うと、中のTシャツも脱いだ。

アダムの引き締まった上半身が露になる。

「ちよっ!何してんのよ?!」

「アダム、お前そんな趣味なのか?!」

二人とも顔を赤くして言った。

アダムは脱いだTシャツを出来るだけ大きく、四角い形に切った。

アダムは四角く切って出た残りの部分を更に裂いて紐の様に細長くした物で、折れた左腕に木の枝を括り付けた。

「これは非常時の固定具の代わりだ。これで余計な腕にかかる負担や刺激を抑えられ、痛み程度はどうか出来る。」

「お前、サバイバルに詳しいんだな。でも片腕が使えない事に変わりは無いんだろ?」

「いや、お前達がいるから大丈夫だろう。それにある仮説がある。」

アダムは破いて四角くした布を三角に折り、それで腕を包み、首の後ろで三角の布の端を結んだ。

アダムが立ち上がると、フランも起き上がった。

アダムは右手に銃を構えた。

「……ウ、グルルル……」

「二人とも、攻撃は奴の後頭部を狙うんだ。」

「え？頭か？」

「正確に言えば後頭部だ。それで無くては奴にダメージを与える事が出来ない。それ以外の部位は殆ど効かないだろう。」

「分かったわ。とにかく後頭部ね。」

「でも、何でだ？」

「今は説明している暇は無い。喋るぞ。」

「グギャアアアアアアアアアア!!!」

フランが腕を振り回しながら「**アダムを襲って来た。**」

まるで憎しみの対象の様に。

「コイツ、ずっとアダムばかり狙っていないか？」

「恐らくその通りだ。」

アダムが2 m程跳び上がり、後ろから空中回し蹴りを後頭部へと決めた。

フランは後ろへと吹き飛ばされ、そのまま地面へ俯せに倒れた。

「今だ！撃て！」

アダムは銃をフランの後頭部に向けて乱射し、霊夢と魔理沙もアダムのかげ声を聞きフランの後頭部に弾幕を浴びせた。

フランは猛烈な痛みにもかかわらず、起き上がろうとした。

アダムはその事を見逃さず、フランへと駆け込んだ。

フランが起き上がる前に、アダムの踵落としが決まった。

フランは再び俯せに倒れた。

「ふう、終わりか。」

フランは、息はあるが起き上がる気配が無かった。

「で、どうするんだ？」

「そうだな……」

アダムはある魔理沙の一言を思い出す。

『殺すなんてダメだ！』

(何故合理性に反する事を言うのか分からないが……魔理沙、僕は君を信じる事にする。)「フランドールは紅魔館へ戻してやろう。」

「ああ、そうだな。私の箒に乗せてやる。」
アダム達は再び紅魔館へと行く事にした。

「あの外来人達は今頃どうなっているでしょうか。」

咲夜の問いに、アダムからの攻撃からまだ回復しきれていないレミアが答える。

「……きつと駄目かしら……あの子は私のたった一人の肉親。けどあの子は自分で力を制御出来ないの。私はそれを恐れてフランをあんな誰も行かないような地下室に閉じ込めた。でも今回はそれが裏目に出たのね。きつとフランも我慢の限界だったのよ。私はそれに気づく事が出来なかった……姉として失格ね……。」

レミアはことごとく破壊された最上階の窓の前に立ち尽くし、ため息を吐きながらそう言った。

「……おーい！」

不意に窓の外から声がした。

「あなたは魔理沙だったかしら？後ろにいるのは……フラン？」
フランを背負った魔理沙が箒から降りると、レミアの前に止まった。

「フランを返してやりに来たぜ。気絶しているが、命に別状はないから大丈夫だ。」

丁度、霊夢が飛んで来てそのまま窓へ入り、アダムが走って来て何十mの高さもある窓へ跳んで入った。

「フラン、ごめんなさい…私が貴方に姉として接する事が出来なくて……もう二度と貴方を独りにさせないわ。」

レミリアは目に僅かだが涙を浮かべ、気を失ってぐったりとしたフランを抱く。

「レミリア、今すぐ霧を解除してくれ。フランがさっきの様に再び暴走する可能性がある。それだけでない。幻想郷のあらゆる妖怪が暴走する可能性さえある。」

アダムが急いでくれ、と言わんばかりの勢いで言った。

「え？あ、分かったわ。数十秒かかるけど。でも変なのよね。霧が黒くなるなんて……というか貴方、何で上半身裸なのよ。」

「腕が折れて、シャツをギプス代わりに使っている。」

レミリアはアダム達にとつて何と言っているのか分からない呪文を唱え始めた。

「アダム、幻想郷中の妖怪が暴走してしまうってどういう事？」

霊夢がそう言った。

「少し前の出来事だが、僕はある妖怪と森林で遭遇した。その妖怪は先程のフランドールと同じ様に、こちらの言葉が理解不能、異常な凶暴性、後頭部が弱点、どれも同じだ。しかし、その妖怪は恐らく吸血鬼では無い。違う種類の妖怪の特徴が同じとは考えられない筈だ。さらに、その妖怪と戦っていた時、黒い霧が異様に目立った。という理由で霧がその様な影響をもたらすと思ったんだ。」

すると、レミリアが絶望的な声で言った。

「そんな！全然解除出来ないわ！」

「おいおい、嘘だろ！パチュリーもレミリアしか霧を解除出来ないと言っていたのに！」

魔理沙も同じく叫んだ。

「……………」

「アダム？何か方法があるの？」

アダムは暫く考え込んだ挙句、口を開いた。

「霧が解けなければ霧が解ける環境を作ればいい。」

8 異変の終わり

そのアダムの言葉を聞いた者全員は訳が分からず首を傾げた。

「と言つてもどんな環境にするんだ？」

魔理沙が皆を代表して訊く。

「少し説明する。水蒸気は露点に達すると近くにある塵を核とする事で、冷却せずとも液体になる。」

「随分難しそうな話だな。でもその事自体は魔法を習う時に何となくだが覚えているぞ。」

「逆に気温が高ければ露点も高くなる。そうすれば水蒸気量が自然に飽和の方向へと向かう様にするため、液体の水が蒸発する。」

「へ、へえー……科学つてすごいけど分からないわ……。」

霊夢が感心した声で言う。

「科学の基礎知識程度は覚えておくと日常生活にも活用できるから多少は学んでおく方が良いぞ。さて、つまり霧を解除するには霧を含む空気の気温を上昇させれば良い、という事だ。」

「なるほど、じゃああたしの出番だぜ！恋符「マスタースパーク」！」

魔理沙は八卦炉を取り出し、太いレーザーの弾幕を霧のある上空に向けて放った。

そして、魔理沙は八卦炉を横へと薙ぎ払った。

かなりの量の霧が解けたが、それは全体の3%にも満たないだろう。

「私もやるわ。霊符「夢想封印・散」！」

霊夢が弾幕を上空へ放ち、上空へ行き着いた弾幕は爆散した。

だが、魔理沙が解除した分を含めても全体の5%しか晴れていないだろう。

一方、リヨウの自宅では。

「こちらリヨウだ。ロウ、居るんだろ。」

リヨウが液晶画面の前でそう言うのと

『ああ、居るさ。で、何の用だ?』

液晶画面に人の顔が映り、言葉を返した。

「それが、まずここ6週間程度の結界の観測データを送って欲しい。出来るだけ時間間隔を短くして。」

『いいけど、送信に時間が掛かるぞ。一体何があつた?』

「こちらで3時間程前に異変が起こってな、赤い霧が発生した。しかし、霧が少しずつ黒くなって、今じゃあ霧に黒い塗料を付けてるんじゃないかと思う程に霧が黒くなっている。」

『こちらで結界の観測データの過去6時間分を見てみたんだが、確かに3時間前から現在まで結界が異様な歪みを見せているぞ。それで、その霧はどんな悪影響を及ぼしているんだ?』

「それがな、あらゆる妖怪を凶暴化させている。里にも襲いに来ている程だ。俺が思うに、乱れた結界が異変を異常にさせ、それが更に結界を乱すかも知れん。」

その時、リヨウの背後から ガシャン! と音がしたと思うと、リヨウはすぐさま振り向いた。

そこには、リヨウには種類が分からないが、目が赤く光り、爪と歯を尖らせた妖怪がいた。!!!!!!

「ウギヤアアアアアアアアアア!!!」

「うるせえ! 家宅侵入罪でぶつ!!!!ばしてやるよ!」

リヨウは躊躇なく妖怪を家の外へ殴り飛ばすと、再び液晶画面の前に座った。

『………… リヨウ、あまり目立たない様にしろ、とドニーさんからも言

われたはずだ……………」

「知るか！人の家を壊すアイツが悪いんだろうが！てめえ弁償しやがれ！」

『…………… まあ別に良いとして、どうやらそちらへの送信が完了した様子だ。』

「ホントか？じゃあ早速見てみるとするか。ロウ、お前はもういいぜ。サankyーナ。」

『ああ。だが良いのか？異変は解決していないんだろ。』

「それはアイツ等がやってくれているから大丈夫な筈だ。」

『そうか。それとお前が調べて欲しいと言っていた事だが、今まで調べた管理軍のデータの中にアダム・アンダーソン、という人物は存在していない。また、あの立方体もデータが全く無い。』

「マジかよ。それで、どの段階まで調べた？」

『一番奥の一手前だ。もしかしたら奴やあの立方体はとんでもない計画に関係するかも知れんな。』

「調べてくれただけでも感謝するぜ。」

『そうか。それでは通信を終了する。』

液晶画面に「通信終了」の文字が映った。

「さてと、俺が此処に来たのは5週間前だったか…………… この時も結界が異様に歪んでいるな。アダムが来たのは一週間前で…………… この時もか……………」

リヨウは結界の観測データを見ながら何か考え込んだ。

黒い霧は霊夢、魔理沙だけで無くレミリア達紅魔館の住人達の力を借り、それによって全体の4割程が解除された。

「これで4割か。あたし達はもう無理だぜ。というかアダムはしないのか?」

「銃弾は液体には作用するが、雲や霧であれば密度が低いため余り影響しないだろう。それに、銃弾は一種類しか打てない。」

「……もう駄目かしら……。」

霊夢が呟く。

「……魔理沙、その八卦炉という物を見せてくれ。」

「いいけど?」

するとアダムはリュックに入っていた工具で外壁を外した。

「ちよつ、お前なにやっているんだ?!壊さないでくれよ?」

「壊しはしない。どれ……。」

アダムは外壁の外れた八卦炉を観察した。

「……回路に無駄があるが、中々使えるな。魔理沙、これを使っていいか?」

「ん?ああ、いいぜ?」(無駄があるだつて?つて事はもつと強力に出来るのか?)

アダムは八卦炉の外壁を付け直し、八卦炉を骨折していない右手に持って空へ向けた。

「はあああああ!!!」

八卦炉からは魔理沙の物よりも更に強力なレーザーが発射された。

レーザーは霧全体の2割程を消し去った。

残りの霧は4割程。

「……アダム、あなた何者なの?」

「冗談じゃないぜ。あんな威力の弾幕は今まで見たことが無い。」

「それは自分でも疑問に思うな。『普通の人間』では無い事は確かだろう。だが今の一発でエネルギーを使い果たしてしまった……。」

アダムは無言で空を見上げた。

「……う、うーん……。」

「あつ…… フラン、大丈夫?」

レミリアは自分の妹が起きた事に気付いた。

「お姉さま? うーん、体のあちこちが痛いなあ…… 頭の後ろとか胸の左とか…… まあ大丈夫だけど。」

すると、アダムが振り向き

「フランドール、あの霧に向かって可能な限り弾幕を撃つてくれ。」

「あ、アダムだ。霧に向かって? いいよ。禁弾「スターボウブレイク」!」

フランは、最後にアダムへと放った弾幕と同じ物を霧へと放った。

この一撃で、霧の1割が消え去った。

「ねえ、もっとやっていい?」

フランが自分の姉に訊く。

「いいけど、貴方は大丈夫なの?」

「うん! 霧を消せばいいんでしょ? 禁忌「レーヴァテイン」!」

フランの右手に彼女の1.5倍の長さのある大剣が握られた。

「じゃあ行って来る!」

フランは外へと飛び出し、上空へと飛んで行った。

(あの威力の攻撃を放ったにも関わらず、まだエネルギーが尽きていないとは…… 尋常じゃない程のエネルギーだ……。)

場所は地球歴0017年の地域名アジアーカルイザワ、と呼ばれる地域のとある研究施設に移る。

「あれから一週間経つが、未だに「バースト」が出来ていない。しかも生存信号と死亡信号両方を感知出来てない。奴の実力なら幻想郷の範囲を考慮して3日程で任務を終える筈だ。ポール、お前ならこの事態をどう捉える?」

デイツク中佐はポールと言う男性に苛立ちを募らせた様な口調で言う。

「彼は薬剤に対する耐性が異常に高いですからな。恐らく「トランセnder」が効かなかったのでしょう。両方の信号を感知できないのはそれ程肉体の損傷が激しいのでしょうか。ですが、彼ほど優れた「トランセンデンド・マン」はそうはいませんが……。」

「薬剤の耐性か…… 私としたことが見落としてしまっていた…… あれ”に匹敵する奴はそうはいないと言っても全くない訳では無い。それに、現在「兵士再生計画」と「TM量産計画」そして「改造兵士計画」の3つを掛け合わせた複合研究を行っている「超越人」は「アンダーソン・シリーズ」を含めて5種類ある。と言っても現時点で”生産”に成功しているのは「アンダーソン・シリーズ」が1体のみで、あの幻想郷へ送った物がそうだ。」

「それなら「フリードマン・シリーズ」が”生産”に成功する地点まであと一步の部分です。」

「そうか。あれはかつて最強と呼ばれた「トランセンデンド・マン」で、しかも今までで10年という歳月を掛けた代物だ。遂に成功となると嬉しいものだな。なら成功した次第、直ちに「インヴァイジョン」を行う様に”調整”しておけ。ところで、あとどれ位掛かるか?」

「そうですね…… あと一步と言えど、最低で3か月は掛かるかと……。」

「なあに、10年という月日から見れば短いものだ。」

そして、場所は幻想郷の紅魔館に戻る。

フランは己の身長よりも遥かに長い大剣を振り回し、結果、黒い霧は全体の10割、つまり全てが消えた。

「これで異変解決ね。」

「そしてレミリア、今夜は博麗神社で宴会だ。」

「え？何故？」

「異変を起こした者は異変解決されると解決した奴の家で宴会を開く、つてのが幻想郷のルールなんだぜ。料理は異変を起こした奴らが出すんだ。」

「そ、そう…… 咲夜、戦いが終わったばかりで悪いけど、お遣い頼むわ。」

「かしこまりました、お嬢様。」

咲夜は躊躇う事無く、早速里へと買い物に出掛けようとバックを用意し、そのまま紅魔館から飛び出て行った。

「アダム、私たちは一旦家に帰るわよ。」

「ああ、分かった。」

「それにしてもお前、凄く強かったな！感激したぜ！」

魔理沙が面白かった、と言うような感じで言った。

9 記憶

「悪いな、魔理沙。乗せてもらって。」

「別にいいぜ。乗りたければいつでも乗せてやるからさ。」

アダム達3人は紅魔館の宴会の準備がある為、一旦神社に帰っている途中だった。

ちなみに、アダムは空を飛べない為、魔理沙の箒に乗せてもらっている。

「しかし、何故霧が赤くなったのか、フランドールが暴走したのかは謎だな…………。」

「まあ終わり良ければ全て良しだ。それにしてもお前、あんなに強いのに飛べないんだな。」

「僕には大量のエネルギーが有るが、エネルギーを活用するには媒体が必要らしい。格闘は“身体”という媒体が有るが、お前達みたいに銃を使わずに弾を撃つ事は出来ない。空を飛ぶにもある種の媒体が必要なのかも知れない。」

「ふーん。でもあたし達だって強力な弾幕を撃つにはスペルカードがいるし、あたしは箒が無いと空が飛べないぜ。」

「私も、祓いや封印には呪符や呪文が必要だし。でも私は何も無くても空を飛べるけどね。」

「それはお前の能力だからだろ。」

「いや、それ以前に空中戦というのは地上戦よりも欠点がある。例えば、地上戦は地面による攻撃のし辛い方向があるのに対し、空中戦は地面が無い為、どの方向からでも攻撃を仕掛けられる。それに、地面の摩擦が無い為、空を飛べるといっても空中では機動性が鈍る。また、地面を踏ん張る事が出来ない為、格闘で十分な威力が発揮出来ない…………。今まで反論を言っておいて何だが、空を飛べる事自体は便利なのは認めている。」

「うーん…………。天才の言う事はよく分からん…………。」

「でも「弾幕ごっこ」じゃ格闘なんて基本的じゃないわよ。あの紅魔館の門番は格闘を使うし、メイドはナイフを投げて来るけどね。」

「ところで霊夢、「弹幕ごっこ」とは何だ？」

「そういえば説明していなかったわね。「弹幕ごっこ」というのは、幻想郷における決闘のシステムなの。決闘において死傷者が出ない為のシステムよ。また人間は妖怪に比べ、力が劣る。だから人妖問わず皆が公平な力を持つようにする為、また決闘において死傷者が出ない為を考え出されたの。」

「要するに殺さずに相手を無力化する事が目的という訳か。」

「……そ、そうじゃなくて……。説明を続けるけどその弹幕ごっこをするには自ら弹幕を放つかスペルカードを使うの。「スペルカードルール」と言ってお互いにスペルカードから放った弹幕をそれぞれで避け、弹幕をある程度受けるか、弹幕の美しさを認めると負け、というルールよ。」

「それであつても力の勝る妖怪が有利じゃないのか？それにあのフランドールは当たれば確実に死ぬ、という威力の弹幕を使っていたのだが。」

「妖怪は人間に比べて精神的な攻撃に弱い。弹幕ごっこでは弹幕が強すぎて死傷者が出る事はたまにあるけど……あの吸血鬼は流石に例外よ。」

すると、魔理沙が口を開いた。

「ところでアダム、さっきあたしの八卦炉を見て無駄があるって言っていたが、それは本当か？」

「本当だ。」

「マジかよ……。」

魔理沙は自分の宝物に無駄が有る、と言われて平常を保てる訳がなく、息を呑んだ。

霊夢もあの八卦炉の威力は良く知っているので、同じく驚いていた。

「……でもそれはまだまだ改良出来るって事だろ？どこをどうすればもっと強化出来るのか教えてくれないか？」

「そうだな……と言つても僕は出来る訳では無いが、二点ある。どちらからも教えよう。まず、回路だ。回路の線の素材、細かな部品、等を取

り換える事で出力は…… 少なくとも1割は上がる。」

「それは今度霖之助にでも頼むか。他に何かあるんだ？」

魔理沙は余程八卦炉を強くしたいのか、興味深く聞いていた。

「次に、プログラムだ。」

「プログラムって何だ？」

「例えば、使用者のエネルギーの変換比率を、熱を何%、光を何%という具合に設定する情報だ。これの改良で効率は、2割程度は上がるだろう。ただ、プログラムの設定はコンピューターが無いと設定できない。」

「なるほどな。でもお前の携帯端末みたいな奴もコンピューターだろうか？」

「… 多分あれでは大まかな設定は出来るだろうが、細かい部分はお出ない。でも出来る限りはやってみよう。」

「それはありがとな。そういやお前、忘れたことを結構思い出して来たんじゃないか？」

「思い出せたのは知識に関係する記憶であつて、自分の事や過去、経験に関係する記憶では無い。前者は思い出しが、後者はきっかけが無ければ思い出せない。」

すると今度は霊夢が声を掛けた。

「ねえ、そういえば腕は大丈夫？」

「ん？…… そういえばもう治ったな。シャツはもう使えないし、リョウに新しいのを頼むか。」

アダムは腕に括り付けられた棒とシャツを取り捨て、リュックからジャケットを取り出した。

「あなた本当に不思議よね。特徴は人間なのに妖怪以上の能力を持っているなんて……。」

すると、霊夢はジャケットを着ている途中のアダムからある物を見つけた。

「あなた、背中に古い傷があるわよ。」

「本当か？どんな傷だ？」

「なんか、縫い合わせた痕みたいな、胸の真ん中で首の少し下あたりか

ら縦に5寸くらいと、丁度首の後ろに1寸くらいの………」

(此処は何処だろう……)

ある少年が何処かに居た。

体が軽く感じる。

何か温かい物が自身を包んでいる感覚がする。

少年はゆつくりと目を開く。

目に何らかの液体が流れ込んできた。

液体で良く見えない目を凝らし、自分の体を見る。

ぼんやりとしか見えないが、服は無い。

ここから離れようと液体の中を泳ぎ始める。

しかし、何かに遮られて進めない。

前だけでなく後ろも、上下左右斜め全方向に進めない。

少年は暫くするとようやく目が慣れてきた。

よく見ると、自分がいた場所は直径1m、高さ2mのシリンダーの中だった。

そして、自分のいるシリンダーの外にも、自分が入っているそれと同じ物が大量に規則正しい列で並んでおり、どれにも液体と誰か人が入っている。

彼らは動いていなかった。

すると、触覚を取り戻してきたのか、首の後ろに何かしらの違和感が出て来た。

少年の目には何かのケーブルが映った。

ケーブルは数本あって自分の首の後ろとシリンドラーの上部にあるコネクターを結んでいた。

少年は力を振り絞ってそれを抜こうとするが、ケーブルはまるで抜けない。

すると、目の前に動く気配がした。

二人の人間だ。

(助けてくれ！)

思い切りガラスを叩く。

「彼がそうです。遂に成功ですな、ディック中佐。この時をどれ程待ったものか。しかも一番新しい「アンダーソン・シリーズ」が一番先とは。」

「まだまだぞ、ポール。〃生産〃には成功したが〃量産〃段階までは進んでいない。」

「中佐、貴方はもつと気持ちを前向きに持つべきですよ。」

「完璧を目指すにはマイナス思考が一番だと私は考える。この前「独立軍」がロサンゼルスへ攻撃し、そのままノースアメリカの一部を持っていかれたのを忘れたんじゃ無いだろうな。完璧な準備で無いからああなるのだ。」

「分かっていますよ……その戦いにおいて〃彼〃が得られたのですがな。それより成功したのを確認したので早く手術を始めましょう。」

「ああ。しかし、〃これ〃の實力は確かだろうな。」

「オリジナルよりは劣りますが、スピード、知覚処理は素晴らしいものですよ。早く始めましょうよ。」

「目的に近づけるといいがな。」

二人の人間は少年の助けなど何も無かったかのように何処かへ去っていった。

すると、今度は少年の目に自分へ接近して来る別の二人の人影を察知した。

その二人は体全体が異様なほどに白く、しかし顔面だけは真っ黒

で、目や鼻、口等の顔のパーツが確認できない。

よく見ると、服らしき服すら着ていない。

体の関節部分は黒く、足音は金属の様な響きを放っていた。

慣れてきた目を凝らすと人間では無い事が分かった。

この二人はロボットだった。

ロボットたちはシリンダーの外側にあるパネルを操作し始めた。

シリンダー中の液体の水位が下がり始めたかと思うと、液体は無く

なり、少年を繋ぐケーブルが外れた。

それと同時に少年は自分の体を自分で動かせなくなった。

少年を囲んでいたガラスは上へと開いた。

ロボット達は少年を担ぎ、何処かへと移動していった。

移動時間は実際にはほんの数分にも満たなかったが、少年にとっては数時間に感じた。

少年は何処かの白い台の上に俯せに乗せられた。

手足や首、胴体は何か括り付けられ、動けない。

少年は首を動かし、辺りを見回した。

部屋の片隅に一つだけドアが付いているだけの10畳程の部屋だ。

壁や床、天井は真っ白で、天井に照明が一つだけあるだけだ。

突然、ドアが開き、一体のロボットが入って来た。

ロボットはトレーを持っていて。

トレーには手術道具らしき物が入っていた。

「……！」

声が出なかった。

ロボットはメスを手に取り、何の躊躇いもなく少年の背中を15cm程裂いた。

「……！！！！」

叫ぼうにも声が出ない。

ロボットは少年の背骨に沿って長さ10cm程の装置を入れ、血管、神経等へと装置の回路を繋ぐ。

時間は10分にも満たなかっただろう。

ロボットは背中を縫い合わせ、次に首の後ろに3cm程メスを入れ

た。

「…………ろ…………めろ…………止めろ！」

少年はようやく声を出せる様になったが、ロボットはその命令を効かず、黙々と作業を続ける。

ロボットは長さ2cm程の電子回路を背骨に沿って入れ、脊髄に回路を繋ぐ。

「アダム！しっかりして!!!」

「…………はっ？」

突然アダムは拍子が抜けた様な声を上げながら人間らしい動きを取り戻した。

「よかった…………お前今まで同じ体勢のままずっと動かなかったんだぜ。」

「一体どうしたのよ。」

「…………いや、ただ頭が痛いだけだ。」

「そうか？少なくともそんな風には見えなかったんだが。」

「少し休めば如何にかなる程度だから心配するな。」

「それならいいんだけど…………。」

三人は神社へ向けて再び飛び始めた。

場所は外界の地域名アジア―コウフという地域のとある研究施設に移る。

「ドニーさん、ちよつと話が。」

「どうした、ロウ。」

「結界に異常がある様なんです。リョウに言われて気付いたんですが、どうやらレポートや現地の異変によって結界が乱れているんですよ。」

「そうか……リョウには悪いかもしれんが、暫く一人で頑張ってもらうしか無いな。我々も「管理軍」の行動を出来るだけ抑えねば。それで、アイツは他に何と言っていた？ちよつとした事でも良い。」

「そういえば結界の乱れによって異変が異常になり、それが更に結界を乱す、とか言っていました。」

「そうだ。「スペースマシン」を利用して結界を安定化出来るか試してみよう。」

— 1 春雪異変

10 冬が来た

赤霧異変が終わって4か月後の12月のある日。

現在の場所は魔法の森の何処か。

地面には少なくとも5cm雪が積もっており、木々の枝にも雪が積もっている。

目標までの距離、10m。

目標は今の所こちらに気付いていない。

目標との距離を少しずつ詰める。

相手がこちらを振り向いた。

瞬間、物陰に隠れる。

何とかこちらの存在に気付かれなかった。

目標との距離、5m。

目標へと一気に駆け寄る。

相手がこちらの存在に気付き振り向いたのと、自分のナイフが目標の胸の左側を突き刺したのは、ほぼ同時だった。

相手は抵抗しようと残った力で必死にもがくが、蹴り飛ばす事すら出来ない力で自分を突き放す事は無く、二度と動く事は無かった。

「これは高値で売れるな。」

アダムの目の前には自分のナイフによって力尽きた牡鹿が横たわっていた。

「鹿は僕の居た世界であれば高級食材だし、角は薬に使うと聞いた。霊夢も喜ぶだろうな。」

アダムは推定体重80kgはある鹿をソリに乗せた。

ソリには既に猪と熊が一頭ずつ乗っていた。

これらも鹿同様に少年のナイフによって一瞬で命を落とされた物だ。

アダムは合計重量410kgの（鹿が80kg、猪が80kg、熊が250kg）荷物を載せたソリを重そうに感じる事無く難無く引い

て行った。

鹿、猪、熊の肉はいずれも外の世界では1kg当たり30ドルで取引されている。

幻想郷の賃金や物価は外の世界の約4000分の1。

外の世界では地球歴開始のすぐにデノミネーションがあった為、その結果として地球歴0017年の物価は西暦21世紀初期と同等になっている。

つまり西暦21世紀は1ドル約100円なので、幻想郷は1ドル約400000円。

動物の体重の内、40%は内臓と骨である。

よって、取引出来る肉の量は、鹿48kg、猪48kg、熊150kgの合計246kg。

これらの値段は7380ドル。円に換算すれば738000円、幻想郷の物価であれば184.5円。

アダムを知っている情報からすればこの値段になる。

そして、これらはアダムの予想通りの値段で売れた。

さらに、これらの毛皮は防寒具に用いられるので毛皮もかなりの値段で売れた。

また、鹿の角は薬の原料となるので、角もそれ相応の値段で売れた。

「さて、霊夢に報告しようか。」

アダムは帰ろうと神社へ向けて歩いて行った。

途中で自分を呼ぶ声がした。

「アダム、うちに寄って行けよ。お前、その格好寒そうじゃないか。」
アダムは特に急いでいる事も無いので、リヨウの言う通り店に入った。

アダムの今の服装といえば、上下共に黒の素材の分からない長袖インナーと上半身は長袖Tシャツとジャケット、下半身は長袖ジーンズ、と見た目は夏の服装と変わらない。

「別に寒くは無いが……そう見えるのか？」

「お前の服装はここ数か月見た所、一度も変わっていないよな……この前お前にヒートテック（実際は違う名称だが）そいつをやったが、見た目的には寒そうだぞ。」

「そうだな……ところで、奥にあるコートは何だ？」

アダムは店の奥の棚にある黒いロングコートを指差した。

「これか？これは非売品だが……あんまり着る機会無いし、折角だからタダでお前に譲ってやるよ。」

「ありがとう。あと、コートの横にあるシャツとズボンは……」

「ああ、それはコートとセットだ。下にもブーツとベルトがある。ちなみに全部黒だ。それも持って行け。折角だから今着て行けよ。」

アダムはリヨウに言われるがまま、そのシャツとズボンを着、ベルトを付け、ブーツを履き、コートを羽織った。

「これは……体に上手い具合にフィットするし、伸縮性も優れている。気に入った。しかし、無料で良いなんて何か悪い気がするな。」

「気に入って嬉しいぜ。この服幻想郷の奴で買ってくれる奴なんて居ないからなあ……」

「良い物をありがとう。」

アダムは店から出て行こうとした、がリヨウによって呼び止められた。

「あっ少し待ってくれ。渡し忘れた物があるんだ。」

そう言っリヨウは店のカウンターの棚を探り、ある物を取った。

「これだ。カッコいいし、便利だし、何よりその服に似合うぞ。」

リヨウの手からアダムへと黒いサングラスが渡された。

「それじゃあな。やっぱお前その格好似合うな。その格好、救世主みたいだぞ。」

リヨウはわざと「救世主」のフレーズを強調した様な言い方だったが、アダムは気にしていない。

アダムはようやく店を出た。

「ただいま、霊夢。」

「お帰り、アダム……… とうかその格好一体何なのよ？ 黒メガネとか不気味なだけど………」

「リヨウにタダで譲ってもらった。雪は光を反射するからサングラスは便利だぞ。それから、今日は良い獲物に出くわした。お蔭で70円程稼げた。」

「ほ、ホントに?!」

アダムは取引で得た札束を霊夢に渡した。

霊夢は信じられない物を見る様な目つきでそれを見ている。

「貴方は本当に凄いわね。凄い能力を持つし、頭は良いし、異変は解決するし、こんなに稼ぐし。」

「今日は偶然だ。午後からは修理業の手伝いの仕事が入っている。」

「それだけでも十分な金よ。こんなに金銭に余裕が出たの、生まれて初めてかも知れないわ。」

霊夢はアダムの稼いだ金を見ながら目を輝かせていた。

丁度、魔理沙が神社に到着した。

「よう、二人とも。金の話でもしてたか?..... とうかそのサングラス一体何なんだ?」

「それで魔理沙、この前言ってた僕に会わせたい人物とは誰なんだ?」

「今から行くから私の後ろに乗ってくれ。霊夢も行くか?」

「じゃあ行くわ。私もどうせ暇だし。」

魔理沙はアダムの箒に乗せ、三人はある方向へ向かって飛んで行った。

アダム達が着いたのは、「香霖堂」と呼ばれる外に何なのか分からない物が無造作に置かれている店だった。

「霖之助、入るぜ。」

魔理沙がドアを開け、霊夢とアダムも続く。

「いらっしやい..... 君が噂の外来人かい?」

香霖堂の店主と思われる、銀髪で青、黒、白を基調とした服を着ている身長180cm程の眼鏡を掛けた男性がアダムに対して言う。

「そうだ。アダム・アンダーソンと言う。」

「僕は森近霖之助。この香霖堂の店主さ。ところで魔理沙、どうして彼を僕に会わせかったんだ?」

「アダムの持ち物で本人にはおろか、あたし達にも分からない物があるんだ。それでお前の能力の出番ってわけさ。」

アダムはリュックから自分が幻想入りして来た時の持ち物を全て出す。

「少し待っててくれ。」

霖之助はそう言うのとアダムの持ち物を観察し始めた。

「霊夢、彼の能力とは一体何だ？」

「霖之助は「道具の名称と用途が解る程度の能力」という能力を持っているの。だから霖之助ならこれらの道具が分かるからアダム記憶や過去の手掛かりになるかも、って訳。」

霖之助は観察を終えたらしく、説明し始めた。

「これは「シルバーファルコン」と言われる、「トランセンデンド・マン」という者専用の拳銃だ。」

「その「トランセンデンド・マン」とは何だ？」

「僕は道具の名前と使い方位しか分からないから言葉の意味は分からないが、恐らく君の事を指しているんじゃないか？君はこの銃を使えるんじゃないのかい。」

「確かに僕には使えた。他に分かる事は？」

「使用者の「エネルギー」、言葉の意味は分からないが、それを変換してビームにさせ、それを発射する、という仕組みだそうだ。丁度この「シルバールフ」と言われるナイフも同じ仕組みでナイフに超振動を起こし、切断力を上げる、という代物だ。」

「エネルギー」……聞いた事はある気がする……。」

「それと、この端末は色々機能があつて僕では全部説明が出来ないが、使い方は分かりやすく簡単だ。使う内に慣れて来るとは思うけどね。最後に、」

霖之助は誰もが何も分からなかった立方体を手に取って言い出した。

「これは……簡単に言えば容器だ。」

「と言っても何で出来ていて何が入っているんだ？」

「それが、この素材は特殊すぎて僕にも分からない。どうやらその素材が僕の能力を無効化しているらしい。だからこれが容器であるという事しか分からない。すまないな、力になれなくて。」

「いや、僕にとっては十分に参考になった。感謝する。」

すると、霖之助は少しの間黙り込み、やがて口を開いた。

「これなら幻想郷の管理人である八雲紫というスキマ妖怪なら分かるかも知れないが…… 霊夢、彼女の居場所は分からないか？」

「さあ……ここ数か月くらい外の世界に行ったきりで戻って来ていないらしいのよ。」

「その紫という者ならば分かるのか？」

アダムが疑問をぶつける。

その質問に答えたのは霊夢だった。

「たぶんね。千何百年と生きていらしいから紫に知らない物は無いと言っても過言ではないわ。」

「そうか。機会があれば聞いてみよう。」

そして、魔理沙が話題を切り替えた。

「それから、どうする？せっかく来たんだし、品物でも見て行こうぜ。」
アダムと霊夢もその言葉に従う事にした。

そして、アダムの目にある物が入って来た。

「霖之助、このケーブル、いや、ロープは何だ？見た所、普通のロープでは無さそうだ。」

アダムが手に取ったのは太鼓型リールの様な巻き器に巻かれた太さ0.5cmのロープだった。

「おや、丁度良い所に。これは君にしか使えない物だ。」

アダムは言葉の意味が分からず、首を傾げた。

「簡単に説明すれば、これは「スマートアナコンダ」と言って、君のナイフに繋いで使う物だ。ナイフを貸してくれないか？」

アダムはナイフを渡すと、霖之助は説明し始めた。

「ロープの先端はこのような端子になっていて、ナイフの底面のこの部分に差し込んで使うんだ。」

「成程、これで離れた相手への斬撃も可能だし、壁や柱に引っ掛ける事も出来るのか。」

「更に使用者の「エネルギー」をナイフに伝える作用もあるそうだ。これぐらい分かればもう言う事はないよ。ちなみに、それを使えるのは君だけだし、タダで良いよ。」

「ありがとう。しかし、良い物を貰った。」

突然だが、場所は冥界と呼ばれる所に移る。

「妖夢、この桜にはある物が封印されていると聞いた事があるでしょう。何かあるのか知りたくないかしら？」

そう言われた妖夢という少女は質問に答えた。

「ええ、これだけ存在感がありますから…何をおっしゃりたいのですか？幽々子様。」

先程妖夢へと質問をした幽々子という女性が答える。

「私もそう思うわ。なら手伝ってくれないかしら？この「西行妖」を睽かせる事に。」

「……分かりましたけど、私は何を？」

「貴方は、ここへ誰も来れない様に守りなさい。」

「……はい。」

妖夢は即答では無く、少し躊躇ってから言った。

11 春が来ない

3か月後、3月上旬位。

暦上では春だ。

だが、雪は去年の12月から降り始め、3か月間雪の無い日は無かった。

アダム知識では状況は二つのパターンに分かれる。

一つ目は異常気象。

だが、それにしても3か月間で雪が降る日は良くあったが、目立つような吹雪や大雪は無かった。

二つ目は、異変だ。

これ程不自然な異常気象は考えられない。

という訳で異変である事は確かなのだが、

「霊夢、場所は掴めたか？」

「まだ全然分からないわ。」

3か月もの間、発生源が掴めずにいた。

「でも、何故か幽霊が騒いでいるのよね。一方で妖怪は騒いでいない。何故かしら？」

同じ頃、幻想郷の何処か。

「それが、異変なのは確かだが、全く発生源が掴めないんだ。」

『そうか………こちらも「テレポートマシン」による結界の安定化に

は限界がある。奴らに“侵入”されるのも時間の問題だ。』

「異変解決の専門家達も場所が掴めていない。そちらのリーダーで分かった事は無いか？」

『こちらでは異変の正確な場所を突き止める程の「インフォーミオン」利用技術はまだ開発途中だ。それについてはこちらの方が進んでいるが、カイルも頭を捻っている程に難しいそうだ。』

「あの“カイル”がか？それは凄いな。それと他に、例えば奴らの侵入痕跡とかはどうだ？」

『それは今の所無いが、もうじき侵入されるかもしれんな。一刻も早く頼んだぞ。』

「勿論だ。」

リヨウはそろそろ通信を終えようかと思ったが、ロウの声によって制止された。

『あと一つ、以前調べて欲しいと言っていた事だが、アダム・アンダーソンという人物は死んでいる事になっている。』

「……ホントかそれ？」

すると、液晶画面に顔写真の付いた身分証明書が映った。

その顔は幻想郷の親しい少年の顔の他に違いなかった。

『実はその人物、死ぬ前は我ら「独立軍」に所属していた。2年前の口サンゼルス戦で彼は命を落としている。』

リヨウは言葉を失っている。

『彼についてはこれまでだ。あと、謎の立方体の事だが、カイルの仮説ではあれは「ユニバーシウム」で出来ている、との事だ。』

「でも何故それで作ったんだ？」

『「エネリオンポンプ」としては、形は球にするべきだし、だがあれで作るという事は余程の価値が無ければしないだろう。分かったのはここまでだ。お前も気を付けろよ。』

「ああ、分かっているさ。」

数日後。

「うう〜……………」

「何の病気なのか、僕にはまるで分からない。例えたら、エネルギーを吸い取られたかの様な……………」

霊夢は原因不明の病気(?)によつてダウンしていた。

体温は下がり、体がだるくなり、疲れ易くなる。

症状は風邪と同じだ。

実はこの病気の様な物、2週間前から里や妖怪の間でも同じ症状が出ている者が大量に出始め、それに掛かった者でそれが治った者は現在在所一人も居ない。

「僕は今から異変の手掛かりを探しに行く。安静にするんだぞ。」

「行ってらっしゃい〜…………… 貴方も気を付けて〜……………」

「魔理沙、居ないのか?」

現在地は魔法の森の魔理沙の家の玄関のドアの前だ。

「入っていいぞ〜……………」

中から弱々しい声が聞こえて来た。

声の通りドアを開け、中に入る。

「魔理沙、君もか。昨日霊夢もそれに掛かった。」

「マジかよ……… 一体どうするんだ？このままじゃあキノコなんて生えないし、花見も出来ないじゃないか………」

「少なくとも異変とは無関係では無いだろう。魔理沙は何か分かった事は無いのか？」

「無いぜ……… お前はどうかんだ？」

「無いな。」

不意に玄関からノックが聞こえた。

「魔理沙、居る？異変について掴めた事があるのよ。」

ドアの外から少女の声がした。

「君は休んでいてくれ。僕が代わりに出る。」

アダムがドアを開ける。

「あれっ？魔理沙は？」

目の前に居たのは、ショートヘアの金髪の、カチューシャと隣に浮いている人形が特徴の少女だった。

「貴方が噂の外来人？」

「ああ。アダム・アンダーソンだ。魔理沙は最近出始めた謎の病気だ。で、何の用だ？」

「私はアリス・マーガトロイドよ。じゃあ魔理沙に伝えておいて。上空に冥界への入り口が開いていて、そこに魔力が集まっているの。それが異変の元なのかもしれない、つてね。」

「分かった。伝えておく。」

「ありがとう。じゃあね。」

アリスはそう言うとは何処かへと去って行った。

そして、アダムは魔理沙の箒を取った。

「魔理沙、この箒を貸してくれ。異変の発生源が分かった。」

「いいけどさ……… ちゃんと返してくれよ………」

「ありがとう。それでは行って来る。」

アダムは魔理沙の家を飛び出し、箒を握る右手に力（本人の感覚で

言えばエネルギー）を込めた。

一瞬で箒はアダムもろとも加速し、音速の壁を破った証である衝撃波が発生する。

片手だけで箒を持ち、いきなりの加速だったにも関わらず、アダムは冷静でいた。

（考えた様に動くのか…… 上空と言っていたな。）

アダムを引っ張る箒は急上昇し、あっという間に雲の中へと消えた。

その様子を一人の少女が呆然と見ていた。

ドゴーン！

「い、今の何？」

アリスは唐突な衝撃波の音に驚き、音のした方向を見る。

そして、箒に跨らず、片手で持ち、前に突き出して飛んでいる少年を見つめる。

「飛び方ともかく、信じられない速さね…… 魔理沙から聞いた通り、相当の実力者らしいわね……。」

一方、外界のアジャーカルイザワに位置するある研究所。

「境界の「エネルギー」値、「インヴァイジョン」に最適な数値に達しました。」

「「スペースマシン」作動開始。」

スペースマシンが作動する様子を二人の軍人が見ていた。

「予定通りに”生産”と”試験”が完了して何よりだ。しかし、”あれ”の戦闘能力は大したものだよ。なあポール。」

「彼は「フリードマン・シリーズ」でありますからな。しかも彼は「トランセンダー」が効きましたからね。あの強さであれば確実に「バースト」を終えるでしょう。」

「だいたいかな……。」

二人はスペーススマシンの内部に一人の人間が入るのを見届けた。

アダムは暫く雲の上を飛び続け、やがて空間に穴が開いているのを見つけた。

近くに三人の少女がいるが気にも留めず、その穴へと飛び込んで行った。

少女達は好戦的な性格で、少年を止め、弾幕ごっこをしようと思っていたが、音速を超える少年を止める事は出来なかった。

仕舞いには衝撃波に吹き飛ばされた。

アダムは穴の中へ入ると、前方に階段を発見した。
長すぎる。

一番上の段が見えないのだ。

アダムは階段に沿って飛ぶ。

十数分後、一番上の所が見えてきた。

ようやく登り切った、と思った瞬間、何かが鋭く光った。

アダムは箒から手を離し、体を捻った。

よく見ると、光った物は1m程の長さの刀で、それがアダムの胴体

を掠める。

アダムは地面に手を着き、反動を利用して支えている手で体を飛ばし、足の先で弧を描き、着地する。

見ると、そこには銀髪でポブカットの、刀を二本持った少女が居た。横には半透明な球体（にしては不完全すぎる球だが）が浮いている。「ここは貴方が来るべき所ではありません。それに、これ以上は通す訳には行きません。この白玉楼の庭師である魂魄妖夢の名に掛けて守ります。」

「地上の皆が此処からの異変によつて迷惑している。引き下がる訳には行かない。」

アダムは腰からナイフを抜き、構えた。

「やあっ！」

戦闘は妖夢の先行で始まった。

妖夢がアダムに攻撃を仕掛け、アダムがそれを避ける。

しかし、その逆は無かった。

（防御だけに集中して隙を狙う作戦ですか。ですが……）

妖夢は右の刀で罅迫り合いに持ち込み、左の刀でアダムの胴を狙う。

アダムは自分の腹に目掛けて繰り出される斬りを、しゃがんで避けながら妖夢の腹に蹴りを一発決めた。

妖夢は少し飛ばされたが、すぐに体勢を整え、アダムに斬り掛かる。

右の刀でアダムの頭を狙い、それをアダムがナイフで受け止める。

左の刀が勢い良く突き出され、アダムの心臓を狙う。

アダムは身を捻って避けながら、左肘をヒットさせ、続けて右回し蹴りを決めた。

妖夢は吹き飛ばされた事を利用して距離を取った。

「餓王剣「餓鬼十王の報い」！」

妖夢が剣を振ると、剣から弾幕が放たれた。

アダムはナイフで弾幕をかき消し、左手に銃を持って反撃をした。

妖夢は音速の5倍のスピードを誇る銃弾を、剣でかき消し、剣から弾幕を出して反撃する。

アダムはナイフで弾幕を弾きながら妖夢へと距離を詰める。妖夢の左の剣がアダムのナイフを受け止め、右の剣を振る。

アダムは間合いを更に詰め、妖夢の右腕を受け止める。数秒間互いに動かなかつた。

沈黙を破ったのは妖夢の方だった。

妖夢の左の剣がナイフを払い、そのまま左の剣を振る。

アダムは一瞬でナイフを仕舞い、そのまま右手で妖夢の左腕を受け止める。

次の瞬間、アダムの頭突きが妖夢の頭に決まる。

アダムは妖夢が怯んだ瞬間を逃さず、体を後ろに倒し、妖夢を後ろへと蹴り飛ばした。

妖夢は地面に倒され、起き上がると同時に、目の前に握り拳があつたのが見えた。

次の瞬間、パンチの嵐が妖夢を襲った。

最後の一発が妖夢を吹き飛ばす。

12 誰も気付かない

吹き飛ばされた妖夢は受け身を取って体勢を直し、そのまま距離を取る。

妖夢は右の短い方の刀を仕舞い、左の長い方の刀を両手で握った。「断命剣「冥想斬」！」（これなら接近できない筈。）

妖夢の長い刀が発光し、リーチが更に2倍も長くなった。

妖夢が剣を振る。

質量の変化が無く、リーチが2倍になった事によって切先の速度は今までの2倍となった剣がアダムを襲う。

アダムはそれを躲し、妖夢へと接近を試みるが、妖夢の刀によってそれは阻害された。

妖夢は連続斬りを繰り出し、アダムがそれを避ける。

アダムはナイフで避ける事もあったが、剣が速くてナイフで受け止める事は出来ず、軌道を逸らす程度に止まった。

（接近できないのならばこちらが離れるか。）

アダムは妖夢の袈裟斬りを避けると、急に妖夢から後方へと離れた。

妖夢は逃がすものか、と追いかける。

アダムは銃を取り出し、妖夢へと何十発も連射した。

銃弾の速度はマッハ5。

妖夢の速度はマッハ1。

妖夢にとつて相対速度マッハ6の銃弾が向かってくる。

妖夢は咄嗟に刀でブロックするが、速い銃弾全てを避けられる訳では無いので、躲し損ねた十数発が当たってしまい、怯む。

その隙を狙い、アダムが駆け込む。

右フック、左フック、ボディ2発、アッパー。

上に吹き飛んだのを踵落として叩き落とす。

妖夢はこれ以上攻撃を受けるのは不味い、と思つてすぐに起き上がり、アダムに切り掛かる。

二刀流の基本は右の短い刀で防御、左の長い刀で攻撃だが、今の妖

夢は違った。

(攻撃は最大の防御！)

二本の刀がアダムを襲う。

対するアダムはナイフ一本でひたすら妖夢の攻撃を避けるだけ。

妖夢の右の刀がナイフを捉え、左の刀がアダムの足を狙う。

アダムは僅かに跳び上がった避けて、距離を取り、銃弾を何十発も撃ち込む。

妖夢も同じく距離を取り、スペルカードを唱える。

「獄神剣「業風神閃斬」！」

妖夢の周囲を漂っていた球体が大型の弾幕を出し、妖夢がそれを斬ると小型の弾幕が発射された。

アダムの銃弾と妖夢の弾幕が相殺されると、両者とも互いに急接近し、双方の猛烈な斬り合いが繰り出された。

妖夢は二本の刀を巧みに使い、攻撃と防御をこなしていた。

アダムの方はというと、今までの防御中心の戦法では無く、ナイフで刀の軌道を逸らしそのままナイフを突き出す、という攻防一体のフエンシング式の戦法に変えていた。

ナイフが妖夢の小手を掠り、続けて猛烈な連続付きが繰り出された。

妖夢は防御を試みるが、重い鉄の刀で軽い超合金のナイフの動きを捉える事は困難だった。

幾つかの躲しきれなかった突きが妖夢の体のいたる所に切り傷を作る。

そして、

「うぐっ！」

妖夢の左腕にナイフが突き刺さる。

妖夢は一旦体勢を立て直す為にアダムから距離を取った。

「はあっ、はあっ……。」

「その腕では使える剣は一本だ。一本では僕の動きについて来れない。」

「いや、私はまだまだ戦えます……。」 魂魄「幽明求聞持聡明の法！」

妖夢の周囲を浮遊していた球体が、半透明の妖夢の姿を形作った。本体の妖夢が短い方の刀を右手に持ち、半透明の妖夢が長い刀を両手に持った。

アダムは左手に銃を持ち、ナイフと共に構える。

本体の妖夢が弾幕を放ち、半透明の妖夢が接近戦を仕掛ける。

(フランドールの時とは違い、見事な連携だ。)

右のナイフで刀を受け止めつつ半透明の妖夢に攻撃、左の銃で弾幕を相殺させつつ本体の妖夢に攻撃。

だが完全に対応出来る訳では無い。

長い刀がアダムの頬を掠り、弾幕を一発被弾してしまう。

(こっとなったらアレを使うべきか、一か八か……やるか。)

妖夢から距離を取ろうとし、二人の妖夢がそれを追いかける。

アダムが進行方向とは逆方向に地面を蹴り、半透明の妖夢に向かって行きながら銃を乱射する。

離れた所にいる本体の妖夢がそれを弾幕で相殺し、半透明の妖夢がアダムを斬り掛かる。

その時だった。

本体の妖夢から見てアダムから銃弾では無くナイフが自分目掛けて飛んで来たのだ。

アダムのナイフ投げは妖夢にとって忍者が手裏剣を扱う様なイメージが湧いた。

手裏剣は一般的にオードソックスな武器、というイメージが強いが、本来手裏剣は忍者にとっては切り札なのだ。

しかし、ナイフを投げたという事は拾いに行こうとしない限り、武器を捨てる様な物である。

妖夢はそんな疑問を抱いたまま刀で軌道を逸らす。

ナイフの軌道は反らせたが、自分を過ぎ去ったナイフの軌跡が黒く見えた。

それは目の錯覚で無く、ナイフとアダムを繋ぐロープだ。

慌ててアダムの方を見ると、少年が両足で自分の霊体を自分の方へ蹴り飛ばしている最中だったのが見えた。

それに気を取られた所為でアダムの右手の動きに気が付かなかった。

アダムはナイフを繋ぐロープを右手に持ち、波打った。

波打たれたロープは妖夢の体に巻き付き、それを確認したアダムはロープを引き寄せた。

本体の妖夢の方へ吹き飛ばされた半透明の妖夢と、霊体の自分の方へ引っ張られた妖夢が空中でぶつかり合う。

アダムはその隙を逃さず、半透明の妖夢を更に蹴り飛ばし、本体の妖夢を両手で殴りつけ、地面に落とす。

蹴り飛ばされた半透明の妖夢は吹き飛ばされる途中に、元の球体に戻った。

妖夢が地面に叩きつけられた直後、アダムの降下キックが決まる。

妖夢は力を振り絞って何とか立ち上がるが、視界の真ん中には自分の首にナイフを突き立てている少年の姿があった。

「…………… あなたの様な強い方と戦えて光栄でした…………… ですが、幽々子様には……………」

ドスッ

少年の肘打ちが少女の腹に決まった音だった。

妖夢は気絶し、成す術も無く地面に突っ伏された。

同じ頃、白玉楼の長い階段の麓で。

突如、白い閃光が生じた。

だがその閃光は階段の上に居る者達に見える事は無かった。閃光を発した直径2mの球形の空間からは長身の男性が現れた。男性は黒いライダースーツの様な物を着ており、胸には「EMO」の刺繍があった。

〔現在地点、データ不足により座標不明 目標座標、前方に約4km、上方に約4km 目標距離、約5.6km 第一ミッションを開始する〕

これは男性の脳と、男性に埋め込まれたコンピューターとのやり取りである。

男性は“目標地点がある”白玉楼へと全速力で走って行った。
ドゴーン！ と衝撃波を発しながら。

衝撃波の音も何百kmと離れたアダム達の耳には届かない。

13 死

「お前がこの異変を起こした者か。」

「その通り。だけど邪魔させる訳には行かないわ。この白玉楼の主である西行寺幽々子の名に掛けてね。」

アダムの前方20m先には桃色のショートヘアの水色を基調とした着物を着た女性だった。

幽々子と言う女性の後方には巨大な桜がそびえ立っていた。

戦闘はアダムの銃撃から始まった。

幽々子は上空へと飛び上がり、弾丸を避けながらアダムから距離を取っていく。

アダムも幽々子との距離を詰めようとするが、空を飛ばず、距離が縮まらない。

箒で飛ぶ、という手があるが、それを妖夢の戦闘の時に落とし、拾うのを忘れてしまった。

戦闘中に拾いに行くという事になればそれは大きな隙へと繋がるだろう。

だから、拾おうという考えはアダムの脳内には無かった。

アダムは休む間も無く銃を撃ち続けるが、上空へと離れた幽々子にとっては体感速度が遅くなるため、幽々子は焦る事も無く音速の5倍の弾丸を次々と躲す。

「桜符「完全なる墨染の桜」！」

その弾幕にはアダムも驚きであった。

何といっても弾幕は速度こそ無いものの、その分数量が多すぎる。

1秒で何百と放出される幽々子の弾幕に対し、アダムの1秒当たり発射数は50発。

そして、何百という弾幕がアダムに少しずつ近づいて来た所で、アダムはナイフを持ち、それによって弾幕を弾く。

正面だけでなく、横から、上から、後ろからと。

余談だが、もしアダムが箒を利用した空中戦を用いたのであれば、箒の制御は空中なので効きにくく、しかも自分の下からも弾幕が飛ん

で来るため、彼はたちまち弾幕の嵐にやられていただろう。

これもアダムがあえて籌を取らなかった理由の一つなのだが。

アダムは対一戦闘こそ得意であるが、対多数戦闘には向いていない、こういった多数・多方向の攻撃が飛び交う戦闘には向いていない。

(危険は伴うが、アレをやってみるか。)

アダムはナイフで捌き切れなかった弾幕を、ナイフを持っていない右腕で、そして両足で弾き始めた。

これは弾幕ごっこをする者達にとっては異様な事なのだが、アダムにとって、これは相手のパンチやキックを同じく自分の腕や足でガードするようなものである。

そして、幽々子は少年がどうにか自分の弾幕を全て躲しきつたのを見ると、次なる弾幕を放った。

「死ぬがいいわ。「反魂蝶——八分咲——！」

蝶の形をした何百もの弾幕がアダムを上下左右前後から襲う。

アダムはこれもナイフのみで弾くのは無理と思い、左腕、両足を使い、弾幕を弾こうとしたのだが、それが間違いだった。

蝶が少年の腕にぶつかり、儂く散った。

それが幽々子の狙いだった。

(……………?!意識が……………)

だが、

【脳に異常信号到達と同時に身体に異常信号送信を確認 脳に外部からの干渉を確認 脳への異常信号を消去し、身体への異常信号を消去 脳への外部からの干渉を消去】

「…………… 何だ?!」

アダムは目の前に地面が迫っていた。

巧みに転がる事によって衝撃吸収と弾幕の回避を同時に行う。

左手に銃を持ち、それで次々と迫る蝶を撃ち落していく。

一方の幽々子は動揺していた。

「…………… そんな…………… あの技は少しでも触れれば即死の筈よ!何

故……………?」

この場に解説を書いておくが、それは幽々子が何故アダムが生きて

いるのか理解しておらず、アダムも一瞬の間意識を失っていたため自分に何が起きたのか分からないからだ。

反魂蝶は触れた者の魂を奪うが、それは何故か。

答えは、触れた者の脳へ「自分が死んだ」という情報を与える事により、催眠術と同じように脳に死を錯覚させるからだ。

アダムは脳への外部からの干渉を受け付けられない様に”出来ている”。

このため、「弾幕の美しさ」という精神攻撃もアダムには効かない。だが、それには一瞬だが処理にかかる作業であり、一瞬だけ気を失っていたのはその為だ。

しかし、反魂蝶にはアダムにとっては数量という驚異が残っていた。

(こんな量をまともに浴びればどうなる事か……。)

体を捻りながらナイフと銃を上手く利用し、弾幕を減らしていくが、まだ大分の蝶が残っている。

だが、そんな蝶の大群とは別に、蝶の大群を生み出した張本人が未だに自分の能力が効かなかった事に動揺しているのを少年の目は捉えていた。

両足で地面を思い切り蹴り、幽々子の方へ跳んで行く。

銃を連射し、ナイフを持つ右手に力を込める。

銃弾が2、3発当たった事で、幽々子は自分の元へ少年が自分へ攻撃を掛けていた事によく気が付いた。

慌てて回避行動を取るが、放たれた銃弾の内7割近くが幽々子にヒットしている。

それによって怯んだ幽々子へ、アダムのナイフが幽々子の腹を浅く裂く。

幽々子は幽霊である為、出血は無く、切断されて死ぬことは無いが、痛みを感じない訳では無い。

さらにアダムの銃撃は幽々子に対して精神的な苦痛をもたらしていた。

苦痛に耐え切れなかった幽々子は体勢を崩し、地面へ足を付ける。

着地したアダムは、追いつきを掛けるべく幽々子へと駆け込んだ。幽々子はどうか飛び上がり、辛うじてアダムの一撃を避ける事は出来た。

アダムは銃を幽々子に向け、引き金を引く。

一方、幻想郷の地上では、

「それは本当か?!」

『本当だ!』

リョウがモニターを通した口ウを相手に喋っていた。

「冗談じゃないぜ。異変の場所すら分からないってのに……」 「管理軍」が送り込んだ場所は分かるか?」

『以前話しただろうが、場所を突き止める程の「インフォーミオン」操作技術は無いんだ。そして、エネルギー不足で人員を送る事も出来ないんだ…… すまないな、本当に。』

「色々大変だなあ…… 実はもう一つ異変が起きているんだ。」

『それは本当か?!』

「本当だ!と言っても異変かどうかも疑わしいが…… 実はここ数日、異変の捜査中に…… 何というか…… 黒い砂? 違うな…… もや、って言えばいいのか…… とにかくその黒い粒子的な物を幻想郷のあちこちで見掛けるんだ。」

『成程。話を続けてくれ。』

「そして、その粒子もどきが「エネルギーオン」を発しているんだ。ところ

が変な事に、幻想郷や住人、妖怪にそれといった変化が見られないんだ。」

『という事はその余剰「エネルギー」が結界をこれ以上悪化させる、という事か?』

「という事だ。だけど、先に「管理軍」の奴を片付けるか、黒い粒子もどきをどうにかするか、どちらをすれば良いのか……。」

『そういった事はお前の判断に任せる、ってドニーさんも言っていただろう。お前が決めて良いんだ。』

「分かった。それじゃあ通信終了だ。」

モニターを切った。

壁に掛けてあるマシンガンを取り、背中に担ぐ。

14 迫り来る者

「これが私の本気よ。「西行寺無余涅槃」！」

幽々子から先程のスペルカードよりも大量かつ高速な反魂蝶がアダムを襲う。

アダムはナイフと銃を上手く使いこなし、蝶を儂く散らしていく。何百、何千もの蝶の大群に対するは白銀の狼と隼。

隼が離れた獲物を仕留め、狼が近づいた獲物を噛み殺す。

幽々子は止まろうともせず次々と弾幕を撃ちこむ。

銃で蝶が接近する前に撃ち落とし、ナイフで近づいて来た蝶を斬る。

しかし、反撃が出来ない。

それどころかますます防戦一方になるばかりだった。

後ろから迫ってくる蝶に反応が遅れたが、どうにかジャンプし体を回転させて避ける。

(これではこちらが負けてしまう……仕方ない、あれを使おう。)

アダムは地面を勢い良く蹴り、幽々子の方へとジャンプした。

前方からの自らの移動によって相対速度の増した反魂蝶を撃ち落していく。

幽々子は自分の方へ跳んで来るアダムへと更なる弾幕を繰り出した。

「死蝶「華胥の永眠」！」

アダムはベルトに掛かってあるロープをナイフに繋ぎ、1m程ロープを出した状態でロープを自分の進行方向に対して横へ回転させ始めた。

回転させている先端のナイフだけでは無く、ナイフと使用者を繋ぐロープも幽々子の弾幕をかき消していた。

反撃の余裕が生まれたアダムは幽々子へ銃を連射させる。

相対距離の縮まった今では、銃弾を幽々子が避ける事は困難だった。

何十発もの銃弾が幽々子にヒットするが、アダムに弾幕が当たる事は無かった。

アダムはナイフを手元に戻し、今度はナイフを幽々子へと投げた。幽々子は避けようとするが、彼女は接近戦が出来る程の回避反射は備えていなかった。

結果、ナイフは幽々子の左腹部に突き刺さり、アダムがナイフを再び手元に戻す。

更に接近したアダムは幽々子の腹に一発ブローを決め、そして背後から後ろへと蹴り飛ばした。

幽々子は空が飛べるため、空中である程度減速を利かせ、地面に着地した。

一方アダムは幽々子を蹴り飛ばした反動である物へと向かって行った。

幽々子が息を切らす中、少年が西行妖の太い枝に着地したのを見た。

一本の巨大な桜の枝に着地したアダムは、ナイフに力を込め、桜の枝を切り落とし始めた。

(僕の推測ではこの桜が幻想郷中の熱エネルギーを奪った故に幻想郷に異常気象を引き起こしたのだろう。だからこれを少しずつ分解すれば少しずつエネルギーが戻っていくだろう。それに……。)

アダムは枝の切った部分からエネルギーが少しずつ漏れ出ているのを感知した。

自分が大切にしている物を壊されて怒りを感じない、悲しまない、驚かない人物は恐らく居ないだろう。

それが自分の目の前であり、1000年もの間大切にしている物であれば尚更だ。

「やめて！その西行妖だけは！」
(よし、餌に食い付いたか。)

アダムは幽々子が自分を止めるべく、自分に向かって飛んで来たのを確認すると、幽々子に向かって思い切り跳躍した。

幽々子は突然の出来事に慌てて止まろうとするが、少年の肘打ちが喉の少し下辺りにヒットした。

アダムは続けて裏拳を顔に当て、膝蹴りを腹に当て、最後は体ごと

後方に回転しながら両足蹴り上げを決めた。

空中で制御出来ないが為、一旦着地し、幽々子目掛けて再び跳躍した。

幽々子は減速し、体勢を整えようとしたが、その前に少年のアップパーに怯んでしまう。

アダムは続けて拳と脚のラッシュを何十発もぶちかまし、踵落としで真下に吹き飛ばす。

すかさずナイフをロープに繋ぎ、幽々子へ投げ飛ばし、ロープの先の方が幽々子の足に巻き付く。

アダムは幽々子もろともロープを手元に引き寄せ、引っ張る反動を利用して降下キックを決めた。

幽々子は空中で制御を利かせ、ダメージを出来るだけ減らして着地に成功した。

だが直後、脛に痛みを感じたのと同時に幽々子は地面に転げた。

アダムは下段回し蹴りによって倒れた幽々子にナイフを突き立てた。

【目標まで相対距離100m前方】

男が階段を上り切り、目標が目の前100m先にある事を目測で確認し、そこへ歩いていく。

途中で少女が倒れていたが気にも留めない。

【目標地点まで50m】

目標地点には少年と女性が一人ずつ居るだけだ。

よく見れば少年が女性にナイフを突き立てているが、彼にとってはどうでも良い事だ。

何故ならそれはただの情報にしか過ぎないからだ。

そして、男は“目標”が少年のリユックの中にある事を“感知”した。

【識別信号無し よって敵と見做す 敵を排除する】

男は背中に掛けてある銃を取り出し、少年へ向けた。

「異変を元に戻せ。」

「ふ、ふぎけないで…… 人の大切な物を勝手に傷つけておいて……。」

グサッ

「きゃあああああ!!!!」

「早くしろ。次刺す時は致命傷にするぞ。」

「…… ふ、ふん。私はもう既に死んでいるから意味無いわよ。」

「いざとなればあの木を更に分解すればいいが、こちらの方がすぐに片付く。」

グサッ

「きゃあああああ!!!!」

「早くしろ。」

その時、アダムが後ろを振り向くと共に銃をその方角へ向けた。

見ると、そこには男が自分へと銃を構えていた所だった。アダムと男がお互いに銃を向け終えたのはほぼ同時だった。

「誰だ。異変解決を邪魔するつもりか？」

男は胸に「EMO」の文字の書かれた迷彩服を着ていた。

(僕が幻想郷に来た時と同じ服だ。)

男からは返事は無い。

その代わりに男がアダムへと銃を乱射した。

直後、アダムが回避行動を取ると共に自らも銃を放った。

男も回避しながら銃を撃ち続ける。

お互いに一定の距離を取り、そこから銃撃を繰り返しては避け続ける。

アダムの銃はハンドガン型で連射速度は1秒当たり50発。

対する男性の銃はアサルトライフル型で連射速度は1秒当たり100発。

アダムは少しでも避けやすくするためにナイフを持ち、それで銃弾を弾き始めた。

男は相変わらず銃を撃ち続けている。

突然アダムが男の方へとナイフを突き出しながら突進していった。

対する男は銃を仕舞い、何も持っていない右手を突き出した。

接近武器も持たず何故そのような行動を取ったのか、と一瞬疑問に思ったアダムだが、こちらが有利である為深くは考えなかった。

【格納武器展開】

男の右小手辺りから腕の方向にそって20cm程の刃が突き出た。空中で互いの刃がぶつかり合う。

二人ともその場で地面に足を着き、互いにナイフの攻防を繰り返す。

ガキーン！　ゴキーン！　と甲高い金属音が1秒の間で何十回と響き渡る。

二人の正面蹴りが交錯し、その反動で互いに距離を取り、再び銃撃を始める。

銃撃が暫く続き、互いが無傷のまま再びナイフによる接近戦が始

まった。

アダムはナイフで相手の刃を受け止め、拳や蹴りを避けていくが、反撃はしない。

男がアダムの首を狙った横薙ぎを繰り出す右腕を受け止め、右肘打ち、左肘打ち、左裏拳、上段回し蹴りを決める。

しかし、相手は吹き飛ばなかった。

男はアダムへ下段回し蹴りを決め、地面に倒し、そのまま踵落としを決めた。

倒れたアダムは男が自分へ向けて刃を突き刺そうと腕を突き出しているのを確認すると、地面を転がって避ける。

男の突き刺しは不発し、地面に突き刺さる。

アダムは男の右腕を目掛けてナイフを振る。

ガキーン！ と金属音。

男はナイフを先端に展開する籠手を装備していた。

しかも、籠手自体の耐久力もかなりの物だ。

男はアダムへ正面蹴りを決め、吹き飛ばした。

15 もう一つの戦い

「出て来やがれ！」

森の中で独特の甲高いエネルギー発射音が鳴り響いていた。

1秒間に100回の発射音に驚き、森の動物や妖精の大半は逃げているが、逆に好戦的な妖怪等はその発射音に興味が湧き、音源へ行ってみるのだった。

音源では一人の男が銃を乱射しているのだった。

それをみた妖怪たちはその男を襲おうとするが、誰がどうやろうとも男に傷一つ与える事も出来ない。

それどころかパンチ一発でノックアウトされる始末である。

先程もレティ・ホワイトロックという好戦的な雪妖精が男に挑んだが、一撃で倒された。

「恐らく奴は伊吹萃香という鬼だろう。鬼は好戦的と聞いたからこれに掛かるかもしれんな。」

数十分前、人間の里の鈴奈庵にて。

「いらつしやいませ！あ、リョウさんじゃないですか。ここに来るなんて珍しいですね。」

「まあな。ところで小鈴、出来るだけ多くの妖怪について書かれている本は無いか？」

リョウが来たのは里にある「鈴奈庵」という貸本屋だ。

対面しているのはその主人の娘、本居小鈴。

「え? いいですけど、最近の異変に関係した事ですか?」

「そうじゃなくて、現在別の異変が起こる可能性があるんだ。最近黒い粒子もどきが幻想郷のあちこちで見掛けるものでな。異変は起こる前に潰すのが最適だと俺は思うんだ。」

「へえ、そんな事があるなんて知りませんでした。この本なんかどうですか?」

「ああ、サンキュー。他にも持ってきてくれると嬉しいんだが。」

リヨウは手渡された本を勢い良く取り、驚くべきスピードでページをめくり始めた。

「とにかく妖怪の事が書かれた本全て持ってきました。それにしても読むのが凄く速いですね。」

「ありがとよ。これでも頭の回転は良くてね。」

「いまいち本当ただと思えませんが……。」

リヨウは無言のまま何十冊もある本を恐るべき速さでめくり続ける。

そして、数分後。

「お、こいつか。」

「どれどれ? 山の四天王ですか?」

「その中の伊吹萃香という鬼の奴が怪しい。能力が物体の密度の確変で自らのそれも確変する事が可能だとよ。この能力はコイツ特有らしい。つまり最近の粒子もどきもコイツだろうな。」

「でも確かその妖怪なら遙か昔に幻想郷から姿を消したと聞きましたよ?……」 戻って来たって事でしようかね?」

「良くは分らん。いずれにせよコイツが犯人である可能性は高い。それじゃあ行って来るぜ。」

「相手は鬼ですよ?! 頭は良くないですが力は圧倒的ですよ?! 大丈夫なんでしょうか?!」

「俺はそんなに馬鹿では無いからな。実は力も自信あるものでね。じゃあまたな。」

リヨウが暖簾をぐぐり抜ける。

そして時間は現在に戻る。

「色んな妖怪が出てきたが、どいつもザコじやねえか。」

一息つき、叫んだ。

「おい！何処かにいるんだろ?!コソコソ臆病者みたいに隠れてないで俺と真剣勝負しようや！出てこなければお前を臆病者と見做すぞ！なあ伊吹萃香！出てこいクソツタレ!!!」

森に大声が響き渡り、暫く沈黙が続く。

そして、リヨウの目の前3m先に黒い粒子もどきが集まり始めた。

リヨウはパーカーのフードを深く被り、サングラスとネックウオーマまで付けた。

無意識の動作では無く、意識的に行った動作だ。

それは勿論顔を隠す為である。

粒子もどきは何者かの体の形を作り上げた。

そして、粒子もどきは茶髪のロングヘアの二本の角が生えた少女へと姿を変えた。

「お前かー！私を臆病者と言ったのは!」

(悪口に反応するとは低知能の証拠だ。)
「ハア、やっと来たか……お前が異変を企てているのは知っている。だからチョツとした賭けをしようぜ。」

「な、なんで私が異変をやろうとしているのを知ってるのさ?!」

「それはお前にはどうでもいい事だ。俺と勝負して俺が勝てばお前は異変を起こすのを止めろ。お前が勝てばどうするかはお前の好きに

しろ。」

「じゃあ私に臆病者と言ったことを土下座してよ。あと顔も見せて。ところで何の勝負をすんの？」

「いいだろう。何で勝負かって？これだ。」

リヨウが右手の握り拳を萃香の顔の前に突き出した。

「力比べ？いいよ。言っとくけど弾幕もやるからね。」

直後、森全体に二人のストレートがぶつかり合った衝撃音が鳴り響いた。

同じ頃、冥界で。

甲高いエネルギー発射音が鳴り響いていた。

年上の男の方は余裕があるのか息が切れておらず汗一滴すら滴っていない。

一方で少年の方は息に多少の乱れがあり、少量ながら汗をかいていた。

一発の銃弾が少年にヒットした。

男は容赦なく撃ち続ける。

少年もナイフで弾を弾くという方法があるが、全ての弾を弾くことが出来る訳では無い。

現状は男が放った銃弾の1割程は避けきれずに当たっていた。

男が追い打ちにと籠手に仕込まれている刃を展開しながら少年へ駆け込む。

少年も男の攻撃を避けるべくナイフを構える。

男が斬り裂き攻撃を容赦なく続け、少年はどうかしてそれを受け止める。

男の行動には余裕があったが、少年の行動には余裕が無かった。

男の攻撃が少年の脇腹と胸の辺りを掠めた。

少年は男の振り下ろし斬りをナイフで受け止め、男の股をくぐり抜け、背後を取った。

男の銃を取り、遠くへ投げ捨てる。

男は振り向き蹴りを決め、少年を吹き飛ばす。

投げ捨てられた銃を取ろうともせず、追い打ちにと少年へ跳び蹴りを掛ける。

少年は空中で体勢を整え、迫り来る蹴りをどうにか避けた。

同時に男の右腕を掴み、籠手を外そうとナイフでこじ開ける。

男は少年を振り払おうと右腕を振り、少年を吹き飛ばした。

それと同時に右腕の籠手も外れたのだが、男にとって現在の最優先事項は少年の抹殺である為、銃同様気にも留めない。

少年は着地し、コートを脱ぎ、銃とナイフとロープとリュック、つまり上着と持ち物全て、これらを放り投げた。

少年が構えを取る。

男も着地し、構えを取る。

お互いにマーシャルアーツを思わせる様な構えだった。

暫く沈黙が流れる。

沈黙を破ったのは二人同時だった。

互いの左ジャブがぶつかり合い、続けて互いの右ストレートがぶつかり合った。

お互いに攻撃部位をとにかく活用した戦いだった。

暫く二人のラッシュのぶつかり合いが続き、少年の肘打ちが男の腹に決まる。

続けて裏拳、下段回し蹴りを決め、男を地面に倒した。

しかし少年が踵落としを繰り返したが、男に足を掴まれそのまま投げ飛ばされた。

少年は地面を転がって衝撃を吸収し、立ち上がる。

男が少年を襲おうと上空に跳び上がり、振り下ろしパンチを繰り出す。

少年はそれをすんでの所で避け、相手が隙を見せたのを機に男へ上段回し蹴りを決め、そのまま両方の足で男の首を掴み、地面に押し倒す。

男は少年の足を掴み自分の方へ引き寄せ、その勢いを利用し、少年を殴り飛ばした。

少年は地面に手を着き、そのまま下半身が手を中心に弧を描き、着地した。

男が少年に飛び掛かり、対する少年も男へ飛び掛かる。

二人の攻撃のぶつかり合う音が辺りに響き渡る。

二人とも続けて攻撃の嵐を掛ける。

少年が男の両腕を掴んだ。

そのまま少年の頭突きが男にヒットし、続けて膝蹴りを決める。

男は掴まれた腕を振り回し、少年を投げ飛ばす。

少年は空中で体勢を立て直そうとしたが、後ろで何かにぶつかって受け身は失敗する。

男のストレートが少年の目の前に迫っていた。

体ごと横に移動し、避ける。

ストレートは少年では無く後ろの桜の大木（西行妖では無い）にぶつかった。

少年が男を膝蹴りで僅かに空中に浮かせ、ボディブロー4発、アツパー、二連蹴り上げ、サマーソルトキック、跳び上がって両腕で殴りつける。

男は地面になんとか着地し、跳び上がって少年を掴み、地面へ叩き落した。

続けて少年を踏みつけ、そのまま少年にパンチの嵐を喰らわせた。最後の一発が少年の腹にクリーンヒットした。

「ぐうっー」

悲鳴と共に血も吐き出された。

男が止めにと拳を高々と挙げる。

その時だった。

「幻符「殺人ドール」！」

男へ向かって、しかし少年に当たらない軌道で、大量のナイフが飛んで来た。

男は跳び上がり、体を捻ってナイフを全て避ける。

「アダムさん、大丈夫ですか？」

「いいタイミングだった、咲夜。余り大丈夫では無い。しかし、良くこの場所が分かったな。」

「いえ、ほとんど偶然です。空間に妙な穴が開いていたのを偶々見つけただけです。しかし、アダムさんがそれ程苦戦するとは、どれ程の相手なのか……。」

「苦戦どころか一方的だ。」

男がアダム達の方向へ飛び掛かった。

すると咲夜が目の前から消える。

アダムが男から繰り出される攻撃を受け止めていく。

アダムが男の両肩に乗せた両手を支点に下半身が弧を描きながら反対方向へ移動し、それと同時に後ろ両足蹴りを決める。

男は体勢を立て直し、振り向くと大量のナイフが自分に向けて放たれていた最中だった。

男は迫り来るナイフを大柄な体格によらず軽やかな身のこなしで躲していく。

しかし、数本のナイフが自分を掠める。

アダムは隙を見せた男へ駆け込みストレートで吹き飛ばし、続けて両足蹴り上げを決め、上に吹き飛ばす。

男が吹き飛ばされた先では咲夜がスペルカードを唱えていた。

「奇術「エターナルミーク」！」

大量の弾幕が男へ雨あられと襲う。

アダムが跳び上がり、男へ両足踵蹴りを決め、地面へ叩きつける。

咲夜がナイフを十数本投げ、全部が男の背中に刺さった。

更にアダムが降下キックを決め、距離を取って体勢を整える。

咲夜も地面に降りて来る。

そして、背中に何本ものナイフが突き刺さっているにも関わらず男が起き上がった。

16 逆転

森全体にリヨウと萃香が互いに出す攻撃の衝撃音が響いていた。萃香がストレート突き出す。

リヨウがそれを受け止め、こちらもストレートを繰り出す。

萃香もそれを受け止め、暫く対峙し合った。

そして、萃香が角の生えた頭で頭突きを繰り出す。

リヨウは間一髪の所で体を逸らして避け、同時に萃香を後ろへ投げ飛ばした。

「おい！角は反則だろ！」

それに対して萃香は何も言わず、地面に着地するとリヨウへ向かって突進した。

「やあ！」

ガシツ、と音がした。

リヨウが萃香の角を掴み、そのまま地面に叩きつけた。

隙を逃さず、蹴り上げ、ボディブロー4発、裏拳、蹴り上げ、踵落としを決め、吹き飛ばす。

「角を掴むのも反則！これ結構痛いんだからな！」

起き上がった萃香が言った。

萃香がリヨウへ駆け込み、拳と蹴りのラッシュを掛ける。

リヨウはそれを次々と避けていき、負けじと自らも攻撃の嵐を掛ける。

リヨウのストレートが萃香の顔面にクリーンヒットした。

萃香もリヨウの顔面目掛けてストレートを繰り出していたのだが、腕が短い為攻撃が届かず、結果として自分だけが攻撃を喰らった。

吹き飛ばされた萃香は背中から地面へ落ちる形で倒れた。

隙を与えない様にスペルカードを唱える。

「萃鬼「天手力男投げ」！」

萃香が両手を上に突き出すと、そこに巨大な岩が出現した。

「だあっ！」

萃香が岩を投げ飛ばした。

リョウが銃を構え、1秒で4発のペースで銃弾を発射する。
岩はリョウに当たる事なく粉々に砕かれた。

「鬼符「ミッシングパワー」！」

萃香が両手を上に突き出すと、両手が巨大化した。

「…………ゴッドハンドじゃねーんだよ…………。」

萃香がその黒ずんだ巨大な手を振り回し、リョウに当てようとする。

リョウは上手く体を捻り、攻撃を避けていく。

萃香が跳び上がり、振り下ろしパンチを掛ける。

リョウも跳び上がり、巨大な拳に向かって蹴りを放つ。

空中でパンチとキックがぶつかり合った。

萃香は上空へ僅かに吹き飛ばされただけが、リョウは勢い良く地面へ吹き飛ばされた。

なんとか着地を決めたリョウは萃香へと跳び上がり、そしてアツパー、両足蹴り上げ、足を掴んで地面へ投げ飛ばし、萃香が地面へ叩きつけられた直後、リョウの降下キックを決めた。

リョウはある程度距離を取り、次の攻撃に備える。

「鬼神「ミッシングパープルパワー」！」

今度は萃香自身が巨大化した。

「…………お前はピッコロか…………。」

巨大化した萃香の拳や蹴りが次々にリョウを襲う。

リョウが萃香の踏みつけを避け、背後に回る。

跳び上がり、丁度膝の裏目掛けて両足蹴りを放った。

萃香がバランスを崩し、倒れそうになる。

リョウはまた跳び上がり、バランスを崩した萃香目掛けて降下キックを決めた。

萃香は更にバランスを崩し、とうとう地面に倒れた。

「デカ過ぎると不慣れな事もあるぜ。おりやつ。」

リョウが萃香の目に軽く萃香の目に指を当てた。（軽く、と言っても本人の感覚だが。）

「ぎゃあああああ!!!」

萃香が元の大きさに戻る。

「何するんだコノヤロー！」

「自分から弱点をむき出しにするような奴に言われたくねーな。」

「鬼気「濛々迷霧」！」

萃香が黒い霧状になり、同時に大量の弾幕を放った。

リヨウが銃を取り出し、1秒に100発のペースで弾幕を撃ち落していく。

撃ち落せなかった弾幕は体を捻って避けていく。

リヨウの背後で黒い霧が集まった。

霧が萃香に変わり、萃香がパンチを放つ。

リヨウはギリギリで躲し、萃香に蹴りを掛ける。

蹴りは両手で掴まれ、萃香が一本背負いを繰り出した。

自身が回る事によって地面に倒れるのを防ぎ、着地するとそのまま萃香に巴投げを決めた。

地面に着く前に萃香が霧へ変化したと同時に大量の弾幕がばら撒かれる。

リヨウが銃を構え、弾幕を撃ち落していく。

リヨウの頭上で霧が集まり、萃香へと変化した。

萃香の振り下ろしナックルがリヨウのアップパーカットと正面衝突し合った。

リヨウは地面に立っていた為吹き飛ばされなかったが、萃香は空中にいた為空中に吹き飛んだ。

リヨウが空かさずサマーソルトキックを決める。

空中へ更に吹き飛ばされた萃香は再び霧となり、同時に大量の弾幕を放つ。

リヨウはまた銃弾で弾幕を打ち消していく。

リヨウの目の前で霧が集まり、そこに萃香が出現した。

萃香のラリアットをしゃがんで避けたリヨウは萃香を掴み、バツクドロップを決めた。

リヨウが少し距離を置き、萃香も立ち上がる。

「あんた凄いいじゃん！こんな人間と戦ったのは生まれて初めてだよ

「！」
「驚いたのはこっちだ。これだけ攻撃を喰らったつてのに、まだピンピンしているとはな。」

同時に冥界でも激闘が繰り広げられていた。
アダムが男の攻撃を受け止めていく。

一方で咲夜が遠方からアダムに当たらない軌道で男に向かってナイフを投げていく。

男は大柄な体に見合わない素早い動きで二人の攻撃を避けていく。
だが遠方の咲夜から投げられたナイフが男の左腕と右脇腹を掠つた。

更にアダムがストレート、フック、アッパー、左回し蹴り、右側面蹴り、左裏拳を決め、吹き飛ばした。

吹き飛ばされた男は空中で体勢を整え、着地してアダムに襲い掛かる。

「メイド秘技「操りドール」！」

しかし、男の目の前に散りばめられた大量のナイフに行く手を阻まれた。

男は一旦後ろへ下がり、迫り来るナイフを避けて行った。
ナイフを全部避け切った所でようやく頭上に蹴りの体勢の少年がいる事に気が付いた。

アダムの降下キックは男の小手に防がれた。

男の立っていた石畳の地面が陥没し、アダムは後方へ大きく跳び上がる。

「メイド秘技「殺人ドール」！」

一瞬で男の上下左右前後360度にナイフが出現した。それを男は避けようともせず、その場に立っていただけだった。

【トランセンダー循環開始】

大量のナイフが男にヒットする。
が、突き刺さらなかった。

直後、男の背後からアダムの跳び膝蹴りが決まった。

が、男が吹き飛ぶ事は無かった。

男がアダムの足を掴み、地面へ叩きつける。

そして、男がアダムを殴りつける。

一発では無く、何発、何十発も。

咲夜がアダムに当たらない軌道でナイフを数本投げる。

全てのナイフが男の肉体に弾かれた。

男がナイフを3本拾い上げる。

グサツ

「うがあああああー！」

1本をアダムに突き刺す。

1本を咲夜に向かって投げた。

(速すぎー！)

咲夜は音速の3倍で投げられたナイフを時を止めずに避けた。

咲夜の時を止めるのに掛かる僅かな時間が、ナイフが自分に当たるのに掛かる時間に比べて遅すぎたからだ。

男が咲夜へと駆け込みながら最後のナイフを投げる。

咲夜はこれも時を止めずに避けた。

直後、男の駆け込みストレートが咲夜にクリーンヒットする。

吹き飛ばされた咲夜は地面に倒れ、そのまま気絶した。

男はアダムの方へ歩き寄り、少年に向けて止めを刺すべく、拳を高々と挙げた。

「………… うくん………… いててて…………。」

妖夢が目を覚ました。

「確かあの時に負けて………… はっ！幽々子様は…………。」

ガバツと起き上がり、辺りを見回す。

少し離れた所で先程自分が戦った少年と見知らぬ男が戦っていた。

別の場所ではメイド服を着た女性が倒れている。

そして、自分の主である幽々子が西行妖の前で倒れていた。

更に西行妖の枝が何本も切り落とされていた。

「一体誰がこんな真似を…………。」

恐らく今戦っている少年か男のどちらかだろう、と妖夢は思った。

（あの人は私たちの異変を邪魔しに来ただけ………… あの人は悪い人じゃない！）

男が少年に止めを刺すべく少年の方へ歩き寄り、拳を高々と挙げたのが見えた。

「やあー！」

妖夢は男の方へ駆け込みながら刀を二本抜いた。

17 僅かな勝機

「やあー」

男が自分へ刀を2本持った少女が切り掛かってくるのを確認した。妖夢が2本の剣を同時に振りかぶる。

男は躲す素振りも見せず、両手をそれぞれの刀の軌道上に翳した。2本の刀はどちらも男の腕を捉えた、が、斬れなかった。

男が頭突き、4連回し蹴り、ナツクルを決め、吹き飛ばし、追い打ちを掛けようと追いかける。

妖夢は空中で体勢を整え、男の攻撃に備える。

男の拳と妖夢の2本の刀が空中でぶつかり合う。

しかし、男の力が圧倒的に強く、妖夢がそのまま押し飛ばされた。

男の拳には切り傷どころか腫れた痕跡すら無かった。

吹き飛ばされた妖夢はなんとか着地して体勢を整える。

男が更なる追い打ちを掛けるべく妖夢を襲う。

妖夢が正面から繰り出された男のストレートを体ごと右に避け、左の刀で胴を狙う。

男は自分の腹に向かって繰り出される刀を左腕で受け止める。

妖夢はそのまま右の刀で足を狙う。

男が僅かに跳び上がり、足元への攻撃を避ける。

そのまま両足蹴りを妖夢へ決めた。

不意に男が前へと吹き飛んだ。

男が後ろを見るとアダムが両足蹴りを決めた直後の体勢だった。

二人とも体勢を立て直し、正面からぶつかり合う。

男の止まらぬ連続攻撃に対してアダムは一度も攻撃出来ていない。

妖夢が背後から男へと駆け込み突きを繰り出した。

それに対して男が体を逸らしながら回し蹴りを繰り出す。

妖夢の突きは男に受け止められるが、男の蹴りは妖夢を吹き飛ばした。

アダムが隙を突いて男に下段回し蹴りを決め、地面に倒した。

そのまま踵落としを決めた。

踵落としはクリーンヒットしたものの男には大したダメージは無かった。

男がそのままアダムの足を掴み、地面へ倒す。

そして男の振り下ろしパンチがアダムに直撃した。

続けてもう一撃放つ。

アダムはギリギリの所で体を転がせて避け、男へ中段両足蹴りを当てた。

続けて妖夢が後ろから2本の刀で男の背中を裂いた。

背中に大きな切り傷が出来ていたが、致命傷には程遠い。

男が妖夢を掴み、妖夢をアダムへとぶつけた。

アダムはそのまま吹き飛んで地面に倒れると、妖夢が自分へ向けて投げ飛ばされたのを確認した。

それをどうにか避け、迫り来る男の攻撃に備えた。

男のストレートをしゃがんで避け、男へ肘打ちを掛ける。

男が肘打ちを受け止め、アダムへミドルキックを繰り出す。

アダムが蹴りを受け止め、男へローキックを繰り出す。

ローキックは男の足に当たったが、倒れなかった。

男がアダムを蹴り上げた。

アッパァ、2連上段蹴り、サマーソルトキック、両腕ナックルで地面に叩きつける。

跳び上がって繰り出される降下パンチを当たる寸前の所でどうか避け、距離を取る。

「やあああああ!!!」

妖夢が背後から男へと斬り掛かる。

しかし、敢え無く躲かれ、男から拳のラッシュを浴びせられた。

止めのボディブローが妖夢の腹にクリーンヒットし、そのまま妖夢が倒れる。

男はもう一発蹴り飛ばし、妖夢が気絶したのを確認すると今度はアダムの方を向いた。

「……………う、うくん……………」

幽々子が石畳の地面から体を起こしながら言う。

「……………ええと……………確かあの子に西行妖を切られて……………それを止めようとして……………あの子に負けちゃったんだっけ……………」
ドゴツ！

幽々子が何かしらの鈍い音を聞き、音のした方向を見る。

妖夢が正体不明の男に殴られて倒れている最中だった。

「妖夢っ！」

他に離れた所で倒れているメイド服を着た女性の姿も見受けられた。

男は更に妖夢を蹴飛ばし、今度は後ろにいた少年の方を向いた。

少年は体中がボロボロでも戦えそうにない様な状態だった。

「反魂蝶——八分咲——！」

幽々子から放たれた大量の反魂蝶が男を目掛けて飛んで行った。

不意に男が跳び上がった。

アダムが辺りを見回してみると、いつの間にか起き上がった幽々子が男へと反魂蝶を放っているのが見えた。

男は見事な身のこなしで避けていく。

アダムが跳び上がり、男へ跳び蹴りを繰り出した。

男は蹴りがヒットする寸前で受け止め、大量の反魂蝶へ向けて投げ飛ばした。

「しまったー！」

「危ない！」

幽々子が咄嗟に反魂蝶へアダムを避ける命令をした。

奇跡的にアダムに反魂蝶が当たる事は無かった。

反魂蝶は次々と男を襲っていくが、当たる事は無い。

すると、アダムが近くに転がっていた妖夢の短刀を見つけ、拾い上げる。

アダムは反魂蝶と共に男へと跳び上がった。

突き出される刀と拳が交錯する。

アダムはどうかダメージは無かった様で、そのまま反対側に着地する。

対する男には手の甲に切り傷が出来ていた。

男に出来た一瞬の隙を逃さず、反魂蝶が男へと向かっていく。

男は咄嗟に腕や脚を使ってガードを試みたが、本来の反魂蝶は戦闘が目的の技では無い。

反魂蝶は触れた者を殺す為の技であり、それには反魂蝶を触れさせるだけで良い。

男が地面へ足を着き、頭を抱えて、のたうち回る。

「ウゴアアアアアアアアアアアア!!!」

男の口から初めて出された言葉は、苦痛に耐える獣の様な叫びだった。

【異常信号感知 処理に多少時間が掛かります】

アダムが幽々子の方へ歩み寄って言った。

「幽々子、あの桜が吸収しているエネルギーを操る事は出来るか？」
「え？…… ええ、あの西行妖を操る事によって出来るわ。一体どうするの？」

「その莫大なエネルギーを利用して奴に止めを刺す事が出来る。他に方法らしき方法が無いんだ。」

「分かったわ、やってみる。そういえば貴方、名前は？」

「ありがとう。僕はアダム・アンダーソンだ。」

【異常信号中和完了】

男が頭を抱えていた手を退け、アダム達の方を向いた。

「復活が早かったか…… あの状態では避けられてしまうだろう。」

「貴方といい、あの男といい、私の能力が効かないなんて…… 何だか怖いわ……。」

(奴と同じ共通点…… 僕は確か……。)

「どうしたの？アダム君。」

アダムの思考が幽々子によって遮られた。

「いや、何でもない。」

そして、辺りを見回してみる。

自分のナイフ、ロープ、銃、そして魔理沙の箒が目に入った。

「幽々子、僕が合図したらあの桜からエネルギーを奴に向けて発射するんだ。」

アダムはそう言うのと男との距離10mの所まで歩き、立ち止まった。

男もその場に立ち止まっている。

アダムと男が同時に互いの方向へと駆け込んだ。

互いに跳び蹴りを出し合う。

男との距離が1mになった所でアダムが地面に着地し、男の跳び蹴りを受け、反対側へ抜ける。

そこにあつた自分の銃とナイフとロープを取り、男目掛けて銃を連射する。

男は発射時に僅かに出る余剰光に反応し、銃弾を避けていく。

男へ駆け込みながら左手で銃を撃ち、右手でナイフを投げた。

男はナイフを手刀で体の外側へと軌道を逸らした。ナイフの柄の底の部分はロープが繋がっていた。アダムがロープを波打たせる。

ロープが男の体を捉え、男に巻き付く。

ロープを手元に引き寄せながら銃を連射する。

男は動けないが為、全発ヒットしてしまう。

そして、アダムの蹴り飛ばしが決まった。

男の体にはまだロープが巻き付いていた。

アダムがジャイアントスイングで男を上空へと投げ飛ばす。

直後、アダムが魔理沙の箒を取り、エネルギーを箒に込め、男へと投げ飛ばした。

投げ飛ばされた男は箒を掴む。

アダムが男目掛けて跳び上がった。

男はアダムへ回転蹴りを繰り出したが、避けられた。

回転蹴りを掻いくぐって避け、箒と男を掴む。

箒へ再びエネルギーを込める。

男と共に上空へ舞う。

男はアダムを離そうともがいていたが、背中のアダムには大したダメージは与えられず、更にアダムが背中からナイフを突き刺し、もがく力が減少する。

アダムが箒を持ったまま男と共に降下を始めた。

自由落下と箒の加速による速度は少なくとも音速の2倍は超えていただろう。

男は今でももがき続けているがその努力が報われる事は遂に無かった。

アダムが地面に着く瞬間に男を離し、自分だけが方向転換し、地面すれすれの所を飛んだ。

男は成す術も無く頭から地面に落下し、クレーターを作り上げた。

「今だ。」

幽々子が西行妖を操り、西行妖に蓄えられた春度を一点に集中し、男へと放出した。

男は起き上がろうとするが、その前に西行妖の蓄積したエネルギーを正面からまともに受けた。

男は膨大な熱エネルギーによって一瞬で気化した

18 偽名

「ようやく終わったか。幽々子、幻想郷を元に戻してくれ。」

「いいけど、西行妖を切った事を謝ったらね。」

「悪かったな。」

「…… うくん…… ごめんなさいって言って。」

「…… ゴ、ゴメンナサイ……？」

アダムは訳が分からず棒読みだったが、幽々子はそれをシャイな少年の仕草と勘違いして微笑んだ。

「フフツ、それでよろしい。」

「僕はもう地上に戻る事にする。それじゃあ……。」

「少し待ってもらえるかしら？」

そう言ったのは幽々子でも妖夢でも咲夜でも無い、違った女性の声だった。

声のした方向を見ると何時の間にか一人の女性がそこに立っていた。

女性は金髪のロングヘアで紫のドレスを着ていた。

「紫？久しぶりね。今までどこに行っていたの？」

「幽々子、それは後で説明するわ。そちらのアダム・アンダーソン君に用があるの。」

「何だ？」

「自己紹介がまだだったわね。私は八雲紫。この幻想郷の管理人よ。要件を伝えるわね。ここ数か月の間幻想郷の結界が不安定なの。それについて何か心当たりは無いかしら？」

暫く考え込む。

「…… 分からないな。霊夢から聞いたが、僕がこの世界に来る直前に白い閃光がしたと言っていたが、それ位しか……。」

「そう…… 私も外の世界へ行つて手掛かりを探してみたのだけど…… 外界では人間達が戦争をしているだけよ。」

「こちらも幻想郷へ来る以前の記憶は無いんだ…… それとこのリュックの中にある持ち物に不明な物が一つだけあるんだ。」

「それを見せてくれないかしら？」

アダムはリュックから大量の立方体を取り出した。

「これは……」「ユニバーシウム」で出来ているわ。」

「その「ユニバーシウム」について説明してくれ。」

「私も余り分らないけど。数か月間外の世界へ行つて少しだけ知つた事よ。ユニバーシウムと言うのは物質でも反物質でもない、いわばその中間に当たる物質の一種なの。地球上には僅かにしか存在しないと言われているわ。悪いけどこれ以上は何も分かっていないわ。」

「霖之助はこれが何らかの容器だと言っていた。何故わざわざそんな希少な物で作ったのか……。」

「ところで紫、何で結界が不安定になったのかは分かったの？」

幽々子が話を持ち出した。

「幻想郷にも外の世界にも手掛かり無しよ…… 外の世界に至つては機密管理がしっかりし過ぎよ。」

紫が深いため息をつく。

「それとアダム君、貴方外の世界から来たのよね。貴方の希望で外の世界に戻す事も可能なのだけど……。」

「記憶が戻るまで暫く幻想郷に留まろうと思つているのだが。完全な記憶喪失でも暫く時間が経てば戻る事もあるからな。」

「そう。戻りたい時は何時でも言つていいわ。」

一方、地上のとある森では、

「ハア、ハア…… あんた凄いじゃん。」

「それはこっちの台詞だ。」

リヨウと萃香は未だに戦い続けていた。

「悪いがもう決着を付ける。」

「望む所さ。」

互いの距離は3m。

互いに足を踏み込み、地面を勢いよく蹴る。

二人の拳が正面から激突する。

更に二人が同時にもう片方の拳をぶつけ合う。

「だああああっ!!!」

「うおおおおっ……!!!」

二人の拳の攻防が暫く続いた。

「はあっ!!!」

「でやっ!!!」

二人の拳が正面衝突し、互いに吹き飛ばされた。

二人とも体勢を整えて着地し、再び互いに飛び掛かる。

二人の距離が残り50cmを切った所で、萃香の目の前からリヨウの姿が消えた。

「悪いね。」

上空からリヨウの膝蹴りが萃香の頭にクリーンヒットした。

そのまま萃香が倒れ、リヨウはやっと終わった、とため息をついた。

「い、いてて…… 参った。あたしの負けでいいよ。」

「…… そうだ、お前の仲間の鬼達を幻想郷に戻す方法が他にも有るかもしれないぞ。」

「私が起こそうとしていた異変が良く分かるな。それは本当か? やつてくれるのか?」

「ああ、実際に出来るかどうかは分からないが、詳しくは明日の夜11時にこの場所に来てくれ。ところで仲間達を戻すにはどれだけ時間が必要だ?」

「うーん…… 3日位かな?」

「…… あいつらには多少無理をしてもらおうかもしれないが、一応や

れるだけやってみよう。」

「ありがと、お前つていい奴だな。今度一緒に酒でも飲もうよ。」

「酒は出来るだけ泡盛が良いな。」

「あとあんたの名前は？」

「名前、か。」

リヨウは一瞬考え込んだ。

「高橋オークだ。だが悪いけど顔は見せられない。明日の夜11時だ。」

リヨウはそう言う森の中に消えて行った。

リヨウは自宅のディスプレイに向かっていた。

『それで、頼みと言うのは何だ？』

「「スペーススマシン」の出力を1.5倍位上げられないか？無理だったら無理で良い。」

『そうか。少し待ってくれ。』

ロウが席を立って何処かへと行ったのがディスプレイに映っていた。

暫くしてロウとは別の二人の男性がモニターに現れた。

『久しぶりだね。リヨウ。』

『所で何の用だ？』

「カイル、ドニー、今から説明する。」

カイルという人物は長めの金髪で青い目をした中性的な白人の青

年で、ドニーという人物はリヨウと同じくらいの歳の褐色の肌をした銀髪の男性だった。

「ある妖怪の仲間を助けてやりたくて、そいつらを幻想郷に戻す為に結界を安定させるエネルギーに加え、他人に気付かれなくする為のエネルギーが必要になる。」

『成程。それにはどれくらいの期間が必要かい？』

『確かに非常事態の為に成るな。』

「3日だ。エネルギーは1.5倍位あれば十分な筈だ。」

『なんとか3日出来そうかもしれないが、「管理軍」に襲撃されないか心配だけど、ドニーさん、どうしますか？』

『私は一応賛成だが、判断はお前に任せる。』

『うむ…… やりましょう。』

「そうか、二人ともサンキュー。」

『ほんの3日程度ならどうにかなるさ。』

『これも最悪の事態の為だ。』

一方、地域名アジアーカルイザワの研究施設で、

「フリードマン1号からの信号が途絶えました。しかし、発信機をアンダーソン1号に取り付けていれば何か分かったかも知れませんね。」

「…… 失敗か。アンダーソン1号はいずれにせよもうとつくに“壊れている”筈だ。次は数人の部隊を編成して計画を実行させよ

う。」

「ですが、それには以前の数倍のエネルギーが必要ですよ？それはいかがされますか？」

「6月に起こるスーパームーンだ。これまでの研究で月が満月、新月の場合では結界が不安定になる傾向が高い。スーパームーンであれば結界が更に不安定になる計算結果が出ている。」

「3か月後ですか…… 思う様に進みませんなあ。」

「それだけ「ユニバーシウム」には価値がある。」

「次は「ディックシリーズ」に成功の可能性があります。他の人員はどうしますか？」

「他は“普通の「トランセンデンド・マン」”にするさ。あと、せめて「エクストラ」を一人は入れたい所だ。」

19 悪夢

幻想郷にようやく春が来た。

「今回もお前の手柄か。凄いなアダム！」

博麗神社では春雪異変の解決を祝う宴会が開かれていた。

「言っとくけど、宴会の後片付けやるのって私なのよ。」

「今はそんな事忘れて飲もうぜ。」

「じゃあ後片付け手伝ってね。」

「……ところで、アダムはどうしたんだ？」

「何だか具合が悪いって。どうしたのかしらね。」

「それって以前レミリアの奴が異変を起こした時もそうじゃなかったか？」

「そう言えばそうね。ちょっとアダムの様子を見て来ようかしら。」

霊夢はそう言って神社の室内で横になっているアダムの所へ行つた。

「アダム、調子は大丈夫なの？」

「……大丈夫だと言っている……。」

そう言うアダムだが、額には汗が滴っていた。

「そう言っても大丈夫には見えないわ。前にレミリアが異変を起こした時もそうじゃなかった？」

「……今は放っておいてくれ……。」

「本当にどうしたのよ。正直に言って。貴方の力になりたいの。」

「放っておいてくれと言っているだろう!!!」

突然、アダムが大声で怒鳴った。

それはアダムが初めて見せた感情でもある。

霊夢がそれに驚き、声を失う。

それを聞いた、宴会に参加している者達が一斉に振り向く。

「……すまない、霊夢……でも今は一人にしてくれ……いざれ落ち着いたら話す事にする……。」

「私もごめん……でも私も心配なのよ……落ち着いたら是非話してね……。」

アダムが体を寝かせ、目を閉じた。

「なあ霊夢、今どうしたんだ？」

魔理沙がアダムの叫び声を聞きつけて来た様だ。

「アダムが今は放っておいてだって。」

「折角アダムが一人で解決した異変なのに…… 楽しくないな……。」

ある少年が廊下を走っていた。

まるで何かから逃げる様に。

廊下の右ドアからロボットが一体出て来た。

ロボットが少年に対して銃を向け、少年はロボットへ飛び掛かった。

ロボットが引き金を引いたのと少年の拳がロボットを使用不可の状態に破壊したのは同時だった。

砕かれたロボットは力なく倒れ、少年の腹には銃から発射された麻酔弾が突き刺さった。

少年は慌てて麻酔弾を引き抜こうとしたが、既に麻酔弾中の麻酔の半分が自分へと注入されていた。

少年は麻酔の効力に抗い、ただひたすら逃げ続ける。

ロボット達はひたすら少年を追いかける。

廊下を走り続けるが、行き止まりに差し掛かった。

(もうこんな事は嫌だ！)

少年は突き当りに向かってタツクルした。

タツクルは突き当りの壁を砕き、少年がそのままそこにあった部屋へと入り込む。

しかし、少年は逃げる事も忘れて立ち止まった。

目の前には直径1m、高さ2mのガラスのシリンダーがあった。

シリンダーの中には透明な液体と、人間が一人いた。

「……！」

服は無かった。

首の後ろ辺りにシリンダー上部とを繋ぐケーブルがあった。

身長170cm位の青がかった黒髪の少年だった。

つまり自分と同じ姿である。

不意に背中に何か突き刺さる感触がした。

それも何十回、何百回と。

後ろを振り向くと、何十台ものロボットが自分目掛けて麻酔銃を撃

ち続けていた。

少年は意識が遠のいていくのを感じ、やがて何の抵抗も無く倒れた。

「……はっ！」

アダムが起き上がった。

「……また嫌な夢を見てしまった……。」

自分が寝ていた隣では霊夢と魔理沙が寝ていた。

外を見ると既に宴会は終わっており、月が空に昇っていた。

「……僕は誰だ？」

その声には苦しみが含まれていた。

話は次の日の夜中に移る。

「よう、萃香。来たか。」

ネックウオーマーとパーカーに顔を隠されたりヨウが言う。

「それで、どうすれば良いんだ？」

「期日は今から3日の間だ。後はお前のやりたい様にすれば良いだけだ。」

「ホントに？」

「知り合いに頼んで幻想郷の結界に……何というべきか……特殊な細工したものでね。噂の異変解決の専門家達にも気付かれないで済む。」

「本当にありがとう！オーク。」

（オーク、か……そう言えば久しぶりに聞いた名前だな。）「それとあと一つ、もし俺が協力して欲しいという依頼をした時には必ず協力を頼む。」

「いいよ。仲間達にもよろしく言っておくよ。」

「そいつはどうも。」

「ところでオークってさ、何で顔が見せられないんだ？」

「いわゆる企業秘密って奴だ。悪いが俺はここで。」

リヨウは闇に塗りつぶされた森の中へ溶けて行った。

「萃香？いつの間に帰って来たの？」

丁度紫がスキマを開き、萃香の前に降り立った。

「うん、まあね。」

「今の人誰？」

「オークって言うんだ。人間だけど私の仲間を助けてくれたいい奴だよ。力も私より強かった。何故か顔を見せてくれないけど。」

「そう……………」

紫は暫く考え込み、やがて口を開いた。

「藍、出てきてくれる？」

突如、何も無かった空間に一人の女性が現れた。

「どうしました？紫様。」

紫を様付けして呼んだ女性は金髪で8本の尻尾が生えた青と白を基調とした服を着ていた。

「人間の様子を暫く観察して欲しいの。特に怪しい者がいたらその人物は要観察よ。」

「分かりました……………」

0 永夜異変

20 デイツクシリーズ

春雪異変から1週間後。

地面を勢い良く拳で叩き、足で土を動かす。

ナイフを取り出し、地面を斬り裂く様にナイフを捌く。

銃を取り出し、地面に何十発、何百発と打ち込んでいく。

拳のラッシュと銃弾の嵐が固い地面をほぐし、次々と出される蹴り技とナイフによる斬り裂きが地面をなだらかにする。

ペースを少しずつ上げていく。

「こんなものか。」

「もう終わったのね。」

「あとは種撒きだな。」

種はトウモロコシの1種類のみだ。

トウモロコシの種を一掴みする。

種を一粒ずつ投げていく。

投げられた種は等間隔で地面に程良い深さに突き刺さる。

十数分後、トウモロコシの種を撒き終えた。

「ふう、終わったか。」

「水やりはしなくていいの?」

「ここの地下に水脈があるからそれで大丈夫だ。この程度の作物の量であれば水脈が枯渇する事は無いだろう。」

「それと、何故トウモロコシ?」

「成長が早い上にある程度厳しい環境でも育つし、作物重量当たりに必要な水量が少ないという理由だ。」

「ふくん。でもどうして農業をする気になった訳?」

「安定的に収入を得る為だ。狩猟は安定性が低いからな。」

「それで、これからどうする? 作業が早いと暇な時間も多くなるわね。」

「そう言えばこの前リョウに暇な時に来てくれ、と言われたな。どう

する？行くか？」

「リョウも随分暇なのね。どうせ神社には誰も来ないし、行こう。」

二人は里へと向かって行った。

「リョウ、居るか？」

二人はリョウの経営している和洋服店に来ていた。

「何時でもいるぜ。よく来たな。コーヒーでも飲むか？」

3人は店にある椅子に座り、雑談し始めた。

そして、話題が変わる。

「ところでアダム、最近作った服があるんだが、着てみるか？」

「どんな服だ？」

リョウが店の奥に行き、何かを取り出し、戻って来た。

「これだ。カッコいいだろ？」

リョウが見せたのは何の特徴も無い黒いスーツと白いYシャツとサングラスだった。

「これは本来MIB職員しか着る事を許されない制服だ。」

「その、MIBって何？」

霊夢が聞く。

「外の世界では千人を超える宇宙人が住んでいる。それも一般人には知られずに、だ。」

アダムと霊夢は見入った様に聞いていた。

「その宇宙人が何かトラブルを起こした時、これを解決するのがメン

インブラック、通称MIBだ。しかし、彼らの活躍を知る者彼ら自身以外には居ない。」

リヨウは普段とは違った真面目な顔で話していた。

「まさか僕の居た世界に宇宙人が存在していたとは……だが、リヨウは何故それを知っているんだ？」

「外の世界って凄い…… アダムの言う通り、知っている人は居ないんでしょ？」

リヨウが笑い顔で言った。

「ハハハハ、悪い、冗談だ。昔にそんな映画が作られていたんだよ。」

「何だ、冗談か……。」

「アンタを信じた私が馬鹿だったわ。」

「ちよ、霊夢、それどういう意味だ？」

「それ位分かりなさいよ。」

「アダム、俺ってそんな評判なのか？」

「分かん。それよりこのスーツ、スーツにしては動きやすいな。」

アダムは何時の間にかリヨウから渡されたスーツを着ていた。

「だろ？本来ならデザートイーグルを持たせるか、それともニューラライザーとスペースガンを持たせたい所だが…… 無いから仕方ない。代金はタダでいいぞ。」

「そう言えば毎回タダだな。」

「別にこの服は俺の趣味で作った物だ。それに幻想郷でこんな服を買う奴は居ないしな。」

そこへ誰かが入って来た。

「ようリヨウ、遊びに来たぜ。」

「リヨウ、注文は出来ているか？」

入って来たのは10代半ばの金髪のロングヘアーの少女と、水色のロングヘアーと同じく水色を基調とした服を着た女性だった。

アダムは二人を知っている、というか親しい。

女性の方は上白沢慧音という半人半妖だ。

慧音についてはアダムは買い出し等で度々会う事が多いのだ。

「魔理沙、お前も暇だなあ。慧音、注文は終わったぜ。」

「よう、霊夢、アダム。というかアダム、その服一体何だ？」

「あれっ、霊夢とアダムじゃないか。お前達も来ていたのか。ところでアダム、その服は一体……。」

「さっきリヨウに貰った。中々良いぞ。」

「リヨウ、お前いつも変な服を作っているよな。」

「へ、変か？カッコいいだろ。なあ慧音。」

「私も別に格好良いとは思わないぞ。」

「……。」

リヨウは完全に沈黙した。

「ところでアダム。」

慧音が言った。

「何だ？」

「この前霊夢に怒鳴っていたが、どうかしたのか？」

「そういう霊夢からあのおとき気分が優れないとか聞いたぞ。」

「……結局話していなかったな……折角だしこの場で話そう。」

アダムはため息をつき、4人に話した。

「最近嫌な夢を見る。自分がガラスシリンダーの中に居て、そこから外へ連れ出され、背中に妙な機械を入れられる夢だ。」

「それって、背中あの古傷？」

「恐らくそれかもしれないな。そしてもう一つ、自分が何かから逃げていて、ガラスシリンダーに入ったもう一人の自分が居た夢だ。」

「……シリンダーにもう一人自分が入っていた……まさか……。」

「リヨウ、どうしたんだ？」

慧音がリヨウの独り言に気付いていたらしい。

「ん？何でも無い。」

「一体僕は誰なのか……いつもそう思うよ。」

「大丈夫よ、きっと分かるわ。」

「だと良いが……。」

「もう少し楽天的に考えようぜ。」

「ディック中佐、予定より早く〝完成〟しました。」

「ほう、「ディックシリーズ」が遂に出来たか。それで、精神制御はどうだ？」

「それが……。」

ポールが黙り込むと共に自分の携帯端末の画面を見せた。

画面には手術室の様な所で暴れ回る少年の姿が映っていた。

身長170cm位、深い赤の目と赤がかった黒髪が特徴的だった。

『放せ、ゴミ共！貴様らの命令など聞くものか！』

少年を抑え込もうとするロボット達が次々に壊されていく。

すると、大柄な男が一人、部屋に入って来た。

『何だ貴様！』

『こちらの命令に従え。さもなければ貴様は〝不良品〟として処分する。』

『俺を〝物〟扱いするな!!!!』

少年が男に殴り掛かるが、男は呆気無く少年のパンチを受け止めた。

次の瞬間、少年にボディブローが決まった。

少年はそのまま倒れた。

「と、こんな感じですか。どうしますか？」

「あと3か月弱はある。それまでに精神制御はある程度出来るだろう。」

アダム達はそれぞれ帰り、リヨウは自宅のディスプレイに向かっていた。

『今回は何だ?』

「以前話したアダムって奴の事に関係あるんだが、「管理軍」のクローンや人体蘇生に関する研究を調べて欲しい。」

『良いけど、何故だ?』

「アイツが変な夢を見るらしくて。それが、自分や他の自分がガラスシリンダーに入っている夢を見るそう。」

『それはとても奇妙だな。それがひよっとしたら「管理軍」の極秘計画に繋がる可能性が有るといふ事か。調べておくよ。』

「そういう事。俺からはこれだけだ。ロウ、お前からは何か無いか?」

『そうだな、奴らが「エネルギー」や「インフォームION」の操作技術が上がってきている。最近では結界の外部どころか内部も分かるレーダーが完成したらしい。』

「そうか……もう暫く俺は一人で頑張る事になるか……超過労働手当を貰いたいぜ……。」

『エネルギーも金も労働力も何もかも不足しているんだ。悪いけど手当は……。』

「……クソツ! まあ「管理軍」とやり合った結果だからな……。」

21 動き出す者達

春雪異変から3か月後。

空には普段よりも一際大きな満月が昇っていた。

幻想郷の何処かの竹林にて。

「な！美味いだろ？」

「美味しいけど、アンタ、これを利用して何か企んでるんじゃないでしょうね。」

「そ、そんなまさか…… 料理が好きなもので店を出してるまでですよ。」

「…… 本当かしら？」

「声の微妙な変化によれば本当だ。」

「お前、そんな事も分かるのかよ。スゲーなあ！」

「フオ、フオローありがとうございます。」

「しかし、この、八目鰻というのか、その旨味とタレの甘味が見事に効いているな。」

「だろ？しかしお前感情とか滅多に見せないくせに食い物はやたら美味そうに食うよなあ。」

アダム達は魔理沙に紹介された鰻屋（屋台）に来ていた。

店主はミステリア・ローレライという妖怪だ。

「しかし、今日は一段と月が輝いているな。」

「スーパームーンだ。月は地球を公転しているが、その軌道は完璧な円では無い。周期的に僅かに近づいたり離れたりする。今日はその最も近づいている時だ。」

「そんな事がよく分かるわね。」

「鈴奈庵に外の世界の本も置かれていてな、良く読んでいる。」

「あそこは私も行っているが、科学に関する本は正直難しいな……。」

「科学と言うのは不可解な物を理解する為に必要な過程の学問だ。知識そのものよりも考え方が重要だ。」

「ふくん。」

正直言つて、霊夢、魔理沙、ミスティアはアダムの話をいまいち理解していなかったが。

不意にアダムが黙り込んだ。

「……………」

「どうしたの、アダム？」

「もしましや異変か？」

「多分な。この竹林の奥でエネルギーを察知した。」

「でもどんな影響が出るのかしら？」

「分からないが、幻想郷中に影響が出ない内に防ぐのが一番だ。霊夢、ついで来てくれ。魔理沙、君はこの事を皆に伝えるんだ。分かったか。」

「ええ。でももう行くの？」

「分かった、すぐに伝えて来る。」

魔理沙が咄嗟に箒に乗り、里の方角へと飛んで行った。

「武器は常に用意してある。早く行くぞ。」

「分かったわ。」

「あの、代金……………」

ミスティアが控えめに言った。

「ああ、これで。釣りは要らないよ。」

アダムが幾らかお札を出す。

霊夢は何か後悔する様な眼差しでそれを見ていたが、アダムへついて行くのを優先した。

二人はそのまま竹林の奥へと進んで行った。

「管理軍」の侵攻を確認！至急総員迎撃準備せよ！」

「ロウ、この侵攻をどう思う？」

「……まるで奴らがこの時を待っていたかの様な感じがします。」

「カイル、お前はどうか？」

「そうですね……「管理軍」の侵攻はまるで只の時間稼ぎ、あるいは注意を引き付けるかの様な……。」

「ロウ、他に分かった事は無いか？」

「他は……相手はこちらの防衛力ギリギリの戦力の様です。それ位しか……。」

「ロウ、お前は氷山の山の部分しか見ていないぞ。氷山の大部分は海の中に隠れているんだ。」

「つまり、ドニーさんが言いたいのは、カイルの言う通り奴らは本当の目的を隠す為に、攻めて来たという訳ですね。」

「そういう事だ。他のレーダーも調べてくれ。」

ロウは前方180度に広げられているモニターや計器類を見回したり操作したりした。

そして、一画面のディスプレイに目を付けた。

「これは……結界が異常に不安定になっている。カイル、どう思う？」

「月が満月あるいは新月の場合、結界が不安定化する傾向が高い事が確認されている。今日はスーパームーンだが、予測データよりも結界が大きく乱れているな。これは同時に幻想郷で異変が起きているのだろうね。そして「管理軍」はこれを利用して幻想入りするつもりの様だな。」

「またしても異変と「管理軍」の計画の同時進行か……早くリョウに伝えましょう。」

「しかし、こちらの防衛で精一杯な故、またしても人員が送れなくなってしまうな。リョウには幻想郷の住民にはばれても良いから「管理軍」の計画を阻止するように伝えろ。」

「了解……リョウの奴、また超過労働手当くれ、つて愚痴るだろうなあ……。」

ロウは通信ユニットを起動させた。

「予定通りに精神制御に成功しましたな。しかも同時に幻想郷で異変が起こるとは、何たる偶然。今度こそ「バースト」が成功すると良いですね。」

「さあな、私には何故か失敗する予感がする。根拠が有る訳では無いが、そう思うのだ。」

「デミック中佐は考え過ぎですよ。今回は「文化軍」への侵攻によって幻想郷へ人員を送る暇すら与えないという作戦ですからね。」

「何と言うか、何かを見落としている気がするのだ……。」

二人は4人の人物がスペースマシンに入ったのを見て確認した。

ポールは自信ありげな眼差しであるのに対し、デミック中佐はどこか腑に落ちない表情でそれを見ていた。

（一体何だ？以前何かを見落としている筈だ……まさか、いや、”あれ”は”失敗作”だ。今も”生きている”筈が無い。）

技術者が操作パネルにある「レポート開始」と書かれたパネルを押した。

そして、スペースマシンに入った4人が目の前から閃光が放たれると同時に消えたのを確認した。

リヨウは一人ですっかり暗くなった里を歩いていった。

「よう、慧音。今日も月みたいに綺麗だな。今度一緒にコーヒーでもどうだ？」

「その言葉聞き飽きたぞリヨウ……悪いがお前みたいな男は正直タイプじゃ無いんだ。」

「酷いねえ……。」

そして慧音が去って行くと、通りには誰も居なくなった。

「それにしても、また一人か……奴らに対する総力での防衛って事なら仕方ないが……。」

リヨウは立ち止まり、深呼吸した。

（異変は……あつちか。）

リヨウは一人で竹林へと向かい始めた。

霊夢はアダムに対して複雑な感情を抱いている。
親近感や好意はあるが、それと同時に恐怖すらある。
アダムは霊夢にとっては謎である。

人間の筈の彼は妖怪ですら手におえない力を持っている。
いかなる状況でも冷静で、すぐに理解する程の頭脳を持っている。
彼が笑うのを見たことが無い。

彼が泣くのを見たことが無い。
彼が喜ぶのを見たことが無い。

霊夢はアダムの「怒り」以外の感情を見たことが無い。
そして、その怒りが徐々に高まり、いつか爆発したら……。

「霊夢、どうした？」

霊夢の思考はアダムの一言によって遮られた。

「……えっ？ いや、何でもないわ。」

「早く行くぞ。異変はもう起こっている。」

アダムが空を見上げた。

霊夢がアダムの視線を辿って見えたのは、先程とは違った満月だった。
ただでさえ大きかった満月が、さつきよりも大きく見える。

色も何だか違う気がした。

「……誰か近くに居るな……。」

「……え？」

霊夢も精神を集中させた。

「……確かに前に誰か居るみたいね。」

突然、アダムが何も言わずに疾走を始めた。

それと同時に、前方からアダム目掛けて大量の虫が襲い掛かる。

だがアダムは武器を手取る事も無く、虫の大群目掛けて駆け込んでいく。

アダムが何も無い虚空へ拳を突き出した。

正確に表現すれば、“空気のある”空間へ拳を突き出した。

音速を超えた拳が衝撃波を生み出す。

衝撃波は小さな虫の大群の一部を吹き飛ばし、一部を失神させ、一

部を錯乱させた。

今度は左右から虫の大群が襲い掛かって来た。

地面を踏ん張る足に力を込め、地面を思い切り蹴り込む。

アダムは音速を超えるスピードで虫の大群を躲し、この虫達を操る張本人へ駆け込んで行った。

0.3秒後、目の前には緑髪でショートヘアの、暗い茶のマントが特徴的な少女がいた。

アダムの裏拳が少女の側頭部を勢い良く、そっと打ち込んだ。

少女は成す術も無く倒れた。

「アダム、大丈夫？」

霊夢がアダムの戦闘が終わったのを見て、駆け寄った。

「如何という事は無い。」

「この子、虫使いの妖怪ね。どうやら満月で活性化したみたいだけど、今は急ぎましょう。」

二人は更に竹林の奥へと足を踏み入れた。

「……………という訳なんだ。」

魔理沙は紫にアダムと霊夢が異変解決に行った事を話した。

「あの二人、随分無茶をするわね……………異変が起こっているのは私たちも分かっているわ。ただ、今回の異変はいつもより厄介そうだから私の方でも協力者を集めといたわ。既に紅魔館の主とその従者、幽々子と妖夢の二組には頼んでおいたわ。私は藍と行くつもりだけど、貴

方はどうする？今回一人だけの行動は危険と見たわ。」
「そうだな……アリスの奴と行くかな。」

魔理沙は箒に跨り、魔法の森へと向かった。

22 4人の侵入者

竹林の何処かで。

異変を解決しようとする場所へ向かっている者が二人、それを阻止しようとしている者が二人いた。

「霊夢、分かるか？」

「ええ、二人居るみたいね。」

「僕は正面にいる奴をどうにかする。霊夢は右の方に居る奴を頼む。」
「分かったわ。」

アダムが右手を挙げる。

そして、腕が下ろされたと同時に、アダムの足は地面を力強く蹴り、霊夢の足は地面から重力に逆らって離れた。

アダムの目線には紫のロングヘアーで制服姿の兎の耳が特徴的な少女。

霊夢の目線には黒髪でピンクのワンピースを着たこれもまた兎の耳が特徴的な少女。

アダムはその少女へ向かって走り出し、霊夢はその少女へ向かって飛んで行く。

追い掛けられる少女達はどちらも後ろへ下がっていく。

アダムが銃を取り出し、霊夢は手を前に翳した。

銃口から音速の5倍を誇る銃弾が発射され、掌から大量の弾幕が放たれる。

追い掛けられる少女達も応戦すべく弾幕を放っていく。

アダムと霊夢は少女達によって互いが見えない位置にまで離れた。

「待ちなさいーいー！」

これは霊夢が追い掛けている少女に対して言った事だが、相手からは返事が無い。

その代わりとでも言うかのように少女からは霊夢に向けて弾幕が放たれていくだけである。

霊夢はそれを見事な身のこなしで避けていく。

霊夢も負けじと躲しながら弾幕を撃ち返す。

霊夢の放つ弾幕は少女に向けて軌道を曲げていく。

少女がその量と速さに翻弄され、がむしやらに避けていくが、全てを躲しきれない。

ホーミング弾が数発当たって怯んだのを確認した霊夢は、今度は弾速の速い弾幕に切り替え、それを放っていく。

少女はまたしても躲しきれずに数発当たり、怯む。

「霊符「夢想妙珠」ー！」

霊夢の出したスペルカードは少女の放った弾幕をかき消していく。

「エンシエントデューパー」ー！」

少女も負けるものかとスペルカードを放った。

ぶつかり合う二つの弾幕。

空中でどちらも爆散した。

「観念しなさいー！」

霊夢が爆炎の中から飛び出し、少女へと弾幕を放った。

「しまったー！」

少女が気付いた時は遅く、既に何十発もの弾幕が自分にぶつかっていた。

少女はそのまま倒れた

「ふう、もう気絶したなんて呆気ないわね……はっ！」

霊夢はアダムと離れてしまった事によく気が付いた。

霊夢は来た道を辿り、アダムの方へと向かって行った。

「止まれ。今降伏すれば後悔しないで済む。」

アダムはそう言いながら少女へ向けて銃を放っていく。

ちなみに今のアダムの格好と言えばリョウウから貫つた上下黒のスーツと黒いサングラスであるから普通の人から見れば相当な威圧感だろう。

少女に対しては余り効果は無い様だが……………。

少女は返事もしないままアダムへ弾幕を放っていく。

狭い間隔で生えている竹を足場に、体を回転させながら避けていく。

(霊夢と離れさせて戦力を分散させる作戦らしいが…………… 大して意味は無いな。)

「幻波「マインドブローイング」！」

少女から初めて発せられた言葉はアダムへのスペルカード詠唱だった。

次の瞬間、アダムは目の前が揺さぶられる錯覚に見舞われた。

それどころか耳鳴りや赤系統の色が目映る幻覚まで起こる。

そんな中で自分に向かって放たれた弾幕をアダムは見逃さなかった。

弾幕の速度は音速の3倍。

(うーむ、幻覚で見え辛くて避けにくいな。)

咄嗟に体を後ろに反らせ、迫り来る弾幕を避けていく。

最後の一発を躲した所で、体が地面に着きそうになったのを手で体を支え、後ろに回って着地した。

(この幻覚は…… 光や音の波長を変えているのか。)

「散符「インビジブルフルムーン」！」

アダムの幻覚はまだ消えぬまま次のスペルカードが放たれた。

弾幕が波紋状に広がる。

次の瞬間、弾幕がアダムの目の前から消える。

再び少女から弾幕が波紋状に広がる。

次の瞬間、何も無い所から弾幕が出現した。

(これは…… 光を屈折させて見えない様になっているのか。)

出現した弾幕を体を捻って避けていく。

そして、弾幕を躲し切った所で20m程離れた少女の目が赤く輝いた様に見えた。

次の瞬間、アダムの視界から少女が消えた。

「月眼「テレメスメリズム」！」

弾幕が左右からアダムへ向けて飛んで行く。

幻覚によって軌道が正確に見えない。

アダムは銃を左手に持ち、ナイフを取り出して右手に握った。

銃弾と斬り裂きで弾幕をかき消していきつつ体を捻って避ける。

(…… 不思議だ。幻覚があるというのに相手の場所が何となく分かる。)

何故分かるのか、今のアダムには分からなかったが、抽象的なイメージで例えるとエネルギーを感じていた。

電磁波を目から取り入れ網膜で変換する「視覚」とは違う。

音波を耳から取り入れ鼓膜で変換する「聴覚」とは違う。

臭い分子を鼻から取り入れ鋤鼻器で変換する「嗅覚」とは違う。

味を口から取り入れ味蕾で変換する「味覚」とは違う。

圧力や温感、冷感等を肌から取り入れそれぞれに対応した感覚器官で変換する「触覚」とは違う。

アダムにはそれは感覚器官を通さずに直接脳がダイレクトに感じ取っている、いわゆる「直感」に近いものだった。

アダムが地面を蹴った。

その反動で少女との距離を詰める。

「し、しまった!」

少女は何の対応も出来ずに目の前の少年から首にナイフを突きつけられた。

対応が出来なかったのは少年が自分の位置が分からないであろうと思いついた結果である。

「目的は何だ。」

「……言うもんですか……。」

次の瞬間、少女の首に手刀が当てられた。

少女はその場に崩れ、気絶した。

「アダム!大丈夫?」

霊夢がもう一方を倒した様でこちらへ戻って来たのだろう。

「大したことは無い。所で何か奴らについて分かった事はあるか?こちらは何も話さなかった。」

「何も聞き出せなかったわ。」

「そうか……だが場所は分かっている。急ぐぞ。」

二人は竹林の更なる奥へと足を踏み入れて行った。

竹林に白い閃光が走った。

次の瞬間、閃光のした場所から男が4人現れた。

しかし、それを見た者は誰も居ない。

「異常は無いという事で、早速計画を実行しようか。」

「それでロブ、肝心の「スペースボム」は何処だ？」

ロブと呼ばれた人物はリュックから携帯端末らしき物を取り出す。

「ええと……ここから北へ4kmだ。更に北へと移動している様だ。バエル、周辺に居る奴らの数や位置は分かるか？」

バエルと呼ばれた人物は“何も見ず”に目をつぶり、暫くして目を開いた。

「スペースボムを持っている奴が2人、離れた所に2人組が3つ、そいつらが向かっている所に2人、所々気絶しているのが3人、そしてどうでも良いがここから更に離れた所に3人だ。」

「手っ取り早く終わらせようぜ。」

「まあ落ち着け、マルク。出来るだけ奴らに気付かれない様に慎重に、そして素早く倒すんだ。」

「分かっているぜ。」

マルクと呼ばれた人物は竹林の中を駆けていった。

「さて、俺たちも行くか。」

「ああ。だがハモンド、獲物は横取りしないでくれよ。」

「獲物つつても殺す訳にはいかないけどな。」

リョウは竹林の中を一人で歩いていった。

「さて、そろそろ奴らが動き出した頃かな。奴らが一人になった所を狙うか。あと援護も必要だな……萃香は、今から呼びに行っても

遅いし、アダムや霊夢、魔理沙やスキマ妖怪、吸血鬼や幽霊達は気付いていないうえにここから更に離れていくし、他に近くに居て強そうな奴…… そうだ！」

リヨウはこちらの行動が誰にも悟られない様に動き始めるのだった。

23 欠陥品

アダムが竹林の中を突き進んで行き、霊夢がそれを追い掛ける。「もうそろそろかしら。」

「あと500m先だ。ここからでは僅かな傾斜等で見えないが。」
「よく見えないのに分かるわね。」

「何故だか分からないが、そう言える…… 我ながら不思議だ。」
「そう言いながら一か所へと突き進んで行く。」

「見える」訳でも無いければ「聞こえる」訳でも無い、ましてや「臭い」がする」訳でも無い。(当然だが味覚や触覚は感じない。)

アダムには「それ」はエネルギーとしか表現出来ない。

突然、アダムが上を見上げた。

これもまた、「それ」を感じたからである。

アダムの目は自分へ向かって飛んで来る一本の矢を捉えていた。

(この距離で、それも弓矢で正確な狙撃とは、相当な技量だな。)

そんな感心を他所にして迫り来る矢を蹴り上げて粉々にし、

「霊夢、相手にはこちらが気付かれているらしい。」

「分かったわ。急ぎましょう。」

足を急がせた。

一方、同じく竹林の何処かで。

「幽々子様、もう少し急ぎましょうか?。」

「そうね、紫には里の人間には出来るだけ気付かれない様にして、つて言われたし、急ぎましよう。」

幽々子と妖夢が異変解決に向かっていた最中だった。しかし、二人は自分たちを狙う影に気付いていない。

「アイツらにしよう。楽しめると良いがな。」

妖夢が何かに気付いたかの様に辺りを見回した。

「どうしたの？妖夢。」

「何か…… 不穏な気配を感じます。」

そして、幽々子達の前から一人の少年が姿を現した。

「…… クツクツクツ……。」

身長は170cm程、少し長めの髪の少年が気味悪く笑いながら

立っていた。

「……………もしかしてアダム君？」

「でも何か違いますか？」

確かに幽々子達の知っているその少年と姿は似ていたが、月光によつて僅かに照らされた髪は赤がかつた黒で、目は深い赤色をしていた。

つまり、色は自分の知っている少年とは逆。

「……………アダム……………それは俺の事を言っているのか？」

少年が笑うのを止め、無表情になった。

「え、ええ。でも髪や目の色は違うみたいだけど……………」

何時の間にか少年は自分の右拳を強く握り締めていた。

「苗字はアンダーソンか？」

「た、確かそうだったかしら。貴方は一体誰？アダム君じゃないの？」

「幽々子様、奴からは何か危険なものを感じます！」

妖夢が何時の間にか刀を2本抜いていた。

「……………俺を「欠陥品」と同じにするな!!!」

(欠陥品?どういう意味なの?!)

少年は幽々子へ向かつて駆け込んで行った。

妖夢が幽々子を守ろうと少年の前に立ちはだかる。

少年の目の前に振りかざされた刀を自分のナイフで受け止める。

刀を払い、妖夢へ向かつて突きを繰り出すが、もう一本の刀に防がれる。

暫く互いの攻防が続く。

「死ねっ！」

そして、少年の上段蹴りが妖夢の側首部にヒットした。

蹴りで上げた足を利用し、踵を利用し、片足で妖夢の首を捉える。

踵に引つ掛けた妖夢を地面に倒し、続けて腹に全体重を掛けた肘打ちを喰らわし、更に腹に拳のラッシュを掛ける。

暫くして、妖夢の襟元を左手で掴み、持ち上げる。

もう片方の右手を握り締め、力を込める。

「妖夢！」

幽々子から少年に向かって弾幕が放たれた。
妖夢を投げ捨て、弾幕をナイフで弾いていく。
それと同時に幽々子の方へ突き進んで行く。

「反魂蝶 ― 八分咲―！」

反魂蝶が大量に現れ始めたのと、互いの距離が5mを切ったのは、
ほぼ同時だった

少年に向かって飛んで行く大量の反魂蝶と、幽々子へ向かって駆けて行く少年。

それぞれがすれ違い合うまで残り1m。

少年がもう片方の手で銃を持ち、反魂蝶へと発射していく。
更にもう片方のナイフで反魂蝶を斬り裂いていく。

かき消せない分は体を捻って避けていく。

あつという間に少年と幽々子との距離は僅か50cmに迫っていた。

しかし、少年はその距離から動こうとしない。

「……よう、よくも俺を「欠陥品」扱いしやがったな。殺すぞ！」
憎しみの対象を睨むかの如き形相で幽々子を見つめていた。

「あ……あ……」

幽々子は得体の知れない恐怖でその場から動けなかった。

次の瞬間、幽々子の腹にボディブローが決まった。

続けて何十発と同じ個所に撃ち込み続ける。

最後に足を掛けて後ろへ転ばせる。

そして、ナイフを握る右手を高々と挙げた。

「死ね！」

「……！」

恐怖で思わず目を瞑ってしまう。

幽々子は自分がナイフ如きで死なない事を一番知っている。

それなのに、そのナイフは自分の首を一刀両断し、自分を殺してしま
うのではないのか、と思わせられた。

もう殺されると思った瞬間、ガシツ と何かを掴む様な音がした。
閉じていた目をゆっくり開ける。

ナイフは自分の首元から10cmと離れていなかった。
誰かの手がナイフを握る少年の腕を掴んでいた。

その手を辿って見ると、そこには大柄な男性が何時の間にか立っていた。

「マルク、落ち着け。『今の目的』は『殲滅』では無い。『回収』だ。それに死体を出してみる。大騒ぎになる。もしや計画が失敗するかも知れん。」

「……チツ！…… まあ計画が『移行した』時に殺せば良いか。」

男性が手を離すと、少年は武器を仕舞い、代わりに何かをリュックから取り出した。

大型の拳銃の様な形で、先端に針が、銃身の上部にガラスに入った半透明の液体があつた。

針の部分を自分の腕に刺し、引き金を引く。

間も無く意識が薄れ始めた。

薄れゆく意識の中で、以前から気絶している妖夢にも自分と同じ事をしたのと、少年が自分に向けて唾を吐いたのを見た。

とうとう意識が無くなり、西行寺幽々子は気絶した。

時は同じくして竹林の何処か。

一人の吸血鬼が一番の部下である一人の人間と共に竹林を突き進んでいた。

「お嬢様、もう少し急ぎましようか？」

「そうね、折角の満月だし、気分的にも早く終わらせたいわね。急ぎましょう。」

「了解。」

ところでレミリアと咲夜は自分を観察する影に気付かなかった。

人間の視野は瞼の形状ゆえに、横に広いが、縦には狭い。

それは人間と違う妖怪もまた、人間に近い構造ゆえに同じ視野である。

よって、二人は地上10mから竹に掴まって上から自分達を見ている人影に気付かなかった。

そして、竹に掴まっている人物は二人が自分の真下に来た事を確認すると、竹に掴まる手を離れた。

背の高い女性の方に、頭頂部へ両足降下キックを繰り返した。

二人が自分達を観察していた存在に気付いたのは、咲夜が蹴りを喰らって地面に俯せに倒れ、蹴りを放った男が蹴りの反動で跳び上がり、後方へ回転して着地し終えた時だった。

隙を与えない様に男が倒れた咲夜へ駆け寄り、後頭部に肘打ちを決めた。

咲夜は再び地面に叩きつけられ、そして起き上がろうとする素振りを見せなかった。

「二丁上がり。後は……ガキかよ……。」

「よくも咲夜を！そして私を子供扱いしないで頂戴！神槍「スピア・ザ・グングニル」！」

レミリアの手には長い槍が握られた。

「グングニル、海の神オーディンの槍か。面白い！」

男は腰から刃渡り60cm程の片手剣を引き抜いた。

「この人間の作った剣とその神の作った槍、どちらが強いかな勝負しようぜ。」

「人間ごときに負ける訳無いわよ！」

レミリアの突きで戦闘が始まった。

繰り返される突きを剣で受け止める。

続けてレミリアの連撃が男を襲う。

それを滑らかな動きで攻撃を全て受け止めていく。
次は男が攻撃を仕掛けていく。
槍の長さを利用して斬撃を受け止めていく。
暫く二人の攻防が続いていった。

魔理沙もアリスを連れて異変解決にと竹林の中を突き進んでいた。
「魔理沙、もうちよつとゆつくり行かない?」

「でもあたし達が最後なんだぜ。早くしないと霊夢やアダム達に異変を解決されるかも知れないぜ。」

この二人も自分達を見る視線に気付かなかった。

何せ相手は魔理沙達から1000m離れているのだから。

「射出エネルギーは2人分充填完了つと。麻酔弾も準備良し。目標は依然こちらに気付いていない。まあ当たり前だが。」

そして、“今から”ライフルのスコープを覗き始める。

スコープからは金髪でロングヘアの白黒の服の少女と、同じく金髪でショートヘアの周囲に人形を引き連れた少女がいた。

「まずは…… あつちの人形に囲まれた方だ。」

スコープから流れて来る相手の位置情報を読み取る。

男は引き金を引いた。

ピユウ というエネルギー変換効率が完全に100%ではないが故に発する僅かな射撃音が鳴ったが、1000m離れた相手に聞こえる筈も無い。

弾丸はアリスの後頭部にヒットした。

殺す為では無く、無力化目的の弾丸の為、貫通せずにヒットした部分で炸裂した。

生じた衝撃はアリスを気絶させるには十分だった。

魔理沙は隣から爆発音がしたかと思うとその方向にすぐさま振り向き、親友の後頭部で何かが炸裂し、気絶して倒れゆく親友の姿を見た。

「アリス！」

倒れたアリスに声を掛けるも、返事は無い。

呼吸や脈はある様だったが、意識が無い様だ。

「誰だ！一体。」

だが魔理沙からは1000m後方にいる男の姿を認識することなど出来なかった。

「もう片方もやるか。」

引き金に指を掛けようとするが、スコープにはこちらを向いて何らかのエネルギーの発射機構らしき物を片手に持った少女の姿が映っていた。

「こちらの存在に気付いているのか？」

「恋符「マスターズパーク」！」

魔理沙が握っている八卦炉からは1000m後方にいる男目掛けてレーザーが放たれた。

24 6人の外来人

同じく竹林で異変解決に来ていた者はあと1組いた。

「そういえば藍、最近人間達に怪しい動きは無い？」

「……一人だけ怪しい者が、柏リヨウという外来人が居るのですが……。」

「続けて。」

「それが、怪しいには怪しいのですが……その行動が、何か変な服を作っている事、外界にある映画や音楽といった事、それ以外にはこれと言った事が無いのです……。」

「そう……それと萃香から聞いたのだけど、高橋オーク、という名前の人間はいるかしら？」

「高橋オーク、そんな者は確か居ませんでした……ところで紫様、何か不穏な気配を感じませんか？」

「私にも感じるわ。藍、もつと急ぐわよ。」

二人の直感は正しかったが、今や紫達は異変解決を優先すべくしている為、不穏な気配がこちらを見ている事など気付いていない。

「100m先か……全然いけるな。」

男は銃を構え、100m先に居る二人の内、藍の体の中心部を狙った。

銃は口径がバズーカ砲程の大きさのあるショットガン型の物だった。

引き金に指を掛け、引こうとする。

「むっ？」

引き金を引く動作を中断し、体を後ろに向ける。

見ると、体格が自分と同じ位の男が立っていた。

茶色い長髪と手入れされた顎鬚が特徴的だった。

「5m内に居るといふのに俺に気配を感じさせないとはやるな。誰だ。」

「それを言うならこのマントを付けているのに俺に気付いたお前も中々やるじゃないか。人に名前を訊くときは自分から、って習っただ

ろ。」

「良いだろう。バエル・ソロだ。お前は？」

「俺かい？ 柏リヨウだ。しかし、＼あの＼バエルか……………」

「まさかお前が＼あの＼リヨウか……………こんな所で会えるとはな。」

二人とも武器を仕舞い、互いに格闘の構えを取った。

ある場所では互いの武器を打ち鳴らす金属音が鳴り響いていた。

少女が手にする槍から刺突が繰り返され、男が手にする片手剣がそれを受け止めていく。

しかし、その逆は無かった。

「遅い攻撃で詰まんねえな。もうちょい楽しませてくれよ。」

「な、何を！」

一瞬は頭に血が上ったレミアだが、アダムと戦った時の敗因を思い出す。

それは自分の逆上のし易さだった。

如何にか怒りを抑えて冷静になったレミアだが、

「とおっ！」

「?!」

男の下段蹴りがヒットし、バランスを崩して倒れる。

「足元がお留守になっていたぜ。」

それでも相手の動きについて行けない。

「やあー！」

倒れた状態で突きを繰り出す、男の体は宙に舞い、当たる事は無かった。

高度をつけた男から降下踵落としが繰り出される。

地面を転がって如何にか避け、男へ突きを繰り出していく。

しかし、突きは躲されるだけでダメージは与えられない。

今度は男が斬撃を繰り出していき、攻守が逆転した。

レミリアは次々と繰り出される攻撃を冷静に捉えられたが、全てを避ける事が出来る訳では無かった。

右頬、左小手、右腿、左脛、右脇腹と次々に斬り傷が出来ていく。

大した痛みは無いが、レミリアは一旦体勢を立て直すべく、男から距離を取り、スペルカードを取り出す。

それと同時に男が剣を両手に持ち、地面を叩いた。

「スカーレットデイステ……」

スペルカードを唱え終える直前、地面から激しい揺れを感じ、スペルカードは不発に終わる。

男が地面を叩いた時の衝撃波など本来はレミリアを一時行動不能にする程度の威力は無い。

だが、衝撃波は剣の機能によってレミリアへと一直線に向かったのだった。

地面の揺れによってバランスを失ったレミリアは男が自分の方へ距離を詰め、自分の首の後ろを殴られたのを確認すると気を失った。

「能力はあるが活かしきれていないなあ…… もっと強い奴と戦いたい所だ。」

男は気絶したレミリアに注射銃を刺し、引き金を引いた。

もう一人、気絶した咲夜にもそれをするのを怠らなかつた。

別な場所では男目掛けて特大のレーザー弾幕が放たれている最中だった。

「随分と凄い威力だ。しかも1000m離れているというのにかなり正確に当てて来るとは。」

賞賛と同時にレーザーを避ける。

「それじゃあ、弾速を音速の10倍にでもするか。」

ライフルの機関部についているツマミを動かす、調整する。

一方で魔理沙は箒に跨り、自分が弾幕を撃った方向へ、つまり自分を狙った者が居る方向へと向かって行く。

「気付かれたが、どうでも良い。」

男と魔理沙の距離は200mを切っていた。

男はライフルの“スコープを見ず”に引き金を引いた。

音速の10倍を誇る弾丸は魔理沙の顔面に当たったが、大したダメージでは無い。

それでも箒に乗った魔理沙を一時無力化する事は可能だった。

男がバランスを失った魔理沙に向けて自身のエネルギーを1秒間溜めた音速の5倍を誇る弾丸を発射した。

弾丸は魔理沙の腹に炸裂し、魔理沙を気絶させた。

男は無言で魔理沙に注射銃を刺し、引き金を引く。

これを1000m離れた気絶しているアリスにもわざわざ近づいて注射した。

アダム達の目の前には異変を引き起こした張本人二人がいた。

一人は銀髪の長い三つ編みで、赤と青の服を着た女性。

もう一人は長い黒髪で、桃色を基調とした服を着た少女。

女性の方は八意永琳、少女の方は蓬莱山輝夜、という名前だ。

「異変を元に戻せ。さもなければ後悔する事になる。」

「こちらも自らを守るためにしている事なのよ。」

アダムが素早い動作で銃を取り出し、引き金を引く。

永琳が同じく素早い動作で弓と矢を持ち、矢を放つ。

銃弾と矢がぶつかり合い、相殺された。

それをきっかけに霊夢と輝夜も弾幕を放ち始めた。

永琳は武器を弓矢から弾幕に変更し、アダムは銃に加えてもう片方の手にナイフを握った。

アダムが前進し、銃弾を撃ちながらナイフで相手の弾幕をかき消す。

永琳が後退し、弾幕を放ちながら相手の銃弾を避けていく。

アダムの銃弾は量こそ永琳の弾幕に劣るものの、弾速に関しては遙かに上回っている。

永琳の弾幕は弾速こそアダムの銃弾に劣るものの、量に関しては遙かに上回っている。

“遠距離攻撃のみ”の長所短所を総合すれば互いに優劣は無い。

だが、永琳にとって音速の5倍程もある銃弾を躲す事は困難だ。

更に盾の役目をする道具等が無い。

一方でアダムには音速の5倍を誇る銃弾が見え、躲せられる程の回避反射を備えている。

それ以前に、永琳の放つ弾幕は音速にすら達していない。

更に盾の役目をするナイフがある。

体全体を動かすのと腕だけを動かすのとは後者の方が明らかに

消費エネルギーが少ない。

つまり永琳が負けるのも時間の問題だ。

「……長期戦であれば諸に差が出てしまう。一気に勝負を……」
天呪「アポロ13」!

短期戦に持ち込もうとする永琳だったが、その判断は一般論では正しいが、

アダムが地面を蹴り、弾幕が飛び交う中をくぐり抜け、接近している。

短期戦は永琳以上にアダムが得意である。

体を捻って弾幕を躲し、ナイフと銃弾で弾幕をかき消していく。

永琳は後ろへと下がって行くが、音速に匹敵する速度で来るアダムを振り切る事は出来ない。

「禁薬「蓬莱の薬」!」

大量の弾幕が辺りを埋め尽くすかのようにアダムを襲う。

アダムは迷い無くナイフを腰に取り付けたロープに繋げ、ロープを1m程伸ばす。

ロープを回転させ、迫り来る弾幕をかき消していきながら、銃弾を放っていく。

(二発一発の弾では無くレーザーならばロープに阻まれない筈。)「天蜘蛛網捕蝶の法」!

永琳の考えは「1対1」の戦闘であれば正しかった。

するとアダムはナイフ、ロープ、銃を仕舞うという奇妙な行動を取っていた。

だが、この戦いは1対1では無く、「2対2」だ。

アダムは武器を全て仕舞い終わると地面を蹴って右方向へと駆けて行った。

その方向には、

「はっ!輝夜、後ろ!」

自分の守るべき子がいた。

輝夜は霊夢と戦闘中でアダム達の戦闘には目を遣れない程苦戦していた。

永琳が咄嗟に声を掛けたのだが、アダムは音速を超える速度で輝夜へ駆けていた。

つまり、もしもアダムが永久機関を搭載していれば音はアダムを抜かす事が出来ない。

物理法則の通り、輝夜に永琳の警告の声が聞こえたのは、アダムに腕を掴まれてからだだった。

掴んだ輝夜を地面に投げ倒し、腹に肘打ちを決める。

再び輝夜を掴み、背中から抱え、上空へと跳び上がった。

最高到達高度に達すると、輝夜を抱えたまま落下していく。

輝夜は頭から地面に激突し、アダム自身は上手く着地してダメージを無くし、地球投げが成功した。

輝夜は呆気無く気絶した。

「輝夜！貴方随分汚い手を使うわね！」

しかし、永琳のアダムに対する怒りは、

「戦法に綺麗汚いは無い。勝つか負けるか、それだけだ。」

呆気無く無視された。

「でも、アダム……………」

霊夢が言い過ぎだ、と言わんばかりに止めようとするが、

「戦闘は勝たなければ意味が無い。負ければ全てを失う。」

「……………」

あつさりと言葉を失う。

丁度そこへ、

「やっと来たわ。どうやらあと一息といった所みたいね。」

「どうやらあの二人だけでも十分だったみたいですがね。」

紫と藍が到着した。

「ところで霊夢、他に異変解決に来ている筈の幽々子達や紅魔館の吸血鬼、貴方と親しい魔法使い達を見なかったかしら？」

「え？ここに来たのは私達だけよ。」

「え？それじゃあ……………」

「此処に来る間に異変解決を邪魔する者達は全て倒しておいた筈だとすると……………」

その場に居た5人（永琳を含む）は言葉を失った。
突然、アダムが銃を取り出しながら後ろを振り向き、銃を向ける。
目の前には同じく自分に銃を向ける少年の姿があった。
身長170cm程、赤がかった長めの黒髪、深い赤色の目。
服は胸に「EMO」の刺繍のある迷彩柄の軍服だった。
手には自分の物と同じハンドガンが握られている。

「……………」

「……………」

「お前はアダム・アンダーソンか？」

「そうだ。お前は誰だ？」

「マルク・デイツクだ。お前は俺を知っているか？」

「知らない。お前は僕を知っているのか？」

「知っている。」

アダムは言葉を失った。

「お前は俺達の仲間だった。だが、不思議な感じだ。」

「何が不思議だ？」

「俺はお前に直接会った事は無いが、何故かは分からないが……………」

マルクの銃を握る手に力が籠ったのをアダムは見落とさなかった。

25 3つの戦い

「…… お前に対して憎しみを感じる。」

「何故嫌いなんだ？」

「……。」

「……。」

沈黙を破ったのは二人同時だった。

アダムはマルクへ銃弾を発射した。

しかし、マルクはアダムの方向とは違う方向に発射した。

それに気付き、銃の向いている角度の先に何かがあるのかを見た。

自分の隣にいる人物、霊夢だった。

左腕で霊夢を抱き、右手に握る銃をマルクに銃を向けながら移動し、銃弾を如何にか躲した。

当然、マルクの方も銃弾を躲し終えている。

互いに銃を向けたまま沈黙が流れる。

「霊夢、下がっていてくれ。」

「…… あ、うん。」

突然の事で呆気にとられていた霊夢を離し、後ろへと下がったのを確認すると、新たな質問を投げ掛けた。

「お前は何故幻想郷に居るんだ？」

「お前の果たせなかつた目的を果たすためだ。」

一瞬言葉を失った。

「…… その目的は何だ？」

「それはお前が知っているだろう。」

「悪いが、僕は此処に来る前に記憶を失った。その目的とは何か教えてくれ。」

ハモンド、先程レミアと戦っていた人物の身体は今、最高度の緊張を保っていた。

何せ地上20mの高さに片手で竹を掴み、それで体を支えている状態なのだ。

見下ろせば仲間のマルクとその他5人の人物が見える。

しかし、マルク以外の者は頭上に居るハモンドに気付いていない。

「……あのガキ、もしや「アンダーソンシリーズ」か？まさか生きていたのか。」

『本当か？しかし、それなら何故「バースト」が出来ないのか……』

片耳ヘッドフォンマイクのような通信ユニットから1000m離れた位置にいる仲間、ロブ、先程魔理沙達と戦っていた人物の声が聞こえた。

「さて、マルクの奴何か話している……。」

そして、銃弾が発射された音が聞こえた。

『今何が起こっている？』

「マルクとアンダーソンらしき奴が一発ずつ撃ち合って互いに避けてまた何か話し始めている……アンダーソンの奴は何か記憶を失ったとか言っているぜ……ちよつと待ってろ。」

『あいよ。』

ハモンドは下に居る味方以外の5人を見回した。

（……何だ？あの尻尾。多すぎて気持ちわりーな……あいつにするか。）

ハモンドの目線には金髪で青と白が基調の服を着た尻尾が9本もある女性、つまり藍が居た。

片手に握り、体を支えている竹を手から離し、飛び降りる。

ハモンドの両足降下キックが藍の頭頂部にクリーンヒットし、藍が

地面に倒れる。

地面に伏した藍を蹴り上げ、踵落として再び地面に叩きつける。

倒れた藍の腕を掴み、背負い投げを決め、倒れた藍にシヨットガン型の銃から1発発射した。

突然、後ろから衝撃音が数回鳴り、最後に銃声がした後、アダムの質問の答えは後ろから答えが返って来た。

「悪いが教えられない。少なくとも」今の「お前は味方では無いからな。」

銃をマルクに向けたまま振り向くと、男性が一人立っていた。

そして、その足元には女性が一人倒れていた。

「藍！」

紫が叫ぶ。

藍は仰向けのまま気絶していた。

「ハモンド、コイツは俺がやっても良いか？」

「良いぜ。だが殺すなよ。後で厄介になるからな。」

「分かっている。それじゃあ……………」

マルクが両腕を突き出しながらアダムへと突進していく。

両腕を正面から受け止めたアダムだが、勢いは止められずに後方へと下がっていつてしまう。

そして、アダムは霊夢達と離れた。

「さて、お前らの相手は俺達だ。」

「達」？貴方一人じゃない。」

霊夢が疑問を投げ掛けた。

『おいハモンド、勝手に俺の存在を明かすな。』

通信ユニットからロブの声が聞こえた。

「ロブ、隠れてないでさっさと片付けようぜ。どうせ俺達はコイツらは俺達の事を」知らない”しにとつて”存在しない”のだから。」

『へっ、良く言うなあ。オツケー、今行く。』

「ちよつと、貴方何やってるのよ。」

「まあ少し待とうや。ゲームは大人数の方が盛り上がるだろ？」

霊夢と紫と永琳が顔を見合わせる。

(紫、どうする?)

(コイツの仲間が来る前に片付けましょう。)

(私も手伝うわ。今は協力よ。)

霊夢達はアイコンタクトによる作戦会議(?)で攻撃を選択し、

「霊符「夢想妙……………」

「境符「四重結……………」

「天丸「壺中の……………」

それぞれスペルカードを唱えようとするが、

「でやあっ！」

ハモンドが剣を引き抜き、地面に叩きつける。

剣の機能により、衝撃波は指向性を持たされ、3人へと向かって行く。

空気中の音速は秒速340mだが、地中の音速は土の性質によるが、少なくとも秒速1500mは超える。

つまり10m離れている霊夢達には0.007秒以内で到達する。

衝撃波は霊夢、紫、永琳のそれぞれが立っている地点へと一直線に向かい、地面を揺らす。

スペルカード詠唱は地響きによって阻害された。

ちなみに衝撃波自体には殺傷能力は無いので、無力化にしか使えない。

「フライングは反則だぜ。」

「今のは一体……？」

「衝撃波ね。きつと方向性を与えられてあのような威力になったんだわ。」

「これは地上戦ではなく空中戦に切り替えた方が良いわね。」

一方である場所ではリョウとバエルの戦いの真最中だった。

己が持てる力をフル活用し、攻撃を叩き込む。

次々と叩き込まれる攻撃を受け止め、避けていく。

拳と拳、蹴りと蹴りがぶつかり合い、衝突の瞬間衝撃波による爆音が生じる。

互いのストレートが互いの頬にヒットし、どちらも後ろへ吹き飛ばす。

リョウは空中で後方へ一回転して体勢を整えて着地し、

バエルは地面に足を着き、靴と地面との摩擦で減速し、停止した。

「久しぶりだ。こんなに手応えのある奴と戦うのは。楽しくなってきたぜ。」

「それはこっちの台詞だ。最近はずこの相手ばかりで飽きていたのでな。」

二人とも跳び上がり、互いの放つ跳び蹴りがぶつかり合う。

そして、再び攻撃のラッシュが続く。

互いのストレートが衝突し合い、衝撃波と共に互いに後方へ吹き飛ばす。

再び距離を詰め、攻撃を繰り出していく。

リヨウのストレートを左小手で受け止める。

バエルの右フックをしゃがんで避ける。

リヨウのアツパーカットを後方に下がって避ける。

バエルの上段回し蹴りをしゃがんで避ける。

リヨウの下段回し蹴りを跳び上がって避ける。

バエルの降下キックをバク転で避ける。

リヨウの駆け込みナックルを体ごと横に避ける。

バエルの裏拳を左手で掴む。

リヨウの中段蹴りを左手で掴む。

バエルのローキックをジャンプして避ける。

リヨウの左足の踵がバエルの首を捉え、勢い良くバエルを地面に叩きつけた。

そのままリヨウが起き上がり、倒れたバエルに踵落としを繰り出す。

バエルが起き上がり、体を横に回転させながら踵落としを避け、そのまま勢いの乗った肘打ちを当てた。

そして、互いに距離を取る。

（この調子では如何にか”援軍を送る為”の時間稼ぎは出来るが、下手したら俺がやられるかも知れんな……。）

（コイツの目的は俺がロブ達と”合流させない為”の時間稼ぎだろうと”予測される”が、こちらがやられる可能性も低くは無い……。）

マルクは前進しながら銃を撃ち、アダムは後退しながら銃を撃つ。それを互いに身のこなしで避けていく。

互いの持つている銃はどちらも拳銃型。

互いの連射速度はどちらも1秒に50発。

互いの1発の弾速はどちらも音速の5倍。

互いの1発当たりのエネルギーはどちらも同じ。

アダムの発射する銃弾はアダムの移動速度がマッハ1、マルクの移動速度がマッハ1、銃弾の速度がマッハ5なのでマルクにとってはマッハ5で自分に向かってくる。

マルクの発射する銃弾はマルクの移動速度がマッハ1、アダムの移動速度がマッハ1、銃弾の速度がマッハ5なのでアダムにとってはマッハ5で自分に向かってくる。

つまり互いの銃弾の迫り来る相対速度は同じ。

(これではきりが無い、接近戦で一気に勝負を付けるか。)

アダムが後方から前方へと移動方向を変え、互いの距離を縮めていく。

互いに相手の放つ銃弾の相対速度はマッハ7。

それを互いに接近しながら体を捻って避ける。

距離が更に近くなり、二人とも相手へと駆け込む。

相対距離3mとなった所で二人とも同時に地面を蹴り、真っ直ぐに直進していく。

アダムの左手がマルクの拳銃を握る右手を掴み、マルクの左手がアダムの拳銃を握る右手を掴む。

そのままの状態が続く、重力に従って俯せの状態で落下し、互いの拳銃の銃口を相手の額に当てる。

動作の速度はどちらも同じ。

しかし、二人とも引き金を引かなかった。

「……………」

「……………」

「銃撃戦ではきりが無い。接近戦で勝負を決める。」

「臨むところだ。もつとも、勝つのは俺だ。」

二人とも3 m程距離を取り、互いに銃を仕舞い、代わりに右手でナイフを持つ。

間も無くナイフによる戦闘が始まった。

互いに攻撃と防御を繰り返す、相手の隙を窺っては仕掛ける。

アダムの突きがマルクのナイフに軌道を逸らされる。

軌道を逸らせながらアダムへと斬撃を繰り返す。

マルクの斬撃をナイフで受け止め、ミドルキックを繰り返す。

アダムの蹴りを左手でガードし、ローキックを繰り返す。

マルクの蹴りをジャンプして避け、同時に空中回し蹴りを繰り返す。

アダムの蹴りをしやがんで避け、着地寸前のアダムへナイフを突き出す。

突き出されたナイフを握るマルクの右手を左手で掴み、手元に引き寄せながら右腕で肘打ちを繰り返す。

肘打ちはマルクの体を吹き飛ばした。

空中で後方に一回転して体勢を立て直し、着地する。

マルクはアダムが自分へ追撃を喰らわすべく自分に向かって駆け込んでいるのを認識した。

次々と自分を襲う拳や蹴り、突きや斬撃を避けていく。

アダムの横薙ぎをしやがんで避け、左手を突き出す。

アダムはそれを避けようとジャンプしたが、マルクの手はアダムの足を捉えていた。

伸ばした腕を引き戻し、アダムを地面に崩し倒す。

追撃にナイフを叩きつける様に打ち込んだが、アダムのナイフに阻まれた。

次の瞬間、マルクがアダムの腹を勢い良く踏みつけた。

痛みに如何にか耐えたアダムは体を転がし、次なる攻撃を避けた。

再び3 mの距離を取る。

26 二人の少年

「遅せえぜ、ロブ。」

ハモンドの元へロブが到着した。

「良いだろ別に。というかお前一人でも行けるんじゃないか？」

「いや、文化だけが取り柄の連中だが、相当強い。正直2人相手でもキツイところだ。」

「確かに、俺達は基本的どんな戦闘でもいけるが、得意は奇襲であるからな。」

二人が銃を構える。

ハモンドが持っているのはショットガン型。

ロブが持っているのはスナイパーライフル型。

次の瞬間、二人の人差指が引き金を引いた。

ショットガンは1秒に5発、ライフルは1秒に25発のペースで銃弾を吐き出し続ける。

ショットガンの銃弾は発射時に20発に散らばり、ライフルの銃弾は真っ直ぐと音速の7倍の速度で放たれた。

霊夢達も対抗すべく、銃弾を躲しながら空中から弾幕を撃つていく。

「はあっ！」

「やあっ！」

霊夢はお札型の追尾弾幕を、紫は針の様に細くて弾速の速い弾幕をハモンドへ放った。

ハモンドは左手にショットガンを持ち、右手に剣を持った。

剣で弾幕を弾きながらショットガンを連射する。

「蘇生「ライジング……」」

永琳がスペルカードを唱えようとするが、

(させるか。)

ロブが慣れた手つきで銃の側面にあるツマミを操作し、引き金を引く。

一発の銃弾が音速の10倍の速度で永琳の大腿部を貫通した。

「うぐっ！」

傷口から血が噴き出る。

ロブはすぐさま取り出した別のライフル型銃を構える。

「ハモンド、サングラス。」

「おうよ。」

二人がサングラスを装着した所で引き金を引く。

銃口からは一発の明るく輝く銃弾が発射された。

「……！伏せて！」

永琳の言葉通り霊夢と紫が地面に伏せ、永琳は目を腕で覆った。

次の瞬間、激しい閃光と衝撃音が辺り一帯を覆った。

目を伏せていた永琳は腹に強い衝撃を感じ、地面に仰向けに倒れた。

誰かが仰向けに倒れた自分の腰の部分に乗る。

閃光の効果が無害な程度に収まったのを瞼に映る光で確認し、目を開けた。

自分に乗っていたのはハモンドだった。

次の瞬間、拳の嵐が永琳の顔を襲った。

ハモンドは跳び上がり、永琳の腹に一発降下振り下ろしパンチを決めた。

「がつー！」

永琳が血を吐いた後、永琳は気絶した。

（不味いわね。これからどうする？）

（これでは勝ち目が無いわね……。少なくともスペルカードを使うとすれば発動する隙を確実に狙われてしまうし……。）

霊夢と紫が顔を見合わせる。

霊夢と紫が選んだ選択肢は、

霊夢達がハモンドに向かつて集中させる様に弾幕を放った。

（集中砲火か……。どうでも良い。）「ロブ、後は俺一人で十分だ。」

「そうかい。」（さっきは2対1でも厄介とか言っていたけどよ……。まっ、良いか。）

左手に握るショットガンから放つ銃弾で弾幕を打ち消しながら、

右手に握る剣で虚空を振る。

剣を振った軌道に沿って衝撃波が生じ、それが弾幕を撒き込みながら霊夢達へと向かっていく。

霊夢達は衝撃波やショットガンの細かい散弾を避けつつハモンドへと弾幕を撃ち続ける。

(この状況ではスペルカード詠唱は阻害されない筈。)
「境界「四重結界」！」

「霊符「夢想妙珠」！」

今度はスペルカードの詠唱に成功し、強力な弾幕を放つ事に成功した。

「面白れえ！」

ハモンドはショットガンを仕舞い、背中からグレネードランチャー型の銃を取り出した。

右手に握った剣で弾幕を防ぎつつ、1秒に4発のペースでグレネードランチャー大の銃弾が放たれる。

弾速は音速の1倍と比較的遅かった。

しかし、銃弾は霊夢達の弾幕に衝突しても消滅せず、しかも霊夢達を追尾するという厄介な物だった。

更に剣からの衝撃波まで飛んで来る。

遂に霊夢に衝撃波が、紫に追尾弾が1発ずつ被弾する。

どちらも威力は相当に強く、どちらも被弾した相手を吹き飛ばした。

空中で体勢を立て直す、再び弾幕の嵐が霊夢達を襲う。

「このっ！」

霊夢ががむしゃらに弾幕を放った。

追尾弾と高速弾の両方が混じっている。

「やべっ！」

ハモンドが慌てて避けていくが。

「境界「生と死の境界」！」

後ろから放たれた弾幕に対応できず、紫の弾幕を大量に被弾した。吹き飛ばされたハモンドは吹き飛ぶ軌道上にある竹を十数本割り、

地面に着地した。

「ヤロー、痛えなあ。」

「手を貸してやるぞ、ハモンド。」

「フン、お前の助けなど要らん。」

「そう言うだろうと思ったが、悪いが俺も参戦してもらおう。」

「何故だ？」

「如何やら2名のお客様のご到着だ。お前一人じゃあ4人におもてなしをするのは大変だろう。」

ロブが横を振り向き、ハモンドがその視線を辿る。

霊夢と紫もロブの視線を辿った。

100m先にこちらに向かって飛んで来る二人の人影を確認した。

「霊夢！紫！」

「来たぞ！」

一人は水色のロングヘアで同じく水色を基調とした服を着た女性。もう一人は銀髪のロングヘアで赤と白を基調とした服を着た少女。

「慧音と……アンタは妹紅だったっけ？」

「何故此処へ来たの？」

紫の質問は少女の方、藤原妹紅が答えた。

「それがな、リヨウって外来人知っているだろ？リヨウに此処へ行けって言われてさ。」

「リヨウが？でも何故？」

「それは異変が無事に終われば話すと言っていたぞ。今はとにかくコイツらを如何にかすれば良いんだろ？」

慧音が答えた。

「無事に、ね……。」

紫がそう呟いた。

竹林の別の場所では拳と拳、蹴りと蹴り、ナイフとナイフをぶつけ合う音が鳴り響いていた。

「アダム、貴様は「欠陥品」だ。俺には敵わない。」

「何故そう言える?」

「貴様は俺と同じ、だが俺と正反対でもある。俺がプラスであればお前はマイナスだ。」

「それは質問の答えにはなっていない。」

「本来ならば俺の方が優れている。それはそう決まっている。だが……」

「何故そう決まっているんだ?」

返事の代わりにナイフの突きが返って来る。

すかさず自分のナイフで受け止め、鏝競り合いに入る。

「貴様の所為だ!!! 貴様の存在の所為で俺は認められない!!! 全ての面において俺が優れている筈なのにだ!!!」

怒りに狂った声を上げ、同じく怒りに狂った目でアダムを睨む。

「だから俺は貴様が嫌いだ!!! 殺してやる!!!」

「何故僕の存在によってそうなるのだ?」

質問の答えは返って来なかった。

「ウガアアアアアアアアアア!!!」

怒りに狂った声で叫び、アダムへと襲い掛かる。

拳の嵐を受け止め、蹴りの嵐を躲し、斬り裂きの嵐を避けていく。

しかし、反撃が出来ない程に余裕が無い。

後ろへ下がっていく内にアダムの背中に一本の柱らしき感触が伝わって来た。

マルクの中段回し蹴りをしゃがんで避ける。
回し蹴りは後ろの竹を砕いた。

隙を見せたマルクへとボディブローを決めた。

隙を逃さず、パンチ8発、斬り裂き4発、蹴り上げ2発、サマーソルトキック、跳び上がって降下振り下ろしナックル、着地して両足回し蹴り、アッパーカット、踵落とし、そして、斬り裂き。

吹き飛ばされたマルクは軌道上にある竹を砕き、背中から地面に着き、吹き飛ばす勢いは地面を削った。

「クス野郎!!!」

何事も無かったかの様に起き上がり、再びアダムへと突進する。

次々と繰り出される攻撃を避けていくが、対応が間に合わなくなってくる。

マルクの膝蹴りがアダムの腹に決まった。

続けて4連蹴り、パンチ6発、斬り裂き4発、振り下ろしナックル、下段回し蹴り、掴んで1発殴り、投げ飛ばす。

宙を吹き飛ぶアダムを更に蹴り上げ、地面に着地し、前方へ跳び上がる。

軌道上にあった竹を蹴り、反動でアダムへ接近し、跳び蹴り、背中を掴んで空中からバックドロップを決めた。

着地し、距離を取る。

「……確かに戦闘能力は僕を上回っているらしいな……。」

マルクは先程の怒りに狂った目では無く、余裕に溢れた目で見える。

「……どうしたアダム、そんな程度か？ハハハッ！お前は死ぬ、分かったか！」

「……怒り狂ったり、急に冷静になったり……変な奴だ。」

アダムは起き上がり、防御の構えを取る。

マルクがそれに飛び掛かり、それを確認したアダムも飛び掛かる。互いの右手に握るナイフを相手に突き出す。

アダムのナイフはマルクの脇腹を掠り、マルクのナイフはアダムの胸を掠めた。

もし、掠りでは無く、しっかりと当たっていればアダムの方がダ

メージが多いだろう。

反対側に着地したアダムは腰に繋がったロープを引っ張り、ナイフに繋げる。

ナイフをマルクへと投げる。

対するマルクはというと、アダムの方を振り向き、迫り来るナイフを左手で掴んだ。

マルクがニヤリと笑った様に見えた。

マルクがアダムの投げたロープを勢い良く引っ張る。

アダムは不意の事態に対応できず、そのまま引っ張られる。

マルクが腰にあるロープを出し、ナイフに繋げる。

ナイフをアダムへ投げる。

対するアダムは引っ張られて正確な対応が出来ない。

咄嗟に体を捻るが、マルクの投げたナイフはアダムの左肩に突き刺さった。

自分の投げたナイフが更に引っ張られ、更に引き寄せられる。

マルクが2連蹴りを繰り返す。

1発目はナイフが突き刺さった肩に、2発目はアダムの腹に決まった。

ナイフが更に深く突き刺さり、そして後方へ吹き飛ばされる。

マルクが再び左手に握るアダムのロープを引っ張る。

再び引き寄せられ、今度は胸に両足蹴りを受け、吹き飛ぶ。

吹き飛んだのをまた引っ張り、引き寄せる。

繰り返される顔面へのストレートを体を捻って躲し、マルクの顔面へナツクルを決めた。

マルクの左手にロープを握る握力が緩み、その瞬間に自分のロープを元に戻す。

バランスを整え直したマルクはアダムの肩に刺さっているナイフを引き抜き、距離を取る。

「……ハア、ハア……」

「……チツ！……」

アダムはリュック、銃、ナイフ、ロープ、つまり持ち物全てを外し

た。

左半身を前に出し、胸の前で腕を交差させ、右半身に体重を掛ける。

「…… 良いだろう。」

マルクも同じく持ち物全てを外す。

しかし、構えらしき構えは取らず、適度に力を抜いて立っているだけである。

「来いよ」「出来損ない」、恐怖なんか捨ててさあ。知ってるぜ、お前が俺を恐れている事を。」

その時、アダムが僅かに動揺したのをマルクは見逃さなかった。

次の瞬間、二人の回し蹴りがぶつかり合った。

27 切り札

ドゴーン！

リヨウのストレートがバエルの顔面に、バエルのストレートがリヨウの顔面に、これらが同時にヒットした音だった。

互いに吹き飛ばされ、互いとも受け身を取って着地する。

「中々やるな。さすが」あの「バエルと言った所か。だが、何か隠し玉を持っているだろ？」

「それはこつちも驚いているぜ。」あの「リヨウがこれ程強いとは予想以上だ。そして、お前も何か隠しているな？」

「まあその通りだ。折角だからお互い隠している物で決着を付けよう。」

「隠しているのは同じか。まあトランプやUNOであれ、何でも駆け引きは切り札を最後まで持っている方が勝つからな。」

3m離れた地点で互いに黙り込む。

そして、どちらも武器を仕舞う。

暫く沈黙が流れる。

次の瞬間、二人が同時に跳び上がった。

二人とも右手を手刀の形にしている。

互いの距離が最も近づいた所でどちらも手刀を横に振る。

リヨウの手刀がバエルの左胸を、バエルの手刀がリヨウの首をなぞった。

リヨウの首とバエルの左胸どちらにも僅かな火傷痕が出来た。

すぐさま、どちらも距離を取る。

「「プラズママン」、噂には聞いていたが、俺と同じ物体振動増幅系統なのか。」

「そう言うお前は「灼熱」だろ。」持ち物」は同じ、なら後は実力勝負か。」

リヨウはバエルへ右手を広げて向け、バエルもまた右手を広げてリヨウへ向けた。

バエルの掌からリヨウへ向かってエネルギーの塊が放出された。

熱量は500gのTNT火薬に匹敵する。

これは50kgの水（温度は0℃と仮定）を水蒸気にするエネルギーである。

しかし、リヨウはまだ何もしない。

（何故撃たない？）

エネルギー弾はリヨウの右掌に命中した。

普通の人間なら即死、“リヨウ達の様な人間”でもかなりのダメージを負う。

しかし、エネルギー弾が衝突する時に起こる熱膨張による爆風が発生しない。

その事にバエルは驚いていた。

「……………「フロスト」?!」

バエルのその言葉は半分の驚きと半分の恐怖で構成されていた。

「まさかお前がその名前を言うとは……………」

「…………… 参った、こうなりや俺に勝ち目は無い…………… 殺せ。」

今まで突き出していた掌に力を込めた。

熱量はTNT火薬5kg分を誇るエネルギー弾がリヨウの掌から発射された。

エネルギー弾はバエルの胸に衝突した。

10000℃を超えるプラズマの温度により、直撃した胸の部分は一瞬で気化した。

熱は瞬く間にバエルの肉体に広がり、バエルの肉体は爆散した。

「バエルの信号が切れました。」

「何い?!」あの“バエルが破壊されたとは……残りの3体は大丈夫か?」

「異常は無い様ですが、詳細が分からないので……。」
(やはり何かを感じる。科学的では無い”何か”を。)

「…… バエルがやられた。」

「何だと?!それは本当か?!ロブ。」

「今よ。結界「光と闇の網目」!」

「神霊「夢想封印・瞬」!」

「国体「三種の神器 郷」!」

「不死「徐福時空」!」

霊夢達が一斉にスペルカードを唱える。

「ハモンド、今はこっちに集中しろ。」

ハモンドは右手に剣を握ったまま左手に握る銃を仕舞い、今度は左手にサブマシンガン型の銃を手にした。

ロブはライフルを仕舞い、両手に重機関銃型の銃を持つ。

二人とも迫り来る弾幕をそれらで撃ち落していく。
「ところで、マルクの様子はどうか?アイツが暴走しているか心配だ。」

迫り来る弾幕を避けながらハモンドが言う。

「…………辛うじて暴走の一步手前で止まっている、って所かな。まあアイツと「アンダーソンシリーズ」の実力からして余裕が見られるし、暴走する前に片付くだろう。最も、死体が出るかも知れんがな。」
「死体処理か…………ソイツは埋めれば良いが、薬の効果は24時間分だ。奴らは奴の存在が消えた事に大騒ぎするだろうな。まあ俺達の存在は“存在しない”事になるから大丈夫だろうがよ。それにはコイツらを「ピカッ」とさせなきゃな。」

「言つとくが、「ピカッ」とするってそれ「メインブラック」じゃないか、ハハッ。ちよつと笑ってしまったぞ。」

「アレは神映画だからな。今度観ようぜ。」

「いや、「ウィル・スミス」なら「アイ、ロボット」か「アイアムレジェンド」の方が良い。」

「えく？あれ真面目でそんなに面白くないだろ。やっぱり「バッドボーイズ」に…………」

霊夢はその会話の最初の部分の言葉をしっかりと聞いていた。

(…………死体が出るって、アダムが殺される?!)

霊夢は目を瞑って心を静かにし、

(…………場所は…………あっちね。)

脳裏に流れる霊力の流れからアダムの居場所を突き止めた。

霊夢はそのままアダムの方向へ飛んで行った。

(待ってアダム！今助けるわ！)

「ちよつと、霊夢…………言う事も聞かないで行ってしまったわね…………。」

「今まで如何にかこちらが押していたというのに…………おかげで劣勢になったな。」

慧音がぼやく。

「慧音、これからどうする?」

「とりあえず今の状況じゃ勝てないし…………霊夢が戻って来るかリョウが来るまでに目の前の奴らを如何にかしなくてはな。」

「私に至っては使えるスペルカードが残り3割も無いわ…………。」

「それは良い知らせだな…………。」

妹紅が皮肉を込めた口調で言った

「しかも奴らはまだ何か余裕を秘めているかの様だな。」

ちなみに、紫は先程のハモンド達の会話を聞いて疑問に思っている事があった。

(あのマルクという少年は暴走寸前、嫌な予感がするわね。他にも奴らの存在は“存在しない”事になる？色々気に掛かるわね。)

竹林のとある場所で二人の少年が戦ってる最中だった。

「……………ハア、ハア……………」

「……………ハア、ハア……………」

どちらも息を切らしていたが。

「……………ペツ！……………」

片方は血の混じった反吐を吐く程に余裕が無く。

「……………フツ、フハハハハハ！」

片方は笑う程の自信と余裕があった。

「やはり俺の方が優れている。そうだろう。」

「……………まだだ。」

「負けを認めろ！」

マルクがまだ息を切らしているアダムへと飛び掛かった。

マルクからの攻撃を避けていくが、反撃の余裕が無い。

駆け込みナツクルを体ごと横に避け、続けて出される裏拳を受け止める。

次々と繰り出される、肘打ち、ミドルキック、ストレート、連続パンチ10発、を躲していく。

フックをしゃがんで避け、ローキックを跳び上がった避ける。

跳び上がったアダムを追い掛ける様にマルクも跳び上がり更なる攻撃を加える。

マルクの空中連続蹴りを受け止めていく。

マルクの足を掴み、自分側に引き寄せる。

引き寄せると同時に裏拳をヒットさせる。

掴んだままの足を握り締め、落下し、地面に着く瞬間に勢い良く叩きつける。

マルクから距離を取り、マルクが起き上がる。

「……チツ、しぶとい野郎だ。」

次の瞬間、マルクが地面を駆けた。

次々と繰り出される連続攻撃を避けていくが、さつきよりも速く、余裕が無い。

パンチをガード出来ずに自分の腹にボディブローを受けた。

アダムが怯んだ隙に足を掴み、自分側へ引っ張り、バランスを崩す。

地面に倒れたアダムへ怒涛のラッシュを喰らわす。

1秒間に何十発も繰り出されるパンチがアダムを吹き飛ばす衝撃でアダムの倒れている地面の箇所クレーターを作る。

「……ぐはっ！」

「……まだ生きてるか。」

次の瞬間、アダムが起き上がると同時に放った回転蹴りがマルクの脛に決まり、マルクを地面に倒す。

そのまま踵落とし、ナツクルを決める。

しかし、更に繰り出す肘打ちを決める前に、マルクが後方へバク転して避けると同時にアダムの顔面に両足蹴りを決めた。

アダムが後方へと吹き飛ばされ、背後に回ったマルクがそれを受け止める。

マルクのアッパーカットが決まり、アダムを上空へ吹き飛ばす。

追い打ちを掛けるべくアダムを追い掛ける様に跳び上がり、アダム

へとオーバーヘッドキックを繰り出し、アダムを地面に叩き落とした。

落下中に両手を組んで頭の上に振りかざし、着地と同時に組んだ両手を振り下ろす。

ボキッ！

「うおおああああ!!!」

降下両手ナツクルはアダムの右足に決まり、右腿の骨を折った。

「後は、殺すだけだか。もう少し楽しませてくれるかと思ったが、とうとう終わりの時が来た様だな。だっ！」

ボキッ！

「ぐ、ぐああああ!!!」

マルクの蹴りがアダムの左足の骨を折った。

「おりゃー！」

ボキッ！

「ぐああああ!!!」

マルクの肘打ちがアダムの左腕の骨を折った。

「次は右腕を折り、その次は心臓と脳を除く器官を潰し、それから心臓を突き破り、最後に頭を潰して殺すでしょう。最高の殺し方だと思わないか、なあアダム。」

不意にマルクの足を何かが掴んだ。

アダムの右手がマルクの足を掴んでおり、アダムが腕を引き、マルクを地面に崩し倒した。

「クソッ！このっ！」

マルクはすぐ起き上がり、力を込めた握り拳を頭上に振りかざした。

「アダムっ！」

後方から少女の声がした。

二人がその方向を振り向く。

アダムは自分の最も信頼できる人物の姿を確認した。

マルクは少女が自分へ向けて弾幕を放っていたのを確認した。

マルクが体を捻りながら避け、後方へと下がっていく。

「アダム！大丈夫?!」

「…………… 霊夢…………… 逃げろ……………!」

アダムが強く、しかし弱々しい声で警告する。

「クソツ、この“低知能”で“低性能”の人間めが邪魔しやがって…………… お前も死にやがれ!」

「アダム、あなたを見捨てるなんてとても出来ない。絶対にあなたを助けるわ。」

霊夢は何か決心した様な顔でマルクの方を睨んだ。

それに対し、マルクの方は余裕に満ちた笑みを浮かべた顔で、

「どうした?」文化だけが取り柄”の“低知能”で“低性能”なお前が俺と戦うつもりか?それは無理だ。試してみるか?」

と、嘲笑う様に言った。

「…………… 「夢想天生」……………!」

霊夢が静かに、そして怒りが籠った口調で、自分の切り札を発動した。

28 決着

霊夢がスペルカードを唱えると、霊夢が妖しい白い光と8つの陰陽玉を纏った。

8つの陰陽玉が恐るべき量の弾幕をマルクに向かって放出する。「一気に勝負を付けるつもりか。面白い。」

マルクも恐るべき速さで地を駆け、体を捻り、弾幕を避けていく。一方でアダムは、

(そうだ、今の内に……。)

唯一動かせる右手をフル活用して地面を掴んでは体を引きずり、何処かへとゆっくり向かって行っていた。

ちなみにこの事はマルクも霊夢も気付いていなかった。

空中で華麗な回転を見せながら弾幕を避けていくマルクへ更に弾幕を撃ち込む。

迫り来る弾幕を後方へ回転しながら避ける。

宙を舞う軌道上にある竹を確認し、竹を思い切り蹴る。

蹴りの反動で反対側、つまり霊夢側へ跳躍する。

霊夢へと跳び蹴りを繰り出すが、対する霊夢は全く動じていない。

跳び蹴りは霊夢の顔面にヒットしたが、ヒットした瞬間、何かが炸裂したかの様にマルクが弾き飛ばされた。

(成程、攻撃は効かないのか。なら効果が切れるまで待てば良いだけだ。)

難無く着地し、更に迫り来る弾幕を避けていく。

前後左右上下へ、マルクの動きには一分の無駄も無かった。

(全然当たらないわね……これでは無駄になってしまう……こうなったらもう全力で！)

マルクは陰陽玉から放たれる弾幕の量が増したのを確認した。

(チツ、厄介だ。)

無駄の無い動きのマルクだったが、遂に1発被弾する。

それをきっかけに、2発、3発と被弾する量が増していった。

(クソツ、こんな大した文明も持たない奴に、しかも女相手に手こずる

とは……………」

(当たる様になったのは良いけど、これでは倒せない……………)

突然、マルクは自分の体に何か巻き付く感触を覚えた。

(これは、ロープか？何でこんな物が……………)

それが何なのかを確認したと同時に後ろへ引つ張られる感触を感じた。

体が動かされない様に咄嗟に踏ん張るが、間違いだった。

振り向くと、自分を引つ張った、つまり自身に絡まったロープの先には、ロープを引つ張った反動で自分の方へ飛んで来たアダムの姿があった。

距離はあと10m。

マルクにとつては十分に避けられる距離だったが、後ろから隙を突かれた霊夢の弾幕を被弾し、回避行動が出来なかった。

そして、アダムの体当たりがマルクの腹に決まる。

二人とも体当たりによつて吹き飛び、地面に倒れた。

「クソツタレ！体もロクに動かせないこんな奴に！」

「霊夢！」

「やあ————っ!!!」

霊夢が残った力全てを込め、倒れて怯んだ状態のマルクへと全力の弾幕を放った。

「畜生!!!だが俺は絶対にお前を殺すぞ!!!」

それがマルクが最後に残した言葉だった。

マルクの身体は弾幕を受けて吹き飛び、地面に倒れた後、二度と動く事は無かった。

「…………… 霊夢…………… 逃げろと言った筈だ……………」

「馬鹿…………… あなたが死ぬかも知れなかったじゃない！」

「…………… でも…………… ありがとう…………… 霊夢…………… 本当に感謝する……………」

そう言い終えると、意識が遠のいていくのを感じ、最後に自分の名前を叫ぶ少女の声を聞きながら目を閉じた。

「ディック1号から信号が途絶えました。」
「何だと?! くそっ!」(やはり…………… アダム、お前なのか?)

「…………… 今度はマルクも死んだ。」

「マジかよ。」

「境界「永夜四重結界」!」

「未来「高原」!」

「インペリシヤブルシューティング」!」

ハモンド達と戦っている紫達にも限界が来ていた。

ロブが重機関銃から音速の3倍で、1秒間に150発のペースで放つ銃弾で迫り来る弾幕を迎撃し、

ハモンドが右手に握る1秒間に50発のペースで銃弾を吐き出すサブマシンガンと左手に握る1秒で4発のペースの追尾機能付きの

グレネードランチャーで紫達を攻撃する。

「だが、心配はしなくて良い。あちらも限界らしい。まあ結構楽しめたから良しとしよう。」

「終わりに言っても殺すんじゃないやあ無いからな。」

そう言う二人の息はまるで乱れが無い。

(幻想郷の賢者ともあろう私がこんな人間に…………。)

グチャツ!

その時、何かが肉を潰す様な音が聞こえた。

「…………俺の背後をいつの間に…………?!」

ハモンドの背後から腹にかけて誰かの腕が貫いていた。

その腕はハモンドへと熱エネルギーを送り込んでいく

肉の焼ける音がし始め、

「でやっ!!!」

それから数秒後、リョウの掛け声と共にハモンドの肉体は爆散した。

紫は藍から噂には聞いた事のあるアダムの方では無い方の外来人の姿を、

慧音と妹紅は茶髪で茶眼の親しい青年の姿を確認した。

「遅くなって悪いな。相当手こずって疲れたのでここまででは歩いて来たんだ。」

しかし、その場に居たりョウ以外の4人はリョウの話など耳に入っていないかった。

何せ目の前で人体が爆散したのだから。

(この外来人、柏リョウって言うらしいけど、こんな力、藍が調べきれなかったのか、それとも隠し切っていたのか…………。)

(リョウの奴も、アダムと同様に強いのか…………。)

(目の前でアイツが爆散したけど、私みたいに火を使っている訳では無いのか…………?)

紫達3人の頭の中は驚愕と疑問に埋め尽くされ、

「「エクストラ」?!「灼熱」か!」

ロブは激しく動揺していた。

「まっ、そういう事。どうする？お前に勝ち目は無いぜ。」

だが、ロボは動揺しながらも冷静さを保っていた。

「やる事は決まっている……。」

【自爆コマンド認識 自爆しますか？ 自爆容認を確認 自爆します】

「…… 皆、奴から離れろ！」

「え、え？」

3人は言われるがままにロボから全力で離れる。

「うおおおおお!!!」

次の瞬間、ロボが雄叫びを上げながら全身から激しい閃光が放たれたと思うと、すぎましい爆発が起こった。

暫くして爆煙が晴れると、そこには爆発の痕が残るのみでロボの姿は確認出来なかった。

「今のは一体…… 自爆かしら？」

「その通りだ。秘密を隠す為にな。」

紫の疑問の答えはすぐに返って来た。

「あの、リョウ…… 一体こいつらは……。」

「ああ、全て話すぜ。こいつらの事は勿論、俺の事や外界で起きている事全てを。何せこうなった以上お前達はそれを知るべきだからだ。」

慧音の質問を遮る様に言った。

「その前に、気絶している奴らを起こしたりしなければな。特にアダムには知ってもらう必要があるだろう。」

「ハモンド、ロブからの信号も途絶えました。これだけ準備を整えたというのに全滅とは一体何が……?」

「さあ、私にはさっぱり分かんよ。」(……これはアダムなのか? いや、そうに違いない。私には感じるぞ!)

「ところでディック中佐、ちよつと訊きたい事……というよりかは単なる思い込みなんですけど、」

「何だ? ポール、言ってみろ。」

「中佐は何か隠し事をしていませんか?」

「……何故そう思う?」

「自分には分からない、とおっしゃられていましたが、声に緊張が走っている様だったのです。」

ディック中佐は動揺を如何にか抑えきつたが、ポールに対して気味悪さを覚えていた。

まるで自分の考えを掌握されているかの様に。

「……そりゃあこんな予想外の事が起きれば落ち着いては居られないからな……さて、次は更に戦力を増やす必要があるな。」

「ですね。Aランク以上が4人でもこの始末ですからね。しかも“あちら”の住民も我々を警戒しだすでしょう。ところで、「文化軍」に対する陽動の方は如何になりました?」

「まあ奴らの「侵入」を防いただけで戦力を削るには至っていないが、「侵入」出来たのだから成功と言って良いだろう。もっとも、それから失敗したのだからな。」

「地球軍」は予測通り引きましたね。ですが、これが続けば……。」
「7年前に前線位置はこちらにとつて有利になつてゐるものの、戦力差を痛感させるな。他の前線の者達には悪いが、更に戦力を集める必要がある。」

「人口やエネルギーだけでなく、全体的な科学技術はあちらが上ですしね。救いは「我々」の人数はほぼ同じつて事ぐらいでしょうか……。」

「更に今リヨウから侵入者の撃退に成功したと聞いたが、今回の件で奴らが更に人員を送る事だろう。そちらも対処せねば……。」

29 目的

少年が長い廊下を歩いていた。

隣には青い髪で赤い目をした40代の男性が立っていた。

「よしアダム、「スペースボム」と起爆の仕方は覚えただろうな。」

「はい。それから質問が有りますが、「バーストポイント」はどうやって?」

「おっと、私とした事が、言い忘れていたな。起爆装置同様、この端末に「バーストポイント」を示すマップを搭載している。ちなみに他にも色々機能はあるが説明する必要は無い。」

年配の軍人は思い出した様にそう言うのとポケットから携帯端末らしき物を取り出し、もう一人の軍人に手渡した。

「ありがとうございます。必ずや、地球文明の発展と我々が「地球軍」の勝利の為に、任務を成功させます。」

「その意気だ。私はお前に期待しているぞ。」

「はい。」

話しながら歩いていく内に何処か広い部屋へと着いた。

部屋の中央には核反応炉や量子加速器を思わせる装置があった。

「レポートの際は乗り物酔いに似た症状が現れるそうだが、短時間で治る。計画の二段階目の「バースト」の成功を祈るぞ、アダム。」

「勿論です。失敗なんてしませんよ。」

少年はそう言い返すと装置の人が何とか入れる位のスペースに入った。

そして、重く大きな機械音が鳴り出した。

自身が白い閃光に包まれたと同時に、体重を奪われるような、重力の無くなる感覚を覚えた。

何の前触れも無くアダムが睨み開いた。

「アダム！」

「…………… 霊夢、此処は？」

「心配したのよ！大丈夫なの？」

「体は如何という事は無いが、また変な夢を見た。」

「どんな？」

「自分が原子炉や量子加速器みたいな装置に入る夢だ。詳しい事は分からないが…………… とにかく不明だった。」

アダムは体を起こしながら額に1滴の冷汗が滴るのを覚えた。

街の表通りに対峙する二人の男とそれに注目している観衆。

左側に居るのは、デッキブラシの様に逆立った金髪が特徴の、上半身タンクトップで下半身迷彩柄のズボンの軍人らしき男。

右側に居るのは、長い茶髪を後ろで三つ編みにまとめ、顔面を覆う白い仮面と右腕に鉤爪を付けた、上半身裸の男。

金髪の男が勢い良く腕を突き出す。

その勢いによって衝撃波が発生し、衝撃波は仮面の男へと向かって

いく。

衝撃波一発だけではなく、何発も次々と繰り出していく。

対する仮面の男は引き締まった身体に見合う動きで避けていくが、金髪の男に接近できない。

不意に仮面の男が跳び上がり、金髪の男へと降下キックを繰り出す。

同時に金髪の男が跳び上がり、仮面の男へとサマーソルトキックを繰り出す。

結果は、金髪の男のサマーソルトキックが打ち勝ち、仮面の男を吹き飛ばした。

金髪の男は空中で1回転し終えて着地し、仮面の男は地面に倒れる。

金髪の男が仮面の男の起き上がるタイミングを狙って衝撃波を放つ。

仮面の男が起き上がると同時に、目の前に迫っていた衝撃波を咄嗟にガードする。

同じように衝撃波を連発し、相手を有効に牽制する。

仮面の男は負けじと衝撃波を避けていく。

遂に、仮面の男が衝撃波の放たれる合間を狙ってローキックを決めた。

続けて顔面に2回パンチを決め、そのままローリングによる鉤爪連撃を決めた。

仮面の男は後ろへ跳び上がり、金髪の男はすぐさま起き上がる。

仮面の男は背後にあった壁を蹴り、その反動で跳び、相手へ斬り裂き攻撃を決めた。

そのままストレートで怯ませ、再びローリング攻撃を決める。

金髪の男は受け身を取って起き上がり、相手へと連続攻撃を掛ける。

次々と出される拳と蹴りの嵐だが、全て相手に吸収される様に受け止められる。

最後に2連続サマーソルトキックを放ったが、呆気なく避けられ

る。

仮面の男が相手の着地する隙を突いて駆け込み、すれ違いながら爪で斬り裂く。

すり抜けの勢いを残したまま宙を舞い続け、進行方向にあった壁を蹴り、反対側へと跳んで行く。

怯んだままの男へ跳び蹴りを決め、進行方向にある壁を蹴る。

上に吹き飛んだ相手を掴み、落下速度を活かしたバックドロップを決めた。

ブラウン管の画面の中では、今まさにそんな戦いが繰り広げられている最中だった。

「あーっ！また負けたー！」

「待ちガイルとはいいい戦法だが、読み合いがまだまだだ。そんな実力ではバルログマスターの俺には勝てねえぜ。」

「大体何で殆どの攻撃をジャスガ出来たのよ！」

「俺にはフレーム一つ一つがはつきりと見えるのさ。」

「くうー！今度はダルシムでリベンジよ！」

「ほう、じゃあ待ちガイルで挑んでやろうか？」

「むー！また馬鹿にした！」

「か、輝夜、ゲーム如きでそんなムキにならないでも……。」

「まあ、永琳さんよ、これは俺達にしか分からない領域だ。素人が口を割るもんじゃ無いぜ。しかし、アダムは全然起きないな。大丈夫なのか？」

「もう12時間も目を閉じたまま全く動いていないし、そして何といてもあの子の回復力は全く凄いわね。もう骨折が殆ど治っている。」

「それから、奴らに注射された奴らの方はどうだ？」

「何とか中和薬を作れたのは良いけど、記憶はぼんやりとしか覚えていないかも知れないわ。もうそろそろ目を覚ますと思うけど、記憶が曖昧になっているかも知れないわね。しかし、あんな薬があると……投与した者を12時間失神させ、記憶を24時間分消す薬なんて。」

その時、丁度永琳の台詞の終わりと同時に障子が開いた。

「アダムが起きたわよ。」

「リヨウ、昨日の奴らの事を教えてくれ。知っているんだろ？」

「ん？ああ。だがもう少し待ってくれ、他の奴らが全員起きたら話す。」

暫く、1時間以内に、注射を打たれて気絶していた咲夜、レミリア、妖夢、幽々子、魔理沙、アリスが起き出した。

そして、昨日のリヨウを除く異変の関係者、つまり、アダム、霊夢、魔理沙、咲夜、レミリア、アリス、妖夢、幽々子、紫、藍、慧音、てゐ、鈴仙、輝夜、永琳、妹紅、この16人がそろった。

「よし、それじゃあ……どこから話すべきか……まずは“俺達”と“奴ら”の事だ。」

アダム達はリヨウに注目した。

「俺は「人類共和軍」の諜報部に所属する者だ。」

「その「人類共和軍」って何だ？」

魔理沙が訊いた。

「略称「HPF」(Human Republic Force)。「文
化軍」、「反乱軍」とも呼ばれる。「地球管理組織」に対抗する組織だ。
こいつは昨日の奴らが所属している組織で「EMO」(Earth M
anagement Organization)。とか「地球軍」と
か呼ばれている。こいつらは人類に平和と繁栄をもたらすのが目的
らしいが、そのやり方が非人道的でな、例えば人民に一切の感情を持
たせる事を禁じたり、マイクロチップを埋めて番号で管理したり、俺
達がそれを阻止しているって事だ。」

「EMO……という事は、僕は元々その地球管理組織に所属してい
たという訳か。とすれば、僕が此処にきた理由もそれに関係している
のか？」

「それで、その組織は何が目的で此処へ来ているの？」

アダムと紫が続げざまに質問する。

「奴らの目的は分かっている。此処へ人員を送り込み、何らかの方法
で幻想郷を覆う結界を破壊し、此処を制圧し、「ユニバーシウム」を採

掘する事が奴らの目的だ。そして、それを阻止する為に俺が此処へ来た。しかし、どうやって結界を破壊するかは分かっていないが。お前もこの計画で送られたんだろうな。」

「そんな事が……でも今の僕は幻想郷を敵にするなんて出来ない。僕はこれを知っても幻想郷の味方だ。」

「その「ユニバーシウム」とは？私も以前外界へ来た時に調べた事があるけど、大した事は分からなかったわ。」

再び紫が質問する。

「それは安心だアダム。それで「ユニバーシウム」ってのはな、詳しくは説明されてないが、物質と反物質の丁度中間に当たる「中物質」の一種で、「エネルギー」や「インフォームイオン」を内部に引き寄せる効果がある。これが何故か外界には殆ど存在しなくて、何故か幻想郷の地中に大量に含まれている事が分かっている。」

「全く次から次へと疑問点が湧くわね。その「エネルギー」と「インフォームイオン」って何かしら？」

永琳が呟く。

「そりゃあ、お前達が一切知らなかった事だからな。「エネルギー」ってのは宇宙空間の何処でも存在する素粒子の一種だ。ダークマターみたいなもんかな？これを構造する「インフォームイオン」を組み替える事によつて熱、光、力学、音、要するに全てのエネルギーに変換出来る。それと「インフォームイオン」はエネルギーを構造する以外に他の素粒子やエネルギーを構成する最小単位でもある。そして、何故かエネルギーやエネルギー以外のインフォームイオンは確変出来ないが、逆にエネルギーやエネルギーの奴であれば確変可能だ。それから、これらを利用できる人類、つまり俺やアダム、昨日の奴らみたいな奴らの事を「トランセンデンド・マン」と呼ぶ。並外れた身体能力とかはその所為だ。」

「凄いな。外の世界ではこんなに詳しい事が分かっているのか。私が聞いた事ある以上に文明が進歩しているんだな。」

慧音が感心した様に言う。

「話はまだあるぞ。そのユニバーシウムのエネルギーを吸い寄せる性

質を利用して永久機関を作り、俺達反乱軍に対抗しようというのが管理軍の目的だ。ついでに、幻想郷と言う霊力、魔力といった類の力はこのエネルギーが元になっているという説もある。」

「そういえば、どうやってこの幻想郷に入るわけ？現にアダムやあなたも此処にいる訳だけど。」

霊夢が言った。

「それは「スペースマシン」って装置を使う。本来は莫大なエネルギーを利用して空間に僅かに開いているワームホールを拡大してワープを行うという装置だ。この莫大なエネルギーを利用して結界を破壊するまでの性能は無いが、結界に僅かな穴を開けたり、結界を安定化・不安定化させたりも出来る。此処へ来たのはその中の穴を開ける機能による物だ。」

「僕が夢で見た装置はそれだったのか。それで、何故それを早く言わなかったんだ？」

アダムが質問した。

「そりゃあ何も起きていないのにこんな事を聞いて信じるか？下手したら幻想郷中が大混乱になるしな。特に新聞屋とかに聞かれでもしてみろ。だからこのタイミングで言った。」

リヨウ以外の全員は呆然として黙り込んだ。

「他にも、結界は幻想郷内の異変によっても不安定になる事が分かっている。だから異変は起こさないでくれ。そして起こる前に防ぐことだ。」

少し喋りを止め考えを整理する。

「まだ何か質問があれば後で教えるぜ。それから、この事は他の奴らには内密にしていってくれ。さっき言った通り混乱を招いてしまう。特に天狗とかのメディアには注意してくれ。全く、アイツには苦労してるんだ。」

最後は冗談を効かせながら言い終える。

アダム達は頷き、リヨウは疲れたのかため息をついた。

設定集（～永夜抄）

【人物紹介】

氏名：アダム・アンダーソン

年齢：16歳

生年月日：地球歴0001年7月13日

血液型：B+

出身地：ノースアメリカカーロサンゼルス

総合戦闘値：44（ランク：A 内訳 A（Attack：攻撃）：

8 S（Speed：速さ）：10 D（Defense：防御）：8

E（Energy：エネルギー）：8 P（Perception：

知覚）：10）

身長：167cm

体重：61kg

目の色：深い青

髪の色：青がかった黒

使用武器：

・「シルバーファルコン」2丁

種類：TM（トランセンデンド・マン）専用ハンドガン

弾速：1700m/s

連射速度：50発/s

威力：37800J/発

最大エネルギー放出量：1890000J/s

製作：「ペルセウス」社製

・「シルバーウルフ」2本

種類：TM専用コンバットナイフ

刃：両刃 刃渡り：20cm

切断方式：高周波、エネルギー強化複合方式

最大エネルギー放出量：1890000J/s

製作：「ペルセウス」社製

・「スマートアナコンダ」2本

種類：TM専用コンバットナイフ用機能拡張具（ロープ）

全長：50m

特殊仕様：ロープに接続したTM専用武器にエネルギーを送る、ロープ自体の強度を上げる

製作「ペルセウス」社製

特徴や性格等：

- ・一般常識といった情報記憶は殆ど思い出したが、自分自身や思い出等の意味記憶は殆ど思い出していない
 - ・常に冷静沈着で無表情で、感情を表に出す事が無い
 - ・何事も合理性優先で、無駄を省き手短に終わらせようとする
 - ・他人の感情が分からない
 - ・怒り以外の感情を表に出した事が無い
 - ・特技は近接戦闘、機械や武器の整備、狩り、計算、科学の応用
- その他：不明

氏名：柏リヨウ

年齢：28歳

生年月日：地球歴前0010年2月12日

所属：人類共和軍

血液型：A+

出身地：イーストアジアーオキナワ

総合戦闘値：60（ランク：S 内訳 A：15 S：10 D：

10 E：15 P：10）

特殊能力：加熱（二つ名：灼熱のリヨウ）

身長：187cm

体重：77kg

目の色：茶

髪の色：茶

使用武器：

・「クラッシャー」1丁

種類：TM専用ヘビーマシンガン

弾速：1700m/s

連射速度：100発（連射速度最大時）〜4発（威力最大時）/s

威力：88900J（連射速度最大時）〜2222500J（威力

最大時）/発

最大エネルギー放出量：8890000J/s

特殊仕様：連射速度の変更が可能（ただし、威力はその分反比例する）

製作：カイル・クロード・ウイルソン氏

特徴や性格等：

- ・ 普段はのんびり屋だが、いざという時にはやる
- ・ いつもは微笑している様な顔だが、真剣な時は無表情
- ・ 友好的で誰とでも仲良くなれる

・ 多少ナルシスト

・ 機械いじり、衣服創作、戦闘、洋画（アクション、SF）、バイク（ホンダ、カワサキ製）、音楽（主に90年代ロック）、漫画、ゲーム、女（幼女は除く）が好き

・ 直感を大切にする

その他：不明

名前：マルク・？

血液型：A+

身長：167cm

体重：61kg

目の色：深い赤

髪の色：赤がかつた黒

特徴や性格等：

- ・ 荒っぽい
- ・ 怒り易い
- ・ アダムの事を憎んでいる

その他：不明

名前：ロブ

年齢：22歳

所属：地球管理軍

総合戦闘値：41（ランク：B | 内訳 A：7 S：7 D：7

E：10 P：10）

身長：175cm

体重：67kg

目の色：黒

髪の色：茶

特徴や性格等：

- ・穏やかで常に落ち着きがある
- ・永夜異変にて死去

名前：ハモンド

年齢：21歳

所属：地球管理軍

総合戦闘値：44（ランク：B 内訳 A：10 S：8 D：8

E：10 P：8）

身長：184cm

体重：74kg

目の色：緑

髪の色：金

特徴や性格：

- ・荒っぽくがさつ
- ・永夜異変にて死去

氏名：バエル・ソロ

年齢：41歳

所属：地球管理軍

総合戦闘値：(ランク：EX 内訳 A：15 S：10 D：10

E：15 P：10)

身長：188cm

体重：77kg

特殊能力：加熱 (二つ名：プラズママン)

目の色：黒

髪の色：青

特徴や性格等

- ・冷静
 - ・強い者と戦うのが好き
 - ・永夜異変にて死去
- その他：不明

【固有名称、用語、世界観等】

・エネルギー：

素粒子の一種であり、一次エネルギーの一種

空間全域に大量に溢れているが、生物で利用できるのは「トランゼンデンド・マン」のみ

エネルギーは「インフォーマイオン」でエネルギーの情報を確変する事によって一時的に二次エネルギーに変換する

二次エネルギーに変換されたエネルギーは長時間かけて元のエネルギーに戻る

逆に二次エネルギーからエネルギーへ変換も可能で、エネルギーに変換された二次エネルギーは長時間かけて元のエネルギーに戻る

幻想郷における霊力や魔力、気力や神力も本質的にはエネルギーと同じである

トランゼンデンド・マンはこれを知覚出来る

・インフォォーミオン：

素粒子の一種であり、全ての素粒子の構成のもととなる素粒子の最小単元

二次エネルギー、エネルギー以外のインフォォーミオンは何故か確変が不能で、二次エネルギー、エネルギーを構成するインフォォーミオンのみが確変可能

トランセンデンド・マンはこれを知覚出来る

・ユニバーシウム：

物質でも無く反物質でもない「中物質」の一種

エネルギーやインフォォーミオンを内部に引き付ける効果がある

これを利用して永久機関を作る事が出来る

地球上には殆ど存在しないが、何故か幻想郷の地中には大量に存在している

・トランセンデンド・マン：

エネルギーを体内に引き付け、インフォォーミオンを直接的、間接的に操作する事ができ、それによってエネルギーを二次エネルギーに変換する事が出来る人間

超越人、Tマン、TM、トランセンド、と略される事もある

種類には先天的な「ジエネティック」、突然変異による「ミュータント」、人工的に生み出された「マンメイド」や、これらの複合種がある
トランセンデンド・マンはエネルギーを変換し、身体能力や身体防護に利用出来る

・総合戦闘値：

トランセンデンド・マンの能力を数値化した物

攻撃力 (Attack)、防御力 (Defense)、速さ (Speed)、エネルギー量 (Energy)、知覚 (Perception)、の5つからなる

一般的なトランセンデンド・マンはそれぞれの数値が7.5 (通常の人間の限界能力の約3.4倍)

・TM専用武器：

トランセンデンド・マンのみが扱える武器

トランセンデンド・マンの多くはTM専用武器を使わなくては遠距離攻撃が出来ない

その為これを利用して遠距離攻撃等を行う

銃であれば、使用者のエネルギーとインフォミオンをグリップ部の吸収装置で吸収し、エネルギーを構成するインフォミオンの並び方を特殊な回路によるプログラムで確変し、エネルギーの比率、弾速、一発当たり威力、という具合に決めたエネルギーを銃身の発射装置で発射する

エネルギーの一部は発射時に加速エネルギーとして利用し、銃弾がエネルギーや密度の高い物質や素粒子に衝突すると同時にエネルギーをその他エネルギーに変換させる

・中物質：

物質と反物質の中間に当たる物質だが、元素周期表が通用しない物質、反物質、それ自身と対消滅を起こす事は無い

確認されているのはユニバーシウムのみ

・スペースマシン：

本来は莫大なエネルギーを利用して空間にワームホールを作る装置

莫大なエネルギーを利用して幻想郷の結界を乱したり、穴を開けたり、安定させる機能もある

・地球管理組織：

略称EMO

国家に変わり地球全体の社会・環境問題を解決し、人類の文明の維持と向上する事が目的の組織（計画は非人道的）

管理軍、地球軍とも呼ばれる

・人類共和軍：

略称HRF。(Human Republic Force)

地球管理組織の非人道的な計画を阻害し、人類に自由と平等をもたらそうとする組織。

文化軍、反乱軍とも呼ばれる

・地球歴：

略称E・C・

地球管理組織が地球上の全国家の解体を機に作った新たな統一歴

・ユニバーシウム・マイン計画：

地球管理組織が立てた計画

H P Fではまだ詳しい事は分かっていない

0.5 幻想郷の休日

30 花見に行こう

永夜異変から数日後。

「準備は良い?」

「ああ、頼む。」

霊夢が弾幕の嵐を放出する。

対するアダムは銃を2本腰から取り出す。

1つの銃が1秒で25発、2つ合わせて1秒で50発のペースで銃弾を吐き出し、弾幕を打ち消していく。

右手の銃は元から自分の物だったが、左手の銃は数日前までマルクの物だった。

それと同様に、腰にも自分の物とマルクの物のナイフが2つある。現在アダムは二刀流に慣れる為の修行をしている最中だった。

また、管理軍が侵入して来た時に対応する、という目的もある。

銃弾による防御では捌き切れなくなったアダムは銃を仕舞い、ナイフを2本引き抜く。

洗練された動きで2本のナイフを有効に扱い、弾幕を防御する。

やがて弾幕の嵐が止み、ナイフを鞘に入れた。

「私には剣術はあまり分らないけど、中々いいんじゃない?」

「だいぶ慣れてきた所だ。しかし、二刀流は有効に扱える様になるまでが難しいものだ。動きを間違えれば自分に当たってしまうからな。」

そして、丁度いつもの様に魔理沙が箒に乗ってやって来た。

「よう、今日も来たぜ。ところで2人とも、今日起きた事なんだが、南の花畑の方で全ての季節の花が一晩で咲いたって知ってるか?」

「へえー、ちよつと気になるわね。見てみようかしら。」

「幻想郷は相変わらず非常識な事ばかり起こるものだな。もう慣れているが。もつとも、此処では常識なんだろうが。」

「そんな事無いぜ、少なくとも私は全ての季節の花が咲くなんて聞い

た事も無いんだ。それより早く見に行こうぜ。また箒に乗っていけよ。」

「ああ。毎回悪いな。」

「別に気にする事じゃあないだろ。ほら早く。」

3人は早速目的地へと飛び上がって行った。(といってもアダムは箒に乗っているだけだが。)

リヨウの2階の自室では90年代ロックと思われる音楽が大音量で流れていると共にリヨウがその曲を歌っていた。

CDプレイヤーの曲名表示部分には「Rock Is Dead」と書かれていた。

エイリアンのガキを背負ったバカナサル共

少年用アンフェタミン

淑女の為の十字架

標本にされた生気を失った抜け殻

世界的広がりとかモの巢の広がり

お前は生き物全てを売り渡す

より安らかな死の為に

そして、曲はサビの部分まで来た。

「Rock!!! Is deader than dead!!! Sho
ck!!! Is all in your head!!! You
r.....」

リヨウは自身の名前は日本風であるが、完璧な、慣れている様な発音で、音も外さずに歌っていたのだが……

「リヨウ、うるさいぞ！近所迷惑だ！」

タイミングが良いのか悪いのか1階から慧音の声が聞こえてきた。

「何だど？お前マリリン・マンソンの良さが分かってないだろ！」

「全く……飽きない奴だな。」

「お前こそいつも俺に構いやがって。俺の事好きなのか？」

「その言葉聞き飽きたぞ。」

これはいつも通りでリヨウも慧音も周りの人々もすっかり慣れている。

「さて……これから何しよう……。」

ふと、リヨウはある事を思い出した。

「……確かこの前の奴らの武器があつたな……あれ分解して何か作ろうかな……とりあえず材料無いし、霖之助んところでも行くか。」

アダム達はその全ての季節の花が咲いているという里から南へ行った所へ来ていた。

「本当に全ての季節の花が咲いているのか。」

「だろ。綺麗だよな。」

「でも、どうしてこんな事になってるの？私は異変かと思うんだけど。」

「さあ、私には分からんが。まあ悪い事が起きている訳じゃないし。でも不思議だよな。」

「通常花というのは一定の条件が揃って咲く。それは種類によって違う。その条件が一度に揃う事など有り得ない。それは全ての生物が皆一斉に滅びない為だ。」

「よ、良く分からん……………」

突然、アダムが銃を2つ取り出し、後ろを振り向く。

銃を向け引き金を引く。

合計150発の銃弾が発射された。

霊夢と魔理沙が遅れて振り向く。

「い、一体何?」

「何が起こったんだ?」

「見ろ、あれだ。」

霊夢達はアダムの視線を辿り、そこに少女が一人倒れているのを見つけた。

「先程こちらに対して弾幕を放ったんだ。注意する必要があるな。」

「よ、容赦無いな……………」

「リリーホワイトね。春を告げる妖精なのだけど、異変で活性化しているのかしら。」

「分からん。詳しく調べてみよう。大して危険は無いと思うが、気を付けろ。」

アダムは跳び上がり、何処かへと行った。

「どうする? あたし達も何か調べてみるか?」

「そうね、少なくともただ事では無いわ。手分けして何か手がかりを探してみましよう。」

霊夢と魔理沙も別々の方向へ飛んで行った。

自分達に脅威が迫っていると知らずに。

さっきまでアダム達が居た場所に一人の女性が来ていた。

「誰かしら、この花畑を荒らしたのは。」

女性は先程アダムが倒したりリーホワイトと、その周辺にある倒された花を見て言った。

そして、その声には怒りが混じっていた。

「霖之助、居るかー？」

「何時でもいるさ。珍しいなリヨウ、何の用だい？」

リヨウは香霖堂へ来ていた。

「何か無い？」

「何かあって何だよ。」

「とにかく何か。そうだな、機械的な物とか。」

「機械類ならそこに置いてある筈だよ。」

霖之助はゴミの山としか思えない様に置かれてある機械達を指差した。

「サンキュー、つってもごちやごちやし過ぎだろ。」

「これでも分類分けはしてるんだ。」

「そんな都合の良い事がある訳……おっ！」

リヨウは棒状のハンドルらしき物を見つけ、引っ張る。

機械の山が崩れると同時に、それは姿を現した。

無駄という無駄をそぎ落としたフォルム、黒と緑が基調の引き締まる様に見えるカラー、前後に2つの車輪、人が2人分乗れる位のシート、フロント部のバグガードと大きなヘッドライト、半分むき出しになっている機関部。

左右両側に「Ninja」の文字のあるそれはリヨウにとって都合の良い物だった。

全長が2 m近くもあるバイクだ。

しかし、エンジンで走る自走車両にはある筈だが、これには無いものがあつた。

「すげえ…… カワサキの「Ninja EX-R」じゃないか！半世紀も前のレア物がこんな所にあつたとは。ガソリンでは無く電気だから…… 一応うちに太陽光パネルはあるが、大した出力は出ないし…… もっと高出力の太陽光パネルがあれば良いが、そんな都合の良い物がある訳……」

そう、電気を利用する為マフラーが無いのだ。

「確かあつた筈だ。」

「イ”エ”エ”ア”ア”！変な声出ちまつた！こんな奇跡があつたとは！」

「まあ落ち着いてリヨウ、そんなに凄い物なのかい？」

「当たり前だろ！それいくら?!言い値で買ってやる。」

「と言っても、バイクに太陽光パネルなんて此処で使う人なんて居ないもんな……何か損する気分だが、2つともタダで良いよ。」

「エ”エ”ーイ”!!!」

「…… 良かったね……」

「あ、そうだ。」

「……」

霖之助はリヨウの急な冷め方に拍子抜けした。

「実は飛行マシンを作ろうと思つていてな、それに使える様な物無いか？」

「飛行マシン…… 分からない……」

「まあそんな都合の良い話がいつもある訳じゃあ……」

リヨウは偶然にもある物を掴んでいた。

機械の山からそれを引き抜いた。

「あつたよ…… お前ただけだよ……」

「そんな事言われても……」

リヨウは大型のリュックサック大のジェットパックらしき物を持っていた。

そのケーブルには手袋やブーツ、ヘルメットらしき物も繋がっている。

「これ、昔にとっつかのバカがアイアンマン作ろうとした時の試作品そのものじゃねえか！これ貰っても良いか？」

「良いけど……」

「エ”エ”ーイ”!!!」

リヨウは両手を上に挙げたまま大ジャンプし、天井を突き抜けた。

「…… 屋根修理してくれよ……」

「…… オツケー…… すまん、はしやぎ過ぎた……」

一方、幻想郷の上空にて。

「最近はどうも詰まなくなって退屈ね…… そうだ、良い事思いついたわ。」

とある少女が腰に収めてある剣を引き抜いた。

柄の部分は多少の装飾があるだけだが、刀身の部分は緋色に輝いていた。

「これで異変を起こして面白くしようかしら。準備にチョット時間が必要けど。」

その声の100%は楽しみで構成されていた。

31 真紅の花を咲かせろ

平和そうな雰囲気の漂う筈の花畑は殺気立っていた。

「しつこいな。これでは異変を調べられない。」

そう大した事も無さそうに言ってアダムは2丁の銃を構え、活性化した妖精へと銃弾を発射する。

SF映画で出てくる様なレーザーガンの発射音の様な音が鳴り響いている。

次々と行く手を阻む妖精たちを撃ち落していく。

また、四方八方から自分に向かって飛んで来る弾幕を鮮やかな身のこなしで躲していく。

アダムが通った跡には至る所に気絶した妖精が倒れていた。

「……如何やらこの近くにいる様ね。」

女性が一人、アダムを追っている事は本人の知る所では無かった。

一方でアダムは倒しても倒しても次々と増えて来る妖精達を相手に銃弾を浴びせ続けていた。

上下左右前後、跳び上がって体を捻り、地面を転がり、体を反らせたり回転させたり、最低限の動きで弾幕を避ける。

音速の5倍で、1秒で25発、両方の銃を合わせて1秒に50発放たれる銃弾を妖精達は躲すどころか目に映る前に被弾する。

更に接近して来た者を殴り、蹴り、投げ飛ばす。

そして、妖精達が不穏な動きを見せた。

アダムの目の前から一斉に方々へと去って行ったのである。

アダムの目に一人の女性の姿が映った。

緑のショートボブと対照的な赤い目。

白のカッターシャツに赤のチェック柄のベストと同じく赤のチェック柄のロングスカート。

そして日傘を差している。

「私は風見幽香。この花畑を管理している者よ。貴方ね。この花畑を荒らしているのは。」

「荒らしてなどいない。こちらは正当防衛で植物は巻き添えになって

いるだけだ。」

「花を散らしている事に変わりはないわ。」

「被害を最小限に抑える事は出来ても犠牲が伴う事はある。最小限に抑えられれば問題無い。それにこんな程度は生態系に影響は出ない。」

「貴方、今なんて言ったかしら？」

「要するに多少の犠牲はあっても全体に影響が無ければそれで良い。」
「…… ふざけないで頂戴、花だって尊い命を持っているのよ。」

「何億何兆もある生命体の内の1体の何が尊い。生態系は数%の誤差があっても取り戻す。だから1体程度どうでも良い。ましてや生産者である植物は最も数量が多い。」

「貴方、花を馬鹿にしないでよ！」

怒りの声と共に幽香から弾幕が放たれた。

だがアダムは知らん顔だ。

それが更に幽香の怒りを催促させる。

アダムは慣れた手つきでナイフを2本抜き、構える。

迫り来る弾幕を2本のナイフが弾いていく。

それと同時に、アダムは地面から何かが迫って来ているのを“感じた”。

地面から足を離し、バク転を連続で行い、それを避ける。

アダムが立っていた地面からは通常の何倍の大きさのある花が何本も勢い良く生えてきた。

（巨大な花か。これが相手の能力なのか。接近戦には余り持ち込めそうに無いな。）

ナイフを2本仕舞い、銃を2本取り出す。

幽香へ向けて引き金を引く。

銃弾はどれも女性へ当たる軌道だった。

しかし、銃弾と女性との距離が2mを切った辺りで、銃弾が幽香の持つ日傘に阻まれ、不発に終わる。

そして、自分の足元から勢い良く幹の太いツタが生えてきた。

ツタはアダムに絡み付こうとするが、銃弾によって阻まれ、絡み付

かない。

地面を蹴り、幽香へ向かって駆け込んで行きながら銃を連射する。対する幽香はその場から動じず、弾幕をアダムへと放っていく。そして、互いの距離は残す所3m。

アダムが両足を地面に蹴り付け、音速を超える速度で幽香に突撃する。

しかし、一方の幽香は、

「掛かったわね。「マスタースパーク」！」

「それはどうかな。」

幽香の日傘の先端から極太のレーザーが放たれた。

同時にアダムは2本のナイフをそれぞれ2本のロープの先端に括り付けた。

これもまた片方はマルクの物だった物である。

1本を幽香の足元に投げ、もう1本は後ろへと投げ飛ばした。

右のロープが幽香の足に巻き付く。

ロープを引き、手元に引き寄せる。

バランスを崩した幽香は仰向けに地面に倒れ、レーザーは軌道が逸れ、何にも当たる事無く上空へと飛んで行った。

右手に持つロープを戻し、左手に持つロープを鞭を打つ様に振りかぶる。

ロープの先端に繋がっているナイフが弧を描き、幽香を襲う。

間一髪ので地面を転がって避け、立ち上がろうとする。

しかし、アダムの右手に何時の間にか握られた銃から銃弾が発射される。

至近距離同然の距離で躲せる筈も無く、幽香は攻撃に耐えようと腕を前に掲げ、踏ん張る。

如何にか全発を耐えきったが、目の前にはアダムがストレートを繰り出している途中だった。

直感的にアダムのストレートを掴んで受け止める。

反撃しようと拳を突き出すが、あえなく受け止められる。

暫くその状態のまま対峙する2人。

そして、幽香が先に自分の腕を掴む手を除け、アダムへパンチを突き出す。

パンチは見事アダムの顔面にヒットした。

だが、アダムは体を後ろに回転させる事で衝撃を受け流し、同時に幽香にサマーソルトキックをヒットさせた。

アダムが回転し終えて着地し、幽香は後ろに多少のけ反るが、体勢を立て直す。

「……………」

「……………」

突然、沈黙を破る様にアダムが下段回し蹴りを繰り出すが、幽香は空中へと飛び上がり、攻撃を躲すと同時に距離を取る。

「花符「幻想郷の開花」！」

幽香の周囲を花が咲く様に弾幕が覆い尽くし、アダムへ向かって飛んで行く。

リヨウは森林の中を時速300kmで突き進んでいた。

「いやあ、霖之助から貰って正解だったぜ。しかも俺らの世界では化石も同然なんだし。このフォルムが良いんだよな。」

リヨウは霖之助から貰った大型バイク「Ninja EX-R」に跨って疾走しているのだ。

電動二輪車の為、マフラーから鳴る独特の重音は鳴らないが、その代わりに電気モーター独特のキューン という甲高い音が鳴り

響いていた。

ちなみに出力は排気量1Lのガソリンエンジン以上ある。

迫り来る（と言ってもリョウ自身が進んでいるからそう感じる）木々を難無く躲していく。

途中で走行を邪魔する妖怪とかも撥ねているが。

リョウ曰はく「ドライブを無視して飛び出る奴が1番悪い」との事らしいが。

「何処行こう…… そうだ、永遠亭で輝夜の奴とでも鉄拳か何かでもするか。」

ブレーキを掛け、ドリフト走行で方角を変える。

しかも障害物の多い、大して固くも無いグリップの効かない森の地面でだ。

更にリョウの乗っているバイク「Ninja EX-R」はスピードバイクであってオフロードバイクでは無い。

それでも失敗する事無くドリフトで方向転換を終えた所でアクセルを全開にする。

「やっぱしバイクはカワサキかホンダに限るな。イヤッハウ！」

スピードメーターは時速360kmを超えた事を表示していた。

「霊夢、そっちは何か分かったか？」

「全然。そっちこそどう？」

「全くだ。一体何が起こってるんだらうな。」

「お二人方もまだ手掛かりを掴めていないんですか？」

「そういう事……って文！いつの間にも?!」

文と呼ばれたのは黒いミニスカートと白シャツ、セミロングヘアの黒髪、山伏風の帽子とフィルム式一眼レフカメラ、そして、背中に生えたカラスの様な黒い羽が特徴的な少女だった。

「どうも、清く正しい新聞記者射命丸文です。そりゃあこの異変を取材に来たんですよ。私の情報でも異変については良く分かってませんけど。」

「やつぱし気になるよなあ。少なくともあたしはこんな出来事聞いた事無いぜ。」

「ところで魔理沙、アダム見なかった？」

「え？さあ。まあアイツの事だから一人でも大丈夫だろ。」

「アダムって確か貴方の所に住んでいる外来人ですよ。あとで取材しても良いですか？」

「アダムだから大丈夫ってどういう事なんだか……取材は私は別に構わないけど本人が許可してくれるかは分からないけど。」

「そういやさつき、奥で外来人らしき男が風見幽香と戦っているって噂聞いたんですけど。」

2人が目を見合わせる。

「幽香ですって?!よりによって一番厄介な奴じゃない！それで文、それって何処なの?」

「アイツは怒らせたら一番怖いもんな。悪いけど文、お前も手伝ってくれ。」

「あつ、はい。ここから更に南の方って聞きましたけど。」

「それならさつきと行くわよ!」

3人は文の言った方向へ飛んで行った。

32 2機の戦闘機

アダムはすぐさま腰からTM（トランセンデンド・マンの略）専用ハンドガン「シルバーファルコン」を2つ取り出す。

照準を自分に向かって来る弾幕に合わせ、引き金を引く。

アダムがやっているのはそれだけの簡単（動く弾幕を、しかも大量にあるのを連続して、という事は難しいだろうが。）の動作をしているが、銃の機関部ではそれとは比べ物にならない程複雑な工程を行っている。

まず、グリップ部のエネルギーオン吸収装置から使用者のエネルギーオンを吸収する。

次に、銃身部の特殊回路でエネルギーオンのインフォーミオン配列を変する。

最後に、銃口に当たる部分で発射する。

この銃の場合、吸収したエネルギーオンを塊にし、エネルギーオンの一部を利用して音速の5倍に加速させ、何らかの物質に命中した時、命中した部分に熱エネルギーや破壊エネルギー、運動エネルギーを与える、という様に構造を変化したエネルギーオンを1秒間で25発のペースで発射する。

このエネルギーオンの構造変化が最も複雑なのだ。

こうして発射された銃弾は幽香が放った弾幕を次々と撃ち落していく。

それでもなお、弾幕の量が多い為、徐々に押されていく。

そして、アダムは銃を仕舞い、代わりにTM専用コンバットナイフ「シルバーウルフ」を2本引き抜く。

ナイフのグリップ部がアダムのエネルギーオンを吸収し、特殊回路で刃の部分にエネルギーオンフィールドや高周波を発生させる。

迫り来る弾幕を斬り落としていく。

しかし、それだけでも全ては避けられず、体を捻りながら身体全体を直接動かして避けていく。

そして、両足を折り曲げ、力強く地面を蹴り、幽香へ向かって突撃

する。

両手に持つナイフを腰にあるTM専用近接戦闘武器補助具「スマー
トアナコンダ」に繋げる。

これもまたエネリオン確変回路が内部にあり、ロープ自身の耐久力
を上げたり、先端に繋げられたナイフへエネリオンを送る事も出来
る。

ナイフを繋げた両方のロープを1m程伸ばし、回転させながら幽香
に突っ込んでいく。

弾幕は勢い良く回るロープに阻まれ、呆気なく散る。

そして、ロープに繋がったままの左のナイフを幽香に投げつける。

幽香は体ごと移動して避ける。

続けて右のナイフを投げ飛ばす。

これもギリギリで避けた幽香だったが、

アダムが右のロープを波打つ。

右のロープが幽香に巻き付く。

右手を引っ張り、幽香を引き寄せ、空中回し蹴りを決めた。

吹き飛ばされた幽香は体勢を整える事に集中していたので、アダム

の左腕の動きに気が付かなかった。

アダムが左のロープを波打ったのである。

これも幽香に巻き付き、アダムが引き寄せる。

今度は両足蹴り落としを決め、地面に叩きつける。

アダムは落下しながら右足を高く上げ、着地と同時に幽香へ踵落と

しを繰り返す。

すんでの所で幽香が躲し、アダムの着地点にツタを生やす。

極太のツタが足元から勢い良く生えてきたが、後方へ跳び、躲す。

アダムが着地し、幽香が起き上がり、再び沈黙が流れる。

しかし、沈黙を破ったのはアダムでも幽香でも無かった。

「二人ともストップ！落ち着きなさい！」

タイミングが良いのか、悪いのか、丁度霊夢達が来たのだ。

「何を言う霊夢。僕は何時でも落ち着いている。悪いのは不合理な理
由で襲って来た奴だ。」

「こいつは花を馬鹿にしたのよ！落ち着いていられるものですか！」
「ま、まあ二人とも、まずは仲直りだ。アダム、まずは……その花の事を謝れよ。」

（それにしても幻想郷は変なものだ、合理性を重視しないとは。まあ魔理沙の言う通り謝るとするか。）「……悪かったな。植物を、馬鹿にして……すまなかった。」

「……まあ謝ってくれるなら……。」

全ては落着に思えた。

しかし、それを一気に崩す者が1人居た。

パシャツ

フラツシユと共にシャツター音が鳴った。

「それじゃあ私はいいネタが撮れたので退散しまーす！見出しは「ドSの花妖怪は優しい男に弱かった」にでもしておきますか。売り上げが楽しみです！」

そう嬉しそうに言いながら文は全速力で飛んで行った。

速度は音速に匹敵する。

「あつ！あのカラス……今度会ったら焼き鳥にしてやる！」

幽香がそう呟き、飛び去っていく文を睨みつける。

「全く、いつも新聞のネタばかりしか考えていないんだから……。」
「マスメディアが虚偽の情報を流すのは何処の世界でも同じなんだな。」

霊夢の呆れを他所にアダムがただ思いついた事を呟く。

「どうする？追いかけて懲らしめてやるか？」

「私なら是非そうしたい所だけど……。」

文の飛行速度は幻想郷でも1番と評せられる位なのだ。

「いや、方法はある。マスメディアに虚偽の情報を広げさせるのは非常に厄介だ。魔理沙、箒を貸してくれ。」

「え？ああ、確か幽々子んこの異変もあたしの箒を使ったな。ほら良いぜ。というか魔力も無いのに飛べるんだな。」

「リョウが言っていただろ、霊力や魔力と言ったものは本質的に全てエネリオンと同じだと、いや、エネリオンが僅かに変化して霊力や魔

力に変わったと言えば良いか。」

魔理沙はアダムに言われた通りに箒を渡し、アダムがそれに片手だけを掴み、そのまま飛んで行った。

音速を超えた証拠である衝撃波を発生させながら。

「……アダムの奴、随分変な飛び方をするな。あんなんでも良く飛べるもんだ……。」

「……多分、アダムの事だから多分空気抵抗を減らしてるんじゃない？詳しくは良く分からないけど……。」

「……。」

アダムの行動に呆気を取られた3人は暫くそこに立ち尽くしていた。

リョウは竹林の中を時速360kmで走り抜けている最中だった。

狭い間隔で並ぶ竹を難無く重心移動によって避けていく。

そして、リョウの耳にはイヤホンが付いており、イヤホンの先には胸ポケットの中にある携帯端末らしき物が付いていた。

ちなみに携帯端末らしき物の液晶画面は点いていないものの音楽はしっかりと聞こえる。

そして、片手でハンドル操作（それも時速360kmで竹林の中を走っている時）しながら端末の曲変更ボタンらしきボタンを何回か押す。

「ええと…… Tスクエアかマトリックスどっちが良いか…… F

1だがTスクエアにするか。」

曲名「Truth」はリヨウの聴覚を刺激し、リヨウは更にアクセルを捻る。

スピードメータは時速400kmを表示していた。

1世紀以上前にも作られた名曲は1世紀以上経つたりリヨウに影響を与える程の影響力だった。

「……もう暫くドライブしてから永遠亭には行こうかな。せめてあとマトリックスの方も聞いてからにしても良いか。」

これ程リヨウはバイクが好きなのだった。

いや、幻想郷でバイクに乗れるという事にはしゃいでいるのか。

端末を操作し、次に再生する曲を「Mona Lisa Over drive」に設定した。

突然、時速400kmの勢いと僅かな丘陵により、「Ninja E

X-R」は僅かな傾斜をジャンプ台替わりに宙を舞った。

「まだまだ物足りねえぜ！」

アダムは現在右手に箒を持ち、左手に銃を握り、その照準を200m前方を飛んでいる文に定めながら音速を超える速度で空を飛ぶという荒技をしている真最中だった。

ようやく狙いが定まったのか、引き金を引く。

音速の5倍の速度で2秒間、つまり50発放たれた。

すると、文が気付いたのか後ろを振り向き、体をきりもみ回転させ

銃弾を躲していく。

全発躲されたアダムだが、再び撃ち始める。

「仕事の邪魔をしないで下さいー！」

文も負けじと銃弾を躲しながらアダムへ向かって弾幕を放つていく。

迫り来る弾幕を銃の照準をずらす事無く体を捻り、躲していく

その様子はまるで2つの戦闘機が撃ち合っているかの様だった。

(これでは不安定なうえにもっと有効な攻撃が出来ない……… そうだ。)

アダムは銃を仕舞い、腰から“ナイフを抜かず”、“ロープのみを引っ張った”。

右のロープを右足と箒を固定する様に結ぶ。

左のロープも左足と箒を固定する様に結ぶ。

左足が前で右足が後ろ。

そして、箒の上に立つ。

アダムはスケートボードに乗るかの様な体勢で箒に乗ったのだ。

前傾姿勢を取る事で空気抵抗を減らし、加速する。

両手にそれぞれ銃を持ち、引き金を引く。

3秒間で150発。

それを避けていき、反撃する文だが、高速の銃弾の量が2倍になったのでは勝手が違う。

数発被弾し、アダムがそこへ更に撃ち込む。

当然、何十発と銃弾を受けた文は失速し、高度が自然に下がる。

(これではこちらが負ける……… 時間が掛かるかも知れませんが、いっそ本気で戦いましょう。)

文は再び加速し、高度を元に戻し、急旋回する。

アダムもそれを追い掛け、銃弾を撃つていくが、中々当たらない。

数発がヒットした程度だが、文には大してダメージは無い。

旋回力で文が勝ったのか、文がアダムの背後を取り、スペルカードを唱える。

「風神「二百十日」！」

アダムの視界を覆う様に木の葉の様な形をした弾幕がアダムに向かって飛んで行く。

しかも、自分を隠すようにも広がる為、相手には自分の姿を確認し辛い、という効果もある。

アダムは後ろを向き、銃を構え、そのままの姿勢で後ろ向きに飛びながら引き金を引く。

銃弾と弾幕が相殺し合うが、弾幕の量が多く、アダムが押される一方である。

体ごと捻り躲すアダムだが、一方で文には銃弾は届いていない。

そこで、アダムは銃を仕舞い、足と箒を結ぶロープ解き、ナイフに繋げてそれを2本とも持った。

視覚は弾幕に遮られて使えない。

聴覚、嗅覚は高速で移動中故に余り意味が無い。

味覚、触覚など論外。

だが、アダムはエネルギーを構成するエネルギー、全ての物を構成するインフォームイオンを脳から直接感知出来る。

それもトランセンデンド・マンが持つ能力の一つ。

空間から直接脳に伝えられたエネルギーやインフォームイオンは脳で処理され、その情報や座標を直感的に感覚する。

そして、空間から射命丸文の存在と座標の情報を無意識的に受け取る。

そこへナイフを2本とも投げ飛ばした。

文自身も弾幕に覆われているのでアダムの姿は良く見えておらず、その為、飛んで来たナイフにもすぐには気付かなかった。

自分からの距離が残り2mになった時、ようやくそれを確認し、回避行動を取るが、

アダムの右のナイフが文の左の羽をすり抜け、左のナイフは文のカメラを貫いた。

「し、しまった！カメラが……きよ、今日は退散しましょう！」

そして、文は何処かへと飛び去った。

33 気ままな半日

アダムが箒をスケートボードに乗るかの様な姿勢で戻って来たので、霊夢達3人は驚いていた。

「全くアダムには毎回驚かされるわね……………」

「お前、どんな姿勢で乗ってたんだよ……………」

「上下左右へ旋回する性能を上げるためだ。」

「それで、文は逃がしたの？ 写真は？」

そう訊いたのは写真を取られた張本人の幽香だった。

「逃がしてしまったが、カメラは破壊したから写真は広まらないだろう。」

「それは良かった。どうもありがとう。でも今度荒らしたら許さないわよ。」

「ああ。」

「ところで幽香、」

魔理沙が話題を変えた。

「お前この異変について何か知っている事は無いか？ 少なくともあたし達じゃ何も分からなくてさ。」

「異変？ ええと、そういえば60年前も同じ事が起こったかしら。その時も全ての季節の花が咲いていたわ。原因は確か、霊が関係してるとか。」

「へえー。でも放っておいて大丈夫なのか？」

「さあ、その時は大丈夫だったけど…………… 詳しい事は良く分からなくて。」

丁度その時、

「妖精達の噂を聞いて来てみれば、貴方達、何をやっているのですか？ 争い事と聞いたもので。」

アダム達へ問い掛けたのは、暗い青を基調とした服と帽子を着た、緑髪の少女。

しかし、大人びた雰囲気を漂わせていた。

「あなた、閻魔さまじゃない。」

「争いはもう過ぎた事だ。この異変について調べているが、詳しい事が何も分からなくなてな。」

アダムが代表して質問に答える。

「貴方は確か噂で聞いた外来人のアダム・アンダーソンですね。私は四季映姫・ヤマザナドゥ。異変の事ですね。説明しましょう。」

「長い間生きている私でも分からないのよ。これと60年前にも同じ事が……。」

「ええ、60年に1度の感覚で外の世界で幽霊が増加するんです。その所為で死神達の許容を遥かに超える幽霊が幻想郷に溢れ、その幽霊が花に憑依してこの様に全ての季節の花が咲くのです。まあ幽霊達自体は害は無いので大丈夫でしょう。後は死神達が幽霊達を運んでくれるので普通に戻ります。」

アダム達は安堵の息を着いた。

「ふーん、じゃああたし達は何もしなくても良いんだな。」

「大した事では無くて楽に済んだわね。」

「それで、これからどうする?。」

「いいや、まだ花見は終わってないぜ。まだ全部は見終わって無いだら。」

「それなら、ここから更に南へ行った所にヒマワリ畑があるわ。私がいつも手入れしている自慢の畑よ。良かったら見て来なさい。」

「私達は見た事あるけど、アダムはまだ見た事ないのよね。本当にあそこは綺麗よ。」

「是非行ってみよう。」

アダム達は再び花見を再開した。

永遠亭の一室では、プラスチックを打ち鳴らす音だけが鳴り響いていた。

無言でただ画面だけを見詰める2人。

画面に映るのは2人の男。

右側には、全体的に上部に尖った髪の毛で、上半身裸で、両腕に赤い小手を付けた男。

左側には、上半身は青、下半身はグレーのチャイナ服で、後ろに纏めた髪が特徴的な男。

体力ゲージは互いに残り3分の1、つまりコンボが決まれば確実に倒せる程度。

攻撃を出してはガードされ、攻撃を出されればガードする。

自分が攻撃コマンドを入力すれば相手がガードコマンドを入力し、相手が攻撃コマンドを出せば自分がガードコマンドを入力する。

そして、左側の男が距離を取り、鶴の構えを取る。

右側の男が駆け込みながら蹴りを繰り返す。

左側の男が鶴の構えを解き、その場で寝る事により、相手の跳び蹴りを躲す。

起き上がると同時に背中と腕を支点にして足を回転させ、相手のバランスを崩す。

更にパンチ2発、蹴り上げ、ミドルキック、回転踵落とし、蹴り上げ、空中回し蹴り。

「くぁー！良い所まで行ったのにー！」

「正直ヒヤヒヤしたぜ。鉄拳の腕は中々やるな。」

「2人ともやり過ぎですよ。もう2時間はしているんじゃないですか。」

そう言ったのはリョウと輝夜の試合を見ている鈴仙だった。

「んじや、休憩するか。」

「今度は何にする？」

「そうだな……何か映画でも見るか？」

「どんなの？」

「家にある奴持って来ようかと思ってるが……ジャンルはどうする？」

「ん……何か退屈しのぎになりそうなスリル満点の映画。ある？」

「……“そう”だ、私に良い考えがある！それじゃあ持ってくるぜ。あとちよつと用事もあるから時間掛かるかも知れないが、待てる。」

勢い良く永遠亭の障子を開け、勢い良く靴を履き、勢い良くバイクに跨る。

「楽しませてやるよ。」

そう言い残し、リヨウは走り去っていった。

まずリヨウがやって来たのは人里からそう遠くない川だった。

「おーいにとり、居るか？」

「おお、リヨウじゃないか。何の用だい盟友？」

水色の上着に水色のスカート、同じく水色の髪の毛をツインテールにした少女。

青緑の帽子とリュックが特徴的なこの少女の名前は河城にとり。

「お前達に作るのを手伝って貰いたい物があってな、今取り出すぜ。」
リヨウが大きなリュックから同じく大きなバックパックらしき物

を取りだす。

「何だいこれ？」

「飛行マシンだ。これを改造しようと思うんだが、短期間で終わらせたくてね、手伝って欲しい。」

「分かった。良いよ。」

「サンキュー、盟友。まあ製作は明日からする予定だ。」

「分かった。それまで他の仲間達にも手伝う様に言っとくよ。」

「そりやありがたいえ。お礼に何か奢ってやるぜ。」

「お礼なんか良いさ。盟友だろ。」

2人は握手を交わした。

次にリヨウは里に戻って来た。

人が歩いているので、スピードを出す訳にはいかない為、低速で自宅へ向かっていた。

そんなリヨウは人々から注目を浴びていた。

当然幻想郷にバイクを知っている者など人里には居ないのだから。

「リヨウ、それ何だ？」

慧音が真っ先に質問をして来た。

「バイクを知らんのかバイクを。Ninja EX―Rって言う凄いスピードの出るバイクだ。改造無しで時速360kmも出る優れモノだぜ。霖之助から貰った。以前一般自動二輪車はスズキがいつもトップに立っていたが、半世紀前にカワサキがそれを超えた。これが

丁度そのバイクだ。それ以来はずっとカワサキがリードしている。ちなみに……………」

「分かったからもういい……………」

慧音が話しを遮る様に言った。

「お前が良く言うぜ。お前んとこの生徒が嫌そうに授業を聞いているの知ってるからな。話が早くてしかも分からないだと聞いたぜ。」

「なっ、何を！」

「まあ、慧音弄りはこれで良いとして。」

「弄るな！」

「フツ、悪いね。」

「わ、笑うな！」

「笑うなど言われると笑いたくなるから笑うぜ。ハツハツハツハツハツ！」

「こ、コラー！」

ドゴツ！

「うおっ！痛っ！頭突きは無いだろ！それとガキ共こんな威力を喰らっていたのか……………」

「うるさい！お前がそんな事言うからだ！」

「悪かったよ。何か奢ってやるからさ。」

「そうか……………じゃあ中華料理か京料理のフルコースをお願いしたいな。」

「わざと高いのを頼みやがって……………」

午後8時。

リヨウは夕食を食べ終え、バイクで再び永遠亭へ向かう。その途中の竹林にて、リヨウは知り合いの姿を確認した。

ブレーキを掛け、歩く速さに合わせる。

「妹紅、どうした？」

「いや、いつもの暇つぶしの散歩さ。リヨウはどうした？」

「輝夜んとこで映画鑑賞だ。お前も行くか？」

「輝夜の奴とは仲が悪いんだが…… どんな映画だ？」

「ええと…… “そう” だ、少なくとも輝夜はチビる筈だ。どうする？ 輝夜のチビる所を見たくないか？」

「それってどんな映画だよ…… まあアイツが恥かく所なら見たいし、行くか。」

「それじゃあ乗ってけ。」

「ああ、それカッコいいな。」

「お、分かる？ しつかり掴まってる。」

妹紅が後ろに乗り一気に加速させる。

「ひゃあ！」

「凄いだろ？ もっと飛ばすぜ！」

「うおおお!!!」

リヨウが更にアクセルに力を込め、スピードメーターはあっという間に時速300kmを超えた。

34 ゲームをしよう

リヨウと妹紅は永遠亭に着いた。

「よう、輝夜。最高に面白いスリルのある映画を持って来たぜ。」

「輝夜、あたしも映画見に来たんだ。」

「何であんたまで来たのよ。」

「俺が誘ったものでな。お前達が仲悪いのは知っているが、折角だし楽しもうぜ。」

とリヨウは言ったが、

「……と言って妹紅が怖がってチビる姿を見たいだろ。」

と輝夜に小声で言うのだった。

「どんな映画なの？まあホラーは苦手だけど妹紅が恥かく姿見れるなら。」

「2人とも何コソコソ話しているんだよ。さっさと見よう。」

「ああ、そうだ、何なら他の奴らにも見せてやろう。」

「ところで映画のタイトルは？」

「“そう”だよ。」

「そう？」

「へ？」

「SAWだ。S・A・W。ところで2人とも……」

リヨウはわざとらしく間を置き、僅かに笑みを浮かべた顔で言った。

「ゲームをしよう。」

「へ？何の？」

「この映画7作目まであるんだが、最初から最後まで観切れた奴には好きな物を奢ってやる。ただし、」

リヨウがわざとらしく間を置く。

「それまでに画面から目を逸らすか、吐くか、部屋から出て行くか、弱音を吐いたらゲームオーバーだ。その場合は残った奴の勝ち。ルールはこれだけ。それと前半戦と後半戦に分けて休憩もある程度は入れる予定だ。14時間もぶっ通しじゃあキツイだろうからな。」

「面白そうじゃない。たった14時間？逆に物足りないんじゃない？」

「成程。要するに輝夜の奴が観なくなれば良いんだろ？なら楽勝だ。」
「それと、もし、2人以外にゲームに参加したい者が居るか、ゲームをしたくない者が居れば言うのは今の内だ。」

最終的に、ゲームの参加者は輝夜、妹紅、てゐ、の3人となった（ちなみに映画を観るのは全員。）

1 作目終了時、てゐが部屋から出て行った。

それから4時間以内に鈴仙と永琳が「吐き気がする」と言った。

2 作目終了後、鈴仙が部屋から出て行った。（なお永琳は見続けている。）

3 作目終了後、輝夜と妹紅は物凄い勢いで部屋から出て行った。（前半戦は3作で終了。）

「あく面白かった。でも慣れても正直キツイが。永琳さんよ、どう思う？」

「殺人ゲームによってで命を大切にしない者に命の大切さを伝えるという中々面白い所があるわね。特に自分の命を守るか、他人の命を守るか、というゲームは人間の心を窺っているかの様で深い所があるわね。2作目の自身の罪を痛感させる仕掛けも中々だったわね。」

「やっぱり永琳さんなら分かってくれると思ったぜ。特に3のテーマは「自分と自分の大切な者の人生をどん底に落とした者を許せるか」

だもんな。他にも、低予算でこんな面白い映画を作れる事も凄い。それにしてもあいつらは……………」

リヨウ達は後ろの全開になっている障子戸を見た。

「そうね。あの子達は長い間生きているけど、まだ学ばせるべき事が山ほどあるわね。」

2人は談笑した。

リヨウは気付かれない様に心の底でため息をついていたが。

(本当はこのゲームをやるべきなのは俺なのに……………)

夜が明け、朝が来た。

「にとり、来たぜ。」

電気モータ独特の キュイーン！ という音を発しながらリヨウは来た。

「おお、待っていたぞ盟友。他の仲間達も連れてきたよ。」

「んじゃあ……………」

リヨウはリュックからバックパックらしき機械と設計図らしき紙、それから永夜異変で手に入れたバエルやロボの武器を取り出した。

「機関部は大体出来ていて後は性能を上げるだけだ。しかし、問題は回路部だ。この銃の部品をこの設計図通りに組んで後はこれに付ければ良いだけだが、複雑だ。気を付けてくれよ。」

リヨウと河童達は早速作業を開始した。

「準備は良い?」

「アダム、行くぜ。」

「ああ。」

霊夢と魔理沙がアダムへ弾幕をまき散らす。

宙に舞い、体を捻り、回転させ、地面を転がる。

しかし、弾幕が目の前に迫っていた。

拳を突き出す。

しかし、力を入れていない。

力を抜いて素早く、弾幕の当たる瞬間に力を入れる。

これにより、弾幕には被弾するがダメージは全く無い。

迫り来る弾幕を殴り、打ち払い、蹴る。

弾幕はアダムへヒットするもののダメージを与える事が出来ない。

次に銃を腰から引き抜き、弾幕へ向けて連射する。

金属製対物弾以上の威力を持つ銃弾は音速の5倍で、1秒で25

発、2つ合わせて50発のペースで放たれる。

それに対して反動や発光、音速を超える時に生じる音も殆ど無い。

また、弾薬は使用者のエネルギーであり、重量は軽くて済む。

高威力で高効率で低リスク。

それがエネルギーを利用するTM専用武器の利点。

しかし、通常のエネルギーを利用出来ない人間には全く扱えない。

光学兵器や素粒子兵器はある程度開発されているが、歩兵が携行出来る物は無い。

その為、2世紀以上の時が経過しても歩兵の主力武器は金属弾を利用する銃だ。

アダムはそんな金属弾銃よりも遥かに強力な武器を使っているのだ。

銃弾一発一発を撃ち漏らす事無く、全ての弾幕を撃ち落とす。

トランセンデンド・マンには霊夢達の放つ弾幕など遅く感じる。

アダムの場合、音速の5倍で放たれる銃弾は100mを10秒で走るトップアスリートにとって最高速級の野球ボールが飛んで来る様に体感する。

それでも十分に凄い速度に思えるが、トップアスリート級の動体視力では時速300kmの野球ボールも捉えられる。

それに加え、アダムは音速以上で身体を動かす。

それでも霊夢達の放つ弾幕の物量が多く、銃弾では押されるばかりである。

銃を仕舞い、両手にナイフを握る。

腕や脚の動きに加え、ナイフが弾幕をかき消す。

二刀流は対多数戦、狭い場所でも有利というメリットがあるが、上手く使いこなせなければ自分を傷つけるというデメリットもある。

そんなアダムは一刀流以上に二刀流を使いこなし、自身を傷つけるというデメリットを克服している。

霊夢達の放つ弾幕の量が更に増した。

2本のナイフにロープを繋げ、1m伸ばす。

2本のロープを回転させ、弾幕をかき消していく。

これも二刀流同様に自身を傷つける恐れもあり、別のロープにも絡まるというリスクもあるが、アダムはそれも見事克服していた。

勢い良く回るロープは止まる事無く回転し続け、弾幕をかき消す。

「神霊「夢想封印 瞬」！」

「恋心「ダブルスパーク」！」

素早くアダムを囲む様に飛んで行く光弾と2方向からアダムを狙う太いレーザー。

通常より遥かに速い速度で来る光弾を回転するロープで打ち消し、

別方向から来る2本のレーザーを体を捻って躲す。

弾幕を避け終え、両手両足を着いて着地する。

自分の顔面に迫っていた光弾1発を蹴り弾く事も忘れなかった。

「ふう…………… 如何にか全部避け切ったか。」

「凄いわね。私達2人掛かりでも1発も当てられなかったわ。」

「夢想封印とダブルスパークを避けて、それから最後の私の1発を蹴り飛ばした所カッコ良かったぜ。」

「しかし、問題はこちらから攻撃が全く出来ない事と、こちらのスタミナが持たない事だ。この様に短時間なら耐えられるが、長時間であれば……………」

「まあ、そんな難しい事は考えるなよ。少しずつ改善していけば良いだろ。いきなり強くなれる訳じゃないし。」

「そうよ、記憶を思い出していくみたいに少しずつでも良いじゃない。」

「記憶と言えばさ、最近はどうなんだ？何か思い出せたか？」

「いや、最近は大した事は何も…………… それと最近では何か妙なエネルギーを感じるな。曖昧だが、気を静めれば感じるかも知れない。」

2人は目を閉じ、深呼吸した。

「…………… 本当ね。大気がやけにざわついているわね。」

「…………… すまんが、私には分からないんだが……………」

「エネルギーなど日々変化する物だからそういった誤差による物かも知れんが、暫く様子を見て状況が悪化する様だったらその時は異変とみて間違いないだろう。」

針らしき物が電子回路の線を焼いて切り、それを別の回路へ焼いて繋ぐ。

切つては繋ぎ、焼いては焼き直す。

それが何百回と繰り返される。

しかも通常の間人間であれば見えないミクロの世界での出来事だ。それをやつてのけるリヨウ。

光学顕微鏡といった道具を駆使してでも作業の難しい作業を顕微鏡も無しに作業を続ける。

トランセンデント・マンはこれ程のミクロの世界の情報、それどころか何km先の情報さえ知覚出来る者もいる。

とうとう最後の回路を焼き切り、焼いて繋ぐ。

「……ぶはっ！……よっしやあ！……一番面倒な回路が出来たぞ！」

「リヨウ、大丈夫かい？」

「だ、大丈夫だ、問題無い。」

そういうリヨウは余程集中していたのか、息をするのも忘れて集中していたらしい。

ふと、リヨウが当たりを見回し、ある事に気付く。

「つてかもうこんな時間か！何も食って無くて腹減った……。」

「凄い集中力だったね、盟友。」

丁度日没を迎えていたのだ。

「他はどうだ？」

「ぼっちし、設計図通りに出来たよ。」

「おっしやあ！それじゃあ後はプログラムを組み替えりや終わりか。後は結構楽な作業だし、お前から情報工学知らないだろうし、後は俺一人で大丈夫だ。それじゃあまたな。」

「ああ、何時でも遊びに来ていいぞ盟友。」

35 じゃあいつそ、飛行機無しで飛べば？

真夜中、リョウは自室でパソコンを操作していた。

「やっぱ昔の物だから効率悪いだろうな。向こうに帰ったらカイルに改造頼んでみるか。でも、動作には問題無い。」

コンピュータと飛行マシーンを繋ぐコードを抜き、窓を開け、飛行マシーンを付ける。

「これならアイアンマン同様に衝撃波攻撃も出来る筈。」

右手を広げ、全開の窓に向ける。

飛行マシーンのパックパック部でリョウから吸収されたエネルギーが変換され、掌の発射装置に送る。

この部分から外部から吸収した圧縮空気を勢い良く発射し、飛行や衝撃波発生を行う。(もう片手、両足、バックパック底部分、腰部分にも同様の装置が付いており、これらをバランス良く使って飛行する。) ドゴーン！

掌の発射装置から圧縮空気が音速を超えて発射された。

リョウの右方が反動で後退する。

衝撃波は直撃しなかった筈のガラスをも割り、衝撃波による轟音は里中を覆った。

「うおっ！すげえ反動だな。直撃しなかったガラスが割れたって事は方向性が足りないのか。なら空気量を減らし、圧力を高め、発射口を狭くすりゃあ……………」

「リョウ、今の音何だ？」

慧音の声が下から聞こえた。

「え？………… ああ、リア充を爆発させた音だ。心配しなくていい。」

「余計におかしいだろそれ……………」

「アイアンマン作ってたんだ。今の轟音はその副産物だ。」

「何だそれ？まあ周りに迷惑を掛けるなよ。」

「俺を何歳だと思ってる。あと2年で30だぞ。」

「少なくとも私は1000年生きているぞ。私にとってはお前など子供みたいなもんだ。」

「年齢などどうでも良い。フォースの前には無意味じゃ。」

「じゃ?というかフォースって何だ?」

「まあ、こないだ説明したエネリオンと同じ様なもんだ。ところで俺は早く作業を再開したいんだが。」

「それじゃあ、迷惑掛けないようにな。」

「これ以上俺が何か言うとめんどくさくなるからノーコメだ。」

再び椅子に座り、作業を再開する。

「問題はこの限られた性能にソフトがしっくり合うか…… また霖之助のどこ行つて部品集めようかな…… 今はハードの限界を試すだけだ。」

暫くキーボード操作が続いた。

「俺は絶対にお前を殺すぞ!!!」

憎しみと怒りに満ちた顔が叫びながら少年を睨んでいた。

しかし、その顔は光弾の嵐を受け、叫び声と共に消えていった。

次の瞬間、少年の目の前2 m位には天井があった。

もう何度も見てきた、1年近く経つ内、毎日欠かさず見た天井だ。

「…… 何かを感じる。理論では説明出来ない何かを…… マルク、お前は何だ。そしてアダム、僕は何だ……。」

(知っている筈だ。)

頭の中で声がした様な気がした。

その声は、アダム自身の声にも聞こえたが、マルクの声にも聞こえ

た。

「俺は絶対にお前を殺すぞ!!!!」

少年はそう叫びながら憎しみと怒りに満ちた顔でもう一人そこにいる少年を睨む。

しかし、少年は光弾の嵐を受け、叫び声と共に自身が消えていくのを感じた。

次の瞬間、少年の体を液体が包んでいる感覚が来た。

温度は37℃位、目を開けた途端に流れ込んできた。

咳き込みながら自分が何処に居るかを確認する。

直径1m、高さ2mのガラスシリンダー。

自分の首の後ろにはケーブルが繋がっている。

そして、シリンダーの外にも同じようなシリンダーが等間隔で並んでいる。

(アダム…………俺は絶対にお前を殺すぞ!!!!!!)

「「ディックシリーズ」が1体〝成功〟しました。」

「そうか。精神に異常がある可能性が高いから同じ様に精神制御を忘れるな。」

「勿論です。それと中佐、次はどういった計画にしますか？」

「倍の人員を送ろう。半数は精鋭部隊、更に「破壊神」と「コントローラー」も送る予定だ。」

「「ブライアン」と「イヴ」ですか……そこまでするといふ事は余程向こうに戦力があるか、向こうの奴らが我々の計画を知ったのか……。」

「後者だな。反乱軍にそんな戦力があればこちらも危うい戦闘ばかりだ。早く進めたい所だが、またしても「インヴァイジョン」に時間が掛かる……。」

「上層部も相当いらついている様です。進みたいように進みませぬね。」

「本来ならユニバーシウム・マイン計画が無くとも我々が勝つが、それをするのはその方が〝早く〟戦争を終わらせられるからだ。」

「あと、永久機関実現の為でもありますね。そうすれば人類には永遠の平和が訪れますよ。環境問題や社会問題、無くなると良いですね。」

「あらゆる環境問題や社会問題も解決、か……。」（それよりも本当は私の計画も解決せねば…… 幸せな日々を取り戻す為に。）

「どうかしましたか？」

ディック中佐は背筋が一瞬震えた感覚を覚えた。

「…… 何でも無い。」

「でも今確実に動揺しましたよね。どうかしましたか？」

ポールは何時も抑揚の無い、感情の籠った所が全く無い為、同じ言葉を繰り返されると彼に慣れていているディック中佐でさえ気味悪く思う。

「たまたま昔の事を思い出したまでだ。気にしなくて良い。」

「そうですか……………」

またしてもポールは平坦な声で答えるのだった。

次の日。

ドゴーン!

リヨウの右方が後退し、代わりに空気の塊が音速を超えて、掌から開かれた窓に向かって射出される。

今度は離れた窓を割る事は無かった。

「よしっ！ハードの調整も、ソフトの調整も終わった！ってこんな時間か！小腹…………… それどころじゃねえな。」

机に置かれているチョコバーを手に取り、勢い良くかぶりつく。

「僕、満足！…………… 本当は一本満足じゃねえけどな。もう朝食無しで飛行テストするか。」

丁度タイミング良く、(?)

「リヨウ、居るかー？」

1階から親しい人物の声が聞こえた。

「よう魔理沙。折角だから2階まで上がって来い。丁度良い所に来たな。」

魔理沙は階段を上がり、物珍しい目で“それ”を見た。

「お？何だそれ？そういうやさつきお前家から爆発音が聞こえた気がするけど。」

「丁度これの事だ。飛行マシンだ。爆音は衝撃波発生装置のテスト

だ。で、今からこれの飛行テストをやるうかと思ってた所だ。」

「ふーん。そーいやお前さ、あとアダムも、何であんなに強いのに空飛べないんだ？」

「強い〓何でも出来る、って訳では無いぞ。人間に元々空を飛ぶ羽みたいな機関が備わっている訳無いだろ？いくら人間を超えた人間と云えども人間の形をしているからな。まあ霊夢とかは何も無くて飛べるがその辺は分からん。まあ要するに人類は進化の段階に空を飛ぶ事を選ばなかった、って言えば良いかな？」

「…… 良く分からん…… ところで、その飛行マシンとやらのテストをするんだろ？私もその所を見て良いか？」

「いいぜ。しつかりついて来いよ。」

「負けないぜ。」

リヨウ達は外へ出た。

(まずは、浮く事からだ。浮け！)

飛行マシンの掌、足の裏、腰、バックパック底部に付いた発射部からジェット噴射が吹き始め、リヨウの体が1m浮いた。

(飛べ！)

リヨウの直感を読み取った飛行マシンはリヨウのエネルギーを吸収し、空気塊を地面に向けて発射し、全速力で真上に飛び上がった。

「は、速っ！おーい！待ってくれよ！」

魔理沙も遅れて飛び出す。

(と、飛ばし過ぎたか…… ブレーキ！)

リヨウが両腕を進行方向へ突き出し、足の裏、腰、バックパック底部からの噴出が止まり、掌からの噴出が一気に増した。

(そろそろ…… よし、高度そのまま。)

全ての噴射口がバランス良く噴射され、リヨウの体は人間の里遙か上空で留まった。

「おーい待てよ！速いなお前！」

魔理沙も遅れて来て、リヨウと同じ高度に留まる。

「しかしすげえ…… 自分でも驚いたぜ。音速を突破するとは。」

「で、どうするんだ。もつと飛ぶか？」

「勿論だ。もっと慣れたいし、最高速を試したいし。」

「何なら全力で競争しようぜ。よーいどん！」

魔理沙が先に飛び出す。

「クソツ、負けるか！」

ジェット気流を一気に噴出し、加速する。

魔理沙の方が離れており、しかも距離は離れていく。

しかし、距離が離れるペースは次第に緩やかになっていき、やがて距離は縮んでいく。

(加速はこつちが上か。なら最高速はどうだ！)

距離を縮めていき、魔理沙と横に並んだ。

「まだまだ！ 箒に負けるかー！」

「こつちこそ！ ヘンテコな機械に負けるかー！」

結果、リヨウが魔理沙を抜き、距離を突き放していく。

「俺の何かよーはじけてまざれ!!!」

リヨウの意志とエネリオンは、空気を吸収し、高温高压にした空気を噴出させる。

ドゴーン！

衝撃波が発生し、数秒後、リヨウの姿は雲の中に消えた。

「は、速すぎだろ……………」

魔理沙はリヨウの跳び込んだ雲を前に止まった。

対してリヨウは視界が悪くなった雲の中でも尚、飛び続ける。

「きよほほーい…………… ちよつと飛ばし過ぎたな……………」

後ろの魔理沙が居るであろう方向を見る。

その為、前方に少女が居る事など気付かなかつた。

「…………… ん？ うわー！ 危ない!!!」

「…………… は？ うおっ！ あぶね！」

リヨウが前方を向き、慌ててブレーキを掛け、横へ方向転換する。如何にかぶつからずに済んだ。

そのまま垂直飛行を続けていたが、何か床らしき感触がした。ジェット噴出を切り、着地する。

「あんた誰よ?！」

先程の少女から怒りの籠った質問が出された。

36 Furious Tenshi

「誰だチミはってか？そうです、私が柏リョウです。あんたこそ誰だ？」

「じゃあ私の計画を邪魔しないでよー！」

少女は腰の剣の柄らしき物を取る。

次の瞬間、柄の上底部から1mの長さの緋色に輝く刀身が現れた。

「……………ジエダイかよ……………そっちがルーカスフィルムなら俺はマーベルだ！」

そう言いつつ戦闘の体勢を取る。

少女の姿を良く見てみる。

青のロングヘアと対照的な赤い目。

青いロングスカートとブーツとエプロンの様な上着。

「私は比那名居天子。天人の長の娘よ。悪いけど異変の邪魔をしないで頂戴。」

そう言い終え、リョウの面に斬り掛かる。

天子の斬撃を体ごと横に躲し、駆け込みながらパンチを繰り出す。

リョウのパンチをしゃがんで躲し、立ち上がりながら胴へ斬り込む。

天子の斬撃を両手で受け止め、2人は暫くそのままの姿勢で対峙し合った。

「今異変がどうか聞こえたが、異変を起こすつもりか？」

「そうよ。それがどうしたのよ?!」

「……………それじゃあ、俺が勝ったら異変を止めてもらう。ただし、俺が負けたら……………お前は何をしたい？」

「それじゃあ、私の奴隷として一生働きなさい！」

「交渉成立だな。それと一つ分かった事がある。」

「なによ。」

「女の態度のデカさは胸のデカさには関係ないって事だ。」

天子は以前から自分の胸が小さい事を気にしていた。

そのうえ、天子は自分のプライドを失うような発言に怒りやすい。

「むっ、胸の事を言わないで頂戴!!!」

天子の押す力が増し、炎の様に輝く剣は更に輝きを増した。

「あ、熱っ！」

リヨウも負けじと剣を受け止めている両手の力を増し、押し返した。

天子が後ろによるめき、リヨウは飛行マシーンを脱いだ。

「やっぱアイアンマンみたいな社長キャラじゃなくて俺にはジョークが得意なスパイダーマンとかデッドプールが向いているかな。でも今はジャッキー・チェンで行くぜ。蛇拳舐めんな！」

右手と右足を前に出し、両手の先を手刀の形にし、左手を右肘に付ける。

「蛇？じゃあ私はヤマタノオロチを倒したスサノオノミコトね。覚悟なさい！」

剣を体の向きと同じ縦に構える。

「シャイ！チョーか。成程、シンプルイズベストって訳か。」

天子が頭の上に剣を振り上げ、駆け込みながら振り下ろす。

リヨウが体ごと横移動して避ける。

振り下ろし終えた剣を横へ逃げたリヨウの胴へ振る。

それをしゃがんで避ける。

振り終えた剣を今度はリヨウの足元へ振る。

バク転して避け、同時に距離を取る。

リヨウが天子へ駆け込み、掌を伸ばしきった右手を頭へ突き出す。

天子が首を曲げて避けるが、リヨウが手首を曲げ、天子を軽く押し、

僅かに怯ませる。

ミドルキックを決め、指先の連撃を何発もヒットさせ、蹴り上げ、空中回転蹴りを決めた。

両者とも着地し、リヨウが右手を顔面に突き出す。

天子が腕をかがめ、ブロックする。

続けて左手を胸に突き出す。

これもブロックする。

ブロックされた左手を上突き上げ、顎にヒットさせる。

続けて右の“握り拳”を喉に突き出す。

天子が慌てて手首を受け止める。

次の瞬間、リヨウが握り拳を開き、指先を喉に突きつけた。

「ぐっ！」

そのままリヨウが天子へ下段回し蹴りを決め、そのまま距離を取る。

「どんなもんだ？少なくとも俺は蛇に苦戦する様な剣士は聞いた事無いね。」

「まだ本気じゃないわよ！」

天子がリヨウの面を狙って剣を振り下ろす。

リヨウはしゃがみながら間合いを詰め、天子の手首を掴む。

天子が押す力を強め、リヨウが体を後ろに向き、腕を引く。

結果、天子が弧を描いて地面に叩きつけられる。

ついでにリヨウは空き缶を蹴るかのようになり天子を1発蹴った。

顔を真っ赤にした天子が起き上がり、リヨウの心臓を狙って剣を突き出す。

突きを体ごと避け、続けて来る横薙ぎをしゃがんで避け、そこで腕の構えをそのままであぐらをかく。

座り込んだリヨウへ剣を振り下ろす。

しかし、リヨウが天子の足首を掴み、引つ張って地面に倒す。

起き上がり、天子へ回転踵落としを繰り出す。

間一髪の所で体を転がし、避ける。

天子が起き上がり、リヨウは構えを解く。

そして、リヨウはその場に頬杖をついた姿勢で寝る。

「来いよ天子。どうした、この俺が怖いのか？」

「誰が貴方なんか……いつつ、ぶっ殺してやるわ！」

天子が高く跳び上がり、リヨウへ向けて剣を振り下ろす。

対するリヨウは足を勢い良く回転させ始める。

両手を支点に体を持ち上げ、両手で体を飛ばす。

振り下ろされる剣を体を捻って躲し、天子の腹に両足蹴りを決め、空中へ吹き飛ばした。

起き上がったリヨウは天子へ追撃を掛けるべく跳び上がる。

天子も負けじとリヨウへ剣を横に振る。

しかし、リヨウが体を後ろに反らし、横薙ぎは不発に終わる。

リヨウのサマーソルトキックが決まり、天子が更に上空へ吹き飛ばされる。

天子は空中に浮き、リヨウは着地する。

「要石に潰れなさい！」

天子の周囲に大小様々の岩が出現した。

リヨウ目掛けて、天子が加えた移動スピードの上に更に自由落下加速を加えられた要石が飛んで来る。

「……. そういやフリーザ戦でこんなシーンあったな。」

指を伸ばした手を握り、迫り来る要石を殴り、蹴り、碎き、跳ね除け、躲していく。

要石は相変わらず飛ばし続けているが、リヨウには全くヒットしない。

「要石「天地開闢プレス」！」

直径3mはあろうか要石が出現し、天子がその上に乗り、リヨウに向かって落ちていく。

「超能力の次はデスボールかよ。いや、その上に乗るってロードローラーかよ。どっちでも良い、受け止めてやるぜ！」

「やれるものならやってみなさい！」

リヨウが手を突き出し、要石を受け止める。

「うおおおおお!!!」

その場に留まった要石だが、天子が絶えず移動エネルギーを加える。

「諦めなさい！そもそもこの天子様に勝負を挑んだ事が間違いなのよ！」

（何とか、せめて“あの”能力だけでも知られたくはない……. あの
方法なら出来ないだろうな……. やるか。）

リヨウは自身のエネリオンを変換し、掌から岩へ熱エネルギーを送る。

「あ、熱っ！一体何なの?!」

そして、リヨウは岩へ送り込んだ熱エネルギーを掌から吸収し、エネルギーを返す。

「あれ？戻った？」

これを数回繰り返す。

すると、岩が勝手に崩壊した。

岩には僅かな空洞があり、空洞には空気がある。

その空気に熱を加え、体積を増やす。

その空気の熱を奪い、体積を減らす。

空気は熱による膨張収縮の体積差が大きい、岩は熱による膨張収縮の体積差が少ない。

空気の膨張収縮に耐え切れなくなった岩は空洞部分にヒビが入り、崩壊する。

「もらったぜー！」

要石の崩壊でバランスを崩した天子へ、リヨウが跳び掛かる。

天子の背後を取り、背中を抱える。

ジャンプの勢いが残っている為、リヨウと天子は暫く上昇し続ける。

「ちよつと、何をする気?!」

「決まってるだろ、俺が勝つんだ。」

最高到達点に達し、上下逆さま、天子の頭を地上に向けた態勢、バックドロップで落下していく。

「は、放しなさいー！」

「ヒョー！ヒャーツホウ！ヨーロラヨーレヒー！」

天子が離れようともがくが、リヨウの力には勝てなかった。

ドガッ！

そして天子にバックドロップを決めた。

「リヨウ！どこだー?!」

魔理沙はリヨウを探すべく上空を飛び続けていた。

「地上の方ですか？如何されたのですか？」

その場に止まり声がした方向を振り向く。

青いショートヘアに長いリボンの付いた帽子、黒いロングスカートにフリルの付いた長い羽衣が特徴的な女性だった。

「友人と一緒に飛んでいたんだが、見失ってしまったって探している。ところで私は霧雨魔理沙、あんたは？」

「永江衣玖です。見れば分かると思いますが天人です。実は私も人を探しています……とところでその方の特徴とかは？」

「ええと、柏リヨウって名前で長い茶髪に茶色い目、身長は6尺よりちよつと大きいかな。あとは背中に変な機械を背負ってる。見かけたか？あとあんたの探している奴はどんな奴だ？」

「……見掛けなかったですね。特徴……比那名居天子と言います。青く長い髪に青いスカート、ピンクのエプロンみたいな上着を着ていて身長は5尺位。心当たりありますか？」

「知らないな……なら一緒に探そうぜ。」

「どうもありがとうございます。」

その時、

ドガッ

遠くで何か重い物体が高い所から落下した時の様な音が聞こえた。

「な、何の音だ？」

「結構近くでしたみたいですね。行きましよう。」

二人は音のした方向へ飛んで行った。

37 灼熱の焔

「詰まんなかったぜ。」

「い、いてててて……ま、まだこれからよ！覚悟なさい！」

「これだから気の強い女は……まっ、抵抗するのを更に追いつめるってのも良いけどね。」

リヨウ目掛けて直径10cmから20cm程の要石が大量に飛んで行く。

対する量は2つの拳をフルスピードで動かし、要石を砕いていく。

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

勿論後ろからこっそりと迫って来る要石にも気を配りながら。

リヨウが後方へ回し蹴りを4連続決め、要石を砕く。

今度は左右両方から直径1mの要石がリヨウを挟み潰しにするべく飛んで来る。

両肘を左右それぞれに突き出し、両方とも破壊する。

今度は前後から大きな要石が飛んで来る。

後方へ跳び、後ろの要石を踏み台にして反対側へ跳ぶ。

要石同士で衝突し、砕ける。

「剣技「気炎万丈の剣」！」

天子の持つ剣が輝きを一層増し、刀身が伸び、炎の様な常に燃えている様な形になる。

剣を薙ぎ、リヨウの足元を狙う。

リヨウがそれを最小限、ほんの30cmの跳躍で躲す。

空中に舞ったリヨウへ剣を叩きつける。

体を捻り、ギリギリで剣を躲す。

身を翻したリヨウの胴目掛けて剣を薙ぎ払う。

体を捻り、俯せの体勢で着地する。

俯せ状態のリヨウを地面もろとも斬り上げる。

地面を転がり、切り上げを避け、同時に天子へローキックを決めた。

起き上がり、バランスを崩した天子へ踵落としを決めた。

勢い良く地面に叩きつけられ、僅かにバウンドした天子へ、体重の

乗った肘打ちをクリーンヒットさせ、吹き飛ばす。

空中で体勢を整え、着地した天子だが、目の前にはリヨウが駆け込み、自分へパンチを繰り出そうとしている最中だった。

それでも如何にか駆け込みナツクルを横に避け、リヨウへ剣を突き出す。

間一髪の所でリヨウが白刃取りを成功させた。

そのまま暫く対峙する。

天子が剣を押す力を強め、リヨウも受け止める力を強める。

そして、剣が炎の様に激しく輝き出した。

「……………熱っ！……………うおおおお！！！！」

「はあああああ！！！！」

（……………そうだ、この状況なら、あの能力はバレない。まあ「灼熱」はバレても問題無いがな。）

剣がリヨウへ伝える熱エネルギーはリヨウの掌から吸収され、リヨウの体内でエネルギーに変わる。

「……………おらよつと！」

リヨウが掛け声と共に掌から、物質に衝突すると熱エネルギーに変化するエネルギーの塊を放出する。

結果、リヨウの剣を掴んでいる箇所が爆発し、天子が後ろにのけ反る。

その隙を逃がさず、天子の腕を掴み、ジャイアントスイングを決め、空中へ吹き飛ばす。

「さて、第2ラウンド始めつか！」

飛行マシーンを着て天子の吹き飛んだ方向へ飛んで行く。

（アレやってみるか。）「か……………め……………は……………め……………」

そう言いながら両手を重ねる様に合わせ、

「波……………！！！！」（一度やってみたかったんだよな、コレ。）

掛け声と共に両手を突き出し、掌から衝撃波を放出する。

衝撃波は天子にクリーンヒットし天子を更に上空へ吹き飛ばす。体勢を整え、空中で停止し、リヨウも天子と同じ高度に留まる。

「……………あんたソレが無ければ空飛べないのね……………ださっ。」

「当たり前だ。オオカミや魚が空を飛べると思うか？それと同じ事だ。」

「どうでも良いからさっさと決着着けるわ。要石「カナメファンネル」！」

天子の周囲に要石が出現しリヨウに向かって要石の大群が迫って来る。

「ファンネルってニュータイプかお前は……………」

掌、足の裏から衝撃波を連射させていくが、要石の数量に間に合わない。

体も捻りつつ要石を砕いていくが、それでもリヨウが押され気味であった。

「隙ありー！」

リヨウへ1発の巨大な要石が飛んで来た。

(やべっ！いや、待てよ……………)

両手で要石を受け止め、足の裏でジェット気流を最大限発生させ、そのまま前進していく。

「WRYYYYYYY!!!ぶっ潰れよおお!!!」

天子はリヨウが押し返した要石を如何にか避けるが、

「グミ撃ちは失敗フラグだが、俺はやってやるぜ！だだだだだだだ
!!!!」

リヨウが掌から物凄い勢いで衝撃波を撃ち、全て天子へヒットさせる。

後方へ吹き飛んだ天子を掴み、地上へと落下速度とジェット噴出による反動の速度を加算したバックドロップを仕掛ける。

リヨウから離れようと必死にもがく天子だが、まるで離れない。

「……………こうなったら、「全人類の緋想天」！」

天子から至近距離のリヨウに向かって極太のレーザーが発射された。

至近距離からのレーザーを避けられる筈も無く、リヨウの体は吹き飛ばされた。

追い打ちに吹き飛んだリヨウへ更にレーザーを放つ。

しかし、すぐに体勢を立て直したりリヨウには簡単に避けられた。
今度はレーザーが2発と更に多数の針弾幕が飛んで来る。

飛行マシンはリヨウからエネリオンを受け取り、高機動力と緩急を付けた動きと衝撃波で弾幕を躲しリヨウを守る。

反撃に天子へ衝撃波を放つが、天子の握る剣に打ち消される。

(畜生、「クラッシュヤー」(リヨウの銃)を持ってくるべきだったな…… 仕方ない、あの能力が知られるよりはマシだ。)

掌に付けたジェット噴出装置を外し、右手を天子に向ける。

掌からエネリオンの塊が放出された。

天子はエネリオンを知らないが、直感的に危機を察知し、エネリオンの塊を躲す。

リヨウが開いている掌を握る。

エネリオンの塊が熱エネルギーに変換され、熱は周囲へと広がる。

当然天子も巻き込み、高熱で天子は一瞬怯む。

隙を逃さず、天子へナツクルを決め、下へと吹き飛ばす。

追い打ちに衝撃波を連発し、更に下へと吹き飛ばす。

「これがリヨウ様のビツク・バン・アタックだ!!!!宇宙の塵になれ!!!!」

「させるかー!!!」

ドゴーン!!!

リヨウの放った衝撃波と天子の放った要石が衝突し合い、相殺する。

同じ頃、先程までリヨウと天子が戦っていた場所にて。

「この辺りか、音がしたのは。」

「誰も居ないみたいですけど、岩の破片らしき物が散らばってますね。何か戦った跡の様な……。」

魔理沙と衣玖が来ていたが、既に誰も居なかった。

ドゴーン！

何か衝突した様な音が鳴った。

「何だ今の？下から聞こえた様な……。」

「まだ戦っているみたいですね。行きましょう。」

リヨウ達は空中戦を続ける内に高度を下げ、やがて花畑らしき場所へ足を着いた。

「地符「不讓土壌の剣」！」

「うらあああ！拳舐めんな！」

天子の斬り裂きとリヨウのパンチが正面でぶつかり合う。

しかし、リヨウの力が勝り、天子が押され、吹き飛ばされる。

リヨウが駆け込みながら天子へナツクルを仕掛ける。

天子が拳を刀でブロックし、リヨウの拳を払いのけながらリヨウの腹へ斬り付ける。

リヨウがほんの1m程跳び上がり、攻撃を避け、両足で天子の首を掴んだ。

そのまま手を地面に着き、手を中心に足が弧を描き、天子を投げ飛

ばす。

「天気「緋想天促」！」

リヨウを囲む様に弾幕が襲ってくる。

エネルギーの塊でかき消し、体を翻し、宙に舞い、地面を転がる。天子の足を狙う様にエネルギー塊を連射する。

宙に浮き、それを回避するが、リヨウの目的は阻止されなかった。リヨウが更に地面へエネルギー塊を撃ち込む。

地面には、大きくは無いが大量の花が生えている。

エネルギー塊はそれに衝突し、熱エネルギーへ変換され、熱は植物へ伝わっていく。

植物の自然発火温度はおよそ300℃前後。

熱は植物を燃やし、炎は周囲の植物をも巻き込んでいく。

「あ、熱っ！な、何なの?!」

「俺は熱など効かない。だがお前はどうか?」

天子が無言で、しまった、と言うような顔をした。

リヨウは高熱を前にしても汗など大してかかず、逆に天子は大粒の汗を流し始めていた。

天子へエネルギー塊を数発放ち、自分も天子の方向へ跳んで行く。

迫り来るエネルギー塊を剣で弾くが、リヨウの両腕ナックルを頭上から受け、炎の絨毯の上に叩き落された。

「あちゃちゃちゃ!!!」

炎から抜け出そうとするがリヨウの降下キックを喰らい、再び叩きつけられる。

「うぎゃああああ!!!」

俯せの状態から抜け出そうとするが、リヨウにのしかかられ、動けない。

「どうだ?俺は炎など効かないし、この炎も消せるのも俺だけだ。そろそろ参ったか?」

「気符「無念無想の境地」！」

天子は返事代わりにスペルカードを唱え、馬鹿力でリヨウから抜け出し、リヨウへ怒涛の剣攻撃を掛ける。

攻撃を受け止め、躲し、隙を突いて反撃する。

しかし、ダメージを受けている様な手応えを感じない。

「成程、痛みは効かないらしいな。しかし、それでは知らずの内にダメージを喰らう事だろうよ。」

「やあああああ!!!」

剣を振り下ろす!天子の腕を掴み、地面に叩きつける。

「そうだ、脱臼させれば……」

しかし、リヨウの思考は後方から飛んで来た弾幕に遮られる。

エネリオンを察知し、弾幕を避け、相手の姿を確認する。

「人の花畑を荒らし、しかも跡形も無く燃やすだなんて……この世から消えて頂戴!!!」

「誰かと思えば、幽香の奴か。漁夫の利って奴かい?だが俺はハマグリを突くシギでは無く人間を襲うプレデターってとこだがな……いや、ハンニバル・レクターだろうか……」

リヨウも幽香の事はある程度知っている様だった。

幽香がリヨウへ弾幕の嵐をばら撒き、リヨウが幽香へエネリオンの塊を連射する。

「…… そうだ、今の内に……」

「させるか!」

逃げようとした天子へエネリオンの塊を当て、爆発する。

天子はその場で力尽き、倒れた。

丁度魔理沙達も来た。

「…… これは、まるつきり焼野原じゃないか。あれはリヨウと幽香?あの倒れているのは…… 天子って奴か?」

「そうです!天子っ!しっかり!」

衣玖が天子の元へ飛びつき、容体を確かめる。

「気絶しているだけみたいですね…… ところで魔理沙さんはリヨウさんを止めなくて良いのですか?!」

「リヨウ!幽香!2人とも落ち着けて!うおっ危なっ!」

2人を止めようとする魔理沙だが、2人は言う事を聞くどころか更に攻撃を激しくしている。

そんな中、魔理沙は焼野原の中で戦うリヨウの中に何か抑制しようとしている気持ちを感じられた。

もつと深く知ろうとするが、何か恐怖を感じ、魔理沙はリヨウの思考を探る事を止めた。

そんなリヨウは、

（殺しては駄目だ！止めろ「フロスト」！お前はもう居ない！俺は柏リヨウだ！）

孤独に、そして必死に何かを抑えていた。

38 殺したくないんだ

「絶対に許さないわよ!!!」

幽香がそう怒りを叫ぶ中でリヨウは自分の右手が震えてきたのを感じた。

(クソッ!こんな時に限って!やっぱ使い過ぎは駄目か。)

「喰らいなさい!!!」

幽香がリヨウに向けて傘の先端を向ける。

リヨウが素早い動作で飛行マシーンを脱ぎ捨て、幽香に向けて、震えたままの右手を差し向ける。

不意にリヨウの足元から太く長いツタが何本も勢い良く生えてきた。

しかし、ツタがリヨウに巻き付こうとするが、リヨウに触れる前に燃え尽きてしまう。

どのツタも燃え尽き、幽香はリヨウに対して驚きの表情を見せる。

「も、燃えた?」

「俺が「灼熱のリヨウ」と呼ばれる所以さ。と言っても植物が燃える温度なんてほんの300℃位だな。」

すると、何かが幽香を制したのか、幽香の持つ傘から極太のレーザーが発射される。

リヨウが横方向へ倒れ、地面に手を着いて側転しながら、右手からエネリオン塊を放出する。

レーザーは躲され、エネリオン塊は幽香の傘にヒットし、爆発する。

大切な傘が燃やされ壊れ、更に爆風で後方にのけ反り、爆炎で視界が遮られたが為にリヨウが接近して来た事など幽香の知る所では無かった。

次の瞬間、リヨウの連続ジャブが何十発も決まり、最後のストレートを喰らい、力が抜けた様に倒れ込む。

幽香が顔を上げると、目の前でリヨウが震えた右手を自分へ向けていた。

「……………」

「……………」

「…………… 何よ、早く止めを刺しなさいよ！」

「…………… 殺したくないんだ。お前の為にも、俺の為にも。」

「どういう事よ！私は貴方を殺してやる気持ちだったのに、私に情けでも掛けているつもり?!」

「お前を殺しても何も良い事は起きない。お前にとつても、俺にとつても、そして、幻想郷にとつても。」

「…………… どういう意味?!」

「あまり言いたい事では無いが、簡単に言えば俺は俺を制御しなければならぬ。」

「そう言い終え、リヨウは飛行マシンを取るとその場を去って行った。」

「右手を震えさせながら。」

「ああ、疲れた…………… 家帰ってコーヒー飲ませてえ。」

「しかし、お前凄かったな。まさかあの幽香に呆気無く勝つなんて。アダムでも互角位だったんだぜ。」

「リヨウと魔理沙は里の通りを歩いていた。」

「まあな。腕には俺達反乱軍の中でも随一と言われている。」

「そのナルシストな性格を直せばモテると思うぞ。折角カッコいい見た目なんだし、勿体ないぜ。」

「うるせえ、アクエリオンシリーズ3作目の主人公もナルシストだつ

ただろうが。」

「何だ？そのアクエリなんたらつて。」

「ああ、お前達は知らないか……昔流行ったアニメなんだが。」

「分かん。それよりお前の嫁さんが来たらしいぜ。」

「お前までそう呼ぶか……。」

いつもの様に前方から慧音が来た。

「リヨウ、あの幽香を倒したって聞いたんだが、本当か？」

「まあな。相変わらず噂って速えな。それにしてもお前随分暇らしいな。」

「それより、お前ん家が大変な事になっているぞ！」

「は？」

3人とも早速リヨウの家に行ってみる。

「これは……。」

「ちよつと前に、まるでお前の家だけを揺らすかのような地震が起きたんだ。一体どうなっているのか分からない。」

「天子の奴か！クソツタレ!!!野郎、ぶつ殺してやらあ!!!」

リヨウの家は地震後の様に全壊状態だった。

「お、落ち着けよ。それで、どうするお前？」

「……今度は喫茶店でも開こうかな……慧音、建て直すまでお

前ん家に泊めさせてくれ。」

「ああ、良いけど。」

「サンキュー。じゃあ俺はちよつくら行って来る所がある。また後でな。」

飛行マシーンを付け、上空へと飛んで行き、リヨウの姿はすっかり見えなくなった。

「あいつ、仕返しするらしいな。ホント中身はガキだな……。」

「ホント、28歳とは思えないな。」

「霖之助、なんか良い拷問道具無い？」

「え、えっ？な、無いよそんな物?!」

「じゃあS A Wに出て来る様な殺人マシンとか。」

「何だよそれ……？」

「じゃあいいや。じゃあな。」

「……。」

「オレアクサムアラムツコロス!!!!」

「え、え？」

次の日、「文々。新聞」では天子にキン肉バスターを決めたりヨウの姿がトツプを飾った。

数十分後、リヨウが戻って来た。

「リヨウ、どうしたんだ？」

「天子とプロレスをした、それだけだ。さあ帰ろう。」
「……………」

魔理沙と慧音は、やっぱりな、と言うかのように無言で呆れるのだった。

「ハア……………」

リヨウが無意識にため息をつく。

ため息からは疲れだけでなく不満足感が感じられた。

(…………… 結局俺は何も変わってないのかも…………… まあ殺さなかつただけマシだが……………)

「…………… リヨウ、何か悩みでもあるのか？」

慧音がそう訊くが、

「ん？いや、ちよつと昔の事を思い出したただけだ。良い思い出では無いがな。」

リヨウは否定した。

しかし、慧音は震えるリヨウの右手を見逃してなかった。

真つ暗な路地。

子供が1人、何かに怯え逃げる様に走る。

誰かが足元に倒れているが、踏んだ事も気にせず必死に走る。

それを追い掛ける別の男。

涙を浮かべながら逃げる子供を、笑みを浮かべながら追い掛ける。

「…………… た、助けて……………！」

「クツクツクツクツクツ…………… どんどん逃げろ逃げろ。もっと走れ

よ人間。」

しかし、行き止まりに追い込まれる。

「…………… だ、誰か……………！」

「フツ、ハツハツハツハツハツハツ……………ゲームオーバーだな！」

男が子供に右手を向ける。 !!!

「おい、お前！ここで何をやっている！」

通り掛かった警官らしき男が異変に気付いたのか、声を掛ける。

「…………… 消えろ……………」

「何？」

「消えろ、と言ったんだ。補聴器くらい付けておけよゴミ。」

男が警官らしき男へ右手を向ける。

ドパーン！

辺りに元は警官らしき男“だった”ものの肉片が飛び散る。

「…………… う…………… あ、あ……………」

「お前もこうなるんだ。じゃあな。」

再び男が子供に向けて右手を向けた。

「うわああああ!!!」

子供が叫び声を上げると共に男に向けて両手を突き出しながら駆

け込んでいく。

「はっ！」

突然、リヨウは目を覚ました。

「…… またか。最近同じ夢ばつか見やがる……。」

意識すると、まだ右手が震えているのを感じる。

何となく部屋の外へ出てみる。

「おつ、月が出ている。満月じゃないが、綺麗だな…… 暫く眺めるか。」

外に出て、屋根に上る。

「おや？先客が居たか。」

「リヨウ、こんな時間にどうした？」

「お前こそ、満月じゃないのに何で変身しているんだ？」

慧音はいつもとは違い、髪や服が緑になり、頭から2本の角が生えていた。

「多分月が普段より大きいからだろう…… 白澤の姿だ。あまり見ないでくれ。見せたい物じゃない。」

「成程、スーパームーンか…… どうして起きてるかって？”俺達”は普段から脳の処理能力に優れているから睡眠が余り必要ないんだ。」

リヨウの言っている事はあながち間違いでは無いのだが、

「お前、何か悩みでもあるのか？」

慧音はリヨウが何かを隠している事を見通していた。

「…… さすが先生だな。分かった、話すぜ。お前と同じ様に俺にも見られたくない”自分”があるんだ。詳しくは言いたくないがな。一気に話すぜ。」

リヨウは間を開け、続きを話した。

「以前はその〃自分〃に完全に飲み込まれていた。それを如何にか少しづつ抑えていけたのは良いが、最近、まるでガンを治療したのに再発したかの様に、〃そいつ〃が再び現れ、また俺を飲み込もうとしている。俺はそれを出来るだけ制御しているが、もう限界が来ている。」

「………… そうか………… 私は今お前が言った様にはなつた事がないから分からないが、私なら何時でも力になる。負けるなリヨウ、少なくとも私は応援しているぞ………… 解決策は分からなくてすまないが…………。」

「良いよ。話すでも気が楽になった。ありがとよ。」

「どういたしまして。」

2人は握手を交わした。

慧音が手を離そうとした、が、リヨウが力強く握って離れない。

更にリヨウの手の震えが強く伝わって来る。

「………… リヨウ？」

「………… 俺から離れる！」

「で、でも…………。」

「早くしろ！」

慧音は両手の力で抜け出そうとするが、それ以上の力でリヨウが離すまいと握る。

リヨウが左手を伸ばし、右手を強引に引き剥がす。

リヨウと慧音の手が離れる。

次の瞬間、リヨウの右掌からエネリオン塊が放出された。

エネリオン塊は上空へと飛んで行った。

「…………。」

「………… クソツ！」

リヨウが立ち上がり、何処かへと走って消えていった。

39 楽園の素敵なザイオン

3日後。

「リヨウ、この前は…… どうも、悪かったな。」

「良いよ。別に気にするな。俺の方こそごめんよ。さて、それは無かった事にして……。」

「遂に出来たんだな。」

「いや、後は名前だけだ。イマイチ俺が名づけようとする中二臭いネーミングになってしまうものでな、店の名前は募集中だ。」

リヨウと慧音は、3日前天子によって全壊状態にされたリヨウの家のあった場所についてさつき出来たリヨウの新築、の前に居た。

「ちなみに現在は材料や河童たちを総動員したおかげで財政難さ……まあ入ってけよ。というかお前コーヒー好きだっけ？」

「お茶派だが、たまには悪くないな。ところで以前みたいに服の仕立てとかはしないのか？」

「ん？ああ、以前より作成に時間かかるだろうが、オーダーメイドのみなら可能だ。」

「それはまた世話になりそうだな。それじゃあお邪魔しようか。」

「いらっしやい。ちなみに今日だけは1人コーヒー2杯まで無料だぜ。」

そして、丁度良く、

「リヨウ、来たぜー！」

「新築祝いつて言うから来たわよ。」

「随分リフォームが早いな。」

魔理沙、霊夢、アダムも来た。

「噂をすれば嫁さんと一緒か？」

「…… ったく飽きねえな。イタリアンの3倍も苦い奴を飲ませてやろうか？性能も3倍になるぞ。」

「丁重にお断りするぜ、ってか何の性能だよ。ところで、私達はちよつとお前に訊きたい事があって、それが目的で来たんだ。」

「まあ3人共まずは座れよ。慧音も座ったらどうだ？」

アダム達はテーブルに、慧音はカウンターに座った。

霊夢と魔理沙はアメリカンコーヒーを、慧音はカフェラテを、アダムはブラックコーヒーをそれぞれ一杯頼んだ。

「アダムって苦いの大丈夫なの？」

「砂糖もミルクも無い奴だろ？ 私には飲めないぜ。」

「ついでにそれ一番焙煎の度合いが高いイタリアンだ。」

「何故かは分からないが、濃い味の物は好きでな。」

「癖や性格って改めて凄いな。記憶を失っても残っているなんて。」

「人格や癖は周辺環境の影響はあるそうだが、腸内細菌の影響も強いらしい。腸は脳に次いで人体の中で毛細血管や神経が大量に張り巡っているからな。」

「腸が性格に？ つくづくアダムの言う事は良く分からん……………」

「それよりも、このコーヒー美味しいわね。」

「そっういや飲んでなかった。どれ……………」

一口含み、味をしっかりと確かめ、飲み込む。

「………… 苦みが無くて丁度良いな。酸味が強い様だけど。香りも甘くて良いな。」

「アメリカンだからな。苦みが少ないんだ。ちなみにこの豆はエメラルドマウンテンっていうバランスの良い品種さ。比較的苦みが少なく香りとコクがある。」

「豆は何処で仕入れているんだ？」

「それ以前に幻想郷の気候ではコーヒーは育たない筈だ。」

慧音の質問にアダムの質問が更に重なる。

「無縁塚は知ってるだろ？ あそこにコーヒーの木が生えていてな。恐らく地熱によって温暖な気候が再現されているのだろう。」

無縁塚とは幻想郷内にある、所々に湯気や間欠泉が出ている荒野地帯の事だ。

「無縁塚を利用するとは………… 地獄からの怨霊とかでバチが当たったりしないだろうな……………」

「無縁塚つつつても直接そこにある訳じゃない、そこから数100m程度離れているが、地熱の影響は中々強い。」

話題が無いのか暫く沈黙が流れ、魔理沙はようやく要件を思い出した。

「そういやお前に訊きたい事があって来たんだった。」

「そういやそんな事言ってたな。」

「そうだ、僕からも質問がある。」

「私も良いかしら？」

アダムの声が続いて外から声が聞こえた。

「何かと思えば紫かい。とりあえず座れよ。」

「カプチーノ1つね。」

「…… それじゃあ、良いか？」

紫が座つたのを確認した後、魔理沙は質問を始めた。

「まあ単なる興味なんだが、お前の居た世界では何が起こっているんだ？戦争だと聞いたが、詳しく知りたくてな。」

「オツケー、じゃあ、きっかけからだ。管理軍の奴らが結成したのは1世紀以上前と言われているが、その辺は詳しくは分らん。大きく動いたのは今から60、70年前ぐらいにニューヨークである一人の間が突如暴れ出した。ニューヨークは半日で崩壊、犠牲者は400万人。その暴れた奴が最初に発見されたトランセンデンド・マンと言われている。そいつはアメリカ軍が総動員を挙げてやつと殺したらしい。その後、世界各地でトランセンデンド・マンが確認される様になった。世界各国はその強力さに恐れ、これに目を付けたのが管理軍の奴らさ。奴らは元々人類の完全支配が目的だったらしい。何せ機甲連隊やそれ以上に強力だからな。世界では駆除対象だった奴らを次々と捕獲し、戦闘に利用した。」

「ちよつと待てよ、強引に連れ去ってそいつに命令しても素直に言う事を聞かないと思うんだが。」

「命令を聞かせる様にしたんだ。脊髄にマイクロチップを埋め込み、それで制御している。」

「そうか、じゃあ僕の背中の中も…… リョウは無いか？」

アダムが突然思い付いたように喋る。

「いや、俺は貧民街生まれだからな。財源の余裕が無い為か付けられ

ていない。」

「それでは、何故僕はこうして操られていないんだ？」

「電波で制御しているらしいが、一応結界みたいな遮る物があってもチップ自体のプログラムで制御可能と聞いた事があるが、こないだの奴らは操られてたしな。だとすれば壊れているのかもな。ちなみにそのチップを利用して人民支配にも使われている。埋め込まれた者の人格とかは残っているが、命令には逆らえない。」

「酷い世界ね。人間らしさを奪われて、まるで奴隷みたいに……。」
紫が呟く。

「以前言っただろう、奴らは非人道的だって。だからこうして俺達が反乱起こしているって訳だ。話が逸れたな。で、トランセンデント・マンを利用した管理軍はあらゆる国家を潰し、30年で全ての国家をぶっ潰した。そして、奴らは1度は世界を完全に支配した。」

「そこで、お前達が立ち上がった、と。」

「都市部の奴らは皆チップを埋め込められているが、地方や貧民街では付けられてない奴も多い。俺達はそんな金の無い奴らが集まったのだが、そこは戦略さ。勢力を伸ばし如何にか奴らと渡り合えるくらいの戦力は持った。これを厄介に思った管理軍はユニバーシウムと幻想郷に目を付け、それから今に至る。ざっと説明すればこんなものだ。それじゃあ次はアダムの問題だ。」

「ああ、その管理軍はどうやって結界を破壊するのか疑問に思ってた。そもそも何故内部に侵入する必要があるのか。」

「悪いが俺達には詳しい事は分かってない。内部に侵入する事については手の中の爆竹と同じだ。爆竹を掌に載せて火を付けても火傷するだけ。握っていれば、ボン！そもそも外部から結界を破壊する手段が無いのかも知れんな。せいぜい乱す程度しか無理だし。」

「成程。あとトランセンデント・マンは何故エネリオンが使えるのか。ついでにトランセンデント・マンの防御機構について知りたい。自分や攻め込んできた敵の弱点は知っておいた方が良いからな。」

「良い質問ですね！って言いたいところだが、難しい事訊くなあお前……。今度お前と気の合いそうなカイルって奴を紹介してやる

よ…… まあ簡単に言えば俺達の脳の構造は非常に複雑で、その複雑な構造が俺達を使うTM専用武器のエネルギー変換回路と同じ働きになるって事らしい。防衛機構……まあ自身の身体の表面をエネルギーのバリアーで覆っているだけだ。金属弾や切断武器は勿論、熱、電磁波、力学エネルギー、素粒子、放射線、音波、エネルギーと全ての攻撃に対応出来る。まあ人によってその耐久限度は変わるし、完全に防ぐ訳では無い。つまり許容オーバーならダメージを受ける。こんな適当な説明で悪いな。」

「いや、十分に参考になった。ありがとう。」

「どうも。さて、紫、質問は何だ？」

「そうね、貴方、「高橋オーク」という人物を知っているかしら？」

（…… 萃香の奴何で他人に話しちまうかな…… せめて別の偽名言つてりや良かった……）「高橋オーク…… そういや俺達の世界で以前ニュースで話題になっていた奴だ。10年ぐらい前の殺人鬼だったか。もう死んだとか言われているが、もしやそいつが幻想入りしたってのか？」

（猟奇殺人犯？本当なら何か嫌な予感ね。でも萃香が接触したというのは何か月も前。それなら犠牲者が沢山出てもおかしくは無いし、現に萃香は殺されそうになったとか言ってるだけ、それでも犠牲者が居ないってのは…… リヨウが何か怪しいのだけど、藍に調べさせた限りではこれといった当てはまる様な事は無いし…… まさか隠し切っている訳では…… 彼の性格からは考えられないわね…… それとも……）

「どうした紫？」

リヨウが紫の思考を遮り、沈黙を破った。

「何でも無いけど、何かしら？まあ答えてくれてありがとう。」

（俺の正体に気付いた？いや、証拠が不十分で気付かれない筈だが。）
「何も無いなら良いけどよお。しかし、客来ねえなあ…… あのクラス野郎はこんな時に限って来ねえとはどういうこった。」

「ま、まあ、コーヒー好きな奴って幻想郷にはあんまり居ないしな。」
「それとクラス野郎と呼ばないでもらいたいのですが。」

タイミング良く文が店内に入ってきた。

「ホ、何時の間に！」

「何で私を嫌うんですか？」

「マスコミは世界で一番信用しちやあいけない奴だからな。特に自らを清く正しいと名乗り、黒髪のショートヘアーで幻想郷最速と言われている鴉天狗はな。」

「…… 貴方の記事をデタラメに悪く書きますよ……。」

「わりい、俺実は健忘症でさつき何って言ったのか忘れちまったよ。」

「…… ハアー…… 次は許しませんよ？まあ今回はちゃんとした

取材なので貴方の店を良く書いておきますけど。」

「ホラ吹きマスコミに勝つ程嬉しい事は無いぜ。」

「何か言いましたか？」

「良く聞こえる様に補聴器でも付けた方が良いんじゃないのか？そうすりゃ誰かさんの悪口もはっきり聞こえるだろ？」

「…… ハアー……。」

こうして文はリヨウの冗談に煽られっぱなしだった。

「まあ折角だし飲んでけ。この季節だからアイスコーヒーを勧めるぜ。焙煎もアイスに丁度良いフレンチローストだしな。」

「ところで店の名前は？」

「ああ、そいつは俺が名付けようとするけどどうしても中二になるから他の皆に決めさせようと思ったんだが、良い名前を思いついてな。一度しか言わんぞ。「ザイオン」だ。」

「どういった意味ですか？」

「ユダヤ教の言葉で楽園って意味だ。幻想郷にピッタリだろ？」

その後、ザイオンは大繁盛とまでは行かないが中々繁盛したらしい。

1 風神録

40 攻撃

アダムの両手にはナイフが、目先には目標がある。

目標目掛けて駆け込む。

目標は風によって僅かに動くのみだが、範囲が小さい。

目標に正確にナイフを当て、目標を正確に切った事を確認し、次の目標目掛けて駆け込む。

ナイフを一振りし、一気に目標を3連続で切る。

体の向きを変え、ナイフをジグザグに振り、目標を5連続で切る。

右と左のナイフを交互に連続で振り、次々と目標を切り落としていく。

1分後、アダムがナイフを振り回し終えた跡には茎をすっかり切り落とされたトウモロコシが所々に落ちていた。

「後は拾うだけで終わりで楽チンね。今度は何の訓練？」

「攻撃の正確さを鍛える。実には傷を付けず、茎をすっかり切り落とす。それも出来るだけ速くだ。」

「中々豊作かしら。あの秋の神は来なかったけど。」

「大した灌漑システムも付けず殆ど放置状態だったが、この量の中々な。今度は風車でも使って灌漑システムでも作るか。ところで、その秋の神とは誰だ？」

「秋穰子っていう豊作の神様よ。収穫前に畑に来てくれると豊作になるそうよ。あと姉に秋静葉というのも居たけど、それは紅葉の神様だったかしら。」

「植物の光合成を急激に活性化させるとでも言うのか？」

「さ、さあ…… どうやっているのかは分からないけど。」

「それと、最近リョウから聞いたんだが、管理軍が侵入を計画していると聞いた。」

「私もリョウから聞いたわ。あの時よりも大きな勢力で攻めて来ると。準備出来てる？」

「もう出来ているが、問題は何が起こるかだ……。」

リョウがリフォームして新しく出来たカフェ「ザイオン」では90年代のロックとラップを組み合わせたと思われるBGMが流れていた。

そして、慧音が店内に入って来る

「よし、来たか。」

「リョウ、話つて何だ？それとどうでも良いが、私はイマイチお前の好きな音楽の良さが分からないんだが……。」

「それはこっちの台詞だ、慧音。どうして良さが分からないんだ？レイジ・アゲインスト・ザ・マシーンってグループさ。ロックとラップを組み合わせた様な音楽、更に弱者を搾り取る様な社会を批判する歌詞が特徴的だな。」

「成程、お前達みたいな反乱軍にピッタリな曲という訳か。」

「まつ、そういう事。というか来たんならコーヒーでも飲めよ。今あんまし客来てないんだ。」

「そんな音楽かけているから客が来ないんじゃないのか？」

「これだから素人は何も価値が分かってないからそう言う……まあそれは置いといて、本題に入るか。チョット悪いニュース、いや、噂がある。」

リョウがわざとらしく間を置き、話し始める。

「友達から聞いたんだが、管理軍の奴らがこちらへ“侵入”では無く

“攻撃”を計画しているとの事だ。つまりこの前幻想郷に来た奴らよりも強い野郎が倍以上の人数で攻めて来るって訳。で、お前にコイツを渡しとく。」

懐からトランシーバーらしき物を取り出す。

「通信機だ。このツマミを回し、ここに合わせると俺の通信機に繋がる。このボタンを押せばこの画面に自分や他の奴の位置が映る。真ん中が自分で他に名前が書かれている所はそいつだ。一応この前の異変に関わった奴らには渡している。そうそう、他の奴らのツマミの番号はこの紙に書いておいた。」

「お前がこれだけ準備しているという事はとんでも無い事になりそうだな。」

「まあな。あと、お前は里の住人達を避難させてやってくれ。それと俺の仲間が2名来る予定だ。そいつの位置もその通信機に示される様にはなっている。つまり通信機に示されない奴は敵だ。分かったな。」

「分かった。どうか無事に済むと良いな。」

外界のとある研究施設。

「破壊神」の調整が終わりました。あと「コントローラー」も準備完了です。」

「分かった。では後は”待つだけ”だな。そして、今回もエネルギーの無駄遣いにならないければ良いが……… 少なくとも色々対策はし

てあるがな。」

「それと中佐、上からの案で「カオス」も出撃させて欲しいとの事ですが、どうしますか？」

「カオス」を？まだ未完成の筈だが、実践でのデータを取るのが目的なのか…… 良いだろう。しかし、これに対して奴らはどう出向くか、それが問題だ。しかし、今回は中々大掛かりだな…… ノースアメリカやサウスアジアの防衛ラインの戦力まで削るとは。」

「ですね。」

抑揚の無い声でポールは言った。

外界で別の研究施設。

「ロウ、奴らの動きはどうだ？」

「どうやら準備は完了しているらしいですね。しかし、奴らが侵入してくるのを待つなんて…… あまり頼り無い作戦ですね……。」

「境界が不安定になった後でなければエネルギー消費が大変ですからね。奴らが侵入する事は分かっていますが、もどのようにして境界が不安定になる事が分かるのか、疑問ですね。」

「それにしても、エネルギー不足が痛いな…… 核融合発電プラントが有っても境界に穴を開けるだけで大変だからな。それとカイル、お前は準備は出来ているか？」

「僕は出来ていますよ。それとトレバーさんはどうですか？」

「準備は出来てるらしいが、相変わらず無口な奴でろくに会話も出来

てない。今日までで7日も部屋から出て来てないそうさ。冥想でもしているのか……。」

「アイツらしいなあ…… それとも何かを感じているのか…… トレバーは無口だが部屋に閉じ籠る様な奴じゃない。少なくとも俺には何かに怯えている様に見える……。」

ロウが疑問を抱えた声で言った。

そして、外界のとある盆地地帯、その中にポツリと建っている神社。

「二人とも準備出来ましたか？」

「私達はもう出来ているが、早苗はどうだ？もうこの世界への未練は無いかい？」

「別に行くのは今すぐじゃなくても何時でも良いんだけどね。決めるのは早苗だよ。」

早苗と言われた少女の脳内にはある思い出がよぎった。

十数秒間彼女は黙り込み、ようやく口を開いた。

「…… 一つだけ心残りの事が有りますが、私は前に進みます。」

「そうか。では諏訪子、やるぞ。」

「分かってるわよ、神奈子。」

そして、3人は白い閃光に包まれ、何処かへと消えた。

その様子を見ている者が居るとは知らずに。

いや、観測、とでも言った方が正確だろう。

「結界が急激に不安定になりました。」

「よし、では始めろ。」

スペースマシーンに乗り込む2人の者達。

「自分のやるべき事を忘れるな、二人とも。信じているぞ。」

「分かっていますよ。リョウウによく言っておきます。」

「……では行って来る……。」

そして、二人も白い閃光に包まれ、ドニーやロウ、技師たちの目の前から姿を消した。

「結界が急激に不安定になりました。」

「よし、では始めろ。」

スペースマシーンに乗り込む9人の者達。

「ポール、今回はいけると思うか？」

「私は何とも思えません。中佐はどう考えているのですか？」
「私にも分かん。少なくとも私達の予想外の出来事が起こるかも知れない。」

そして、彼らも白い閃光に包まれ、ディック中佐やポール、技師達の目の前から姿を消した。

リヨウの携帯端末が鳴り出した。

「遂に来たのか？」

『ああ、予定通りカイルとトレバーも行かせた。それと、カイルからの伝言だが、あのアダムという少年が持っていたあの立方体は覚えているか？』

「勿論だ。それが何だって言うんだ？」

『簡単に言えば奴らはそれを狙っている可能性が高い。俺が出来るのはここまでだ。幸運を祈る。』

「オツケー。それとちゃんと超過労働手当出せよ。」

『強要かよ……それじゃあまた。』

通信を切り、端末をしまう。

「慧音、村人達は任せたぞ。」

「ああ、お前こそ無事でな。」

「全く、フラグ立てるんじゃないよ。」

「ハハハ、空気を和ませるな。それより早く行こう。」

「ああ。」

二人はザイオンを出て行った。

アダムの携帯端末が鳴り出した。

「来たんだな。」

『ああ。ところで作戦だが、一旦全員で博麗神社に集まる。詳しくは知らないが、お前が持っているあの立方体が奴らの目的らしい。』

「成程、分散させるんだな。分かった。」

通信を切り、端末をしまう。

「一旦全員ここに集合らしい。どうやらあの立方体が目的との事だ。」

「あの立方体が………一体何なのかしらね………」

4 1 強大な力

妖怪の山の中腹辺りで。

辺りに閃光が広がり、次の瞬間、9人の者達が出現した。

「着陸しました。シートベルトをお外し下さい。」

「そんなもんねーよ。」

すると、その内の一人が頭に手を当て、もう一人が目を瞑った。

（本部へ、テレポートに成功した。）

『分かった。では作戦を予定通り続けてくれ。』

ちなみに手や耳には通信ユニットの類は無い。

「連絡完了。増幅サンキュー。」

「別にどうって事無いさ。それより“爆弾”の位置はどこだ？」

「それが妙でな、幾つかに分かれて散らばっているんだ。」

「って事は奴らは俺達や“爆弾”に気付いたって事か？」

「一応計画が漏れる事はあらかじめ予測していたが、爆弾の事に気付かれるとは……一応計画通り二手に分かれるぞ。」

「了解。」

“8人”は4人と4人に分かれ、“9人”はそれぞれの方向に散っていった。

博麗神社には永夜異変の関係者達が揃っていた。

「カイルとトレバーは来ていないが、この面子でも良い。先に言っ

おこう。良いか、これをそれぞれのグループに数量が均等になる様に渡しておく。」

「この立方体、ユニバーシウムで出来ているみたいだけど、一体何の役割がある訳?」

紫が訊く。

「カイルにはこれが奴らの目的としか聞いていないからなあ……詳しくは分らん。とりあえずこれを奴らに奪われない様にするんだ。奴らはこれに反応するレーダーを持っていて、らしいからこつちの行動は知られている。とりあえずは計画通りに実行だ。分かったか?」

アダム達もそれぞれの方向へ散って行った。

東風谷早苗、緑のロングヘアと深い緑の目、白と青を基調とした巫女服を着た、先程幻想入りして来た少女、は何か不穏な気配を感じていた。

「神奈子様、諏訪子様、何か嫌な気配を感じませんか?」

「ああ、何か恐ろしい物に対して騒いでいる様に感じる。」

そう答えたのは八坂神奈子、青紫のセミロングと赤褐色の目、赤がかった様な黒い上着とロングスカートと胸の位置にある黒い鏡と、め縄が特徴的な女性、の容姿をした神、だ。

「私達は神社から離れる訳にはいかない。何が起きているのか見て来なさい。危ないと思えば逃げれば良いわ。」

そう提言したのは洩矢諏訪子、金髪のショートボブと紫の目、紫の白い袖の上着とスカートと目玉の2つ付いた帽子が特徴的な少女、の容姿をした神、だ。

「分かりました、行つて来ます。」

早苗はそう言うのと山の麓の方へ飛んで行つた。

自分達を見る視線に気付かずに。

1000m以上も離れているのだから当然だが。

「奴らも異変を感じ出した。レックス、どうする?」

『殺せ。俺達に関わる奴は敵だ。分かっているな、サム。』

「あいよ……結構好みの女なのによ……。」

サムと呼ばれた男性はそう言い残し、早苗を追って行つた。

リヨウは友人2人と再会していると同時にアダムに友人を紹介していた。

「元氣だったか? 2人共。コイツが色々言っていたアダムだ。アダム、左からカイル、トレバー、以前言つてた俺の仲間だ。」

「そっちは相変わらず元氣そうだね。それとよろしく、アダム。」

「……よろしく……。」

「ああ。」

カイルは長めの金髪で青い目をした、白いスーツとロングコートに全身を覆つた、アダムより1〜2年程年上の少年。

トレバーは坊主頭を少し伸ばした様な黒髪と茶色の目の、黒いタン

クトップに黒い柔軟素材のズボンを着た、リョウと同じくらいの年齢の男性。

「奴らの居場所が分かるか？」

「ちよつと待ってくれ。」

カイルが目を瞑り、数秒後、目を開けた。

「僕達を狙っているのが4人、立方体を狙おうと分散しているのが4人、ってところかな。」

「それと、あの立方体は一体何なんだ？」

アダムが訊く。

「おつと、詳しく話してなかったな。つい最近分かった事なんだが、あれは結界を破壊する、いわば爆弾だ。大量のエネルギーを用いる為、ユニバーシウムを使ったと思われる。」

「成程、半数を持ってきて良かったぜ…………。」

「それだと僕達が集中攻撃される筈だが、何を考えているのか…………。」

カイルが言い終える前に4人は横を振り向いた。

そこには素顔が分からぬように仮面で顔を隠した見知らぬ4人が居た。

仮面の色は4人共真つ黒だが、髪の色はそれぞれ黒、茶、金、赤、と違う。

「お前達の相手は俺達だ。」

「俺達を引き付け、あとは此処の住民を殲滅していくんだろ？だが此処の奴らを甘く見るな。少なくともお前達が考えているよりは強い。」

「考えているんじゃない、知っているんだ。」

「………… 増幅野郎」と「リーダー野郎」が居るって事か。」

「増幅機」と「オブサーバー」としつかり言ってもらいたい。そう言うお前は「灼熱」だな。そこに居るのは「バトルコンピューター」と「死神」、「アンダーソンシリーズ」の1号だろ？」

「あつたりい。お前らは………… 全然知らねえや。」

「当然だ。機密はお前達ほど漏れてはいないのでな。」

「今僕の事を「アンダーソンシリーズ」と言ったが、どういう意味だ？」
「どうでも良い、さっさと終わらせようぜ。」

8人はそれぞれ個々の武器を手にし、アダム達4人が疑問を抱えたまま、相手に向けて構えた。

青年が一人、妖怪の山の中腹にいた。

銀髪にYシャツとジーンズ、耳にはイヤホン、口笛を吹きながら何処かへと宛ても無い様な足取りで歩いている。

その青年の姿を犬走権はしっかりと捉えていた。

権は銀髪と赤い目、山伏風の白の上着と黒と赤のスカート、片手剣と盾を持った白狼天狗で、天狗のアジト周辺の見回りをしていた最中だった。

「こんな所で何をしていますのですか。天狗のアジトですよ。貴方の身の為にもすぐに此処から離れなさい。」

「五月蠅いぞ、黙ってる。」

「何を言うのですか。」

「音楽鑑賞中は黙ってる。綺麗な音楽に汚い雑音が混じる。」

権達天狗、あらゆる妖怪に共通する事だが、自分を貶される様な発言や行動に敏感で怒りやすい。

それを引き起こした者が妖怪よりも下等な人間（妖怪が一方的に決めつけているだけだが。）であれば尚更だ。

「何を！」

反射的に青年へ剣を振り下ろす。

青年が剣の鋭くない側部を手刀で押し、軌道を横に変えて避ける。続けて横に剣を薙ぐ。

またしても剣の側部を手の甲で押され、上に逸らされる。

腕を引き、青年の体の中心目掛けて剣を突き出す。

掌で軌道を横にずらし、直後、椀の顔面に裏拳を決めた。

吹き飛ばされた椀だが、よろけた体勢を整える。

しかし、

「……………はっ、消えた？」

青年の姿は椀の視界から完全に消えていた。

椀は千里眼という能力を持っているのだが、その能力を駆使しても青年の姿は見つからない。

「なあお前、ベートーヴェンは好きか？」

青年の声が四方八方から聞こえてくるが、何処に居るのか全く掴めない。

「俺は嵐の前の静けさって奴が好きでね、そよ風みたいな静けさが突然暴風になる様な音楽が面白くてね。それともお前モーツアルトのファンか？まあ良い、要するに俺はベートーヴェンが好きで……………」

突然、椀の目の前に青年の姿が現れた。

「……………俺も真似しているんだ。」

椀にボディブローを決め、再び椀の視界から消えた。

「くっ、山窩「エクスパーリーズカナン」！」

弾幕が椀を中心に広がり、周囲へと拡散する。

「良いねえ、その調子だ。でもそんなんじゃないや俺は……………」

今度は椀の背後に現れ、

「倒せない。」

椀の背中に肘打ちを決め、また消える。

「一体どうなって……………」

「困り事かしら、椀。」

「大天狗に言われて私達も来ました。」

「文様にはたて様じゃないですか！」

はたてと呼ばれたのは、茶色の長いツインテールと同じく茶色の目、薄ピンクのブラウスと紫と黒のスカート、手に持つ携帯端末らしき物が特徴的な、姫海堂はたてという鴉天狗だ。

「客が増えたか。俺はハーレムは疲れるから嫌いだが、まあ良いか。ちなみに俺はサム。楽しませてくれよ。」

どこからか青年の声が聞こえてくるが、何処からなのかは全く分からない。

紅魔館のメイドである咲夜は門番の美鈴と主のレミリアと共に見知らぬ人物と対峙していた。

「知ってるわ、貴方あの立方体を狙っているんでしょう。」

「ここから先は通しませんよ。」

「この主であるレミリア・スカーレットも直接相手してあげるわ。」

「……全く馬鹿な連中だ。俺はレックス。宣言しよう。俺は1分以内にあのドアを突き破り、中に入る。」

そう言った緑がかった様な黒髪の男は咲夜達に右手を向けた。

男の髪が揺れたかと思うと、咲夜達に向かって屈んでしまう程の強風が吹きつけた。

男が強風に乗りながら駆け込み、咲夜の首筋に手刀を当てた。

美鈴が男へ蹴りを繰り出すが、男の手によって軌道を変えられ、蹴りが咲夜にヒットしてしまった。

続けて美鈴をラリアットでレミリアへと吹き飛ばすが、レミリアは

難無く躲し、男へ鋭い爪を突き出す。

しかし、突き出した腕を掴まれ、地面に叩きつけられる。

咲夜が時を止め、男に向けてナイフを大量に投げ、時を戻す。

しかし、ナイフは突風に煽られ、男に当たる事は無かった。

美鈴が男へ飛び蹴りを放つ。

男が飛び上がり、踵落としを決め、レミリアへ叩きつける。

咲夜が男に向けて弾幕を放っていく。

男が咲夜に向かって手を突き出し、次々と放出される圧縮空気が弾幕を打ち消す。

圧縮空気は更に咲夜を襲い、上空へと吹き飛ばす。

「紅符「不夜城レット」！」

「虹符「彩虹の風鈴」！」

レミリアの十字型レーザーと美鈴の周囲を張り巡る様な弾幕が合わさり、男へ襲い掛かる。

男が空中に跳び上がり、圧縮空気を利用して空中で高機動力を生み出し、弾幕を避けていく。

「幻符「殺人ドール」！」

これまでであった弾幕に咲夜のナイフが追加され、男の機動力に追い付く。

避ける事が困難になった男は弾幕を放つレミリア達を睨む。

直後、レミリア達の頭上から圧縮空気が吹き付け、3人を地面に叩き落とす。

3人が怯んだ瞬間、男が手を突き出し、紅魔館の入り口のドアを吹き飛ばし、そのまま内部へ侵入していった。

「中に入られてしまいましたね。」

「宣言通りにされたのが悔しいわね。」

「3人掛かりでこれ程とは……。」

永遠亭には黒髪でダークブラウンのコートに身を包んだ少年が一人来ていた。

それを迎え撃つのは永遠亭のメンバー。

鈴仙が特技の幻影術と銃弾の様に速い弾幕を浴びせていたのだが、弾幕は青年に当たる前に何かに弾かれ、届く前に消える。

「無駄だよ、僕には攻撃は勿論幻影も通用しない。」

「私の能力が効かない?!」

自分の幻術が効いていない事に驚く鈴仙。

永琳が弓を引いたままの手を離し、矢を放つ。

これも少年に当たる前にことごとく何かに打ち砕かれた。

「物理攻撃も特殊攻撃も効かないのね。」

「そうさ、僕は出来の悪い兄さんとは違うんだ。レオだ。よろしく。」

永琳の独り言に答え、後方に居る輝夜を睨む。

すると輝夜の足元が爆発した。

空中に吹き飛ばされた輝夜を更に睨む。

上空から何かが押した様な感覚を覚えた輝夜は、次の瞬間地面に叩き落された。

続けて右手を鈴仙に向けて突き出し、鈴仙が衝撃波で後方へ吹き飛ばされる。

左手を吹き飛ばされている鈴仙に向けて突き出し、鈴仙の背中爆発が起こる。

「兎符「開運……」

「天丸「壺中の……」

てると永琳がスペルカードを詠唱しようとするも、少年が両手を突き出し、突き出した方向に向かって地面がえぐれていく。

てると永琳はスペルカード詠唱に失敗し、そのまま地面の津波に飲まれ、吹き飛ばされた。

博麗神社には暗い銀髪の大柄な男が来ていた。

それに対するのは霊夢、魔理沙、アリス。

男のフードに隠れた顔は感情が全く読み取れない。

何も言わず男が背負っている銃を取り出し、3人を照準に合わせて、引き金を引く。

1秒間に200発のペースで放たれる銃弾は霊夢達を驚かせるのに十分だった。

霊夢が上空へ飛び上がり、魔理沙が横へ転がり、アリスが後方に避ける。

霊夢が呪符から、魔理沙が八卦炉から、アリスが人形から、それぞれ弾幕を放ち、男の恐ろしい連射がそれを迎え撃つ。

3人の弾幕を合計した為か、霊夢達の弾幕が押していた。弾幕を避けるべく男が空中に跳び上がった。

「隙あり！ 霊符 「夢想……」

突然、男の体が不意に揺れ動いた様に見えた。

次の瞬間、霊夢の腹には男の拳がクリーンヒットしていた。

怯んだ霊夢に向かって拳を振り上げる。

「霊夢！」

魔理沙が男目掛けてレーザーを放つ。

すかさず男が振り向き、腕でレーザーをブロックする。

レーザーを腕に受けたまま魔理沙の方へと駆け込んで来た。

それを止めようとアリスが男へ弾幕を放ち、男にヒットさせるが、まるでダメージを受けた様な調子が見られなかった。

難無く魔理沙に接近した男は魔理沙の顔面を殴り飛ばし、今度はアリスの方へと駆け込んだ。

アリスの動体視力は男のスピードを捉えられず、そのまま飛び蹴りを決められた。

「恐ろしい力ね…… まともには喰らえばすぐにやられる…… そしてあの速さに防御力……。」

「まるで怪物だな……。」

「うう…… 私の攻撃がまるで効かなかったなんて……。」

42 黒い掃除機

白玉楼には真つ黒なローブに全身を包んだ男が来ていた。迎え撃つのは幽々子と紫とその手下達。

フードから良く見えない顔は不気味な笑みを浮かべていた。

「ここから先は通しませんよ。」

一番先頭に立つ妖夢が警告する。

「………… お前達は得体の知れない私を恐れている…………。」

妖夢が僅かに動揺した。

妖夢の緊張が最高状態になり、妖夢が剣を男に振り下ろす。

突然、妖夢の握る剣から火花が走ったかと思うと、妖夢が剣を放し、後ろにのけ反る。

男が妖夢に向けて右手を伸ばす。

妖夢の身体が痙攣した様に震え始めた。

「うああああ!!!」

「………… 私はこのままお前達を殺す事が出来る…………。」

「藍、橙、妖夢を!」

「分かっていますよ!」

「はい!」

藍と橙が男に向けて弾幕を放っていく。

「………… 攻撃など無駄だ…………。」

男が手を弾幕の大群に向け、直後、弾幕は火花を発すると共に消滅した。

「紫、私達も!」

「勿論よ!」

幽々子と紫の放つ弾幕が男を囲う様に襲う。

しかし、男を取り囲む弾幕も火花と共にすぐに散ってしまう。

「………… 攻撃の正体は電気ね。随分と射出速度が速いわ。ビームの様に発射する事で大量の弾幕を消すみたいね。」

「それで紫、良い作戦は無いの?」

「見た所身体能力とかは大した事は無さそうだけど………… 如何にか

接近戦に持ち込めば……。」

「ならば、魂魄「幽明求聞持聡明の法」！」

妖夢がスペルカードを唱え、半霊が妖夢の姿に変化し、長刀を握る。短刀を握った本体の妖夢は後方から剣を振って弾幕を放ち、半霊が男へ駆け込み、斬り込む。

男から放たれたエネルギーオン塊は半霊にヒットして火花を発し、半霊を吹き飛ばした。

男を襲う弾幕も電光と共にして散る。

「まるで隙が無い……。」

「光線ならどうだ。式輝「狐狸妖怪レーザー」！」

「藍様、手伝います。仙符「鳳凰展翅」！」

男へ向かって藍が放った大量のレーザーが伸び、隙間を埋める様に橙の放った弾幕が飛び交う。

男はその場から動じないまま目を瞑り、勢い良く見開いた。

男を中心に弾幕が爆発の衝撃波にかき消される様に火花を散らしながら消滅していった。

男の体表から放たれたエネルギーオンは弾幕を消滅させるだけに留まらず、周囲の紫達をも巻き込んだ。

5人共如何にか体が痺れる感覚に耐えたが、男から更に電撃が放たれる。

「華霊「バタフライデイルージュン」！当たりさえすれば。」

「手伝うわ。境符「二次元と三次元の境界」！」

幽々子がスペルカードを唱えると大量の反魂蝶が男に向かって飛んで行き、紫がスペルカードを唱えると男に向かって衝撃波が放たれた。

男が電撃を放ち、あっという間に反魂蝶を消し去っていくが、衝撃波はかき消せない。

衝撃波が男に命中し、辺りに衝撃波が広がっていく。

「やった？」

「いや、手応えが無かったわ……。」

突然、紫は背中に猛烈な激痛を感じた。

怯み、その場に倒れる。

幽々子が後ろを振り向く。

同時に自身に電撃が襲い掛かり、紫同様に倒れた。

「幽々子様！何時の間に後ろに?!」

「紫様、しつかりして下さい！」

「読みが甘かったわね。奴は身体能力が無いんじゃないやなくて使おうとしなかったのね。」

紫が起き上がりながら言う。

「まるで私達を舐めているみたいね……紫、これからどうするの？」

「……援軍が来るまで持ちこたえるしか無いわね……もっとも皆も苦戦中らしいし。」

黒髪の男へナイフの斬撃の嵐を繰り出す。

それに対してカミソリの様に小さいナイフで攻撃を全て受け止め、隙を見せたアダムへ蹴りを繰り出す。

蹴りをしゃがんで避け、そのまま下段回し蹴りを黒髪の男へ仕掛ける。

蹴りを飛び上がって避け、アダムへ回転踵落としを繰り出す。

黒髪の男の足を受け止め、後ろへ投げ飛ばす。

アダムに投げられたが、どうという事無く着地する。

黒髪の男へ駆け込み、突進しながら2本のナイフと脚を利用し、連

続攻撃を仕掛ける。

アダムの連続攻撃を次々と避けていき、アダムへ1本のカミソリともう一本の腕と脚を利用し、連続攻撃を仕掛ける。

アダムのナイフが黒髪の男の首筋を掠り、黒髪の男のカミソリがアダムの左胸を掠る。

2人共続けて相手にミドルキックを繰り出し、互いの蹴りをぶつけ合う。

軽く吹き飛ばされた2人だが、3m程距離を置いて着地する。

「……………」

「気に入った、久しぶりに面白い奴と戦ったものだ。」

戦っているのはリヨウ達も同じ。

しかし戦い方が全く違う。

リヨウが相手3人に銃を乱射する。

3人共銃弾を避け、金髪の男がリヨウへショットガン型の銃を連射する。

リヨウが地面を転がって銃弾を避け茶髪の男へ蹴りを繰り出す。

茶髪の男が蹴りを避け、トレバーへ2丁のサブマシンガン型の銃から大量の銃弾を放つ。

トレバーの装備しているエネルギーオンによって強固さを増している籠手と脛当ては銃弾をブロックし、エネルギーオンで威力を増した手袋で赤髪の男にナツクルを仕掛ける。

赤髪の男がナツクルを躲し、同時に自身の槍をトレバーへ突き出す。

トレバーが籠手で槍の軌道を逸らし、がら空きの腹へカイルがスナイパーライフル型の銃から放った銃弾が赤髪の男を襲う。

金髪の男がカイルの放った銃弾の軌道上に立ち、盾を翳して銃弾を防ぎ、茶髪の男が横からカイルへ銃弾の嵐を放つ。

カイルが宙を舞いつつ体を回転させて銃弾を避け、リヨウが茶髪の男へ銃を連射する。

茶髪の男が銃弾を自身の放った銃弾で打ち消し、赤髪の男がリヨウへ槍の先端の銃口から銃弾を発射する。

リヨウが銃弾を躲し、赤髪の男へパンチを仕掛ける。

赤髪の男が槍の柄を立ててパンチを受け止め、リヨウへ蹴りを繰り出す。

リヨウが蹴りをしゃがんで躲し、赤髪の男へローキックを繰り出す。

赤髪の男が蹴りを跳び上がって避け、金髪の男からリヨウへ銃弾の嵐が襲う。

リヨウが後方へ跳び上がって銃弾を避け、カイルが背後から金髪の男へ銃弾を発射する。

金髪の男が後ろへ振り向き、盾で銃弾をブロックし、グレネードランチャー型の銃から1発銃弾を放つ。

カイルが跳び上がり、銃弾が地面で爆発し、1秒間引いたままの引き金から指を離し、銃弾を1発放つ。

金髪の男が銃弾を体ごと前方に避け、カイルへ跳び蹴りを繰り出す。

カイルが飛び蹴りを横に避け、横から金髪の男へ回し蹴りを繰り出す。

金髪の男が蹴りを放ち、カイルの蹴りと相殺させる。

カイルが着地し、茶髪の男へ銃弾を連射する。

茶髪の男が中国拳法の鉈と同じ様な形の剣を2本使い、銃弾をかき消していく。

トレバーが茶髪の男へ駆け込みながら蹴りを連続で繰り出す。

茶髪の男が次々と繰り出される蹴りを受け止めていき、トレバーの頭へ剣を突き出す。

トレバーが刺突を横に逸らして躲し、茶髪の男へ威力を増加させる肘当てを付けた肘打ちを仕掛ける。

茶髪の男が肘打ちを躲し、トレバーへ次々と斬撃を繰り出す。

トレバーが後方に下がりながら斬撃を次々と捌いていき、茶髪の男の方に手を置いて跳び上がり、両手を支点に空中で弧を描く。

同時に茶髪の男へ後方から両足蹴りを決め、吹き飛ばす。

そして、6人はその場で対峙し合う。

「腕を上げたな、トレバー。流石だぜ。」

「……………」

「2人共、彼らの正体が分かった。「ブラッククリナーズ」だ。」

「あの噂の対TMグループか。顔が黒い仮面で隠されているっていう管理軍の腕利きの殺し屋だと聞いた事があるぜ。」

「…………… 現在は全員で8人と聞いたが、4人だけ来ているのだろうか……………」

「トレバーさんの言う通りだと思いますよ。大質量のテレポートはコストが掛かるし、外界の戦力を下げる訳にもいかないし。」

「ところでアダムの奴はどうした？」

「え？…………… 居ない……………」

そして、ブラッククリナーズの3人はリヨウ達3人に聞こえない方法で会話を取っていた。

脳から検出された思念波をコンピューターが読み取り、味方の端末に信号を送り、送られた信号は仮面の裏側に付いている通信ユニットで再生する。

（ウアサゴ、マルバス、「バトルコンピュータ」を集中的に攻撃するんだ。身体能力は劣っている。）

（ところでアガレス、ガミジンはどうした？）

（そういえばあの「アンダーソンシリーズ」と戦っていて気に入った、とか言っていたな。）

（ガミジン、ガミジン、応答しろ。）

（こちらガミジン、問題は無い、すぐ片付く。）

（そうか。ではそっちは任せた。）

レックスが紅魔館に侵入し、床を突き破ってヴワル図書館へ侵入した。

「レミイ達が無力化されたみたいね。何とか時間を稼げると良いんだけど……。」

ヴワル図書館にはパチュリーや小悪魔、その他多数の妖精メイド達と侵入者を待ち構えていた。

「立方体はここにある筈だ。出せ。」

「一斉攻撃よー！」

妖精メイド達が弾幕を放ち、レックスを迎え撃とうとする。

レックスは有無を言わず両手を伸ばし、迫り来る弾幕を衝撃波で吹き飛ばす。

衝撃波は離れたパチュリー達をも巻き込み一瞬だが怯ませた。

その間、数え切れない程肉を打つ音がパチュリーには聞こえた。

後ろを振り向くと、妖精メイドの半数が床に倒れ、レックスは立っている内の一人に膝蹴りを喰らわしていた真最中だった。

「さっきのは風かしら。火符「アグニレイディアンス」！」

レックスへ大量の火球が襲い掛かる。

しかし、火球はレックスの眼前に集まり、やがてパチュリーの方へ飛んで来た。

「火を操った？ならば、水符「ベリーインレイク」！」

パチュリーから水弾が放射状に広がり、水のレーザーが火球をかき消しながらレックスに向かって飛んで来る。

すると、レックスが躊躇う事も無く手を前に出した。

水のレーザーと水弾はレックスの掌の前に集められた。

「水も操れるの?!」

「流体制御だ。」

勢い良く水弾が発射された。

パチュリーは辛うじて避けたが、後ろの本棚が崩壊した。

「恐ろしい威力ね……人の部屋に勝手に入って来て、その上部屋を滅茶苦茶にしないで頂戴。」

「戦争にプライバシーも糞もあると思うな。」

レックスがパチュリーに向かって手を向ける。

突然、横からレーザーが飛んで来た。

如何にか避けたレックスはレーザーの飛んで来た方向を見た。

レーザーを発射したのはフランだった。

「ほう、中々の威力だな。」

「私が相手してあげるわ。」

「死にたいらしいな。」

突然、レックスの上下左右前後360度からナイフが飛んで来た。

突風でナイフを飛ばすが、何処からか槍が飛んで来た。

槍を手で受け止め、捨てる。

「私達も忘れないで頂戴。」

「神宝「ブリリアントドラゴンバレッタ」！」

「天呪「アポロ13」！」

しかし、弾幕がレオに届く事は無い。

「ハハハ、何でこの世界には馬鹿な奴らしか居ないんだろう。僕には攻撃は効かないと言っているだろう?」

しかし、レオは輝夜と永琳が放つ弾幕に気を取られていた。

「狂視「イリユージュンシーカー」！」

だが、この弾幕もレオに届く前に霧散し、更には催眠術まで効かない。

「音楽は好きかい？　そういや僕の兄さんはベートーヴェンが好きだったな。何でも静けさが急に壮大な音楽になるってのが魅力だったさ。」

レオがそう言うと、突然甲高く大きい音がレオから発せられた。ただでさえ耳の良い鈴仙とてゐは悶絶し、永琳と輝夜も怯むのだった。

「次はストロボでもどうぞ。」

次はレオから激しい閃光が発し、鈴仙達は目を腕で覆うが閃光のダメージが多く見えにくくなった。

「どうした？　これじゃあ全然楽しめないよ。」

(……………何か弱点がある筈……………)

そう思う永琳だが、次の瞬間衝撃波に吹き飛ばされた。

早苗は神社のある山の麓に来ていた。

「……………さつきまでは何人かここに居て……………何処かへ別々に行つて……………一番近いのは……………あつちですね。」

早苗は妖怪の山の方向で何かエネルギーを感じた。

しかも何か光弾や音がしている場所を発見した。

直感に怯えや恐怖があったが、神奈子と諏訪子からの使命感によって負の感情は抑えられた。

その方向へ飛んで行き、少女3人が戦闘の体勢を取っていたのを見た。

突然、少女の内の一人の前に現れ、パンチを決めるや否や、姿を消した。

そこへ降りていく。

「何が起こっているんですか？」

「貴方は？見掛けない顔ですが……。」

「さっきこちらに幻想入りしたのですが、何か不穏な気配を感じたもので。」

「……私にも何が起こっているかさっぱり分かりません……。」

文が代表して答える。

「どうやら誰か来たらしいな。お前ら初対面なんだろう？自己紹介する時間くらい与えてやるよ。俺は優しいからな。」

「……東風谷早苗と言います。」

「わ、私は射命丸文。」

「姫海棠はたてです……。」

「……犬走権と言います。」

「終わったらしいな。俺はサムだ。」

早苗の目の前にサムが現れ早苗へ跳び蹴りを決めた。

「今のはほんの挨拶だ。言っておくが俺はお前ら“出来損ない”とは違うんだよ。」

そして、サムは再び景色に溶け込んだ。

43 人形

右のナイフでガミジンのカミソリを受け止め、左のナイフで腹を狙う。

突き出したカミソリを引き寄せ、アダムの斬り裂きの軌道を逸らし、再び突き出す。

ガミジンから突き出されたカミソリを体ごと避け、足元にナイフを薙ぐ。

アダムのナイフを後ろに下がって避け、ミドルキックを繰り出す。

ガミジンの蹴りを跳び上がって避け、頭へ回し蹴りを繰り出す

アダムの蹴りをしゃがんで避け、その状態から跳び上がりながらサマーソルトキックを繰り出す。

体を捻ってガミジンの蹴りを躲し、地面を転がって着地する。

そして、アダムの蹴り上げとガミジンの降下踵落としが衝突し合う。

パワーでガミジンが勝利、アダムの蹴りもろとも地面に叩きつけた。

蹴りの反動で跳び上がり、怯んだアダムに向かって降下キックを繰り出す。

地面に手を着いて素早く起き上がったアダムは跳び上がり、ガミジンの放った蹴りを避け、自らも蹴りを放つ。

アダムが頭に向かって繰り出した蹴りを掴み、裏拳を突き出す。

ガミジンから突き出された裏拳を受け止め、もう一本の足で蹴りを繰り出す。

アダムから放たれた蹴りをもう一本の手で掴み、投げ飛ばす。

投げ飛ばされたが難無く着地したアダムへ追撃にとマグナム型の銃を向けた。

弾速は音速の7倍、連射速度は1秒に10発。

連射能力に欠けるが威力は高い。

対するアダムも愛用の銃「シルバーファルコン」を2丁とも向ける。

弾速は音速の5倍、連射速度は1秒に25発、それが2丁。

通常ならば数量でアダムが圧倒する。

しかし、ガミジンはもう片手にカミソリを握り、銃弾を防ぐ。

一方でアダムは両手が塞がっている為、銃弾を体ごと避けるか銃弾で打ち消すか。

前者は確実だがエネルギー消費が激しい。

後者はエネルギー消費は比較的少ないが銃弾を銃弾に当てるという精密射撃が必要になる。

アダムはこの両方を併用して出来るだけエネルギー消費を抑えるが、ガミジンはそれ以上に無駄が無い。

アダムは左の銃をしまい、代わりに愛用のナイフ「シルバーウルフ」を持ち、銃弾を弾いていく。

しかし、そうすることでガミジンは避けやすくなり、攻撃が更にとたらくなくなる。

そこでアダムは右の銃もしまい、右手にもナイフを握る。

両手のナイフで銃弾を弾きながら前へ進んでいく。

ガミジンも銃をしまい、アダムの方向へと進んでいく。

頭部を狙ったアダムの突きをカミソリで逸らしながらアダムへ突きを繰り返す。

左のナイフで突きを躲し、右のナイフでガミジンの腹へ薙ぐ。

ガミジンのカミソリがアダムのナイフを捉え、アダムへ左手を突き出す。

アダムは右手でガミジンの左手を受け止め、二人はそのまま対峙する。

「アンダーソン、お前は俺に勝てない、そう思っているだろうか？」

「そうだ。」

「なら、何故俺に攻撃する。やられると分かっているだろうか？」

「それは僕が知っているデータ上での事だ。僕はそれ以外の何かを感じる。」

「人形の貴様がか？詰まらん冗談を言うな。」

「人形…… どういう意味だ？」

「そう言えば貴様は知らないんだったな。いいだろう、折角だから冥

途の土産にでも聞かせてやろう。」

ガミジンがアダムを突き離し、カミソリで次々と突きや斬り裂きを繰り返していく。

対するアダムは2本のナイフを使っているものの、反撃する暇が無い程余裕が無かった。

(まだ完全に慣れていない二刀流とはいえ、これ程圧倒されるとは、恐ろしいスピードだ。更にあんなカミソリで攻撃を受け止めるパワーも凄い。)

ズドツ!

「権!」

ドガツ!

「はたて!」

権とはたてがサムからの攻撃を受け続けた結果気絶し、残りは早苗と文の2人のみとなった。

「これで分かったよ。羽の生えた人間は耐久力に劣るってね。」

何も無い空間からサムの余裕に満ちた声が聞こえてくる。

「貴方、天狗を馬鹿にしないでもらえますか?!人間とは違う高貴な妖怪なのですよ!」

「じゃあ天狗はその人間に負けてるって事だ。もっとも、そんな事言ったらそちらの味方の人間に失礼だろ?」

「.....」

「貴方、もしや地球管理組織のトランセンデンド・マンですね。」

早苗が言う。

「そうさ。まあそれを知った所でどうにかなる様な事じゃないからな。まさかそれを知って俺を倒せると思ったか？」

2人とも沈黙する。

「……………ならば、はあっ！」

文が全身に気合を込めると、強風が文達から周囲に向かって吹き出した。

「へえ〜。でも決定力に欠けるね。」

突然サムが文の背後に現れた。

「文さん、後ろ〜！」

早苗がサムに向かって手を突きだし、文が後ろを向こうとする。

サムが文の腕を掴み、早苗へ投げ飛ばす。

投げ飛ばされた文が早苗に衝突し、続けてサムの連続攻撃が2人を襲う。

踵落として地面に叩きつけ、2人の目の前から消えた。

「こんな所で昼寝か？随分呑気な奴らだな。」

「な、何を……………」

（…………… どうすれば…………… そうだ！）

早苗が目を瞑り、3秒後、勢い良く目を見開いた。

衝撃波が早苗たちから周囲に向かって吹き出した。

「おおっ?!」

早苗は1か所だけ虚空に衝撃波が吹いて複雑な気流が発生しているのを確認した。

「そこですー！」

早苗がお祓い棒を突き出し、弾幕を放つ。

しかし、手応えが無かった。

「今のは中々だったぞ。でもそれでは俺を倒せない。」（何だ？今のは。アイツ、まさかレックスに匹敵する程のエネルギーを持っているのかも知れん…………… まあ今の所は力の使い方を良く分かっていないらしいがな。）

紅魔館では激しい爆音や激突音が地下から聞こえていた。

「幻幽「ジャック・ザ……」」

「彩符「彩光……」」

「火&土符「ラーヴァク……」」

「神術「吸血鬼……」」

「禁弾「カタディオプ……」」

レックスはスペルカード詠唱に対し、上に手を向けた。

衝撃波が天井に吹き付け、天井を剥がし、あらゆる瓦礫を落としていく。

結果、5人は瓦礫を避ける羽目になり、全てのスペルカードは発動せず終わった。

美鈴が飛び上がり、レックスへ蹴りを仕掛ける。

蹴りを体ごと横に避け、美鈴へパンチを決め、吹き飛ばす。

咲夜が時を止め、レックスの目の前に来るとナイフを手に持ち、レックスの眼前に向け、時を戻す。

その瞬間、咲夜は胸が苦しくなったのを感じ、咳き込む。

「気体の密度が高い故に酸素も多くなる。酸素は本来生物にとっては有害な気体だ。肺水腫は死に至る事もあるから気を付けるんだな。」

咲夜が残った気力でレックスから離れる。

「ゴホッゴホッ！……まさか接近出来ないなんて……それに時が止まった状態で攻撃できないのを見抜くとは……。」

「神槍「スピア・ザ・グングニル」！」

レミリアがスペルカードを唱えると手に槍を握り、レックスへ突き出す。

レックスがパチュリーを引つ張る様に手を引いた。

するとパチュリーの背後から衝撃波が吹き、レミリアの突進する軌道上に吹き飛んだ。

「パチエー！」

槍を引き戻し、パチュリーに当たらない様にしたが、次の瞬間、パチュリーはレックスの膝蹴りを腹に受けた。

再び槍を突き出そうとするが、それよりも速くレックスの手刀がレミリアの後頭部に直撃した。

「これだから人情というのは……今のはお前の友人に当たらない様にしていれば俺に当たったんだぞ。」

「禁弾「スターボウブレイク」！」

レックスへ太く強力なレーザーが襲う。

しかし、スペルカードが発動する以前にレックスの手はフランの方向を向いていた。

フランの足元から衝撃波が吹き、結果、レーザーの軌道は上に逸れた。

天井に大穴が空き、レックスはそこから出て行った。

「……まさか作戦がバレていたというの？小悪魔が危ないわ……。」

まだ膝蹴りのダメージを回復していないパチュリーが弱々しく、言った。

「日光は苦手だから早く終わらせたい所だけど、そうも行かないわね。咲夜はあの調子だし、パチエもかなりきついみたいだし、美鈴は気

絶……フラン、手伝ってくれる。」

「良いよ。」

スカーレット姉妹はレックスの通った跡を追った。

鈴仙達4人掛かりで四方八方から放つ弾幕はレオに全くダメージを与える事は無い。

「質量攻撃は全く効かない……この不思議な力の正体だけでも分かれば少しは何とかなるかも知れないわね……鈴仙、あのレオという少年に当たる太陽光の波長を出来るだけ短くしてみて。」

「え？分かりましたけど？」

鈴仙が疑問を抱えたまま永琳に言われた通りに太陽光の波長を短くした。

光や電磁波は波長が短くなる程周波数が高まり、強いエネルギーを持つ。

レオに降り注ぐ太陽光は可視光線から紫外線、そしてX線に変化した。

「むっ？」

レオは一瞬戸惑うも、太陽の方向を見るなり、再び何とも無い顔をした。

「……電磁波も効かないのね。つまり粒子も波も効かないとなると……。」

「永琳、熱はどう？」

「輝夜、熱も波の性質を持っているのよ。」

「それじゃあ……。」

「あの少年が操れる以上のエネルギーを持った攻撃をするしか無いわね。」

「フッフ、心配するなよ。一瞬で殺すなんてしないよ。じっくり苦し

めるからさ。」

再び4人がエネリオンの塊を受けるなり、吹き飛ばされた。

「霊符「夢想封印 集」！」

「星符「エスケープペロシテイ」！」

「白符「白亜の露西亞人形」！」

3人がそれぞれ放った弾幕が男を囲う様に襲い掛かる。

しかし、男は大柄な体を途轍もない速さで動かし、更に1秒間に200発の勢いでエネリオンの弾丸を放っていく。

「でえい！」

魔理沙が箒に乗り、男へと突進しながら弾幕を放つ。

前方から迫る弾幕を物ともせずにはぐれ、魔理沙に肘打ちを決め、地面に倒す。

アリスが人形達を男の後方180度に配置させ、弾幕を放とうとする。

男が背後の人形達に気付いていたかのように振り向き、大量の銃弾を人形達に浴びせる。

霊夢が男の周囲に結界を張り、更に弾幕を配置する。

男が跳び上がり、結界を破り、霊夢を掴む。

「試験中「ゴリアテ人形」！」

アリスがスペルカードを唱えると1体の人形が巨大化し、手に持つカミソリまで巨大化した。

ゴリアテ人形が男へと襲い掛かる。

掴んでいる霊夢を蹴飛ばし、反動でゴリアテ人形へ突進する。

ゴリアテ人形の突きを体を逸らせて躲し、横から踵落としを決め、地面に叩きつける。

「今だ！ 彗星「ブレイジングスター」！」

魔理沙が極太のレーザーを発射しながら男へ突撃していき、更には周囲へ光弾をばら撒く。

男は躲そうともせず、腕を胸の前に構え、攻撃をガードした。

魔理沙が男に衝突し、爆発が起こる。

魔理沙が爆炎の中から出て来た。

「2人共、大丈夫か？」

「大丈夫だけど、まだ生きているわよ。」

霊夢が質問に答えると同時に重要な事を伝える。

「あんな攻撃を受けてまだ平気だなんて……………」

爆炎の中から男が出て来た。

男が着ていたローブはすっかりボロボロになり、外れた。

その代わり、男の体表はライダースーツの様な伸縮素材のスーツと何らかの金属らしき物で出来た鎧に覆われていた。

「どおりであんなにピンピンしている訳だな。」

「あの鎧をどうにかして外さなきゃね。そうすれば攻撃が通るかも知れないわ。」

4 4 黒い男

男が地面を蹴り、妖夢に接近する。

自分に向かって突き出されたパンチを避けたものの、次の瞬間電撃が妖夢を襲う。

続けて近くに居る橙を掴み妖夢へ投げ飛ばし、ぶつけた。

藍の放つ弾幕を電撃で呆気無く消し去り、藍へ跳び膝蹴りを喰らわし、そのまま踵落として妖夢と橙が倒れている所に叩きつける。

そのまま倒れている3人に向かって降下キックを繰り出す。

紫が男に向かってレーザーを放ち、それを男が避ける為に体を捻り、結果、降下キックは決まらなかった。

男が着地した所へ幽々子が逃げ場が無い様にあらゆる方向から弾幕を放つ。

電撃が男の体表から周囲に向かって放たれ、弾幕を消滅させる。

紫が手元にスキマを開き、同時に男の周囲にもスキマが開く。

手元のスキマに弾幕を放ち、周囲のスキマに電撃を放つ。

弾幕と電撃がぶつかり、互いをかき消し合う。

「魂魄「幽明求聞持聡明の法」！」

短刀を持った妖夢が男の右側から、長刀を持った妖夢の姿をした半霊が左側から、斬り掛かる。

上手い具合に体を捻り、斬撃を躲す。

「方符「奇門遁甲」！」

「式弾「アルティメットブティスト」！」

前方から橙が、後方から藍が、弾幕を放ち、更に妖夢と半霊が次々と斬撃を繰り出す。

男が電撃を放って弾幕を打ち消し、僅かな隙を突いて妖夢と半霊を蹴り飛ばす。

男が藍と橙に向かって電撃を命中させるが、同時に妖夢と半霊が吹き飛ばされたまま剣を振り、弾幕を放つ。

更に放たれた弾幕を消そうと男が横に電撃を放つと同時に男の四方八方からスキマが開いた。

「隙あり！紫奥義「弾幕結界」！」

「これで決めるわ！」「西行寺無余涅槃」！」

男が周囲に電撃を放つが、弾幕の量が多すぎて押されていく。

「奥義「西行春風斬」！」

「鬼神「飛翔毘沙門天」！」

「幻神「飯綱権現降臨」！」

残る3人も自身の最高の技を放つ。

男が全方向から迫る弾幕を捌き切れなくなり、大量の弾幕を受け、大爆発が起こる。

「やったかしら？」

紫が呟く。

次の瞬間、爆炎の中から何かが出て来た。

“それ”は速すぎて何なのかは認識出来なかったが、全身が黒く、人の形をしていた。

妖夢に接近し、ナツクルを決めた。

藍に接近し、回し蹴りを決めた。

橙に接近し、肘打ちを決めた。

幽々子に接近し、ボディブローを決めた。

紫に接近し、膝蹴りを決めた。

5人は攻撃を受けて吹き飛ばされながら、それが何なのか認識した。

全身が真っ黒で筋肉質な大柄の男。

全身が真っ黒な伸縮スーツに包まれている様な外見だったが、服を着ている様な感じがしない。

漆黒の顔面は鼻、口、耳、髪は無く、バイザーの様な目だけが赤く光っている。

そして、先程紫達が戦っている男の姿は見当たらなかった。

「これは、一体……。」

「あの男が居ないわ。」

「変身したとでも言うの？」

『周囲に高エネリオン反応を確認 座標確定 計画を開始する』

黒い男の目線は戦っていた5人では無く、離れた所にある桜の巨木にあった。

「西行妖を見ている?!」

リョウが1秒間に100発のペースで放った銃弾は赤髪の男、マルバスの両手に握る剣でかき消される。

マルバスが剣を銃に取り換え、両方合わせて1秒間で80発のペースでリョウへ連射する。

跳び上がりながら銃弾を避け、体を捻り、跳び蹴りを繰り返す。跳び蹴りに対し、剣を振り下ろす。

リョウが体を回転させ、剣を躲しながら跳び蹴りを回し蹴りに変える。

回し蹴りを腕で受け止め、リョウの足にもう一本の剣を振り下ろす。

もう一本の足を使ってマルバスを蹴り、反動で距離を取る。剣を戻して銃を取り出し、落下中のリョウへ連射する。

対するリョウは銃に思念を込め、1秒で4発のペースで銃弾を放つ。

連射速度は遅いが高威力の銃弾に対し、体を捻って銃弾を躲す。体を回転させている途中、マルバスはリョウが自分に手を向けている事を確認した。

リョウの掌からエネリオン塊が放出され、マルバスはそれを更に避

けようとする。

しかし、対応が遅れたのか、エネリオン塊はマルバスの胸を掠めた。エネリオン塊の当たった部分の服が燃え上がり、僅かな火傷痕と煤が残っていた。

「流石は「灼熱」だな。これ程の実力を持つ者は我々の中にもそうは居ない。」

「そう言うお前は誰だ？自分の名前を明かさないのは失礼だろう。」

「マルバスだ。」

「古臭い名前だな……偽名だろ？」

「それに近いが、詳しくは教えられない。」

「言っとくけど、俺も実はお前達に知られていない事があるんだぜ。どんな事かは教えられないがな。」

「ほう、面白い。」

すぐ近くではカイルとトレバー、金髪の男、アガレスと茶髪の男、ウアサゴの2組が戦っている。

トレバーとウアサゴは近距離から接近武器を駆使して戦い、カイルとアガレスは離れた所から援護射撃や相手の狙撃手を狙う。

トレバーの拳や蹴りとウアサゴの槍、カイルの放った銃弾とアガレスの放った銃弾が次々とぶつかり合う。

トレバーがウアサゴの腹へ蹴りを繰り出す。

ウアサゴが蹴りを槍の柄で受け止め、払いのけながらトレバーの顔面へ突きを繰り出す。

突きを籠手で軌道を逸らし、ウアサゴへ下段回し蹴りを繰り出す。

蹴りを跳び上がって避け、トレバーへ降下しながら突きを繰り出す。

トレバーが突きを後方に退いて避け、槍が地面に突き刺さる。

突き刺さった槍を中心にして体を横に回転させ、トレバーへ回転蹴りを繰り出す。

蹴りを籠手で受け止め、ウアサゴへカウンターのストレートを決めた。

吹き飛ばされたウアサゴは、そのような機能があるらしく槍を半分

に分ける。

同時に後方からアガレスが1秒で50発のペースで銃弾を放っていく。

体を動かし、腕を前に掲げ、銃弾を躲し、防いでいく。

ウアサゴが半分に分った槍の片方をトレバーへ投げ飛ばし、自身もトレバーへ突進していく。

銃弾を避けながら飛んで来た槍を蹴りで弾き飛ばし、ウアサゴから突き出される斬撃も躲す。

弾き飛ばされた槍をもう片方の手に持ち、更にトレバーへ攻撃を繰り出す。

後方からはアガレスの援護射撃も襲ってくる為、トレバーには攻撃の余裕が無かった。

トレバーが後方に下がり、ウアサゴがそれを追い掛ける。

突然、トレバーが前に動いたと思ったらスライディングし、ウアサゴの股を潜り抜ける。

起き上がりながらウアサゴへ反転キックを決めた。

アガレスがトレバーへ照準を定め、引き金を引こうとするが、直前、自分へエネルギーの銃弾がヒットした。

それはアガレスが放つ銃弾100発分のエネルギーを持っている。銃弾を喰らって吹き飛ばされながら、横方向からカイルが自分に銃口を向けていた。

空中で体勢を整え、銃口をカイルに向けたが、次の瞬間強い衝撃が自分を襲った。

トレバーが横からアガレスへ膝蹴りを決め、そのままアガレスへ連続蹴りを繰り返す。

最後の踵落としを決め、後方から迫って来たウアサゴの蹴りをガードする。

吹き飛んだトレバーが着地し、ウアサゴも蹴りの反動で後方へ着地する。

すると、ウアサゴの背中にエネルギーの銃弾が衝突し、爆発した。カイルは接近しながら1秒間に50発のペースで銃弾を連射する。

対応が遅れたが、槍で次々と銃弾を防いでいく。
不意に背中に衝撃を感じ、怯む。

後ろではトレバーが駆け込みストレートを決め、そのままウアサゴへ連続パンチを繰り出す。

最後のストレートを決め、後方から飛んで来たアガレスの銃弾を次々と籠手や脛当てでブロックする。

アガレスの背中にカイルの放った銃弾がヒットし、再びアガレスは倒れる。

それを逃さず、トレバーはアガレスとの距離を詰め、腕に力を込めた。

トレバーの思念は装着した籠手に仕込まれている鋭い刃を展開させる。

刃は無防備なアガレスの心臓を貫いた。
動かなくなったアガレスを刃から抜く。

「アガレスー！」

突然、マルバスが横から吹き飛ばされ、リヨウがそこへ殴り掛かるうとする。

リヨウの拳はウアサゴの腕に受け止められ、リヨウの腹にマルバスの蹴りが決まる。

そのままリヨウが吹き飛ばされ、着地する。

ウアサゴとマルバスはリヨウ達3人に囲まれた。

「流石は「死神」だな。これ程呆気無くアガレスを殺すとは。」

「……………」

トレバーは何も答えず、2人を睨んでいた。

「……………カイル、トレバー、後は俺一人で十分だ。他の奴らを助けに行ってやれ。」

リヨウが何か考えたのかそう言った。

「でもリヨウ、君一人で大丈夫なのかい？2対1では流石に負けるんじゃないか？」

「まあ、俺にはある秘策があるのでな。」

「……………カイル、俺はリヨウを信じる……………」

トレバーがリヨウに言われた通りに何処かへと走り去って行った。
「……………じゃあ任せたよ、リヨウ。」

「ああ。」

カイルもトレバー同様に走り去って行った。

「貴様一人？舐めやがって。」

「いくら貴様が「エクストラ」とはいえ、我々2人の相手は辛いんじゃないのか？」

「まあな、これでアイツらも居なくなつたし、本気を出せる。」

「ほう、それは面白そうだな。」

「がっかりさせないでくれよ。」

『レックス、あの早苗という少女だが、ひよつとするとお前に匹敵する程のエネルギー量があるかも知れん。』

「それは本当か？ならばそいつは殺すな。捕獲だ。分かったか。」

『了解、リーダーさんよ。全く簡単に言いやがるぜ。』

「愚痴は上官に聞こえない所で言え。」

『へいへい、まあ出来るならやってみるぜ。んじゃ。』

通信が切れ、レックスは「目的物」を追うのを再開した。

「リーダーはと……………結構近いな。」

リーダーは自分から前方数百m先を示していた。

圧縮空気を後方に吹かせ、反動で自分が前へ進む。

数秒後、自身から逃げる様に飛んでいる赤髪の少女を発見し、前に

立ち塞がる。

「ふえっ?!」

「爆弾」を渡せ、さもなくばお前は死ぬ。」

「パチュリー様の命令です。絶対に渡しません!」

「まあ良い。」

レックスは小悪魔に手を突きだし、引き戻す。

小悪魔の背後から突風が吹き付け、手に持っていた袋を手放してしまふ。

袋は風に流されてレックスの手に渡った。

「本来は殺さなくて済む事だ。お前達だって無駄に死体を出したくないだろ?」

レックスはその場から飛び去ろうとした、が、

「通さないわよ!」

レミリアが前に、

「まだまだこれから本気で行くよ!」

フランが後ろに立ち塞がった。

「小悪魔、貴方は戻りなさい、パチエは重傷、美鈴は気絶、咲夜は何らかの病気にかかっているみたいよ。」

「わ、分かりました。」

小悪魔が紅魔館の方へと飛んで行き、レックスは「爆弾」と呼ぶ物の入った袋をリュックに入れた。

そして、スカーレット姉妹はレックスへと飛び掛かった。

「こつちだ。」

早苗は視界の右端に、文は視界の左端に、サムの姿を見つけた。

「風神「二百十日」！」

「奇跡「客星の明るすぎる夜」！」

互いの視界にあるサムへ弾幕が飛んで行く。

しかし、弾幕はサムに当たる寸前に消えた。

「攻撃が効かない?!」

「一体どうやって?!」

「それは俺の能力が分かれば分かる。俺は意地悪だから教えてやらないがな。」

二人の疑問にサムが答えると、早苗は視界の右端に、文は視界の左端に、自分に向かって弾幕が飛んで来るのを見つけた。

「これは……………」

「文さんの弾幕？」

「その通り。」

サムの言った解答をよそに弾幕を避ける。

「でも何でこんな事が……………」

突然、文の頭上にサムが現れ、文に踵落としを決めた。

続けて腹に連続でパンチを打ち込み、蹴り飛ばす。

更に蹴り上げ、吹き飛んだ文へ上空から肘打ちを決める。

地面に叩きつけられた文は次の瞬間膝蹴りを喰らい、気絶した。

「呆気無いなあ。では後は捕獲だけか。」

「捕獲？私に何をするつもりですか?!」

「東風谷早苗、お前は自分を知らない。どうだ、俺達と共に世界を変えてみないか。戦争は完全に撤廃され、あらゆる社会問題や環境問題は解決される。」

「貴方達地球管理組織のして来た事は見た事があります。あんな、人間らしさの奪われた世界のどこが良いんですか?!」

「これだから低知能共は…………… まあ従ってもらうぞ。」

サムが早苗の背後に現れ、早苗へと手刀を繰り出そうとする。

その様子をカイルは1000m先から見ていた。

照準をサムに向け、両手に持つ銃の引き金を引く。

音速の10倍で1秒に25発。

カイルが引き金を引いてから0.2秒後、サムは自分に向かってエネリオンの銃弾が放たれているのを確認した。

慌てて早苗から離れ、避けようとするが数発被弾する。

しかし、銃弾は早苗には当たっていない。

「光学迷彩をしていたというのにこれ程正確に狙撃するとは……」

「サテライト」か！面白い！」

45 クローン

サムがカイルの方に駆けて行くが、進む度に銃弾が自分に向かって飛んで来る。

「近づけさせないって訳か。ならば衛星兵器に匹敵する攻撃に耐えられるかな、「サテライト」よ。」

サムは上空に手を突き上げた。

その方向には太陽がある。

太陽光線を屈折させ、屈折する方向を調整する。

太陽光線は一点に集められ、カイルへと向かう。

カイルが光線が屈折した事を察知し、体ごと避ける。

光線の当たった先は物は高熱により燃えるどころか液化・気化していた。

「やはりあの光学迷彩や光学攻撃は「ミラー」か。」

太陽光線の屈折する方向を更に調整し、光線を薙ぐようにして繰り出す。

エネルギーの流れを感知し、光線の軌道を予測したカイルは迷い無く光線を躲す。

「チツ、「バトルコンピュータ」の異名もある訳だから……出来れば捕獲って言ってたから、先に殺した方が楽か。」

太陽光線の屈折する方向を変え、焦点を早苗に変える。

『伏せて！』

「え、え?!」

誰かが言った通りにそのまま伏せる。

光線は早苗の頭上数十cmを通過した。

「避けた?!」

そして、サムに向かって銃弾の嵐が襲い掛かる。

「成程、奴の能力か。」

サムはすぐに冷静になり、難無く銃弾を躲していく。

『いきなりで済まないが、僕の言う通りになってくれ。』

突然早苗の脳内で誰かが話し掛ける。

「ふえっ?! 一体誰ですか?」

『僕はカイル、人類共和軍の者だ。少なくとも君の味方だよ。それと、僕と話すには頭の中で念じるだけで良い。奴に聞かれない方が良いだろうし。』

「ええと……。」(こう、ですか?それと、これからどうするんですか?)

『ああ、まず“力”を使える様にするんだ。正確には僕が力を貸して使える様にするんだがね。まずは力を抜いて頭を空にするんだ。』

言われた通りにする為、目を瞑り、心を鎮める。

『どう?何かを感じるかい?』

(…… 何か、何と言うべきか、何かが無もない所で光っている?)

『そうだ。その光の様に見える物こそがエネルギーだよ。僕が分かりやすいようにした。それを動かしてみて。と言っても動かさそうと思っうんじゃない、あれは動いている、そう思うんだ。』

(奇跡の使い方に似ている……。)

全身に力を込め、目を見開く。

次の瞬間、爆風がサムを襲い、吹き飛ばした。

『今の内だ、此処へ来て。』

(は、はい。)

視界に何か所だけ何か光って見える様な感覚がした。

太陽では無い、自分を導く光だ。

「あの女、俺を怯ませやがった……クソツタレ!!!」

サムが全力で地面を殴り付け、発生した衝撃波を増幅し、方向性を与える。

衝撃波は早苗の方へ真っ直ぐに来ていた。

『飛んで!』

すると、視界の上端に光が見え、そこへ飛び上がる。

そして、サムに向かってエネルギーの銃弾が発射され、“それ”に向かって太陽光を集めたレーザーが発射される。

『次は君一人でやるんだ。視覚や聴覚に惑わされるんじゃない。何が在るのかを感じるんだ。』

そう言われ、早苗は再び目を瞑る。

(……これは……)

早苗は何かを周囲に感じ取っていた。

ある場所では無かったり、大量にあつたり、動いていたり。

『そうだ、それがこの世界のエネルギーの源「エネルギー」だ。見えな
いし、聞こえない、でも感じる。形を変え、周囲に存在している。』

(……そこです!)

サムの放つエネルギーを感じ、目を見開く。

サムの至近距離で爆発が起き、吹き飛ばされる。

追い打ちを掛ける様に銃弾が襲い掛かり、ヒットする。

「クソッ!」

『早く、まだ君の力では奴を倒すには不十分だ。』

早苗はひたすら全力で“そこ”へと飛んで行き、サムはそれを追い
掛ける。

そして、早苗の視界に“それ”を発見し、同時にサムは早苗に向け
てレーザーを放とうとする。

“それ”はサムに向かって銃弾を放つ。

レーザーは銃弾を消し去り、軌道を変え早苗に向かって行く。

同時に“それ”が早苗に向かって行き、手を伸ばしていた。

『掴まって!』

“それ”に向かって早苗自身も手を伸ばす。

手が触れ合い、強く握る。

その瞬間、早苗は心の何処かに安心感を覚えていた。

何とかなるかも知れない、そんな期待が“それ”から感じるのだ。

引つ張られ、紙一重の所でレーザーは当たらなかつた。

早苗を引つ張った“それ”は自分と同じ位の歳の少年だった。

引つ張った反動で前に飛び、サムに銃弾の嵐を喰らわす。

銃弾は難無く躲され、3人共着地する。

「やはりお前か、「サテライト」。「バトルコンピュータ」とも言つて
たな。」

「そちらこそ、その光学迷彩や光線は「ミラー」だな。」

そう言いながら睨みあうカイルとサム。

一方でカイルと早苗は全く違ったやりとりを行っていた。

「大丈夫だったかい？改めて自己紹介だ。カイル・ウィルソンだ。」

「まあ大丈夫です。東風谷早苗って言います。どうも、ウィルソンさん、先程はありがとうございました。」

「どういたしました。まあ僕も必要だと思っただけの事だ。それと僕の事は出来ればカイルって名前で呼んでくれないか？」

「あ、はい、カイルさん。それと教えて下さい。幻想郷で何が起こっているのかを。」

「ああ、だがあちらが待つてくれるとは思えないが……。」

カイルの思考通り、レーザーが大量に放たれた。

リヨウは掌から2人へエネルギー塊を発射し、銃を乱射する。

それをウアサゴは槍で、マルバスは剣で、それぞれの武器で冷静に攻撃を防いでいく。

マルバスは銃を2丁リヨウに向けて引き金を引き、ウアサゴはリヨウへと駆け込みながら刺突や斬撃を繰り返していく。

槍を柄を手で弾く事によって躲し、銃弾を体を捻って躲す。

それでも銃弾がリヨウに数発ヒットし、ウアサゴから蹴りを喰らう。

蹴りを受けて吹き飛ばされたりリヨウはその体勢のまま銃弾を発射する。

マルバスは剣を2本持ち、ウアサゴは槍を半分に割り、リヨウへと突進していく。

剣から繰り出される斬撃と槍から繰り出される刺突を同時に体を捻って躲す。

しかし、体ごと動かすのはエネルギーを多く消費する。

その為、リヨウは反撃をする暇が無かった。

とうとう捌き切れなくなり、体の所々に切り傷が出来ていた。

ウアサゴがリヨウに連続蹴りを決め、続けて蹴り上げる。

マルバスが吹き飛んだりリヨウへ連続でパンチを喰らわせ、両手で握った拳を叩きつける。

吹き飛んだりリヨウへウアサゴの跳び上がりアッパーが決まり、更に吹き飛ばす。

更に吹き飛ばされたリヨウへマルバスの踵落としが決まり、地面に落とす。

ウアサゴが落下して来たリヨウへ全力のストレートを決め、吹き飛ばす。

吹き飛ばす勢いは軌道上の木々を何本も砕いた。

「いてて…… やっぱしキツイな。」

落下したりリヨウは起き上がり、近くへ2人も寄る。

「どうした、そんな程度か？」

「1人で十分と言っていたが、ハツタリなのか？」

「いや、これからだぜ。まあ見てろ。」

リヨウは2人に2つの掌を向けた。

「何のつもりだ？」

「…… ウアサゴ、奴に向かって風が吹いていないか？」

「…… 本当だ。更に寒気までしてきた……。」

「奴は他にも能力があるというのか？」

「違うな、能力は一つだ。」

リヨウが2人の疑問に答える。

僅かに後ずさりした2人は更なる異変を感じた。

「地面が固い。辺りに霜まで出来ているぞ。」

「風だけにしては寒すぎるな。」

「お前、まさか……………」

ウアサゴが怯えたように言う。

「ウアサゴ、奴の事を知っているのか？」

「奴は……………」

「フロスト」ってあの過去最悪の殺人鬼の事か？」

「正解。つまり俺の能力は「加熱」では無く「熱制御」だ。加熱零曲両方とも出来るって訳さ。」

ウアサゴは半分逃げ腰状態だった。

「フロスト」を知らないマルバスもウアサゴの反応を見て恐れをなしていた。

リヨウの掌からは周囲の熱を吸収し、それを変換したエネルギーのビームが放たれる。

2人共直撃は避けたが、熱によるダメージは避け切れず、爆風の影響で吹き飛ばされる。

直撃した地面は一瞬で気化し、小規模ながらもキノコ雲を作り上げた。

吹き飛ばされたウアサゴは腹に強烈な激痛を覚えた。

見ると、リヨウの右腕がウアサゴの腹を貫いていた。

「まさか「フロスト」が反乱軍に居たとは、何たる誤算……………」

次の瞬間、ウアサゴの体は熱によって破裂した。

「だあああああ!!!」

マルバスがリヨウの隙を突き、剣を持ったまま後ろから羽交い絞めを決めた。

首を裂こうとする剣を持つマルバスの腕を掴み、しばらくそのままの体勢が続いた。

「ぬおおお!!!」

「ぐぬぬぬ!!!」

その内、マルバスは自身の異変に気付いた。

「力が入らん……………」

間も無く、マルバスの両腕は動かなくなった。

バリン!

何かが砕けるような音がしたと同時に、マルバスのリヨウが握っていた腕の箇所がガラスの様に砕けた。

水を一気に冷却する事によって細胞を凍らせ冬眠状態にする、その為、マルバスは痛みを感じなかった。

次の瞬間、リヨウの右手がマルバスの腹を貫通し、内部から熱を奪う。

結果、マルバスは腕を失った状態で凍り付き、冬眠状態になった。続けてリヨウのストレートが決まり、マルバスの氷像はあえなく粉砕した。

更にリヨウは粉々になったマルバスへ熱を送り、焼き尽くす。

第三者から見ればやり過ぎに思えるだろうが、リヨウにとつてはそれは必要事項だ。

正体がばれない為、わざわざ凍り付いた肉片を燃やす。

「さてと、何処か手伝いに行くか……ん？」

リヨウはある事に気付いた。

「あのアガレスとか言う奴の死体が無い。」

リヨウはトレバーが倒した相手を確実に殺すという事を良く知っていた。(それが「死神」という二つ名の所以である。)

「変だな、死んでる筈の奴が勝手に動く筈も無いし、人らしき気配は無かったし……今は奴らをどうにかしなくてはな。」

リヨウは疑問を残し、その場を去って行った。

その右手は僅かに震えていた。

そして、それを見送る一匹の黒猫が居た。

黒猫は人の姿に変化し、散り散りになったウアサゴとマルバスの死体を心惜しく見ながら、猫車に乗せたアガレスの死体を運んで行った。

「良いかアンダーソン、簡単に言えば貴様はクローンだ。」

「クローン? どういう事だ?」

アダムは動揺を隠し切っていなかった。

「トランセンデンド・マンはあらゆる兵器を上回る存在だが、数量という弱点があった。現在確認されているトランセンデンド・マンは全人類人口10億人に対し、1000人にも満たない。」

ガミジンの説明と同時にカミソリがもの凄い勢いで連続で繰り出される。

「それを量産しようという訳だ。話を急ごう、本来アダム・アンダーソンは昔の戦闘により死んだ。」

アダムが更に自身の動揺が激しくなったのを覚えた。

「そして、その死体の細胞から出来たクローンが貴様だ。」

(あの夢でシリンダーの中に入っていたのは複製された自分だったのか。)

「驚いているな、まあ無理も無い。記憶を失い、自分が何なのかを知ろうとするが、知った結果がこれだ。通常ならば生きる意味を失ったも同然。」

「確かに僕は驚いている……だが僕には生きる意味がある。」

ガミジンにはアダムが自分の攻撃を押し始めた様に感じた。

「人形が何を言う。」

「人形じゃない、僕はアダムだ!」

突然、アダムの2本のナイフが更に早く動き、ガミジンのカミソリを避けながらガミジンへ攻撃を繰り返す。

(コイツ、さつきまで何の感情も感じられなかったのに急に感情を持ち始めた? しかも攻撃が速くなりやがった。)

「僕は幻想郷を守る！」

46 疑問

「だが貴様が俺に勝てると思うな。」

「普通ではそうだ。」

ガミジンのカミソリを躲しながら自分のナイフもガミジンへ突き出していく。

ガミジンへ2連蹴り、下段回し蹴り、蹴り上げ、連続斬りを繰り出していくが、全く当たらない。

「一つ訊きたい事がある。」

「何だ？」

「僕とマルクの間係を教えて欲しい。そちらの仲間に居ただろう。」

「マルク、以前送ったディックシリーズの事か。やはり倒したのは貴様だったのか。」（アンダーソンとディックが何かの関係？）

「答えてくれ。」

「…… 悪いが俺は知らん。何故そんな事を聞こうと思った？」

「奴は僕を異様に憎んでいる様だった。」

（一体どういう事だ？ディックシリーズもクローンであり、その上アンダーソンとは何の接触も関係も無かった筈だ。まさか俺達が知らない事があると言うのか？）「…… まあどうでも良い。早く片付けてやろう。」

アダムへ上段回し蹴り、スライディング、連続突きを繰り出していくが、全く当たらない。

アダムがガミジンの蹴りを腕で受け止め、ガミジンがアダムの斬撃を繰り出す腕を掴む。

アダムの繰り出す膝蹴りをもう片方の足で受け止め、ガミジンの繰り出す斬撃をもう片方のナイフで受け止める。

互いに相手突き離し、地面を蹴り、互いに相手へとナイフを突き出す。

アダムのナイフはガミジンの左胸を、ガミジンのカミソリはアダムの頬を掠った。

次の瞬間、2人の放った蹴りがぶつかり合い、互いに後方に吹き飛

ばされる。

(明らかにスピードが上がっている。)

トレバーは足を急がせていた。

(恐ろしい何かが俺の目指す先にある……俺は行かなければなら
ない。)

パワーをフル活用して音速を超える速さで森林を抜けていく。

そして、“それ”を見つけた。

身長195cmで黒髪の全身に鎧を纏った男。

男は戦っている少女の内の1人へとパンチを繰り出している最中
だった。

(間に合え。)

男のパンチを籠手をはめた腕で受け止め、男へ蹴りを繰り出す。

蹴りを腕でブロックされるが、後ろへ吹き飛ばし、距離を取る。

「え?」

パンチを喰らおうとしていた少女は何が起こったのか良く分かっ
ていなかった様だった。

「俺はトレバー!! イمام。リョウに話を聞いていると思う。奴を倒し
に来た。」

「え? ああ、どうも。私は博麗霊夢。」

「助けが来てくれたは良いが、アイツとんでもない力だぜ。私は霧雨
魔理沙だ。」

「アリス・マーガトロイドよ。せめてあの鎧だけでも如何にかすれば良いのだけれど。」

「お前達は離れた所から援護してくれ。」

と言った矢先、男へと駆け込む。

ジャブ数発、肘打ち、裏拳、2連蹴り、手刀、フック、回し蹴り、と仕掛けていくが、全て躲される。

トレバーが男の腕を掴み、背負い投げを繰り出す。

しかし、難無く着地され、トレバー自身が投げ飛ばされる。

男が吹き飛んだトレバーへ駆け込む。

男の繰り出すストレートを受け止め、男の顔面へカウンターの蹴りを決める。

よろけた男へ下段回し蹴りを繰り出しヒットさせるが、男はバランスを崩した様子は無かった。

続けてしゃがんだ状態からサマーソルトキックを繰り出すが、難無くガードされる。

男はトレバーへ1発ストレートを決め、後頭部を鷲掴みにし、膝蹴りを腹に決める。

怯んだトレバーを持ち上げ、地面に叩きつけようとする。

男の投げ技は霊夢の放った弾幕が男の背中に命中した事で阻止された。

トレバーを放し、霊夢の方を睨むが、後方から迫って来た魔理沙の弾幕が注意を逸らす。

魔理沙の放った弾幕を避けると、空中から何体もの人形が男に向かって弾幕を放つ。

アリスの操る人形達を銃弾の嵐で撃退したが、トレバーの繰り出すストレートを後頭部に受けた。

怯んだ男の首を足で挟み、地面へ叩きつける。

トレバーの思念は籠手に格納されている刃を展開させ、倒れた男に向かって刃を突き出す。

男が頭を守ろうと腕を翳した為、刃は男の腕の鎧に当たる。

トレバーは咄嗟の判断で鎧の継ぎ目に刃を突き刺し、動かす。

男がトレバーを押し飛ばすが、右腕の鎧の部分が外れた。

「やったわね、この調子でいけば攻撃は通る様になるわ。」

「……だと良いが……。」

トレバーは何か怯えている様に言った。

俺は神を犬の様に散歩させる 恐れのない話術で

世界大戦は燃える為に戻って来る パリからのボールドウインの様に

炉から出た鉄の様に 俺は土地も無く生まれて来た

そうさ、母国の息子だ ザパタの銃から生まれた

シャンテイーの中や 街の跡地を歩く

同じ様に飢えで死ぬ者達は埋められる 違うのは苗字だけだ

ハゲワシは何もかも残していく 鎖だけを残し

地球儀の1点を選べ そうさ、何処も景色は同じ

銀行に協会、神話に霊柩車 モールにローン、死産の子

未亡人にブタ、オウム 抑えられる反乱者達

白いフードを被った裁判官 注射器に血管

暴動は聞こえない者のライムとなる

「歌を歌いながら来るなんて余裕があるみたいだね。確かレイジ・アゲインストだろ。僕の兄さんが好きだったけな。その歌詞をわざわざ聞かせるって事は僕達を完全に嫌っているって事だろ？」

「ほう、お前の兄とやらとは気が合いそうだな。俺は「灼熱」だ。まあ

俺達みたいな反乱者達にはピッタリだろ？」

「灼熱」、それは凄い。でも僕には勝てない。」

「2人共、後は俺に任せろ。ここから離れてくれ。」

「え？でも……………」

「貴方の事だから何か策があるという訳ね。でも奴は接近できないし、弾幕、光、毒ガス、熱の類は全く効かないわよ。」

ちなみに永遠亭のメンバーの内まともに動けるのは鈴仙と永琳だけだ。

「奴の事は知っている。「ウォール」だ。防御に関しちや最強だつてな。物質、光、音、熱、エネルギー、何でも防ぐ。」

「良く知っているね。でもどうやって僕に勝つ？」

「早く行け。」

そう言われ、鈴仙はてゐるを、永琳は輝夜を背負い、去って行った。

「お前の弱点は1つ。」

リヨウが右拳に力を込める。

脚を曲げ、勢い良く地面を蹴り、突進する。

レオはリヨウへと手を向ける。

次の瞬間、リヨウは固い壁にぶつかつた感覚を覚えた。

それでもリヨウは足を動かして前に進もうとし、レオも負けじと手に更に力を込める。

そして、リヨウは周囲の気温をエネルギーに変換して自分に集める。

周囲の空気が冷却された事によって体積が下がり、それを補おうと離れた所からの空気が吹いて来る。

「自分が操れる以上のエネルギーは防げない。」

そう言うと同時に右手を広げ、レオに向かって伸ばす。

自身のエネルギーに周囲の熱を加算した分の熱エネルギーがレオを襲う。

「どうやってこれ程のエネルギーが?!」

「俺はこの力を今まで隠して来た。」

リヨウはもう片方の左手も伸ばし、更に大量の熱エネルギーを放

っ。

レオは最大限自分のエネリオンを活用して熱を防いでいたが、余りにも膨大な熱には勝てなかった。

レオの身体は10000度を超える熱によって気化し、もはや生物が居たという痕跡すら無くなった。

「ハア…… 奴が目覚めなければ良いが……。」

リヨウの右手は更に震えていた。

「前よりも強くなっていますね。」

「藍と橙はやられたし、攻撃はまるで通じないし。」

「それにしてもあの恰好が不気味よね。しかし、どうして西行妖を狙っているのかしら？」

黒い男は答える事も無く西行妖へと突き進んで行く。

「符の参「果てしなく昔の死地」！」

「結界「光と闇の網目」！」

男の行く手を弾幕が遮るが、当たる事は無い。

手からエネリオンの塊を放出して打ち消し、素早い動きで躲す。

「桜花剣「閃々散華」！」

弾幕を掻い潜りながら男へと剣を振りだす。

妖夢の剣に対して自分の腕を振りかざす。

ガキーン！

鈍い金属音と同時に剣は弾かれ、妖夢はのけ反る。

「この剣で斬れない?!」

次の瞬間、妖夢の腹には膝蹴りが決まっていた。

怯んだ妖夢をもう1発蹴り上げ、跳び上がる。

上空から両腕を叩きつけ、更に妖夢の頭を鷲掴みにし、地面へ叩きつける。

「妖夢!」

「幽々子、変だと思わない?」

「え?何が?」

「奴は以前電撃攻撃を行っていたのにそれが変身してから全くしていない。」

「そう言えばそうね。」

「それに奴から感じるエネルギーの質が変化したのよ。まるで別人になったと言うべきか……。そしてその質が何かと藍や橙、つまりは式神の物と似ているのよ。それでもまるで生物らしさを感じない……………」

妖夢を手放した男は幽々子の方へと跳び上がり、左手でエネルギー弾を連射しながら右手に力を込める。

迫り来る弾丸を避けつつ男のジャンプの軌道上から離れる。

すると、男が不意に加速した。

地面を蹴らず、何らかの噴射剤も噴射させずに。

幽々子は慌てて男へと弾幕を撒き散らす、既に男との距離は5mを切っていた。

空中で体を滑らせるように弾幕を避け、距離を縮め、幽々子へ力を込めたパンチを決める。

男は更に空中で加速し、幽々子の吹き飛んだ方向へと先回りした。

男の膝蹴りが幽々子へ決まり、吹き飛ぶ勢いが消えた幽々子へ更にパンチを決める。

吹き飛んだ幽々子を掴み、地面へ勢い良く叩きつける。

「空を飛んだ?!」

幽々子を手放し、紫へと飛び上がる。

「魍魎「二重黒死蝶」!」

紫から赤と青の蝶々弾が放たれたのに対し、男からはエネルギーオン弾が放たれる。

「ウォール」から生存信号が途絶えました！」

「馬鹿な！もう半数がやられたというのか?!」

「もう1段階作戦はあるとはいえ、幻想郷にはこれ程戦力があるとは……それとも反乱軍の送った人員が余程の強さか。」

「ところでデイク中佐、ポール中尉殿はどちらにおられますか？」

「ポール？そういえば居ない……。」（そう言えば最近変な動きを見せるし、昔から何か怪しい所がある……。）

デイク中佐は幻想郷で起こっている予想外の事態を置いていて考え出した。

「……すまんが少し休んで良いか？この頃気分が余り優れなくな。」

「え？ああ、我々は別に構いませんよ。」

「そうか、では失礼する……。」

デイク中佐は部下達にそう言うと言通信指令室から出て、すぐさまある場所へと向かった。

少し時間が掛かる所だが、慣れている為どうという事は無い。

目的の場所に着き、部屋のドアにある電子キーの暗証番号を入力し、電子音が鳴ると同時に鍵が開き、部屋に入る。

その部屋はデイク中佐が普段使っている研究室であり、普段ここ

ではディック中佐以外にもポールやその他数人の研究員が働いている。

ちなみに今は幻想郷への侵攻作戦によって全員ここには居ない。「さて、ポールが何を企んでいるのかを暴くでしょう……。」

47 鎧

「夜符「バッドレディスクランブル」！」

「禁忌「恋の迷路」！」

レミリアとフランから迫り来る弾幕に対し、レックスは弾幕の嵐の中に突っ込んで行く。

レックスの思念とエネリオンはレックスの体表に圧縮空気の鎧を作り出し、弾幕を防ぐ。

レミリアは、レックスが接近し放った蹴りを体ごと横に避け、鉤爪を突き出す。

突き出された鉤爪に対し、手首を掴んで受け止め、手を引き寄せながらレミリアへ裏拳を決める。

背後からフランがレックスへ鉤爪を振り下ろす。

鉤爪の勢いを咄嗟に放った圧縮空気で減速させ、隙を見せたフランへ蹴りを決める。

吹き飛んだフランの後方から衝撃波が吹き付け、レックスが動きの止まったフランを掴む。

後方から飛んで来るレミリアへフランを投げ飛ばす。

レミリアが飛んで来たフランを避けるが、突然襲った衝撃波は躲せず、吹き飛ばす。

吹き飛ばされた2人は空中で体勢を整え、スペルカードを唱える。

「神槍「スピア・ザ・グングニル」！」

「禁忌「レーヴァテイン」！」

レミリアの手には槍が、フランの手には炎の大剣が握られ、レックスへと突進する。

レミリアの刺突を槍の柄を掴む事によって受け止める。

続けて来るフランの横薙ぎをレミリアの槍を動かす事によって防ぐ。

槍を引き寄せながらレミリアへ蹴りを繰り返す。

レックスの放った蹴りを腕でブロックし、そこへフランが大剣を振り下ろす。

しかし、大剣はレックスに当たる前に消え去り、フランの目の前には炎の塊があった。

「炎はプラズマの一種、そしてプラズマは流体の一種だ。お前の仲間が炎攻撃をして効かなかっただろう。」

炎はフランへと襲い掛かり、ヒットする。

レミアが槍を手放し、レックスへ鉤爪を突き出す。

鉤爪がレックスに届く前に、レミアが手放しレックスが持った槍がレミアの腹へ突き刺さった。

レックスは勢いを失ったレミアへ膝蹴りを決め、そのままレミアへバックドロップを決めた。

小野塚小町は仕事を放っておいて昼寝していた。

彼女は赤い髪をツインテールにし、青を基調とした着物と身長以上ある鎌が特徴的な死神で、本来はこの世から三途の川へ死んだ者達を送る役割をしている。

「……………ムニヤムニヤ……………もう食べられないよ……………」

「小町、何をしているのですか。」

「へっ?……………え、映姫様……………」

小町は自分の上司の映姫の姿を認め、硬直した。

「全く、何時になったらその癖は治るのですか。早く仕事に戻りなさい。」

「へーい……………あたいだって以前よりは眠らない様になっただけ

どな……………」

「言い訳は無……………」

ズドーン!

映姫の台詞を遮る様にして何か落下して来た。

落下音の直後、吸血鬼が落下地点から川に投げ落とされた。

「うごっ、あ、あちゃちゃちゃ!!!」

水は吸血鬼の弱点の1つであり、それ故にレミアは全身が焼ける様な感覚に襲われた。

急いで川から上がるが、レックスの放った衝撃波がレミアを容赦無く襲う。

「映姫様、これは……………」

「ええ、嫌な予感しかないわね。」

レミアに手を向けていたレックスの視線は映姫達2人の方を向き、手も同じ方向に向ける。

次の瞬間、川から水柱が立ったかと思うと水が2人の方へと勢い良く飛んで行く。

高圧の水を避けた2人だが、水の当たった地面の箇所は抉れていた。

「死歌「八重霧の渡し」!」

「審判「十王裁判」!」

レックスに向かって大量の弾幕が飛んで行く。

しかし、弾幕はレックスに当たる前に突如出来た水の壁によって遮られた。

水の壁は弾幕を防ぎ終わるとレックスの目の前に集合し、レックスが手を横に薙ぐと水は鞭の様に横方向に広がりながら2人目掛けて飛んで行く。

慌てて回避行動を取る2人だが、水の鞭は2人を捉える。

「うあっ!」

水の鞭は大した速度では無いが、密度が空気より重い為、2人を怯ませるには十分だった。

2人を怯ませた水は2箇所へ球体となって集まり、2つ共2人へと

ぶつかり、吹き飛ばす。

「私を忘れないでよ！禁忌「フォーオブアカインド」！」

空中から降りて来たフランがスペルカードを唱えると、フランの姿が4体となった。

「エネルギーオン体」か？少なくとも攻撃力は持っていると見て間違い無いだろう。」

2体のフランが襲い掛かろうと突進し、残る2体は遠方から弾幕を発射する。

1体がレックスの頭へ、1体がレックスの足へ鉤爪を振る。
対するレックスは片腕を前に突き出し、片足を前に突き出す。

頭を狙った引つ掻きは腕をレックスの腕に受け止められ、脚を狙った引つ掻きは腕をレックスの足に受け止められる。

頭を狙ったフランの腕を掴み、脚を狙ったフランへ叩き落とす。
今度は2体のフランからの弾幕が迫っている最中だった。

しかし、弾幕は水の壁によって防がれ、水の壁は大量の礫となってフラン達へと飛んで行く。

2体のフランは姉のレミアに劣りはするが、相当な空中機動力で水の礫を躲していく。

だが、水の礫は速度こそ劣るが数量、密度に長けており、その為、フラン達は避ける事で精一杯で後ろで起こっている事など気付いていかなかった。

何のガードも無い2体のフランの背中へと川から水の柱が叩きつける。

2体のフランは水を浴びると悶え苦しみながらあつという間に消えた。

そして、レックスの足元に居る2体の内1体のフランの姿が消え、残ったフランが立ち上がる。

「まだまだ…… 秘弾「そして誰も……」」

「お前と遊んでいる暇など無い。」

レックスがそう言うのとフランへと衝撃波が吹き付け、反動でレックスは飛んで何処かへと行った。

フランも姉と同じ様に自身を傷つける様な発言に敏感なのか、
「………… 私の事、コケにして………… 許さない！」
フランは怒りを身に任せ、レックスを追った。

地球から約1億5000kmも離れた所から発生した秒速約30万kmの「波」が上空で屈折し、エネルギーの高いレーザーとなってカイルと早苗を襲う。

カイルはエネルギーを感知したデータから光の屈折度合いを計測する事でレーザーの軌道を予測して避け、早苗はカイルから脳へ直接送られるメッセージによって躲す。

レーザーは数を増し、あらゆる方向から2人を襲う。

カイルの処理速度であっても予測が遅れ、更には早苗への思念の送信も遅れ、2人は攻撃が全く出来無い程追い込まれていた。

「さあどうする、もはや俺が勝つたも同然だ。」

サムの声が聞こえてくるが、姿が全く見えない。

(このままじゃ………… 一体どうすれば…………。)

『考えるんじゃない。自分が感じた事をするんだ。見えない物を認識するのは難しいが、それはそこにある。』

「ほらほら、気を抜くなよ。」

カイルへと何十本ものレーザーが集中的に襲う。

瞬時に体を捻って躲そうとしたカイルだが、数本のレーザーがカイルの体を掠める。

「カイルさん！」

「余所見はいけないぜ、お嬢さん。」

気を逸らした早苗へと大量のレーザーが襲い掛かる。

「そちらこそ。」

サムがそうカイルに言われると、自分に向かってエネルギーの銃弾が飛んで来ているのを確認した。

銃弾を躲す代わりに光線の屈折を乱し、奇跡的に早苗には当たらなかった。

『奴はエネルギーを使い、光を屈折させる。問題はそのエネルギーが何処から来ているかだ。』

そう言われた早苗は反射的に目を瞑った。

『世界は高から低へ、広がる。エネルギーとは言うなれば世界に逆らう流れの事だ。低から高へ、一点に集まる。それを見極めるんだ。』

サムの手は早苗に向けて伸ばされ、上空では太陽光が屈折し始める。

しかし、その姿は2人には見えていない。

それでも早苗は自分に向かって何らかの物が発射されようとしているのを感じた。

「奇跡「客星の明るすぎる夜」！」

サムに向かって光弾とレーザーが大量に向かって行く。

(短時間でエネルギーオン感知を覚えやがった?)「だが、そんな程度の攻撃が当たると思うな。」

早苗の放った弾幕は上空から降って来るレーザーに次々とかき消され、当たる事は無かった。

「確かに君には通じる程の攻撃では無いだろう。」

カイルからそう言われるとサムは声のした方向からエネルギー弾が次々と飛んで来たのを確認した。

それでもサムは難無く銃弾を避ける。

「裏を突いたつもりか？」

「いや、違う。」

カイルの答えを聞いたサムは反射的に正面を振り向く。

早苗の掌はサムに向けられていた。

次の瞬間、衝撃波がサムを後方に吹き飛ばした。

「あ、当たりました！」

「その調子だよ。」

「調子に乗るなよクソツタレ！」

サムからそう言われた2人は声のした方向を向く。

サムの姿はカイルの眼前に居た。

サムの拳はカイルの頭目掛けて繰り出され、カイルは拳を避けようと体ごと避けようとする。

拳はサムから見てカイルの頭からほんの数cm右に離れた所を通り過ぎていた。

しかし、

「俺の能力を忘れたか？それとも音も波の一種だという事を忘れたか？」

次の瞬間、音速に達した拳が衝撃波を発する。

サムはエネリオンを送り、衝撃波に方向性を与える。

衝撃波はカイル目掛けて飛んで行く。

カイルの左側頭部を激しい衝撃が襲い、カイル自体を吹き飛ばした。

トレバーの籠手と男の腕がぶつかり合う。

続けて同時に膝蹴りを繰り出し、打ち消し合う。

トレバーの手袋の機能で強化したパンチと男の何も強化されていないパンチが衝突する。

トレバーの拳が押され、後方に吹き飛ばす。

霊夢の放った弾幕が正面から男を襲う。

男は装着している鎧の防御力を頼りに弾幕を被弾しながら霊夢へと駆け込む。

続けて後方から魔理沙の放った弾幕が男を襲う。

男は後方からの攻撃にも耐え、依然として霊夢に向かって行く。

男の行く手をトレバーが遮り、背後からはアリスの操る人形達がカミソリを斬り付けて来る。

トレバーの連続攻撃を腕で次々と弾き、人形達を余った足で次々と蹴り飛ばす。

足を後ろから前に反転させ、トレバーへ蹴りを繰り出す。

男から繰り出された蹴りを両手で掴み、後ろから霊夢がスペルカードを唱える。

「回霊「夢想封印」 侘！」

霊夢の周辺に弾幕が発生し始めるが、男はトレバーから逃れようとトレバーへもう片方の足を繰り出す。

トレバーは手を離す事で男からの蹴りを避け、今度は別の方向から魔理沙が弾幕をヒットさせる。

不意の出来事に一瞬怯んだ男はすぐに魔理沙へと銃を向けたが、引き金を引く前に霊夢の発生させた弾幕が男へと炸裂した。

発生時間が掛かった分だけ威力が増した弾幕は男を怯ませる。

怯んだ男へトレバーの刃が突き出された籠手が振り出される。

男はトレバーの手首を掴む事によって攻撃を防いだが、背後からアリスの人形が手に持ったカミソリを突き出している最中だった。

空いたもう片方の手で人形を払いのける様に吹き飛ばした男だが、トレバーがもう片方の腕の籠手に伸びた刃を突き出した事に気付く。

気付いたは良いが避ける暇も無く、刃は男の胸を覆う鎧を剥がした。

トレバーは一旦離れて距離を置き、他の3人も弾幕を放つ体勢にな

る。

男は攻撃して来なかった。

それどころか防御力のある鎧を自分で剥がし始めたのである。

「様子がおかしいわね。」

「背水の陣って奴か？」

「防御力を捨てて素早さを手に入れようというのかしら？」

「……違う……。」

上から順に霊夢、魔理沙、アリス、トレバーの順の台詞である。

男が鎧を剥がし終え、全身を覆う黒いボディスーツの姿だけになった姿で霊夢達を睨む。

「……。」

「…… 防御は兼用だ……。」

「え？」

「それってどういう……。」

魔理沙が疑問を全て口にする前に男の姿が消えた。

4人が慌てて振り向くと、今度はトレバーの姿が消えた。

ドゴーン！

3人が音のした方向を振り向くと、男から顔を驚掴みにされ、地面に顔を叩きつけられるトレバーの姿があった。

「全く見えなかった?！」

「トレバー!！」

「こうなったら、「グランギニョル座の……。」

次の瞬間、男のスピードに驚いていた霊夢も、トレバーを助けようと駆けつける魔理沙も、自身の最高の技を発動しようとしたアリスも、強い衝撃と共に後方に吹き飛ばされた。

48 動き出す者達

真っ黒なローブを身に纏った男は幻想郷の何処かの森を歩いていった。

その存在に気付く者は誰一人居ない。

『「破壊神」が暴走し始めた。「破壊神」を止めろ。出来なければ殺せ。』

「はあー！」

妖夢が掛け声と共に黒い男へ剣を振り下ろし、黒い男の腕へ鈍い音を立てて当たる。

当たったが切断する事は出来ず、そこへ黒い男がパンチを打ち込もうとする。

その時、黒い男が突然後ろを振り向いた。

黒い男の視線の先には地上へと繋がる階段があるだけだ。

黒い男は振り向いた方向へと真っ直ぐに飛んで行った。

「……………一体どうなったの？」

「地上へ行くのなら少なくとも地上で何かしらの事が起こっていると思うわ。だから私達も行くわよ。」

紫達も黒い男の後へと続いて行った。

「……何？分かった。すぐ行くでしょう。」

「隙ありー！」

フランが突き出した鉤爪に対し、レックスはリーチを生かした蹴りを繰り返す。

鉤爪はレックスに当たらず、レックスの蹴りが一足先に直撃した。

「学習しない奴だな。俺には勝てんと何時になつたら分かる。」

レックスはジェット気流を自身の後ろに発生させ、反動で前に進み始める。

「まだまだもんー！」

フランが両腕を伸ばしながらレックスへと突進する。

「諦めろ。」

レックスの踵落としが決まり、フランは丁度そこにあつたヒマワリ畑へと叩き落とされる。

「後で面倒だから無力化させておくか。」

レックスが地面に降り立ち、倒れたフランへ拳を掲げる。

「ぬ？」

レックスは上げた拳を開き、横へ向ける。

風の刃は地面から生えて来たツタを切断した。

そして、離れた所に女性の姿があつた。

「何故綺麗な花を台無しにするのかしら。全く考えもつかないわ。」

幽香が今回でトランセンデンド・マンが自慢の花畑を荒らした事に堪忍袋の緒が切れたのは3回目だ。

「どうでも良い。悪いが構っている暇は無い。」

「貴方ねえ、花を馬鹿にししないで頂戴！」

幽香が怒りの声と同時に弾幕を放つ。
弾幕は次々と衝撃波にかき消されていく。

「幻想「花鳥風月」！」

幽香が怒っているのに対し、レックスは表情を変える事無く弾幕を
躲していく。

その時、

「私を無視しないでよー！」

フランが後方からパンチを繰り出す。

「……………ハア、またか……………」

面倒臭そうな声を漏らしながらレックスは突き出される腕を掴み、
幽香へと投げ飛ばした。

難無く上空に避けた幽香だが、突然突風が頭上から吹き付け、幽香
を地上に戻す。

レックスが駆け込みながら気流を操作する。

追い風によって加速したレックスは拳に力を込め、幽香へと突き出
す。

突き出すと同時に拳のスピードを追い風によって更に加速させる。
迫り来るレックスに対し避けようとする幽香だが、突如吹いた突風
によってその場に留められる。

レックスのパンチが幽香の腹に決まり、幽香は力無く倒れる。

「さて、後は……………」

「私を馬鹿にしないでよー！」

レックスへと飛び掛かりながらパンチを繰り出すフラン。

パンチをしゃがんで避けられ、次の瞬間、フランの腹にアッパーが
決まった。

レックスも空中へ飛び上がり、フランを追い越す。

両手を組み、上空から自由落下と気流操作を組み合わせた分のス
ピードでナツクルを叩きつける。

地面に叩きつけられたフランは起き上がらなかつた。

「終わったか……………今は早く行かねば……………」

レックスは急いでその場を飛び立った。

「……………何だと?!……………んじゃあ今戦っている奴らを倒し終えたら行くとするぜ。」

「一体何を言っているんでしようか?」

「恐らく味方とのテレパシーだ。向こうが驚いていた所から見ると余程大事なのか。」

離れた所で早苗の疑問にカイルが答える。

間も無く、サムがカイルたちへと襲い掛かって行く。

対するカイルは近接戦闘の構えを取った。

指を伸ばした手を突き出すサムに対し、手首を受け止めるカイル。

力でサムが勝り、カイルの首元に手が突き刺さる。

そのままカイルの腹へパンチを連続で決める。

「近接戦闘は俺の方が分があるらしいな。」

サムから繰り出される打撃攻撃を次々と受け止めていくカイルだが、その動作は無駄こそ無いものの余裕が無く、更には反撃の余裕も無かった。

サムの裏拳を掌で受け止め、手刀を腕で防ぐ。

フックをしゃがんで避け、続けて来るボディブローを手でブロックする。

次々と繰り出されるパンチを腕で左右に払い除けていく。

更に来るミドルキック、下段回し蹴り、2連蹴り上げ、踵落としをどうにか避ける。

サムが一瞬で体を加速させ、カイルへ膝蹴りを仕掛ける。

膝蹴りはカイルの両手に受け止められたが、サムは考える間も無くもう片方の足で頭に向かって蹴りを繰り出す。

蹴りはすんでの所でカイルが両腕で足首を掴む事によって防がれた。

掴んだ足首を振り下ろし、サムを地面に叩き落とし、距離を取る。起き上がるうとしたサムだが、何処からか飛んで来た弾幕に気付き、慌てて避ける。

「状況を見極める能力に関しては僕が上の様だな。能力を乱用しているだけで動きにかなり無駄があるよ。」

「この調子ならいけそうですね、カイルさん。」

「……チツ、まあ良い。いずれお前達は殺される。」

すると、サムの姿が揺らいだ様に感じた。

サムが地面を蹴り、少し遅れてカイルが構える。

サムから繰り出される攻撃は大量の腕や足が幾重にも重なっている様に見えた。

カイルはそれが光を屈折させる事による幻影である事を知っているが、目から入る情報量が多すぎて脳での処理が間に合わない。

カイルは周辺に存在するエネルギーオンやインフォームオンを感知して周囲の情報を知るといふ手段があるのだが、サムの動くスピードに自分の体が付いて行けない。

よってカイルは防御を試みるも次々と攻撃を浴びる事となった。

「カイルさんー！」

早苗が助けようとサムに向かって弾幕を放つ。

サムの目は既に迫り来る弾幕を捉えていた。

冷静に弾幕を避けていくサムに対し。幾らか冷静さを失った早苗。

だから早苗は自分の背後で光が屈折し、レーザーになりかけている事など知らなかった。

「危ないー！」

カイルが全速力で駆け、早苗を掴むと迫り来るレーザーを避けようとする。

2人の体が地面を擦り、すぐさま立ち上がる。

「あつ。」

カイルの左足にレーザーを受けた火傷痕があった。

「大丈夫だったかい？」

「ええ、でも……………」

「心配しないで、勝てる方法はある。」

早苗にはカイルが自分の痛みを隠して自分の事を心配してくれる態度に嬉しさと不安が入り混じっていた。

「ほう、勝てるもんなら勝ってみろよ。」

『早苗、僕の指示通りしてくれないか？』

(分かりました。)

「…………… 分かった、行けるならば行くでしょう。」

「誰と話している？」

「お前には必要ない事だ。」

ガミジンはアダムの質問に答えられない代わりにカミソリを突き出す。

ガミジンから突き出されたカミソリを左のナイフで外側に弾き、同時に右のナイフを突き出す。

アダムの右手首を左手で払いのけ、右足で上段回し蹴りを繰り出す。

ガミジンの蹴りを体を後ろに反らす事で躲し、同時にサマーソルトキックを繰り出す。

アダムの蹴りをしやがんで避け、同時にアダムの脇腹へ蹴りを仕掛ける。

ガミジンの蹴りを腕で受け止める。

蹴り足を引き戻し、アダムの正面に蹴りを放つ。

再び蹴りをアダムの腕に受け止められ、脚を引き戻し、今度はアダムへ下段回し蹴りを繰り出す。

アダムは蹴りを跳び上がって避け、下半身を上空に投げ出し、同時に地に向けた上半身から両方のナイフをガミジンへ薙ぐ。

咄嗟に両腕を掲げたガミジンだが、片方はカミソリによって防がれたもののもう片方はガミジンの左腕を裂いた。

体を一回転させて着地したアダムと左腕の痛みを振り切ったガミジンは対峙する。

(感情を持ち始めた割には動きが読めない…… そうだ、行くか。)

銃を左手に持ちアダムへと乱射し、沈黙を破ったガミジンは何処かへと走って行った。

突如発射された銃弾をナイフで防ぎ、ガミジンを追う。

ガミジンへと飛び蹴りを繰り出すアダム。

それに対し、蹴りを避けアダムの突き出された足へカミソ리를振り下ろす。

自分の足をガミジン側に逸らす事によって斬撃を躲し、同時に回し蹴りを放つ。

アダムの蹴りを左腕で受け止め、アダムへ膝蹴りを繰り出す。

アダムは体を地面と水平にする事によって蹴りを避け、同時に足をガミジンの首に引っ掛けた。

そのまま回転を利かせ、ガミジンを地面に叩き下ろす。

倒れたガミジンへナイフを振り下ろすが、負けじとガミジンがカミソリで防ぐ。

ガミジンは仰向けの状態でアダムに蹴りを決め、立ち上がると再び走り去って行く。

それに対し、アダムは両手に銃を持ち、乱射する。

ガミジンは前に進みながら体を捻り、カミソリを動かし、エネルギー

ンの銃弾を放ち、銃弾を防ぐ。

逃げるガミジンを追い、容赦無く銃弾を吐き出すアダムと、何か思い付いて、ひたすらアダムから逃げようとするガミジン、どちらにも表情に余裕が無い。

リヨウは何処かの森の中に居た。

その存在に気付く者は誰一人居ない。

そして、その左腕はひたすら右腕を抑えていた。

「……ハア、ハア…… やり過ぎたかな。やはり簡単に隠し通せる事では無いな…… バレない様に奴らを何とか出来るかなあ……。」

リヨウは荒い息遣いのまま右腕を抑えながら歩いて行つた。

49 決闘

男から吹き飛ばされた霊夢達3人は体勢を整える暇も無く地面に叩きつけられた。

「じよ、冗談じゃないわよ……………」

「なんてパワーだ……………それに全く見えなかったぜ……………」

今の一撃でアリスが気絶した。

気絶にまで至っていない霊夢と魔理沙も痛みで殆ど動けない状態である。

男はその場に留まる事無く今度はトレバーへと駆け込む。

起き上がったトレバーは男からの攻撃に備える。

次の瞬間、トレバーの背中に重い肘打ちが決まった。

脱力したがなんとか片膝で踏み留まるトレバーへ更に拳を振り下ろす。

トレバーは咄嗟にエネリオンで防御力を強化した籠手をはめた腕を両方とも頭上に振りかざす。

男の拳はトレバーの防御を無視したかの様にトレバーの両腕を巻き込みながらトレバーの胸に深く撃ち込まれた。

トレバーが吹き飛ばされ、男と離れたのを見た魔理沙はスペルカードを唱えた。

「恋心「ダブルスパーク」！」

八卦炉が2発の強力なレーザーを放ち、レーザーは別々の方向から男を狙う。

しかし、男は避ける動作をせず、むしろレーザーへと突進していく。

2発のレーザーは男に直撃した。

それでも男にはダメージを与えるどころか怯ませる事も出来なかった。

「嘘だろ?!全然効いてないじゃないか!」

男は魔理沙の足元へスライディングキックを仕掛ける。

魔理沙が避ける暇も無くスライディングが足元に決まり、魔理沙が倒れ、男はそのまますり抜ける。

強大なダメージを受け、衝撃で足を骨折した魔理沙はその場から動けなくなった。

「こうなったら、「夢想天生」！」

霊夢が自身の最高のスペルカードを詠唱し、霊夢自身が光り輝き出す。

自身の周囲に配置された8つの陰陽玉からスライディングから起き上がる男目掛けて向かって行く。

それに対し、男は驚きもせずただ霊夢の方を見ていた。

男が霊夢の方に右手を向ける。

霊夢の弾幕が男へと次々にぶつかっていく。

男は怯みもせずただ霊夢へと手を向ける。

(一体何なの?!)

次の瞬間、霊夢には男の掌から霊力の塊が撃ち出された様に見えるた。

空間から男へ、男から掌へ、掌から霊夢へと射出されたエネルギーの塊は霊夢の体の中心にクリーンヒットした。

不思議な事に霊夢は痛みを感じなかった。

そして、自身の輝きが失われている事に気付いた。

こんな言葉がある。

敵とは幻影、幻影を倒せば敵が倒せる。

エネルギーの塊は霊夢を覆う実体の無い幻影、つまり霊夢が夢想天生を行う時に敵の攻撃を無効にする為の霊力殻、それを突き破ったのだ。

ちなみにトランセンデンド・マンもエネルギーの鎧を体の周囲に纏う事で敵の攻撃を軽減するが、霊夢の霊力(本質的にはエネルギーとほぼ同じ)の鎧は実体の無い虚像へと攻撃を逸らす為の物だ。

簡単に言えばトランセンデンド・マンは攻撃を受け止め、霊夢は攻撃を逸らす。

「そんな……！」

自分の周囲を漂う8つの陰陽玉も消滅し動揺を覚えた霊夢へと男が突進する。

男の突進は霊夢との距離あと1mで阻止された。

男の駆け込みナツクルはトレバーの両腕にガードされていた。

「離れろー」

霊夢は咄嗟にトレバーの言葉に従う。

アダムに似ている？

霊夢は一瞬そう思った。

見た目は大きな違いがあるが、いつも正しい事が分かるし、私を守ろうとしてかばってくれる。

そういえばいつも冷静なのも同じ。

知らない内に霊夢は心の何処かに安心感を覚えていた。

トレバーが上下逆さまになり、男へ反転キックを繰り出す。

蹴りは男の腕に防がれ、男がトレバーへストリートを繰り出す。

拳はトレバーが体を回転させて避け、そのまま勢いを利用して裏拳、2連回し蹴り、手刀を繰り出す。

しかし、どれも男の腕に跳ね返され、男の両腕ナツクルが決まった。地面へ吹き飛ばされたトレバーは着地の体勢を取り、着地に成功した。

次の瞬間、男の降下膝蹴りがトレバーの頭頂部に炸裂した。

トレバーの体は勢い良く地面に倒れ、同時にクレータも出来る。

男が拳を高々と上げる。

トレバーが抵抗しようと男へ蹴りを放つ。

蹴りは男を僅かに怯ませただけでダメージは与えられず、男は予定通り拳を振り下ろす。

霊夢の脳裏には、アダムが倒れマルクが止めを刺そうと拳を高々と上げる光景が浮かんだ。

「はあー」

弾速の速い針型の弾幕が霊夢から男へ飛んで行く。

弾幕は男へと次々に当たっていくが怯みもしない男はトレバーへと拳を振り下ろす。

突然、男の拳が爆発し、パンチは不発となった。

男が振り向き、視線の先には茶髪で茶色い目の男の姿があった。

「あぶねー！トレバー、今の内だ！」

リヨウに言われた通りにトレバーが男から距離を取る。

リヨウが手を突き出し、エネリオン塊を連続して男の方に撃つ。

男はトレバーに見向きもせず今度はリヨウの方へ駆けて行った。

男がエネリオン塊を避けるまでも無く受け止めながらリヨウへ突進する。

「冗談じゃねえー！」

男は駆け込みながらしやがみ、しやがみながらリヨウへ下段回し蹴りを繰り出す。

リヨウの目はどうか蹴りを捉えていたものの、防ぐには至らず、リヨウの脛に蹴りが炸裂した。

バランスを崩したリヨウは地面に手を着き手の押す勢いで起き上がろうとしたが、同時に男の肘打ちが目の前に迫っていた。

リヨウが避けようとする前に肘打ちはリヨウの腹に決まっていた。

脱力したリヨウへ男が跳び上がり、降下キックを仕掛ける。

その時、何処からか矢が男に向かって飛んで来た。

それでも男には矢が効かず、リヨウへの蹴りの体勢のままである。

今度は金属の銃弾型の弾幕が大量に男へと向かって行く。

これも男には当たるものの怯ませるどころか注意すら逸らせない。

次の瞬間、男の背後からトレバーが両足蹴りを決めた。

不意打ちだったが男は僅かにしか吹き飛ばなかったものの、リヨウへの攻撃の阻止は成功した。

「サンキュートレバー。それと永琳さんに鈴仙ちゃんも来てたのか。」

「……………ああ……………」

「ええ、輝夜達を慧音の所に預けて来たわ。」

「それにしても全然攻撃が効きませんね。あとちゃん付けはやめて下さいよ。」

男は着地するなりリヨウ達を睨んでいた。

「それにしてもあのパワーにスピード、特に防御力は異常だぜ。ウルトラ・スペシャルマイティ・ストロング・スーパーよろいでも着ているのか？」

「……あれはただ錯覚させて存在していると思わせているだけだったか……。」

トレバーから細かいツツコミを受けたリヨウだがそんな事はどうでも良く、リヨウもツツコんだトレバーも真剣な顔で男を睨む。

そして、男が地面を駆け、一瞬遅れてリヨウ達も正面から向かって行く。

男がリヨウに向かって飛び蹴りを放つ。

跳び蹴りを横に避け、男へ裏拳を上から振り下ろす。

リヨウの裏拳を腕で受け止め、反対側から迫るトレバーの駆け込みストレートも受け止める。

トレバーへミドルキックを繰り出す男だがトレバーの足がそれを受け止めていた。

リヨウがしやがんで男へ下段回し蹴りを、トレバーが跳び上がった男の頭へ回し蹴りを放つ。

男が跳び上がり2つの蹴りを避けると銃を取り出し、2人へ秒間200発の勢いで乱射する。

迫り来る銃弾を次々と避ける2人へ男が跳び降りていく。

突然、男の視界が赤く大きく歪んだ。

鈴仙の目が赤く輝き、鈴仙と永琳、そして霊夢が男に向かって弾幕を発射していく。

しかし、男の身体は弾幕からのダメージを受け付けず、今度は霊夢達へと銃を乱射する。

慌てて避ける3人だが3人共体の何処かに銃弾を数発被弾していた。

男の右側面からリヨウの跳び蹴り、反対側からトレバーのスライディングキックが迫っていた。

男は2人の足をそれぞれの手で掴んで受け止め、2人を振り回す。

2人は抗う事も出来ず同じく振り回される仲間と激突した。

男が2人を持ったまま遙か上空へ飛び上がる。

「リヨウ達も一緒じゃあ撃てない……。」

「無茶苦茶な様で良く考えられているわね……。」

「それに私の能力は今も続いている筈なのに全然効いてないみたいで
す……………」

立ち尽くす3人は男が上空から降りて来てリョウ達を手放した時
にしか攻撃のチャンスは無かった。

ようやく降りて来た男は着地と同時に2人を地面へ叩きつける。

それをみた3人はスペルカード詠唱の準備をした。

しかし、男が2人を霊夢達の方角に向かって投げ飛ばす。

仲間を巻き込む訳にもいかず、投げられた2人を避ける。

次の瞬間、5人を銃弾の嵐が迎え撃った。

サムがカイルと早苗に駆け込む。

元々身体能力の無い早苗はサムからひたすら距離を取る。

カイルは早苗をかばう様にサムからの打撃を受け止める。

サム自身の“波”を操る能力によって大量の拳が向かってくる様
な幻影を見せる。

次々と繰り出される攻撃を捌き切れなくなったカイルへサムのボ
ディブローが決まった。

早苗が跳び上がり、スペルカードを詠唱する。

「秘術「二子相伝の弾幕」！」

サムへと迫って来る弾幕は上空から降りて来るレーザーによって消
滅した。

そしてレーザーはそのまま2人を襲う。

早苗に身体能力の無い事が判明しているカイルは早苗の腕を引張り、レーザーに当たらない様に誘導する。

何とかレーザーを避け切ったが何時の間にかサムの姿は消えていた。

「落ち着いて、存在はしているんだ。」

「分かっています……………」

暫くの間沈黙が流れた。

突然カイルが腕を体の前に掲げた。

同時に肉を打つ打撃音が聞こえる。

腕を上下左右に動かし、体を左右前後に動かし、見えない攻撃を避けていく。

突然、カイルの頭から衝撃音が聞こえ、カイルは頭から後ろへ吹き飛ぶ。

「そこですー！」

早苗が何も無い空間へ弾幕を発射する。

しかし弾幕は地面や木々に当たるだけで手応えが無かった。

突然、早苗は背中に強い衝撃を覚え、吹き飛ばされた。

「さあどうした？俺に勝つんじゃないのか？」

サムが姿を現しながら2人へ問いかけた。

「……………カイルさん……………」

「大丈夫だよ。まだこれからだ。」

カイルは立ち上がると左半身を1歩前に出し、右手を後ろに顔の高さに、左手を前に腰の高さに構える。

「へッ、孫氏の兵法でも使うつもりか？」

対するサムはジョークを吐きながらカイルへと突進する。

腕や足の周囲の光を屈折させて幻影を作り、カイルへ叩き込む。

攻撃を次々と受け止めていくカイルだが反撃の余裕が無い。

だがサムは何か違和感を覚えていた。

攻撃が当たらない。

そして、カイルに蹴りを掴まれ、地面に叩き下ろされた。

起き上がったサムは光を屈折させて自身の周囲に光学迷彩を張る

事で姿を見えなくさせる。

(これならどうだ。)

カイルに見えない筈の打撃は全て受け止められた。

フツクを体を前に傾けて避け、同時に手刀をサムにヒットさせる。

「俺の攻撃が読めるのか？いや、俺の攻撃の癖を見切ったのか。」

「その通りさ。君は余裕とやらで同じパターンの攻撃ばかりしかしてない。」

サムはカイルから距離を取り、大量のレーザーをカイルへ向ける。

カイルは銃をサムに向け、レーザーを避けながら撃つ。

銃弾をレーザーでかき消し、更にカイルの背後、左右、上空からもレーザーを放つ。

上下左右前後に体を動かし、捻り、躲す。

対するカイルの銃弾はサムに届いてすらいない。

すると、カイルが何を思ったのか、

「…… 待て、一つ提案がある。」

と言った。

「何だ？」

サムが興味を持ったのかレーザーを放つのを一時停止した。

「決闘だ。」

「…… お前にも戦いを楽しむ心があるとはな。」

「そんなんじゃないさ。それと彼女も僕と一緒に参加させて欲しい。」

「え、え?!私もですか?!」

「2対1か、まあ楽しんで良いだろう。ならどんなルールだ？」

「…… 全員格闘無し、僕がこのコインを投げ、地面に落ちると開始、相手を殺した方の勝ちだ。」

「良いぜ。さっさと始めろよ。」

「カイルさん、大丈夫なんですか？私そんな自信ありません……。」

殺すという単語に緊張と不安が走る早苗が訊く。

「大丈夫だよ。実はこれは相手がレーザーを使うという事に勝利の鍵があるんだ。ただしそれには君の力も必要だけどね。僕が合図をする。」

そう言うとカイルはサムへと正面から向かい合った。
距離は10 m。

カイルは銃にエネルギーを溜め始め、サムはカイルへ右手を向ける。

しばらくし、カイルが銃にエネルギーを溜めながらサムへ駆け込み、サムはその場から動く事無くカイルへレーザーを撃つ。

サムのエネルギーは上空から降り注ぐ太陽光に当たり、光線の飛ぶ方向を屈折させる。

屈折した光が1点に集まり、レーザーとなる。

カイルに向かって極太のレーザーが何十何百本も空間を埋め尽くすように飛んで行く。

『早苗、光っている空間へ衝撃波を起こしてくれないか。』

(あ、はい。)

カイルから通信を受け取った早苗はその言葉の通り1点だけ光っている空間があった。

これはカイルが早苗に見せている幻覚の一種で、早苗は言われた通りにそこへ全力の衝撃波を放つ。

衝撃波は丁度カイルとサムの間空間に突如川のように流れた。

モーセが紅海を割るのは逆に圧縮空気の川を作り出す。

衝撃波の川は流れる空間の気体密度を上げた。

屈折率は一般的に密度が高い程大きくなる。

屈折率の高まった空間を通った光は抵抗も無く屈折し、軌道がカイルから逸れる。

ギリギリ当たらないレーザーの中を直進するカイルは大量に自身のエネルギーを溜めた銃から、音速の10倍を誇り、エネルギー量にして500000000 J、TNT換算で12 kg分のエネルギーを持った銃弾をサムの左胸に正確に向けていた。

「…… ナイスショット。」

今の一言はカイルと早苗両方に掛けた物だった。

サムは避ける意思も無く自分に向かって放たれたエネルギーの銃弾を見詰めていた。

次の瞬間、サムの心臓をエネリオンの銃弾が貫いた。

50 集まる者達

胸に穴の開いたサムは銃弾の影響で後方に吹き飛び、力無く地面に倒れた。

カイルは一息つき、早苗は死体を見た事で罪悪感と不快感を覚えていた。

「……………ふう、やっと一段落か。それと刺激が強かったかい？」

「……………いえ、大丈夫です。それと今のは一体どうやって勝ったんですか？さつき相手がレーザーを放つからこそ勝てるのか言ってますが。」

早苗が疑問に思った事を質問する。

「ああ、光という物は透明で密度の高い物質に対して屈折する。衝撃波でほんの一瞬だが光を屈折させ、軌道を逸らしたという訳さ。ただしこの作戦は相手がレーザー以外の攻撃方法を使わないか、そして君が衝撃波を放てなかったら成功しなかったけどね。後は彼の乗り気な性格も無ければ駄目だっただろう。一か八かの作戦だったけどなんとか上手くいったね。」

質問の答えを聞き、納得した早苗はまた別の質問を訊く

「……………あの、カイルさん、貴方達反乱軍と、そして地球管理組織の目的は一体何なんですか？」

「そうだよ、目的があるからこそ管理軍は幻想郷に来るし、それを阻止しようとして僕達が来る。この話は実を言うともまず一般人は耳にもしない重要機密になるが君には必要な事だ、教えよう。それと話は歩きながらで良いかい？仲間の所へ行く必要がある。」

「あ、良いですよ。」

カイルはポケットから端末を取り出し、操作し、画面に表示されたレーザーを見る。

カイルはその中の1点を確認するとその方向へ歩き出し、早苗がそれについて行く。

「では話そうか。」

カイルが真剣な顔になり、早苗もそれに釣られて同じ表情になる。

「まず、この世界にはエネルギーという素粒子がある。それはあらゆるエネルギーに変換できるいわゆる万能エネルギーだ。それは目に見えないが宇宙空間の何処にでも存在している。あの時目を瞑った時に不思議光の様な物を感じただろう？あれがそうだ。」

早苗は目を瞑った時に見えた不思議な光の事を思い出し、納得した。

「エネルギーは人類の殆どは感じる事も出来ないし、使えもしない。だが稀にそれが使える人間がいる。それこそ僕や君、先程戦ったサムがそうだ。トランセンデンド・マンと呼ばれている。管理軍はそれを利用して、反乱軍もそれに同じもので対抗する。」

「……なんだかまだ話がかみ合わないんですが……。」

「ああ、これから知る為に必要な事を最低限教えているだけさ。いきなり理解しようとしても基礎知識が無ければ混乱するからね。そして、管理軍はある物質を発見した。厳密に言えば中物質と呼ばれる物質の一種で一般に知られている元素周期表には存在しないけどね。それがユニバースウムと呼ばれている物だ。それはトランセンデンド・マン無しで空間中のエネルギーを吸収する。そのエネルギーはユニバースウムにプログラムを刻む事によって自由にあらゆるエネルギーへ変換できる。」

「つまりそのユニバースウムという物があればエネルギーが……。」
「そうさ、永久機関も同然の技術だよ。平和利用も出来るが戦争にも利用されるだろう。管理軍の最初の目的はまず反乱分子を壊滅させる事だからね。話はここからだ。外の世界ではユニバースウムは殆ど存在しない物質だが、幻想郷には大量に含まれている。理由は解明されていないけどね。」

「だから管理軍がわざわざ幻想郷に来たという訳ですね。そして、それを阻止しようと貴方達が……。」

「ああ、管理軍は理論で動くが、人間の感情では全く動かない。それが彼らのやり方の特徴であり、利点であり、欠点でもある。人類の完全管理が目的の彼らは人類の短所である感情を抑えようとしている。だが感情は人類が成長する為の長所でもある。実際人類は己の願望

によつてこれまでにあらゆる物を発明してきた。人類共和軍の最終的な目的は理論と感情を両立する社会を作る事なんだ。」

「確かに管理軍のやり方は酷いと思います。ある所では人民支配の為に制御チップを埋め込んだとか聞きました。でも貴方達の事をニユースで良く聞いた事があるんですが、平和を乱す悪者みたいな酷い言われ様ですよ。」

「情報そのものは簡単に変えられる物では無いが、認識を変える事は出来る。メディアを上手く利用しているんだろね。管理軍が人民支配する事で世界が平和になり、社会や環境、経済が向上した事は確かだから管理軍に反対する者もそういない。ただ大事なのは何が大切かを見極める事だ。」

「見極め、ですか……まるで力の使い方と同じですね。」

カイルは自分の知識を話す為、早苗はカイルの話を理解する為に意識を使っていた。

その為、サム之死体を1匹の黒猫が何処かへ運んで行った事など知らなかった。

黒い男は一直線に何処かへと飛行中だった。

その後ろの少し離れた所には紫達が黒い男を追っている。

「待てーこのっ！」

妖夢が黒い男へ弾幕を放つ。

男は見向きもせず後ろから迫る弾幕を体を戦闘機の様捻って避

けるだけだ。

「死符「ギャストリドリーム」！」

幽々子の放った弾幕は量、密度共に妖夢の放った弾幕を凌駕していた。

対する黒い男は体を捻り、後ろに伸ばした両手からエネリオンの弾丸を放ち、戦闘機のフレアの様に取り来る弾幕を防ぐ。

「結界「光と闇の網目」！」

黒い男の周囲を紫の弾幕が覆い尽くす。

黒い男は相変わらず前進しながら弾幕を避けていくが、動きに余裕が無かった。

どうにか弾幕の嵐を抜け出した黒い男だったが、頭上から妖夢が刀を両手に斬り掛かっている最中だという事に慌てて気付いた。

黒い男は咄嗟に腕を頭上に振りかざし、鈍い金属音が鳴り響く。

妖夢との競り合い中、幽々子が後方から妖夢に当たらない軌道で黒い男へ弾幕を放つ。

前方の弾幕に対し、妖夢を蹴り飛ばし反動で後方に飛び、相対速度を少しでも減速させて避ける。

しかし、黒い男は後方から来る紫の弾幕に気付かなかった。

それによく気付いた黒い男は避けようとせず、腕を体の前に掲げ、防御体勢を取る。

次の瞬間、紫の背中へ衝撃波が吹き付け、衝撃波は更に黒い男へ飛ぶ弾幕をかき消す。

続けて幽々子と妖夢にも衝撃波が吹き付け、こうして3人は吹き飛ばされると同時に怯んだ。

地上からその様子を見ている衝撃波を放った張本人であるレックスは地上から紫達のいる所へと上昇気流を吹かせる。

更には上昇気流が発生している所へ横方向から突風を吹かす事によって小規模ながら竜巻を起こした。

大した大きさでは無いものの紫達を足止めするには十分だった。

その隙に黒い男は飛行を再開し、レックスも同じ方向へと飛び始める。

竜巻が収まり、紫達が動けるようになった時は黒い男の姿を視界に確認する事は出来なかった。

「見失ってしまいましたね……。」

「紫、何か良い考えは無い？」

「…… そうだ、リョウから貰った通信機に位置を知らせるレーダーがあつたわね。」

通信機を取り出し、操作し、画面を見る。

「この辺りに皆が集まっているわね。行きましよう。」

そして、3人の辿る方向もまた黒い男と同じ方向である。

ガミジンは後方からの銃弾を体を捻り、カミソリで防ぎ、前方へと進んで行く。

アダムは前方へ銃弾を浴びせ、ガミジンの後を追う。

急にガミジンが動きを止めた。

ガミジンに合わせようとアダムも止まろうとする。

次の瞬間、ガミジンの足はさつきとは反対の方向へ地面を蹴った。

慌てて止まり、ガミジンに動きを合わせるべく後方へと駆け出すアダムだが、ガミジンは目の前に迫っていた。

ガミジンから突き出されるカミソリをナイフで逸らし、蹴りをもう片方の腕で受け止める。

続けて出された下段回し蹴りを後方に宙返りして避けながら距離を取る。

跳び上がったアダムへと自身も跳び上がり、跳び膝蹴りを繰り返す。

蹴りを両腕で受け止め、下へ逸らす。

下へ逸らされた反動を利用し、前方へ宙返りしながら蹴りを繰り返す。

下へ動かした腕を上に掲げ、蹴りを受け止める。

受け止められた蹴りを戻し、結果、体の回転も後ろ向きになった事で今度はサマーソルトキックを繰り返す。

同時にアダムもガミジンへ両足蹴りを繰り返す。

アダムの蹴りはガミジンの頭に、ガミジンの蹴りはアダムの脇腹にヒットした。

互いに吹き飛ばされ、着地する。

ガミジンが左手に銃を握り、アダムもナイフをしまい両手に銃を握る。

ガミジンがアダムへと突進し始め、アダムもそれを真似する。

互いの銃弾を避け、掻い潜りながらついに互いの距離が1mとなった。

ガミジンは右手に握るカミソリを、アダムは右足で飛び蹴りを仕掛ける。

体格はガミジンの方が大きいがリーチは殆ど同じだった。

するとアダムが動きを変え、蹴りをガミジンの右手へと回し始める。

対するガミジンは右腕を引き戻す代わりに左腕でアダムからの蹴りを受け止め、もう一度右腕を突き出す。

蹴りを受け止められたアダムは右足を引き戻し、突き出されるカミソリを体を捻って避け、同時に左足で回し蹴りを繰り返す。

アダムの回し蹴りを右腕を引き戻して防ぎ、左手に持つ銃を向ける。

それに対し、アダムは両手に握る銃2丁を向ける。

3丁の銃から同時にエネルギーオンの銃弾が3発放たれた。

アダムは1発を体を捻って躲し、ガミジンは2発をカミソリでかき

消した。

着地したアダムは2丁の銃をナイフにし、ガミジンは銃をしまい、相手へと連続攻撃の嵐を仕掛ける。

次の瞬間、2人の蹴りが正面からぶつかり合った。

互いに後方へと吹き飛ばされ、着地する。

すると、ガミジンが後ろを向いたかと思うとその方向へ駆け出した。

アダムもそれを追う。

「何処へ行く。」

「貴様は知る必要が無い。」

黒いローブに身を纏った男は視界に「破壊神」の姿を確認した。

「破壊神」と戦っているのは5名、内2名はHPFの「エクストラ」。

他の仲間は全員そこへ向かっている事も彼自身の能力によって既に知っている。

ただし、ローブの男はただその場で戦闘を傍観しているだけだ。

【スタンバイ中】

一方でローブの男の存在に気付く者は誰一人として居なかった。

51 目覚め

ディスク中佐は仕事場を回っては棚やコンピューターを調べていた。

電子錠付きのロックを解除し開ける。

「……こんなに「トランセンダー」が持ち出されているとは、私が許可した量を遥かに超えている。」

ディスク中佐は次にポールの机に注目した。

「これがポールのパソコンだったか。」

電源ボタンを押し、起動させる。

画面にパスワード入力画面が表示されたが、当然ディスク中佐はポールのパソコンのパスワードを知らない。

「それにしても今時生体認証を使わないとは……手間が省けるな。」

自身のパソコンも起動し、ポールのパソコンとをコネクターで繋ぐ。

「よし、繋がった。それからハッキングできるか……。」

暫くの間部屋にはキーボードを打ち鳴らす音が鳴り響いた。

「……ハッキング完了、と、後はデータを調べるだけか。」

再び部屋に静寂が訪れる。

暫くし、ディスク中佐は驚いて、それでも部屋の外に漏れ出ない様
に出来るだけ抑えて声を上げた。

「これは……何だこのプログラムは！」

画面に映っているのは文字の羅列、専門分野である筈のディスク中
佐はその意味を理解できなかった。

「……何故こんなプログラムが「カオス」に?!それと何故ポールが
私の許可無しに……。」

「中佐、何をしているのですか？」

ディスク中佐の思考は自分が今まさに考えていた部下の抑揚の無
い声によって遮られた。

「……いや、何も。」

「中佐、何をしているのですか？」

再び、同じ声調で問いかける。

「……………」

「中佐、何をしているのですか？」

「これもまた声調が同じだった。」

「……………」 お前は何故いつもそんな抑揚の無い声で話すんだ？」

「中佐、何をしているのですか？」

「またも同じ声調。」

「私の質問に答えろ！」

「中佐、何をしているのですか？」

自分の質問を無視され、同じ声調で同じ質問を5回もされ、諦めた
デイツク中佐は自分のした事を話す事にした。

「……………」 お前の事を調べていた。私にとって何か怪しい動きの様に
感じたのでな。お前のプライバシーを侵害した事は謝ろう。だが、何
故「トランセンドー」をあれ程大量に持ち出した！この「カオス」の
プログラムは何だ！私は許可した覚えはないぞ！」

デイツク中佐は怒りと疑問を掛け、ポールへ怒鳴り散らした。

「上層部からの直接の命令です。」

「何?!では何故私にはその事を伝えなかった!」

更に湧き出る疑問を怒りと共に投げ掛ける。

「上層部から中佐には話すなど言われました。」

「何故だ！少なくとも私の方が階級が上なんだぞ！お前への命令なら
私を通して伝えられる筈だ!」

「そんな事は知りません。」

「……………」 ではこれ程大量の「トランセンドー」を持ち出した理由とこ
のプログラムの意味を教えろ。」

絶句したデイツク中佐は質問を変えた。

「教えられません。これも上層部から口止めされています。」

が、満足な答えを得る事は出来なかった。

「クソツ、何故だ！何故だ!」

デイツク中佐は暫くの間机を叩いていたが、ポールは動揺する事も
無く部屋を出て行った。

レミリアは肌を襲う激痛を感じながら目を覚ました。

「……………い、痛くて……………」

ぼんやりとした目を凝らすと、自分の肌から湯気らしき物が立ち上っていた。

「……………はっ、急がないと！」

レミリアは自分が置かれている状況を理解し、急いで木陰に入る。

吸血鬼の弱点の一つは太陽光であり、レミリアの場合は1〜2時間程度太陽光を浴びると自身が消滅する。

「危なかったわね…………… そうだ、フラン！」

妹の姿が見当たらない事に気づき、慌てて飛び上がろうとするが思い留まる。

これ以上太陽光を浴びる訳にはいかなかったからだ。

よって、レミリアは太陽光からのダメージを回復する為その場で暫く休む事にした。

1秒に満たない時間でリヨウは頭に回し蹴りを受け、トレバーは胸にストレートを喰らい、霊夢は背中を手刀に打たれ、永琳は腹に膝蹴りを喰らい、鈴仙は後頭部に裏拳を受けた。

怯み、吹き飛ばされた5人に向かって1秒に200発のペースで銃弾が発射される。

慌てて避ける5人だが、その連射速度について行けず大量に被弾する事となった。

男がリヨウに向かって走り出す。

至近距離から繰り出されたストレートを両腕でどうにか受け止め、背後からトレバーが男へと飛び蹴りを仕掛ける。

トレバーの蹴りを掴んだ男はそのままトレバーをリヨウへ投げつける。

咄嗟に飛び上がったリヨウは飛ばされたトレバーを避け、上空から降下キックを繰り出す。

男の腕に蹴りを受け止められたリヨウはその位置から次々と連続蹴りを繰り出す。

不意に男の上昇アップがリヨウの頭に決まった。

上昇中の男へとトレバーが跳び上がり、連続パンチを繰り出す。

腕でトレバーの攻撃を受け止め、逸らし、躲し、遂にはトレバーの目の前から男が消えた。

次の瞬間、トレバーは背中に強い衝撃を受け、吹き飛ばされる。

「今だー！」

リヨウが叫ぶと、リヨウ、霊夢、永琳、鈴仙が男を取り囲む4方向から己の全力の弾幕（リヨウは銃弾）をありつたけ発射した。

男は次々と被弾するも攻撃を耐え、4人に向けて銃を構えた。

引き金を引こうとした寸前、トレバーが籠手の刃を出した状態で拳を上から殴り付けようとしている最中だという事に気付いた。

トレバーの籠手の刃と男の腕がぶつかり合った。

刃は男の腕を斬り裂けず跳ね返されたが、男の腕には大きな切り傷があつた。

男から繰り出される上段蹴りをどうにかしゃがんで避け、男の腹へ刃付きの籠手を突き出す。

刃は男の腕に浅く突き刺さり跳ね返され、次の瞬間、トレバールの頭にナツクルが決まった。

トレバールを吹き飛ばした男はリョウが自分に向けてエネルギー塊を放っているのに気付き、体ごと避ける。

エネルギー塊は地面へ衝突し、放たれた熱エネルギーは地面の土を爆発によつて舞い上げさせ、土煙を作る。

再びトレバールを除く4人が男を囲むようにして全方位から弾幕や銃弾を放つ。

牽制された男の背後から再びトレバールが刃の突き出た籠手でパンチを繰り出す。

男が突然振り向き、トレバールの突き出される腕を掴み取ろうとする。

対するトレバールは腕を引き込め、ローキックを繰り出す。

男は前に宙返りしてキックを躲し、同時に回転を利用して踵落としを繰り出す。

トレバールは男の蹴りが繰り出される前に男の背後に回り、刃の付いた左腕を薙ぐ。

しかし、トレバールの振った刃は男の手に握られ、そのまま動かない。

男は刃を握る手に更に力を込める。

手から血が出て来たがそんな事は男にとってどうでも良い。

バキン！

次の瞬間、乾いた甲高い音と共に刃が折れた。

男は千切り取った刃をトレバールへと叩きつけようとする。

その途中、男は別な方向からリョウが駆け込みながら蹴りを放とうとしているのを確認した。

男がそれに気を取られている隙にトレバールが男の刃を握る腕を掴む。

男はそんな事を気にせずトレバーごと腕を振り回し、リヨウへと投げ飛ばす。

リヨウはすかさず自分へ飛んで来た刃を躲すが続けて飛んで来るトレバーは避けられず、2人共そのまま地面へ崩れる。

「回霊「夢想封印 侘」！」

「秘術「天文密葬法」！」

「散符「ルナメガロポリス」！」

3方向から男へと向かって発射される弾幕。

しかし、突然吹きつけた衝撃波がそれを一瞬にして打ち消した。

衝撃波は弾幕の無効化だけに留まらず、霊夢達3人と男を一瞬怯ませた。

突然現れたレックスは自身の移動速度に衝撃波を逆噴射させて更にスピードを得て男へと飛び込む。

更にパンチを繰り出す瞬間に拳自体をジェット噴射で加速させる。

男からの相対速度マツハ3を得た拳は男の体の中心に決まり、吹き飛ばした。

吹き飛ばされ、倒れた男は起き上がろうとするも、突如降り出したエネルギー塊の雨に身を打ち付けられた。

上空からエネルギー塊を放った黒い男はそのままエネルギー塊を降らしながら自身も降下し、男へと拳を突き出す。

拳は男の腹に深く決まり、黒い男は距離を取る。

次の瞬間、男が腕を振り上げたかと思うとその腕にカミソリが突き刺さった。

カミソリを突き出したガミジンはカミソリを引き抜き、背後からの追って来たアダムの跳び蹴りを受け止める。

更にはレックスの背中が突然爆発し、黒い男の側頭部にトレバーの蹴りが決まる。

吹き飛ばされた2人はどちらも体勢を整え着地した。

「お前らが何を企んでいるかは知らないが、お前の相手は俺だ、「サーファー」。」

「良いだろう、「灼熱」よ。」

「………… お前は誰だ…………。」

「…………。」

次の瞬間、リヨウの放ったエネルギーオン塊とレックスの放った衝撃波が衝突し、トレバーの放った裏拳と黒い男の放った回し蹴りが衝突した。

リヨウの上昇アッパーとレックスの降下キックがぶつかり合い、黒い男の放ったエネルギーオン塊をトレバーの籠手の刃が弾いた。

「貴方達は無事だったみたいね。」

「そう言うアンタこそ。」

丁度紫達が霊夢達の元へ到着した。

「アダム、そっちは大丈夫なの？」

霊夢がガミジンと戦闘中のアダムに声を掛ける。

「一人で大丈夫だ。そちらの状況は…………。」

「他人よりも自分の心配をしたらどうだ。」

ガミジンによってアダムの質問が遮られる。

すかさず繰り出されたカミソリをナイフで受け止める。

「霊夢、こちらは任せるから向こうを相手してくれ。倒すまで食い止めるだけで良い。」

「分かったわ。そちらも気を付けてね。」

「敵に隙を見せるとはな。」

ガミジンの上段回し蹴りがアダムの頭に向かって繰り出された。

それをアダムはしゃがみ、同時にガミジンへ下段回し蹴りを繰り出す。

対するガミジンはジャンプして躲し、アダムへカミソリを振り下ろす。

カミソリを左のナイフで受け止め、右のナイフをガミジンの腹へ薙ぐ。

突き出されたナイフを持つ腕を足で受け止め、もう片方の足を頭へ突き出す。

腕で蹴りを受け止め、そのまま次々と繰り出される蹴りを左右に払い除ける。

そして、ガミジンの肘打ちとアダムの膝蹴りが空中で衝突した。
互いに吹き飛ばされ、距離を取る。

「で、私達の相手は……。」

来たばかりの紫達は辺りに倒れている魔理沙とアリスを見るなり、
身構えた。

「相手は威力、速さ、防御全てを兼ね備えているけど、どちらかと言え
ば近距離戦が主力みたいよ。」

「それはどうも。結界「魅力的な四重結界」！」

「二反魂蝶——八分咲——！」

2人の弾幕が男の周囲を埋め尽くす。

弾幕を難無く避け、上空から降りて来る妖夢に気付き、アツパー
カットを決めた。

更に空中から周囲に銃弾をばら撒く。

「あの方向へ3kmだ。分かるかい？」

「……いえ、何も……。」

次の瞬間、爆炎が見えたかと思えば爆音が聞こえた。

「ひゃあ！」

「まあこの距離から認識するには相当な処理能力が必要だからね。僕
でも意識を拡散させたままだと感知できない。」

爆音に驚いた早苗と冷静さを保つカイル。

カイルは背負っているライフル型の銃を持ち、スコープを覗く。

「どれ…… あそこに居るので全員ならあと4人か…… あの2人は誰だろう？…… 少なくともリヨウとトレバーとアダムは心配しなくて良さそうだな…… ただあの男は……」

「あの、一体どんな状況なんですか？」

「ああ、ごめんね。簡単に言えば……」

早苗を意識から外していたカイルは早苗に説明し出す。

「相手は4人、不確定要素が2人、相手の内3人は問題は無いと思われるが問題は残りの1人だ。見てみるかい？」

「あ、はい。」

そう言った早苗はカイルの持つ銃のスコップを覗く。

「あの一番背の高い男がそれだ。あの攻撃、スピード、防御、どれも異常なレベルだ。あとの3人は今戦っている僕の仲間で如何にか出来るレベルだから大丈夫だと思うけど……」

「あっ！」

早苗の目に映ったのは男が少女一人をもの凄い勢いで殴り飛ばす光景だ。

「僕はこの辺で待って狙撃を試みる事にする。」

カイルはそう言うのと再びスコップを覗き直す。

「このまま無事に終わってくれれば良いんですがね……」

「ああ。」

短く言い返したカイルの右眼はずっと一番問題と言いつつ男を見ていた。

フランは肌を襲う激痛を気にせず起き上がった。

「……う、うう……。」

目を開けると少しの間はぼんやりとしていたが、やがて慣れてきた。

しかし、はつきりと見える筈の目は自分の肌から立ち上る湯気らしき物を認識しなかった。

太陽光を浴びすぎて死ぬ事を分かっている筈のフランは立ち上がっても日の光を避けようとしなかった。

「……ウ、ウウウ、ウグググ……。」

フランは自分の命が危険に晒されている事も気にせず、空中に飛び上がった。

そして、フランは僅かに残っている理性を総動員し、何処かへと向かって行った。

52 何の為

空中で爆発が起こった。

それも連続して。

リヨウの放つエネルギーオン塊とレックスの放つ衝撃波は衝突する度に爆炎と共に圧縮空気が拡散する。

エネルギーオン塊に熱された空気は一か所に集められ、リヨウの方へと向かって行く。

高温の空気塊を避け、背中に掛けてある銃を持つとレックスへ照準を合わせ1秒で100発のペースでエネルギーオンの銃弾を連射する。

迫り来る銃弾を避け、リヨウへと手を伸ばしたかと思うとリヨウに向かつて衝撃波が放たれた。

衝撃波を跳んで避け、そのままレックスへナックルを繰り出す。レックスはジェット気流で自身を加速させ、リヨウへ迎え撃つ。

2人のパンチが互いの頭に炸裂し合った。しかし、レックスは大して吹き飛ばされていないがリヨウは大きく吹き飛ばされた。

着地するリヨウと空中に留まっているレックス。

「お前の能力では相性が悪い。」

「それは承知だ。だが相性で全てが決まると思うなよ。」

少し離れた場所では肉体を打つ音が素早く連続して鳴っていた。

黒い男から繰り出される連続パンチを左右へ払い、隙を見せた相手へストレートを放つ。

トレバーのストレートをしゃがんで躲し、その体勢から腕のバネ足のバネ両方を活用してアッパーカットを繰り出す。

後退してアッパーを躲し、宙へ浮いた相手へ回し蹴りを仕掛ける。トレバーの蹴りを空中で前転して躲し、回転の勢いを利用して反転蹴りを連続で叩き込む。

連続蹴りを腕で防ぎ、相手の足を掴むと地面へ叩きつけ、右籠手から出た刃を振り下ろす。

次の瞬間、黒い男の黒い腕に貫通はしなかったものの刃が突き刺

さった。

しかし、黒い男は痛みも感じる事も無く刃を引き抜き、トレバーへパンチを決める。

「……………」

「……………」

互いが沈黙する中、黒い男の刃の突き刺さった腕の箇所が何時の間にか治っていた。

近くでは刃物や銃弾、打撃の音が混じっている戦闘が行われていた。

右と左のナイフを交互に使い、突き出されるカミソリを防ぐと同時にガミジンへ攻撃を仕掛ける。

右に握るカミソリで攻撃を繰り返し、左手で突き出される腕を受け止める。

続けて互いに出し合う蹴りがぶつかり合い、肘打ちや体当たりも繰り返される。

互いの強力な蹴りが衝突し合うとその勢いを利用して2人共距離を取り、銃を取り出す。

2丁の銃からは秒間50発の勢いで音速の5倍の速度を持つ銃弾が、1丁の銃からは秒間10発の勢いで音速の7倍に匹敵する銃弾が放たれる。

2人共それを前進しながら撃ち、やがて跳び上がる。

互いに銃をナイフに握り直し、相手へと突き出す。

アダムの右腕は掴まれ、ガミジンのカミソリはナイフに受け止められ、その体勢で地面へ落ちる。

「…………… アンダーソン、お前は何の為に戦う。」

「幻想郷を守るためだ。」

「…………… 何故文明が遥かに劣り、危険で野蛮な文化を守ろうとする。よく考えてみる、この閉鎖された空間では大量の無知な人間や妖怪が醜い争いを常に繰り返している。そのままではいずれ滅びるんだ。守る価値なんて無い。」

アダムは強く首を横に振った。

「だが、僕は少なくともこの幻想郷に居て幸せだと感じている。霊夢や魔理沙、リョウといった素晴らしい仲間に出会い、共に過ごし、幸せを感じた。そして、他の皆も幸せに過ごしている。僕はこの幻想郷に居たいし守りたい。」

ガミジンは少しの間絶句した。

反論する言葉に迷ったのでは無い。

自分にとつての馬鹿さ加減に呆れたのだ。

「…… お前のその考えの様にこの奴ら、いや、人類は自分という小さな規模でしか物事を考えない。世界を見ろ。小さなきつかけであらゆる場所で何時でも争いは起き、果ては人類そのものを滅ぼす程の戦争にまで発展する。そんな危ない世界など今の人類には必要無い。人類に必要なのは生存と合理化だ。感情などという不合理極まりない人類の弱点は捨てなければならぬ。少なくとも人類が感情という弱点を克服などと何時の時代も宣言し、全て成功した覚えが無い。新たな革命が必要なのだ。」

アダムは反論出来ず言葉を失った。

その代わりにガミジンから距離を離し、ナイフをしまった。

(この頃学んだ極東格闘術でも試してみるか。)

右足を前に出し、両手で陰陽玉の形をなぞると半開きの右手を体の前に、これも半開きの左手を胸の前に構える。

アダムは深呼吸し、最後に勢い良く息を吐くと今までの痛みが和らぎ、疲れも取れた様な感覚を覚えた。

「カンフー？ いやジャパンの古武術か？ 何でも東アジアの文化は異文化を柔軟に受け止め、取り入れると云う。受け止めてみる。」

ガミジンがそう言い終えると次の瞬間カミソリが勢い良く連続して突き出される。

突き出される腕を右、左、右、左といなし、不意に繰り出された左パンチを右手で受け止める。

掴まれた腕が横に回され、ガミジン自身も回るがなんとか着地し、連続で回し蹴りを繰り出す。

体を逸らして蹴りを避け、隙を突いてローキックを放つ。

アダムからの蹴りを跳び上がったって避け、空中で1回転しながらカミソリを振り出す。

前に移動する事によって斬撃を躲し、着地途中のガミジンへ蹴り上げを繰り返す。

蹴りを体を捻る事によって躲し、アダムの首に足を引っ掛ける。

自分の首に掛けられた足を両手で掴み、ガミジンが足を勢い良く動かす前に横へ1回転させ、地面へ叩きつける。

叩きつけられたガミジンは起き上がろうとするもアダムが前に宙返りして勢いの付いた踵落としが腹に決まった。

ガミジンは次こそ妨害されまいと起き上がりながらアダムへと低姿勢からのミドルキックを繰り返す。

蹴りを体を後方に逸らす事で躲し、頭から地面に落ちるのを両手で着地し、両腕のバネで体を跳ね飛ばし、その勢いでガミジンへ両足跳び蹴りをヒットさせた。

吹き飛ばされたが受け身を取り、後転して起き上がったガミジンだが次の瞬間脛に衝撃が加わり、またしても倒れた。

両足蹴りを決め、着地と同時に前転し、ガミジンへ下段回し蹴りを決めたアダムはナイフを1本両手に力強く握り、跳び上がった。

地面へ着くと同時に両腕を振り下ろし、高周波の振動を放つナイフがガミジンの心臓を貫いた。

(……………まさか「アンダーソンシリーズ」がこれ程の力を隠し持っているとは……………あの「デイツクシリーズ」にも匹敵する実力と見た……………)「……………これで安心するなよ……………俺が死んでも他に強い奴が攻めて来る……………我々が「計画」を達成しない限りは何時までもそれが続く……………そうでなくともどうせ幻想郷はいずれ滅びる……………」

それがガミジンの遺言だった。

「だったら滅ばせない。」

アダムは死体にそう言い放つと視線を後方に向けた。

妖夢と鈴仙は既に倒れている。

残るのは霊夢、紫、幽々子、永琳、そして全員が息を切らし、相当

にダメージを受けている。

リヨウとトレバーはまだレックス、黒い男と交戦中だ。

霊夢達と共にリヨウ達が参加するまでの時間を稼ぐか、リヨウ達に加勢して霊夢達に参加する時間を縮めるか。

アダムは時間稼ぎを選んだ。

アダムの銃弾が男へと降りかかる。

男は不意打ちに気付कि、銃弾を躲しもせず正面から受け止めながらアダムに接近する。

アダムの推測では男のスピードは秒速680m。

男の駆け込みストレートとアダムの交差された両腕がぶつかり合った。

しかし、アダムは衝突に耐えられず後方へ大きく吹き飛ばされた。

「アダムっ！」

霊夢が針型の弾幕を男の背中にヒットさせたが刺さりもせず、男が黙って銃を向けた。

「霊夢こそ危ないわよ！」

毎秒200発のペースで放たれる銃弾を紫達3人の弾幕が辛うじて打ち消した。

3人に霊夢とアダムが加わり、弾幕と銃弾の嵐が男に襲い掛かる。それでも男は怯む気配を見せず、周囲へ銃弾をばら撒く。

「まるできりが無いわね……。」

紫がそうぼやくと丁度そのタイミングで男が跳び上がった。

次の瞬間、極太のレーザーが地面にクレーターを作り上げた。

そして、男が拳を突き出すと衝撃波が生み出され、辺りを覆った。男が着地し、反対側にも誰かが着地する。

その姿は少女の物であるが、むき出しの牙、鋭く尖った爪、背中の羽、紅く輝く双眸、そして火傷の様にただれかかっている皮膚がその姿を凶暴にさせていた。

「フランドール?」

「確かあの吸血鬼の妹よね?」

フランの心は単純な復讐心一色に染まっていた。

私を馬鹿にしたあの男が許せない。

フランは視界の片隅に映ったレックスの姿を認めるとその方向へと一直線に向かって行つた。

それに慌てて気付いたレックスはフランへと右手を向けた。

フランへと衝撃波が襲うが、その後退力にもめげず衝撃波を突破し、レックスへと鉤爪を振り出す。

(いくら強くなっても動きが変わらなければ意味が無い。)

レックスの肘打ちがフランの背中に命中し、吹き飛ばす。

「喰らえー！」

リヨウが咄嗟に放つたエネリオン塊は油断しているレックスの脇腹に衝突するなり爆発した。

「くっ、汚いな……。」

「こうでもしなきゃお前には勝てそうに無いからな。」

一方で吹き飛ばされたフランは地面に着地するなり再び飛び上がろうとしたが、突如襲い掛かって来た銃弾の嵐がそれを阻止した。

男は半分は好奇心、半分は恐れの目でフランを見ていた。

対するフランは、

復讐の邪魔をしないで。

男へと目掛けて飛び掛かる。

フランからの攻撃を次々と躲し、カウンターのフックを決めた。

それでもフランは怯まず男へと攻撃するだけである。

フランが掌を突き出し、男がそれを受け止める。

次の瞬間、掌からは膨大なエネルギーの塊が放出された。

しかし、男を倒すどころか傷つける事さえ出来なかった。

男の身体はフランの後方にあつた。

後ろ蹴りをフランの後頭部に決め、バランスを崩した相手へと間合いを詰めながら肘打ちを決めた。

「実力はそう変わらないだろうが、向こうは冷静さを保っているのに対しフランドールからは理性を感じられない。」

「援護しようにも弾は効かないどころかあのレミアアの妹に当たつたら不味いし、接近しようにもあの力に速さじゃあ自分がやられかねな

いわね。」

フランは吹き飛ばされている途中、視界にレックスの姿が映った瞬間飛び上がった。

レックスに向かって極太のレーザーが放たれる。

それに気付いたレックスは右手をフラン、左手をリヨウに向けどちらからも衝撃波を放つ。

レーザーを躲かれ、フランは衝撃波を強引に突破し、リヨウは横に避けるとフラン同様に突進する。

フランの突き出された腕が掴まれ、もう片方の腕も突き出すが同様の結果だった。

「何も変わらないな。」

しかし、フランの押す力が圧倒的に強く、レックスはそのまま後ろへと押されていった。

「ぬっ？ぬおおおお！」

その途中、レックスの背中爆発が起こり、その後脇腹に強い衝撃を感じるとフランを残して横方向へ吹き飛ばされた。

リヨウはそのままレックスを追いながらエネルギー弾を連射させる。

レックスの体表で次々と爆発が起き、最後にリヨウの振り下ろしパンチが決まった。

直後、2人もろとも極太のレーザーに巻き込まれ、吹き飛ばされた。

フランはリヨウを巻き込みながらレックスへレーザーを当てたは良いが、次の瞬間後ろからのスライディングキックによってバランスを崩した。

フランを蹴り倒した男はそのまま蹴り上げ、上空へ跳び上がり両腕を叩きつけ地面へ叩き落とす。

男が両足で勢い良く踏みつけ、着地するとフランへ銃を向ける。

しかし、レックスが自身をジェット気流で加速させて放ったパンチが男の側頭部にクリーンヒットした。

よろけた男を衝撃波が吹き飛ばす。

レックスはもう一発衝撃波を放とうとしたが、それは自身の後頭部

が爆発した事によって阻止された。

倒れながら後ろを見るとリヨウが手を伸ばしていた。

そして、フランのレーザーが横からレックスを吹き飛ばした。

レックスは起き上がろうとするが力が入らない。

「……………鎖骨、肋骨が折れたか……………内臓にも損傷があるかも知れん……………」

トランセンデンド・マンにとって身体のダメージはエネルギーの吸収を弱める。

結果、レックスを覆うエネルギーの鎧も防御力が低下した。

無防備とまでは言えないが弱ったレックスは次の瞬間、男の手刀に心臓を潰され死んだ。

男はレックスの体に突き刺した手を引き抜くとフランの方を向いた。

フランも同様に男を睨む。

ただし、男は冷静さを保ち続け疲労やダメージは殆ど無く、フランは疲れ切っているうえに冷静さが無く果ては皮膚から湧き上がる蒸気の勢いが激しさを増している。

53 伝えなくては

黒い男はトレバーの連撃を次々と避け、同時に反撃する。

トレバーの黒い手袋で覆われた拳は手袋の機能によって威力を増し、黒い男から繰り出される攻撃を巻き込みながら反撃する。

トレバーからのフックをしゃがんで避け、続けて繰り出されるボディブローを受け止め、更に仕掛けられる裏拳を横に移動して避ける。

裏拳を躲され、距離を離れた黒い男から移動速度を上乗せした連続パンチが繰り出される。

後退しながら避けていくトレバーだが反撃する暇が与えられない。

男がトレバーヘジャブを繰り出すと見せ掛けて防ごうとするトレバーの腕を掴み、腕を引きながら顔面へと裏拳を繰り出す。

繰り出される裏拳を手首を掴んで受け止め、暫くそのまま対峙し合う。

別の場所ではトランセンデンド・マンが吸血鬼を一方的に痛めつけていた。

吸血鬼の方は自分の持っているポテンシャルをフル活用してとにかく強力な攻撃をとにかく大量に浴びせる。

トランセンデンド・マンの方は最低限の動きで攻撃を躲し最低限の動きで反撃を喰らわない様に攻撃する。

（『今』は無理か。「カオス」の方もかなり危うい。作戦2に移すしかないな。）

漆黒のローブに包まれた男はそう判断すると何処かへと姿を消したが、それに気付く者は居なかった。

そもそも彼がそこに存在している事に気付く者すら幻想郷内には居ない。

男の上段蹴りがフランを吹き飛ばし、吹き飛ばされたフランに男の踵落としが炸裂する。

霊夢、紫、幽々子、永琳がそれぞれ4方向から男を囲む様にして弾幕を連射する。

対する男は銃を周囲に乱射し弾幕を打ち消し、それでも防げない分は躲して補う。

アダムが2丁とも銃を向けながら男へと走って行く。

次の瞬間、アダムのナイフ2本と男の腕2本が正面衝突した。

ナイフは男の皮膚の表面を引っ搔く程度の傷しか与えず、押す側だったアダムが逆に押され始めた。

ナイフをしまい、男の肩に手を置き、反対側へ回る。

アダムの両足キックと男の片腕がぶつかり合った。

受け止めた反動で男が僅かに後ずさりし、次に後ろを向き胸の前に両腕を交差させる。

男の両腕がリヨウの放ったエネルギーオン塊を防ぎ、続けてリヨウから秒間100発の勢いで放たれる銃弾の嵐を自身の放つ銃弾で迎え撃つ。

当然秒間200発を誇る男の銃がリヨウの放つ銃弾を圧倒し、リヨウへと襲い掛かる。

リヨウがその場を離れると次の瞬間、横方向から男へと弾幕の嵐が吹き荒れる。

男は弾幕を被弾しながら前進し、弾幕を放つ張本人であるフランに向かって跳び蹴りを放つ。

フランも真正面から鉤爪を突き出す。

しかし、男の身体はフランに届く前に地面に落下した。

着地し、再び跳び上がり、フランの腹へとジャンプアッパーカットが決まる。

「不味いな、フランドールの戦闘力が下がったぞ。」

「トレバーは向こうで頑張ってくれているが加勢に来てくれる前に俺達がやられるかもな……………」

「不吉な事を言うんじゃないわよ、リョウ。」

「私の「死を操る程度の能力」も効かないし……………」

「何か突破口はある筈よ。生物である以上必ず弱点はある筈だから。」

「私の「あらゆる薬を作る程度の能力」で対生物用の化合物を矢先に含ませた矢も放ってみたのだけど、今の所有効な物質は無いわね……………」

アダム達がそれぞれ思った事を口にする中でフランが苦しそうに起き上がっていた。

湯気の吹き出す勢いが増し、それに容赦無く男の放つ銃弾が次々と命中する。

「………… そうだわ、吸血鬼の弱点は日光よ！だからあんなに動きが鈍っているんだわ。日光を遮る事が出来れば優勢になるかも知れないけど。」

霊夢がそう言ったが、暫く男の容赦無い攻撃が続いた。

「不味いな、トレバーは良いが、リョウ達が危ない。せめて向こうが隙を見せてくれれば勝機はあるんだが……………」

「あのカイルさん、私ここで何もしないなんて……せめて加勢して少しでも役に立ちたいです。」

「気持ちには分かるけど、君にはもしもの為にここに居てもらっている……ん？」

カイルがスコープを別の対象に向ける。

背中に羽の生えた少女だった。

(……先程よりも大幅にパワーダウンしている……羽にあんなに尖った爪、そしてあの異様に尖った犬歯……幻想郷には神話や架空の生物が居ると聞いた……)

「カイルさん、どうかしたんですか？」

早苗の質問は答えられなかったが代わりにカイルからの指示が返ってきた。

「……早苗、外の世界で聞いた事があるんだけど君は守矢神社の風祝だね？」

「え、ええ。」

「噂によれば守矢神社の風祝は奇跡や天候を操ると聞いた事がある。今すぐあそこの戦闘中のエリアを曇りに出来るかい？雨では無く曇りだ。」

「曇りですか？多少時間は掛かると思いますが、あの辺りだけなら出来ます。」

早苗の頭には疑問が残っているが、カイルの言葉を信じた早苗はその場で正座し、冥想し始めた。

すると、アダム達が戦っている辺りの上空が曇り始めた。

「こんな時に限って曇り始めたなんて不吉ね。」

辺りの雲は短時間でアダム達のいる上空を覆った。

「いや、霊夢、あれを見て。」

紫がそう言い、霊夢が見た先にはフランの姿があった。

湯気の立ちのぼるペースが収まり、やがて湯気は出なくなった。

そして異様に輝いていた目は人間らしさを取り戻し、見た目もある程度脱力した様に見えた。

「……あれ？ここどこ？」

先程までの凶暴さを感じさせない無邪気な台詞だった。

「貴方レミリアの妹だったわよね。」

「フランドールよ。お姉ちゃんは確か……………」

「霊夢よ。貴方のお姉さんが異変を起こした時に来ていたでしょ？それで、今はあの男に全力で攻撃して。」

霊夢が男を指差す。

「え？壊して良いの？」

「そう、思いつきりやりなさい。でも私達は巻き込まないよう……………」

霊夢が言い終える前にフランが飛び上がった。

「話ぐらい聞きなさいよー！」

「だが暴走していた時に比べて戦闘力が下がったとはいえこちらが勝てる可能性はあるぞ。」

アダムが霊夢を宥め、2人もそれぞれ銃と札を構えた。

「やったわね。あとリョウ、貴方の2人の仲間は大丈夫なのかしら？」

「トレバーはあんなヤローには負けねえさ。カイルは……………あいつの事だから何か考えがあつてここに来ていないのかもな。少なくともあの2人を心配する必要はないさ。」

紫の質問の答えは安心できるものだったが、紫は心の何処かに不安を覚えていた。

(何故かしら……………)

少なくとも紫は1つの勘違いをしているがそんな事には気付かな

かった。

トレバーの次々と繰り出される攻撃は黒い男の腕によって次々と受け止められる。

トレバーのストレートを1歩下がって避け、1歩踏み出し裏拳を放つ。

体を前進させ同時に傾けながら横に裏拳を避け、黒い男の顔面にパンチを決めた。

黒い男は怯んだ気配を見せず、続けて手刀を連続して繰り出し始めた。

エネルギーで強化された籠手で次々と受け止めるが、その度に鈍い金属音が鳴り響く。

黒い男の手刀が腹を掠めると斬り傷が出来上がった。

それを機に黒い男が攻撃のペースを上げた。

猛烈な連撃を最大のスピードで躲していくが間に合わない。

次の瞬間、黒い男の手刀が空を切った。

黒い男の股を潜り抜け背後を取ったトレバーは勢い良く蹴り飛ばした。

黒い男は成す術も無く吹き飛ばされ、軌道上にあった大木に衝突し、砕く。

大木を折り、地面に倒れた黒い男の胸は次の瞬間、トレバーの籠手の刃が貫いた。

しかし、トレバーは何か違和感を感じ取っていた。

（…………… 妙だ、どんな人間でも殺す時に感じる筈の抵抗が無い……………
今まであれ程の防御力があつたのに何故だ？）

それは彼が自身のその刃で数々の敵を葬った「死神」であるからこそ感じ取れる違和感だった。

突然、トレバーの目には黒い男からエネルギーオンが発散する光景が映った。

黒い男の姿が消え、刃が地面に突き刺さる。

残ったのは直径10cmの真っ黒な球体だった。

トレバーはある事に気付いた。

エネルギーオンが球体に向けて吸収されて、いや、球体がエネルギーオンを吸収している。

通常エネルギーオンを吸収できるのは生物とユニバーシウムのみである。

更にその球体からは知性の様な物を感じた。

（…………… 待てよ？…………… 光を全く反射させない黒色、エネルギーオンを吸収し、知能を持つ…………… まさか！……………）

トレバーの推測が結論を生み出す前にその思考は背中に衝撃を感じた事によって中断された。

吹き飛ばされ、倒れた所で振り向くと友人の姿を認めた。

「いちち…………… よお、奴の姿が見当たらないって事は片付けた様だな。」

「…………… リョウ、奴は……………」

頭上から降り注ぐ銃弾によって会話が中止された。

落下して蹴りを仕掛けて来る男を躲し、リョウは上段へ蹴りを、トレバーは下段へ手刀を繰り出す。

両方とも男の身体を捉えたがダメージを与えた手応えが無い。

次の瞬間、男の胴体に先端にナイフの付いたロープが巻き付き、リョウ達は後方へ退く。

霊夢達の弾幕が前方180度から襲い掛かり、アダムは男の体に巻き付いたロープを引っ張った。

引つ張つた反動で自分が突撃するが、跳び蹴りは男の腕に阻まれた。

「アダムが男の腕を蹴り、反動で離れると同時にロープを巻き戻す。リョウとトレバーの滅多打ちが両側面から次々と浴びせれる。」

「結界「生と死の境界」！」

「桜花「未練未酌宴」！」

続けて紫と幽々子の弾幕が男の周囲360度を埋め尽くす。

牽制された男は霊夢と永琳が仕掛けて来る行動に気付かなかった。

霊夢が目を瞑り、永琳が弓を引く。

永琳の引つ張る矢が放たれたと同時に霊夢が目を見開く。

霊夢の繰り出した結界は男を1秒に満たない間にしか行動不能に追い込めなかったが、その間に矢は男の左肩に突き刺さった。

(毒が駄目なら細菌よ。)

先端に付いているのは有機物を分解する細菌と最近の活動を異常に活性化させる薬剤。

結界を破り、男は矢を取ろうとするが、男の足元に巻き付いたロープが引つ張られてバランスを崩し、結果矢は更に深く突き刺さった。

男の肩に深く突き刺さった細菌は薬剤により活性化され、男を構成するたんぱく質、炭水化物、脂質、等次々と水、二酸化炭素、アンモニアへと変えていく。

男の免疫機能が高かったのか細菌の活動はすぐに収まったが男を弱体化させるには十分だった。

ロープを引つ張つたアダムは反動で突進し、男の肩へとナイフを突き出す。

男が振り向き、ナイフを正面から受け止める。

それでも後方からのトレバーの刃を防ぐ事は出来ず、刃は右腕に深く突き刺さる。

だが、男は痛みなど無いかの様に刃ごとトレバーを持ち上げる。

アダムが阻止しようとするも男の左腕に阻まれ、吹き飛ばされた。

(……左腕?)

男の壊死同然だった左肩は何時の間にか治っていた。

「禁忌「レーヴァテイン」！」

フランの両手に握られた大剣は男を斬り裂くつもりだったが、男がトレバーを盾代わりにして大剣を防いだ。

フランの脳裏には味方に当たってしまったという罪悪感。

その隙に男が銃弾を大量にヒットさせる。

トレバーは力を振り絞り刃を引き抜き、今度は頭に向けて突き出す。

次の瞬間、刃が砕け散った。

男の拳は刃を粉碎するに留まらずトレバーを気絶させた。

力無く倒れたトレバーを片手で持ち上げ、拳を握る。

不意にトレバーから男へ腕が伸びた。

しかしトレバーの拳は男に何も与えず、代わりに男の拳はトレバーの腹に衝突し大きなダメージを与えた。

その時だった。

男が突然横に大きく動いた。

男に蹴り飛ばされたトレバーの腹を1発の銃弾が貫いた。

男は銃弾の来た方向を即座に判断し、そこへと駆け込んで行った。

(……皆に伝えなくては……)

トレバーは一人そんな事を考えていた。

カイルはまだスコープから目を離していない。

(やはりあの少女は吸血鬼だったというのは正しかったか。だが判断

は良かったがまだまだ倒せない……。

そして、カイルはスコープ越しに友人が持ち上げられ、男から容赦無い一撃が襲ったのを見た。

(トレバー！仕方ない、今だ。)

照準を男に合わせ、引き金を引く。

銃口から自身のエネルギーオン吸収量10秒分の銃弾が音速の10倍で発射された。

不意にスコープ越しに見える男の身体が横に動いた。

トレバーは蹴り飛ばされ、銃弾の軌道上に吹き飛ばされた。

(しまった！)

カイルの後悔と同時に銃弾がトレバーの腹部を貫通する。

男はカイルの方へと駆け込んで行く。

「不味い、相手がこちらに気付いて向かって来た！」

早苗にそう伝えると同時にエネルギーオンを銃に溜め始める。

「大奇跡「八坂の神風」！」

早苗がスペルカードを唱えると迫り来る男へと向かい風が吹き荒れ、同時に弾幕も襲い掛かる。

男は冷静に銃で弾幕を打ち消しながらペースを変えずに2kmの距離を縮めていく。

(リョウ達も向かってきているが間に合わない…… 僕が仕留めるしかないが上手くいくか……。)

54 死体

「はあっ！」

早苗が手を向けた先に居る男へ掛け声と共に衝撃波がぶつかるが衝撃波を正面から突破される。

「あと10秒、あと10秒だ……。」

「秘術「二子相伝の弾幕」！」

カイルの独り言を聞いた早苗は焦って強力な弾幕を繰り出す。それでも男は焦らずに弾幕を回避し、着実に距離を縮める。

「僕達も離れよう。」

カイルがそう言うのと2人共後退しながらカイルは銃にエネルギーを溜め、早苗は少しでも時間を稼ぐべく弾幕を放つ。

それでも音速の2倍で森を駆け抜ける男との距離を突き離す事は出来ない。

突如男が後方を振り向き、地面から足を離し、体を捻る。

男の体表すれすれをエネルギーオン弾が通り抜け、エネルギーオン弾はそのまま軌道上の木にぶつかりと爆発を起こした。

(リョウの攻撃か。だが弾速が足りない……。)

すると、男が今度は跳び上がり、空中で回転し始める。

「深弾幕結界——夢幻泡影——！」

突如スキマが開かれ、そこから出現した紫がスペルカードを唱える。

突然の出来事にも驚かず体を回転させて避け、着地すると紫へと銃を乱射する。

慌てて避け、幾らか喰らったものの大したダメージにはならなかったがこれ以上男を食い止める事は出来なかった。

カイル達と男の距離は残り1000mを切っていた。

(あと6秒。)

このペースでは残り4秒で追いつかれる。

後方へ逃げるカイル達に向かってエネルギーオンの銃弾がばら撒かれ始めた。

「これじゃあ追い付かれますよー！どうすれば……。」

早苗が落ち着きの無い声で言う。

するとカイルは少し（1秒にも満たない時間）考え込んだ。

「……いや、僕が合図する。」

「え？」

男との距離残り200m。

（あと3秒。）

カイルは後退するのを止め、前進した。

男がパンチを繰り出すのに対し、カイルは見事に体を捻って避け、

2人はすれ違う。

足でブレーキし、カイルを追い掛ける男と再び逃げるカイル。

『今だ！』

カイルの心の声が聞こえた。

同時に視界に光点が現れる。

男の背中ど真ん中。

思考よりも先に衝撃波が放たれる。

男は背中に衝撃波が吹き付け、一瞬だが身動きが取れなかった。

リョウが右手を伸ばしエネルギーオン塊を放った。

「……やっぱこの距離じゃあ駄目か……。」

リョウの目には自分の放ったエネルギーオン塊を男が躲した光景が映っていた。

「なら私も。」

紫がスキマを開いたかと思うとその中へと姿を消した。

アダム達が見たのは紫が男の元に現れ、弾幕を放つが躲され、反撃を喰らっている光景だった。

「これじゃあカイルの奴危ねえな……………」

「……………リヨウ……………」

トレバーが何かを訴えようと弱々しい声で言う。

「お前は静かにしろよ。傷口が開いちまうぜ。」

が、あつさりと断られた。

一方、霊夢はアダムが向けていた視線を辿った。

(そうだ、これならば……………)

「それって……………」

アダムが有無を言わずに持ち上げたのは魔理沙の箒だった。

右手に持ち、走り始める。

右手に力を込め、エネルギーを送る。

手を離し、アダムの全力疾走の速度とアダムが腕を振りかぶった速度、そしてアダムがエネルギーを送った分の箒の速度が加算された箒が男目掛けて一直線で飛んで行った。

早苗の放った衝撃波によって身動きが取れなくなった小数点以下の刹那の時間、何処からか箒が音速を超えたスピードで男の体の中心に衝突した。

怯んだ男は地面に倒れ、胸を何かに貫かれる衝撃が襲い、意識が遠のいていくのを感じ、その内身動きをしなくなった。

カイルは男の心臓に自分の放った銃弾が貫いたのを確認すると銃をしまい、座り込んで一息ついた。

「…………… 終わっただんですか？」

「ああ、終わったよ。」

早苗も安心し、一息つく。

「…………… でも、こんな争わずに解決出来なかったんでしょか…………… もっと平和な方法があれば良いのに……………」

「それが出来たら僕だって今ここにこうして銃を持ってないさ。戦争というのは互いの正義を掛け合うものだ。だけど、感情という利点でもあり欠点でもあるものを制圧しようというのは間違っている。人類は感情を持つ事で発展して来たんだ。だからと言って感情に任せるとも駄目だ。共存するんだ。あらゆる物や事においてそうさ。ジャパンに昔あった日本という国家も自らの文化を損なわず多文化を柔軟に受け入れる事で自他の文化を共存させる事で始まりから1600年以上も国家解体戦争の最期まで存在し続けた。」

カイルは立ち上がるとゆっくりとリョウ達の居る方向へと歩き始めた。

「急ごう。仲間が一人瀕死の重傷みたいだ。」

「それは大変じゃないですか！早く行きましょう！」

疲れ切った体を残った力を総動員させ、走る。

「トレバー、しつかりしろ！今永琳の奴が薬を調合している。それまで耐えるんだ！」

焦るリヨウに対して何かを悟ったような表情のトレバー。

「……いや、俺はもう駄目だ……。」

「んな事言うなよ。永琳の薬は味はともかく効き目だけは確かだ。もつと前向きに考えろ。」

「……お前こそ、前向きに考えるだけでは上手くいかんぞ……せめて伝えたいことがある……。」

トレバーの顔が強張った。

「……奴、俺が戦っていたあの黒い男……奴は……。」

「あの黒い男が何だって？」

「……エ……エネリ……。」

これ以上トレバーの口から言葉が発せられる事は無かった。

「……クソツ！」

「……間に合わなかったわね……材料がそろっていればもつと早く作れたのに……ごめんなさいね。」

「アンタは謝る必要はねえさ。それにしても、アイツが自分から何かを伝えようとするなんてよっぽど大事な事なのか……何かエネリオンに関係しているのかも知れん。」

一方で生存を喜んでいる者も居た。

「アダムは無事だったのね。」

霊夢は嬉しそうな顔をしながら嬉しそうな声で言った。

「ああ、アリス、妖夢、鈴仙は気絶、魔理沙は気絶に加え骨折、だが命に別状は無いらしいな。だがトレバー1人が犠牲者か。」

アダムは相変わらず無表情で感情の籠っていない声だ。

すると霊夢は何かを考え、少しして口を開いた。

「……あの、アダム、私あのトレバーという人と一緒に戦っている時、彼がああ男に追い詰められて危なかった時、貴方があのマルクという少年に殺されかけている光景が思い浮かんだの。」

「何故だ？」

「分からない……………けど私にはその時アダムが危ないんじゃないかって思ってた……………それに私にもっと実力があればトレバーを守れた気がするの。」

「僕は少なくとも大丈夫だったさ。トレバーの事はもう過ぎた事だ。これから実力を付けければ良い。」

そして、アダムはトレバーの死体を見るとある物に目を付けた。

「これは……………」

直径が2cmの球体。

半透明で深い青に光り、首に巻く為の鎖以外の装飾は無い。

「ん？そいつか？トレバーの奴いつもこれを身に付けていたんだ。貸してくれと頼んでも誰にも絶対に触らせなかった。あいつは変に頑固だった所があった。あいつ曰くこれは先代から伝わるお守りだよ。トレバーの事だ、何か意味があるのかも知れんな。」

球体を見詰めるアダムにリョウが説明した。

アダムはずっと球体を凝視していた。

アダムには球体が、俺を持って、と言っている様に見えた。

手を伸ばし、掴み取る。

手を引き戻し、首に巻く。

何も起こらなかった。

「ほう、中々似合ってたんな。そーいやお前トレバーと何か雰囲気似てるよな。」

「そうか？」

するとアダムを呼ぶ声がした。

「ねえ、貴方アダムでしょ？久しぶり〜。」

「そうだな。」

フランは久しぶりの再会に嬉しそうだったがアダムの表情は変わることは無かった。

紫達もやっと終わったという様な顔つきだった。

だが紫にはちよつとした疑問があった。

「それにしても妙なのよね。幽々子、私達が最初の方に戦っていたあの黒いローブの男は覚えているわよね？」

「え？ええ。途中で黒い男に変身して、それからあのトレバーって人がやつつけたんでしょ？」

「そのローブの男と黒い男のエネルギーを比べてみたけどまるで別人、同一人物とは思えないわ。それにエネルギーの量や質は大して差が無かった。だったら変身しなくてもそう変わらないのに何故変身したのか……疑問に思わない？それとあの黒い男が西行妖に興味がある様な行動をしたのも不可解だわ。」

「そう？でももう終わった事だからいいじゃない。」

「相変わらず呑気ね……。」

そしてアダム達へと向かう足音に最初に気付いたのはリヨウだった。

「ようカイル。ここに来て早速知り合った娘とデートか？」

リヨウがそんなジョークを言ったのはカイルの隣に知らない少女が付き添う様に歩いていたらからだ。

「冗談が言えるって事はリヨウも相変わらずだね。彼女は東風谷早苗。今日幻想入りしたそうさ。」

「あ、初めまして。」

カイルは友人からの冗談を笑って返し、早苗は一礼した。

「だがトレバーはやられちゃったんだ……。」

「そうか……。」

そんな中紫はカイルの言った言葉が気に掛かり、考え込んでいた。

「こんな時に限って幻想入りしてもしや……。」

「後でまとめて話すよ。」

紫は独り言のつもりだったがカイルはその疑問に応答した。

「そうね、怪我人もまだ居るし、永遠亭ならちゃんとした治療が出来るからそちらに移動しましょう。」

永琳の提案で場所を移す事にした。

突然アダムが言った。

「トレバーの死体は何処だ？」

「あつ。」

そこに倒れていた筈のトレバーの死体は影も形も無かった。

「ねえ、あの男の死体は？」

次に言ったのは霊夢だった。

カイルは目を凝らし、男の死体があるであろう地点を見た。

「……………無い。」

「そーいやあのトレバーという男が戦っていた黒い奴も倒したには死体がある筈よ。アダムが戦っていたあの男も。」

紫のその台詞で全員が辺りを見回したがそれらしい物は何一つ発見されなかった。

「紫、人間の死体を利用する様な妖怪とか居るのか？」

「人間を食料にする妖怪は数え切れない程居るからどんな妖怪が持ち去ったのかは……………」

リヨウの質問は十分な解を得られなかった。

「これじゃあ葬式も出来ないわね……………」

「……………まあアイツは、俺は死ぬ時は誰も知らない所で死にたい、とか言ってたし、そっちの方がトレバーも成仏するかもな……………」

火焰猫燐、地底に住む化け猫、は嬉しそうな表情だった。

何せ人間の死体を6体も手に入れたのだから。

「いや、あたいながら良い仕事したなあ。」

燐が押す猫車にはこれまでアダム達が殺した“トランセンデンド・マン”、つまりアガレス、ガミジン、サム、レックス、トレバー、そして“2人”の名前が分からなかった“男”の内の“1人”（ヴァサ

ゴ、マルバス、レオは爆散した為死体が無い。)の“6人”の死体があつた。

「それにしても皆なんか雰囲気がいんどけど、まあ灼熱地獄の燃料が手に入ったし、良いか。」

燐は呑気な考えで猫車を押すペースを進めた。

その様子をローブの男が見ているとも知らず。

ローブの男は片手に直径10cmの球体を持っている。

それは先程トレバーが刃で突き刺した“物”だった。

ローブの男は静かに燐の後を追っている。

男は燐が底が見えない巨大な穴に入って行く光景を見た。

男はその穴を見下ろすが穴には入らず、反対側へと去って行った。

「第一段階は失敗したな。“生存信号”も“死亡信号”が感知出来ない者は恐らく肉体を再生不可レベルまで破壊されたのだろう。スペースマシンの点検もあり人員の補充は1週間後、それと同時に第二段階開始だ。」

「了解。」

ディック中佐がそう言うのと彼の部下達が返事をし、オペレータールームの様な部屋から出て行った。

一人になった所でディック中佐は椅子に深く腰掛け、ため息をつく。

「ハア……結局ポールは何を考えているのか……。」

するとドアが開き、入って来た人影を見ると立ち上がり、敬礼した。
「司令、お久しぶりです。」

司令と呼ばれたのは20代前半の男性だった。

「ディック中佐、話がある。」

「どんな話でしょうか。」

「君には能力がある。しかし悪いが、「ユニバーシウム・マイン計画」の最高責任者から外れてもらう。」

ディック中佐は動揺した。

「理由は一体……？」

「すまんがこちらの都合で話せない。だが君のトランセンデンド・マイン開発に関しての地位には影響は無い。」

「そうですか……。それで、代わりとなる者は誰なんでしょうか。」

「ランニング中尉だ。君も知っているだろう。」

ランニング中尉とはディック中佐の部下であるポールの事だ。

またしても中佐は動揺した。

「一体どの様な理由で？」

「これも言えなくてね。すまんな。ではこれで私は退出する。」

司令と呼ばれた男はドアを開けると部屋から出て行った。

再び一人となった中佐。

突然、机を叩く音が鳴った。

「何故だ！何故だ！何故だ!!!」

自分が計画から外されたのは仕方が無いと思える事だったが、ポールが自分の代わりになったという事だけは納得できなかつた。

「……何を企んでいるのか必ず暴いてやる……！」

55 嫌だ

永遠亭にて。

リヨウは耳に通信機を当てていた。

「よお慧音……俺は無事だ。そっちは？……そりやあ良かった……え？ああ外から来た俺の仲間が一人死んだが、他の皆は無事だ……ああ、それじゃあまたな。」

そして通信機をオフに、皆に向かつて言った。

「里の奴らは全員無事だつてよ。」

近くでは魔理沙が目を覚ました。

「魔理沙、大丈夫か？」

一番最初に元に寄つて声を掛けたのはアダムだった。

「……まだ体のあちこちが痛いけど大丈夫だ。」

「また箒を使わせてもらった。勝手に使つてすまなかつたな。」

「別に良いぜ。もうあの箒も半分アダムので良いかもな。ハハ……そういやあの、トレバーって奴はどうしたんだ？」

「死んだ。」

「……そうか、それは気の毒だな、良い奴だったのに……」
「かお前つて良くそんな悲しい事を平然と言えるよな。」

紫はカイルに質問し始めていた。

「それで、あの立方体が奴らの目的と聞いたのだけど、どういう意味かしら？」

「あの立方体はいわゆる「爆弾」ですよ。どうやって管理組織が結界を破るのか今までは判明しなかったけど、それが内部でエネリオンを爆発的に放出させてその圧力で破るという仕組みで結界を破ると最近判明したんです。それが向こうで「ユニバーシウム・マイン計画」とか呼ばれているそうです。」

紫が袋から立方体を1個取り出した。

「こんな小さな物で破れるというの？もつと数量はあるけど総数合わせてもそれ程の破壊力を生み出せるとは思えないわ。」

「僕が見た所この爆弾一つでも相当な威力を秘めている。これはユニ

バーシウムで出来ていて容積の遙かに上回るエネルギーを蓄える事が出来ますよ。」

「それじゃあわざわざ幻想郷に来なくてもこの爆弾を送って爆破するだけで済まないのかしら？」

「恐らく爆弾の使用量を出せるだけ減らす為に結界を破壊するのに必要な最低限の爆弾を送る事にしたんだろうと思います。それには絶妙な配置に置かなくてはならないし、現代の技術では結界を超えて配置させるには制度が足りないし、爆弾の量を増やすにしてもユニバーシウムは非常に希少価値が高いからです。」

「成程、コストを最低限まで削減……本当に合理性しか考えない様な連中なのね。」

そして、今までカイルの隣に座り、黙ってカイルの話を聞いていた早苗が質問した。

「あの、何故私が幻想入りしてきた時に管理組織も幻想入りしたんでしょう。何だかただの偶然には思えなくて。」

「ああ、今から説明しようと思っていたよ。結界は内部や外界からの刺激によって不安定になり、外部と内部を遮る壁が薄くなるから入りやすくなる。今回は早苗、君が幻想入りした時の影響で結界が不安定になり、そのタイミングで管理組織は人員を送り込み、僕達も阻止する為に来たという事さ。」

「それじゃあ……私が幻想入りしたせいで……」

「大丈夫だ、君は悪くない。悪いのはそれを利用する管理組織だ。ナイフが料理にも殺人にも使える事と同じだよ。要は使い方だ。」

カイルの励ましに早苗はホッとした顔になり、今度は紫が次の疑問を投げ掛けた。

「それにしてもそのスペースマシン、リョウから少し聞いたわ。その原理を知りたいのだけれど。結界を意図して超えるという事自体が幻想郷にとって脅威なのよ。」

「そうだな……トンネル効果は知ってますか？」

「ええ、物理は幻想郷内でも通用するから。」

紫は知っている様だが早苗の頭の上には疑問詞が浮かんでいた。

その様子にカイルが気付いたのか説明をし始めた。

「それじゃあ、簡単に説明すると、宇宙空間内の素粒子をボール、宇宙同士を仕切る次元を高い壁と仮定しよう。ボールを壁の向こう側に送るには高い壁以上に高く投げなければならぬ。つまり壁の高さは次元の壁を破る為に必要なエネルギーを表している。ところが量子学では素粒子は波動の性質を持っている。壁の向こう側にボールを送れなくとも声なら聞こえる。だから素粒子を波に置き換えられるなら次元の壁を超えられるという理論さ。分かったかな？」

「……何となくですけど、まあ。」

「そして、結界を超える方法もこのトンネル効果と同じ理論さ。現代の技術では宇宙空間を超える事は出来ないけど、幻想郷の結界の場合には次元の壁よりも遥かに劣るから人程の質量を持つ物体でも送れる訳だ。」

「まさか外界の人間が結界の性質に気付くなんて……私も外の世界を調べた事はあるけど人間にこんなに技術力があるなんて知らなかったわ。」

紫が驚いたような口調で言った。

すると突然早苗が椅子から立ち上がった。

「そうだ、神奈子様と諏訪子様に伝えなきゃ。ちよつと帰ります。」

「それなら説明に僕も立ち会おうよ。まだ言っていなかった事もあるし。」

「良いんですか？ わざわざ私の為にありがとうございます。」

デイツク中佐は自分の研究室でうなだれていた。
「ポールの奴め……。」

時間が経ち、いくらか落ち着くと立ち上がった。
部屋を出ると別の部屋へ向かった。

暗証番号を入力し、ロックを解除し、ドアを開く。
広がるのは等間隔に並ぶ大量のガラスシリンダー。
それらは5種類に分かれていた。

中佐が目にしたのはその内の2種類。

「…… アンダーソンシリーズはまだ1体、デイツクシリーズは2
体…… 両方の1体ずつは死亡、いや、アンダーソンシリーズは生き
ている可能性があるが…… デイツクシリーズのもう1体はまだ調
整中…… リスクが大きい計画だが私にはこれをするしか他に無
い……。」

片方は青い髪の少年達ともう片方は赤い髪の少年達。

どちらも、というかシリンダーの中に入っている人間達は誰も動く
気配を見せない。

中佐は部屋の更に奥に入った。

そこには1つのドア。

外にあったドアよりも幾分厚みを帯びていて暗証システムもその
分強化されている様だった。

暗証コードを3パターン入力し、指紋認証、眼球認証、血液認証を
クリア。

重そうなドアがそれ相応の遅い動きで開く。

中に入ると中佐は2つのシリンダーに注目した。

「…… アダム、マルク、今日ユニバーシウム・メイン計画の責任者
から解任されてしまったよ。でもその分お前達の面倒を見られる。
2人共早く治してやる。それまで待っていてくれ。母さんの為にも
やらなければならない事だから……。」

妖怪の山の中腹の湖の近く、そこに守矢神社は建っていた。

「神社ごと引越して来たのか。凄いな。」

「私達の目的は幻想郷で信仰を得る事なんです。向こうだともう宗教を信じる人すら居ませんから。」

「君はオーストラリア大陸のクイーンズランド辺りの出身なのかい？」

「え？いえ、ずっと日本に住んでいましたけど。」

早苗が使っている日本という呼称は、国家が解体され世界共通でジャパンと呼ばれる様になった以後も現地人は良く使ってる。

「冗談のつもりだったんだけど、流石に通じなかったな。そのクイーンズランドって所では昔、家ごと引越しをする風習があったそう
だ。」

「へえ、面白いですね。」

今のはその風習とカイルの冗談両方に対して言った言葉だ。

2人は守矢神社の門の前に着いた。

「神奈子様、諏訪子様、ただいま帰りましたー！」

「お邪魔します。」

すると神社の本殿から2人の女性、の姿をした神（片方は少女の姿だったが。）が姿を現した。

「おかえり早苗、無事だったみたいで何よりだ。」

「おかえり、早速知り合った子とデート？」

少女の姿をした方の神、洩矢諏訪子が早苗をからかって言った。

それに対して赤面する早苗と笑いをこらえるカイル。

「やめてくださいよ諏訪子様。そんなんじゃないやなくて……ほら、カイル

さんにも笑われたじゃないですか。」

「違うよ、リヨウが同じ事を言ってたからそれを思い出してね。あつ初めまして。カイル・ウィルソンと言います。貴方達が守矢神社の神ですね。」

「こちらこそ、私は八坂神奈子。早苗がお世話になったみたいだね。」

「私は洩矢諏訪子だよ。それで、早苗とはどこまでいったの？」

「もう、諏訪子様!」

更にからかう諏訪子と更に赤面する早苗。

「止めなよ諏訪子、早苗が嫌がつているだろう。」

諏訪子のからかいは神奈子によって制止された。

「そうだ、今まで起こった事を説明しなきゃ。」

「ああ、僕もその為に来たんだったね。」

2人は2柱の神に説明し始めた。(といっても早苗は現人神なので1柱と数えるが。)

前半はカイルと早苗両方とも説明に当たっていたが、後半になると難しい事ばかりなので殆どカイルが説明していた。

「……そんな事が、地球管理組織が関わっていたなんて……。」

「今回も良く無事だったね。」

「ええ、カイルさんのお蔭で。」

「僕はするべきだと思った事をしたただだよ。」

カイルはちよつとした違和感を覚えたので訊いてみた。

「……今回”も”?」

「え?あ、以前、7、8年前に管理組織が共和軍へと侵攻した時なんですけど、その時共和軍の方に助けられて、でも家族や友達が亡くなつたショックで良く覚えていないんですけど……。」

「ああ、ナガノ戦か。あれは管理組織が外部から詳しく幻想郷の調査をする為に領地拡大をしようとしたと言われている。」

「外側から?結界で遮られているのに調べられるんですか?」

「前トンネル効果って話したけど、その技術が使われているボールは壁を通り抜けられないけど音なら通るだろう?音を発して通り抜ける、または返って来る音によって光が届かない洞窟でも内部を知る事

が出来る。それと同じさ。」

「複雑な様で重要な事は結構簡単なんですネ。」

「それが科学なんだ。知らない事を知る為の手段。そして新たに得た事を利用して更に分からない事を解明する……ごめん、話が関係ない事に逸れていたね。」

「いえ、別に。」

自分の行動に苦笑するカイルと手を振って大丈夫と伝える早苗。

「そういえばカイルさんはこれからどうするんですか？」

ただ単に思い付いただけの質問に、

「ん？幻想郷にはスペースマシンが無いから暫く幻想郷で暮らす事となるな。じゃありヨウの所にでも泊めてもらおうか……。」

思った事を言っただけの答え、

しかし、この後の諏訪子の台詞は完全に面白がっていた。

「じゃあうちで暮らしていけば？」

「諏訪子様?!」

「な、何を言ってるんだ!」

その台詞に何故か赤面する早苗と神奈子だが、

「……別に断る理由も無いし、良いですけど?」

カイルには拘りも断ろうとする意志も無く容認した。

「じゃあよろしくねカイル。」

「い、良いんですか?カイルさん。」

「まあ特に迷惑でも無いから良いよ。」

邪心の無いカイルは諏訪子の悪ふざけを知らず簡単に受け入れるのだった。

ある少年が廊下を走っていた。
まるで何かから逃げる様に。

廊下の右ドアからロボットが一体出て来た。

ロボットが少年に対して銃を向け、少年はロボットへ飛び掛かった。

ロボットが引き金を引いたのと少年の拳がロボットを使用不可の状態に破壊したのは同時だった。

砕かれたロボットは力なく倒れ、少年の腹には銃から発射された麻酔弾が突き刺さった。

少年は慌てて麻酔弾を引き抜こうとしたが、既に麻酔弾中の麻酔の半分が自分へと注入されていた。

少年は麻酔の効力に抗い、ただひたすら逃げ続ける。

ロボット達はひたすら少年を追いかける。

廊下を走り続けるが、行き止まりに差し掛かった。

(もうこんな事は嫌だ！)

少年は突き当りに向かってタツクルした。

タツクルは突き当りの壁を砕き、少年がそのままそこにあった部屋へと入り込む。

しかし、前には何十台ものロボットが自分に麻酔銃を向けて待ち構えていた。

後ろからも何十台も押し寄せ、少年は囲まれた。

ロボット達が道を開けた。

そこを通過して少年の元へ来たのは1人の中年男性。

「アダム、お前は私達に必要な存在だ。だから戻って来てくれ。頼む。」

「嫌だ！僕は独りになりたいんだ！皆がどう思っているも僕は消えないんだ！」

男性の差し伸べる手と言葉に対して子供の様に反抗する少年。

「アダム！」

「嫌だ！」

突如少年を囲むロボット達の半数が倒れた。

「マルク！何をするんだ！」

「いいじゃん、本人が消えたいと思ってるならさ。」

マルクと呼ばれた少年を取り押さえようとするロボット達だったが、止められず次々と破壊される。

「ほら、行けよアダム。消えたいんだろ？早くしねえと加勢が来るぜ。」

少年はマルクの言う通りすぐさまその場を去った。

「アダム！帰って来い！」

「余計な事言うなクソ野郎。」

男性はマルクに殴られ、地面に叩きつけられ、マルクは倒れた男性を遊ぶ様に踏みつける。

少年はそんなシーンを走りながら振り向きざまに見ていた。

アダムはそんな夢を見終わって起きた。

同じ様な夢を見た所為か以前よりも落ち着いていた。

「………… マルクは何者だ？僕に協力していたのか？でも嫌っている筈の僕を何故………… あの男も一体…………。」

アダムの思考はそこで止まり、別の事に変わった。

「…………。」

無言で愛用のナイフ「シルバーウルフ」を持っていた。
消えたい。
衝動的にそう思ったアダムは何かを恐れてナイフを戻した。

2 地霊殿

56 日常風景

風神録異変から1週間後。

「僕はフレンチのアイスコーヒーかな。」

「じゃあ私も同じのを。」

「オツケー、待ってる。メシはパスタとタコス位しかねえけど、食うか？」

「いや、要らないよ。」

「私もいいです。」

カイルと早苗は喫茶店「ザイオン」に来ていた。

「それでカイル、〃アレ〃出来たか？」

「アレ」とは以前リヨウが製作した飛行マシンの事である。

「いや、出来る限り効率アップを図ったけどせいぜい数%しか出力が上がっていない。ハードの限界さ。色々部品を組み替える必要がある。」

「それじゃあ私の八卦炉はどうだ？」

続けてカイルの座っている2つ隣の席から掛けられた魔理沙の質問。

「優れた汎用性を残したまま性能アップは結構難しかったけど材料とか一部替えてみたりしたら出力が十数%程上がったよ。はい、コレ。」

「ありがとな。すげえー……。」

カイルから八卦炉を渡された魔理沙は感嘆の声を漏らしていた。

「カイルさん凄いですね。戦闘だけでなく機械も詳しいなんて。」

早苗の驚きに対する回答はリヨウの口から発された。

「そりゃあな。何せ13歳で大学を卒業した程だし、共和軍では有名な研究者であり、工学者でもある。凄えだろ？」

「へえ、そうなんですか?！」

「有名って、それ程でも無いよ。」

「いやいや、少なくとも共和軍が採用しているTM専用武器の30%、

それ以外の兵器でも15%はお前が設計したり改良を加えた奴なんだぜ。スペーススマシンの効率を10%以上も高め、植物の葉緑体を超える効率のソーラーパネルを開発したお前の何処が有名じゃないんだ。」

「それは工学者や技術者としてさ。研究者としてはそんなに良い結果を残せてないよ。」

「まあそれは良いとしてコーヒー出来たぜ。」

カイルがリョウから渡されたガラスコップを手に取り、鼻に近づける。

匂いを嗅ぎ、一口含み、味わった所で飲む。

早苗もカイルに釣られる様にしてコーヒーを口に含んだ。

「成程、これはエメラルドマウンテンかい？」

「当たり前、無縁塚つて所があつてな、そこにコーヒーの木が生えてた。」
「それは凄いな。ところで一つ訊きたいんだが、この前君から旧型のコンピューターを貰ったんだけど、あれ何処で手に入れたんだい？結構気になつてね。」

先程の話でカイルが飛行マシンや八卦炉を強化させたのはそのコンピューターを使ったからである。

「ああ、里から離れた所に香霖堂つて古道具屋があつてな、そこに外から忘れられたお宝やらマシンやらが流れ着くんだ。」

「つくづく幻想郷には驚かされるな。」

「そんな場所があるんですね。」

「あ、そうだ。」

突然リョウが何かを思い出した様に立ち上がると店の奥に入つて行った。

戻つて来ると手に何らかの服らしき物を抱えていた。

「魔理沙、今度アダムに会う事があつたらこれを渡しといてくれないか？アイツにピッタリな奴だ。」

畳まれていたがパツと見では黒という色しか見えなかった。

「分かったぜ。また変なみたいだな……。」

「行くわよー。」

「ああ。」

霊夢が手に持つ呪符を投げ、アダムへと弾幕を撒き散らす。

対するアダムは手に銃もナイフも持たず体の動きだけで弾幕を躲す。

アダムへと更に弾幕を撃ち込み、更には自身も接近する。

アダムには霊夢が右手に握るお祓い棒にエネルギーに似た物が送り込まれるのを認識した。

アダムとの距離を詰め、お祓い棒を振り出す。

攻撃はアダムの腕に阻まれたものの怯む事無く次々と打撃を繰り出す。

霊夢はお祓い棒を防ぐアダムの腕の表面に霊力に似た物が鎧の様に張り付いているのを認識した。

霊夢からの突きを両手で受け止め、そのまま腕を引いてお祓い棒を霊夢の手から抜き取る。

同時に霊夢の足元を平手で打ち、霊夢はバランスを崩して倒れた。

「もつと冷静に捉えられる筈だ。自分と相手が置かれている状況を判断し、相手が次に起こす行動を常に予測するんだ。これを素早く出来る様にならなくてはならない。」

「接近戦って弾幕ごっこしかやってない私には難しいわね。」

「遠距離戦は攻撃が届くまで時間があるからその間に考える事も出来るからな。近距離戦は直感の様な判断が要求される。」

お祓い棒を霊夢に返し、倒れている霊夢を起こす。

「もう一度だ。」

「勿論よ。」

霊夢が弾幕を放ちながら前進し、お祓い棒を振り出す。

アダムが弾幕を躲し、続けて来る霊夢の攻撃を避ける。

霊夢が足元に難いだお祓い棒を足を踏ん張って受け止め、続けざまに出される拳を片手で受け止め、もう片方の手でパンチを繰り出す。

アダムからのパンチを両手で受け止め、後ろに投げつける。

霊夢の投げをあらかじめ予測していたかの様にダメージを受ける事無く着地し、掴まれている腕を回した。

両腕を回された事によってバランスを崩した霊夢はその状態でア

ダムの平手を喰らい、吹き飛ばされた。

霊夢が起き上がるとアダムが接近していた。

アダムが腕を後ろに引く。

霊夢がパンチを繰り出すと予想して腕を胸の前に構える。

アダムの足刈りが霊夢の足に決まり、霊夢は倒れる。

「…… アダムってどうしてそんなに強いのか？ 全く攻撃を当てられないし。」

「少なくとも理由があるだろうが、僕には分からない。」

「えいっ！」

霊夢が悪あがきとでも言う様に起き上がりながらアダムへと両腕を突き出しながら突進する。

アダムが1歩横に動くだけで突進は避けられ、霊夢がバランスを失い地面に倒れたのはこれで3回目となった。

「もう、1回ぐらい当てさせてよ。」

拗ねる子供の様な口調で言う霊夢だったがアダムは何時もの様に気に留めていなかった。

丁度いつも通りに魔理沙が箒に乗って来た。

「よう2人共。 霊夢、お前またボロ負けか？」

「そうよ……。」

先程の2人の修行を見てなくても分かっていたのは、霊夢は疲労で息を

切らし体中土埃が付いているのに対し、アダムは疲労の気配を見せず服も殆ど汚れていないからである。

「お前本当強いよなあ。今度私の相手もしてくれよ?」

「ああ。」

短い返事で答えを返し、アダムは魔理沙が手に持っている物に目を付けた。

「それは何だ?」

「ん?ああ、リョウからお前に渡してくれて頼まれたんだ。また変な服らしいぜ。」

そう言つて魔理沙が広げたのは黒いロングコートに同じく黒の柔軟素材の長袖シャツに長ズボン、そして黒いサングラス。

「前も同じ様な服貰つてなかった?」

「まだ秋なのにこれ暑いんじゃないか?」

霊夢の言う通りこれらはアダムが春雪異変で着ていた物だが、違う所があった。

「この堅い板は何で出来ているのかしら?」

「炭素金属複合繊維の装甲だ。カサガイの歯をヒントに炭素と金属両方を用いた軽量で丈夫な素材だ。」

軽く丈夫なアーマーはシャツとズボンを覆う様にして取り付けられるようになっていた。

「カサガイ?貝の歯つてそんなに強いのか?」

幻想郷には海が無い為、海に生息するカサガイを知らないが為の質問だった。

「いや、自然界でそれ程強靱な物質を合成できるのはカサガイのみだ。カサガイが合成するタンパク質と鉄の合成素材は鋼鉄の4倍の強靱性を持つクモの糸の数倍も強度がある。この装甲は別の物質、炭素とチタンで出来ているがそれ以上に強靱性がある。」

「鉄の4倍も丈夫で、その数倍も丈夫で、更にそれよりも……. どれだけ強いんだよ。お前も良くそんな事を知ってるよなあ。」

魔理沙は自分のした質問の答えによって呆気にとられた。

「そうそう、この前カイルに八卦炉を渡したら威力をかなり上げて返

してくれたんだ。アイツも凄いやなあ。」

「トランセンデンド・マンって言うんだっけ、皆そんなに凄いのかしら……。」

霊夢と魔理沙はまたトランセンデンド・マンに驚かされるのだった。

神奈子、諏訪子の2柱の神はカイルの話を熱心に聞いていた。

「エネルギーと言うのは宇宙空間の何処にでも存在している素粒子の一種で、これにインフォームオン、全ての素粒子を構成する最小単位、を信号の様に加える事であらゆるエネルギーに変換出来るんです。インフォームオンは質量を与えるヒッグス粒子も構成しているから質量は持たないし、エネルギーもエネルギーの一種である以上質量は無いんです。そして、そのエネルギーとインフォームオンから体に取り入れ、脳でエネルギーを構成するインフォームオンの構造を変化させ、別のエネルギーに変化させたり変化する時の条件も変えられる、そんな事が出来る“人類”がトランセンデンド・マンと呼ばれるんです。」

「ちよつと質問だけど、あらゆる素粒子を構成する最小単位で質量を持たないんだったら、どんな生物の神経でも読み取れないんじゃないか?」

「何故かは判明していないけど、トランセンデンド・マンの神経細胞は何故か感受しない筈のエネルギーやインフォームオンを感受出来る

んですよ。素粒子実験施設の様に何なのかは分からなくても現象を観測は出来る、という事かも知れませんか。トランセンデンド・マンは人類の突然変異体の一種で脳が異様に発達しているんです。“普通”の人類の脳についてだって今だに未解明の事がありますよ。一説では脳を進化させ続けた人類が更に進化した形態とも言われています。」

「人間が科学技術を発展させる度に新しい謎が果てしなく生まれて来るみたいね。」

神奈子の質問に対する答えは神奈子が求める以上の事が含まれていたが不明点が多かった。

「ちなみに個人的な意見ですけど人類や妖怪、貴方達神というのは元は起源が一つなのでは、またこの世界に存在する霊力、魔力、妖力といった力も元はエネルギーなのでは、と考えています。そうであれば妖怪達の能力についても説明が付くし、何より妖怪の正体も判明しますよ。」

「それじゃあ次はユニバーシウムだけ、地球管理組織が狙っていて幻想郷にあるって聞いたんだけど。」

諏訪子のした質問の答えもまた本人の期待を上回る物だった。

「ユニバーシウムは質量は持つているが中物質と言ってこの世界に存在する物質にも反物質にも反応せず、物質、反物質共に通用する元素周期表が通用しない、そんな不思議な物質なんです。ユニバーシウム以外にも中物質はあるという仮説は有力だけどそれ以外の物は発見されていないんですよ。そのユニバーシウムは偶然エネルギーとインフォームオンを吸収するという特殊な性質を持っていたので管理組織に注目されていますよ。ユニバーシウムにプログラムを刻み込むとエネルギーをその他エネルギーに変換出来るから、それでエネルギー問題を解決出来るし、何より僕達共和軍に対抗出来る、という訳です。ただユニバーシウムは外の世界には非常に微量にしか存在しない、あるとしても地球のマントルや核にしかないのに対し、幻想郷の地中にはそれが豊富に含まれているんです。」

「ちよつと待って、結界に覆われているのに幻想郷の内部にあるって

どうして分かったの？それと何故幻想郷に大量にあるのか。」

「エネルギーは結界を超えるんですよ。といっても少量であれば、例えば僕達トランセンデンド・マンが放出する量では結界を超えたとしても観測できない程弱まっているから幻想郷には余程のユニバーシウムが存在しているんでしょう。何故幻想郷にあるのかは詳しい事は分かってませんが。」

しかし、これも不明な部分があった。

「この謎を解く事は人類に関わる何かを大きく変えると僕は思いますよ。」

57 乱れる日常

「へえ、核融合を、ですか？」

「そうだ。幻想郷のエネルギーは外の世界から通じているが、それは外の世界で何らかの異常が起きエネルギーが絶えると幻想郷の存在が危うい。だから外の世界では確立されてない技術を利用して幻想郷で独立したエネルギー源を生み出す、というのが目的なんだ。」

カイルは神奈子の話を熱心に聞いていた。

「核融合は外の世界では実現はしていますけど……つまり“磁場閉じ込め方式”という訳ですか。」

「その通りさ。本当に色々な事を良く知ってるね。」

外の世界は地球歴0018年になるが“核融合と連鎖反応”は半世紀ほど前に“慣性閉じ込め方式”において成功し実用化されている。

慣性閉じ込め方式の核融合は、燃料を球形の殻に封入し、そこへレーザーやビームを燃料に当てる事によって燃料をプラズマ化させ、プラズマ化した燃料は膨張するが、当てるレーザーやビームによって膨張する燃料を外側から押さえ、反作用で爆宿される事によって反応が起こる。

一方で磁場閉じ込め方式の核融合は、プラズマが磁力線に巻き付く性質を利用して、強力な磁力でプラズマ化した燃料を閉じ込めるという方式だが、これはあらかじめ燃料をプラズマ化させる必要があるし、磁力線の性質上余剰磁力線が生まれるので慣性閉じ込め方式よりも効率が悪い。

実際、磁場閉じ込め方式は“核融合反応”は成功例があるものの圧力が足りず“連鎖反応”にまでは至っていないが、慣性閉じ込め方式では“連鎖反応”にまで至っている。

無論、実用化されているのは連鎖反応が出来るが為の効率の良い慣性閉じ込め方式だ。

「そもそもそれだけの熱と圧力はどうやって？まず炉が必要ですし。」
「そこが幻想郷さ。熱と圧力の一部は地底を利用し、そこへ太陽神を

憑依させた地底の鴉の力を使うという訳だよ。地底の鴉が太陽神を憑依させるのに適しているからね。今から準備に取り掛かろうと地底へ行こうと思ってたんだ。」

「成程、八百万の神とはそんなに種類があるんですね。それじゃあお気を付けて。」

カイルに手を振り、早苗と諏訪子にも行つて来る、と挨拶した所で神奈子は目的地に向けて進み始めた。

「中尉、作戦開始時間です。」

ポールは部下からそう呼ばれる前からオペレータータートルムの指揮官席に座っていたので一度号令を掛ける為に立ち上がった。

「では作戦第二段階を開始する。まずは「コントローラー」へ信号を送れ。」

ポールの号令と同時に全員は持ち場に付き、幻想郷内へと信号が発された。

ローブの男は幻想郷外から受け取った信号によって1週間ぶりに活動を再開した。

そして片手に持っている漆黒の球体をその場に捨てる様に置くか何処かへと行った。

球体は暫くするとその場に浮き上がり、やがて漆黒の人の形をした物へと姿を変えた。

球体から生まれた物はローブの男と反対方向へと向かった。

場所は地底の最も奥深くの地霊殿と呼ばれる場所にて。

「燐、最近何か気になる事でもあるのですか？」

「あつ、さとり様。そうなんだ。1週間前に手に入れたこれらの死体なんだけど……」

さとり様と呼ばれる少女に言われた火焰猫燐が指し示したのは炎の海に横たわる6人の死体だった。

「1週間前から燃やしているっていうのに全く燃えないんだ。死体から死霊も出て来ないし。」

さとり様と呼ばれた少女はその死体に自分の“3つの目”を向けた。

彼女の名は古明地さとり、桃色に近い薄紫の髪に赤い目、水色の

ゆったりした上着とピンクのスカート、そして自身の頭にコードの様な物で繋がっている3つ目の大きな目。

「……何これ……。」

3つ目の大きな目は死体からある物を読み取っていた。

死体そのものに意志は無いが、何処からか別の意志がそれら进行操作している様だった。

そして、その操作している意志が、

「……近づいて来る……。」

それを知った時は既に遅かった。

黒いローブに見を包んだ男はさとりと燐から10mも離れていなかった。

しかし、

「さとり様、どうしたんだい？」

「燐、貴方見えないの?!」

「え？誰か居るのかい？」

さとりはその姿を認識しているが燐にはそれらしき姿は見えていない。

『作戦二段階目開始。』

さとりはローブの男からそう読み取れたと同時に今まで身動き1つしていなかった死体6体が起き上がったのを見た。

「死体が……。」

次の瞬間、さとりと燐は体中に走る激痛を感じると同時に意識を失った。

地霊殿の主が倒れ、6人分の死体達が起き上がる事に驚いた地底の怨霊達は暴れ出したが、ローブの男と6体の死体は気にする気配も無かった。

カイルは地面から伝わる僅かなエネルギーのノイズを感じていた。だから早苗視点でカイルが普段は穏やかな笑みを浮かべている表情を突然本気の目つきになった事に戸惑った。

「……あの、カイルさん？」

「……遠いがエネルギーが大きく乱れた……一応警戒はしていたが対応が間に合うか……異変かも知れない。」

「えっ?! 私には何も感じませんでしたけど……。」

「ここから非常に遠く離れているからね。恐らく地下深くだろうか、高い知覚能力が無ければ読み取れない程だよ。確かな事は分からないから実際に行ってみる必要があるな。」

エネルギーは質量を持たないが故に原子間に働く重力、弱い力、電磁波、強い力の影響を受けず、更には物質を通り抜ける事が出来る。

つまりエネルギーはどんな壁に遮られても通り抜けるのだがそれでも距離が離れていると周囲に拡散する為離れている程感知し辛い。(これは全ての素粒子の最小単位であるインフォミオンにも無論当てはまる。)

ちなみにTM専用武器で銃弾に変換されたエネルギーは「質量体に衝突する事で熱、力学エネルギーを与える」というプログラムを与えられる為、原子を貫通しない。

「地下深くって事は異変だとすれば神奈子が危ないかもね。二人とも気を付けて行っておいで。私はもしもの時の為にここに残るから。」

諏訪子も会話の中に入った。

「では行って来ます。」

「あくまで調査だけど何が起こるかは分からないから最悪の場合を考えて常に警戒するんだ。諏訪子さんも何かあったら連絡下さい。」

「分かっていますよ。」

「分かった。そちらも気を付けてね。」

2人はすぐに守矢神社を出るとカイルが先行し、早苗がそれに続いた。

アダムはいつも通り霊夢と修行をしていた。

霊夢から連続して繰り出される拳を左右へ払い除け、がら空きになった霊夢の足元へローキックを繰り出す。

アダムのローキックを跳び上がって避け、回し蹴りを放つ。

霊夢の蹴りを片手で掴み取り、地面へ引き倒す。

地面へ叩きつけられた霊夢だが体勢を直し、アダムへと駆け込みながらお祓い棒を突き出す。

上へ下へ、右へ左へ、振り出されるお祓い棒を手刀で受け止める。突きを手刀で滑らせるように上に逸らし、霊夢の顔面に裏拳が決まる。

アダムに呼吸の乱れは無いが、霊夢はすっかり息を切らしていた。

「少し休んだらどうだ?」

「そうするわ。」

すると霊夢の修行を見ていた魔理沙が割り込んだ。

「それじゃあ私ともやらせてくれよ。」

「良いぞ。」

突然魔理沙が手を伸ばし、周囲に弾幕が出現するとアダムに降りかかった。

それを難無く一つも触れる事無く躲したアダムだったが、魔理沙が

八卦炉を向けていた事に気付いた。

「折角カイルにパワーアップしてもらったんだから今使わせ。」

八卦炉からは細いレーザーが幾つもアダムに伸びてきた。

宙を舞ったアダムの身体は空中で回転し、レーザーを全て避ける。

その隙に魔理沙はアダムに接近し、力の籠った右手でパンチを繰り出す。

パンチはアダムの腕に阻まれたが、続けて左足で真っ直ぐ蹴りを突き出す。

魔理沙の蹴りを右腕で絡め取る様に掴み、背後に回りつつ掌底を魔理沙の後頭部に決めた。

よろめいた魔理沙は自分が倒れるのを踏み止まり、左ジャブ、左フック、右ストレート、左ボディブロー、右アッパー、と仕掛けるが全ていなされる。

最後のアッパーをしゃがんで避けたアダムは無防備な魔理沙の腹へと裏拳を決めた。

「いてて…… やっぱり格闘なんてやった事無いからなあ……。」

「力が入り過ぎだ。常に力を抜いた状態で攻撃の瞬間にのみ力を入れるんだ。」

「弾幕みたいにごり押しは効かないんだな。」

すると突然、アダムが動いたかと思うと頭を押さえた。

「ぬっ?」

「アダム? どうしたの?」

「一体何だ?」

アダムは僅かだが苦痛に顔を歪ませていた。

霊夢はアダムが怒鳴り散らすのを見たことがあり、その時は恐怖すら感じ、この様にアダムの表情が引き攣ると怒り出すのではないかと考えてしまう。

一方、アダムの脳内は頭痛の様な幻痛と超音波の様な幻聴がよぎっていた。

しかし、それは大した程でも無くすぐに収まり、いつもの無表情な顔に戻った。

「何だこれは？……」

『……』

アダムは何か声の様な物を聞き取った気がしたが、音が小さいのか離れているのか良く聞き取れなかった。

ただ何か意志の様な物を感じていた。

無意識にアダムは声のする方向を向いていた。

「…… 何かが呼んでいる……」

アダムはその方角へと歩き始めた。

「ちよ、ちよつと。」

「待ってくれよ。」

リヨウは慧音と無縁塚に来ていた。

「これがコーヒー豆の木なのか？」

「そう。豆とは言われているが実際は豆じゃないからな。実の形が似ているだけだ。最近エメラルドマウンテン以外にもブラジルやコロンビアとかの色々な品種が見つかっている。」

「それで、豆が足りなくなつたから取りに来たんだらう？」

「ああ。それとこの前は俺が一番好きなキリマンジャロって奴が見つかってな、良いブレンドが出来そうだ。」

「と言っても私にはどれがどの品種なのかサツパリ見当も付かないんだが……」

「そこはプロに任せろ。素人はそこで指を咥えて見ていれば良いさ。」

わざとらしく言ったりリヨウは迷い無くコーヒー豆を採り始めた。
歌を歌いながら。

俺を引き離す事なんて出来るものか
例え百人もの男が止めようとしても

アフリカに降る雨を讃えよう

新しい何かを始めるためには、まだ時間が掛かりそうだ

「相変わらずだな。」

「キリマンジャロコーヒー見つけたからな。アフリカを讃える曲さ。
これで酸味と苦みを抑え、香りとコクを伸ばしたブレンドが完成する
ぜ。」

そう言っている内にあつという間に収穫が終わった。

「早いな。」

「まあな、トランセンデンド・マんだからな。」

「それにしてもこの無縁塚にコーヒーの木が生えているとは聞いた
が、これ程生えているとは凄いな。」

「無縁塚よりもどちらかというところと埼玉寄りだがな。知り合いの河童達
が植えたり管理したりするのを手伝って貰っているぜ。」

「河童と言うと玄武の沢に住む河童達か。あいつらは人間とは仲が良
いからな……というか埼玉って何だ？」

「物の例えだ。それと慧音、以前コーヒーの木を移植する為に穴を
掘った事があるんだが、その時に金やら何やら高価な金属が出て来た
んだが……」

「確か無縁塚の間欠泉は旧地獄や地底の熱による物だが、それと同時に
に地底の怨霊が時間を掛けてそういった金属に変化し、やがて地上に
現れるんだ。」

「成程、以前お前がバチが当たるとか言ってたのはそれか。」

その時だった。

地面が揺れ動いた気がした。

「地震か？」

「リヨウ、あれを見ろ。」

リヨウが慧音の視線を辿って見たのは地表から大量に溢れ出す間

欠泉だった。

「ここは無縁塚とは近い距離にあるが間欠泉までは噴き出さない筈。」

2人が見る限り間欠泉の数は数十程、高さは大体5m程。

「これじゃあ折角のコーヒーが流されてオシヤカだぜ。」

リヨウの思惑を余所に突然間欠泉が止んだ。

突然の出来事に呆然とする2人だったが、

「なありヨウ、あれは何だ？」

すぐに慧音が沈黙を破った。

慧音が指差したのは空中に漂う半透明の球体だった。

球体は1つだけでなく大量に存在し、どれも意志を持ち、パニック状態の様に暴れ回っている。

「こいつら何かに驚いているのか？」

「多分怨霊か？何か助けを求めているようにも見えるな。」

すると、大量の球体が突然動き出したかと思うと全ての球体が同じ方向へと飛んで行った。

「追うぞ、リヨウ。」

「ああ。」

リヨウは背中から銃を取り出し、構えながら慧音と共に球体達の後を追った。

58 呼ぶ者

黒い男は長い階段を上ると、見張りをしている半人半霊の庭師にも気付かれずに門を突破した。

そこには他に妖怪1人、幽霊1人、式神2人が居るが、その気配に気付く者は居ない。

黒い男は1本の巨大な桜の大木の前に立った。

しかし、何もする気配が無い。

地底では2人の“死体だった者”が地底にある旧都を走破していた。

旧都には地上で忌み嫌われた妖怪達が数多く住んでいるが誰1人としてその存在に気付いていない。

旧都には以前リヨウと戦って敗れた伊吹萃香の姿もあつた。

「今日も暇だなく。久しぶりオークの奴とでも会いたい気分だなあ。その時はもう一度勝負をして勝ってやる。」

彼女は仲間を助けてもらった春雪異変のあの日以来一度もリヨウ（萃香はリヨウの言った偽名を信じ、名前をオークと思っている。）に会っていない。

「で、そのオークって奴強いんだってね。私も戦ってみたいな。」

そう言ったのは萃香の有人である星熊勇儀だ。

勇儀はロングの金髪に体操着の様な上着と足首まで届く女子学生

服風の長いスカート、額から生える1本の赤い角が特徴的な長身の女性、の姿をした鬼だ。

「人間なのに少なくとも力は私以上に強いしスピードも凄いいし、私の能力を使ってもまるで勝てなかったし、でも顔を見せてくれないんだよね。」

「へえ、人間がそんな力を持っているとはね。顔を見せてくれないのはどうしてなんだ?」

「さあ、でも良い奴だよ。仲間達を誰にも気付かれず幻想入りさせてくれたからね。どうやったかは分からないけど。」

談笑する2人を余所に2人の死体だった者は地底と地上を繋ぐ巨大な穴に辿り付き、岩の間を足場に蹴って上り始めた。

2体の死体だった者はやがて地上に出ると何処かへ向かい出した。

3人のトランセンデンド・マン、2人の巫女、1人の魔法使い、1人の半人半妖は地下に通ずる巨大な穴の前で鉢合わせした。

「リョウ、アダム、君達も気付いたのか?」

「俺は慧音とこの変なボールみたいな奴らを追っていたらここに辿り着いたんだが、何かあるのか?」

「……………」

「アダムが変な事を呟きながら何処かへ行っていると思って付いて来たらここに来たわ。」

「私たちの呼びかけに何も反応しないんだ。」

カイルの質問に対し、リヨウは答えたが、アダムは一言も言わなかった代わりに霊夢と魔理沙が答えた。

「……呼んでいる。」

突然アダムはそう言うとともに巨大な穴の中へと飛び下りた。

「アダムっ?!」

「それじゃ俺達も行くぞ。」

驚く霊夢を余所にリヨウがアダムを追う様に飛び下りた。

「霊夢、早く行くぞ。」

「え、ええ。」

霊夢も魔理沙に言われて共に穴へと飛び込む。

「私も行くか。」

慧音も続いて飛び込み、残るはカイルと早苗になった。

「カイルさん達って確か空を飛べないんじゃないか?」

「確かに飛べないが、一応俯せの状態で飛び下りれば空気抵抗で時速200kmぐらいの一定の速度に安定するから、それ位なら僕達は大丈夫だ。僕はもつと安全的に行く事を想定していたが、まあ良いか。さて、行くか。」

全力疾走が音速、つまり秒速340mを超えるトランセンデント・マンにとつて時速200km、つまり秒速55m程とは軽い程度なのだ。

「あつ、はい。」

残る2人も穴へと飛び込んだ。

カイルが俯せの体勢のまま飛び込んでから数分が経過した。

「凄く深いですね。一体どれ程続いているんでしょう。」

「もうそろそろだと思っよ。」

ドゴーン！

下から何かが固い地面に勢い良く落下した音が聞こえた。

ドゴーン！

十数秒経つともう一度同じ音がした。

するとカイルの目に自分へ向かって勢い良く迫る地面が映った。

俯せの体勢から足から着地する体勢に変え、残りの距離を確かめる。

カイルの足の裏が地面に着いた瞬間、膝で上手く衝撃を吸収するがそれでも、ドゴーン！という音は鳴った。

間も無く早苗は飛行能力を利用して空中で減速し、安全な速度で着地する。

「アダム達は？」

カイルがそう尋ねたのは見渡してもアダムと霊夢と魔理沙の姿が無いからだ。

「霊夢と魔理沙が言うにはアダムが姿を消したそうだ。その2人もアダムを探す為に勝手に行ってしまったよ。」

「あいつら通信機持って来てねえみたいだから場所は分からないんだ。分かるか？」

慧音から答えを聞き、リヨウに言われたカイルは目を瞑った。

「……強力なエネルギーオンを持つ者が多いな……アダムは最も奥にある4つのエネルギーオン源、恐らくトランセンデンド・マン、に向かっているみたいだ。こっちだ。」

カイルが先行し、他の3人がそれについて行く。

「それにしても綺麗な街並みですね。幻想郷にこんな所があるなんて。」

早苗の言う通り、まるで北アフリカや中東地域の乾燥地域の日干し

レンガ建築群の様な景色だった。

「確かここは元々地獄で地上の者達に忌み嫌われた妖怪が住んでいると聞いた事があるぞ。」

「地獄って事はそれじゃあ、俺は嘘つきだ、って言ったら舌抜かれるのか?」

「それは答えが無いだろ。」

慧音が言った事に対してリョウが言ったジョークと慧音のストレートな突っ込みは場の空気を和ませた。

突然、一行の行く手を遮る様に2人の人影が前に立ちはだかった。その内の一人を見た慧音以外の全員は何とも言えない様な表情をした。

(……………ダセえ……………)

(……………幻想郷は昔の流行までも幻想入りするのか?)

(……………何か怖いです……………)

上から順にリョウ、カイル、早苗の思考である。

何故ならその女性は金髪に体操着の様な上着、女子学生服のスカートを異様に長くした、いわゆる外の世界の死語で言う「ヤンキー」だったからだ。

更に長身と額の角が威圧感を増している。

そして、リョウはもう1人の背の低い方少女の姿を確認すると一瞬ビクツとした。

リョウは彼女が伊吹萃香である事を知っている。

(萃香こんな所に居たのかよ。まあ俺の素顔と名前は知らないから大丈夫だろうかな。)

「あんた達よそ者だろ?」

「そうだ。」

長身の女性が前に出て尋ねたのに対し、リョウが皆を代表して答える。

「この先の更にも奥に行くつもりかい?」

「そうだ。」

「私は星熊勇儀、こっちは伊吹萃香。私達は鬼であり、山の四天王でも

ある。私と勝負して勝てばこの先を通らせてやろう。」

「俺は柏リヨウ。それじゃあ早速やらせて貰うぜ。」

片方の拳を握り、もう片方の手でそれを胸の前で包む。

「臨む所だ、と言いたい所だがお前さんは人間だろう？折角ならばハ
ンデをやろう。」

女性は片手に持っている大きな盃をリヨウ達に見せる様に示した。
盃には透明な液体が8割程注がれている。

「この盃に入っている酒を一滴でもこぼせば私の負けで良い。」

「それは随分と気前が良いな。だが……」

次の瞬間、リヨウの姿は勇儀の目の前にあり、リヨウの突き出さ
れている拳は勇儀の片手が受け止めている。

衝撃でこぼれそうになった盃をもう片手で動かし、何とか受け止
める。

「……本気でやったって良いんだぜ。」

「……そうしよう。」

勇儀が盃をフリースビーの様に投げ飛ばすと萃香がそれを受け
取った。

「本気でやるつもりだね。これ飲んで良いかい？」

「それじゃあそっちのヒヨウタンも飲ませてくれよ。」

「分かった。それとそういやリヨウって奴の声って何だかオークって
知り合いの声に似てるな。」

リヨウは一瞬動揺したが、それが誰かに知られる事は無かった。

「……そうか？まあ良い、さっさと終わらせたい所だ。」

「それはこっちの台詞だよ。」

次の瞬間、リヨウの右拳と勇儀の右拳が衝突する音が辺り一面に広
がった。

楽しそうに戦う2人とそれを楽しそうに観戦する1人。

一方、完全に場の空気となっているカイル達は、

「あの2人は完全にリヨウに気を取られている。迂回して別のルート
からアダム達と合流しよう。」

「カイルさん何と言うか……容赦無いですね……」

「お前はもつと優しい奴だと思つてたが……。」

早苗と慧音が呆れ気味に苦笑して言う。

「これは僕の直感だけど、早く行かないと取り返しのつかない事になると思うんだ。4つのエネルギー源の内3つは「エクストラ」の中でも精鋭と言える位と同等、1つはそれ以上のエネルギー量を保有しているみたいだ。」

「エクストラ」とはトランセンデンド・マンの一種、もしくはその延直線上のエネルギーオンを操る者達を示す言葉である。

エクストラとなる条件としては、TM専用武器無しで「自己強化」と「自己加速」と「自己防御」と「神経伝達加速」以外のエネルギー変換が可能、という事だ。

例えば走行や身体強靱化等は元々から人間の機能として備わっている性能は普通のトランセンデンド・マンでもそれらを強化出来るが、人間の機能として備わっていない機能、例えば飛行やエネルギー弾発射、そういったことが可能な者達がエクストラである。

一般にエクストラはエネルギー保有量が多ければ多い程なりやすい傾向が高い。

また、エクストラには能力に関する二つ名があり、リヨウの「灼熱」やカイルの「バトルコンピューター」（「サテライト」とも呼ばれる）がその一例だ。

カイルの発言はデータとして以前知ったエクストラの平均エネルギー値を比較したものである。

「そうなんですか？それじゃあ早く行った方が良いんじゃないですか？」

「リヨウの奴には悪いかも知れんがここは急がなければな。アダムもおかしかったからな。」

カイル達はリヨウ達に気付かれる事無くその場から去り、別ルートへと行った。

「アダムー！」

「何処だよー！返事しろよー！」

霊夢と魔理沙の呼びかけに応じる声は無い。

すると、霊夢はある“者”を見つけた。

知り合いの女性が1人、いや1柱倒れていた。

「貴方確か早苗の所の神じゃない。」

しかし、八坂神奈子から返事は無かった。

「気絶しているのかしら？でも何故？」

「霊夢、こつちを見ろ！」

魔理沙に促された方向を見ると誰かが2人同じく身動きせずに倒れていた。

「こいつらも気絶しているみたいだな。一体何が……」

「アダムー！」

霊夢の掛け声が魔理沙の思考を遮ると同時に、魔理沙は後ろを振り向くと親しい少年の姿を認めた。

「お前どうしたんだよ、心配したんだぞー！」

2人が駆け寄るが、2人は1mも進まずに何かに行く手を遮られた。

2人の前方から衝撃波が吹き付け、後方へ吹き飛ばしたのだ。

衝撃波の威力は大した事は無く、綺麗に着地した2人だが、突然の地鳴りが襲ったかと思うと2人はまたしても吹き飛ばされた。

地面に倒れ、起き上がった2人が見たのは死んだ筈の敵だった。

衝撃波を放ったのはレックス、地鳴りを起こしたのはサムである。

そしてもう1人誰か立っている。

その姿は、

「……トレバー？」

目の前で死んだのを確かに見た筈のトレバーだった。

アダムは地底の一番奥に居た黒いローブの男の姿を視界に収めていた。

「僕を呼んだのはお前か？」

答えは返って来なかったが、代わりに、

【アンダーソン1号 身体状態：正常 精神状態：許容範囲内 制御チップ：干渉不可状態 トランセンダー循環器：正常……】

ローブの男はアダムをずっと見ていた。

正確にはアダムの“首”を見ていた。

アダムは急に首の後ろが痺れるのを感じた。

痺れは最初は多少の違和感があるものの正常に体を動かせる程度だったが、すっかり体が動けない程に強力になっていった。

突然、アダムの痙攣していた体が元に戻ったかと思うともはや彼はアダムでは無かった。

いや、本来のアダムに戻った、と言えば間違いは無いのだが。

『第2段階計画を邪魔する者を排除せよ。』

アダムは後ろを振り向いた。

そして敵を発見した。

彼が最も信用している人物だ。

59 届かない声

カイル達3人はアダムを視界に捉えた。

離れた所では霊夢と魔理沙が身構え、神奈子と他2人の少女が気絶しており、サムとレックスとトレバーが、いや、そしてアダムが霊夢達を囲んでいる。

「あの倒れているのって神奈子様じゃないですか！あれってトレバーさんじゃないですか？」

「アダムもまるで霊夢達に敵対している様に見えるぞ。」

3人は物陰に隠れ、早苗と慧音はひそひそ声で喋ったつもりだったが、霊夢達を囲む4人が一齐に同じ方向を振り向いた。

（そんな、気付かれた?!）

カイルはそう思うと目を瞑った。

中心に霊夢と魔理沙、それを囲むサム、レックス、トレバー、アダム……

突然、カイルは誰も居ない筈の場所からエネルギーが放出されたのを感じた。

放出されたエネルギーは4人へと真っ直ぐに届いている。

（通信か。では発信地点は……）

神経を研ぎ澄まし、エネルギーの放たれる正確な座標を見出した。

（そこだ！）

アダムの後方1mに奴は居た。

カイルは直感を頼りに銃を目標に定め、引き金を引く。

銃弾は“何か”に防がれた。

“何か”はカイルに接近した。

次の瞬間、カイルの両腕が“何か”を防いだ。

しかし、“何か”はカイルの顔面に衝撃を与え、後方に吹き飛ばし岩壁に叩きつけた。

「……トレバー、一体何が……」

次の瞬間、早苗が突如発生した轟音に吹き飛ばされ、慧音が突如吹き付けた突風に吹き飛ばされた。

そうしてカイル達3人はトレバー達3人に囲まれた。

「トレバーさん一体どうしたんでしょ……」

「少なくとも私達の味方をしてくれそうでは無いな。」

「しかも以前より実力を増している。応援を……」

カイルはポケットから通信機を取り出し、「応援を呼ぼう」と言い終わる寸前、電光が走った。

電光はカイルが取り出した通信機に命中し、通信機は爆発した。

「……ここからでは地上にテレパシーは通じない……」

奥を見ると漆黒のローブを着ている男がこちらに手を向けていた。

ローブの男は後ろを振り向くと更に奥へと行き、姿を消した。

一方霊夢と魔理沙は、

「アダム、止めて！」

「何やっているんだよアダム！私達は仲間じゃないか！」

銃を自分達に向けて乱射するアダムへと説得を試みていた。

しかしアダムは銃を霊夢達へ撃ち続ける。

霊夢は10m以下の近距離での戦闘はまだ慣れていないし、魔理沙に至っては霊夢以下だ。

だからこの距離で発射される音速の5倍を誇る銃弾を躲す事は2人にとって1発だけでも苦勞する。

その為避けようとしてもどこかしら銃弾がヒットする始末である。

霊夢達も弾幕で応戦するが、近距離戦に慣れているアダムにとつては大量だが音速にも満たない弾幕を立て続けに躲す事など容易かつた。

アダムが銃をしまい接近する。

魔理沙はアダムの連続回し蹴りを如何にか避けるが、不意に足元へ衝撃を感じた瞬間地面に倒れた。

魔理沙を下段回し蹴りで転ばしたアダムは更に踵落としを決め、今度は霊夢へと接近する。

次々と繰り出されるジャブを胸の前に腕を掲げ防ぐ霊夢だが、突然頬に強い衝撃を感じた。

霊夢の顔面にフックを決め、倒れた2人へと銃弾を浴びせる。

倒れている2人は慌てて起き上がって避けようとするが数発喰らう。

ダメージを受けながらも距離を取り、得意な遠距離攻撃を仕掛けるがアダムはたちまち距離を詰め、2人は得意なポジションに立てない。

霊夢が札を、魔理沙が八卦炉を取り出し、魔理沙が両手に八卦炉を掲げ、アダムへと大口徑低威力のレーザーを大量に放った。

しかし、どうという事無いかの様に避けるアダムだったが、アダムは霊夢が自分へとずっと開いた手を向けている事に気付いた。

何時の間にかアダムの周囲を大量の札が囲んでいた。

霊夢が広げていた手をグツ、と握ると札が全てアダムへ向かって飛んで行った。

アダムはナイフを手にした。

前方へ身を投げ出すと迫り来る札をナイフで一閃し、そこに出来た僅かな隙間を潜って札のドームから抜け出した。

後方では札同士がぶつかり合い爆発した。

魔理沙は一瞬だけその爆発に気を取られていたが、その一瞬にアダムは自分の目の前1mにまで接近していた。

アダムは両足で魔理沙の首を挟み、水平蹴りを放つ様に体を回転させ、魔理沙を投げ飛ばした。

投げる反動で今度は霊夢へと接近する。

霊夢はアダムから繰り出される連続蹴りを躲し、一瞬の隙を狙ってお祓い棒を突き出した。

しかし、霊夢はお祓い棒がアダムへ届く前にアダムのストレートを喰らい、吹き飛ばされた。

「お願いだからやめて…… 貴方も望んでない筈よ……。」

次の瞬間、アダムの容赦無い蹴りが霊夢を襲った。

リヨウと勇儀の連続攻撃同士がぶつかり合い、互いを打ち消し合う。

1発ごとに衝撃波が発生し、周囲に轟音を響かせる。

リヨウのボディブローが勇儀の腹を捉えた。

続けて肘を振り上げる。

リヨウからの肘打ちを片手で受け止め、がら空きの腹へもう片方の手でストレートを繰り出す。

勇儀からのパンチを腕で受け止め、上段回し蹴りを繰り出す。

回し蹴りをガードせず首で受け止めた勇儀はリヨウの足を掴み、地面へ叩きつける。

倒れたリヨウへ更に拳を叩きつけようとする勇儀だが、リヨウの下段蹴りが先に決まり、バランスを崩した。

そのままリヨウの全体重を込めたタツクルが決まり、勇儀は後ろの壁に叩きつけられた。

勇儀は起き上がるとスペルカードを唱えた。

「鬼符「怪力乱神」！」

大型の光弾が出現すると、たちまち大量の小粒弾に分解され、リヨウへと向かう。

リヨウは反射的に銃を手にとると銃から1秒に100発のペースで銃弾を吐き出し、向かって来る弾幕をかき消す。

銃はリヨウの思念波を受け取ると今度は1秒に4発という遅いが高威力の銃弾を放ち始めた。

勇儀は距離を取り、スペルカードを唱える。

「力業「大江山嵐」！」

発射された大量の大玉は速さこそ無いが威力は格別高く、銃弾を巻

き込みながらリヨウへと襲い掛かる。

リヨウは銃の連射速度を1秒に100発に変更し、前進しながら次々と弾幕を避ける。

体を捻り、同時に引き金を引く。

勇儀も銃弾を躲し、後ろへと退く。

しかし、勇儀の弾幕は高威力高連射だが低速な為リヨウには簡単に避けられるが、リヨウの銃弾は低威力高連射だが高速な為勇儀は避けるのに苦労する。

結果2人の距離は縮まり、リヨウの飛び蹴りが勇儀の中段に炸裂した。

吹き飛ばされた勇儀は着地と同時に地面を蹴り、リヨウへと突撃しながら拳を放つ。

リヨウの上段を狙った駆け込みストレートは、リヨウが体を後ろに逸らした事で不発に終わった。

リヨウはその体勢のまま地面を蹴り、反動で体を回転させサマーソルトキックを決めた。

勇儀は吹き飛ばされたが綺麗に地面に着地し、リヨウは体を1回転させ終えて着地する。

「強いなあんだ。少なくとも私はこれ程の実力の奴と戦った事は無いぞ。」

勇儀が感嘆を漏らす。

「そっちこそ、あれだけ攻撃を喰らって全然平気みたいじゃねえか。」

リヨウも驚いた様な声で言う。

「凄いなあ、力では私以上の勇儀を押ししているなんて。」

萃香も驚きの声を上げる。

「どうだお前ら、これが俺の実力……」

リヨウはカイル達に言ったつもりだが、そのカイル達は姿を消していた。

「……カイルの奴無視しやがって。アイツの事だから何か理由があるんだろうが…… まあ良い、さっさと続けようぜ！」

「臨む所さー！」

幽々子達の居る白玉楼では穏やかな時が流れていた。

「ついこの前までは命のやりとりをしていたというのに今は何もやる事無くて暇ね。」

「幽々子、貴方は幽霊だから命なんて関係無いでしょ。でも私はまだ何か気に掛かる事があるのだけど……………」

「考え過ぎよ紫。貴方はもつと気楽に生きた方が良いわよ。何か起らないかしら。例えば私が悪者に襲われてそれを素敵な人が早撃ちで助けてくれるの。そのあと私とその人は荒野に沈む夕日を見ながら2人きりで……………」

「早撃ちとか荒野って西部劇じゃないんだから……………しかも安っぽいストーリーね……………少なくとも死体が消えた事とあのローブの男に関してはまだ腑に落ちないわ。貴方はもう少し物事を深く考える癖を付けると良いと思うわ。」

白玉楼の縁側ではそんな会話が繰り返り広げられていた。

そして白玉楼の下界に通じる階段の一番上に立っている妖夢は下から上って来る人影を察知していた。

(…… 凄い速さでここに来る…… 一体?)

そして上り来る姿がはつきりと見え出した。

2人共迷彩柄の軍服に身を包んでいるが武器を持っていない。

胸にはEMOの文字だ。

(敵?)

妖夢が反射的に2本の刀を持つ。

すると2人の内片方の金髪の男が妖夢へと手を向けた。

その掌から何かが放出された、様に妖夢には見えた。

何かが妖夢へ向かってくる前にもう片方の黒髪の男が妖夢の前に

まで距離を縮め、片腕を振り出している最中だった。

反射的に刀を目の前に翳す妖夢。

ガキン!

黒髪の男の腕と妖夢の刀が衝突し合った音だ。

男の腕は鋭い刀に触れても切られず、それどころか妖夢を押ししていた。

1歩引いて地面を蹴り、勢い良く刀を突き出す。

男が横へと体を動かし、避ける。

その瞬間、妖夢は何か引つ張られる感覚を覚えた。

(あの時の!)

金髪の男が最初に妖夢へ向けた掌からはエネルギーが放たれ、そのエネルギーは当たった対象物へ力学エネルギーを与えたのだ。

妖夢は前方へと身を投げ出そうとしており、衝突したエネルギーは発射方向に対して後ろ、つまり妖夢に対して前方向に加速させる為、結果前に跳び過ぎた妖夢は反対側へと吹き飛ばされた。

「うわああああ!!!」

妖夢から間抜けな悲鳴が聞こえてくるが男達は気にも留めない。

2人の男は難無く門と見張りを突破した。

妖夢の間抜けた声が外から聞こえた2人はその方向を見る。

「妖夢？一体どうしたのかしら？」

「藍、橙、出て来なさい。」

幽々子の素朴な疑問に対して、紫は真剣な顔つきで部下を呼ぶと何処からか藍と橙が現れた。

紫は立ち上がると幽々子も釣られる様にして立ち上がった。

「何が起こったというの？」

「分からない。でも不吉な予感がするわ。」

その時だった。

突如後ろにある桜の大木が輝き始めたと思うと何かを吸収し始めた。

「西行妖が！まさか、勝手に春を吸い取っている?！」

「違うわ。吸い取っているのは……恐らくエネルギーそのものね。」

「でも何故……」

「危ないっ！伏せて下さい！」

不意に藍が叫ぶと他の3人はそれに従って伏せた。

突如壁に細いが強い剣で斬った様な斬撃線が現れたかと思うと白玉楼が崩れ出した。

慌てて外に出た紫達は埋まってしまう事から逃れられたが、

「…………… 藍、橙、お客さんが来たわ。思い切り歓迎してあげなさい……………」

外に出て確認した2人の男の胸に書かれたEMOの文字を見るなり顔を顰めた。

男達の内金髪の男は地面に手を向け、もう片方の黒髪の男は腕を居合斬りの様に体の後ろに回した。

金髪の男が向けた地面から突然石畳が碎け剥がれたと思うと、その破片は紫達へ一直線に向かって行った。

腕を目の前に掲げて破片を防ごうとする紫達だったが、黒髪の男が後ろに回した腕を勢い良く前に薙いだ。

紫は黒髪の男が薙いだ指先からエネルギーが放出されている事に気付き、

「かがんで！」

皆へ警告すると同時にしゃがむ。

他の皆もエネルギーを躲す事は出来たが、

「…………… うそ……………」

細い桜の若木が数本切り落ちていた。

「あの黒髪の男は切断、金髪の男は念動力ね。」

幽々子が西行妖を見ると、人の形をした物があつた。

それは手の形をした物を西行妖に当てており、まるで西行妖を操っている様に見える。

「あれってあの時のローブの男から変化した奴じゃない？」

「いや、そもそも人じゃないわ。どうやら私達は勘違いしていたみたいね。」

紫は呆気無く幽々子の考えを否定した。

「どういう事？」

「あの男、いや、“あれ”は……………」

紫は納得したかの様に言った。

「エネルギーよ。ローブの男はあの時変身に見せ掛けてこれを置いて逃げたのよ。」

60 見えない戦い

「どういう事？ エネリオンってエネルギーの事じゃないの？」

「そうよ、だからあの男はエネリオンで構成されているって事。リヨウから聞いたけど、トレバーという男が死に際にエネリオンに関する事を言っていたとか、恐らくこの事でしょうね。」

「でもどうやってこんな意志がある様に動いている訳？」

「それは分からないけど……。」

突然2人の男が地面を蹴ったかと思うと、2人は猛烈なスピードで紫達との距離を0にした。

金髪の男のボディブローが紫の腹に、黒髪の男の腕が幽々子の体を裂いた。

幽々子は亡霊であるが為体が斬り裂かれても元の形に戻ったが、痛みが無いわけではない。

藍と橙が離れて弾幕を放とうとするが、それよりも早く金髪の男が放った2発のエネリオン塊が放たれるのが早かった。

1発は藍に、1発は橙に、衝突したエネリオンは横向きの運動エネルギーを与えた。

藍は左に、橙は右に、結果2人はぶつかり合った。

そこへ黒髪の男が手を突き出す。

2人は慌てて避けたが、次に金髪の男が放ったエネリオン弾を躲す事は出来なかった。

2人は地面に叩きつけられ、暫く動けなかった。

「幽曲「リポジトリ・オブ・ヒロカワ ―神霊―！」」

「境符「四重結界」！」

スペルカードを放つ幽々子と紫。

それに対して、地面に手を着けた金髪の男と両手を体の前に広げた黒髪の男。

地面の石畳が剥がれて飛び、弾幕とぶつかり合い、細かい破片が紫達に襲い掛かる。

ピンポイントで放たれるエネリオン塊は弾幕を貫通し、後方の紫達

にも届く。

後方へ下がりがりながら弾幕を撃つ2人だが、それを補う様に2人が距離を詰める。

黒髪の男が腕を薙ぐと指先から放たれたエネルギーオンが弾幕を斬り裂きながら2人を襲う。

エネルギーオンの斬撃をしゃがんで避けた紫達だが、その後自分達に向けて放たれたエネルギーオンを防ぐ事は出来なかった。

紫達は前に投げ出される感覚を覚えると同時に2人の男が目の前に迫っていたのに気付いた。

次の瞬間、2人は蹴り飛ばされた。

「幽々子様！魂魄「幽明求聞持聡明の法」！」

丁度突き落とされて上り終えた妖夢がスペルカードを唱え、半霊が妖夢の姿を形どった。

両方とも黒髪の男へと次々と斬り掛かるが、攻撃は全て黒髪の男の腕に阻まれた。

「藍、橙、貴方達は妖夢の援護をして……さてと、私達は……。」

紫と幽々子は金髪の男へ弾幕を放つが、弾幕は必ず男に触れる事無く消し去った。

金髪の男が掌を向けると紫と幽々子は後方へ吹き飛ばされた。

(粒で無くレーザーならどうかしら。)「結界「光と闇の網目」！」

「華霊「バタフライディールジョン」！」

紫の放った大量のレーザーとその隙間を埋める様にして幽々子の蝶型の弾幕が放たれた。

金髪の男は怯むどころか更に距離を詰めようと地面を蹴った。

蝶は見えない壁に阻まれて消滅し、レーザーはその軌道を変えられた。

男が手を向けると大量のエネルギーオン弾が発射された。

慌てて避けようとする2人だが高速故に殆ど避けられなかった。

1発1発は小さいがその分エネルギー密度が高い為、銃弾の様に見える的なダメージを受けた2人は暫く怯んだ。

黒い男はその様子を気にも留めずただ西行妖の幹に手を付けてい

るだけである。
幻想郷中のエネリオンが西行妖に集まっている。

次々と繰り出される拳の嵐を腕で阻んでいくカイル。

しかし、そのスピードに翻弄され隙を突かれた時は何十発とパンチを浴びせられ、ストレートで吹き飛ばされる。

その勢いを利用して距離を離れたカイルは銃の引き金を引く。

音速の10倍を誇る銃弾が1秒に10発のペースで放たれるが、1発も当たらない。

トレバーはその速さで銃弾を避けながら距離をあとという間に詰め、カイルへと攻撃を大量に打ち込む。

トレバーのフックをしゃがんで避けたカイルはそのまま下段回し蹴りを放つ。

しかし、カイルの足はトレバーに踏まれ動かせなかった。

そしてトレバーの蹴り上げがカイルの頭に炸裂し、上に吹き飛んだカイルを跳び上がって踵落として地面に叩きつける。

「カイルさんー」

その様子を見た早苗はカイルを援護しようとして早苗は手をトレバーへ向けた。

しかし、何も起こらなかった。

突然前方から吹き付けた衝撃波に早苗は吹き飛ばされた。

早苗が起き上がるとレックスが手を自分へ向けていた。

更に早苗に向かってレックスの放った衝撃波が吹き荒れる。自らも風を吹かせて対抗しようとする早苗だが圧倒的な力で押される。

その様子を見たカイルは素早く銃を向けると同時に引き金を引いた。

カイルの1秒間のエネルギー吸収量に相当する銃弾はレックスの頭にクリーンヒットしたが、致命傷には及ばなかった。

次の瞬間カイルの背中にトレバーの後ろ蹴りが炸裂した。

その様子に気を取られた早苗はレックスの衝撃波に跳ね飛ばされた。

「2人共！光符「アマテ……」

押されるカイルと早苗を心配して援護しようとした慧音だが、突如発生した地鳴りに足を刈られた。

バランスを崩した慧音は強い衝撃を受けて怯むと、続けてサムからのナツクルが叩きつけられた。

飛び上がって上空から弾幕を降らす慧音だが、サムが拳を突き出すとかき消される。

サムがアツパーを放つと発生した衝撃波を一方向に集中させ、慧音を上空に吹き飛ばした。

体勢を整えた慧音だがサムの姿が見えない。

次の瞬間、見えないキツクが慧音を吹き飛ばし、岩壁にクレーターを作った。

「不味いな、せめてリョウが来てくれると良いんだが…… 逃げるにしてもこの実力差では無理がある……」

「そんな……」

「危ない！」

早苗が気を取られている最中にレックスが一気に早苗の目の前にまで接近していた。

慧音の警告と同時にカイルがレックスへと駆け込み、飛び蹴りを放つ。

カイルに気付き横を向いたレックスはカイルの連続蹴りを全て躲

し、反撃を掛ける。

レックスの蹴りを避けながら隙を突いて反撃を繰り出すカイルだが当たる気配が無い。

不意にレックスを突風が襲い、レックスはカイルから引き離された。

振り向くと早苗が手を向けていたが、更にトレバーが後ろから早苗に接近していた。

急いで銃をトレバーへ向け、連射する。

銃弾はトレバーの籠手に完全に防がれ、トレバーのパンチは早苗に決まった。

直後、カイルは背中に強い衝撃を覚え、地面に倒れた。

後ろを見るとサムが拳を突き出していた。

慧音がサムへ弾幕を放つが1発も当たらない。

「早苗、僕の心配はしなくて良いから自分の事に集中して。身体能力では向こうが上だが突破口がある筈。」

「はい…………… それにしても不味いですね……………」

「ああ、完全に負けているな…………… リヨウ、早く来てくれ……………」

霊夢の持つお祓い棒は振る度に腕に阻まれる。

アダムの足元に放った横薙ぎは跳び上がったて躲された。

霊夢へとアダムの連続蹴りが決まり、吹き飛ばす。

魔理沙が箒を手にアダムへと叩きつけようとするが全く当たらない

い。

魔理沙が振り下ろした箒はアダムの手に受け止められる。

アダムが箒ごと魔理沙を地面に投げ飛ばす。

2人は距離を取って弾幕を放つ。

アダムはそれを身のこなしで全て避け、難無く接近しながら両手に持った銃を乱射する。

アダムが地面を蹴った。

堅い地面がめくれ、破片や砂埃が宙を舞う。

アダムが軽く跳び上がり、水平蹴りを繰り返すようにして大量の破片を蹴り飛ばした。

更に銃弾を撃ち込み、素早い動作で銃をしまうとナイフを2本持ち、ロープに繋げると投げ飛ばした。

いきなり攻撃のペースが増した事に慌てた2人は避けようとするが、幾つか被弾する。

そして、続けて投げられたナイフを霊夢は避けるが魔理沙は足に突き刺さった。

アダムは両方のナイフに繋がっているロープを横に大きく動かす。

霊夢の体にロープが巻き付き、魔理沙の大腿部に深い傷を作る。

霊夢は更にロープに引つ張られ、魔理沙はその場に倒れる。

アダムの跳び膝蹴りが霊夢の体の中心に決まった。

アダムは更に前進し、倒れた魔理沙を踏み付け、跳び上がる。

跳び上がった先にある岩壁を蹴り、反動で反対側へ跳び、霊夢の頭へ跳び蹴りを決めた。

「…… アダム、どうして……。」

魔理沙はアダムの姿を見るなりある言葉を思い出した。

『力が入り過ぎだ。常に力を抜いた状態で攻撃の瞬間にのみ力を入れるんだ。』

「…… なあ霊夢、お前気付いているか？」

「…… な、何に？」

「あいつ、力が入り過ぎじゃないか？前私に注意した事をあいつ自身が忘れているのか？」

「そういえばそうね……でもアダムの霊力を見る限りでは力が増している様だけど、動きを見る限りでは前よりも劣っている?」

アダムはこちらに向けて青く輝く目を睨み付かせていた。

襲おうと歩み寄っては来るものの、襲おうとする気配が無い。

何かを躊躇っている様に見えた。

「……きつとアダムも私達の知らない所で戦っているんだ。私たちを傷つけない様にしようとしているんだ! 私達も頑張らなきゃ!」
「……戻って来て、アダム……」

「アンダーソン、何故逆らう。」

「僕は幻想郷を守りたい。」

「どうやらお前は間違えているらしいな。」

「何をだ?」

「我々の幻想郷においての目的は結界を破壊しユニバーシウムを採掘する事だ。」

「知っている。社会のエネルギー源として利用したり共和軍の制圧に使うんだろう。そして共和軍を制圧した後には人類を支配する、それがお前達の目的だろう。」

「違う。アンダーソン、お前は選ばれし人間なのだ。幻想郷の妖怪などただの”失敗例”に過ぎん。我々こそが人類を担い、次の世代に継がせる。我々こそが”成功例”なのだ。」

「妖怪が失敗で僕達が成功? どういう意味だ?」

「お前は何故人類に必要な無い過去の遺物に拘ろうとする？」

「本当に感情は人類に無駄な物なのか？僕はそうは思えない。幻想郷は確かに低レベルの科学技術しか持ち合わせていないが、僕は幻想郷に居て良かったと思っっている。」

「それが間違いだ、アンダーソン。感情という不安定で不完全な物では強大な力を付けた人類を制御出来ない。我々は完璧を目指しているのだ。それよりもこのままでは、お前が信頼しお前を信頼する仲間を殺してしまうぞ。お前自身が感情の不安定さを体験する良い機会だろう。」

「……………」

リヨウの拳のラッシュが勇儀の攻撃を巻き込みながら叩き込まれる。

遂にリヨウのアップアが勇儀の顎を捉える。

勇儀は怯まずリヨウへと反撃のストレートを仕掛ける。

リヨウは繰り出される拳の軌道を手で逸らし、カウンターの裏拳を決める。

勇儀はダメージに耐えながらリヨウの脇腹へと回し蹴りを放つ。

勇儀の蹴りはリヨウがしゃがんだ事によって不発に終わり、リヨウの水平蹴りが勇儀を吹き飛ばした。

吹き飛ばされた勇儀は地面を蹴り、反動で距離を詰めながら攻撃の嵐を繰り出す。

左ストレート、右フック、2連蹴り、下段回し蹴り、アッパー、連続パンチ、しかし全て躲される。

リヨウは跳び上がると同時に勇儀の肩に手を乗せ、反対側へ回ると同時に両足蹴りを決める。

「怪輪「地獄の苦輪」！」

勇儀がスペルカードを唱えると大量のリング弾とばら撒き弾が放たれる。

リヨウは銃では無く右手を向けると、掌からエネリオン塊が発射された。

エネリオン塊は迫り来る弾幕を消し去り、勇儀へと向かって行く。

勇儀は咄嗟に回避行動を取るが、エネリオン塊は後ろの壁に当たると爆風と破片が勇儀に降り掛かる。

勇儀は破片が目に入るのを防ぐ為目を瞑り、様子を見る為に少し開けるとリヨウは目の前に居た。

リヨウが殴り掛かると勇儀は拳を掲げて防ぐが後ろにのけ反り、壁に突き当たった。

リヨウは殴り掛かるのを止めずに勇儀へと打撃をひたすら浴びせた。

殴るのを止めないリヨウを見かねた萃香は制止に入った。

「や、止めるよ！やり過ぎだろ！」

そう言われたリヨウはようやく腕を止める。

リヨウは一瞬不満そうな顔をしたが、自分が何を考えているのかを自覚すると右手が震えているのを感じた。

「……悪いな……。」

「……凄いな、人間にこんな奴が居たなんて…… あんたの勝ちで良いよ。」

痛々しい姿の勇儀に謝るリヨウに対して笑って見せる勇儀。

突然、奥から轟音が聞こえた。

「……なあ、勇儀、萃香、初対面でしかもこんなボコボコにしてすまんが、少し俺を手伝ってくれないか？仲間が危ういかもしれんし……。」

リヨウは申し訳なさそうに言うが、

「良いとも。だったら早く行こう。」

「大丈夫さ、少なくとも私達には自信があるんだ。」

勇儀と萃香はあっさりを受け入れてくれた。

「2人共ありがとよ。」

61 二つ名

「お前が幾ら足掻こうがお前にはチップが埋められている。どうせ我々には従うのだ。諦めたらどうだ。」

「嫌だ！俺はお前の言う事など効きたくも無いし、これ以上他人に關わるのも御免だ！何故だ！俺は「あの日」以来から延々と思いつけて来た！俺は悪くないのに何故俺が悪いと決めつけるんだ！悪いのは奴らだ！静かに暮らしたいのに何故静かに暮らせて貰えない！俺が何であろうと俺はお前らの命令を聞く義理など無い！」

「お前は選ばれし者なのだ。人間というのは異常者を嫌うが、未来は我々の時代である事は事実だ。我々と協力すれば思い通りの生活も可能だ。」

「だが俺はそんな特別でも無い奴らに利用され続けた！断る！俺は誰とも関わりたくないと言った筈だ！何故そこまで俺に拘ろうとする！」

「スミス、お前は特別な我々の先行者であり、更に我々よりも特別なのだ。だから人類が進化する為にお前を調べる必要がある。お前は我々の中で唯一戦略兵器に匹敵する能力を持っている。だからこそお前は「破壊神」などという二つ名が付いた。」

「俺が何であろうが俺はモルモットにはならんぞ！」

「チップが埋められていると言った筈だ。それに私の能力も使えば良いし、いざとなればお前が居なくても研究は進められる。」

「あのトレバーとかという男やアダムやマルクというガキの様に？」

「そうだ。」

カイルはトレバーの拳を左右へ交互に払い除け、繰り出されたストリートをしゃがんで避けながら下段回し蹴りを繰り出す。

しかし、蹴りはトレバーの手に受け止められ、カイルは蹴り上げられた。

トレバーが追撃で跳び上がりナツクルを仕掛けるが、カイルは如何にか避け、トレバーへと連続蹴りを放つ。

それでも全て躲されるか籠手にブロックされたが、最後の1発でトレバーの腕を蹴ると反動で距離を取った。

突然、カイルが後ろを向いて腕を体の前に翳したかと思うと強い衝撃がカイルの腕にぶつかった。

次々とカイルが腕を上下左右に動かすとその位置に衝撃を受ける。今度は足元から衝撃が走ったかと思うとカイルは空中へ跳び、銃を構える。

カイルは銃にエネルギーを溜めながら、光学迷彩で姿を隠しており自分に向かって拳を突き出す際のサムを感知した。

カイルの放った銃弾がサムの肩に命中し、サムの放った衝撃波がカイルを後方へ吹き飛ばした。

『……だ。』

カイルからテレパシーでサムの位置情報を受け取った早苗と慧音はその方向へスペルカードを唱えた。

「蛇符「神代大蛇」！」

「始符「エフエメラリテイ137」！」

が、弾幕が何かに当たった手応えは無く、代わりに地面が強く揺れ出した。

揺れにバランスを取られた早苗は続けて発生した衝撃波に吹き飛ばされ、空中へ逃げた慧音は突如上空から吹き付ける突風に地面に叩きつけられた。

その様子を見たカイルは十分にエネルギーを溜めた銃の引き金を引き、そして地面を蹴った。

銃弾は慧音へ追撃を掛けようとしていたレックスの腕にヒットし、カイルは早苗へ追撃を掛けようとしていたサムの前に来ると跳び蹴りをガードした。

しかし、早苗は何時の間にか背後を取っていたトレバーに気付かず、背中に肘打ちを受けると岩壁に叩きつけられた。

サムから距離を取り、トレバーへと銃を向けたカイルは銃弾を連射した。

音速の10倍を誇る銃弾だが全て躲されるか籠手に受け止められるかだった。

慧音がカイルの援護にとトレバーへと弾幕を放とうとするが、突然自分の立つ地面がめくれ上がったかと思うとそのまま上に吹き飛ばされた。

サムは慧音を怯ませた後慧音へ跳び蹴りを仕掛けるが、早苗の放った弾幕に阻止されたが、どうにか躲した。

すると、レックスが腕を振り上げた。

「下から何か来るー」

カイルの声を直接聞いた早苗と慧音は空中へ飛び上がり、すると地面から熱湯が勢い良く吹き出して来た。

3人は慌ててどうにか避けたが、カイルはレックスからの突風で岩壁に叩きつけられ、早苗はサムからの衝撃波で地面へ叩きつけられ、慧音はトレバーからの連続ラッシュを喰らった。

「水も操れるんでしょうか？」

「流体なら何でも制御出来る様だ。「サーファー」と呼ばれる彼だけであの様子では固体までは無理なようだけど……。」

「あのサムっていう人は前みたいにレーザー攻撃しないみたいですけど、どうしてでしょう。」

「高出力を得られる光源が無いからね。でも地面を通す衝撃波は速くて狭いここではかなり厄介だな。彼の二つ名は「ミラー」だけど「波」の性質を持つ物なら何でも操れる。トレバーは…… 実の所僕にも

分らない。トランセンデンド・マンの中でもエクストラは脅しや威嚇等で能力に関する二つ名があるけど、トレバーの「死神」が何を意味するのは僕にも分からない。名前自体は一瞬で相手を殺す、という事による物だけど、どんな原理なのかは誰にも分からないんだ。」

「誰も知らないんですか？」

「彼の性格の事だから内緒にしたかったんだろうけど……。」

レックスが腕を横に振ると3人に向かって大量の水の礫が散弾の様に撒き散らされた。

トレバーの連続ラツシュを次々と左右に払い除け、早苗が背後から弾幕を放つ。

トレバーが弾幕を避け、跳び上がると2人に向かってウォータージェットが勢い良く発射された。

しゃがんで避けた2人、そして水流に斬られた後ろの岩壁。

カイルがレックスへ銃を構え、慧音が弾幕を放つ。

弾幕を難無く躲すレックスだが、カイルが狙いを定め、十分にエネリオンを溜めた銃から銃弾が吐き出される。

銃弾は突如軌道上に出来上がった水の壁に防がれた。

そして、直径2、3mもの水の大玉を作り上げると早苗に向かって飛ばした。

スピードの無い攻撃の為早苗は直撃を避けられたが、水の大玉が地面に衝突すると、爆発する榴弾の様に周囲へと水の礫を勢い良く撒き散らした。

早苗は避け切れず被弾し吹き飛ばされ、離れたカイルと慧音も少なからず被弾した。

サムが慧音へ駆け込むと拳を次々と突き出しては衝撃波を放つ。

「包符「昭和の雨」！」

慧音もスペルカードで応戦するが全く当たらない。

サムが地面を殴り付けると岩の破片が浮き上がった。

そのまま回転水平連続蹴りを繰り返して、破片を慧音へと飛ばす。

避けようとする慧音だが、幾つか被弾し、そのままカイルが駆け込みながらストレートを決めた。

トレバーへと銃弾を放ち牽制するカイルだが、トレバーは確実に距離を縮める。

「トレバーからの連続攻撃を躲し、ストレートを腕で払って横から手刀を繰り出す。」

しかし、トレバーはそれを読んでいたかの様に手刀を掴み、そのまま腕力だけで持ち上げ、岩壁へ投げつけた。

その時、突然レックスが水の壁を作り上げたかと思うと、そこへエネルギー塊が飛んで来た。

エネルギーは水の壁に命中すると水蒸気が発生した。

一瞬で気化され体積を1000倍にされた酸化水素はその体積比に物を言わせ、爆発的に周囲を吹き飛ばす。

その勢いは後ろのレックスまで届き、怯ませた。

「待たせたな！」

エネルギー塊を放ったのはリヨウだった。

「待ったよ。こっちは通信機は壊されテレパシーも地上に通じない状況だったんだから。」

突然、サムが地面を蹴り付け、衝撃がリヨウへと一直線に向かう。すると、リヨウの背後から誰かが現れ、地面を踏み込んだ。

衝撃はその誰かの踏み付けの衝撃によって消滅した。

「私達も来た。勝負の途中で抜け出すなんてずるいじゃないか。」

「僕はどちらかと言えば理論派さ。何が起こっているか分からないから出来る限り早く知る方が良いと思って。」

カイルに文句を言う勇儀と言い訳するカイル。

「でもこれでこちらが幾分頼もしくなりましたね。」

「そっぴやアダムはどうした？」

「もつと奥で霊夢達が戦っている。アダムとトレバーは何故かこちらに敵対しているんだ。しかも相手はそれ以外にも2人居る。」

「他の奴も俺達が倒した奴らだろ？でも何でだ？」

「奥に居る1人が操っているらしい。」

突然、トレバーが6人へと駆け込んで行く。

6方へ散らばる6人だが、トレバーは全員へエネルギー塊を撃ち出

した。

(速い?!)

誰かがそう思う中、完全に躲し切ったのはリヨウとカイルで、勇儀は腕で払い除け、萃香は霧状になって躲したが一部が被弾し、早苗と慧音は躲し損ねて体の末端部分に被弾した。

次の瞬間、早苗と慧音と勇儀が激痛に叫び声を上げた。

「いやああああああ!!!」

エネリオンが被弾した箇所が千切れ、神経を直接削られる様な痛みだった。

掠っただけの萃香も苦しそうな表情を見せている。

「これは……精神に直接作用させて痛みを倍増させているのか。「死神」と呼ばれる所以がやっとな分かったよ。」

カイルは発射されたエネリオンの早苗達の身体を構成するインフォームオンに及ぼす様子を見る事で知った。

「トレバーの奴何でも隠し事をしやがって……。」

62 感情

「俺はレックスをやるぜ。慧音、手伝ってくれ。」

「私達はあのトレバーという男でも相手にするよ。萃香も頼むぞ。」

「じゃあ僕達はサムか。早苗、気を付けて。」

レックスがリヨウに手を向け、同時にリヨウもレックスに手を向ける。

レックスの周辺から熱湯が噴き出してリヨウへ向かって行き、リヨウの掌からエネルギーのビームが発射された。

ウォータージェットとエネルギービームが衝突し合い、膨大な量の水蒸気が発生する。

水蒸気の圧力はウォータージェットとエネルギービームを後方へ吹き飛ばし、2人を怯ませる。

怯んだレックスへ慧音が弾幕を放つが、弾幕は衝撃波に押しつけられ、慧音を吹き飛ばした。

正面からリヨウが突進し、ナツクルを仕掛ける。

リヨウのナツクルは腕に阻まれ、レックスからカウンターの突風で加速されたストレートが放たれる。

レックスのストレートを何とか掴み取り、そのまま離さない。

気付けばリヨウのパンチを防いだ腕も掴まれていた。

急に焼ける様な痛みを感じると、レックスは両腕を引き離そうとするが離れない。

「慧音、俺は構わないからやれ！」

「……分かった。葵符「水戸の光圀」！」

慧音は少し躊躇ったがリヨウの言われる通りリヨウに固定されているレックスに向かってスペルカードを唱える。

レックスは膝蹴りを繰り返して、リヨウから無理矢理抜け出す。

2人共弾幕を躲し、リヨウの強引な作戦は不発に終わる。

それでもリヨウがレックスの腕を掴んだ部分には火傷痕が残っており、幾らかダメージにはなっていた。

「俺の能力とは相性があまり良くないな……せめてあのスピード

を潰せば如何にかなるかも知れんが……。」

カイルと早苗はサムを相手に悩まされていた。

カイルは遠距離からの狙撃支援攻撃を得意とするが、狭い地底では距離が上手く取れない。

早苗は速度を犠牲にした高威力の攻撃を得意とするが、サムのスピードに翻弄される。

カイルの音速の10倍を誇る銃弾や早苗の大量の弾幕を躲し、空気や地面を伝う衝撃波で着実にダメージを与える。

(なら、専門外だけど……。)

カイルは銃を構えながらサムへと接近し、サムもそれに釣られる様にカイルへと突進する。

カイルが引き金を引いて銃弾を連発し、サムが拳を連続して突き出し衝撃波を放つ。

互いに接近するので体感速度が増し、サムから見た銃弾は音速の1.2倍、カイルから見た衝撃波は音速の3倍もの速さになっていた。

互いに己の身体を総動員して躲そうとするが、カイルは避け切ったものの、サムは何発も被弾した。

しかし、銃弾のダメージを耐えるサムは自分の放った衝撃波に念を送る様に視線を送った。

衝撃波がカイルを外すルートから突然カイルへとヒットするルートへ変わった。

体を捻って躲そうとするカイルだが避け切れずに吹き飛ばされる。次の瞬間、サムが後ろを振り向いたと思うと早苗が手を向けていた。

早苗から衝撃波が放たれると同時にサムが手を向ける。

早苗は自分の放った衝撃波によって簡単に弾き飛ばされた。突然、サムは体を大きく横に動かすと脇腹に強い衝撃を受けた。

見るとカイルが銃口を向けており、更に銃口から大量のエネリオン弾が発射されていた。

更に反対側からも早苗の放った弾幕が襲い掛かる。

サムは双方へと地面を叩き、衝撃波を放ち、そして姿を消した。

方向性を与えられた地面を伝う衝撃波は直撃には至らなかつたが2人の動きを抑制し、進行方向へと広がる空気を伝う衝撃波は迫り来る攻撃をかき消した。

『上空に逃げるんだ。』

カイルからの警告を聞いた早苗は言われた通りに上空へ飛び上がり、突如自分の立っていた地面が陥没した。

早苗が上空から弾幕の雨を降らし、後方からカイルから銃弾が襲い掛かる。

すると地面を叩く衝撃が2回鳴った。

『しまった、壁から来る！』

1回目の衝撃で発生した衝撃波が壁の様に地面から吹き上がり、銃弾を防いだ。

2回目の衝撃で早苗が浮遊している横の壁がめくれ上がり、衝撃に早苗は吹き飛ばされた。

突然、カイルは銃をしまい腕を胸の前に掲げた。

見えないが、誰かが殴った手応え。

素早く腕を上下左右に動かしては腕に押される衝撃を感じる。

急にカイルが後方へ跳び上がったと思うと地鳴りが起こり、カイルが立っていた場所が衝撃で吹き荒れた。

「これでは得意な戦況が作れないな…… 太陽光が無いのがせめてもの救いだけど、別の方法を探そうか。」

一方、トレバーは勇儀と萃香を相手にする中で確実に追い詰めていた。

トレバーの左右から繰り出される強い拳の嵐。

それをトレバーは最低限の力と最低限の動きで全てを躲し、2人に「当たらない」というプレッシャーを与える。

今度はトレバーの連続拳撃が左右へと放たれる。

腕を揺らして防御する2人だが数発避け切れずに当たった。

反撃に萃香がストレートを勇儀が上段蹴りを放つが、トレバーは動きを知っているかのように体勢を低くして避ける。

トレバーはそのまま腕で体を支え、両足を伸ばし、両足下段回転蹴

りを2人に決めた。

そのまま立ち上がったトレバーは軽く跳び上がり、バランスを崩した2人に旋風脚を決めた。

互いに反対方向へ吹き飛ばされた2人はスペルカードを唱える。

「光鬼「金剛螺旋」！」

「鬼火「超高密度焔禍術」！」

しかし、トレバーは避ける動作も見せずその場に立っていた“様に見えた”。

左右からの弾幕に被弾したかと思うとトレバーの姿は周囲に拡散するように消えた。

不意に勇儀の目の前にトレバーが現れたかと思うと勇儀にナツクル、跳び蹴りを決め、蹴りの反動で萃香へと接近する。

萃香は霧状になって回避して背後を取り、パンチを繰り出す。

トレバーが振り返って力とエネルギーを込めたパンチを繰り出す。

2人のパンチがぶつかり合った。

萃香は骨が碎ける様な痛みを“感じ”、怯んだ瞬間、トレバーの蹴りが側頭部に炸裂していた。

吹き飛ばされる萃香の背後から勇儀が飛び出したかと思うと連続攻撃を掛ける。

対するトレバーは無表情で攻撃を捌き続け、同時に一瞬の接触時間に合わせて勇儀へとエネルギーを送り込む。

勇儀は自分の攻撃のスピードが落ちている事にふと気付いた。

何時の間にか疲労を“感じ”、力が入らなくなっていた。

トレバーのアッパーが勇儀の顎に炸裂し、背後から跳び蹴りを繰り出す最中の萃香に向かって蹴りを放つ。

トレバーと萃香が接触しようという直前、萃香が霧状に拡散し、同時にトレバーの着地した地面が消えた“様に見えた”。

不意の出来事にトレバーはバランスを崩す。

「私の能力に引っかけたね！今だ！」

「分かってるよ！」

バランスを崩したトレバーに接近する2体の鬼は打撃の嵐を放つ。

それでもトレバーは確実に攻撃を防ぎ、勇儀の踵落としを左腕で掴み、反対側からパンチを仕掛けている最中の萃香へと投げ飛ばす。ぶつかって怯んだ2人へと駆け込みストレートが決まり、エネルギー塊を2発放つ。

慌てて避けようとする2人だが、勇儀は右肩に、萃香は左足に被弾し、それぞれ被弾部分に穴が穿つ様な激痛のあまり倒れ込んだ。

「凄い速さだなあ、私の「密度を操る程度の能力」で地面を拡散させても効かなかったし。」

「幻痛や幻覚も厄介だね…………。」

少年の目の前には何らかの観測装置の様な物がある。

隣にはもう1人の少年。

部屋のガラス窓からこちらを見ている観測機器らしき物を操作している大人達。

少年はそれに手を置いた。

やりたいからでは無い。

少年はガラス越しに見ている中の1人の大人に強制されたのだ。

本当はこんな訳の分からない事をされるよりも自分で勝手に気ままに生きたい。

安全で狭い檻の中よりも危険で広い自然に居たい。

少年はそんな野生動物が無理矢理人間に連れて行かれたのと同じ様な心境だった。

このままではいずれ動物と同じ様に飼い慣らされてしまう。

そんな強い意志が少年の才能を開花させた。

「ほう、凄い数値だ。」

「ですね。後は彼が反抗しなければ文句は無いのですが……。」

「次はマルクだな。」

隣に居た少年が装置に手を置いた。

彼は少年を敵を見る様な目付きで睨むと手に力を込めた。

「凄い、アダムと同等だ。2人共これ程の力があるとは予想外だ。」

少年達と観測者達を阻むガラスは特殊強化されていて防弾・防刃・防音機能があるといっても音波を完全にシャットアウトする事は出来ない。

隣の少年はその言葉が聞こえるなり顔を顰めた。

「2人共この年齢にしてこの数値があるからにはエクストラになる可能性もありますね。」

「惜しいのは、アダムは命令に従わないのと、マルクは感情を爆発させやすい事だ。それに2人の仲も悪い様だしな。」

マルクと言われた少年は隣のアダムと言われた少年を敵意丸出しの目で睨み、地面を蹴った。

この世界に居たくない。

消えたい。

誰も僕に構わないでくれ。

才能なんか欲しくなかった。
命令も欲しくない。

誰かに愛された事など無かった。

常に誰かに利用され、騙され、憎まれ続けてきた。

人が嫌いになった。

逃げたい。

自殺しようとも思った事もあった。

でも逃げられない。

自殺させられない。

操り人形にされた。

気が付いたら何時の間にか異世界に居た。

ある少女と出会った。

彼女は僕を受け入れてくれた。

彼女と居ると幸せだった。

彼女も同じ様に幸せそうだった。

初めて愛されたと感じた。

誰も僕を利用せず、騙さず、憎まれなかった。

その内、僕は何か不安定な感情を感じる様になった。

僕はその感情が何なのかは良く分からないけど、少し分かる部分はある。

彼女を守りたいと思った。

「霊夢!!!」

アダムの目の前には少女が倒れており、自分はそれに向かってナイフを高々と上げている状況だった。

離れた所では別の少女が横たわっている。

信頼していた者に裏切られた様な表情を浮かべた、今にも泣きそうな少女の顔を見ると、手の力が抜け、ナイフを地面へ落とした。

「……戻って来た。」

「……遅いわよ！心配したじゃないの！」

「……遅いじゃないかアダム……アクション漫画の主人公じゃないんだからさ……。」

霊夢はとうとう涙を流し出した。

魔理沙も嬉しそうに笑みを浮かべている。

「ありがとう、霊夢。君が居なかつたら僕は戻れなかつたかも知れない。感情はやはり人類に必要なだ。不安定だからこそ必要なんだ。」

そう言ったアダムは横を振り向く。

霊夢がその視線を辿っても何も見えなかった。

『つまりお前は破滅を選ぶつもりか。』

「破滅なんかじゃない。僕がやるべきだと思った事だ。」

『だがお前にはチップが埋められているし、私の能力もある。』

突然、アダムは頭痛に襲われた。

視界が歪む。

霊夢が何か叫んでいる。

(待てよ、チップ?)

何時しか見た夢を思い出していた。

シンダーから何処かに連れて来られ、首の後ろに何かを埋め込まれた。

アダムは首の後ろに手をやると、つねり始めた。

何かが皮膚を突き破る感触がしたのと同時にそれを指先で掴み取る。

少量ながら血が吹き出し、痛みも感じたが気にはいられない。目の前に出したそれは直径2cm程のコンピューターチップだっ

た。

頭痛はある程度収まったがまだ消えてはいない。

(奴の能力か。)

操られるものか。

強い感情は何かを押し出す感覚を覚えた。

同時に何かが自分の中にも流れて来る様な感覚を覚えた。

幽々子に紫、妖夢に藍に橙、アガレスとガミジン、そして黒い男。

更に桜の大木が見えた気がした。

あれ程巨大な大木は一度だけある場所で見ただ事があった。

(冥界か。)「2人共、立てるか?」

「私は大丈夫よ。」

「何とか……………」

「付いて来てくれ。冥界で何かが起こっている。」

「何かって?」

「良くは分からないが悪い予感がする。」

アダムはそう言いながら走り始め、それを追う2人。

63 感情と理論

ガミジンが腕を薙ぐ毎にその延直線上にある物体が切断され、アガレスが腕を突き出す毎にその方向にある物体が吹き飛ばされる。

幽々子がアガレスの正面から弾幕を放つが、弾幕は見えない力で呆気無く消え去った。

その隙にアガレスの背後から妖夢が接近し、刀を突き出す。

アガレスが振り向き、開いた右手を突き出し、妖夢は何か跳ね飛ばされた。

地面に倒れ、怯んだ妖夢へとガミジンが背後から手刀を振り下ろす。

突然、妖夢の半霊が人型になり、刀を持つと手刀を受け止め、その間に妖夢の本体は逃げた。

右から藍が左から橙がガミジンを挟み撃つ様に弾幕を放つ。

ガミジンはアガレスへ一瞬視線を向けると地面を蹴り、同時にアガレスがガミジンへ手を向ける。

次の瞬間、ガミジンは少なくとも音速の1.5倍はあろうかというスピードで弾幕から離脱し、紫へと一気に距離を詰める。

「今よ皆！準備して！」

紫がそう言った矢先、ガミジンは突然目の前に現れたスキマに勢い良く飛び込み、別の場所に現れたスキマから上空に飛び出した。

「境界「永夜四重結……………」」

「死符「酔人の生、死の夢……………」」

「奥義「西行春風……………」」

「式輝「四面楚歌チャーミン……………」」

「鬼符「青鬼赤……………」」

その時だった。

何かが5人の発動中のスペルカード全てを打ち砕いた。

ガミジンはその隙に自分を囲む5人へとエネルギーオン塊を放ち、離れたアガレスも腕を伸ばしエネルギーオン塊を放つ。

何とかダメージにはならない程度に避けた5人だが、未知の不安が

過っていた。

「今のは一体……。」

「奴ね。」

紫が視線で示した方向には黒い男がこちらを見て立っていた。

「恐らくエネルギーオンそのものをぶつける事でスペルカードを妨害したんだわ。」

漆黒の体は光を全く反射させず、凹凸や遠近が分からず、まるでその空間だけ何も無いかの様に見える。

顔と思われる部分にあるバイザー状の目は何処に視線が向いているのか分からないが、常にこちらを見ている様な錯覚に囚われ、見るだけで意識を吸い込まれそうになる。

黒い男の姿は紫達の不安を恐怖へと駆り立てた。

その内、紫の意識は本人が気付かない内に完全に吸い込まれていた。

「八雲、お前は何故幻想郷を創ったか知っているか？」

「当事者である私に質問する訳？ 貴方達がこうして幻想郷の存在を知っているなら当然知っている筈でしょう。それよりもレディに自分から名乗らないのは失礼だと思わうわ。」

「私はルーラー。そうだ。だが最大の理由はお前は知らないらしいな。」

「最大の理由は私自身知っているわよ。外の世界の妖怪の存在が消え

る事を懸念したからよ。人間の科学の進歩やそれによる認識の変化によつてね。」

「お前は恐れている。お前達にとつて人間は薬品の様な物だ。本来自らに利益をもたらす筈の薬品は用途や用量次第で己を滅ぼす。」

「そうよ、生命を持つ妖怪と知恵を持つ人間、それぞれのバランスが重要なものよ。だから外の世界は人間で溢れているが故に不安定なものよ。」

「我々に妖怪は必要無い。人間との共生関係などもはや無い。何故ならもう人類は新たな進化を遂げ始めているからだ。知恵と生命両方を併せ持つ生物に。」

「……それがトランセンデント・マンという訳ね。」

「そうだ。人類が生存する為に進化した成功体。妖怪の出現など進化の失敗に過ぎない。進化に失敗した生物が減びる事は当然。だがお前はそれを受け入れなかった。だから幻想郷を創った。殻の中に閉じこもつたのだ。だがそんな事はほんの一時的な対処に過ぎない。」

「幻想郷は認識を要にして作り上げた世界よ。殻なんて物じゃないわ。」

「違う。確かにお前は幻想郷の存在は認識による物だと思つていらっしゃるが、それは間違いではないが正解でも無い。お前はどうして“此処”に幻想郷を創つたかお前自身理解していないらしいな。お前は、この世界に何が埋まつているか知っているか？外の世界には無い物だ。」

「……それがユニバーシウムなのかしら？」

「そうだ。何故かは判明していないがユニバーシウムは幻想郷に大量に存在している。ユニバーシウムは特定の信号に反応し、それに応じてエネルギーを吸収し変換する。その“一例”が人間や妖怪の複雑な意志だ。お前の「隔離壁を作る」という意志が幻想郷を創り出したのだ。だから幻想郷が此処に存在している。他の場所にはユニバーシウムは微量にしか存在しないからだ。お前はそこで外の世界とは違う世界を作り上げるつもりだっただろうが完全に別物にする事は出来ない。ユニバーシウムやエネルギーも物理法則に従うからだ。」

だから人間はユニバーシウムやエネルギーによって幻想郷を発見した。幻想郷が元から存在していたのではなく外の世界から隔離した世界という事なら必ず外の世界と重力以外の繋がりがある。余剰次元理論よりも遥かに劣る力で作られた壁など簡単に崩れる。」

「つまり幻想郷は此処でしか創れない世界だという事？ 外の世界では戦争が起きていると聞いたけど、つまり私達が貴方達から受ける被害は只のとぼちりという訳？」

「そういう事だ。我々が人類を導く為だ。我々こそが人類の後継者だからだ。お前は自然の流れに逆らっている。お前は怖いんだ。お前自身が人間の恐ろしさを理解しているだろう。」

「何を……。」

「それが最大の理由だ。お前は人間が、人間の知恵の力が怖いんだろう。本当は人間を隔離するつもりだったが自分が殻に閉じ籠るしか方法は無かった。お前には世界を支配する力など無いからだ。ユニバーシウムの性質を利用する以外には。だがお前はユニバーシウムの事や存在すら知らなかった。だからお前は幻想郷を創っただけで安心した。だが人類はお前よりも先にユニバーシウムの存在を知った。人間の知恵、それがお前の犯した誤算だ。この世界に居る限り法則には逆らえない。お前の作った世界など元からあった世界のコピーを改造しただけに過ぎない。お前は偽りの力を信じ続けて来た。物質や性質や認識などエネルギーやインフォームイオンで構成可能な一種のプログラムに過ぎない。」

「つまりこの世界は全て数字で表されるという訳？ 貴方達はそんな寂しい物事の考え方しか出来ないなんて大した文化も無いのね。」

「そうだ。だがそれはお前達もエネルギーやインフォームイオンの存在を知らなかったという程度の文明しか持っていないだろう。文化は確かに力を与える。しかし、その力は感情という不安定な物が根源である以上不安定である。文明も力を与えるが文化とは違い、根源が理論という安定、いや不変な物である以上文化よりも遥かに安定している。何時壊れてもおおかしくない世界と永遠に安定している世界、お前はそれでも文化を選ぶというのか？ お前は失敗を繰り返す人類を救

「いたいののか？」

「人間は感情と理論両方を併せ持つ生物よ。感情によって人類は変化を生み出し理論を見つける。片方を失えばそれこそ人類は終わりだわ。以前聞いた事があるけど人間にコンピューターチップを埋め込んで人民を制御しているそうね。そんなの人間じゃなくて只の社会という巨大な機械を動かす為の部品よ。」

「確かに以前や現在の人類は感情と理論を併せ持っているかも知れませんが、今に感情という不安定な武器が必要無くなる日が来る。変化は我々が起こせば良いだけだ。その日は近い。その時こそ人類は安泰だ……ムッ？」

突如紫の見る景色が何も無い空白から見慣れた景色に変化し、紫の意識は急速に現実に取り戻された。

「紫、どうしたのよー！」

「紫様ー！」

紫は目を開いたまま動く事無く立ち止まっていた。

幽々子達が声を掛けても返事が無い。

突然アガレスが地面を殴り付けたと思うと衝突点とその周囲にある石畳が砕かれてめくれ上がり、宙に浮いた。するとガミジンも破片に向けて手を伸ばす。

暫くして破片は急発進したかと思うと幽々子達目掛けて飛散し始めた。

低質量だが高速故に銃弾並に強力なエネルギーを持つ破片に対し、幽々子達は弾幕を放って撃ち落そうとする。

突然、ガミジンが勢い良く手を突き出すと飛翔中の破片が全てさらに細かく分裂し、勢いは変わらぬまま襲い掛かる。

分裂し、軌道が変わる事を予測していなかった4人の放っていたのは低速ながら軌道を変えられる弾幕だったが、高速のまま突然数量が増えベクトルも変化した破片のスピードに付いて行けず撃ち落とし損ねる。

大量の破片を被弾した4人は怯み、続けてガミジンが腕を薙ぎ払ったのに気付くと回避行動を取ろうとする。

しかし、何かを押さえ付けた様な感覚を覚えると体が回避を取る前の場所に戻り、体を捻るなりして躲そうとするが体の何処かしらに切り傷が出来上がった。

ガミジンが腕に力を込めながら妖夢へ接近する。

妖夢は振り下ろされる腕を片方の刀で防ぎ、もう片方の刀を持った人型の半霊が横から攻撃を仕掛ける。

2方向から攻撃の隙を与えぬ連撃を繰り出す中、藍がスペルカードを唱えた。

「式神「橙」！」

橙が燐光を纏ったかと思うと超スピードで飛び回り始め、弾幕をばら撒きながらガミジンの背後へと突進する。

アガレスが腕を突き出すとガミジンを狙う2本の刀が変な軌道を描き空ぶったと思うとそれを持つ妖夢の体が何かに押されたように前に投げ出され、後方からガミジンが蹴り飛ばす。

急接近する橙は妖夢を避けようと一旦距離を取ろうとするが、背中に強い衝撃を受けると地面に墜落した。

「桜符「完全なる墨染の桜——開花——」！」

幽々子がスペルカードを唱えるとアガレスの四方八方を埋め尽くす様にして弾幕が出現した。

アガレスは橙から周囲の弾幕に意識を向けるとその内一方向に手を向けた。

手を伸ばした先にある弾幕が消滅し、アガレスはその穴に向かって飛び出す。

「掛かったな。式輝「狐狸妖怪レーザー」！」

藍が唱えたスペルカードはアガレスを狙う大量のレーザーを出現させた。

アガレスが手を伸ばし、ガミジンも十数m離れた所から手を伸ばす。

藍の放った大量のレーザーはどれもまるでそこに鋭い剣があるかの様に真つ二つに分断され、軌道を逸らされる。

次の瞬間、幽々子と藍は体に数百kgもの重しを付けられたように地面に倒れた。

「幽々子様！」

「藍様！」

主を封じられた手下2人は慌てて主を救おうと腕を伸ばしたままのアガレスに襲い掛かる。

それを阻止するべくガミジンが間に入ると妖夢が2本の刀を持って構え、橙が離れて援護射撃の体勢を取る。

妖夢の二刀流独特の手数が多い攻め方と橙の後方からの高速大量弾がガミジンを翻弄させ、反撃の暇を与えない。

アガレスは幽々子と藍を押さえ付ける事に意識を使っている為攻撃はして来ないだろう。

しかし、ガミジンはそんな妖夢達の思考を裏切った。

妖夢の一太刀がガミジンの頭に決まったと思ったら、まるで何も斬れた手応えが無い。

切断とは1つの集合体を2つに分割する事であり、その2つに分ける過程で切断面から外側へ、分けられた物体は互いに逆方向のベクトルを与えられる。

切断の逆とは結合であり、ガミジンは自身に切断の逆ベクトルを与える事で自身の切断を防いだのだ。

ガミジンは妖夢の頭を乱雑に掴むと、迫り来る弾幕を妖夢を盾代わりに防ぎながら橙へと距離を詰める。

妖夢を投げ飛ばし橙にぶつけ、今度は2人を両手に鷲掴みし、地面へ叩きつけた。

ガミジンは足で2人を抑え、腕を高く上げた。

妖夢と橙は死を覚悟し、それを何も出来ず見ているだけの幽々子と藍。

その時、ガミジンが後ろを向いたかと思うと腕を体の前に振りかざした。

ガミジンの切断能力を持たせた腕が突如襲い掛かって来たエネリオン弾を弾く。

エネリオン弾は音速の5倍もの速さで1発だけでなく1秒に50発というペースで際限無く襲い掛かって来る。

その為ガミジンは防御と回避を余儀なくされ、仕舞いには妖夢と橙から突き放された。

ガミジンは視界に少年の姿を捉えていた。

少年は目にも止まらぬスピードでガミジンに接近すると両手に持った2本のナイフで連撃を放つ。

連撃を次々と防ぎ、反撃を次々と繰り出すガミジン。

ガミジンの足薙ぎを跳び上がって避け、そのまま回転水平蹴りを放つ。

体を後ろに反らして少年の蹴りを避け、カウンターに手刀を突き出す。

少年はガミジンの突き出される腕を自分の手で下方方向に払い除けると、そのまま体を浮かせ回転し、ガミジンの首に足を引っ掛けるとそのままガミジンを地面へ蹴り倒した。

回転の勢いが残っているまま着地し、何時の間にか西部劇のガンマンよろしくナイフを銃に持ち代えるとアガレスへと連射する。

アガレスは幽々子と藍に向けていた手を離し、銃弾の嵐に向かって手を向け銃弾を念動力でかき消す。

幽々子と藍は自分の体が軽くなる感覚を覚えると起き上がった。

幽々子達は少年が立ち止まるとようやくやくその姿を確かめる事が出来た。

「アダム君?」

「ガミジンは切断、アガレスは念動力か。」

幽々子の言葉に答える事も無くそう呟いたアダムは銃を連射しながらアガレスへ接近する。

アガレスは後退しながら銃弾を全て防ぐか躲す。

アダムは慣れた手つきで素早く2丁の銃を2本のナイフに代えたとナイフをロープに繋ぎ、投げ飛ばす。

アガレスは何の迷いも無くナイフを念動力で打ち返した。

しかし、ロープに繋がれたナイフは念動力で幾らか軌道が変わったものの、まるで鎌首を振り上げる蛇の様に再びアガレスへ襲い掛かる。

アダムが愛用するナイフ「シルバーウルフ」に繋がれているロープの名は「スマートアナコンダ」直訳すれば「賢いアナコンダ」。

このロープは武器が使用者から離れていてもエネルギーを安定的に送る事を目的に作られた。

しかし、それだけで無くエネルギーでロープ自体の強度を増したりする事も可能だ。

そして、アダムはこのロープの使い道をもう一つ見つけた。

ロープに送るエネルギーを運動エネルギーに変換する事でロープ自体を動かす事だ。

アガレスは不規則なロープの動きに翻弄され、左腕と右脇腹に掠り傷が出来上がる。

「アダム、速過ぎよ。」

「お前なんちゆうスピードだよ。というか良くここまで飛んで来たなお前。」

丁度良く霊夢と魔理沙が到着した。

そして、アダムは西行妖の傍らに硬直している紫と黒い男を発見した。

黒い男の赤く光るバイザー状の目がこちらを向いた、気がした。

すると紫が硬直から解放された。

「……………アンドンソン……………」

黒い男は初めて声らしき低い音を発した。

64 受け止めてみる

「破壊神」「コントローラー」「カオス」の使用、「トランセンダー」の大量持ち出し、「カオス」の謎のプログラム……一体何が起きているというのだ……。」

ディック中佐はパソコンの画面を見ながらそう呟いた。

「ここまでアクセスが嚴重でやっと侵入に成功したが、上手く情報を持ち出せるか。侵入した以上逆探知されるかも知れんから一刻も早くせねば……。」

いつもよりも5割増しのスピードでキーボードをタイピングさせる。

「……「破壊神」の鎧を解除し操るといえるのか?!……という事は「コントローラー」のみの力では足りないから大量の「トランセンダー」を持ち出したのはその為か……これはもう1つ極秘作戦があるのか?!……どれ、強力なエネルギー吸収源を「コントローラー」もしくは「カオス」によって操る……あのプログラムはこの為か!」

ディック中佐が驚き発する言葉は凡人には何の事かサツパリ分からないだろうが、彼自身はそれがとんでもない事を示す事を理解していた。

「少なくとも「破壊神」だけでも如何にかせねば……アダム、居るのか?……お前があの中に居るのなら頼む、計画を止めてくれ……酷い事をして来たこの私が言える様な事では無いが……最も私の思考など幻想郷の結界を超えるどころか誰にも通じないだろうが……。」

中佐は願う様に、後悔や反省する様に、そして親しい者に言うかの様に呟いた。

「……………」

アダムの視線は先程まで向いていた黒い男とは明後日の方向を向いていた。

「どうかしたの？」

「誰かが僕に話し掛けた気がする……………」

霊夢が少し不安になったのか質問したが、十分な解は得られなかった。

「誰かって？」

「分からないが、僕はその誰かを知っていて向こうも僕を知っている……………今は別にどうでも良い。僕はあの黒い男……………」

アダムは突然頭痛に襲われた様な感覚に襲われた。

「……………あの「カオス」を相手する。皆はガミジンとアガレスの相手をしてくれ。」（何故奴の名前が分かったんだ？）

「分かったわ。」（アダムは奴の名前を知っていたのね。）

と霊夢が了解の返事をしたのだが、予定通りには行かなかった。
「受け止めてみる。」

何時しかガミジンが言った言葉がそっくりそのまま再現された。

アダムが声のした方向を振り向くとガミジンが指を真っ直ぐ伸ばしたまま手刀を繰り出している最中だった。

慌てて取り出したナイフで受け止め、もう片方のナイフを突き出すが、ガミジンの腕に阻まれた。

そのまま2人の連続斬撃が互いに攻防を繰り広げる。

「仕方無い。僕はガミジンを相手する。」

「それでも良いわよ……………」

紫は少しの間何かを考えた。

「…… 霊夢、魔理沙、妖夢、幽々子、貴方達はあのアガレスという男を任せるわ。藍、橙、貴方達は私とあの「カオス」という奴を相手するわよ。」

7人から了解の返事が返って来るとそれぞれのポジションに着いた。

アダムとガミジンの実力は拮抗していた。

相手が攻撃したかと思うとはじき返し、そこへ攻撃を叩き込む。

その攻撃が弾かれたかと思うと、相手がそこへ攻撃を繰り返す。

アダムのナイフとガミジンの腕のぶつかり合い。

簡単に言えばその繰り返しだ。

アダムが次々と攻撃を防ぎ、隙を突いてローキックを放つ。

しかし、ガミジンはそれが見えていたにも関わらず回避動作どころか防御しようという意志すら見せなかった。

アダムは直感的に危機を察知し、蹴りを中断して距離を取った。

対するガミジンは空いた距離を埋め、斬撃のラッシュを仕掛ける。

アダムは次々と斬撃を受け止め、次に来る回し蹴りをブロックしようとして腕を胸の高さに掲げた。

次の瞬間、アダムが後ろへ退いたかと思うと、回し蹴りはアダムの着ているプロテクターを掠めた。

その瞬間、プロテクターの蹴りが掠めた箇所が刃物に裂かれた様な傷を作った。

(足でも切断可能か。だがあの様子では他はどうか。)

アダムはそんな事を考えながらガミジンへとナイフの嵐を送っていた。

ガミジンの頭を狙った横薙ぎを受け止められ、隙を突かれてガミジンの腕がアダムの腹に伸びる。

左のナイフで突きを払い除け、右のナイフをガミジンの喉へと突き出す。

アダムのナイフを回し蹴りで払い飛ばし、回転の勢いを利用してもう3回回し蹴りを放つ。

回し蹴りを2発躲し、最後の1発をナイフで受け止めると横へ移動

し、腹を狙ってもう片方のナイフを振り出す。

アダムのナイフはガミジンの左脇腹に食い込んだ、ものの切断した手応えが無かった。

ナイフはガミジンの腹を斬り裂く事無く、その位置に留まっていた。

アダムが突き出した腕を斬るように腕を振り下ろすが、その前にアダムの蹴りが顔面に炸裂した。

吹き飛ばされるが空中で体勢を整えて着地する。

(やはりか、腕か足以外、恐らく神経の末端部分以外では切断が出来ない。腹にナイフを当てて切断しなかったのは切断の逆ベクトルを加えているのか。ならば……。)

アダムは少しの間思考を巡らせるとナイフをロープに繋ぎ、投げ飛ばす。

2頭の蛇は主の思考通りに動き、ガミジンの動きを抑制する。

荒れ狂う龍蛇を素手で(エネリオンで表面や内部を強化した状態を素手と言うならば)受け止めるが、アダムはその内に少しずつ接近していく。

距離を十分に詰めた所でアダムは地面を蹴り、一気に間合いを縮める。

同時にロープを戻し、ナイフを両手に持ちながら突進する。

2本のナイフと腕が接触し合い、互いの力を外から加える。

すると、アダムは微かに何か切れる感触がナイフを通して伝わって来た。

同時にガミジンは腕とナイフの接触点が熱くなってきたのを感じ、慌てて距離を取る。

ガミジンがナイフに触れていた箇所を見ると、見事な切り傷が出来上がっていた。

アダムのナイフ「シルバーウルフ」は切断以外にもう1つの使用方法がある。

それは「融解」条件によっては「気化」だ。

「シルバーウルフ」は使用者のエネリオンを変換して強靱性を上げ

るだけでは無く、高周波でナイフを振動させる事で物体を切断しやすくする所謂高周波ブレードである。

振動によって触れた物体を振動させ局所的に液化させる事によって物体の結合力を下げることで切断しやすくし、通常の刃物より力を加えなくても済む。

ガミジンが行った切断の逆ベクトルを加える事による防御は物体を左右に分断する単純な力にしか働かない。

その為、物体の振動という複雑な力には働かない。

「……懐かしい気分だ。以前もお前と戦った事が有る様な、そんな気がする。」

「……。」

まるで遠い昔の事の様に言うガミジンと、無言のアダム。

古明地さとりは目を開けると堅い地面の上に身を伏していた。

(ええと、確か……)

体が痺れるような感覚で頭がぼんやりとしている。

隣にはペットの火焰猫燐が同じく横たわっていた。

「…… 燐！大丈夫?!」

「…… ん？何か頭がボーっとするけど何とか……。」

「あの時妙な男が来て…… 死体が動き出して…… あつ。」

さとりが辺りを見回して見えたのは、燐が集めて来た死体3体に対し、地底の鬼2人そして見知らぬ地上の者らしき者4人が戦闘の最中

だった。

すると、さとりは合計3つの目で彼らの様子を窺い始める。

『破壊神』の支配完了まで敵対する者を排除せよ。』

(…… どういう事?)

死体3体からは自身の意志は感じられず、何者かからの命令が聞こえた。

(彼らは命令されているのね……。)

命令している者は…… 命令している者が何処に居るのか突き止めようとする。

地底の最も奥に、機械的な命令する意思とそれに拒絶する強い意志を確認した。

『標的追加。』

命令する意思からそう読み取ったかと思うと、3体の死体の内、大柄な1体がこちらを向いた。

「強いぜ奴ら、以前より絶対に力を増しているな。」

「だね。それ以前に身体に致命的なダメージがあつてどうやって蘇つたのか、それも謎だ。」

リヨウの呟きに対して答えるカイル。

「2対1でやつとですもんね……。」

「せめて何か変化が起これば良いのだがな……。」

早苗と慧音も不安を口にする。

「こんな圧倒的に強い奴なんて初めてだよ……………」

「あと誰か加わってくれば頼もしいんだけど……………」

勇儀と萃香の鬼達も不安を呟く。

「偵察のつもりが戦闘になるとは、もう少し慎重に行動するべきだったな……………」

「アダム of 奴らも大丈夫かねえ。」

「アダム?…………… そういえば何時の間にか居なくなっている。霊夢と魔理沙もだ。」

「どういう事だ?」

リヨウが話の急な転換に戸惑う様に言った。

「分からない。周辺から感じられないという事はもう地上へ出たのだろうけど、今まで居た位置からして少なくとも今僕達が居る所を通らなければ出られない筈だ。考えられる事は……………」

「…………… まさかアダムさん達がやられたんですか?!

早苗がパニックを起こした様な声で訊いた。

「…………… いや、可能性は他にも有る。アダムが突然ステルス系の特殊能力を付けた可能性もある。彼の能力からして有り得ない事では無い。」

「それだと良いな。でもそうしたら何故アダム達は地上に出たんだ?」

「援軍を呼ぶには1人で十分な筈。だからきつと地上で何かが大事が起こっているのかも知れない。」

「それじゃ俺達も早くこいつらを片付けなきゃあな。」

突然、敵対していたトレバーが後ろを振り向いた。

カイルが慌てて視線を辿ると先程まで倒れていた見知らぬ2人が起き上がっている最中なのを確認した。

反射的にカイルは銃を構え、音速の10倍もの銃弾が秒間10発というスピードで吐き出される。

トレバーは表情1つ変えずに高速の銃弾をあっさりと躲す。

「てめえー!いい加減起きろー!仲間じゃねえか!」

リヨウはトレバーに大声で怒鳴るとトレバーへ接近し、跳び蹴りを

繰り出す。

トレバーはその蹴りを手で掴んだかと思うと後ろ方向へ蹴りを逸らす。

リヨウは体勢を整えて着地すると後ろを向き、トレバーに向かって銃を構え、1秒に100発というスピードで銃弾を発射する。

トレバーはバク転しながら距離を取ると共に銃弾を避ける。

「トレバーは俺が殺す。お前達は絶対に手を出すな。良いか、絶対にだ。」

リヨウは「絶対」という単語を強調する様に言うとトレバーを追い、2人の姿は遠くへと消えた。

さとりは1体の死体が「殺す」という一念のみを込めながらあつという間に目の前まで迫っている事に怯え、動けなかった。

「さとり様！危ないよっ！」

隣が逃げる様に促すが、今動けたとしても完全に間に合わない。

突然、速い何十発もの銃弾が彼女を守る様に死体へと襲い掛かる。

しかし死体は難無く銃弾を躲す。

次の瞬間罵声が聞こえたかと思うと、死体と敵対していた者達の内1人がこちら側へ飛び込む様にして来たかと思うと銃を連射し、死体を遠ざける。

その男は何かを言うと言った死体の後を追って姿を消した。

だが、まだ終わりでは無い。

残る2体の死体の片方は開いた手をこちらに向け、もう片方は勢い良く地面を蹴った。

空気塊と地面の揺れが真っ直ぐ迫り来るのに対し、それを食い止めようとする誰か2人。

空気塊が突風で弱体化され、地面の揺れを踏み抑えられる。

それでも完全では無く、さとりは弱まった地面の揺れによってバランスを崩し、弱められた空気塊によって簡単に地面に倒された。

さとりが起き上がるうとした瞬間、彼女の目に映った景色は死体の中で一番若そうな男とそれに対する1人の青年が目の前でぶつかり合っている所だった。

『絶対に助ける！』

さとりは純粹で強い青年の思考を聞き、何故か安心感を覚えた。

カイルはバランスを崩して倒れた少女へと追撃しようとするサム
の姿をいち早く捉えようと地面を蹴った。

サムが少女へ振り下ろしナツクルを仕掛けるのに対し、カイルは裏
拳を放つようにして腕を伸ばす。

サムの拳はカイルの腕に阻まれると、サムは自分の腕が下方へ
引っ張られるのを感じた。

サムのナツクルを腕を翻して下方へ逸らし、続けて腕を掴むとカ
イルを地面へ投げ倒した。

「逃げてー！」

カイルが目の前少女にそう言うと、隣の少女はすぐに走り出したが、もう1人は驚いているのか怖がつているのか動かなかった。

次の瞬間何かに気付いたカイルは少女の腕を離さない様に掴み、後ろへと駆け込む。

丁度横方向から迫るウォーターターゲットを躲した所だった。

「逃げて！」

さとりは青年にそう言われたが、体が強張って動けなかった。

隣の隣は既に逃げ出している。

『不味い、来る。』

次の瞬間、青年はさとりの手を取り、引つ張る。

次の瞬間、勢い良く吹き出す熱湯が先程まで居た所を貫いた。

『まだ来る。』

カイルはさとりを掴みながら軽やかな身のこなしで次々と迫り来る衝撃波や空気塊や水流をさとり当てさせる事無く避ける。

「カイルさん、危ない！」『助けなきゃ！』

離れた所に居た少女からそう聞こえると、このカイルと呼ばれる青年を守る様に弾幕を放った。

「では僕も。」

青年は前に走りながら後ろを向くと背中に背負っていた銃を構え、連射し始める。

ある程度下がると青年は手を離した。

「君達は逃げて。」

「えっ？ああ、はい。」

さとりは突然の出来事に一瞬戸惑ったが、それが無くなると安心感が湧き出て来た。

(あの人なら何とかしてくれそう、そんな気がするわ。)

65 予感

「俺の相手は俺だ。」

「……………」

「クソツ、お前はとうしちまったんだ！」

トレバーに対して構えるリヨウと何も構えないトレバー。

「……………俺を舐めてるつもりか。」

「……………」

リヨウがトレバーへと突進し、右足で跳び蹴りを放つ。

トレバーはリヨウの左側へと回り込み、肘打ちを放つ。

対するリヨウは跳び蹴りのフォームを変え、トレバーの頭に向かって回し蹴りを繰り出す。

トレバーは肘打ちから平手に変え、リヨウの足を掴んだ。

その瞬間、リヨウは足がもげる様な痛みを感じて怯んだ。

そしてトレバーの腹へブローを連発し、吹き飛ばした。

岩壁に叩きつけられて止まったリヨウはすぐに起き上がり、向かってくるトレバーへジャブを連発する。

しかし、全発避けられるか受け止められ、トレバーが隙を突いて膝蹴りを繰り出す。

間一髪の所でリヨウは膝蹴りを受け止め、エネリオンを送り込む。

トレバーは膝に高熱を感知するとすぐに膝を離し、距離を取る。

距離の離れたトレバーとリヨウは互いに掌を向け、互いにエネリオ塊を放つ。

トレバーが動き回る後方でエネリオン塊に触れた物が爆発するが、リヨウが動き回る後方でエネリオン塊に触れた物は何も起きない。

突然、トレバーが前に動いたと同時に腕を勢い良く突き出し、反応に多少遅れたリヨウも腕を突き出す。

互いに避けようとする2人だが、リヨウは肩に被弾し、トレバーは脇腹に掠めた。

リヨウは肩が抉れる痛みには耐えると、接近するトレバーへタツクルする。

しかし、タツクルがトレバーに当たったと思った瞬間、トレバーの姿が消えた。

リヨウは後頭部に衝撃を受けると勢い良く地面に伏した。

起き上がった次の瞬間、リヨウは後方へと大きく跳んだ。

直後、トレバーは先程までリヨウが倒れていた岩の床へ降下キックをめり込ませていた。

「危ねえ、下手すると死ぬなこりや……せめて“あれ”だけは使いたくないが……。」

アガレスは4人を相手に苦戦していた。

霊夢と魔理沙がアガレスに向かって弾幕を放つ。

霊夢の放つホーミング弾を跳ね除けようとしても再び自分に向かって来る為、わざわざ破壊というエネルギーを使う事をしなければならぬ。

魔理沙のレーザーを逸らそうとしても一発一発の弾に対して長いレーザーを逸らすには、レーザーの伸びる時間だけエネルギーを使う必要がある。

それでもアガレスは全てを防ぎ切り、2人へと手を向けた。

霊夢と魔理沙は突然衝撃を感じると吹き飛ばされた。

今度は妖夢が刀を2本持って襲い掛かり、後方から幽々子が弾幕を発射する。

次々と振り回される刀に横方向の運動エネルギーを与え逸らし、後

方からの大量の弾幕を体ごと動かして躲す。

アガレスは妖夢が地面を蹴る瞬間腕を伸ばすと、妖夢の身体が勢い余って宙に投げ出される。

次の瞬間、アガレスが妖夢の腹に跳び蹴りを決めたかと思うと、倒れた妖夢の腹を蹴り足で地面に押さえ付け、そのまま迫り来る弾幕へと蹴り上げる。

幽々子は妖夢へ被弾させない様に弾幕の軌道を変えるが、その瞬間アガレスの念動力に撃ち落された。

それから見えない力で地へ這いつくばされた幽々子はアガレスが自分へ拳を叩きつける寸前の様子まで見た。

不意にアガレスは振り下ろす腕を防御体勢に構えたかと思うと、胸の前に掲げた腕の表面で爆発が起こった。

「霊符「夢想封印 集」！」

「魔符「スターダストレヴァリエ」！」

霊夢の周辺に弾幕が出現し、魔理沙から大量の小型弾がばら撒かれる。

左手を突き出して魔理沙の弾幕を止め、スペルカード発動中の霊夢右手を突き出す。

霊夢がスペルカード発動完了したのと念動力に吹き飛ばされたのは同時だった。

右手を再び伸ばし、自分を囲む様にして一気に放たれた弾幕を防ぎ切った。

次の瞬間、アガレスが後ろを振り向いたかと思うと、白銀に鋭く輝く物体が目の前にあった。

アガレスは如何にかそれを両手で受け止めると、妖夢が自分に向けて刀を振り下ろしている最中だったのを確認した。

白刃取りを成功させたアガレスへと背後から忍び寄る影。

それに気付いたアガレスは後ろを振り向くと、受け止めていた刀を横に逸らし、後方からの斬撃が届くより先に回し蹴りを決めた。

後方から襲い掛かっていた最中の半霊が蹴られ、反対方向から妖夢本体が刀を突き出す。

真つ直ぐに進む筈の刀は何かを押された様に軌道が逸れ、反対側へと流された。

同時に半霊が本体を飛び越え、降下ぎまに刀を振り下ろす。

左右からの剣撃を次々と躲し、アガレスが両方へと腕を突き出す。妖夢と半霊は流れに身を任せ衝撃を吸収し後方へ下がる。

ようやく、アガレスは自分が妖しく輝く蝶に囲まれている事に気付いた。

アガレスは慌てて腕を周囲へ張り巡らせるように腕を伸ばすが間に合わず、数発の蝶がアガレスの体に停まった。

しかし、彼は死ぬ事を許されていない。

【異常信号感知 中和】

彼の目の前には地面が迫っていた。

倒れそうになるのを腕で支えて前方へ転がり、起き上がる。

「やっぱりアダム君みたいに効かないわね……今はもう既に操られているから今は西行妖を操れないし……。」

幽々子が呟く。

「思っただんですけど、念力を使う時に腕を動かしているんですが、ひよっとしたら腕を使わなきゃ念力が使えないんじゃないでしょうか。」

妖夢の提案で霊夢達に少しばかりの希望が見えてきた。

「……………そういえば良く見ると腕を突き出す度に念動力が起るわよね。」

「何でだろうな？とりあえず腕を集中的に攻撃すればいけるかもな。」
それを聞いたのか、それとも元からなのか、アガレスは険しい顔つきになった、気がした。

「勇儀さんと萃香さんはあの青年のサムの方を頼みます。」

「おう。」

「任せてよ。」

勇儀と萃香は短い返事をするサムへと向かって行った。

「リヨウさんは一人で大丈夫でしょうか……。」

「リヨウはあれでも物事をしっかり考えられる、だから何か勝てる方法があるんだと思うけど……。」

早苗の呟きに答えるカイルだが、その答えにも確信が無い様だ。

「私個人が思うんだが、何か恐ろしい事になりそうな予感が……。」

永夜異変の後にリヨウと慧音間で起きた出来事が慧音の考えを不安へと駆り立てたのだ。

あの時感じたリヨウの心の闇。

「僕は不確定な迷信なんかよりも確定している理論を信じるが、今はリヨウを信じる。今は目の前に集中して。少し思い付いた事がある。」

その言葉は早苗に少しながら安心感を与えた。

突然、向かい風が吹き付けたと思うとカイルが飛び上がって足を上げる。

カイルの踵落としがレックスの回し蹴りを抑え込んだかと思うと、そのままカイルは姿勢を低くしローキックを仕掛ける。

レックスは上空に飛び上がる事で蹴りを回避し、掌を突き出す。

『2人共、挟み撃ちを頼む。奴は神経の末端部分、つまり手だからでしか能力を使えない。』

同時にカイルがその掌に照準を定め、何時の間にか構えた銃の引き金を引く。

レックスは突き出した掌を引っ込め、銃弾を避けたが、右から早苗が、左から慧音がスペルカードを唱えていた。

「神徳「五穀豊穰ライスシャワー」！」

「国符「三種の神器 剣」！」

レックスが腕を胸の前に交差させると、地面から噴き出した熱湯が彼を包み込んだ。

弾幕は水の障壁に阻まれレックスに命中する事無く消える。

カイルが銃の側面にあるツمامミを少し動かし、エネリオンを1秒間溜めた銃弾を1発、ツمامミを元に戻し、今度は溜めずに連射した。

1発目の変換に運動エネルギーに比重を置いた銃弾が、命中した箇所の水に横向きの運動エネルギーを与える事で水の障壁にほんの一瞬ながら穴を開け、2発目以降がそこを通り抜けた。

レックスが急いで体を逸らそうとするが、銃弾は体中に被弾した。

それでもレックスは怯む事なく掌を突き出し、自分を覆っていた殻が大蛇へ変化し、カイルを襲う。

『早苗、今だ。慧音さんも準備をして下さい。』

『はい！』『開海「モーゼの奇跡」！』

カイルを襲う水の大蛇は直撃する寸前、2つに分断され、不発に終わった。

レックスが見るとカイルは銃口を向けていた。

「未来「高天原」！」『2人共しっかかり繋げてくれ。』

慧音がスペルカードを唱えたのと同時にカイルが引き金を引いた。

レックスは頭をサツと傾け、速い銃弾を躲したが、続けて来る弾幕を躲せず被弾した。

「そこですー！」

早苗がレックスの頭上から両掌を体の前に掲げた。

レックスも慌てて頭上へと両手を突き出した。

「はあああああ!!!」

「…………ギッ…………」

2人の放つ衝撃波がぶつかり合うが、早苗が少しずつ押され始めた。

突然、レックスは手を頭上から引つ込めたかと思うと、今まで手を伸ばしていた所へ銃弾が通過したのを確認した。

軌道から予測して発射地点を見るとカイルが銃を構えていた。

早苗は今まで押し返されていた抵抗が急に無くなるのを感じると一気に押し込んだ。

レックスは地面へ叩きつけられ、次の瞬間右手が貫かれる感覚を覚えてた。

カイルは自分の放った銃弾がレックスの右手を打ち抜いた事を確認する間も無く、今度は照準を左手へ向けた。

その様子にレックスが気付いた。

『もう一度やってくれるかい？』

『分かりました。』

早苗が再びレックスへ手を向ける。

それに対しレックスは地面に手を向けた。

(水流に乗って回避するつもりか。ならば……………)

レックスが周囲に熱湯を纏い、衝撃波の吹き付けた部分が大きく凹んだがダメージにはなっていない。

『慧音さん、一か所に集中的に攻撃出来ますか？出来るなら致命傷を負わせられる所へ。』

『ああ、やってみる。』『野符「将門クライシス」！』

慧音はスペルカードを唱え、レックスを囲む隔壁の中心一か所へと狙いを定める。

するとレックスは左手を突き出したかと思うと、水の巨大な塊が弾幕をかき消した。

塊は突然無数の鞭に変化し、3人をまとめて襲う。

それに対し、早苗が衝撃波で味方全員への攻撃を打ち返し、慧音が弾幕を放って牽制し、カイルが十分にエネルギーを溜めた銃を構える。

カイルが銃のツマミを動かし引き金を引くと、3秒間分のエネルギーが溜められた銃弾が発射された。

そのエネルギーは15000000J、TNT火薬3.5kg分。

物体との衝突時に熱エネルギーに変換する割合を高くされた銃弾は、阻もうとした水の壁を一瞬で水蒸気に変え、その水蒸気爆発の勢

いはレックスを怯ませた。

『今だ！』

早苗と慧音は一斉に弾幕を放出し、カイルはレックスの左手に銃の照準を合わせた。

しかし、レックスに次々とダメージを与える筈だった弾幕やレックスの左手を貫く筈の銃弾は、呆気無く消え去った。

それが電子の流れである事をカイルはその知覚能力で知った。

しかし、知った事はそれだけでは無い。

「……………敵側に2人来た。」

ローブの男と大柄な男が何時の間にか居た。

「何時の間に居たんでしょうか。」

「分からないが、ローブの方は強いステルス能力持っていて更にレックスとサムとトレバー、そしてあの大柄な男を操っている。」

「それじゃああの大柄な男の方は分かるか？」

「……………分かりません。だが様子を見る限りではまるで戦闘の意志が見えない。でも安心は出来ない……………」

「……………」

さとりは青年に逃げろ、と言われてから彼らが戦っている所とは中途半端に離れた所で立ち止まっていた。

『従え。』

『嫌だ！』

「……………」

「どうしたんだい？さとり様。」

「………… 私、あの人達を助けて来るわ。」

「そんな、危ないよ。あのお兄さんも逃げてって言ってたじゃないか。」

「でも、私何か嫌な予感がする。何か恐ろしい事が……………せめて何かあの人達の力になりたいの。それに地霊殿の主である私が地霊殿で見ず知らずの人に助けられてただ逃げているなんて、地霊殿の主として異変を解決しなきゃ。」

さとりは先程まで走っていた方向とは反対方向へ走り出した。

「ま、待ってよ。あたいも行くよ。」

燐も仕方なく主へついて行った。

アダムはまるで知らない筈の事を以前から知っているかの様に思考を巡らせる。

ガミジンが数mから離れた所から腕を連続して薙ぐ。

その先端から放たれたエネルギーの刃がアダムを斬り裂こうと襲い掛かる。

上下左右前後へ移動し逸らし回転し、刃を次々と避ける。

するとガミジンは手刀を振るのではなく槍の様に連続して勢い良く突き出し始める。

無数の銃弾の様なエネルギーの矢がアダムへと降り掛かる。

数量は先程よりも増したが1発当たりの威力は落ちており、更に切断が作用する範囲も狭まっている。

アダムはナイフを2本共抜き、連続で放たれるエネルギーの矢を確実に弾いていく。

(“あれ”をやるか。)

突然、アダムは2本のナイフ共にロープを括り付け、投げ飛ばした。アダムからロープに、ロープからナイフに、1対の一種のネットワークにより、アダムの命令によってロープやナイフが主を守ろうとエネルギーを防ぐ。

そしてロープとナイフは余裕が出来るかとガミジンへと襲い掛かる。対するガミジンは防御に精一杯で攻撃の余裕が消えた。

2本のロープがそれぞれガミジンの右腕と左腕に巻き付いた。それを引っ張るアダムと動かされまいと踏ん張るガミジン。

アダムが力を緩め、ガミジンの引く力によって前方へと投げ出されるが、これがアダムの作戦だった。

ナイフを戻し頭上からナイフを振り下ろし、それを受け止めるガミジン。

そして通り過ぎる。

着地し左のナイフを薙ぐアダムと、それを右手で防いだガミジン。次の瞬間、ガミジンは後頭部に熱く鋭い感触を覚えた。

ガミジンは自分が予想した以上の痛みを頭に押さえ膝を着いた。何故これ程のダメージを受けたのか。

それがガミジンの疑問だった。

アダムはその答え、いや、その答えのヒントらしき事を知っていた。
(やはり以前暴走したフランドールと同じ様に後頭部が弱点だ。しかし何故？僕も何故この事を思い浮かんだんだ？)

痛みを耐え、立ち上がろうとするガミジンの後頭部へとストレートが決まり、ガミジンは再び地面に引き戻された。

(あの時はレミリアが天候を操る為に赤い霧を発生させていたが、何故か途中で黒くなり始めた。)

倒れたガミジンに対し、ナイフを高々と上げた。

(もし、天候を操る赤い霧と、ルーラーがこいつらを操るメカニズムが同じならば？しかし天候を操るのが人間を操る事と同じとは考えられない……。だが少なくとも奴らの弱点は分かった。)

アダムは思考を切り替え、ナイフを振り下ろした。

ナイフはガミジンの左胸に深々と突き刺さったが、まだ抵抗しようと目を見開いていた。

だからアダムはナイフを引き抜き、再び振り下ろす。

今度は頭に突き刺さり、ガミジンは一切の思考が不可能となった。

「一気に叩きつけるわよ！」

霊夢のその掛け声を、魔理沙、幽々子、妖夢は承認した。

「紫の彼岸は遅れて輝く！」

「瞬斬「楼観から弾をも断つ心の眼」！」

幽々子の唱えたスペルカードはアガレスの全方位を囲む様にして降り注ぎ、妖夢の唱えたスペルカードで自分から斬撃、半霊から砲撃、と2方向から2種類の攻撃を繰り出す。

その数量はアガレスの脳処理を追い詰めさせ、反撃の暇を作らない。

「『夢想天生』！」

「『ブレイジングスター』！」

霊夢と魔理沙が共に輝きを纏い、すさまじい量の弾幕を放ちながら突撃する。

東洋の文化は“共存する”、西洋の文化は“支配する”。

夢想天生は攻撃を自分では無く自分が擬似的な異次元へ“浮く”事によって攻撃を逸らし、ブレイジングスターは自らの強大な力で攻撃を受け止める。

和洋違えど、アガレスの念動力は2人を止められず、そして大量の弾幕の雨を防げず、何十発と被弾する。

ならばせめて念動力の効く他の2人だけでも、そうしようと右手を伸ばそうとした。

それは出来なかった。

ガミジンは腕に鋭い痛みを感じると、右腕がバツサリと切り落とされていたのに気付いた。

後ろから妖夢がもう片方の手を切り落とそうと刀を振りかざしていた。

自分に念動力を与える事で回避したアガレスだが、他の弾幕を躲し切れず怯む。

「はあああああ!!!!」

「でやあああああ!!!!」

「いけえええええ!!!!」

「やあああああ!!!!」

4人からの総攻撃を受け、確実に命を削られるアガレス。

【自爆実行】

アガレスは自分の意志では無く、命令を受け、大量のダメージを受

けながらも立ち上がった。

「これだけ攻撃を喰らわしているのに立ち上がるなんて奴だ……。」

「まだまだよ、魔理沙。」

すると、アガレスが燐光に包まれ始めた。

「離れろ！」

突然、怒鳴る様な少年の声がした。

その声に従う様に反射的に後ろへと下がった4人。

次の瞬間、アガレスの体全体が閃光に包まれ、同時に熱風と衝撃波が周囲に広がった。

閃光が止むとアガレスの姿は無く、地面には熱で溶けた様なクレーターが残っていた。

「……消えた、の？」

「身体を作る材料から起こり得る発熱反応が一瞬で行われたらしい。つまり自爆だ。それだけ無くエネルギーも熱エネルギーに変えているみたいだ。」

「危なかった。またお前に助けられたぜ。」

「それよりも、僕はとんでもない事を知った気がする。」

「なんだよ、気がする、って確実じゃないのか？」

「ああ、だが大事な事だ。」

「カオス」と呼ばれる黒い者はガミジンが死に、アガレスが自爆し、

何処かを見る様に顔を動かした。

バイザー状の目から正確に何処を見ているのかは分からないが、地上に繋がる階段を見ている気がする。

【第2段階目計画を優先】

黒い男は突然動き出したかと思うと地上へと飛んで行った。

「藍、橙、追うわよ！」

主に命令され、ついて来る2体の式神。

黒い男について行くのは紫達だけでは無い。

「奴は地上に向かう。リョウ達が危ない。それどころか幻想郷すら危うい。急ぐぞ。」

アダムは説明もろくにせず黒い男を追い始めた。

「ちよ、ちよと待ってよ。」

「どういう事なんだ？」

「今は説明出来ない、急ぐぞ。」

それについて行く霊夢と魔理沙。

「妖夢、私達も行くわよ。」

「はい。」

最後尾は幽々子と妖夢が後を追う。

八坂神奈子は固い地面の上で目を覚ました。

「う、うーん…… ええと、地獄の鴉に太陽神を宿らせようとして…… 確か変な奴が襲い掛かって来て……。」

張った。

しかし、地面の揺れが来ることは無かった。

2人の目の前でいきなり地面から岩石が噴き出した。

衝撃波を途中で拡散させ、それを地面の破壊に利用し、土砂を吹き上げたのだ。

前方の視界を遮られた2人は下がろうとしたが、そうする以前に勇儀は腹に強い衝撃を受け、怯んだ。

それを目撃した萃香だが、サム姿が見当たらない。

突然、頭上に衝撃を感じた萃香は膝を着き、続けて側頭部に感じた衝撃によって地面に倒された。

萃香は少し前まで自分がいた場所を見た。

「……………何かがある。」

萃香は密度を操る能力を持つが故に見えなくても空間内の物体の密度の違いが分かる。

1Lで1.2g程度の密度しかない空気中に1立方cm当たり1gの密度を持つ空間を発見した。

何が在るのかは見えないが、恐らく自分達が相手している男であるだろうと萃香は考えた。

「そこだっ！」

萃香の放った弾幕の一部の形が歪んだかと思うと、消えたように見えた。

数発当たった様な手応えを感じると遅れて爆発音が聞こえた。

「鬼符「鬼気狂瀾」！」

そこへ勇儀がスペルカードを唱え、追撃を掛ける。

姿は見えないが、何かに命中した様な手応えを感じた。

「この調子なら行けるね。」

「ああ、一気に畳み掛けるぞ。」

しかし、優勢は殆ど続かなかった。

勇儀は不意に痺れる様なショックを受け、怯む。

萃香が振り向いた時には既に目の前に電子のビームが流れ込んでいた。

体が痺れて動けない。
遠方からローブを身に纏った男が手を向けていたのが遠目で見えた。

【TSLCモード開始】

一方、サムは両手を上に伸ばした。

地上では奇妙な出来事が起きていた。

何故なら雲一つない快晴の昼下がりだというのに、空が急に暗くなったからだ。

突然雲の様な太陽を遮る物が発生した訳でも無く、太陽が驚くべき速さで沈んだ訳でも無い。

まるで誰かが太陽が出す光量を調整しているかの様に。

良く見ると空の1か所から地上に向かって光の柱が伸びていた。

「太陽光があそこに集まっているのね。でも一体何が……。」

黒い人型の物体を追いながら紫は考えていた。

そして黒い男は光の柱が立っている方向へ向かっていた。

地底では驚くべき出来事が起きていた。

何故なら突如地上から眩い光の柱が降りて来たのだから。

ある者は地上からの侵略と勘違いし、ある者は地上から神が降りて来たと思い込んでいた。

しかし、正解の考えを持った者はこの場に居なかった。

光の柱は驚くべき早さで地面を気化し、穴を作る。

69 衝動

「思ったんですけどカイルさん、貴方の能力で相手の考えとか読む事とかは出来ないんですか？」

「心を開いた者のみ可能だ。悪いけど奴らの思考は読めない。テレパシーでも心を開いた者にしか通じない。」

「そうですか……………」

（でも不思議だな。それだと初対面の時は何故テレパシーが通じたんだ？）

カイルは関係無い事を一瞬頭に留めておいたにも関わらず、一番早く異変を察知した。

彼はエネルギーオンやインフオーミオンの構造や分布や状態を広範囲で知る事が出来る為、莫大な量の光子が地面を気化し地面を掘り進めている事を、光子や地面を構成するインフオーミオンの変化によって知った。

「上からレーザーが来る、下がって！」

カイルがそう警告し、早苗と慧音が後ろへ下がり、離れた萃香と勇儀も回避動作を取った。

突如天井の岩が消滅したかと思うと眩い光の槍が降りて来た。

「これは……………」

「サムの能力か。地面をレーザーで気化してレーザーの通り道を作ったんだ。それにしても不味いな……………」

カイルはそう呟きながら照準をサムに向けた。

突然、カイルが地を駆けたかと思うと、電子の噴流がそこに吹き付けた。

電撃を躲したカイルはサムに銃を向けたまま引き金を引いた。

銃弾は光の柱から枝の様に伸びてきたレーザーによって撃ち落された。

そして何十本ものレーザーが連続してカイルに向かって伸びる。

エネルギーオンが光の柱に作用してレーザーが屈折するのを即座に知ったカイルはレーザーが伸びて来る以前から回避動作を行う事が

出来たが、それでも秒速300000kmものレーザーを躲すのはギリギリだった。

「奴は僕が引き付ける。皆は他の3人を相手してくれ。」

そう言いつつ銃を連射させ、レーザーを回避する。

「……………」

黒いローブの男が何も言わずにこちらを睨み付けるような視線を向けていた。

すると、視線を隣の大柄な男に向ける。

「……………」『どうせお前は私に従う事になるから反抗するのを止めたらどうだ。』

「……………」『断る。俺はお前達の目的なんぞ興味が無い。俺に命令に従う義理は無い。』

何も声は聞こえなかったが、早苗達には何らかの雑音が聞こえ、何かを話し合っている様に感じた。

その雑音の様な音が聞こえるからこそ彼女らは“特別”である。

トランセンデンド・マンや妖怪はエネルギーを視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚と五感の様に感知する。

まるで二者が共通しているかの様に。

しかし、トランセンデンド・マンはそれだけで無くエネルギーを立体映像を俯瞰的に見る様に空間的に感知する事も可能だ。

まるでトランセンデンド・マンが妖怪を超えているとも言おうかの様に。

遂に大柄な男は何も動く気配を見せず、ローブの男が動き出した。

「はあああああ!!!」

「やあああああ!!!」

早苗と慧音が牽制に大量の弾幕をばら撒く。

しかし、弾幕は圧倒的な電撃によってその力をひれ伏され、無力化される。

「私達もだ!」

「ああ!」

勇儀の掛け声に萃香が返事し、2人共地面を蹴るとそれぞれ側面を

取った。

勇儀が右側から跳び蹴り、萃香が左側からナックルを繰り出す。次の瞬間、勇儀の足と萃香の腕はローブの男の手に簡単に掴まれた。

「何だこの力は?!」

どちらかの鬼がそう言った矢先、2人の体に電流が流れ、2人共脱力し倒れ込む。

そこに向かって水の槌が叩き落とされる。

勇儀は仰向けで正面から力づくで受け止め、萃香は霧状になって回避を試みる。

しかし、勇儀は地中からのウォータージェットによって2方向から挟みこまれ、萃香は霧状に変化出来なかった。

萃香が自らの密度を下げ霧状にする事で少なくともダメージ軽減をするつもりだったが、レックスは気体化する萃香を自らの流体制御能力によって押さえ付け、水流を浴びせる。

「えいっ!」

早苗が掛け声と共に両掌を突き出すと、勇儀と萃香を押さえ付ける水流が逸れる。

「やあっ!」

同時に慧音が、水流を操っている為両手の放せない状態のレックスに向かって弾幕の嵐を送った。

しかし、弾幕の嵐は突如出現した稲妻に打ち消され、稲妻はそのまま慧音へと命中し、怯ませた。

勇儀がローブの男へと駆け込み、跳び蹴りを放った。

ローブの男に蹴りが炸裂すると思ったその時、地面から熱水が勢い良く吹き出し勇儀を吹き飛ばす。

ローブの男が吹き出す熱湯に手を着けた。

地面から噴き出した水は地中に含まれる成分を含む。

それは伝導性が高い金属イオンも例外では無い。

純粋な水では通らない電気もイオンを溶かす事によって電気を通す様になる。

結果、勇儀は電気によって水流に逆らう力も出せず、そのまま壁に衝突した。

今度はあらゆる所から噴き出た間欠泉が残る3人に向かってウォータージェットとなつて襲い掛かる。

「皆さん、下がってください！」

早苗がそう言いながら両手を突き出し、水流をせき止める。

「離れて！」

突然、親しい少年の警告する叫び声が聞こえ、後ろへ下がる早苗。何処からか伸びてきたレーザーが水流にぶつかる。

水が一瞬で気化し、体積が1000倍の水蒸気に変化する。

その勢いは早苗、慧音、萃香を吹き飛ばしたが、カイルが警告したお蔭でダメージを軽く出来た。

「あ、ありがとうございます……。」

「いや、引き付けるといふ作戦を取っていた僕が迂闊だったよ。やはり全員で戦う事になるか……。」

「い、いえ、私も不注意でしたから……。」

「せめて連携を崩す事が出来れば何とかかなるかも知れない。」

その時彼女が来たのはカイル達にとって大きな幸運だった。

「私達も戦います！」

カイルが先程逃げさせた少女達が戻って来ていたのだ。

「あれ、さとりは隣じゃないか。」

そう言ったのは恐らく以前から知り合いだったのだろう勇儀か萃香か。

「駄目だ、本当に危険な事だ。」

短い沈黙。

「……私、相手の心を読む事が出来ます。だから、それで少しは役に立ちたくて……。」

言うのを躊躇った様な間は何故か。

「あたかも手伝いに来たんだ！」

隣の隣も主張する。

『成程。しかしエネリオンを見る限り彼女が戦闘向けとも思えない。』

もう少し作戦を変えよう……。」

さとりは己の能力でカイルの思考を読み取り、カイルに対して安心と期待を持った。

人間は信頼を得る為に本当の自分を知られたくないが故、己を偽る。

しかし、自分の本性が知られた時、信頼を断ち切る。

だからさとりは人間に忌み嫌われ続け、こんな地下深くにひっそりと暮らしているのだった。

だが彼からは嫌悪どころか負の感情を一切感じなかった。

それどころか自分を大切にしてくれている。

それだけで彼女は嬉しかった。

「……よし、じゃあ…… 2人共名前は何？僕はカイル・ウィルソン。」

「私は古明地さとりです。」

「あたいは火焰猫燐さ。」

「それじゃあ、『2人共、聞こえるかい？』」

「ふえっ?!」

頭の中で直接的に声が聞こえ、どちらかが間の抜けた声を上げた。

『テレパシーだ。さとり、君が奴らの考えを読む時に念じると僕が皆にそれを一瞬で伝えられる。これは君にしか出来ない事だ。任せた。』

『はいー!』

霊夢は宙に浮き、魔理沙は箒に乗り、そしてアダムは地面を走り、黒い男を追っていた。

「まるで追いつかないわね。」

「あいつ何処に向かっているんだ？」

魔理沙の疑問に答えたのは隣を走るアダムだった。

「地底だ。ルーラーと「破壊神」と合流する為だ。」

「お前良くそんな事分かるなあ。」

「いや、僕も何故知っているのかは分からない。」

「へっ？」

「どういう事？」

2人共訳が分からず、霊夢が訊いた。

「今はその理由はどうでも良い。問題はその行動が何を意味しているかだ。」

「それも分かる？」

「多分。少し長い説明になるだろう。本来、幻想郷の結界を破るという目的であれば膨大なエネルギーを吸収できる西行妖を操ってそのエネルギーを利用するだけで良い筈だ。それなら全員で一斉に冥界を侵略すれば済む話だ。しかし、実際は3人という半分にも満たない人数でそれを実行した。」

「つまり地底に何か重要な事でもあるって訳？」

「そうだ。それこそがトレバーを殺した男「破壊神」だ。それを操るのが奴らの真の目的なんじゃないかと思う。」

「でも何故わざわざ幻想郷で？」

偶然かどうか、丁度同じ頃、ディック中佐も同じ事を話していた。

それを聞いているのは彼の「元」部下のポールだ。

「全く素晴らしい作戦だな。幻想郷でなら我々の目が届かず、それを実行出来るという訳だろう。だがあれは非常にリスクが高い。失敗すれば我々は少なくとも甚大な被害を被るだろう。それを成功させるためにあれだけ大量の「トランセンドー」を用いた訳だな。通常なら自我を保つ事など出来ない量だ。それでも失敗した時の為の保険が「カオス」という訳だな。あれなら絶対に失敗しない。あのプログラムはその為だ。だろうか？ポール。」

「……。」

何故ポールが黙っているのか、中佐は分からなかった。

「奴は危険過ぎる。何せ奴一人で戦略兵器に匹敵する程だ。あの鎧はその力を抑える為の物だ。だが、100%の安全が保証されなければ絶対に鎧を外してはならん。動かしてはならん。我々も滅びる可能性まであるのだぞ。」

「……。」

少なくともポールは何も言い返せなくて何も言わない訳では無い、と中佐は感じた。

「教えろ、何故そこまでして「破壊神」を操ろうとする。何故「コントローラー」や「カオス」、大量の「トランセンドー」まで持ち出そうとする。」

「……。」

まるで何かタイミングを待っている様だ。

「教えろ!!!」

もう遅かった。

扉から2人のエージェントらしき人物が入って来てディック中佐を取り押さえたのだ。

「何時の間に呼んだんだ……。」

「心配いりません。貴方にとって必要無い記憶は消されますから。」
(阻止しなくては……………。)

「それで、その「破壊神」とか「コントローラー」とか「カオス」って一体どんな奴なんだ？」

魔理沙が疑問を抑えられずに聞いた。

答えが遅れて出たのはすこし整理した為か。

「…………… まずは「コントローラー」は2つ名で本名はルーラー、奴は人間を操るといふ能力を持っている。あのローブの男だ。「カオス」はルーラーを元にして作られた「エネルギーオン体」だ。エネルギーオンで擬似的な肉体を作っている。」

「だからあんな真っ黒な見た目なんだな。」

「ああ、ユニバーシウムを利用してそれで行動や維持に必要なエネルギーを供給している。体の内部にあるユニバーシウムを破壊する事で倒せる。」

「ここまで一通り説明したアダムだが、本来彼は知らない筈の事である。」

何故知っているのかなど彼にとっては今やどうでも良い。

今はそれを利用するだけである。

「そして、「コントローラー」と「カオス」には「破壊神」を操るといふ目的についてだが、「破壊神」に関しては詳しくは分からない。しかし、それ程の力があるという事は確かだろう。」

「あのデカイ男だっけ。私と霊夢とアリス、そしてトレバーと合わせて戦っても全く敵わなかったからなあ。」

魔理沙が記憶を思い起こして言う。

「そして、その力を操る為の物が「トランセンドー」という薬品だ。トランセンデンド・マンの能力を向上させる。」

トランセンドーに関しては春雪異変時に現れた謎の男の急激なパワーアップを通して以前から知っていたが、その“名称”を知ったのはつい先程だ。

「でもそこまでして操るといふ事は余程の事情なのだろう。それ程力が強大なのか……。」

しかし、本来アダムが知らない筈の知識は肝心な所が抜けていた。

「……………」

「フツ、フへへへへ!!!」

リヨウは狂った様に笑っていた。

第三者から見たらまるで自分が追い詰められて頭がおかしくなった様に見えるだろう。

リヨウは全身が傷だらけに加え、痛覚を倍増された事による精神的な苦痛もある。

対するトレバーはある程度傷を負っているものの大したダメージにはなっておらず、相変わらず無表情のままだ。

彼はある意味で2体の敵に対峙していた。

奴は彼を、そして大量の罪無き人々を苦しめてきた存在。

8年前とつくに治った筈の「癌」が再発したのだ。

(止める！俺の友達なんだ！)

(だがそうしなければお前は生きられない、そうだろうか？殺せよ。お前も望んでいるだろう、あの感覚を。あれ程気持ち良い事など他に無い。)

(違う、俺はもう以前の俺とは違う。俺はもう「フロスト」の犠牲者を増やしたくない。)

(だがそれがお前の本性だ。俺から逃れる事は出来んぞ。さあ、あの力を使え。思い出せ、あの快感を。)

リヨウは何時の間にか“その力”を使っていた。

「ヒッヒッヒッヒッヒッ!!!」

リヨウは目の前の人間を殺したい衝動に駆られていた。

「……………」

対するトレバーは何も感情を見せていない。

リヨウが地面を蹴り、距離を詰める。

トレバーはそれを迎え撃つ。

リヨウが突き出す拳をトレバーが受け止める。

反撃にトレバーが右フックを放った。

リヨウはトレバーの右フックを離さない様に掴み止めた。

トレバーが腕を離そうと引っ張るが離れない。

「スピードではお前には敵わないが、何時もパワーだけは俺が上回っていたな。」

「……………」

そしてトレバーは右腕に寒気を感じた。

恐怖に身を震わせたのではなく、本当に寒いのだ。

何時の間にかトレバーの右腕は感覚を失っていた。

リヨウが更に握力を込めた瞬間、右腕は陶器の様に粉々に砕けた。引っ張られる力が急に解け、トレバーは後ろによろめいた。

左ストレート、右フック、左フック、右ブロー、左ナックル、右アッパー。

リヨウの連拳を受け、後方の岩に叩きつけられた。

続けて迫り来る跳び蹴りを横に避け、壁に足を着けたリヨウに向かって左肘を突き出す。

肘打ちが腕に阻まれ、そのまま手にエネルギーを込めながら裏拳を繰り返す。

裏拳はリヨウの腕に防がれたものの、相手の腕はエネルギーを送り込まれ、リヨウは神経がすり潰される様な痛みにとうち回る筈だ。

しかし、リヨウは顔を顰めただけだった。

「痛えなこの野郎！」

トレバーは人類共和軍の兵となった頃から現在に至るまで幻覚を利用して大量の人物を葬った。

あらゆる者が幻痛に苦しみ、死んでいく様を数え切れない程見て来た。

しかし、目の前のこの男はそれをまるで叩かれた程度にしか感じていない。

先程までは効いていた筈だ。

トランセンデンド・マンは空間から吸収したエネルギーを幾つかの“力”に利用している。

自身の出力増加（瞬発的出力増加）、自身の加速（持久的出力増加）、自身の防御（外部からの圧力、熱、振動、光、毒物、等の軽減・無力化）、自身の処理能力増加（神経伝達速度加速）、そして特殊能力を持つエクストラは特殊能力に利用する。

要するにエネルギーとはトランセンデンド・マンの並外れた能力を発揮するのに必要な“燃料”だ。

そして“燃料”は前述の様にあらゆるエネルギーに変化する。

その中の自己防御を利用して外部からのエネルギーをシャットアウトする。

以前は効いていたのに今は効かなくなった、つまり以前は防壁を打ち破れたが今は防壁が補強されて破壊出来ない。

それだけリヨウは“燃料”であるエネルギーの吸収量が増えたという事だ。

トレバーは寒気を感じていた。

実際に周囲の空気が氷点下に感じる程冷たい。

リヨウは周囲の空気中の熱を吸収し、それをエネリオンに変換している、それだけの事だ。

しかし、それだけの事でリヨウは力を倍以上に増し、トレバーは恐怖を覚えていた。

「……「フロスト」？」

トレバーがやっと言葉を口にした。

「フロスト」、正体は謎に包まれ、判明しているのは「熱を操る」という能力と「フロスト」というミドルネームのみ。

彼の正体を知った者は男、女、子供、大人、そしてトランセンデンド・マン、これらを問わず全員が命を奪われた。

「……リヨウ、お前が「フロスト」なのか?！」

トレバーは驚きの余り我を取り戻した。

しかし、リヨウはそれに対し、エネリオン塊を返した。

トレバーの脳内は驚愕に埋め尽くされ、避ける余裕も無かった。

目の前の人体が気化し、跡形も無く消え去る。

「フツ、フハハハハハハハハハハ!!!」

リヨウはそれが楽しくて仕方が無いという様に笑い狂っていた。

しかし、彼は我に返った。

力無く両膝を地面に着き、前に倒れた上半身を両手で支えた。

目に熱い感覚。

「……グスツ、グスツ……クソツタレ!!!!クソツ!クソツ!クソツ!クソツ!クソツ!クソツ!……あの野郎!!!!!!」

泣き崩れ、怒り狂う。

68 未知なるもの

カイルは光や音を遮られても、エネルギーやインフオーミオンの構造情報を知る事が出来る為、空間内の物質の情報を知る事が出来る。

また、エネルギーはその他エネルギーを構成する素粒子の為、カイルは空間の温度分布も知る事が出来る。

その為、少し離れた所で戦っていた2人の内1人の構造情報が熱によつて爆散した事を知った。

(トレバーが消えた？トレバーの防御力を遥かに上回るエネルギーはどうやって…… 周囲の空気の熱が低いな……。)

『レーザーが来ます！地下からも間欠泉が湧き出るみたいです！』

カイルの思考はさどりの警告によつて中断された。

伸びるレーザーの軌道に沿つて体を捻り、湧き上がる間欠泉に対してを横にスライドさせる。

(…… レックスやサムに伝わるテレパシーが暗号化されている……そうか分かった、あの男が「コントローラー」か！強力な情報処理能力とエネルギー量をもち他人を操るといふ能力を持つ。しかし何故「コントローラー」をこの世界に送り込んだのか…… まさかあの隣の男が目的か？だが今は集中しなきゃ。)

カイルが銃を向けた先は「コントローラー」である男、引き金を引き連射する。

しかし、銃弾は水の壁に阻まれ消滅した。

すると勇儀が前に大きく跳躍したかと思うと、水の壁を拳で突き破り、「コントローラー」へと殴り掛かる。

『勇儀さん、レーザーが来ます！』

それに向かつてサムが右手を向け、そのサムへ早苗と慧音が弾幕を放つ。

勇儀はさとりから受けた警告によつて咄嗟に飛び退き、サムは早苗と慧音からの弾幕を避ける。

突如電撃が走つたかと思うと萃香が目の前に手を翳す。

密度を高くされた空気塊は電気抵抗を増し、電撃を防いだ。

カイルがサムに向かって銃弾を放ち、早苗がそれを援護しようと弾幕をばら撒く。

対するサムはレーザーで攻撃をかき消しながら2人へと攻撃する。

「猫符「怨霊猫乱歩」！」

燐が唱えたスペルカードによつて髑髏型の怨霊が現れサムに向かって弾幕をばら撒く。

それに対し水の壁が出現し弾幕は一発も当たらなかつた。

（見た所レックス以外は接近戦は無理らしいな。あの未だに動かない男を除けばどうにかなるかも知れない。）『サムを相手する。援護してくれ。』

カイルが銃にエネルギーを溜めながら地面を駆け出した。

水の壁に向かって発射された銃弾は穴を穿ち、カイルがそこへ飛び込む。

サムの放つエネルギーが光を屈折する方向を予測し、地面を転がって躲す。

そこへレックスが風を纏いながら突撃する。

レックスの振り下ろしナックルは勇儀のアップーに打ち消された。

圧縮空気が勇儀を吹き飛ばし、背後から萃香が跳び蹴りでレックスを吹き飛ばした。

萃香は咄嗟に霧状になり、そこへレーザーが通り抜ける。

早苗からサムに向かって突風が吹き付けるがレックスによつて押し戻される。

そこへ燐が火の玉を連射したが、レックスの流体制御という能力によりプラズマである炎はレックスに操られ、跳ね返される。

『慧音さん、レックスは今2人の攻撃を凌ぐのに意識を使っている。今だ。』

『ああ、分かつた。』「始符「エフェメラリテイ137」！」

慧音が弾幕を放ち、レックスが回避動作を取る。

しかし、それだけで早苗の放つ突風を押し返せなくなり、燐の発射する火球も跳ね返せず押し止めるだけに留まつた。

カイルが走りながら銃を乱射し、サムがレーザーで攻撃を繰り返す

ながら銃弾を消滅させる。

カイルは現在を周囲状況を知る事で未来を予測する事が出来るが、攻撃の距離が縮まる程脳の命令が追いつかなくなる。

10mの距離ならサムが屈折させるレーザーの軌道を読み躲す事は出来るが、それ以上接近すれば予測は可能なものの体の動作が追いつかない。

しかし、その弱点は“今の彼ら”には通じない。

『方向……軌道……』

さとりが読み取った思考を直接送信する事で相手が行動するよりも早く動ける今では5mの距離でも躲せる。

横からの稲妻もさとりの能力によって既に知っている為、容易に回避する事が出来た。

(しかし妙だな。何故「コントローラー」はあんな消極的な攻撃なんだ？何かに脳の処理を使っているのか？……あの動かない男に何かをしているのか?)

カイルは思考を一瞬巡らせたが、すぐに目の前のサムに意識を向けた。

『不味い！光の束がまとめて来ます！』

さとりから送られて来た情報ではレーザーが体全体を覆う程方範囲の攻撃をする。

仕方なく体を斜め後ろにスライドし、レーザーに防がれない軌道で銃弾を発射する。

電光が走り、銃弾は防がれた。

電撃は周囲に広がり、大量のレーザーが空間を埋め尽くす。

体を回転させ回避動作を取るが完璧では無く所々に焼かれた痕が出来上がった。

銃弾で応戦するが全く届かない。

そんなカイルを援護する為さとりは切り札を使った。

「想起「テリブルスーヴニール」！」

彼女のスペルカードは使用する相手のトラウマを具現化する。

「コントローラー」には何故か通じなかったが、サムに対してはその

効果を発揮した。

サムは彼の弟、それはリョウによって爆散したレオである。

サムは彼から「出来損ない」と呼ばれていた。

彼は努力した。

レオに戦いを挑んだ事もあった。

しかし、彼はどうしても弟を超える事が出来なかった。

それ程の力をレオは持っていたが、何より彼の「波を操る」という能力自体がレオの「波と粒子双方を操る」という能力に及ばなかった。

弟の圧倒的なまでの力を見せつけられた彼はもはや弟を超えたいという願望すら抱かなくなった。

サムは「現在」ルーラーから「TSLCモード」という役割を与えられているが、実際の所彼はレオに不備がある場合の予備としての役割である。

さどりの唱えたスペルカードはサムを挫折させた力を再現した。

彼の操る「波」はその力によって跳ね返され、戦術的太陽光レーザー発射砲、言い換えればタクティカルソーラーレーザーキャノン、その頭文字を取った「TSLC」は「本来発揮する筈」の威力を彼自身がその身に受けた。

即死では無かったが体中が焼ける様に痛い。

そこへカイルが引き金を引き、サムは頭を打ち抜かれその命を終えた。

途端、地上から降り注ぐ光の柱が消えた。

さどりが嫌悪と罪悪感にその死体を見て思わず目を逸らした。

離れているさどりを「コントローラー」が発見し、観察する様に凝視する。

その様子と「コントローラー」からさどりへ思念波が送られるのをカイルが見ていた。

（そうか、人を操る仕組みが分かった。奴は相手の負の感情によって精神が不安定になったのを利用しているのか。）「こっちだ！」

音速の10倍で秒間20発という速度で発射された銃弾はルーラーの気を引いた。

『勇儀さんと萃香さんはそのままレックスを引き付けておいてくれ。さとりは勇儀と萃香の援護を頼む。それから早苗、燐、慧音さん、僕は次に「コントローラー」を相手するので手伝ってくれ。』

それぞれから聞こえて来る了解の意志。

（「コントローラー」の厄介な所は電子流を放ち、その範囲を自在に変える。1点集中も360度拡散も可能だ。だが全方向への拡散ならば電子の密度が減る筈だ。）

カイルが正面に、早苗が右に、慧音が左に、燐が後ろに、それぞれ回り込み、銃弾や弾幕を撒き散らす。

しかし攻撃は届く前に電子流によって霧散する。

（これで足りない？いや、そうだ。）『早苗、風を起こしてくれ。』

『えっ？はい！』『奇跡「神の風」！』

一瞬疑問を感じたが、早苗はカイルの頼みを信じ、スペルカードを発動した早苗。

「コントローラー」を吹き飛ばす突風が発生した。

自らも電子の風をぶつけ対抗するが、不導体で静電気を帯びにくくしかも循環する、つまり電磁力に影響されにくい、空気を相手するには不十分だった。

威力はある程度消されても「コントローラー」を怯ませる結果となった。

『燐、僕が突進するから僕に纏わせるように出来る限り火球を発射してくれ。』

『え？分かったけどどうして？』

理由が分からないまま、カイルが突進を始め、言われるがままに炎の弾幕を放つ。

炎を纏いながら突撃する様子はまるで少年漫画の様だ。

怯みから回復した「コントローラー」は向かってくるカイルへと電撃を発射した。

炎はプラズマの一種である。

プラズマとは物質が高温によって原子核と電子に電離した状態の事だ。

マイナスの電気を持つ電子は向かってくる電子流と反発し合い、電子流を跳ね返す。

プラスの電気を持つ原子核は向かってくる電子を引き付け、威力を殺す。

炎の繭に身を包んだカイルは大したダメージを受けず「コントローラー」への距離を詰めた。

左足を前に右足を後ろに、右足を左方向へ捻りながら地面を蹴り、その捻りを腰、肩、腕へと伝え、右腕を伸ばす。

カイルの体重の乗ったストレートが「コントローラー」の顔面に炸裂し、転ばせた。

『一斉攻撃だ！』

カイルがストレートを決めて反対側へ移動し、早苗、慧音、燐からの弾幕が「コントローラー」へと振り撒かれる。

「コントローラー」は電撃を放つ暇も無く攻撃を受け続ける。

そこへカイルが引き金を引いた。

エネルギーを2秒間溜めた銃からは約100000000J、TNT換算で2・38kg分のエネルギーが放出された。

銃弾は標的の頭蓋骨を破り、脳組織を破壊し、反対側の頭蓋骨も破り、余ったエネルギーが外へ放出された。

カイル以外の3人がホツとし、気を抜く。

「倒したんですよ……。」

しかし、それに答えたカイルは以前よりも深刻そうな顔をしていった。

「終わって無い。おかしいんだ。司令官を潰された筈なのにレックスがまだ動いている。」

「えっ?」

後方を見ると確かにレックスがまだ勇儀と萃香と戦闘中だった。

「確かに「コントローラー」からレックス達に命令の思念が常に送られていた。つまり僕達を攻撃する理由が無くなった筈だ。防衛本能による攻撃であっても命令が解かれ周囲状況を確認するタイムラグがあっても良い筈だ。それに「コントローラー」の傍に立っていたあの

男もまだ動いていない。命令が解かれたなら自由に動き回っても良い筈だ……プログラムによる命令か、だがそれでは司令官の意味が無い……それとも……。」

カイルは仮説を立てる途中、その答えを知った。

微弱だが何処からかレックスと大柄な男に命令信号が送られていた。

その発信源はこちらに近づいていた。

そしてカイルは驚愕した。

「……有り得ない！ どういう事だ?!」

「どうしたんですか？ カイルさん！」

早苗が心配そうに声を掛けるが、彼の意識はその“現象”に向けられていた。

カイルはそこらの病院が備える測定装置よりも正確に生物が持つ脳波を感知する事が出来る。

生きている生物は誰でも脳波を持ち、それは人間も例外で無く、そして脳波パターンは生物、更に個体ごとに違う。

クローンだとしても器官・組織・細胞・分子の複雑な配置や性格、環境、果ては腸内細菌にも僅かな誤差がある為、脳波パターンは僅かに違うだけだ。

それは生物の皆が同じ原因で死なない為の「全滅を防ぐ」という生存本能の為である。

つまり同じ脳波パターンを持つ人間は双子やクローンであっても2人として居ない、筈だ。

しかし、信号の発信源からは「コントローラー」と全く同じ波形の脳波を感じるのだ。

“それ”が遂に姿を現した。

2 m近い身長、光を全く反射しない体色、赤い目、「コントローラー」に似る要素など微塵も無い。

しかし脳波の違いは全く無い。

カイルは我に返った。

何故なら“それ”を追い掛ける者達の存在を知ったからだ。

丁度アダム達が姿を現した。

「どこまでも逃げて行って、しつこいわね。」

「全く、何処へ向かってるんだ？」

霊夢と魔理沙がぼやく。

「向こうはこれ以上逃げられない。だが油断するな。わざわざ行き止まりへ行くのは理由があるからだ。」

アダムが2人へ忠告する。

“それ”が大柄な男と向き合った。

“それ”から放たれるのは命令の信号。

カイルはそれを構成する物質を“視た”。

体の中心に球体があり、それを“人型のエネルギー”が覆っている。

(この球体は……ユニバーシウムか……そうか、「エネルギー体」だ！通りで脳波パターンが同じな訳だ。)

「エネルギー体」とはエネルギーによる力場によって構成された“擬似的な生物”だ。

それには変身する生物を構成するインフォームの構造をエネルギーにプログラムする必要がある。

また、プログラムを書き込むためのエネルギー源も必要である。

ところでカイルは中心の球体がユニバーシウムである事を知った。

ユニバーシウムは空間内に存在しているエネルギーを吸着する性質があり、またエネルギー体を作り出し維持するのにエネルギーを消費し、その失われた分のエネルギーを吸収する。

これがユニバーシウムを利用した擬似的な永久機関である。

更にエネルギーは宇宙を構成するダークマターと同様に宇宙空間が広がっても密度が保たれるという性質を持ち、質量・エネルギー保存の法則が当てはまらない。

要するにエネルギーは幾ら使っても尽きる事が無い。

そしてユニバーシウムにプログラムを書き込めば指定の通りにエネルギーを変化させる。

このユニバーシウムの球体に記載されているのは「コントロー

69 願望

「カイルさん、どうすれば……。」

早苗が絶望感を覚えたのか、そして安心感を求める為なのか何故かカイルに問い掛けた。

「…… 僕も分からない。相手の正体や能力や性質が分からない以上は何が有効で何が不具合かも分からない…… ただ今はそれを知らなければならぬ。」

カイルの答えに対し早苗の表情は不安によって動揺が走った。

何せ仲間であり、“操作されている”筈のレックスであっても動揺しているのだ。

その男がレックスに向かって右手を差し出し、エネルギーの噴流が発射される。

レックスが左手を突き出し、水の壁を建築してエネルギーを防ぐ。

エネルギーの噴流が壁を水素と酸素に“分け”、その威力は留まらずエネルギーはレックスに吹き付ける。

酸素、水素、炭素、窒素、カルシウム、鉄、リン、その他微量な物質。

レックスの身体はそれらに“分けられた”。

常温で気体の元素は周囲に拡散した。

圧力によってリンやナトリウムやカルシウムが自然発火し、酸素、水素、炭素が反応して僅かばかりの火が発生した。

やがてその火も消え、後に残るのはほんの少しの人体を構成する常温で固体の元素の塵。

カイルはエネルギーが作用した様子を“見る”事で何が起こったのかを知った。

(分子構造を“破壊”したのか?!何てエネルギーなんだ!)

カイルが無言の驚愕を上げた。

「……。」『何故逆らった!「サーファー」への攻撃などという命令は与えていない!少なくともお前は私に完全にコントロールされている筈だ!』

「……………」『その答えは言った筈だ!』

さよりの第3の目は暗号化された無音の会話を“聞き取って”いた。

(逆らった?)『カイルさん、あの大柄な人ですけどあの黒い人に逆らっている様です。』

『それは本当かい?待ってくれ、少し考えてみる。』(じゃああの「コントローラー」に似たエネルギーオン体を倒せば……………いや、逆らっているとはいえコントロールが解かれれば何が起こるか分からない……………それ以前に分子構造を“破壊”する力も非常に大変だが、まずあのレックスをあつさりと“破壊”したエネルギーオン量自体が相当だ……………)

カイルは暫く考え続けた。

そしてそれを心配そうに見る早苗とさより。

「破壊神」が手を差し向けたレックスが塵となつて消えた。

「何だ今の?!消えたのか?!」

魔理沙が驚きの声を上げた。

紫の「結界を操る程度の能力」は元々ある性質にエネルギーオンやインフォームオンを加える事でその性質を確変する能力だ。

「……………分子構造を破壊したらしいわ。恐ろしい力よ……………」

だから性質を理解できる紫はどんな現象が起こったのかを理解出来た。

「恐ろしい力ね……。」

そう呟いたのは幽々子。

幽々子は「死を操る程度の能力」は相手を死なせるといふ力を持つが、今日の前で起きたのは生と死双方の痕跡すら残さず消し去る出来事だ。

突然、アダムは“知らない筈”の記憶を“思い出した”。

「……そうか、分かった。」

「えっ？何が？」

アダムの呟きに訊く霊夢。

「破壊神」の事だ。奴の能力はその名の通りあらゆる物を「破壊」する。今のは分子結合を「破壊」したのだろう。そして奴こそが60年前のニューヨークテロの原因だ。」

カイルは考えながらも不測の事態に対処する為、ある程度意識を外に向けていた。

カイルはエネルギーオンやインフォームオンに関する知覚だけで無く、視力や聴力といった五感まで優れている。

だから、偽「コントローラー」の反対側にいるアダムの言った事も聞こえていた。

「アダム、詳しく言ってくれ！」

「ん？分かった！」

突然呼ばれて振り向き、了解の返事をしたアダム。

「本当にニューヨークテロの原因なのか？」

そう訊くカイルの声は強張っていた。

ニューヨークテロとは、地球管理組織が起こしたと言われている地球歴前60年程前にノースアメリカ―ニューヨーク（地球歴前のアメリカ合衆国ニューヨーク市）で起きた爆発テロである。

核爆弾に似た爆発により死者が400万人を超えた史上最悪のテロと言われており、爆発は核分裂でも核融合でも対消滅でも無く質量を直接エネルギーに変えた事が原因だと後に知られている。（核分裂や核融合による放射線や中性子線が観測されず、対消滅で起こるエネルギーの一部をニュートリノが持ち去る現象も観測されなかった。）

その為、別名「マス・ボム」と呼ばれており、そう言われる地球管理組織の秘密兵器が存在していると伝えられてきた。

またこのテロが起こった事により、世界が徐々に混乱状態に陥り、崩落した世界を地球管理組織が支配した。

「ああ、奴は「破壊神」とも呼ばれている。何故僕が知っているのかは分からない、思い出した様な感覚だ。だが恐らく間違い無い。」

「そうか。ならば質量を「破壊」する事でエネルギーに変換されるという訳だな。何て事だ、まさか「マス・ボム」の正体が此処に居るなんて……しかし、妙な事だ。わざわざ幻想郷に戦略兵器を持ち込んだんだ？質量破壊によるエネルギーで幻想郷の隔壁を壊す事は可能な筈だ。だが、直ぐにそうしない。何か裏でもあるのか？」

その答えをアダムが言った。

「破壊神」を操る為だ。まだ完全にコントローलし切れていない……それ以上の事は分からない……。」

「いや、十分参考になったよ。今この場、戦闘に関する理由で無くても、あれ程の力なら権力や安全性に関わる可能性もある。だが今はそれにどう対処するかだ。」

気持ちを切り替えて対策を練り始めるカイル。

（エネルギーの噴流を吹き付けるならば遮蔽物である程度は軽減できるのだが、あのエネルギー量では幾ら遮蔽物があっても……いや、

その前に、)『さとり、あの「コントローラー」とあの男、「破壊神」のやりとりの意味を理解出来るかい？暗号化されているのか僕には信号を感知しても意味は読み取れないんだ。』

『えっ？私は直接考えを読めるので出来ますよ。』

『良かった、それじゃあそのやりとりを僕に伝えてくれないか？』

『はい！』

さとりはそう伝えると相手2人の脳から脳への会話を聞き取った。

『次は他の奴らを消せ。早くしろ。』

『ふぎけるな！俺はもう二度と誰も殺したくない！』

(二度と、という事はやはり彼がニューヨークテロを起こしたのか。しかし彼自身がこんなにも反抗して良く実行出来たのだろうか。)

カイルは話の内容を確認しながらある程度仮説を立てた。

『だがあの場に居た400万人を殺したのは紛れも無くお前だ。他の誰でも無い。ただお前の感情とやりに触れただけだろう。』

『……それは奴らが悪い！』

『しかし、お前はそれで理性を失い、関係無い奴らを殺した。それが“お前達”の弱点だ。だから私がお前を操ればお前の弱点も無くなる。

お前の意志で傷付く者は誰も居なくなる。』

『……それは俺の意志での話だ！お前達の意志ではどうなんだ！』

『我々はお前の力を有効活用出来る。』

(理性を失い、テロが起きた?)

「コントローラー」の話は続いた。

『お前をニューヨークの更地から“見つけた”時“我々”は確信した。“我々”こそが人類の進化の延直線上に居ると。』

(“見つけた”?管理組織が操っていたんじゃないのか?)

今必要な事とそうでない事に整理しながら聞く。

『だがお前は“我々”よりも遥かに強大な力を持っていた。お前を捕獲し、お前を調べ、お前を操ろうとした。しかし、お前は全てを拒否し、お前に関しての研究は何もかも行き詰った。辛うじてお前の力を抑制するあの鎧が完成した程度だ。』

(テロは管理組織では無く彼が理性を失った時、そして管理組織の管

理下に置かれる前だったと考えて良さそうだな。」

『お前は冷凍保存され、その後私とそのプログラムが開発された。この私「ルーラー」は今お前にこうして話しているがそれは「ルーラー」の中の「コントローラー」という能力では無くユニバーシウム供給式エネルギーオン体「カオス」の中にある「コントローラー」というプログラムである。その能力やプログラムは表向きの目的として、死亡した兵士を蘇らせる「兵士再生計画」と脳の直接支配による「兵士改造計画」そして兵士だけでなく人民を直接的に操る「人類操作計画」の一部として開発された物だ。だが実質的にはお前「破壊神」をコントロールする為の物なのだ。』

『……………』

カイルはさとりから受け取った情報を理解するのに集中し、「破壊神」は何も言い返せなくなっていた。

『勿論それが知られば安全性の為反対する者が多いだろう。だからお前に鎧を付けて安全性を保障し、戦闘データを取るという名目を与える事で持ち出せた。そして幸いにも幻想郷の内部を詳しく知る為の観測機器の開発が遅れている為、何が起きているのか詳しく知る為はない。そして解放されたお前を操る。あの鎧の脱着は本来ディック中佐の許可や生体認証が必要だが、その認証に使われる信号パターンを読み込み、解除する事が出来る。最も、あの反乱軍のトレバーと言う男がその前に外してしまったがな。』

(ならば「コントローラー」を倒せば大丈夫か、「破壊神」自体はここらから何もしない限りは危害は無さそうだな。)

「カイルさん大丈夫でしょうか？」

早苗が黙り込むカイルを心配して呟いた。

「さあ、何か作戦立ててるんでしょ？アダム、貴方はどう？」

霊夢が思った事をそのまま述べ、そして何となくアダムに質問した。

「僕も良い案は今の所……………」

言い終わる前に突然の頭痛がアダムを襲い、頭を手で押さえる。

「アダム、大丈夫？」

霊夢がそんなアダムの様子を心配して言った。

「……………誰だ？」

一言言い残したアダムは地面を駆け、「カオス」へと接近した。

「カオス」の掌からエネルギーオン塊がアダムに向かって発射された。

アダムはエネルギーオン塊に対して体を捻って避け、素早く取り出した2丁の銃を「カオス」目掛けて乱射した。

銃弾を避けながら更にエネルギーオン塊を連射する「カオス」。

アダムは攻撃を避けながら接近し、銃をナイフに変え、左のナイフを真っ直ぐに突き出した。

「カオス」が迫り来る刃を体を逸らして避け、続けて来る横薙ぎに対して腕を出した。

何の音もせずに腕でナイフが受け止められた事に驚愕したアダムは左足で膝蹴りを繰り出す。

アダムからの膝蹴りをもう片腕で防ぎ、次なるもう片足からの上段蹴りを同じ腕でガードした。

右足の蹴りは防がれたが、反動によって後ろに下がり距離を取ったアダム。

「……………」

「……………アンダーソン。」

突然「カオス」から呼ばれたアダム。

「何だ？」

一瞬は驚いたが、短く応答する。

「お前は何かをしたと思う気持ちになった事があるか。」

合成音声の様なきこちなく抑揚の無い声だった。

「どういう意味だ？お前の質問に答えるならそれはある。」

「私は「カオス」。「破壊神」を操る事が目的で作られた。そして私は「ルーラー」を元に作られ「コントローラー」と言うプログラムを書き込まれた。」

「それが何だと言うのだ。」

「カオス」はわざとらしく間を置いて話を再開した。

「私にもその気持ちは湧いて来た。プログラムの複雑反応か、「ルー

ラー」の性質全てを受け取った所為なのか、それとも別の理由か。」
話の要点が見えて来ない。

「だが理由はどうでも良い。今大事なのは私には願望という感情の一種があるという事だ。私には「破壊神」を操るという目的があるが、その目的が私の興味を引き、その為にはどうなるのか、どうすれば良いか、考え続けて来た。」

「カオス」は別の方向を振り向くとその方向へゆっくりと歩き出した。

「何処へ行く。」

「そして今それを達成する。目的と願望を。不思議なものだ。目的はあっても願望が無ければ私はこんなある種の快感を味わう事も無いだろう。」

「お前はプログラムじゃないのか？そもそも感情自体お前達が無くすべきだと言っているではないか。」

「じゃあ私からも訊くが、お前は幻想郷の結界を破る目的の為に感情を抑えられているクローンなのではないか？ガミジンによってそう伝えられただろう。それでいてお前は願望があると先程言ったじゃないか。確かに我々は人類における感情は不安定だとして不必要とされている。しかし私自身そうは思っていないも感情が思考を支配している。まるで訳が分からない。」

「……………」
アダムは言い返せなかった。

それでも「カオス」の話は続いた。

「目的によって興味が惹かれ、願望が芽生え、考え、導かれ、そして……………」

何時の間にか「カオス」は「破壊神」の背後に立っていた。

「…………… 達成する。その瞬間は最高の気分だ。もしやこの感情も目的を達成する為の私のプログラムの一部なのかもな。」

アダムは直感的に地面を蹴った。

ザクッ！

「カオス」は勢い良く「破壊神」の背中に手を着き刺した。

70 破壊

「カオス」の姿はみるみるうちに「破壊神」の突き刺した背中から内部へ入る様に姿を消した。

地面を駆けていたアダムはそれに間に合わず、途中で足を止めた。

「一体何?!」

「吸い込まれたのか?それとも入って行ったのか?」

突然の出来事で霊夢と魔理沙が共に驚きの声を上げた。

「カイルさん、分かりますか?」

「……自分から入ったんだ。何故なのかは分からないが、奴「カオス」は「破壊神」を操りたいという願望を持っていた……。」

カイルは一旦そう言い終えると「破壊神」を構成するインフオーミオンの構造を見始めた。

体表から空間中のエネルギーを吸収しているが、脳ともう1か所に集中的にエネルギーが流れ込んでいる。

通常トランセンデンド・マンが体表から吸収したエネルギーは一時体内に均一的に蓄える。

それを必要な働きの都度、必要な部位や器官、組織や細胞を働かせる為にエネルギーを集中させる。

それが今、「破壊神」のエネルギーは心臓の下辺りに集まっている。そこにある物質が何で構成されているのかカイルは分かった。

(ユニバーシウムだ。あそこに「コントローラー」の本体があるのか。そして……)

ユニバーシウムから「破壊神」の脳へ、直接電気信号が送られている。

「直接強力な電気尊号を送ってコントローラーを試みているらしい。「破壊神」の脳あるいは心臓にダメージを与えても「カオス」自体がその肉体を操る。だから止めるには心臓の真下にあるユニバーシウムのエネルギー供給機関を破壊しなくては。それには膨大なエネルギーが必要だ。だけどまずは作戦を練る必要がある。かと言って相手が待っていてくれる訳では無い。さとり、「破壊神」と「カオス」の

目的と願望を失い、あとはどうでも良い。
しかし周辺に居る反乱軍と幻想郷の奴らは私を敵視している。
自分に襲い掛かる危機は守らねばならぬ。
生物としての当然の行為だ。
彼の目的は自己防衛に変わった。
自己を守りたい、という願望も目覚めた。
ならばこの“力”を使おう。
そしてその力はどれ程の物なのか興味湧いて来た。
彼は地面に手を置いた。
その“力”を發揮する為だ。
かつて一瞬にして400万人を葬った力を。

「破壊神」が手を地面に着けたのはアダム達にも見えた。

(アダム、逃げろ……。)

誰かがそう言った気がした。

実はこの声アダムに無い筈の知識を与えていた。

その声に対する記憶は無いが、何か懐かしい気がした。

「…… 奴から離れろ！」

アダムの叫び声は地霊殿に響き、その場に居る者全員の未知に対する恐怖を煽った。

全員が警告通りに従い、「破壊神」から離れる。

「…… 間に合わない、何か遮蔽物に隠れろ！」

各々そこら辺にあった岩や壁、窪みに隠れる。

「一体何でしようか。」

「見てみる。」

カイルが能力を使って“見た”事、「破壊神」が触れた土が「破壊」された瞬間だった。

「伏せて！」

0.000035g分の土がエネルギーに変換された。

アインシュタイン方程式に当てはめるとTNT換算で75tものエネルギーだ。

160年以上も前に作られたガンバレル型ウラニウム活性実弾L11やM65 280mmカノン砲のW9砲弾の200分の1の威力である。

一瞬で爆破地点付近の土砂が気化・液化し巻き起こされ、空気は加熱膨張し衝撃波を発生させた。

核反応による放射線の発生や対消滅によるニュートリノがエネルギーを持ち去る現象は起きず、純粋な熱エネルギーが周囲に広がった。

中心は瞬間的にプラズマ状態となり、熱が閃光と共に広がる。

衝撃波はあらゆる物体を吹き飛ばし、それは周囲に居たアダム達も例外では無かった。

吹き付ける岩石蒸気が壁や天井、岩、地面までも溶かす。

暫くして熱風と爆風と閃光は止んだ。

「皆、無事?!」

紫が叫ぶ。

返事はある程度返って来たがどれも元気が無い。

「……………危なかったわね。」

「いってて……………今の何だ?」

「僅かな物質をエネルギーに変えたんだ。今でも1mgにも満たないだろう。」

「ミリグラム?ええと1匁が3.75グラムだったっけ、ミリだからその1000分の1の更に…………… たったそれだけか?!」

魔理沙の質問にアダムが答え、それに驚く魔理沙。

「大丈夫かい？」

カイルが傍に居た早苗の無事を確認する。

「あ、ええ大丈夫です……でもちよつと恥ずかしいんですけど……。」

早苗が少し赤面しながらそう言ったのも無理は無い。

何故ならカイルは早苗を庇う為に上から覆い被さる様な体勢だったからだ。

「ああ、すまない。」

カイルの方はリアクションもする事無く退いた。

「怪我は無いかい？」

「ええ。他の皆さんは大丈夫でしようか。」

そう訊かれたカイルは辺りを見回すと言った。

「……皆命に別状は無いみたいだけど、気絶している人数が多い。」
起きているのは、アダム、霊夢、魔理沙、紫、カイル、早苗、慧音、さとり、この8人のみ。

中心近くの地面は溶けてクレーターが作られている。

天井は高熱で溶け、キノコ雲が舞い上がっている。

そして爆心地には依然として無傷の「破壊神」が立っていた。

「自分が爆発に巻き込まれて平気なんて……。」

「自分だけダメージを受けない様にエネルギーバリアを張ったのか。自分が影響を受けない様な爆発の仕方だったのか。質量から変換したエネルギーの一部を防御に利用したか……。」

バコーン!

地面が衝撃に凹み、物体の速度が音速を超えた爆音だった。

咄嗟にアダムが両腕を胸の前で交差させた瞬間、その姿が消えた。

アダムは後方の岩壁に勢い良く叩きつけられ、そして次なる攻撃を避けるべく前に跳び上がった。

ズドーン!という音と共にアダムが叩きつけられた岩壁が更に凹んだ。

アダムは宙返りしながら「破壊神」が岩壁に拳を打ち付けていたのが見えていた。

後ろを向き、2丁の銃を乱射する。

「破壊神」は身動きせずまるで銃弾が当たるのを待つてその場に立って居る様だった。

銃弾は「破壊神」の各部位に命中したが、ダメージを受けた様な素振りを見せない。

突然相手の姿が消えた。

次の瞬間アダムは背中に強い衝撃を受け、地面に叩きつけられた。

「アダム! 霊符「夢想封印」!」

「なら私も! 恋符「マスタースパーク」!」

「待て! 攻撃……!」

カイルが攻撃するな、と促そうとするが台詞を言い終える前に霊夢と魔理沙はスペルカードを発動させていた。

「破壊神」の周囲を大量の札が囲み、前方から高出力広範囲のレーザーが襲い掛かる。

攻撃は全て命中し、爆風で周囲に塵を撒き散らした。

突如、煙が中央から吹き飛ばされ、中心に居る無傷の男の姿が見えた。

「まるで効いて無い?!」

驚愕の声を上げたのは魔理沙。

「やむを得ない、こうなったら……。」

カイルが素早く銃を構え、銃にエネルギーを送り込み、狙いを定める。

周囲の視界から「破壊神」の姿が消えた途端、カイルは引き金を引いた。

音速の10倍を誇る銃弾は標的の肩を掠めた。

外したのではなく躲かれた、それをカイルはハイスピードカメラの様に正確に見て知っていた。

「今度は僕が逃げる番か……。」

銃を乱射して牽制し距離を取ろうと試みるカイル。

不意にカイルが右足を勢い良く上に突き上げた。

次の瞬間、カイルの踵落としが「破壊神」の駆け込みストレートにぶつかり相殺した。

カイルは反動で後方へ宙返りしたが、次の瞬間腹に強い衝撃を受け、岩壁に叩きつけられた。

痛みから解放され前を向くと、目の前には跳び蹴りが迫っていた。

「はあっ！」

早苗の掛け声と共に「破壊神」に向かって空気塊が叩きつけられ、跳び蹴りの軌道を逸らしカイルを助けたが、相手には大したダメージは無い様だった。

「駄目だ、危険だ！」

「カイルさんこそ危ないじゃないですか！私じゃなくて自分の心配もして下さいよー！」

「破壊神」の標的は早苗に移っていた。

（危ない！）

条件反射的に引き金を引いたカイル。

銃弾は命中したが致命傷には全く届かない。

「破壊神」が振り向いた。

（攻撃した者に対して即刻反撃、単調なのはせめてもの救いか。だが効かないんじゃない手だな……。）

「境符「四重結界」！」

「未来「高天原」！」

紫と慧音が唱えたスペルカードは「破壊神」の気を引いたが、その体は支障無く動いている。

(やはり面倒臭い。さっさと消すべきか。)

すると「破壊神」が2人へ右手を差し伸べた。

「不味い！想起「テリブルスーヴニール」！」

さとりは切り札を放った。

「破壊神」のトラウマが蘇る。

西暦2060年、アメリカ合衆国ニューヨーク市。

その中の高層ビルが建ち並ぶマンハッタン区。

少年はそのど真ん中に居た。

それを囲むのは、数え切れない程の小銃や機関銃やライフルやロケット砲を構えた兵士、何十台もの戦車や装甲車、何十機ものヘリコプター。

見えない所からは遠距離ミサイルや衛星兵器も狙っている。

その外側では大量の住人が逃げ惑っている。

そして、少年は腕に少女を抱えていた。

動いていない、恐らくは死体。

少年は涙を流していた。

少年は怒り狂っていた。

少年は無意識の内にその“力”を發揮した。

人類進化の延直線上にあると言え、最も優れた“力”だ。

少女の身体を構成する物質が”破壊”され、エネルギーに変換された。

周辺の兵士や兵器やビルディングスは蒸発した。

ニューヨーク市は一瞬にして灼熱に包まれた。

当時ニューヨーク市には約1200万人もの住民が居た。

その内、死亡者は400万人以上、残りおよそ800万人は何らかの重軽傷を負った。

更に周辺市も少なくない被害を受けた。

そして、爆心地に少年が無傷のまま1人だけ立って居た。

たった1人で、涙を流しながら、怒り狂いながら。

「何これ……?」

「破壊神」が大きく動揺した。

(何だ?コントロールが効かない!)

慌てる「カオス」だが、それはすぐに収まった。

強力な電気信号で「破壊神」の脳を直接コントロールし、感情を抑えた。

落ち着きを取り戻した「破壊神」は右手をさとりへと向けた。

「……!」

エネルギー塊が発射される。

さとりが自分の体が崩れてしまうという恐怖に目を瞑った。

私は消える。

死を覚悟した次の瞬間、何か大質量体が動く様な音がした。
ゆっくりと目を開ける。

目の前には土の壁が立っていた。

「え？」

「皆、お待ちませ。」

声のした方を振り向いた。

声の主は洩矢諏訪子だった。

この土の壁は彼女の「坤を創造する程度の能力」、つまり大地を操る力による物であったのだ。

そしてその隣に立つ女性、八坂神奈子が居た。

「空、出番だよ。」

「うん、分かったよ。」

更にその隣にはさとりとのペットである霊鳥路空が居た。

「神奈子様に諏訪子様じゃないですか。何時の間に？」

「神奈子一人じゃ頼りなくてさ。」

「ちよつと質問は後でだ。」

冗談込みで質問に答えた諏訪子と早苗の質問を断った神奈子。

「空、その格好どうしたの？」

「ん？この神奈子って人からもらったの。」

全体的な容姿は以前と変わり無かったが、大きく違っている物があつた。

右足は固い金属の様な物に覆われ、左足は見た目はそのままだが何か強いエネルギーを持っている。

右腕には多角形のSF作品に出て来る様なアームロケットらしき物。

そして胸に真紅の大きな目。

この姿こそ、神奈子が磁気閉じ込め方式の核融合を実現する為に空に与えた八咫鳥の力が及ぼした姿だ。

八咫鳥とは日本神話における太陽の化身とされる。

3つの目と3本の足、つまり胸の第3の目とアームロケットもどきの第3足はその八咫鳥の容姿を表している。

「だからさとり様、任せて。核熱「ニュークリアフュージョン」！」
地底に小さな太陽が生まれた。

本質は「破壊神」と同じ。

原子核同士を衝突させ結合させる点はまるつきり違うが、その際に失われる質量はエネルギーに変換される。

そのエネルギーの塊が「破壊神」に襲い掛かる。

71 不完全

空の右手に装着している第3の足から強力なビームが発射された。核爆発と違い全体に広がるのではなく、方向性を与えられた熱は「破壊神」へと向かう。

「破壊神」が迫り来るビームに対し右手を翳すと、それだけで莫大な熱を持ったビームが左右に避ける。

彼特有の能力では無く、トランセンデンド・マンであれば誰もが持っている、「防壁」を張る能力だ。

「核融合の力をあんなにあっさりど……………」

「いや、まだ燃料がプラズマ状態だけで十分な圧力が無い。神奈子さん、あの子は本当に核融合が使えるんですか？」

カイルは早苗の驚きに満ちた眩きの間違いを訂正し、自分の疑念を神奈子に訊いた。

「…………… 幻想郷は外の世界の正反対な鏡の様な世界だから、外の世界での磁気閉じ込め式核融合は維持が出来ないというだけで反応が不可能な訳じゃないから、幻想郷においても不完全なままなのだろうか……………」

「そうですね……………」

神奈子から得た答えは不完全な推測だった。

「……………」

アダムはふとある事を思い付いた。

「カイル、奴の脳の活性状態を見る事が出来るか？」

「ん？それは「破壊神」自体か「カオス」の方か、」

「「破壊神」の方だ。出来るか？」

カイルの台詞を先越して訊く。

「出来るよ。言葉じゃ伝わりにくいから直接映像を送った方が良いか。」

「ああ、頼む。」

カイルは「破壊神」の脳に意識を向け、構造、信号、活性度、あらゆるデータを受け取り、テレパシーを介してアダムに伝える。

ある部分が全く活動していない代わりにある部分の活動が盛んになっっている。

感情を司る前頭葉の活性が無く、逆に視覚・聴覚・視野を司る後頭葉と知覚・運動機能を司る小脳そして脳と身体との神経を繋げる脳幹は活性している。

手っ取り早く言えば前頭部が活動しておらず、後頭部は盛んに活動している。

「成程、前頭葉の活動を停止させる事で思考や感情をシャットアウトして操っていたのか。」

「後頭部に血液が集中している、やはり他の奴らと同じく後頭部が弱点か。霊夢、魔理沙、手伝ってくれ。」

「他の？どういう事だ？」

アダムはカイルの質問に答える間も無く地を駆けた。

「待て！まだ……」

止まれと呼びかけるカイルを余所に、両手には何時の間にかロープの繋がれたナイフ2本を持っていた。

強力な電荷と熱を持ったビームを押しつける「破壊神」に向かって投げる。

「破壊神」がそれに気付き、空いた左手を向ける。

掌からは分子構造を破壊する作用を持ったエネルギー塊が発射された。

しかし、ナイフが突然横にスライドし、命中しなかった。

一瞬驚きの表情を見せた「破壊神」だったが、今度は狙いをアダムへ定め直しエネルギー塊を連射する。

突然、横方向からのエネルギー塊がそれらを撃ち落とした。

見ると霊夢が何かを発射する様に両手を構えていた。

今度は別方向から太いレーザーが「破壊神」に襲い掛かる。

魔理沙が八卦炉を翳していた。

しかし、レーザーは「破壊神」が左手で発した防壁によって防がれる。

それがアダムの狙いだった。

2本のロープがアダムの思考通りに「破壊神」へと伸びた。

1本は心臓に、1本は脳に。

両手を塞がれた「破壊神」は体を逸らす事でナイフを避けた、つもりだった。

アダムの命令によって直進中のロープは「破壊神」を少し通り過ぎた所で軌道を変えた。

ロープは「破壊神」の体に巻き付いた。

アダムがロープを引っ張り、僅かだが「破壊神」のバランスを崩した。

反動で加速し、ロープを巻き戻した。

「破壊神」はロープを振り解こうとしていたので外側からの力を失うと更にバランスが崩れた。

そこへアダムが右手に握ったナイフを突き出す。

背後からは霊夢が弾幕を撃って援護していた。

空いた足に防護障壁を張って蹴りを繰り返す事で弾幕を弾き、正面から向かってくるアダムに向かって回し蹴りを繰り返す。

しかし蹴りは空を切り、アダムは宙を舞っていた。

降下と同時にナイフを体の内側から外側へ薙ぎ、「破壊神」の後頭部を斬り裂いた。!!!!

「ギヤアアアアアアアアアア!!!」

突如にして辺りに怪物の様な雄叫びが響き渡る。

防壁のコントローलは失われ、空からのビームと魔理沙からのレーザーが命中し爆発を起こした。

「そうか、操られている状態だから血流の集中している後頭部を狙えばダメージは高い。何故分かったんだアダム？」

「以前似たような事を体験した。」

「それって確かレミリアが異変起こした時にその妹のフランドールが暴走した時だっけ？」

カイルの質問にアダムは短く答え、霊夢が記憶を巡らせた。

爆風で舞い上がった塵の中から「破壊神」が姿を現した。

「完璧な核融合じゃ無いとは言えあの熱量を受けて平気なんて。い

「破壊神」は本能(?)のままに苦痛を与えた元凶であるカイルへ突進を始めた。

「させないよっ!」

諏訪子が地面に手を置くと地面が隆起し「破壊神」の行き先を邪魔する。

「破壊神」が手を向けると進行方向にある土の壁が消え失せた。

「私もだっ!」

「私もですっ!」

神奈子と早苗が両手を突き出すと空気塊が発射され「破壊神」を押し戻そうとする。

空気塊は「破壊神」の表面の防壁にぶつかり、「破壊神」は押し戻されはしなかったが目に見える程の減速はした。

(あと12秒。)

左方向からアダムが2丁の銃を乱射しながら突撃して来る。

対する「破壊神」は銃弾を身に受け止めながら左回し蹴りを繰り返して迎撃しようとする。

アダムからナイフが2本飛んで来た。

当たっても突き刺さる事は無いが巻き付かれるのを回避すべく回し蹴りの軌道を変え体を回転させる。

ナイフは空振りだったが、霊夢と魔理沙が前方から弾幕を撒き散らしていた。

アダムはナイフを戻し今度は跳び蹴りを放つ。

弾幕を体の表面のバリアーで防ぎ、跳び蹴りに対してストレートで迎え撃つ。

アダムは体を捻って回転させ、向こうのストレートを絡める様に足を引っ掛ける。

そのまま体を回転させる勢いで相手を押し倒そうとする、が、「破壊神」は力づくでアダムの力を蹂躪し、アダムの足を掴んで地面に押し倒した。

「破壊神」はそのまま喉を狙って足を振り下ろす。

だが踏み付けは突然「破壊神」がバランスを崩した事で不発に終

わった。

体を後ろに引つ張られた感覚を覚え、自分の体を見ると肩にロープが巻き付いており、ロープは自身の背中の後ろを通ってアダムに繋がっている。

予め巻き付かせたロープにアダムの意志を送る事によって巻き取られ、引つ張られたのだ。

アダムが起き上がりながらブレイクダンスよろしく足を回転させ、「破壊神」の足を刈り連続で蹴りを命中させる。

地面に倒れた「破壊神」は起き上がると頭に血が上っていたのを自覚し、カイルに向かって走行を再開する。

(あと7秒。)

カイルは間に合わないと思ったのか後退し始める。

「爆符「メガフレア」！」

幾つもの巨大な火の玉が「破壊神」を襲う。

それを「破壊神」は正面からボールを弾く様に腕で防ぐ。

火の玉と腕が衝突し合う度に爆発が起こる。

最終的に「破壊神」は全ての火球を正面からぶつかって防ぎ切り、目的を達成すべく再び走り出す。

(あと5秒、この調子じゃあ間に合わない……………。)

「倭符「邪馬台の国」！」

慧音がスペルカードを唱え、弾幕を発射させる。

それに対して「破壊神」は真正面から弾幕を連続して被弾する。

舞い上がった砂煙の中からダメージを受けた素振りを見せていない「破壊神」が飛び出した。

(せめて白澤の時の力だったら……………。)

慧音は自分が行った事の希望に対し満足出来ない結果を得た事に悔んだ。

リヨウはアダム達から数百m離れた所で立ち往生していた。

アダム達の居場所が分からないからでは無い、アダム達の居場所が分かっているからこそ迷っていた。

(行けよ。〃力〃を使え。お前だつてそうしたいだろう。)

(駄目だ。そんな事をしたらあいつらまで殺してしまう。)

(だがそれがお前にとっての一番の快感だろう。最初は15年も前だったか、分かっている筈だ、あの最初の時が一番だった。お前を信頼している奴を殺した時を覚えているか？俺に怯えながら信じている顔を。その信頼を壊す、そして奴らは裏切られた時の絶望を顔に浮かべる。最高だ。)

(止めろ。だから俺はもう殺したくない。)

(良く言うぜ、さつきは友人であるトレバーの奴を殺したじゃないか。お前は楽しさに笑っていた。お前は殺人鬼だ。その運命から逃れられん。)

リヨウは黙り込んだ。

(どうした？反論できないか？)

ドカーン！

離れた所から爆音が響き渡った。

(騒がしいな。)

「…………… そうだな、騒がしいな。」

(さつきと…………… 待て、何だ？)

〃声〃はリヨウが言葉を口にしてしている事に違和感を覚えた。

「そうだ、俺は何でこんな詰まんない奴と戦っているのか。あいつらはああして未知の敵と迷う事無く戦っているというのに。俺は一番知っている奴に迷い、戦うどころか逃げようとしている。全く馬鹿

だったぜ。」

(おい、何だ?!)

「もう二度と会いたくない。いや、合わんな。」

(待て！お前……)

“声”が途切れる。

リヨウの意識は数百m先の戦いに向いていた。

カイルが銃にエネルギーを溜めながら下がっている。

十分にエネルギーが溜まった所で撃つのだろう。

それを追い掛けるのは大柄な男。

見た所とんでもない速さで走っている。

別の方向から慧音が弾幕を撃っているがあの男は怯みもしない。

リヨウはその「力」を使った。

人を殺す為では無く、人を守る為。

周囲の空気や地面が凍り付いた。

エネルギーは高から低へ、一点から周囲へ、均質化する。

周囲に広がり均質化する筈の熱はリヨウ一点に集まっていた。

熱を発射する為にエネルギーに変換する。

更にリヨウ自身が吸収するエネルギーの分も加算される。

「行けっ!!!」

一点に集まったエネルギーがリヨウの掌から発射された。

それは突然だった。

何処からかエネルギーの塊が飛来し、「破壊神」へと命中した。
大爆発が起きた。

中心は瞬間的にプラズマ状態となり、気体の体積が一気に膨張した事によって「破壊神」は吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた「破壊神」は地面に倒れるとエネルギーの塊が飛んで来た方向を見る。

何百mも離れた所に誰かがこちらに掌を向けていた。

「破壊神」にとっては見知らぬ顔だが、他の者達にとっては良く見知った人物だった。

「リョウ？ やつと来てくれたか。」

慧音が何か安心した様に言った。

「破壊神」は我に返り、再びカイルを追い始める。

『カイル、俺はこれ以上無理だ。頼んだぜ。今度何か奢ってやるからさ。』

『分かっている。それじゃ蕎麦でも頼むよ。』（あと2秒。行ける。）

「破壊神」とカイルとの距離は残り数十m。

音速で走れるカイルだが向こうはそれを遥かに超えるスピードを持つ。

今の調子では0.5秒も掛からないでカイルに追い付くだろう。

だからカイルは急な方向転換をした。

後退からいきなり前進に、進みながら飛び蹴りを仕掛ける。

対する「破壊神」は咄嗟に腕を胸の前に構える。

カイルと「破壊神」がすれ違い合った。

その相対速度は音速の3倍を超える。

その時カイルが後ろ蹴りを繰り出し、「破壊神」の背中に決めた。

反動でカイルは前に跳び「破壊神」は後ろに飛ばされる。

両者とも着地し、片方が逃げ、片方がそれを追う。

（あと1秒。）『さとり、紫さんに伝えてくれ。』

カイルは後ろを向き、銃を構え、引き金に指を掛ける。

『左に大きく動きます！』

『分かったわ。』

「破壊神」の思考をさとりが受け取り、それをカイルを介して受け取った。

動く場所が事前に分かっている為、スキマを生み出すのは十分に間に合った。

直径2 mの大穴が空間に現れた。

飛行能力の備わって無い「破壊神」は勢いのままそのスキマの中へと突っ込んで行った。

すると別のスキマがカイルの前方斜め上に開き、そこから「破壊神」が飛び出した。

飛行能力が無い「破壊神」は空中で身動きは取れても軌道を自在に変えることは出来ない。

カイルの狙いは「破壊神」の後頭部にしっかりと照準されていた。引き金に掛けた人差指を引く。

銃弾の持つエネルギーはTNT火薬24 kg分。

そのエネルギーは「破壊神」の張るシールドの一点を貫く。

銃弾はそのまま後頭部から頭を貫通した。

72 変化

「何故だ。何故俺は負けたのだ。あの「力」を持って何故負けた。」

「カオス」は脳を撃ち抜かれた「破壊神」の体内でそんな事を考えていた。

「破壊神」は最強の力を持っている、そうでは無いのか。」

答えは当然返って来ない。

だが自ら考える事は出来る。

「考えられる事は……「破壊神」の力が不完全なのか……いや違う。」

「カオス」は決心した。

「そうだ、人間という不完全な存在だからだ。」

「カオス」の考えは変える事が出来ない。

「そもそもわざわざ人間の身体を乗っ取る必要など無かったのだ。」

何故なら〃 そのように〃 作られたからだ。

反抗しない為に。

「カオス」は「コントローラー」を捨て、「破壊神」を読み取り始めた。

「破壊神」の死体を構成する要素はどうでも良い。

ただあの「力」さえ手に入れれば良い。

脳や遺伝子の構造を自分にインプットする。

「しかし何故それを気付かなかったのか。不思議だ。私は最も合理的な選択をする筈だ。それなのに何故私は操るといふ不合理な手段を選んでいたのか。今やどうでも良いが。」

「今頃上手く行っているだろうなあ。」

椅子に座る青年が1人。

その部屋には窓も家具も置物も殆ど無い。

椅子の前にはコンピューターの置かれている机、青年の座る前後にドアが1枚ずつ、監視カメラが天井に1つ。

「しかし、ディックの奴が勘付き始めたが、別に心配は無い。記憶を消去して仕事に戻させた。それに監視も付いている。」

部屋には青年の他に「誰も」居なかつたが、青年は「何か」に話し掛ける様にして言った。

「まあ気付かれても、まさか誰も真実がこんな事だとは想定しまい。何故ならあまりにも馬鹿げているからだ。自分で言うのも何だがね。」

何が、とは言わない。

「人間の脳や遺伝情報を読み取ったエネリオン体が感情を持つ事は既に調査済みだ。だから「スレーヴ」を産み付けた。想定外の行動をしなくてもあのプログラムは必ず俺と「お前」に従う。だから反抗は絶対に起き得ない。第一「スレーヴ」はいづらには気付く事は出来ない。だから俺の計画に背く行動は不可能だ。」

返事は返って来ない。

「他の奴ら」が真実を知った時、そいつら一体どんな顔をするだろうなあ。最も、俺の計画が完了している頃には誰も感情なんて何一つ持っていないだろう。そして逆らう事も出来やしない。まあ知る事すら出来ないだろう。楽しみになってきたな。」

天井にあるマイク付き監視カメラが唯一その様子を見ていた。

アダム達は「破壊神」の死体を囲んでいた。

「油断するな、まだ「カオス」が体内に居る。」

「分かっているわよ。」

「さっきの奴よりは弱いんだろ？なら早く終わらせようぜ。」

アダムの注意に対しそれぞれ返事をする霊夢と魔理沙。

「どうなっているのか分かりますか？」

「……………何が起こっているのかは分からない。何かをしているのは分かっているんだけど……………ユニバーシウムの構造が邪魔しているみたいだ。」

早苗が質問する前にカイルは既に調べていたが肝心な事は不明だった。

「どうする？このままぶっ飛ばすか？」

「リヨウ、少しは落ち着いたらどうだ。」

「何時も落ち着いてるさ。何処かの半人半妖の寺子屋教師とは違ってな。」

「良く言えるな。何時もあんな五月蠅い音楽ばかり聞いてるくせに。」

「注意する時のお前の声が一番落ち着きが無いぜ。そしてリンキンパークを侮辱するとはいい度胸だな。」

「なんだとっ？」

リヨウと慧音はいつも通り(?)冗談を言い合っていた。(というかリヨウが一方的に冗談を言い、慧音はそれに笑いながら言い返しているだけだが。)

「……………」

さとりは黙り込んで死体を見詰める第3の目に意識を向ける。

「さとり様、どうしたの？」

「相手の考えを読もうとしているけど、全く分からないわ。何かが邪魔しているみたい。」

空が、さとりが黙っている事に疑問に思い、質問をするが、さとりも相手の考えは読めなかった。

「しかし、まさかこんな事になっているなんて予想外だったよ。せめて私をもっと早く来ていればね。」

「それは私もだ。核融合の実現を試みに来たただけなのに、せめて最初あの電撃を喰らわなければ良かったんだけどね。」

諏訪子と神奈子が互いの後悔を口にする。

「皆、攻撃の準備を。」

した方が良い、は省略して紫が言う。

死体から全てで12方向から攻撃準備がなされた。

突然、死体の胸が振動した、様に見えた。

カイルが死体を構成する情報を読み取る。

「まだ心臓の右側から動いていない。さとり、分かるかい？」

「いえ、私からでも何も行動の考えは見えませんが。」

まだ何らかの行動は起こしていないらしい。

次の瞬間、死体が痙攣した様に大きく動いた。

「何だ？」

リヨウが過剰反応して掌に力を込めた。

サラツ

微かに砂が崩れる様な音がカイルの耳には聞こえた。

「地面に潜った、気を付けて！」

観察していたカイルがいち早く行動に気付き、注意の声を上げる。

バコツ！

ドガツ！

地面が崩れる音と共に何かを蹴り飛ばす音が聞こえた。

アダム達の目には壁に叩き付けられたカイルの姿が映っていた。

「カイルさんっ！」

早苗が心配して駆け寄ろうとする。

「来ちゃ駄目だ！」

カイルの警告が早苗に迷いをもたらした。

彼に従うか、逆らって助けるか。

立ち止まった早苗は隙だらけだった。

突然地面が揺れ動いたかと思うと早苗の背後の土が盛り上がった。

見ると諏訪子が地面に手を置き、「カオス」は突如出現した土の山に

よって早苗への攻撃を阻止された。

「危なかった…… 早苗も気を付けてよ。そして行ってあげて。」

「は、はい！」

諏訪子に促され、足を速める早苗。

「天竜「雨の源泉」！」

神奈子が唱えたスペルカードは弾幕の雨を降らし、「カオス」を牽制する。

「喰らえっ！」

リョウが右手を突き出し、掌からはエネルギー塊が発射される。

対する「カオス」は跳び上がり、エネルギー塊は土砂を吹き飛ばした。

だが「カオス」はアダムが背後から迫って来ている事に気付かなかった。

「カオス」が直感的に振り向くと数mと離れていない所にアダムが自分へ左跳び蹴りを放っている最中だった。

体を逸らして躲そうとする。

アダムは空中で軌道を変えた「カオス」に対し、足をそのままで真っ直ぐな蹴りから回し蹴りに。

回し蹴りが「カオス」の脇腹を捉えた。

続けて3連続蹴りを入れ左に吹き飛ばすと同時に自分は反対側へ跳ぶ。

吹き飛ばされた先には慧音と紫が弾幕を発動して待ち構えていた。

回避は不可能と判断し、腕を頭と胸の前に掲げる。

身体に大量の弾幕を受けたが、致命傷には程遠い。

前方に気を取られていた「カオス」は後ろからの攻撃に気付かなかった。

背中に連続して強い衝撃を受け、ダメージを受けバランスを崩す。振り向くと霊夢が札を発射し魔理沙が八卦炉を向けている。そこへ両手を向ける。

突然、「カオス」の右手が左方向に千切れ飛んだ。

右を振り向くとカイルが遠距離から銃を構えているのが見えた。残った左手をカイルへ向け、高速エネルギーオン塊を発射した。

しかし、弾は目標にヒットする前に空気の壁に阻まれ霧散した。カイルの隣では早苗が手を突き出していた。

「ありがとう。お蔭で助かったよ。」

「いえ、別に私がするべきと思っただ事ですから。」

カイルから褒めの言葉を受け取り、謙遜する早苗。

「ただ、あの時僕の言う事通りに動いていればもっと最適な行動も出来ただけど……。」

「ごめんなさい……。」

「いや、謝る必要は無いよ。過去を学び、今を考え、未来を変える、それが大事だ。」

「はいー！」

自分の行動を指摘され後悔したが、その後の励ましにより早苗は元気を取り戻した。

「さてと、少し待ってくれ。色々考える必要がある。早苗、君はまだここに居てくれ。」

「あ、はい。」

早苗が返事をする、カイルは自分の外部に対する意識を遮断し脳は考える事だけを集中した。

(しかし妙だ。あの「カオス」というエネルギー体はアダムと会話をしていた。それなのに何故あんな攻撃して来た者に反撃するという単調な攻撃しかないんだ？ 会話が可能な知能を有していれば学習能力があっても良い筈だ。学習能力が無いとすれば今こうして人間に近い行動は出来ないだろう。まるで怒りの籠った人間の行動に似ているが、まさか感情を持つているのか？)

カイルは一旦考えを中断し、今度は「カオス」を“読み取り”始めた。

変化を発見した。

脳波パターン(と言ってもエネルギー体に存在するのはプログラムされたエネルギーオンで構成された頭脳であって本物の脳では無いので脳波と言うべきでは無いのだが。)が以前と違っていた。

(間違いない、これは「破壊神」の脳波だ。以前の「コントローラー」の脳波は完全に無い。という事は下手すると不味いな。)『皆、警戒してくれ。奴は「破壊」の能力を持っている。』

カイルは皆に警告のメッセージを送り、そして周囲の情報を集めながら対抗策を練り始めた。

「空、核融合の準備をして。」

「はい。」

空はさとりにも命令され、必要な熱と圧力と磁気を生み出す準備を始める。

「なら俺らはそれまで食い止めりゃ良い訳だな。」

そう言いながらリヨウは腕を突き出し、エネリオン塊を連射する。

「カオス」はそれを正面から同じくエネリオン塊を発射し、全て撃ち落してみせた。

アダム、霊夢、魔理沙が後方からそれぞれ銃弾、札、レーザーを発射する。

横に移動して躲し、体を逸らして避け、腕を動かして防ぐ。

「はっー！」

「でえっー！」

神奈子が地面に手を置くと、突如にして地下水が湧き出て「カオス」を襲う。

諏訪子が地面に手を置くと、突如にして地面が盛り上がり「カオス」を襲う。

すると「カオス」の身体は宙に浮き地面からの攻撃を躲し、空中を飛び回って水流を難無く躲す。

「虚史「幻想郷伝説」！」

慧音から弾幕がばら撒かれ、更に離れた所からも弾幕が生じ、「カオス」は上下左右前後周囲を囲まれた。

「結界「光と闇の網目」！」

更に紫がスペルカードを唱え、小弾、大弾、レーザーが「カオス」を囲む。

避けられないと悟った「カオス」は胸の前に構えた腕を左右に揺らして防ぐが、殆ど自分の身体にヒットした。

その時、「カオス」は頭と胸に何か突き刺さったのを感じた。

振り向くとアダムが接近しながらロープの繋がったナイフを投げ終えているのを確認し、それが突き刺さったのだと推定する。

直後、「カオス」の左足は膨張し、破裂した。

反対側からリヨウが腕を伸ばしているのを見つけ、そこから発射さ

れたエネルギーオン塊が自分の足に命中し、体積が局所的に急激に上昇した事によつて破裂したのだと考える。

突如、「カオス」の姿が胸の中心にあつた球体を残して一瞬にして消えた。

球体は重力に従つて地面に落ちた。

「これがエネルギーオンの所謂コアか。壊せるか。」

リヨウが手を球体に向け、アダムもナイフを握る力を込めた。

しかし、突如球体から周囲に向かって衝撃波が吹き、2人はのけ反り攻撃を阻害された。

すると球体は宙に浮いた。

徐々に人の体らしき輪郭が見えて来る。

あつという間に輪郭内は漆黒に塗りつぶされた。

「ユニバーシウムによるエネルギーオン供給か。あの球体を壊せば良いのか。」

アダムがそう呟いた直後、カイルの警告が聞こえてきた。

『皆、警戒してくれ。奴は「破壊」の能力を持っている。』

「マジか、こりや下手に手を出せないな。」

「あの破壊力を持っているというのか……。」

リヨウと慧音が驚きを口にすする。

「皆、奴の動作が適化されているのに気付いているか？」

「そういえば攻撃が当たらなくなったかしら。」

「確実にこちらの手の内を読まれているって事ね。」

順にアダム、霊夢、紫の台詞。

アダム達のやりとりはカイルの脳にも入っていた。

(やはり学習能力は持っている。だとすれば感情を持っているという仮説が正しい事になるが、それは後だ……。)

カイルは考えを一旦切り替える為に目を瞑った。

(あの核を成すユニバーシウムを破壊するには膨大なエネルギーが必要だ。今の所さとりが空に核融合の準備を命令している、それを利用しない手は無い。ならば僕らはそれまで時間を稼ぐまでだ。『皆、空が核融合の準備をしている。だから完了するまでの時間稼ぎだ。』)

そして了解の返事がテレパシーを介して返って来た。

「早苗、行こう。」

「はい。」

カイルは勢い良く地面を蹴り、早苗は静かに足を地面から離して宙に浮き飛行する。

2人は援護に向かい始めた。

「それで、核融合には後どれくらい掛かりそうかい？」

「うーん、分からない。」

「もう少し頭の良い妖怪に核融合を任せろべきだったかな……まあ他は八咫鳥の適性が無いからなあ……。」

空からの返事に神奈子は少々大げさにこめかみを抑えた。

「ぼやいてる場合じゃないよ。土着神「七つの石と七つの木」！」

「当然だ。神符「水眼の如き美しき源泉」！」

諏訪子と神奈子2柱からの弾幕は「カオス」の前方180度を覆った。

「私達もやるぞ。魔符「ミルキーウェイ」！」

「勿論よ。回霊「夢想封印 侘」！」

魔理沙と霊夢2人からの弾幕は「カオス」の後方180度を覆った。「止めろ。」

誰かがそう言った、気がした。

次の瞬間、「カオス」に襲い掛かる弾幕が全て何の前触れも無く消え失せた。

その光景に弾幕を放った2人と2柱は驚愕の表情を浮かべた。

「何ですか今の?!」

移動中の早苗も空間を埋め尽くす弾幕が一瞬で消滅した事に驚いていた。

「弾幕を構成するエネルギーの構造を“破壊”したんだ。」

そう言ったカイルの答えは弾幕が消えた瞬間のエネルギーの構造を“見て”得た情報による物だった。

「だが、永久機関同然のユニバーシウムでも時間当たりの供給量には限界がある筈だ。その許容量を超える攻撃ならば……。」

カイルは考えるより既に先に銃を構え、エネルギーを溜め始める。アダムが地面を蹴り、接近を試みる。

対する「カオス」はエネルギー塊で迎え撃つ。

触れた物の分子構造を「破壊」する、その性質を理解しているアダムはナイフで打ち消さず身のこなしだけで避ける。

しかし、「カオス」はその動きを先読みし、避けられない所へ一発大玉を発射していた。

キュルキュルキュル

次の瞬間、小さく甲高い回転音がしたと同時に宙を舞うアダムは何も蹴る事無く後退しながら重力では有り得ないスピードで地面に落ちた。

よく見ればアダムの腰のロープ巻き機からロープが伸び、先端のナイフが後方の地面に突き刺さって固定されている。

陽動だ、と判断した瞬間後ろを振り向く。

リヨウが突進しながら腕をこちらに伸ばしている最中だった。

自分の頭に向かって伸びる左ストレートを首を傾けて躲し、カウンターの右フックを繰り出す。

「読めてるんだよっ！」

突然リヨウが姿勢を低くし「カオス」の顎にアッパーを決めた。

後退する「カオス」へとエネルギー弾をばら撒く。

地面を踏んでブレーキを掛け、エネルギー弾を体を捻って躲す。

エネルギー弾の大半は地面に当たり砂煙を巻き上げ「カオス」の視界を塞いだ。

「2人共、出来るだけ撃つてくれ。当たらなくても地面に当たれば良い。」

「分かったわ。」

「了解だ。」

アダムからの頼みに霊夢と魔理沙が噴煙の中へ弾幕を撃ち込むが、手応えは無く、かえって砂埃が舞うだけだった。

その中へアダムは突入した。

「カオス」は砂煙以外何も見えないものの、気配で何者かがこの小規模な砂嵐に足を踏み入れた事を察知した。

左方向から何かが飛んで来る気配を感じ、回し蹴りを繰り出す。

しかし、何も蹴り飛ばす手応えは感じず、代わりに何かが突き刺さる感触がした。

右のそれぞれ腿と脛にロープに繋がったナイフが1本ずつ刺さっていた。

痛みを感じる事無くナイフを引き抜きロープの伸びている方向を辿る。

その前にアダムのスライディングキックが足元に決まり、バランスを崩す「カオス」。

倒れている途中の「カオス」へ蹴り上げを喰らわせ、更に飛び上が

りながらナツクルを決め、地面へ叩き落とす。

地面へ倒れた「カオス」はすぐに起き上がる。

遠くから音速の10倍の速度を持つエネリオン塊が飛んで来るのを察知し、体を左にスライドさせる。

しかし、進行方向に対し反対側へ突風が吹き、押し戻されなかったが減速した。

エネリオン塊を右肩に被弾し、そこから先が吹き飛ぶ。

千切れた腕はユニバーシウムからのエネルギーの供給を失い、エネリオンの塵となって消えた。

そして新たに腕の輪郭が形成され、内部を暗闇が覆った。

先程の突風は早苗の、エネリオン塊はカイルによる物であると、こちらに手と銃を向けている所から知る。

「やっぱり駄目ですね……………」

「それでも無いよ。」

カイルの早苗に対する答えの意味はすぐに分かった。

後方で太陽の様な眩い輝きが生じた。

振り返ると「カオス」目掛けて強い熱エネルギーのビームが向かっていった。

73 遺品

「カオス」は自己防衛本能に駆られ、右手を目の前に翳した。目の前まで迫っていたプラズマのビームがその熱量を失い周囲へ霧散する。

「やはり核融合まで達していない。」

燃料の水素が高温になっているだけで質量が失われたり水素がヘリウムに変化している反応も起きていない。

それどころか核融合に必要な熱や圧力にまで達していない。

その事をカイルは“見て”理解する。

八咫鳥、太陽の化身が生み出す力では太陽内部の温度や圧力を再現出来ていない。

「俺に良い考えがある。はっ！」

リヨウが言うと、空間からエネルギーを吸収し、脳内で熱エネルギーを生み出すプログラムを書き込み、両手から連続的に発射する。

エネルギーのビームは空によって加熱されている燃料へ当たり、更にその熱量を増加する。

「早苗、風を吹かせる原理を使って燃料に向かって全体方向から圧力を掛けられないか？」

「やってみます！やっ！」

カイルからの頼みに早苗が掛け声を出しながら両手を突き出す。

突風を加熱中の燃料に全体方向から当て、その圧力を増加する。

だが、

「今度は熱と圧力に対して磁力が足りない。エネルギーが外に漏れ出している。」

それが前世紀において磁気閉じ込め方式の核融合が実用レベルに至らなかった原因の1つである。

燃料を熱したプラズマは磁気によって閉じ込めるが、それも熱量が増大するに従い必要な量が増える。

ちなみに慣性閉じ込め方式による核融合ではレーザー1つにより、加熱、加圧、燃料の閉じ込めが可能な点により実用化に成功した。（核

融合炉内は真空の為エネルギーは外に漏れ出さない。(

かと言つて慣性閉じ込め方式ではこの場で出せる出力では遠く及ばない。

太陽は磁気閉じ込め方式であつて、その化身の八咫鳥は慣性閉じ込め方式を使えない。

空に宿つた八咫鳥の力は小規模ながらも太陽と同じ方式の核融合に必要な力を遥かに少なく出来る、つもりなのだが肝心の空の力が足りていないのだ。

ところで今ここで課題なのはどうやってその磁力を得るか、

(この場には…………)

『アダム、球だ。』

またも声が聞こえた。

誰だ？

あの時と同じ中年位の男性の声だ

だが今はどうでも良い。

利用するだけだ。

「任せろ。」

そう言つた誰かが手を翳す。

その手には深く青い輝きを放つ直径2cmの球体。

それを持つのは、

「………… アダム、可能なのか？」

「分からない。やってみるしかない。」

カイルに問われたアダムの返事はあやふやな物だつた。

「それってトレバーが身に付けていた奴じゃないか。何でそれを。」

使うんだ？は省略してリョウが言つた。

「それを使うべきと思つた。何故かは知らない。」

またもあやふやな答えを返したアダムは、右手に握る球体に力を込めた。

自身が吸収したエネルギーが球体へ吸い取られるのを感じる。

それどころか球体も自らエネルギーを空間から吸収している、それをアダムはトランセンデンド・マンとしての能力から察知していた。

不意にアダムは自分の手に衝撃を感じ、衝撃は腕・肩を通って体中に広がった。

同時にエネルギーの塊が球体から発射され「カオス」に命中し、対してアダムは後方に吹き飛んだ。

エネルギー塊が命中した「カオス」はのけ反る様な動作をしたがダメージは無い様だった。

「……違うな……」

一方、カイルはアダムの持つ球体に注目していた。

(エネルギーの吸収に変換、ユニバーシウムか? いや……)

カイルがそう決めなかったのは理由がある。

まず球体の色がユニバーシウム独特の闇に溶けた様な黒では無く深い青なのだ。

マイクロレベルで物体の構造を知る事が出来るカイルはその色が塗料では無く実際の球体の色である事を読み取った。

それだけでは無く、物体の構造を読み取ってその性質を知る事が出来るカイルは球体がユニバーシウムでは無い別の物質で出来ている事突き止めた。

(……地球上に存在している物でも無いし、人工的に生み出して発見された物でも無い……まさか第2の中物質か?!)

中物質とは物質と反物質の中間に当たる物で、物質・反物質に通用する元素周期表に当てはまらず、物質・反物質とは化学・核・対消滅反応を起こさない。

ユニバーシウムもその一種に含まれる。(というか人類が発見した唯一の中物質である。)

現在ではどの様にして発生するのか、どんな素粒子で構成されているのか、どの様な性質を持っているのか、等まだ解明されてない部分が多い。

話は戻る。

(今まで良く見せてくれなかったから分からなかった。中物質だとすれば何故それをトレバーが持っていたんだ? しかし、アダムは何故これが何なのかも知らないあの球体を使えるんだ?)

カイルは度重なる疑問の解決を中断し、意識を外界に向けた。アダムが難しい顔をしながらエネルギーを球体に送っている。

「どうか。」

途端に球体からエネルギーのビームが発射され、核融合予定の燃料へと命中する。

エネルギーは衝突の瞬間磁力に変換され、高温の燃料を閉じ込める。

今まで漏れていた熱エネルギーが密閉され、反応へと近づく。

「あと少しだ。出来るかい？」

「ああ。」

「楽勝だぜ！」

「やってみせます！」

「うん。」

順にアダム、リョウ、早苗、空、のカイルへの返事だ。

水素原子核がもう1つの水素原子に高速で電氣的斥力に打ち勝ち、衝突し、ヘリウム原子へ変わる。(重水素では無いので中性子は無い。)

水素原子2個とヘリウム原子2個では水素原子2個の方が僅かに重い。

その質量分がエネルギーに変化し、放出される。

それらの反応が続き、エネルギーは灼熱のビームとなって「カオス」へと襲う。

辺りにはその強い熱気と爆風が吹き付ける。

だが、

「連鎖反応まではまだ圧力が足りない。重水素や三重水素無しだからか…………… 何にせよ維持が必要だ。」

「まさか太陽神の力を借りて、更にああして早苗達が力を使っても太陽を再現出来てないなんてね……………」

カイルが呟き、神奈子が残念な心境を口にする。

対抗する「カオス」は更に抵抗を見せた。

空気を「破壊」し、破壊した分の質量をエネルギーに変換し、エネ

ルギービームを放ち核融合のビームに対抗したのだ。

周囲に吹き付ける激しい熱風は勢いを増した。

「不味いな、向こうはまだ質量をエネルギーへ変換する速度に余裕を持っている。」

そんな中、カイルは1つの「変化」を発見した。

その「変化」はカイルの冷静さを失わせた。

(……有り得ない！何が起こったと言うんだ?!確かに脳組織を修復不可能なまでに破壊した筈だ！)

カイルは無言だったが、さとりは彼が動揺しているのを発見した。

「カイルさん?どうかしたん……そんな……。」

さとりもその「変化」を見つけた。

頭に銃弾が貫通した痕があるにも関わらず動いていた。

その体は覚束ない動作でゆっくりと立ち上がる。

まるで立ち方を知らない様な動きだ。

震えながら立ち上がった。

弱々しいが、その意思には強さを感じられた。

「破壊神」だった。

「心は読めるかい?」

「いえ、全く分かりません……。」

意識を朦朧とさせながら腕を何処かへ伸ばす。

掌は「カオス」へ、

エネルギー塊が発射される。

「カオス」がその存在に気付き、エネルギー塊を避けようとする。

エネルギー塊はその右腕に命中した。

トランセンデンド・マンはエネルギーオンを体内に取り入れる時は体表のどこからでも可能だが、プログラムを書き込んだエネルギーオンを外部へ発射する時、必ずと言ってても良い程手や足で、例外でも目で、それらを媒体として発射する。

理由は定かではないが、手足等にある細かく複雑な末梢神経がエネルギーオンの発射に最も適しているという仮説が最も支持されている。

それはトランセンデンド・マンの構造情報を再現しているエネルギー

ン体でも同じと言える。

物質を「破壊」してエネルギーに変換するという作業を行っている右腕が消滅すると当然物質の「破壊」は中断された。

後は抑えられていた核融合由来のビームが襲うだけだ。

「伏せろっ！」

再びこの場に灼熱の太陽が地上に出現した。

閃光、衝撃波、熱風、爆風、キノコ雲。

それらが見えた後、キノコ雲は晴れた。

「お前ら無事か?！」

リヨウが起きながら土まみれの服を払い落とし全員の安否を確かめる

「……ゲホッ！ゲホッ！……全員大丈夫みたいだ。」

カイルが周囲の情報を感知し、皆が命に別状は無い事を知らせた。

「奴は倒したか?！」

アダムが半ば砂に埋もれた体を起こしながら訊いた。

「……ああ、もう感じない。終わった。」

「そうか……。」

カイルからそれを聞いて安堵したアダム。

「いやー危なかった……ヒロシマやナガサキもこんな感じだったのか?！」

「それとはこちらの方が遥かに規模が小さいよ。それに通常の核爆弾であれば地上から少し離れた所で爆発させるものだけど、今回は地表で爆発したからエネルギーがその分失われた。」

「うへえ……良くそんなんで生き残った奴が居たもんだ。」

「さて、他の皆を起こそう。」

ポール・ラニング中尉は最後に生き残った「カオス」が遂に消滅した事を“自分が最高司令官とと思っている「物」”から伝えられて知った。

しかし、その顔には一切の表情が見えなかった。

『ユニバーシウム・マイン計画は別の指揮官にやらせる事にする。前は以前と同じ様に監視を続ける。怪しい行動を起こす者には即刻記憶消去剤を使う事を許可する。』

『了解。』

この会話は“人類”には一切聞こえない。

この会話の事を知る“者”は1人しか居ない。

デイツク中佐は職場の机の上で目を覚ました。

夢を見たという記憶は無いが、寝汗をびっしりと書いていた。

「…………… アダム…………… 何かやったのか？」

懐かしい感じがする。

あの一番幸せだった時の事を。

だが今はそれとは程遠い。

大切な者を1人失った。

だからこれ以上失わない為にも如何にかして失いかけている残り
2人の目を覚まさせなければならぬ。

彼は懐から1枚の写真を手に持った。

デジタル化が進んだ現代だが、この写真はアナログのフィルムで
撮った紙の写真だ。

何時も肌身離さず持つている。

照れ臭そうに笑う若い赤髪赤眼の男と、隣で優しそうに微笑む若く
美しい青髪青眼の女性。

「……マリア、私はお前の言う通りあの2人を守って来たつもり
だった。だが私のやり方が悪かったのか2人はそれを望まなかった。
そして結果的に2人を苦しめる事となった。辛うじて”生かしてい
る”状態だがきつと望まないだろう……私は如何すれば良かった
のか、今でもその判断が出来るかどうか自信が無い。お前が居たらこ
んな未来にはならなかっただろうか……私は狂っている、そう言
われても過言では無い……済まないな、お前が好意を抱いた男性
は大切な妻子すらも守れないのだ……。」

74 メッセージ

「鼻くその秘密を、そつとはなくそう。」

「ガハハハハハ!!!」

寒い駄洒落に[!]対し、明らかに温度差の違う者が3人。

リヨウと萃香と勇儀が呑みまくっているのだ。

「あーうるさいわねえ……………」

「まあ良いんじゃないの?」

一応酒を飲んでいる霊夢と魔理沙だが、騒がしい空気に呆れ寧ろ冷たくなっている。

「アダムは飲まないの?」

「別に要らない。それ程美味しいとは思わない。」

「ええ、何で?」

「さあな、燃料だからという一種の先入観なのかもしれない。だが良い味だとは思わないが。」

「そうか? 私なんか酒なんてなかったら人生詰まんないぜ。」

「あくまで個人の感想だ。」

「思ったけど、アダムってあんまし、何と言うか、他人を気にしないって言うか、普通と違う考え方よね。」

「……………その辺りは自分でも良く思う……………人に従うのが何となく嫌なんだ……………まるで自分が一つの機械を動かす部品の様で……………」

霊夢達が話題が不味かったと困惑したが、果たしてどう話題を変えろべきか思い付かなかった。

アダムが次の言葉を発したのは5秒後だった。

「……………僕が「ルーラー」に操られていた時、夢を見た。僕は子供だった。大人が僕に命令をする。だけど僕は嫌だった。だけど僕は従わざるを得なかった……………」

「一体何の話なんだよ?」

魔理沙が話の要点が分からず訊いた。

だがアダムはそれに答えず、話を続けた。

「霊夢、何故か君の事が思い浮かんだ瞬間、僕は目を覚ました。不思議だよ。」

「それってどういう……。」

霊夢は顔を少し赤らめたが、それ以前に話が理解できず訊いたが、アダムは答える事無く続ける。

「僕がガミジンと戦った時、僕はクローン、特定の人物を元に作られた複製の人間、だと告げられた。」

「アダムが、作られた……？」

霊夢が驚きのあまり絶句する。

「ガミジンから聞けば僕は感情を抑えられた人間だそうだ。」

「だからあんな……。」

「だけど僕は自分が知らない存在が自分に芽生えている事を感じている。強いが、不安定だ。それが感情という物なのかも知れない。」

アダムの話は止まらない。

「僕はこの感情という物がどんな良さや力を持っているか身をもって体験している。」

「はあ……。」

魔理沙が何て言えば良いのか言葉が出ず呆れ声を出した。

「ごめんけど、一体何を伝えたいのか分からないんだけど……。」

「……僕も分からない……まるで起きているのに夢を見ている様なんだ……。」

「……変な話だな……。」

3人共黙り込み、この話題(?)は終わった。

「いや〜終わったなあ〜。」

カイルが腕を組み伸ばし、横になってリラックスの体勢になる。

「くつろいでいるカイルさんを見たの初めてです。」

「ん？ああ、まあ普段はちよつと無理してるからね。僕にも結構面倒臭がりな所はあるよ。」

「ちよつと意外ですね。」

「その分、物事を効率的に考えられる様になっているけどね。極端に言えば怠ける為にあるのが技術だからね。研究者としては間違つて

いるけど。」

カイルが苦笑しながら早苗へ返事する。

「しかし、気掛かりな所もあるなあ……………」

「えっ?」

カイルは折角事件が終わったのだから真面目な話はよそうと思っていたが、うっかり口を滑らせて喋ってしまった。

言ってしまったならせめて最後まで話そうか、カイルはそう判断した。

「……………管理組織の目的は幻想郷の結界を「爆弾」で破壊し、攻め込んで支配する事だ。だけど、今回は明らかに目的から外れている様な行動だった。普通なら「爆弾」の回収を優先的にするべきだ。それなのに「爆弾」には見向きもせず、まるで味方討ちの様な行動まで見られた。」

アダムが幻想入りした時に持ち込まれた多量にある立方体の「爆弾」には発信機が付いている事も分かっており、つまり爆弾の場所は分かっている筈なのだ。

「それは後にしよう。〃生存者〃も居るから聞き出せるし。」

カイルが目線に向けた先には横たわる「破壊神」の姿があった。

「……………私達に危険が及ぶんじゃないでしょうか……………」

早苗がそう言うのも無理は無い。

何せ核兵器すら超える力を有しているのだ。

「さとりから聞いたんだが、操られていない時僕達に敵意は無いらしい。こちらから危害を加えなければ大丈夫だ……………とは思うんだけどね。それに味方に出来れば頼もしい戦力だ。アダムとリヨウもそれに賛成してくれた事は少し驚いたよ。」

アダムとリヨウは共に自分と似通った所を見出し、それによって受け入れたのだ。

「まあ話はこれぐらいにしておいて。」

丁度話を終えた時、別の誰かから話題が振られた。

「あのーお兄さん……………」

声を掛けたのは燐だった。

隣にはさとりも居た。

「何だい？」

「先程は私や隣や他の皆を助けて下さってありがとうございます。」
先に言ったのはさとりだった。

「どういたしました。僕は皆が無事であればそれで良い。」

「あたかも死体を持って来なければこんな事には……………」

「別に責める事は無いよ。どちらにしても相手は起きるだろうし、こんな地下深くに戦場が出来上がった訳だから周辺被害は少なく抑えられた。僕も、君達には助けってもらったよ。こちらこそありがとう。」

「いえ、当然の事ですから……………何かお礼でもしましょうか？」

「私も、何時も助けられているから、何かお礼がしたいです。」

会話に早苗が割って入った。

「……………こちらに協力してくれるなら別に礼は要らないよ。それよりも、面白い話でもしよう……………」

早苗とさとりはやけに真剣にカイルの話を聞いていた。

丁度リヨウは萃香と勇儀との談笑を終え、慧音と話していた。

「あいつを受け入れるなんて、何というか、お前も物好きだな。」

「まあな。アイツには何か俺に似た所がある……………」

リヨウが珍しく悲しさを帯びた声で言った。

「破壊神」は眠り続けている。

「リヨウ、その大丈夫だったのか？」

「何が」大丈夫なのか、それはリヨウも慧音も知っている。

「というか幻想郷内でこの2人のみが知っている。」

「大丈夫だ、問題無い……………分かった、冗談はやめるぜ……………丁度トレバーと戦っていた時だ、俺は何としてもトレバーを生きて戻してやるつもりだった。だが「奴」は躊躇無く跡形も無く消してしまっただ……………」

「……………」

親しい者を失う辛さは2人共良く知っている。

慧音は親しい人間が寿命により死んでいくのを数え切れぬ程見て来たし、リヨウに至っては目の前で「奴」が大量の人物を何度も殺す

のを見て来たのだ。

「だけど、お前達のお蔭で助かったんだぜ。俺は良く知る自分から逃げようとしていた。なのにお前達は知りもしない、遙かに強い敵に向かって行く。俺のやってる事が馬鹿馬鹿しく感じた。ありがとう。」

「ああ、もしお前が堕ちても私が引きずりだしてやる。お前なんか私からしたらまだ手の掛かる子供だ。」

「フツ、ならお前も俺から見ればお節介な婆さんだな。」

「なんだとっ？このっ。」

「だって1000年は生きてるんだろう？還暦を16回迎えたって気分はどうなんだ？」

「全くもう、こんな美人にそんな事を言うなんて失礼だぞ。」

「お前、誰かに似て来たか？」

「誰かさんのお蔭で影響されて冗談を言う様になったからな。」

「へッ、後はロックさえ刻み付ければ洗脳完了だな。」

「……相変わらずだな。でも良かった……。」

慧音が安心した様な声で言った。

それに対しリョウが拳を握り締めたのは果たして誰か気付いただろうか。

「はあ……破壊神」は失ったか……。」

【次候補固体名：ノア・アレクサンダーソン】

「やはりそいつか。だが敵側に居る以上捕獲する必要がある。それに

本当に「あの力」を持っているのかすら明確では無い……しかし可能性が無い訳では無い。」

【監視レベルを上げますか?】

「ああ、だが逆探知だけはされるな。」

【了解】

「ついでに、「オリンポス」シリーズの進捗具合はどうだ?」

【P2世代「ガイア」完了 P3世代「ウラノス」完了 A1世代「ゼウス」50%完了 他P2世代40%完了 他P3世代30%完了 他A1世代25%完了】

「なら「ゼウス」を優先的に完成させろ。」

【了解】

「…… 計画もそう上手く行くものではないな。何より反乱軍の指導者が出来る奴だ。確か1億人、全人口の1割だったか。しかも所属する人数はかなりのペースだ。今の時点でかなり厄介だと言うのに更に勢力を増そうとしている…… ユニバーシウムの採掘が可能な所は他にあったか?」

【現時点で火星と月に微量確認し採掘中 月に幻想郷の結界と似た構造のエネルギーを同量観測 内部にユニバーシウムが含まれる可能性高】

「つまり幻想郷は地球だけには無いという事か?」

【その可能性があります】

「…… 折角だ、プロトタイプ「オリンポス」シリーズの性能確認を兼ねて月でもユニバーシウム・マイン計画を展開するぞ。」

【了解】

「さて、コーヒーでも飲もうかな。ジャワ産が良いな。ナポレオンみたいにブランデーを燃やしなからでもするか。」

殺風景な部屋に居る男は椅子から立ち上がり、2つある内正面の方のドアを開け、部屋から出て行った。

ドアは中途半端に開かれたままだったが、急に勢い良く閉まり、鍵が掛けられた。

その傍を誰かが通り過ぎたが、何とも無い様な素振りだった。

いや、何とも無さを装っていたとしても言うべきか。

監視カメラではただ通り過ぎただけにしか見えなかったが、彼の思考を映す事は出来ない。

(私は必ず真実を暴いてみせるぞ。アダム、お前も幻想郷で頑張ってくれ。)

その時アダムがメッセージを受け取ったのは果たして偶然か、辺りを見回すが送り主と思しき人物は居なかった。

「どうしたの?」

「……いや、何でも無い。」

だがアダムは内心懐かしさを覚えていた。

設定集（〜地霊殿）

【人物紹介】

氏名：アダム・アンダーソン

年齢：16歳

生年月日：地球歴0001年7月13日

血液型：B+

出身地：ノースアメリカカーロサンゼルス

総合戦闘値：49（ランク：A 内訳 A（Attack）：9 S

（Speed）：11 D（Defense）：9 E（Energy）：

9 P（Perception）：11）

特殊能力：不明

身長：171cm

体重：64kg

目の色：深い青

髪の色：青がかつた黒

使用武器：

・「シルバーファルコン」2丁

種類：TM（トランセンデンド・マン）専用ハンドガン

弾速：1700m/s

連射速度：50発/s

威力：39500J/発

最大エネルギー放出量：1975000J/s

その他：「ペルセウス」社製

・「シルバーウルフ」2本

種類：TM専用コンバットナイフ

刃：両刃 刃渡り：20cm

切断方式：高周波、エネルギー強化複合方式

最大エネルギー放出量：1975000J/s

製作：「ペルセウス」社製

・「スマートアナコンダ」2本

種類：TM専用コンバットナイフ用機能拡張具（ロープ）

全長：50m

特殊仕様：ロープに接続したTM専用武器にエネルギーを送る、ロープ自体の強度を上げる、ロープを自在に動かせる

製作：「ペルセウス」社製

特徴や性格等：

- ・一般常識といった情報記憶は殆ど思い出したが、自分自身や思い出等の意味記憶は殆ど思い出していない
 - ・常に冷静沈着で無表情で、感情を表に出す事が無い
 - ・何事も合理性優先で、無駄を省き手短に終わらせようとする
 - ・他人の感情が分からない
 - ・特技は近接戦闘、機械や武器の整備、狩り、計算、科学の応用
 - ・夢に悩まされる
- その他：不明

氏名：柏リヨウ

年齢：28歳

生年月日：地球歴前0010年2月12日

所属：人類共和軍

血液型：A+

出身地：アジアーオキナワ

総合戦闘値：53（ランク：EX 内訳 A：12 S：8 D：

10 E：15 P：8）

特殊能力：加熱（二つ名：灼熱）

身長：187cm

体重：77kg

目の色：茶

髪の色：茶

使用武器：

・「クラッシュヤー」1丁

種類：TM専用ヘビーマシガン

弾速：1700m/s

連射速度：70発（連射速度最大時）〜4発（威力最大時）/s

威力：127500J（連射速度最大時）〜2231250J（威力最大時）/発

最大エネルギー放出量：8925000J/s

特殊仕様：銃弾の連射速度を変更できる（威力は連射速度に反比例）

製作：カイル・クロード・ウィルソン氏

特徴や性格等：

- ・ 普段はのんびり屋だが、いざという時にはやる
- ・ いつもは微笑している様な顔だが、真剣な時は無表情
- ・ 友好的で誰とでも仲良くなれる

・ 機械いじり、衣服創作、戦闘、洋画（アクション、SF）、バイク（ホンダ、カワサキ製）、音楽（主に90年代ロック）、漫画、ゲーム、女（幼女は除く）が好き

- ・ 直感を大切にする

その他：不明

氏名：カイル・クロード・ウィルソン

年齢：18歳

生年月日：地球歴前0001年11月26日

所属：人類共和軍

血液型：B+

出身地：ヨーロッパストックホルム

総合戦闘値：61.5（ランク：EX 内訳 A：7 S：7.5

D：7 E：10 P：30） ※数値は30以上の計測が不可能

特殊能力：エネルギー・インフォームイオン構造感知 テレパシー

読心 完全同時並列思考 等（二つ名・サテライト、バトルコンピューター）

身長：173cm

体重：65 kg

目の色：緑がかった青

髪の色：暗めの金髪

使用武器：

・「ロンゴミアント」1丁

種類：TM専用スナイパーライフル

弾速：3400 m/s

連射速度：20発/s（溜め無し）

威力：253500 J（溜め無し）→152100000 J（最大

溜め）/発

最大エネルギー放出量：5070000 J/s

特殊仕様：自身のエネルギーを溜め一気に放出が可能（最大30秒分）

製作：自作

特徴や性格等：

・優しく穏やかで普段は爽やかな笑みを浮かべている

・13歳で有名な大学を卒業し、人類共和軍でも優秀な技術者兼科

学者

・優顔でイケメンだが恋愛には疎い

・基本的のんびりでマイペース、やる時はやる

・SF・サスペンス小説・映画、ジャズ、研究、甘い物、イタリア

料理、のんびりする事、が好き

その他：不明

氏名：トレバー・イマーム

年齢：31歳

生年月日：地球歴前0013年10月30日

所属：人類共和軍

血液型：O+

出身地：サウスアジアーバグダッド

総合戦闘値：56（ランク：EX 内訳 A：11 S：12 D：10 E：11 P：12）

特殊能力：幻術（二つ名：死神）

身長：190cm

体重：79kg

目の色：焦げ茶

髪の色：黒

使用武器：

・「ダスタン」1セット

種類：TM専用身体装着武器（籠手2対、脛当て2対）

最大エネリオン放出量：7340000J/s

特殊仕様：両籠手から10cmの刃を展開する

製作：ジャック・ブローニング氏

特徴や性格等：

- ・無表情で無口
 - ・何でも秘匿する癖がある
 - ・地霊殿にて死亡
- その他：不明

氏名：スミス（苗字のみ）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：150（ランク：EX 内訳 A：30 S：30 D：30 E：30 P：30）

特殊能力：破壊（二つ名：破壊神）

身長：196cm

体重：84kg

目の色：黒

髪の色：黒

使用武器：

・「パニッシャー」1丁

種類：TM専用ヘビーマシンガン

弾速：1700m/s

連射速度：200発/s

威力：97650J/発

最大エネルギー放出量：19530000J/s

製作：「ペルセウス」社製

・「ストップパー」

種類：TM専用防具

特殊仕様：使用者のエネルギーを膨大に吸収する代わりに驚異的な防御能力を発揮する、本来は強大な力を持つトランセンデンド・マンを制御する為に使う

製作：「ペルセウス」社製

特徴や性格等：

・無表情

・怒り易い

・地霊殿後アダム達によって保護される

氏名：ガミジン（コードネーム）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：不明

特殊能力：切断

身長：不明

体重：不明

目の色：黒

髪の色：黒

特徴や性格等：

・諜報実行部隊「ブラッククリナーズ」のメンバーの4番目

・アダムがクローンである事を彼自身に告げる

・地霊殿にて死亡

氏名：レックス（名前のみ）

年齢：35歳

所属：地球管理組織

総合戦闘値：60（ランク：EX 内訳 A：15 S：10 D：10 E：15 P：10）

特殊能力：流体制御（二つ名：サーファー）

身長：188cm

体重：77kg

目の色：紫

髪の色：紫

特徴や性格等：

- ・何事も任務優先
- ・地霊殿にて死亡

氏名：サム（名前のみ）

年齢：18歳

所属：地球管理組織

総合戦闘値：52（ランク：EX 内訳 A：9 S：9 D：8 E：16 P：10）

特殊能力：「波」の制御（二つ名：ミラー）

身長：178cm

体重：69kg

目の色：青

髪の色：銀

特徴や性格等：

- ・人を見下し、舐め切った態度を取る
- ・レオは弟

・地霊殿にて死亡

氏名：アガレス（コードネーム）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：不明

特殊能力：念動力

身長：不明

体重：不明

目の色：金

髪の色：金

特徴や性格等：

・ 諜報実行部隊「ブラッククリーナーズ」のメンバーの2番目

・ 地霊殿にて死亡

氏名：ルーラー（コードネーム）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：不明

特殊能力：自我を持つ物の制御（二つ名：コントローラー）

身長：194 cm

体重：82 kg

目の色：黒

髪の色：黒

特徴や性格等：

・ 地霊殿にて死亡

氏名：レオ（名前のみ）

年齢：13歳

所属：地球管理組織

総合戦闘値：66（ランク：EX 内訳 A：3 S：3 D：

3 E：30） P：30）

特殊能力：「波」「粒」双方の制御（二つ名：ウォール）

身長：145cm

体重：46kg

目の色：青

髪の色：銀

特徴や性格等：

- ・自分の力について絶対的な自信を持っている
- ・サムは兄
- ・風神録にて死亡

氏名：ヴァサゴ（コードネーム）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：不明

特殊能力：無し

身長：不明

体重：不明

目の色：茶

髪の色：茶

特徴や性格等：

- ・諜報実行部隊「ブラッククリナーズ」のメンバーの3番目
- ・風神録にて死亡

氏名：マルバス（コードネーム）

年齢：不明

所属：地球管理組織

総合戦闘値：不明

特殊能力：無し

身長：不明

体重：不明

目の色：赤

髪の色：赤

特徴や性格等：

- ・ 諜報実行部隊「ブラッククリナーズ」のメンバーの5番目
- ・ 風神録にて死亡

【固有名称、用語】

エネリオン：

素粒子の一種であり、一次エネルギーの一種

空間全域に大量に溢れているが、生物で利用できるのは「トランゼンデンド・マン」のみ

ダークエネルギーに似た、空間が広がっても密度は一定に保たれるという性質を持つ

エネリオンは「インフォームオン」でエネリオンの情報を確変する事によって一時的に二次エネルギーに変換する

二次エネルギーに変換されたエネリオンは長時間かけて元のエネリオンに戻る

逆に二次エネルギーからエネリオンへ変換も可能で、エネリオンに変換された二次エネルギーは長時間かけて元のエネルギーに戻る

幻想郷における霊力や魔力、気力や神力も本質的にはエネリオンと同じである

インフォームオン：

素粒子の一種であり、全ての素粒子の構成のもととなる素粒子の最小単元

二次エネルギー、エネリオン以外のインフォームオンは何故か確変

が不能で、二次エネルギー、エネルギーを構成するインフォォミオンのみが確変可能

ダークエネルギーやエネルギーと同じく空間が広がっても密度は一定に保たれるという性質を持っている

ユニバーシウム：

物質でも無く反物質でもない「中物質」の一種。エネルギー、インフォォミオンを内部に引き付ける効果がある

これを利用して擬似的な永久機関を作る事が出来る

地球上には殆ど存在しないが、何故か幻想郷の地中には大量に存在している

トランセンデンド・マン：

エネルギーを体内に吸収し、それを構造しているインフォォミオンを直接的、間接的に操作する事ができ、それによってエネルギーを二次エネルギーに変換する事が出来る人間

全世界に2000人にも満たないと言われている

超越人、Tマン、TM、トランセンド、と略される事もある

種類には先天的な「ジエネティック」、突然変異による「ミュータント」、人工的に生み出された「マンメイド」や、これらの複合種がある

トランセンデンド・マンはエネルギーを変換し、身体能力や身体防護に利用出来る

生物の進化の究極系という説もある

TM専用武器：

トランセンデンド・マンのみが扱える武器

トランセンデンド・マンの多くはTM専用武器を使わなくては遠距離攻撃が出来ない

その為これを利用して遠距離攻撃等を行う

銃であれば、使用者のエネルギーとインフォォミオンをグリップ部の吸収装置で吸収し、エネルギーを構成するインフォォミオンの並ぶ方を特殊な回路によるプログラムで確変し、エネルギーの比率、弾速、一発当たり威力、という具合に決めたエネルギーを銃身の発射装置で発射する

エネリオンの一部は発射時に加速エネルギーとして利用し、銃弾がエネルギーや密度の高い物質や素粒子に衝突すると同時にエネリオンをその他エネルギーに変換させる

中物質：

物質と反物質の中間に当たる物質だが、物質・反物質で通ずる元素周期表が通用しない

物質、反物質、それ自身と対消滅を起こす事は無い

現在確認されているのはユニバーシウムのみ

スペースマシン：

本来は莫大なエネリオンを利用して空間にワームホールを作る装置

莫大なエネリオンを利用して幻想郷の結界を乱したり、穴を開けたり、安定させる機能もある

地球管理組織：

略称E M O

国家に変わり地球全体の社会・環境問題を解決し、人類の文明の維持と向上する事が目的の組織

管理軍、地球軍とも呼ばれる

人類共和軍：

略称H P F

地球管理組織の非人道的な計画を阻害し、人類に自由と平等をもたらそうとする組織

文化軍、反乱軍とも呼ばれる

地球歴：

略称E・C・

西暦2101年が地球歴0001年に相当

地球管理組織が地球上の全国家の解体を機に作った新たな統一歴

ユニバーシウム・マイン計画：

地球管理組織が立てた計画

幻想郷と外界を隔てる結界を破壊し、幻想郷を制圧した後、幻想郷の地中に多く含まれるユニバーシウムを採掘する計画

インヴァイジョン：幻想郷内への侵入

バースト：結界の破壊

サプレジョン：幻想郷の制圧

マイン：幻想郷内のユニバーシウムの採掘

戦闘値：

トランセンデンド・マンの具体的な強さを数値化した物

数値はエネルギー量に比例する（知覚処理は除く）

威力（Attack）、速度（Speed）、防御力（Defense）、エネルギー吸収量（Energy）、知覚処理（Perception）の5項目からなる

各数値7・5、総合で37・5が平均

総合数値が0〜でE、10〜でD、20〜でC、30〜でB、40〜でA、50〜でEX

数値7・5は体重分の質量が停止状態から秒速340m/sに加速される時のエネルギー

エクストラ：

トランセンデンド・マンの中でもエネルギーを本来人類として必要無い特殊能力を利用できる者達の事

利用できる条件は定かにされていない

全世界に200人にも満たないと言われている

総合戦闘値が50以上（ランクがEX）が条件の1つとも言われている

エネルギー体：

エネルギーで作られた仮の肉体

プログラムされた人格や情報を元に行動する

光を反射しない体表と人型が特徴的だが、何故そうなるのかは不明
短時的な幻影の様な物からユニバーシウムによる永久稼働的な物
まである

【世界情勢】

西暦2001年、「地球管理組織」なる秘密結社結成

2026年、人類初の有人火星着陸に成功

地球管理組織があらゆる企業を傘下に置き始める

2045年、軍需品開発会社「ペルセウス」設立

人類の総人口80億人突破

慣性閉じ込め方式における核融合実用化

2060年、ニューヨークで破壊神によって死者400万人以上の

大爆発が発生

世界各地でテロが多発する

各国間の国家関係が乱れる

2070年、第三次世界大戦が勃発

人類の総人口100億人に達し、今度は戦争により人口が減少し始める

地球歴0001年、全ての国家が解体され地球管理組織が世界を掌握する

人類の総人口10億人

0010年、世界中で反乱が起こり人類共和軍が設立される

0018年、総人口10億人

内9億人が地球管理組織の管理下に置かれ、内1億人が人類共和軍に所属する

2. 5 幻想郷の休日2

75 Wake Up

地霊殿異変から次の日。

アダム・アンダーソンの朝は早い。

何の前触れも無く目を覚まし布団から起き上がったアダムは顔を洗い、寝間着を脱ぎリョウから貰った戦闘スーツを着るとすぐに外に出る。

山の陰からぼんやりと光が見えるが太陽の姿は見えない。

まずは準備運動程度に体の節々を伸ばす。

準備運動を終えると中腰になり両腕を肩の高さに水平に上げ掌を前に、全身に力を入れる。

力を抜き、中腰を解き軽く膝を曲げ、腕を腰の高さに下ろす。

武者震いの様にわざと体を震わせ緊張状態を一定に保つ。

左半身を前に、右手を曲げ腹の辺りに持つてくる。

前に出した両手をブラブラさせる。

腹の位置から素早く左ジャブ右ストレート、続けてスリーフオーとパンチを繰り返す。

少し間を置いて再びワンツーから今度は左フック右フック計4回。

次は連続して数十発のボディブロー、最後に大振りのアッパーを放つ。

今度は左半身を更に前に出し、左手で4連続裏拳を繰り返す。

左裏拳を出し、右正拳、右肘打ち、曲げた肘を戻しながら右裏拳。

そして足を少し大きく開いたかと思うと真っ直ぐに左水平蹴り。

そのまま左足でローキック、ハイキック、足を戻し次は右足でローキック、ハイキック続けて体を回し左回し蹴り。

宙を舞い8連回し蹴り。

ワンツーパンチから左前蹴り、ワンツー右ローキック、ワンツー右踵落とし、ワンツー2連蹴り。

下段回転蹴り、跳び上がって上段回転蹴り、後ろを振り向きオー

バーヘッドキック、両手を着いて反動で起き上がる。

すると急に体勢を低くし、手を地面に着ける。

両足下段蹴り、体を起こし両足サマーソルトキック。

前方へ飛び出し回転しながら逆サマーソルトキック。

右蹴り、左蹴り、体を回し右跳び蹴り。

着地した所で後ろから自分へ声が掛けられた。

「おはよう。昨日は大変だったわね。それって何て格闘技？」

アダムは朝の修行を終え、質問に答える事にした。

「ジークンドーと言うマーシャルアーツの一種だ。基本や構えは詠春拳と呼ばれるマーシャルアーツ、それらにボクシング、合気道、柔道、レスリング、等あらゆる格闘技を取り込んだ物だ。本来は急所攻撃によつて相手を倒す事を目的とした物だ。格闘技だが特に型といった物は存在しない。」

「ふーん。確かに構えは古武術に似た所があつたけど動きとか特に決まった感じが無く西洋みたいな感じだったかしら。」

「今日はこの前の管理組織の侵攻で向こうが持つて来た武器を改造して武器を製作するつもりだ。1つ試したい物がある。」

「私の修行も手伝つてよね。」

「ああ。割とすぐに完成出来るから試行も兼ねるか。」

柏リョウの朝は早い。

何故なら強烈な目覚ましに起こされるからだ。

い
どれ程信じまいとする者達が居ようと 事実を調べる事は出来な

この針に俺は糸を通す 過激に本質をえぐる詩

1966年に彼らが抱いた怒り 俺は彼らと共に立つ

Eダブルのように怒り狂う 体制の糞に膝まで浸かりながら

フーバーは死体を片付け続けた クスリなどでは

決して及ぶことができない 俺の内に作られたこの憤怒には

拳を上げる この偽善の国で

運動はやつて来ては去る 指導者たちは説く

しかし彼らの首が飛ばされるとすぐに運動は止む 馬鹿者共が

揃って彼らの頭に銃弾を撃ち込むからだ

警察に裁判官に連邦捜査官 仕掛けられた網の目が人々を大人し

くさせる

奴らがキング牧師を追いかけ回したのを知っているだろう 彼が

ベトナム反戦を説いた時に

彼は「持たざる者たち」に力を持たそうとした だから彼は撃たれ

た

ヘッドフォンから鳴る大音量のエレキギターとボーカルにリヨウ

の眠気はすっかり覚めた。

「自分でやりながら何だがすげえ効果だな……。」

タイマープログラムを組み込んだ照明器具を使えば任意の時間に

照明を付ける事で脳が太陽の光を浴びたという錯覚を受け体内時計

によって心地良く起きる事も可能だ。

リヨウはちよつとしたプログラムの書き込みなら出来るし、プログ

ラムを照明器具に組み込む程度の事も出来る。

しかし、リヨウは夜遅くにまで起きている、即ち体内時計が普通よ

りもずれているのだ。(そもそもトランセンデンド・マンは脳の処理

能力が高い為、本来は睡眠の時間が短くて済む。それでも疲労回復や

ストレス解消の為6時間以上の睡眠を取る者は居る。)

その為、目覚まし時計が開発されてもなお変わらない原始的な方法
で体を無理に起こしているのだ。

時計に目をやると6時30分前を示していた。

机の上にあるパソコンを立ち上げ、幻想郷に来てから毎日行っている習慣を今日もする。

「定時連絡だぜロウ。お前最近どうなん？」

『トレバーの遺品漁りをしている。中東地域のアクセサリやらアンティークな家具やら見つかったよ。それで、異常は？』

リョウは画面の左半分を埋めるグラフや数値に目をやる。

「昨日は話した通りだが今日はリーダー見る限りは異常は無いな。」

『そうか。まあ管理軍もあれ程戦力を投入して何も得られなかったのだから暫くは動かないだろうな。それと昨日話した管理軍の捕虜とやらについてだが、具体的な方針はお前達に任せる、だそうだ。ドニーさんもやはり賛成したよ。それにしてもお前、管理軍の情報を聞き出す事が目的じゃないな？』

「まあな。最大の目的はアイツに幸せになってもらいたいんだ。以前の俺に似てる所がある。」

『しかしお前珍しく本気の話をするなあ。安全性はどうだ？』

「カイルから聞けば俺達に敵意は無いらしく、こちら側から害を与えなければ大丈夫だとさ。」

『まあ気を付けろよ。ところでカイルは？連絡が来ないのだが。』

「さあな、寝てるんじゃないの？カイルは日曜日はしっかり休むからさ。まあアイツの分も俺がまとめてやるって事で。」

カイル・クロード・ウイルソンの朝は、今日はそれ程早い訳でも遅い訳でも無い。

カイルが目を覚ました時、時間は8時30分を過ぎていた。

「……………昨日は疲れたなあ……………」

ゆっくりと体を起こし、体を伸ばす。

太陽の光が部屋の中に、そして目に流れ込んでいる。

障子が開かれた所からは紅葉が見える。

乾燥気味の秋風が紅葉の枝を揺らし、鳥のさえずりも聞こえる。

目を閉じ深呼吸すると澄んだ綺麗な空気が気道を通って肺の中へ流れ込む。

カイルは自然に身を任せ暫く放心状態になっていた。

「あつ、カイルさん起きたんで……………」

「ワツ。」

だから同居人に突然（カイル視点）声を掛けられた時は拍子抜けした驚き声を上げた。

相手に驚かれたので釣られて早苗も軽く驚いた素振りを見せた。

「……………」

「……………」

カイルが自分の失態に照れ笑いを浮かべ沈黙が破られた。

クスクスと早苗が笑い、和やかなムードに包まれた。

「朝ご飯出来てますよ。私と神奈子様と諏訪子様はもう先に食べましたから、どうぞ。」

「分かった。寝坊してごめん。」

「いえ、カイルさんは何も悪くありませんから。」

「それじゃあ食べようか。早くやりたい事があるし。」

「へえ、どんな事なんですか？」

カイルは独り言のつもりだったが、早苗はそれを誤解したのだ。

だがカイルは話を振る事無く質問に答えた。

「この前も言ったと思うけど僕はこれでも科学者の端くれさ。幻想郷へ来た目的は管理組織からの防衛だけじゃない。あらゆる研究もし

ようと思っっているんだ。」

「研究熱心なんですね。私も何か手伝いましょうか？」

「いや、別に僕だけで十分だよ。僕の知覚能力を利用した調査だからね。」

「なら見学だけでも良いですか？」

「良いけど、君から見たら詰まらないと思うけど。」

「私もこれで理系ですから、興味はありますよ。」

「そうかい、なら別に良いよ。その前にちよつと寄る所もあるけどね。」

鈴仙・優曇華院・イナバの朝は早い。

彼女は永遠亭の住人の中で一番早く起きる。

師匠の永琳は医者兼薬師の仕事によって毎日忙しいので疲れているし、主である輝夜と地上の妖怪のてゐは眠気に身を任せ全然起きようとしなない。

鈴仙は眠気に打ち勝ち布団から体を起こし、身支度を始める。

永遠亭メンバー全員分の朝食の用意も彼女がする。

そして、昨日、とか午前0時を過ぎていたので今日の真夜中、永遠亭に運び込まれた患者、と言えるのかも疑わしい者を診なければならぬ。

運び込まれた時、鈴仙はそれが死体だと思った。

医学に詳しい永琳も、瞳孔散大、呼吸停止、心停止、どれも死の証

抛であつた為、死んでいるかと疑つた。

だが、運び込んだ者達の内カイルという青年によれば脳波が微弱にあり脳組織が再生しているのが確認された為じき目を覚ますだろう、との事らしい。

でも本当に彼は生きているのだろうか。

彼は身長195cm近くある大男で額に大穴が空いている。

鍛え上げられた身体と目を瞑ってもなお凄味を帯びた顔は鈴仙を怖がらせるのに十分だった。

年齢は多めに見積もつても20代前半の容貌だが、まるで多くの人間を殺して来た軍人や殺し屋の様な雰囲気を感じる。

もしこの重そうな目が今にも開いたら……

「ウドンゲ?」

「ひっ?!」

急に声を掛けられた鈴仙は思わず声を上げた。

慌てて自分へ話し掛けた声の主を見る為振り向く。

「……何だ、師匠でしたか……」

「何驚いてるのよ。そして何だとは何よ……それで彼の調子は?」

永琳は自分が鈴仙に驚かれた事をさておき本題に入った。

「見た所変わってないみたいですけど……」

「どれ……いえ、変わった所が1つあるわ。ここを良く見なさい。」

永琳は額の穴を指し示した。

「昨日より明らかに傷が小さくなっているわ。良く見ないと分からない程度だけど。」

「……言われてみれば。本当にこの人は生きてるんですね?」

「そうじゃなければ傷なんて治らないわよ。全く驚異的ね、トランセンデンド・マンの再生能力は。アダムの場合では骨折を一晩で治したし、彼は脳組織そのものを再生できる。でも脳のダメージが大きいこの調子だと意識を回復するのにどれ程かかるかしら……」

布団に仰向けになる男は依然として生きている証拠を見せない。

76 新メニュー

「リヨウ、居るか？」

アダムと霊夢と魔理沙は喫茶店「ザイオン」の前に来ていた。

「おう、入れ入れ。」

2階から入る様に促す声が聞こえて来たので3人は遠慮無く入り、階段を上る。

「相変わらず変な店ね。」

霊夢がリヨウの姿を認めて言った最初の一言がそれだった。

「そうか？ 私は雰囲気とか結構気に入ってるぞ。」

魔理沙は逆に変だとは思っていないらしい。

「ザイオン」は外側の装飾は周囲の建物に比べ大して違和感はない。問題（という程の事でも無いが）はその内装にある。

幻想郷は日本文化の影響が大きい、その為長いカウンターは幻想郷の住人達にとって見慣れない物だ。

西洋風のテーブルや椅子や床、折角日当たりが良い立地なのにわざわざ窓を小さめにして店内を暗くし、アメリカ西部開拓時代の雰囲気醸し出している。

その一方でコンクリート（河童製）の天井には配線や配管がむき出しになっており近代感がある。

「ぼくのひみつきち」的な奴だ。良いだろう。」

「統一感が無いわよ。」

「寧ろ自由で良いんじゃないか？ アダム、お前はどう思う？」

魔理沙がアダムに意見を求めるべく声を掛けた。

「早く本題に入ろう。」

が、アダムにとって内装は無意味に等しい。

「オツケー、武器を持ってた奴は4人、それぞれ2つずつ持ってたから合計8個だ。自由に使いな。」

リヨウはそう言うど何処からか機械らしき塊を持って来て置いた。

塊に見えたのは8つのTM専用武器、風神録にてEMOが送り込んだ人員から奪った物だ。

「3つ貰って良いか？」

「全然大丈夫だぜ。ところで何作るつもりなんだ？」

「極東格闘術に用いられる武具だ。」

「そりゃあ良いねえ。出来上がったら俺にも試させてくれよ。部品はそれで足りるか？」

「ああ。残りは香霖堂から仕入れる。」

「ところでうちの新メニューを試す気は無いか？自信作だ。」

そう言いつつリヨウはテーブルの上から皿を持って来た。

「何だこれ？」

「食ってみな。」

まずは細長いフライらしき物。

「これは何かの魚かしら。身が引き締まって良いわね。」

「小骨が多いけど別に刺さる程でもないし、美味しいなあ。何なんだこれ？」

リヨウは魔理沙の質問には答えず代わりに皿の上の別の料理を視線で示した。

次は赤く辛そうなソースが目立つタコス。

「メキシコ料理のタコスだ。本来は牛肉使いたかったけど無かったから別の奴を使った。」

「別の奴って？」

「後でだ。まずは食えよ。」

3人共タコスに齧り付く。

「結構辛いよね。でも悪くない味だわ。」

「この肉は鶏か？」

リヨウは何も言わず更に残っている最後の料理を指で示した。

最後はトマトソースの Pasta。

「これはアダム達も以前「ザイオン」へ来た時に食べた事がある。うん美味しい。これも材料が違うのか？」

「食べた感じ肉が鶏と魚の間みたいな味だったけど。」

霊夢が良い加減教えてくれ、という顔をした。

「それじゃあ言おうか。まずそのフライだな……」

リヨウは焦らすようにわざと間を置いた。

「…………… マムシの肉なんだぜ。」

「……………」

「マジで？」

霊夢と魔理沙が驚いた表情を浮かべたがアダムは表情一つ変えていない。

「じゃあそのタコスとパスタも？」

「その通り、タコスはカラス、パスタはウシガエルの肉だ。」

「こんな美味しいのね。知らなかったわ……………」

「私は薬を調合するのに蛇の皮やら乾燥粉末やら使うが食べるなんて初めてだな。」

「材料費が安く済むのも良い所だ。アダム、お前はあんまし驚いていないみたいだが。」

「別に食用可能だから驚く事では無い。毒さえ無ければ如何という事は無い。」

「何処のジオン軍の少佐だよお前は。何だ？モビルスーツ1機で艦隊を殲滅するのか？」

カイルは早苗と共に永遠亭へ足を運んで来た。

「永琳さん、何か変わった様子は？」

「額の穴が目測できる程に再生しているわ。全く凄い修復能力ね。トランセンデンド・マンってのは皆こうなのかしら。」

永琳が質問に答え、驚嘆を呟いた。
だがカイルはそれを質問と思った。

「この場合は彼が僕達の平均を遥かに上回っているんですよ。少なくともエネルギー量では僕の3倍以上はありますし。いくらトランセンド・マンでも通常は脳組織を破壊されれば死にますよ。」

「それ程彼は強大な力を持っているのね。」

するとカイルは目を閉じている男の傍に座り、“観察”し始めた。クオークやミュオンよりも遥かに極小なエネルギーオンを感知出来るカイルには、脳の構造を知覚する事は少なからず時間は掛かるが当たり前の様に出来る。

銃弾は額から貫通し、順に前頭葉、脳梁、間脳、中脳、小脳の一部、後頭葉、を貫いた。

どれも再生不可能な生命維持に重要な組織で、どれかが駄目になれば生きてなど居られず回復も出来まい。

だが、目の前のこの男はその不可能を可能にしている。

「……脳細胞が増殖能力を持っているだけじゃない。分化済みの細胞が脱分化し破壊された組織の細胞へと変化を遂げている。原始的な生物と同じ能力を持っているなんて驚きだ……。」

カイルが思わず感嘆の声を漏らす。

「それで、一体どれぐらいで目を覚ますんでしょうか。」

早苗の質問にカイルは考え込んだ。

「……このペースであれば3ヶ月以内で完治し昏睡状態から回復するだろうね。」

「大事にならないければ良いのだけどね……。」

永琳が心配を呟いた。

誰もフラグだ、などとは言わなかったが、この場に居た3人は深刻な表情をした。

喫茶店「ザイオン」の開店時間は午前10時から午後5時まで。

現在はまだ10時前、にも関わらず客が1人来ていた。

「今日はどうする?」

「それじゃあ濃い目のコーヒー砂糖無しで。昨日は大変でまだ疲れが残ってる。」

「イタリアンだな。飲み過ぎて体が震えないようにな。」

リヨウが丁度フレンチプレス式のコーヒーメーカーの中の棒を押し終え、出来上がった黒い液体をマグカップに入れ慧音の座るカウンター席へ滑らせる様に配った。

「危ないじゃないか。何でお前はそんな粋がるんだ?」

「アメリカは大抵こうだぜ。今度クリント・イーストウッド映画でも見せてやる。」

「遠慮する。」

冗談と分かっているので2人共笑い合う。

「それにしてもこの店は、何かと落ち着きが無いと言うか……統一感が無いな。」

「今日そのセリフを言われたのは2回目だぜ。俺の好きな要素だけを取り込んだからな。ところで新メニューでも味見するか?」

リヨウがそう言い終えた丁度その時、入り口から人の気配を感じた。

「あつ、もう10時か。いらつしやい。」

そしてその姿を確認した。

「……何だ、お前か。」

「何だとは失礼な! 清く正しい射命丸文ですよ。」

「うわ、これだからナルシストは。」

「もう！どれだけ貴方の悪口の記事を書かなければならないんですか！」

「大体マスコミってのは金しか頭に無い連中だ。売れる情報だけを大げさに表現し、民衆を揺り動かす。そもそも偽の情報に騙される奴も悪いが、マスコミが加害者である事に変わりは無い。つまり……」

「もう良いです！……」

「ところでお前何しに来たんだよ。」

「あ、そうだった。私だって人生を楽しみますからね、コーヒーを飲みに来たんですよ。砂糖無しのカフェラテでもお願いします。」

「おう、濃さはフレンチ程度にしとくぜ。」

普通よりも高温で熱し短時間で淹れるのがエスプレッソ、それに牛乳やクリームを加えればカフェラテの完成。

カップを受け取った文は匂いを嗅ぎ、口を付けて2口飲んだ。

「砂糖が無いのが効いて目が覚めますね。牛乳のまろやかさがコクと苦みを丁度良く抑えてくれますし。酸味が少ないのも良いですね。」

「ほう、分かっているじゃねえか。マンデリンって品種でアラビカ種だがロブスター種寄りの苦みとコクのある味が特徴的だ。」

「前無縁塚にコーヒーの木があるって言ってたけど、そんなにあるんですか？」

「まあな。そうそう、新商品を試すつもりは無いか？慧音も、話が進んでなかったな。少し待つとれ。」

リヨウはカウンターの奥へ行き、慧音達からは何をしているのか見えない。

やがてリヨウは料理の乗った皿を抱えて戻って来た。

皿に盛られているのはパツと見はケーキ、だが良く見ると違う。

上にフルーツや生クリームが飾られているが、一番の存在感を誇っているのはその下にある細長い緑色の物体、いや、麺。

「これ何だ？」

「抹茶小倉スパゲティ、うめえぞ。さっさと食べよ。」

2人はリヨウに強要されおずおずとフォークを持ち一口食べた。

だが2人は揃って顔を歪めた。

「…………… 何とも言えない味だな……………」

「…………… 美味くも不味くも無いです……………」

「…………… 出すのは止めとくぜ。やっぱ名古屋名物は好き嫌いが激しいか。アダム達には別の料理を食わせたが、そちらは出すつもりでいる。」

「どんな料理なんですか？」

リヨウは言うのを少し躊躇った素振りを見せたが、一瞬だけ面白がる顔をして言った。

「チキンタコスだ。」

リヨウが何処からか取り出したタコスを齧り付きながら言った。

「鳥ですか？それじゃあ共食いになるじゃないですか。」

文が突っ込みを入れたが、リヨウは更にその先を行った。

「ただ鶏肉は仕入れ辛いからカラスの肉を使ってあるがな。美味しいもんだぜ、他の料理でもイけるし、特に丸焼きにして脳味噌をほじり出して食うのが最高だな。カラスってのは鳥類の中でも高い知能を持つから……………」

「ちよつとストップストップ！カラスですって?!動物虐待はんたーい!!!!」
文が驚きの表情をし、リヨウは満足した様な顔をした。

「そもそもカラスなんて料理に使うのか？」

慧音も疑問を口にする。

「ハハハ、その反応が見たかった。食えるぜ。他にもヘビやらカエルやらスズメやらの料理も出す予定だ。かくいう日本料理も、生魚食べる事は海外からしたらゲテモンなんだぜ。食ってみろよ。」

別の更にあつたヘビのから揚げを渡された慧音は一口食べた。

「…………… 美味しい、魚みたいな、いや、ウナギみたいな味なんだな。」

釣られる様にして文もから揚げをつまむ。

「あつ、本当ですね。小骨が多いみたいですけど。」

「そこもウナギと同じなのさ。何なら蜂の子チャーハンも食うか？」

「いや…………… 止めておくよ。」

蜂の子は名前の通りスズメバチの幼虫だ。

食べた事は無くとも見た目は用意に想像できる。

流石に見た目に抵抗があれば食欲も無くなるだろう。

「でも鴉を料理に使うのは止めて下さいよ……………」

「だが断る！」

「記事デタラメに書こうかな〜。」

「あの天人みたいにプロレス技50連発掛けてやろうか？キン肉バスターで股関節をほぐしてやるからさ。」

「…………… 高評価しておきます。」

77 三本揃えば文殊の攻撃

「来い。」

少年の両手に握られているのは両端に刃の付いた1. 8 m程の槍。
「行きますー！」

対する少女は右手に短刀、左手に長刀を持つ二刀流。
少女が地面を蹴り、少年へ接近する。

2本の刀から繰り出される連続撃を少年は槍の柄で受け止める。
少女が長刀を真つ直ぐに突き出す。

少年が跳び上がると同時に柄で刀を下に逸らし、そのまま空中から
頭を狙って槍を薙ぎ払う。

しゃがみ槍を躲した少女は間合いを詰め短刀を振り出す。

少年は槍を回し先端の刃で短刀を弾き、回転の勢いを更に増しもう
1撃振り下ろす。

長刀で槍を防いだ少女は槍ごと長刀を振り斬り返しを繰り出す。

少年は素早く体勢を低くし、横から振り回される刀の側面を蹴り上
げ軌道を逸らした。

左手が持ち上がった事によって無防備になった少女の腹へ突きを
放つ。

間一髪の所で少女は右の刀で槍を逸らし如何にか避けた。

離れ間合いを取る2人。

「流石アダムさん。私の攻撃を完璧に躲すなんて。」

「妖夢、君の剣術自体は僕から見て特に欠点は無い。後は長所を伸ば
し、新たな要素を取り入れる事だ。」

「もう少しお願いします。」

「良いだろう。」

今度はアダムが仕掛ける番。

地を踏み、槍を勢い良く連続して繰り出す。

それを妖夢は的確に防御するが、リーチが短く反撃の機会が来な
い。

アダムの槍が勢い良く撓り、大きく曲がった。

その動きに驚いた妖夢だが、軌道を読んで右の刀を翳す。妖夢の短刀は読み通り攻撃を防いだ。

だが、勢い良く叩きつけられた短刀は妖夢の手から弾き飛ばされた。

武器を片方失った妖夢は一旦距離を置いた。

短刀は取りに行くには遠い距離にまで飛ばされている。

「ならば一刀流ですー」

妖夢は左の長刀を両手で持ち構える。

アダムは何も言わず突撃した。

リーチを活かした長い攻撃では無く、両端に刃が付いている事を活かして手数で攻める。

左右に振り回される槍を的確に防ぐ妖夢だが、獲物が1本では反撃のチャンスを狙い難い。

妖夢は回る槍に向かって刀を突き出した。

回転する槍を止め、剣先はそのままアダムの喉へと延びる。

だがアダムはそれを体を後ろに反らす事で避けた。

そしてサマーソルトキックで妖夢の刀を握る手を蹴り上げ、刀を弾き飛ばした。

それを認識した妖夢は次の瞬間跳び上がり、舞い上がる刀を取ろうと手を伸ばす。

1回転し着地したアダムは槍を投げ飛ばす。

妖夢が刀に手を触れようとしたその時、横から飛んで来た槍が刀を別方向に吹き飛ばした。

不味い、そう思った瞬間妖夢はアダムから跳び蹴りを喰らい吹き飛ばされた。

地面に落ちた妖夢は起き上がろうとするが、何時の間にか槍を持ったアダムが自分の首に槍先を当てていた。

「…… やっぱり勝てませんね。本当に凄いですよ。」

「そちらも相手の攻撃に対抗する判断は見事だ。僕は剣術には欠点は無いと言ったが少し言い直そう。妖夢、君は“無条件の戦闘”よりも“条件付きの試合”の方が得意に見える。だから武器を失った時取

りに行こうとした。僕が思うに武器無しでの戦闘術も学ぶべきだと思う。剣術の修行をして何だが、専門外の事を学ぶ事も大事だと思う。」

「はい。ありがとうございます！」

妖夢は立ち上がるのと腰を深く折って感謝の意を表した。

「凄かったじゃないアダム。」

「最後の剣弾き飛ばして飛び蹴り決めた所とかかっこ良かったぜ。」

霊夢と魔理沙が賞賛の声を掛ける。

「だがまだ本来の使い方をしていない。」

「えっ？ 槍の使い方ってあんなじゃないのか？」

「これは“半分は” 槍では無い。」

「半分？」

「次はまだかしら？」

霊夢の疑問を余所に話を切り替えたのは咲夜だった。

「ならば私にその使い方とやらを見せたらどうかしら？」

「良いだろう。」

5 mの距離を取り、双方構える。

「始め。」

霊夢の合図と共に咲夜が目の前から姿を消した。

途端にアダムの周囲を大量のナイフが囲む。

振り回される槍は弧を描きながらナイフを弾く。

次は背後にナイフが配置されアダムを襲う。

槍を後ろへ伸ばし、振り回す勢いで槍を撓らせナイフを弾く。

今度は頭上から、アダムは死角であるにも関わらず攻撃に気付いた。

振り落ちて来るナイフを全て槍で受け止めてみせる。

すると、アダムは感覚的に横を振り向き、槍を翳す。

ナイフを両手に持った咲夜がナイフを振り下ろしている最中だった。

槍の柄とナイフがぶつかり合う。

力で勝りナイフを押し返したアダムは咲夜へ威力は大して無いが

素早い蹴りを決めた。

地面へ落ちる寸前、咲夜の姿が消える。

咲夜はアダムの眼前に現れた。

繰り返される斬撃を躲していくが、更なる攻撃が待っていた。

アダムの左右からナイフが挟む様にして飛んで来る。

飛び交うナイフを槍で弾き、正面からの咲夜の攻撃も受け止める。

槍の真ん中で咲夜が握るナイフを受け止めるが、左右から飛んで来

るナイフがアダムの頭を狙う。

パカッ

何かが外れる様な音がした。

咲夜がその音源を探るべく周囲を見る。

それは目の前にあつた。

槍だ。

更に槍を良く見ると、折れ曲がっていた。

3つに分かれた槍は真ん中が咲夜の攻撃を受け止めたまま、左右の部分が独立して動きナイフを防いだ。

咲夜は一旦時を止め、距離を置く事にし、時を戻す。

「そんな武器があるなんて驚いたわ。」

「三節棍だ。使用者のエネリオンと思念波によって関節部を結合させて槍にする事も出来る。」

槍は丁度60cmずつに分かれ鎖で繋がれている。

アダムは三節棍を折り畳み、右手と左手にそれぞれ端の節を持った。

ナイフがアダムを包囲する。

3本の棒はそれぞれ独立した動きでナイフを防ぐ。

前後、左右、上方、斜め、全ての方角からの攻撃を3本の棒は受け付けない。

するとアダムが左手を離し、右手を勢い良く引き、三節棍を畳んだ。

そして投げ飛ばすようにして三節棍を伸ばし、咲夜目掛けて突き出される。

間一髪で体を横に移動させ避けた咲夜。

振り出した三節棍を薙ぐアダム。
体をしやがませ何とか躲した咲夜。

アダムは躲された三節棍の中心の節を持ち、3本を1本の棒の様に回転させる。

咲夜が時を止め、アダムの周囲に大量のナイフを配置した。

自分を取り巻くナイフを瞬時に確認したアダムは三節棍の回転速度を加速させる。

跳び上がり体と三節棍を回転させ、回転跳び蹴りでナイフの側面を蹴飛ばし、三節棍でナイフを弾き飛ばす。

着地したアダムが突然体を後ろに反らせた。

何時の間にか背後に回っていた咲夜がナイフを横に薙いでいる最中だった。

一閃されるナイフを躲し、そのまま後ろに倒れる勢いを利用しオーバーヘッドキックを繰り出す。

蹴りは咲夜の頭に炸裂し、吹き飛ばされた咲夜は地面に倒れる。

アダムは倒れる体を手を着いて反動で起き上がり、咲夜は追撃を恐れすぐに立ち上がった。

沈黙が流れ、双方に緊張が走る。

アダムが地面を蹴り接近する。

三節棍の左右を持ち、残った中部を咲夜の持つナイフに押し当て競り合う。

左右を振り回し攻撃を畳み掛ける。

防戦一方の咲夜は反撃を試みるが3本の棒によって完全に阻まれる。

次の瞬間、咲夜からはアダムの右手から三節棍がすり抜けた、様に見える。

三節棍は咲夜の足元に巻き付き足を刈った。

空中で倒れる最中の咲夜を、畳んで1本にした棒で叩き落とし、咲夜の首筋に刃が付きつけられた。

「……参ったわね、結局1回も勝てないわ。」

「咲夜、君の「時を止める」という能力の利点はこうして正面から撃ち

合うよりも相手の知覚外から奇襲を仕掛ける事に本当の価値があると思う。当然この様に接近戦でも効果は高いが、一番の欠点は至近距離では能力が使えないという点だ。先程も三節棍から連続攻撃を受け時を止める為に必要な時間や距離が無かった筈だ。」

咲夜の能力について簡単に説明すると、時を変える対象をエネルギー障壁で囲み、時間を遡ったり薦めたりする。

時を止めるという表現は実際は間違っており、実際は自身がエネルギー障壁内に居て自分の時間を世界の時間と同じ速さで遡る事で、咲夜から見ると相対的に時間が止まる事になる。

つまりはそのエネルギー障壁の範囲が至近距離であれば相手も入ってしまい相手も自分と同じ時の中に入るという事だ。

ちなみに、この方法であれば時間以上の速さで時を遡る事が出来れば過去へも行ける、のだが咲夜はそれ程の能力は有していない。

「自分の能力についてそんな深く考えた事なんてなかったわ。私はただそれがどの様な能力でどのようなように使えば良いか知れば満足だったけど、こんな発動の仕組みを考えれば弱点や更なる活用法も見えてくるのね。」

咲夜が感嘆して言う。

「不可解を解説する手段が科学だ。」

「うーむ……………」

カイルは手に取っている球体を“観察”していた。

これは今は亡きトレバーが以前から身に付け、死んだ際にアダムが取った物で、今はカイルがアダムから頼みこうして手の中にある。

「それはアダムさんが持ってた球ですか？」

「ああ、僕の知覚能力で構造を解析している。」

早苗の質問にカイルは目線を変えないまま答えた。

「何か分かった事とか無いんですか？」

「そうだね……この物質はユニバーシウムに非常に構造が似ている。でも性質は明らかに違う点がある。まずはこの物質にはエネルギーに必ずあると言って良い空間中のエネルギーを吸収するという性質が存在しない。エネルギーを自在に操れる存在、つまりトランセンデンド・マンによって供給される必要がある。」

早苗は興味深そうに聞いていた。

「つまり全く違うって事なんですか？それじゃあ新物質を発見したって事じゃないですか！」

「その可能性は高いだろうね。他にも、通常ユニバーシウムは構造を変換する事でプログラムを埋め込み、そのプログラムに従つてのみエネルギーを他のエネルギーに変換する。でもこの物質は使用者の思念波によってエネルギーを自在に変換可能だ。」

「自分の思った通りの「力」を出す事が出来るって事ですか？」

「ああ、アダムもあの時球体を利用して磁力を生み出した。その前にも念動力らしき現象も起きた。だけど、肝心の部分がまるで分からない。ユニバーシウムと同じ様に構造は分かっているも更に細かい部分は分からない。そもそもどの様にしてユニバーシウムの様な「中物質」を生み出せるのか、それが一番の謎だ。それよりも、今は少し休憩しようかな。一旦データは取れたし。」

「あ、じゃあお茶淹れて来ますね。」

そう言った早苗は襖を開け、奥の部屋へと行った。

「ふう……結構きついな。」

カイルの目の前には高さ2m、横幅50cm、奥行き1mはあろう黒い箱がある。

傍には液晶画面、キーボード、マウス、その他インターフェースが

据え置かれている。

このブラックボックスの正体は数日前香霖堂からタダ同然で貰った高性能コンピュータである。

スーパーコンピュータ程の性能では無いが、演算処理の能力はカイル曰く十分との事。

カイルが知覚能力を通して受け取った球体の情報はこのコンピュータに記憶され(カイルのテレパシーは機械に送信も可能)、更に外界の人類共軍の研究施設へと送られる。

1人でやるのは流石に無理があるのも理由の1つだが、カイルは他の研究も予定しているのでまずはこうして情報を整理する事から始めている。

カイルは画面のスイッチを入れ、通信機能を起動させた。

「ロウさん、送信されたましたか?」

『ああ、今受信中だ。しかしお前も幻想郷に来て研究三昧とは、少しは他の事でもして楽しんだらどうだ?』

「これは僕にとつての趣味であり生きがいみたいな物ですからね。気がおかしいと言って貰っても別に構いませんよ。」

『別にお前はマッドサイエンティストって訳でも無いけどな。ただお前はもう少し青春しろって言いたいだけだ。』

「青春って言われても良く分からないですが……………」

『…………… 面白いやお前女からはモテる癖に自分からは行動を起こす訳でも無いからな…………… まあ人生を後悔するなって事だ。ところでデータは全部受け取ったらしい。それじゃあまたな。まあ、がんばれ。』

「はい、そちらも。」

通信が切れ、丁度早苗が部屋に戻って来た。

「持って来ましたよ。」

お盆から片方の茶碗をカイルに渡す。

茶碗には透き通った緑色の液体が注がれている。

「緑茶か。」

その時カイルの脳内には何故か先程のロウとの会話が思い浮かぶ

でいた。

『ただお前はもう少し青春しろって言いたいだけだ。』

(青春、か……)「……そうそう、緑茶と紅茶ってどちらも茶葉が同じらしい。」

「そうなんですか?」

「紅茶は緑茶を発酵させた物だ。発酵した分甘味や酸味が増す。西洋人は甘味を好むから苦味そのままが苦手だからね。逆に日本人というのは菜食だから甘味自体に慣れていない。だからこういうった薬味みたいな苦味を好むんだろうね。」

「へえ、凄いですね。」

早苗は興味深そうにカイルの雑学話を聞いていた。

一方、カイルは腑に落ちない感情を抱えていた。

(これで良いのか?……)

「ん?どうかしたんですか?」

カイルの感情は表情に表れていたらしく早苗がそれを疑問に思っただけらしい。

「い、いや、何でも無い。」

戸惑っているカイルを見て思わず吹き出しそうになった早苗だが如何にか堪え、これ以上は質問しなかった。

78 はたらくトランセンデンド・マン

リヨウは背中に重そうな機械のバックパックを背負った。

バックパックからコードが伸びた金属製の手袋と靴を装着する。

手袋は肘まで、靴は膝まで覆う程長い。

これは以前リヨウが製作した装着型飛行マシンだ。

「取り敢えず試すか。」

そう呟いたリヨウは右手を前に伸ばした。

前に伸ばした平手の中指と薬指を曲げる。

手袋の手首部分から糸が伸びた。

糸は壁に張り付き、リヨウと繋がったままだ。

リヨウは手首から糸に向かってエネルギーが向かうのが感じ取れた。

するとリヨウは左手を手刀の形にし、勢い良く糸へ振り下ろした。

糸は良く伸びるが全く切れない。

「よっしゃ、糸はちゃんとエネルギーによって強化されたな。」

右手を握り締めると伸びていた糸は戻った。

次は両手を握り力を込める。

手袋の手の甲の部分から3本、合計6本の金属製の鋭い爪が伸びた。

身体から爪へエネルギーの流れ。

爪を近くにあった木の板へ振り下ろした。

下ろしてから止めるまで何の抵抗も感じなかった。

一方、木の板は3本の切れ込みが入っていた。

「すげえ切れ味だぜ。お次はと……」

リヨウが次に取り出したのは頭頂部がやたら大きい片手ハンマー。

ハンマーを横に置いてある今朝狩ったイノシシの10kgはある肉の塊に向けた。

エネルギーを送り込むと、ハンマーからエネルギービームが発射され、肉塊へ命中する。

大量の電気エネルギーを受け取った肉塊は電気抵抗によって熱を

生み出し、その熱によって肉の水分は急激に気化する事で膨張し、肉は勢い良く破裂した。

周囲に飛び散った肉片は全て焦げており、食べられそうにない。続けてリヨウは見た目は何の変哲も無い西洋風の弓と矢を取り出した。

「何か無いかな？」

そう呟き辺りを見回すリヨウ。

窓の外に山が見える。

その一点を凝視するかのように視線を向ける。

使用者からエネリオンを受け取った弓はその糸の張力係数と引つ張り強度を増加される。

リヨウが右手に矢を持ち弓へ掛ける。

それに反抗する様に糸は力を入れても中々伸びず千切れる事も無い。

「硬えなこれ、スピードは出そうだが……。」

弓矢の出来栄えに呟きを漏らす一方、視線を一点に定めた。

右手を放す。

同時に右手の引つ張られる抵抗が消えた。

バゴーン！

至近距離を衝撃波が走り、矢が途轍も無い速さで飛んで行く。

衝撃波によって周囲のガラスや比較的脆い木の板が割れた。

次の瞬間、山の一か所に爆発が起きた。

里中から騒ぎ声が聞こえ始める。

「……また怒られるな……。」

ドガツ！

足を曲げ衝撃を吸収し着地したカイル。

上を向けば地上へ続く穴は全く見えない。

少し歩くと知り合いが見えた。

「よう、あんた、カイルだっけ。何の用だい？」

「どうも勇儀さん。ちよつと仕事でね。」

「仕事？一体何の？」

「科学者だよ。色々取りたいデータがあるからね。」

「ふーん、成程、確かにあんた頭良さそうだもんな。」

「ところで突然だけど、髪の毛を一本貫えないだろうか。」

「ん？髪の毛別に良いが、何に使うんだい？」

勇儀が頼みを承諾し髪の毛を一本抜いて渡したが、勇儀にはそれを何に使うのか見当も付かなかった。

「簡単に言えば、生物の体にはあらゆる所にその身体的设计図が存在する。髪の毛からそれを調べるんだ。」

「難しそうな話だな。調べてどうするんだ？」

「他にも幻想郷に存在するあらゆる種族から貫っているんだけど、それらを調べる事で幻想郷に住む者達の進化の過程やルーツを調べようという訳さ。僕には貴方がた鬼の角や天狗の羽等、疑問に思う事が沢山ある。それらの理由を知る事で僕達トランセンデンド・マンが存在する理由にも繋がるかも知れない。」

「……なるほどわからん……。」

「それでも結構。そこは専門家だから。」

カイルが受け取った髪の毛を小さいプラスチック袋に入れ、苦笑しながら言った。

「ところで後ろの彼女は……。」

カイルがそう言ったのも無理は無い、勇儀の背後の物陰から見知らぬ誰かから憎まれる様な眼差しで自分を見ているからだ。

「パルスイダ。いつも人が楽しそうにしている所を見るとああやって妬ましい妬ましいって言うんだ。」

「は、はあ……………」

試しに敵意の無い視線を返してみる。

物陰から少し飛び出た金髪は緑の目を睨ませ、聞こえない声で何かを呟き去って行った。

「心配すんな、何時もあんな奴だから。」

「……………」

それはさておき、カイルは本来の目的の為に更に地底の奥へ進んだ。

目的地に着くと同時にその住人の1人が駆け寄った。

「あつお兄さん。ちよつと待って、さとり様を呼んで来るね。」

嬉しそうに走りながら主の元へ向かう燐。

「わざわざ行って来なくても僕から行けば良いのに……………」

一方、カイルは意識を五感から外し、脳が受け取る周囲のエネルギーに向けた。

(やはり地上に比べユニバーシウムが遥かに多い。だが問題は……………)

「あの、カイルさん。こ、こんにちは。」

声を掛けられ意識を戻すカイル。

「やあ、さとり、早速だけど研究の為にこの場所を使っても良いかな？」

「構いませんよ。研究ってどんな事をされるんですか？」

「エネルギーとユニバーシウムについては昨日既に話したつけ。」

「はい。」

「それで、地球管理組織が人員を送り、やがて此処に辿り付いた。その理由はやはりこの付近一帯の岩石にユニバーシウムが大量に含まれている事だ。ユニバーシウムによって出来るエネルギーの流れが外からの知覚阻害になるし、岩石に含まれるユニバーシウムを取り出し戦力を拡大する事も出来る。でも僕は何故此処にそれ程大量のユニバーシウムが含まれているのか、それが僕にとって疑問なんだ。なら

試しに見せようか。」

「じゃあ見てみます。」

「それじゃあ僕の知覚を通してユニバーシウムの分布を送るよ。脳に負担が大きいと思うから気分が悪い時は言ってくれ。」

途端にさとの視界に大量の光点が現れた。

光点は疎らに広がっていたり一か所に集まっていたり、夜空の星々の様に大量に存在している。

「凄い……この光っているのが？」

「その通りユニバーシウムだよ。でもこれだけじゃあまだ不十分だ。僕はここに存在するユニバーシウムがある可能性を示していると思っている。」

「その仮説って何ですか？」

「そうだね……観測が終わったらまとめて教える事にしようかな。」

カフェ「ザイオン」に客が1人入って来た。

「いらっしやい、って珍しいじゃねえかお前。」

「私だってそりやあ来ますよ。」

リヨウが珍しいと言ったのは紫のショートヘアーが特徴的な少女。「それで阿求、何食う？ブラックバスのソテーでもどうだ？まさかブラックバスが幻想郷に居たなんて思わなかったぜ。」

阿求と呼ばれた少女の名は稗田阿求、先代の記憶と自分が生まれて

からの記憶全てを記憶する少女。

普段は自宅に籠り本やら書いているらしい。

「ブラックバスってあの最近湖で大量発生している大型魚ですか？幻想郷の生態を脅かしているあの魚が食べられるなんて考えもしませんでしたよ。」

「外界で元々食うために輸入されていたのが野生化し、環境の変化によりそいつらが幻想入りしたらしいな。環境悪化はマシになったとはいえ、今続いている戦争の戦術兵器による環境破壊がそりゃあ凄いのなんの、山が消し飛ぶ位だ。」

「そんな兵器があるのですね、外界には。というか他に料理無いんですか？」

「じゃあスズメの丸焼きでもどうだ？うまかばい。」

「何処の方言ですかそれ。」

「納豆小倉サンドイッチはうみやーよ。」

「だから……… とうかこの店そんな変な料理しか無いんですか?!」
「まずは食えよ。味が良けりや文句は無いだろ。」

「普通ので良いです！」

阿求が遂に啖呵を切らし、からかうのを止めたりヨウは大人しく注文に応える事にした。

「良い奴があるんだ。スパゲッティをタコスに挟んだ奴何だが、それで良いか？」

「良いですよ。」

厨房へ入り、手際良く材料と調理器具を取り出す。

丁度その特別の客が入って来た。

「おう待ってくれ、誰だ？当ててやる……… ピンクちゃんだな。」

「もう、何でまたそんな名前で呼ぶんですか！ちゃんと本名で言っして下さいよー！」

「ピンク頭だから別に良いんじゃないやね。」

「良くないです！」

リヨウは右手で麺を鍋に入れ左手でトルティーヤをフライパンに乗せながらその顔を確認した。

桃色の髪をシニヨンにし、赤い目と赤系統の服が特徴的な女性、茨木歌仙だ。

「何食う？」

「あ、コーヒーとお菓子だけで良いです。浅めの煎りをお願いします。お菓子はお任せで。」

「了解、アメリカンだな。エッグタルトにしとくぜ。」

パスタを茹でる間にコーヒーを入れ歌仙のカウンター席に渡す。

タコス生地を焼き終え、タルト生地を準備する。

タルトを焼きながら茹で終えたパスタにソースを掛けタコスに挟む。

「おらっ、できたぞ。ソースは辛いから気を付けろよ。」

「どうも。」

「タルトはあとどれぐらいですか？」

「少し待ってろ。」

リヨウはまだ焼き終わっていないタルトをオーブンから取り出した。

調理台に乗せられたタルトに右手を向けた。

次の瞬間、掌からタルトへエネルギーの噴流が吹き付け、エネルギー

ンは熱に変換されタルトはあっという間に焼き上がった。

不思議と調理台は溶けても焦げてもしなかった。

「早いですね。」

「俺のこの「加熱」という能力が無ければこんな喫茶店営業なんて出来ないだろうね。料理は速攻で出来るしバイトも雇わないで済む。」

リヨウのジョークに不機嫌だった阿求と歌仙は笑った。

79 拘り

鈴仙は今日の分の里への売薬を終え、永遠亭に帰って来た。

「ただいまー。」

「あつ、おかえりー。」

廊下の奥から明らかに鈴仙よりも高い声が迎えた。

「てゐ、そこに居たのね。」

鈴仙は声のした部屋へ入ると同居人である因幡てゐの姿を認めた。

「うん。暇だから。」

「あんたねえ、いつも遊んでないで私や師匠の手伝いでもしたらどうなの?」

「それにしてもこの人全然動かないよね、本当に無事なのかな?」

「暫くすれば目が覚めるだろうって言ってたけど、って話を逸らすな! 全く、これで私より年上だなんて本当かしら……。」

「あつそうだ。」

すると丁度同じ所に居たてゐが何かを思い付いた素振りを見せ、何処かへと行った。

1分も経たずに戻って来た。

手に何か細長い物を持っている。

「ちよ、ちよつと、何するつもり?」

良く見るとそれはペンだった。

「いたずら〜。」

「こらー! 止めなさい!」

「嫌だも〜ん。」

制止しようとする鈴仙を余所にペンのキャップを取り自分の野望を達成しようとする。

鈴仙は言っても聞かぬてゐの野望を打ち砕こうと引つ張ろうとする。

その時、

「おい。」

「ヒッ!」

突然低い声が威嚇する様に発されたのだ。

慌てて目の前の横たわる男へ目をやる2人。

目は瞑っていた。

口も閉じているし呼吸は昏睡状態の為無かった。

てゐるが勇気を振り絞って男の頬を突いた、が何も起こらなかった。

「……………なんだ寝言か。」

てゐるはホツと安堵を着き、再び目的を達成しようとする。

だが寝言というのは睡眠状態、つまり脳が休息中に記憶を整理する際に起こる現象だが、目の前の男は昏睡状態だとカイルは言っている。

昏睡状態は睡眠よりも脳が殆ど活動していない状態であり、その状態で寝言を言うという事は、

「止めろ。」

「ひえっ！」

今度は男の口が動き声が出たのをはつきりと見た。

「……………どうなってるの?!」

丁度病室に医者兼薬剤師が入って来た。

「お帰りウドンゲ。てゐるもここに居たのね。なんか驚いた声が聞こえたからどうしたのかと思ったのだけど……………」

「そうなんです！さつき昏睡状態だというのに間違い無くてゐるのいたずらに気付いたんですよ！明らかに、止めろ、って！」

鈴仙が永琳が話し終える前に目の前で起こった事を話した。

「少し落ち着いてウドンゲ。つまり彼は意志ある言動を見せたという訳ね……………」

「はい、って事は目覚めが早いんでしょうか？」

永琳は男の身体を見るなり触るなりして観察し、弟子の質問に答えた。

「今刺激を与えただけでは筋肉の外的刺激による反射的動作以外は特に見られないわ。だから……………」

永琳は思い付いた様に何処からか外科手術用メスを取り出した。

「えっ？何をやるんですか?!」

「見てなさい。」

永琳はメスを高く掲げ、刃先を男へ向ける。

男へと勢い良く刃が突き刺さろうと迫る。

思わず鈴仙とてゐは目を閉じた。

ザクツ

静かに鋭く深く突き刺さる音。

恐る恐る目を開ける2人。

「やっぱりこういう事だったのね。」

永琳が呟き、2人の弟子はその視線を辿った。

メスは男すれすれの布団の横に突き刺さっていた。

「これって一体……。」

「私は彼を突き刺そうとした、でも接触する瞬間という時に強い力で逸らされたのよ。トランセンデンド・マンの防護壁を張る能力かしら。意識を失っているというのに出来るなんて、恐らく彼は非常に自己防衛本能が強いよね。自分を害する要素を徹底的に排する、まさにそんなだわ。余程生き延びようという執念が凄いのね。」

カイルは今まで数時間開けていなかった目をやっと開けた。

「あつ、終わったんですか?」

「まあ一段落って所かな。」

さとりの返事に答え、座禅状態の体を起こし節々を伸ばす。

「さつき紅茶淹れたんですけど、良かったらどうぞ。」

「紅茶か、良いね。実は地上で緑茶も飲んだんだ。それで、緑茶と紅茶は元々茶葉が同じだって。」

「そうなんですか？味は全然違いますけど。」

「紅茶は西洋から中国まで幅広いけど緑茶は日本独特の文化なんだ。日本人はむしろ苦味を好んだのだろうね。」

「へえ凄いですね。」

カイルが今日で2回言う事になる雑学を話しさとりが感心しながら紅茶をポットからカップへ注ぎ終えた。

「砂糖と牛乳も良ければ。」

「ありがとう。」（コーヒーが飲みたい所だけど、たまには良いか。）

そんな何気ないカイルの思い付きをさとりは読んでいた。

（今度は燐にコーヒーを買ってくるように言おうかしら。）

「ん？」

何故か発されたカイルの声にさとりは声こそ上げなかったがビクツとした。

（そういえばカイルさんは心を開いた人物の考えなら読めるって言うてたからもしかしたら……。）

だがそれは考え過ぎだったらしく、

「……。」

カイルは気のせいか、とでもいうように視線を変えた。

気まづくなりかけた空気（さとり視点）を和ませるためにさとりは話題を作ろうとした。

「……いや、違うな。」

が直前、カイルが再び口を開いた。

（やっぱり私の心を読んてるの?!）

対してカイルは別な方向を見ていた。

「誰か居るのかい？」

さとりはその言葉からすぐにある人物を思い浮かべた。

「いいし？どこなの？」

「……だよ。」

明らかにさとりよりも年下と思われる少女の返事が聞こえたのは

カイルの背後だった。

その姿を確認した時、その場に居た2人は驚いた。

カイルは見知らぬ少女が自分の首に後ろから抱き付いている事、さとりは自分の妹が大事な客に失態を犯している事。

濃い緑の目と薄い緑のセミロングヘアの上に黒い帽子を被り、黄色の基調に緑の裾とスカートが特徴的な少女。

さとりと同じく近くに大きな目玉が漂っていたが、さとりとは違い目の色は深い青でしかも瞼は閉じている。

「こら、こいし、お客さんに迷惑でしょう。」

「うん分かった。」

10歳にも満たない外見と同じく精神年齢もそれと同等かそれ以下らしい。

「カイルさん、この子は私の妹でこいしって言います。」

「よろしくね。」

さとりが簡単な他己紹介をし、当人は無邪気な笑みで挨拶した。

「僕はカイル、よろしく。」

カイルも友好的に挨拶した。

「それじゃあカイルお兄ちゃん、この前は私のお姉ちゃんを助けてくれてありがとう。お姉ちゃんとても嬉しそうだったよ。」

それを聞いたさとりは何故か顔を赤らめ、カイルはそれも気にせず、どういたしまして、と答えた。

(しかし気になるのがあの目玉……)

「あつ、こいしは人が信用できなくて、それでサードアイを閉じてしまっていて、それで、いつもは他人に気付かれない様に姿を見せないんです。」

カイルの思考を先取る様にさとりが解説を加えた。

「僕も始めは何も感じなかった。完全に周囲に溶け込んでいたんだ。その為僕は錯覚してエネルギーンに対する知覚能力を最大限使うまでは気付かなかった。」

「凄いでしょ、私隠れんぼは得意なの。でも私が能力を使っている初めて他の人に気付かれたのはお兄ちゃんが初めてだよ。でもどう

して分かったの?」

こいしが賞賛し、質問を投げ掛け、カイルは少し考えた。

「こいし、君は……例えば君の目に映る僕の姿は本物だと思ってるかい?」

「うん……?」

こいしは質問に答えたが要点が掴めず首を傾げた。

「あらゆる生物は目や耳、あらゆる感覚器官で知覚する。でもそれが本当だと思うかい?」

「どういう事?」

「脳は感覚器官で得た情報を元に世界を認識する。でもその感覚器官や脳、それぞれかその考え方自体間違っていたら?それを証明する事は出来るかい?」

こいしどころか傍から見ているさとりもきよんとした。

「誰も真実を知りはしないんだ。でも僕はそれに近づく事が出来る。ここから具体的な話に入るんだけど、この世界にはあらゆる物質やエネルギーを構成する粒がある。僕は生まれつきその粒を“知る”事が出来るんだ。つまり物質やエネルギーや空間の「真実」に近い答えを知る事が出来る。もつとも、それすらも正しいのかは分からないんだけどね……こんな話をしては今も分からないだろうけど、僕のように“知ろう”とすればきつと分かるさ。」

「……うん、私色々な事知りたい!」

その返事を聞いたカイルは科学者として純粹に嬉しかった。

カイルにとっては若者が科学に興味を持って欲しい、という願望も持っていた。

(こいしったら初めて会う人にあんなに懐いちゃって。)

そう思うさとりも間違いないカイルに信頼を抱いていた。

森林地帯を走る1台のバイク。

時速300kmを超えるスピードで木々を抜けていく。

というか音速の5倍の銃弾すら躲すトランセンデンド・マンにとって秒速83mなど避けるに越した事は無い。

それどころか音速で走るトランセンデンド・マンの5分の1にも満たない。

つまりこのバイクの操縦者であるリョウにとっては物足りなさを感ずるのであった。

リョウが目的地へ向かっているのもそれが理由だ。

目的地が見えると、車体を大きく動かし横向きに、ハンドルは車体とは逆方向に。

減速しながらハンドル調節をし曲がる。

木々を抜けた先にある建物に残り3mで止まった。

黒いフルフェイスヘルメットを脱ぎ、早速中に入る。

「マスター、いつもの頼むわ。」

「いや、バーでも何でも無いから」

「しかし、散らかってんな。ゴミの処理位しておけよ。」

「全く、ゴミじゃくて立派な商品だぞ……相変わらずだねリョウ。」

リョウの冗談に答えたのはここ「香霖堂」の主人である森近霖之助だ。

「前にお前からバイクを貰っただろ?」

「ああ、喜んで天井突き抜けていたっけ。」

「俺が感じるに物足りなくなっただけ。モーターもキャパシタも全て最高の奴に取り換えたが、まだだ。そう、まだだ!」

「……職人魂って奴?」

「動力源かエネルギー源自体変えるか、それとも……」

霖之助の呟きをスルーし考え込むリョウ。

「いや…… 霖之助、工作道具借りるぜ。ついでに色々材料使いた
んだが良いか？お代は後でまとめて払うからよ。」

「別に構わないよ。もつとも、何をするのか見当が付かないけど。」

「今に見とけよ。」

「いや、恨みを買った覚えは無いんだが……。」

言い残したりリョウは渡された道具類を無造作に掴み取り、バイクの
置いてある外へ姿を消した。

80 値段では無い

地霊殿異変から1週間が経った。

「風が気持ち良いわね。」

「ああ。」

青空とは対照的に木々の葉っぱは黄色又は赤く染まっている。

「紅葉が綺麗だな。」

「ああ。」

霊夢と魔理沙からの呼びかけに対しアダムの返事はそれらしい感情が籠っていないかった。

アダム達は妖怪の山の麓へ足を運んでいた。

今見頃の紅葉を見るつもりだったが、最初に提案した霊夢の考えは何時も笑顔を見せる事の無いアダムがこうしてたまにはのんびりする事で楽しくさせようと思ったのだ。

しかし肝心のアダムと言えば、いつも通り無言で無表情で気を抜いている様子を見せない。

何時もロングコートの下に銃とナイフを隠し持っているのだ。

「……………」

「…………… どうして、くつろがないの?」

それを見かねた霊夢が恐る恐る訊いた。

「…………… 正直分からない。一番だと思ふ理由は、僕は何時も恐れているのかもしれない。」

(しまった、ますます悪い方に進んでいるじゃない……………)

心の中で苦虫を噛み潰した霊夢を余所にアダムが話を続ける。

「今にも地球管理組織が侵入し結界が壊れるかも知れない。」

「まあまあ、今は休もうぜ。リヨウは味方の通信によれば向こう側が動いている様子は無いって言うし、カイルもこれだけ損害が出れば暫くは手を出して来ないだろうって。」

「可能性の話だ。100%の安全が無ければ意味が無い。」

魔理沙の説得にアダムは態度を変えない。

魔理沙もそれに反論する事は出来なかった。

「次回の侵攻時は更に大量の戦力を導入するだろう。「爆弾」も既に幻想郷内に存在している物では無く外から持ち込めば可能な話だし大量の人員であれば配置もすぐに終わる。それに外界から結界へ直接エネルギーを送る事での結界破壊だって不可能では無い。あらゆる可能性を考え、それらへ対処する事が重要だ。」

「考えるのは良いけど、でも無理して体を壊したりしないでよね。」

霊夢がアダムの話に割る様に言った。

「無理はしていない。」

「ほらほら、そんな事言わずに、リラックスして。」

霊夢はアダムの後ろに回るとアダムの両肩を掴んだ。

霊夢が力を入れると、それと同じ力でアダムの身体に押し返された。

何時戦闘が始まっても良い様に常に気を抜いていないのだろうか。

「うわっ、硬いじゃない！座って、マッサージしてあげるから。」

「わ、分かった。」

霊夢の言われる通り落ち葉と茶色がかった草で覆われた地面の上に座り、霊夢が肩や首を揉む。

「……………」

「……………」（私何か気まずい事でもしたかしら……………」

1分間秋風の音だけが流れた。

「……………」

「……………」 気持ち良い？」

霊夢が流れる沈黙を破った。

「ああ、悪くない。」

その返事を聞き霊夢は喜んだ。

そして霊夢はアダムのきりつとした顔が僅かに綻んだ様に見えた。

「楽しそうじゃない。」

「何がだ？」

振り向いたアダムの顔は…………… 普段通り感情の見えない物だった。

霊夢が不満げな顔をしたが、変わらず肩を揉み続ける。

その様子を何とも言えず魔理沙は何かと気恥ずかしさを覚えながらただ見ていただけだった。

「こんなのバイクじゃないよ。只のスクラップの集合体だよ。」

「だったら解体すれば良いだろ。良いか、バイクってのはアメリカで生まれたんだ、日本の発明品じゃねえ。USAがオリジナルなんだよ。」

霖之助の冗談じみた突っ込みに同じく冗談で返し、更に話を広げる。

2人の目の前にあるのはリヨウが以前香霖堂で発見し、無料で貰い、改良を積み重ねたバイク「Ninja EX-R」、それを1週間掛け本格的に改造した物だ。

しかし、外見は以前と同じくスポーツタイプバイク特有の流線型のボディに変わりは見られない。

空力を考慮して調整された凹凸の僅かな変化は目を凝らさないと見えないだろう。

そしてリヨウのジョークは続く。

「だが色々遅れを取っても何でも、ハーレーに巻き返しの時は来ない。座ってみろ、快適だろ?」

リヨウに促されてバイクのシートに跨る霖之助。

これは革だろうか、確かにクッション性は良いらしい。

「高級牛革なんて高級材量どこで見つけたんだい?」

「高級牛革という見た目だけの合成繊維のシートだ、だが牛革よりも夏は涼しく滑らないし劣化にも強い。そうだ、回してみてくれ。」

霖之助は言われる通りにハンドル右グリップを前へ捻った。

左グリップのクラッチレバーを握っているのでバイクが前に進む事は無いが、モーターの勢いのある振動が伝わって来る。

キュイイイン、とでも形容すべき音は今にも素早く前進しそうだ。

「余裕の音だ、馬力が違う。前後2輪駆動、ABS付き、18000回転で400馬力を誇る。ピーキー過ぎてお前には無理だよ。」

「というか乗った事無いし。数字だけ聞いているけどそんなに高性能だったら使い辛いという欠点は無いのかい？」

霖之助がバイクから降りながら疑問を投げ掛ける。

「まあな、バッテリー用量を出来るだけ上げても限界だ。だがキャパシタの高効率・高容量化回路とかはカイルがノウハウを知ってるからそいつに任せとくよ。ところで代金どうすりゃ良い？」

「そうだな……次から君の店に来る時にコーヒーと甘味を無料にしてくれ。」

「了解。そうそう、一番気に入らないのは……」

「何だい？」

リヨウはバイクに乗りヘルメットを被り手袋をする。

そして意味ありげな様子で霖之助へ向きながら口を開いた。

「こんな宝がこんなガラクタ溜まりにあったって事だ。」

リヨウはヘルメットのバイザーを下ろし、霖之助は両手を肩の高さに上げ、さあ、というジェスチャーを示した。

バイクは甲高い音を上げながら森の中へと消えた。

カイルは部屋の隅で壁に寄り掛かりながら目を閉じていた。

眠っているのではない、むしろカイルの脳の活動は普段よりも活発だ。

つまりどういう事かというのと、カイルがコンピューターから受け取った情報を整理しまとめるといふ作業をしている。

そしてついにその瞼が持ち上がった。

「あれ、もつと時間かかると思ったんですけど、速いんですね。」

早苗がそう賞賛と驚きを言ったのも無理は無い。

普通の人間が短いながらも論文を作る時、大量のデータの中から必要なデータのみを抜き出し、それらを整理し文章にする作業がどれ程大変なのかは想像に付くだろう。

それをこの青年は情報の整理だけで1分も掛からずに1つの研究結果を導き出した。

「まあ能力だし。我ながら便利だよ。特に科学者という職業に関して。」

「それで、結果はどんなですか？」

結果とは、カイルがさつき終えた「幻想郷内のあらゆる種族における進化過程やその要因」といふ論文の事だ。

カイルは幻想郷中のあらゆる種族の髪の毛を元にゲノムを自身の能力によつて調べ、その生態や傾向やルーツを調べ上げたのだ。

「分かりやすく説明するのは難しいが、これを見てくれ。ゲノムの構造を簡略化した物だ。」

カイルに言われる通りデスクトップを覗く早苗。

「まずは染色体数、全部が46本。例外は一切無い。DNAを調べた所、99.999%はどれも普通の人間と同じなんだ。」

「それじゃ妖怪は人間から進化したって事ですか？」

「そうだと思う。このミトコンドリアDNAっていう母方限定のDNAがあるんだけど、これを見てくれ。」

表の横には年数らしき数字があり、何万何十万前と表示されていた。

一方、縦は種族名らしき文字と、マス目にはアルファベットや数字の組み合わせ。

「最初の方は違いが大きいかも知れない、だがこの16000万年辺りを見てくれ。」

早苗がある事を発見した。

「大体一致していますね。じゃあやっぱり。」

「ああ、16000年前というのは丁度人類が日本列島に到着した頃だ。西洋を由来とする種族はこの様に西洋独特のルーツだが、更に300万年前まで遡ってみると例外無く明らかに人類と同じくアフリカ大陸を起源としている。本格的な分類化は5000年前程らしいけどやはり人間と妖怪はまさしく同種だと思っても過言では無いと思うよ。」

「でもどうしてあんなに人間とは違った能力を持っているんでしょうか。」

「それは、人種とかと同じ考えだ。いくらDNAが同じでも住む地域で髪、目、顔立ち、内臓、性格、思考、あらゆる事が違う。独特の文化だってある。ここから具体的に考えよう。」

カイルは言い終えると少し考える様な仕草を見せ、再び口を開いた。

「例えば、鬼の角、あれはヒツジやヤギ同様毛が変化した物だと判明している。では何故角が生える必要があるのか。」

「確かに、生物は生きるのに役に立つ進化しかないって聞きました。役に立つんでしょか?」

「イツカクやバビルサが例の様に、角は強さの象徴とも読み取れる。実際鬼の中でも大きい角を持つ萃香や勇儀は高い地位にあると見られた。高等生物における進化は文化も要因するんだよ。仮説だけだね。」

「でもこれだけの事を考えられるだけで凄いですよ。」

早苗が感心した声で賞賛し、カイルはそんな事無い、と手を振る。

「前も言ったと思うんですけど、私これでも理系なんですよ。だからこんな研究者とか尊敬しちゃいます。」

「いやいや、僕より素晴らしい人はまだ沢山居るさ。それに何時もこんな研究が出来る訳でも無いし。」

カイルが照れながら否定するが、早苗の態度は変わらず。

その様子を僅かに開けた襖から見ていた姿があるとは知らず。

「2人共楽しそうだね。フヒヒ。」

「諏訪子、笑い声に変態だぞ。今の録音して2人に聞かせようか？」

「我が子の成長ぶりを見て喜ばない親なんて居ないでしょ。神奈子は早苗に多少過保護なんだよ。」

「そりゃあ我が子は大切にしないきゃならんし、そう言ったって、早苗は昔から男に慣れてる訳でも無いしね。」

「でも今は明らかに慣れてるじゃない。いや、彼が特別なのかもね。ふふっ。」

その2柱のやりとりをカイルが能力によって知る、事はそもそも能力を使っていないので無かった。

81 蕎麦

「…… って訳でありがたく食えよ。この意地悪な俺が奢ってやったんだ。今度は蕎麦よりも安い奴にしてくれよ。」

「勿論だ、ありがと。」

「カイルさんは約束って事だから分かりますけど私まで良いんですか？」

リヨウの冗談を込めた、奢ってやる、という喋りに対しカイルは素直に受け取り、早苗は遠慮がちに言った。

「当然だ。俺は優しいからな。」

「それ矛盾してるから。」

カイルの的確な突っ込みに、リヨウは自分の頭を軽く殴った。

「記憶喪失で分かんねえよ。」

思わず3人の間に笑いが流れる。

丁度その時、暖簾を潜る3人分の人影を確認した。

「リヨウ、来たぜ。」

「一番高いの何だったっけ？」

「遅れたか？」

順に魔理沙、霊夢、アダムの台詞だ。

「ようお前ら。いや、俺達が少々早かったただけだ。ほら座れ座れ。」

霊夢の呟きはスルーし、3人を6人掛けテーブルの空席に座らせた。

通路側から見て左前にアダム、左中に霊夢、左奥にリヨウ、右前に魔理沙、右中に早苗、右奥にカイル、という並びだ。

「店長、天蕎麦を3つ追加だ。」

あいよ、という声と作業音が厨房から聞こえる。

「こりゃあ財布が軽くなって帰る時重くなくて楽だな。」

リヨウのジョークに皆が笑う。

「アダム、3日間何も食べないで良い様にしつかり食べなさい。」

「オイオイ、霊夢お前が貧乏なのは知っているが1人1品で我慢してくれや。」

「私だって冗談位言えるわよ。」

「ハハハ。ところでカイル、俺のバイクだがキャパシタ容量増やしてくれないか?」

「全く、人を何だと思って使ってるんだか。」

「……このクソツタレでゴミクズのクソ野郎な俺に力と知恵をお与えください、おお偉大なる天才科学者様よ。」

「別に冗談さ。型は分かるかい?」

「表示は剥げていて分からなかったが、性能的に見て50年代位かな?多分日本製だ。トランスも充電回路も出来に欠点は無いと思う。」

「それじゃあ内部電極の表面積はあれ以上は大きくは出来ない。なら電解質を入れ替えるか。電極もある程度アルカリ金属類を使えば伸びるかもしれないけど、その場合は保存性は良いけど、発熱性が高くなるし劣化も早いし電池に近くなるだろうね。」

「おお、サンキューな。過熱はこちらで何とかなるからOKだ。」

「……思ったんですけど、わざわざバイクで走る意味ってあるんですか?自分で走った方が速いんじゃない?」

「ああん?!馬鹿者オ!何を愚弄するかア!これだから女ってのは……」

「ひえっ?!」

早苗の眩きにリヨウが食って掛かった。

冗談気味ではあるが突然の大声だったので早苗は思わず怖がって声が出てしまった。

「リヨウ、自分のセオリーを皆が受け入れるとは限らない。それに冗談とはいえ怖がられてるじゃないか。」

「分かった分かった。マジレスされるとキツイんだよ。それよりもお前早苗ちゃんの事やたら弁護するじゃねえか。」

この発言によってカイルは顔を赤くした、という事は無かったが、代わりに早苗が赤らめた顔を俯かせた。

「というか、何でちゃん付けなんですか?!」

「良いじゃん、かわいいし。」

早苗の突っ込みはリヨウが手早く跳ね返し、早苗は今度は少し照れ

た。

「そ、そうですか？」

「じゃあ何で私はちゃん付けしないのよ。ここに居る美人が見えないのかしら？」

早苗を余所に霊夢がリョウの話に乗った。

「知らんな、コンタクトレンズを付け忘れてその美人とやらの顔が見えなくてな。」

それを聞いた霊夢が拗ねて頬を膨らまし、リョウは満足した様に笑った。

暫くして、店員が蕎麦をお盆に乗せ、最初に3つ、少し間を置いて3つ、と運ばれた。

「出汗に魚介系が無いとはいえあつさりしているね。僕は個人的に昆布を使ったのが良いんだが、幻想郷には海が無いから仕方ないだろうけど。」

「そうですか？私はこってり系の方が苦手なのでこちらが良いんですけど。」

「僕は一応北欧出身だからすつきりした味よりも腹に溜まる様な油の多い系が好きでね。あと魚も。」

「成程、寒いし海がありますもんね。私は油系は太りたくないの……あと内陸の方出身だから魚にはそれ程馴染んでいる訳でも無いです。」

「まあ妥当な所だろうね。そうそう、今度はスウェーデン料理でも振る舞おうかな。」

「えっ、良いんですか？」

「僕にも料理位は出来る、それに何時もお世話になっているし偶にはお礼をしなくちゃ。」

カイルと早苗は暫く周囲を気にせず会話を楽しんでいた。

一方、アダムと霊夢の方はというと、

「……………」(何でこんなに話し掛け辛いのよ！)

ズルズルズルズルッ！

アダムは周囲そっこのけで蕎麦をすすする事だけを堪能していた。

（やはり蕎麦は小麦とは違って清涼感があるし、味も香りもしつかりと活かされている。すする時の触覚や口に入れた時の食感も見事だ。）

「人間火力発電所だなありや。うおオンって効果音が流れてるぜ。」

（何より、このコクのある出汁が蕎麦の風味を損なわず麺を引き立て、麺の食感もまた出汁を引き立てる。更にトッピングの天ぷらも尚更だ。）

リヨウが独り言の様に突っ込みを入れる中で、アダムは自分一人料理を味わっていた。

「お前、何時も食べる時はそんな風に美味そうな顔してるしかき込むように食うよなあ。」

魔理沙の言う通り、霊夢達が目にしてきたアダムの人間らしい仕事と言えば、この食べる時と、そして半年以上前に見せた爆発する様な怒りだけ。

「ところでアダム、お前中華武術やってるんだっけ？詠春拳か？少林拳か？」

リヨウが無言のアダムを見かねたのか、話題を提案した。

「ジークンドーだ。正確にはブルース・リーの編み出した“思想”だ。が。」

「見るな、感じろ」だろ？俺はジャッキー・チェンの相手の動きに合わせる流れる様な動作が好きだが。」

「僕も、ジークンドーの理念は素晴らしいと思うな。」

すると男3人組が意気投合(?)し始めた。

「真つ直ぐに、あらゆる方向から、連続で、相手を抑えながら、相手を誘いながら、相手を惑わし、攻撃を確実に当てる。」

「自己そのものから始まり、技を身に付け、無に戻る。格闘だけじゃない、学問や生活や人生、あらゆる事に通じる。漢字で書けば「截拳道」、困難を断ち進む。」

「そーいやドニーの奴も高く評価していたな。元々あいつ哲学とか好きだし。」

順にアダム、カイル、リヨウ、の発言だ。

「何言ってるか分かんないぜ……………」

「別に言ってること自体はアダムがいつもやってる事だから難しくも無いけど……………」

魔理沙の呆れ声に対しそう言う霊夢は何処か不満げだった。

「霊夢さん何でそんな顔なんですか？」

早苗が心配そうに訊いた。

「……………ジークンドーって奴、仏教由来だから気に食わないのよ……………」

答えを聞き、ああ成程、と相槌を打った。

「霊夢はお前、そういう閉鎖的な所直した方が良いんじゃないか？」

「そうですよ、色々な事を受け入れれば自分の考えも深まりますよ。」

「……………そういう物なのかしら？」

と女子陣も別な話題が流れていた。

この空気を見かねたりヨウは少し面白い事（本人から見ても）を考え付いた。

そしてタイミングを見計らう様にして魔理沙に見える様に指で、おい、と示した。

当然、アダム達には見えない様にしており、気付いた魔理沙はこれも周囲に気付かれない様に、何だ？とジェスチャーを送った。

リヨウは右手を伸ばし、コップに手を置いた。

よく見れば人差指と中指が不規則に触れたり離されたりしているが、それに気付いた者は魔理沙のみ。

魔理沙が同じく指の点滅で返し、2人は何事も無いかの様にやり取りを終えた。

「悪い、ちょっとトイレ行って来る。」

他が会話を楽しんでいる中、リヨウが席から立ち上がり姿を消した。

それでも他の5人の雰囲気は変わらず。

「あつ、そういや小鈴に本借りてたの返して無かったな。なあちよつと行って来ていいか？」

「へえ、借り物返さないあんたにしては珍しいじゃない。」
「知るか。」

魔理沙は霊夢にからかわれたが冷たく返し、席を離れて何処かへと行った。

「2人共どうしたんでしようね？」

「さあ？」

「何か急に詰まらなくなったわね。」

「……………」

そのまま5分経過した。

「リヨウさん遅いんじゃないですか？」

「まあ気長に待とうよ。別に時間は空いているし。」

早苗がさすがに遅いと思ったがカイルは気にしていないらしい。

「魔理沙ったら何か怪しいわね。普段じゃ人の物は返さない主義だし、返すにしてもどうして今なのか後でも良いじゃない。」

「……………」

ズズズズズッ！

霊夢が疑問を投げ掛ける一方、アダムは2杯目（自腹）の蕎麦を味わっていた。

「ちよつと、話聞いている？」

苛立ち気味の霊夢に対し、アダムは行儀良く麺を飲み込んでから口を開いた。

「……………」 2人共何故か声に緊張が現れている様だった。」

「つまり魔理沙達は嘘を付いているって事？」

「そうだとしても、何故そうするのは全く分からないが。」

アダムの仮説は前進せず、この話題は打ち切りとなった。

「……………」 そういえばカイルさんって趣味とか何をされているんですか？……………」 その、イメージし辛いというか……………」

そう言った早苗は何処か決断した様な感じだった。

対するカイルはそれを気にする事も無く、マイペースに考えた。

「そうだな…………… 映画かな。S f サスペンス系が好きだな。」

「へえ、良いですね。私はあんまり見ないですけど。お勧めとかありますか?」

「AKIRAやマトリックスの神話的設定とか好きかな。一番はドニーダーコだな。知名度は低いけど。」

「聞いた事も無いですけど、どんな話なんですか?」

何故か早苗からは興味よりも願望や義務的な物が感じられたが、カイルは気にも留めなかった。

「公開されたのが120年程前の同時多発テロの頃だったからね。分かれば面白いが理解するには難しい。説明するにも難しいから実際に見せたいんだけど…………… 香霖堂にあると良いな。そうそう、趣味は他にも……………」

という感じにカイルと早苗は互いの会話に没頭した。

一方、霊夢はそんな楽しそうなトランセンデンド・マンと風祝のペアを見ながら、

「…………… ねえアダム。」

「…………… 何だ?」

霊夢が恐る恐るといった様子に対し、アダムは見る者によっては僅かに怖く感じる無表情さを保っていた。

少し間があつたのは蕎麦を食べている最中だからだろう。

「…………… 何でも無いわ……………」

「そうか……………」

霊夢は後悔を残し、アダムは何も気にする事無く再び口に蕎麦を運ぶ。

その様子を50m以上の距離から見ている者達が居る事は果たしてこの4人の中の誰かが気付いたのだろうか。

「ありやどつちも駄目だな。」

「アダムと霊夢の方は分かるが、カイル達の方は何でだ?」

蕎麦屋の正面方角に当たる民家の屋根に彼らは居た。

リヨウと魔理沙は双眼鏡片手に蕎麦屋内部に居るトランセンデンド・マン2人と巫女2人を観察、というか覗き見しているのだった。

魔理沙の質問に対し、リヨウは間を置く事も無く答えた。

「カイルはイケメンの癖に鈍感なんだよ。果たして気付かない限りは駄目だろうな。」

「それにしても」2人「共気付かないよなあ。」

「カイルは自分から能力を使おうとしない限りは大丈夫だし、アダムは多分敵意とか殺気とかにしか反応しないのかもな。」

「てかこんな事してる私達って変態じゃね？」

「知らん、人間は皆変態だ。」

この2人は会話と観察に意識を使っていたので、背後から突然声が掛けられる事は予想外だった。

「あのー2人共、何をやってるんだが……」

2人は、ビクツ、と動揺を見せた。

「俺の後ろに立つな！」

リヨウが体を反転させつつスピードの乗った拳を繰り出す。

しかし、拳は当たる直前で止まった。

いや、止めた、と言う方が正しいだろう。

元々冗談で軽く殴るだけのつもりだったが、声の主の姿を見るなり中止した。

リヨウの常連客であり半人半妖の寺子屋の教師が腕を組みながら立っていた。

「……今日は良い天気だな。」

「だな。」

「……」

背後に目を動かすと魔理沙の姿が消えていた。

「恨むぞてめえ……全く、失礼な奴だ。俺を覗きに誘って罪を全て俺に押し付けやがって……」

慧音の厳しそうな態度は変わらず。

その後、先に魔理沙が席に戻り、暫くしてリヨウがやつれた顔をしながら戻って来た。

尚、アダムはリヨウが戻ってくる前に蕎麦を5杯も平らげ自分で払うと言いながらも、リヨウが何を思ったのか全ての分を支払った。

82 地獄から来た男

「よっしや始めるか。」

「ああ。」

リヨウの呼び掛けに最短で応答したアダム。

2人が居るのは博麗神社の石畳の上で距離は10mも離れている。

「2人共頑張れよー！」

神社の縁側で霊夢と魔理沙と慧音が座って観戦している。

応援の声は魔理沙から発せられた物だ。

「来いよアダム、武器なんか捨てて掛かって来い。」

試合は突然始まった。

両手を素早くロングコートの中に突っ込み、抜き出した時は両手に拳銃を握っている。

不意を突かれたリヨウも慌てて背中のマシンガンを両手に抱えた。

アダムは前進し、リヨウは後退し、結果的に距離を保ちながら銃弾を連射する。

アダムは1つの拳銃から秒間50発つまり計毎秒100発を、リヨウはマシンガンから1秒に100発というペースで、2人合わせて1秒で200発の銃弾を発射する事になる。

トランセンデンド・マンの平均的な全力疾走は秒速340m、この場で発射される銃弾は秒速1700m。

つまり時速36kmで走るトップアスリートが時速180kmで向かって来る矢を避ける様な物だ。

だがトランセンデンド・マンには、今のこの2人にもそれを避けられるだけの動体視力が備わっている。

普通の人間の動体視力の限界は時速300km、トランセンデンド・マン基準に直せば秒速2033m、身体の動きや反応次第では音速の5倍程度ならば避けられる。

要するにトランセンデンド・マンの平均を超えるアダムとリヨウは共に放った銃弾を身のこなしでしっかりと避けている訳だ。

状況が変わらないのを懸念したアダムが走行速度を急激に上げた。

対するリヨウも、勝負だ、と言わんばかりに走る方向を180度変更し、銃弾を吐き出しながら突っ込む。

互いの走る速さはマッハ1、方向は正面衝突コース、銃弾はマッハ5、ならば互いから見る相手から発射される銃弾はマッハ7。

動体視力で軌道が読みにくくなる分は銃口の位置を把握し予測して避ける。

互いの距離が残り3mを切った所でアダムが両手をコートの中に入れる。

リヨウも銃を背中に掛け、何も持たずに金属の鎧手袋の様な物をはめている手を突き出した。

ガギギギギ!

アダムの2本のナイフとリヨウの手の甲部分から飛び出た爪がぶつかり合い、競り合う。

リヨウが押し勝ち、後退したアダムへ連撃を繰り出す。

それでもアダムは冷静に全ての斬撃をナイフで受け止め、反撃に入る。

連続撃は次第に手数でアダムが勝りリヨウが次第に防御せざるを得なくなる。

「アダムが押ししてるわね。」

「流石だな!」

「リヨウも強いが、それを押ししてるアダムも凄いな。」

順に霊夢、魔理沙、慧音の台詞だ。

(俺の応援は無いのかよ。)

胸の内で悲観に暮れつつ何か良い作戦は無いか考える。

するとリヨウは手の甲から生えた爪を戻し、右掌をアダムへ向けた。

手首から何か小さい物が飛び出るのを視界に捉えたアダムは両腕を胸の前で交差させる。

物体はアダムの左のナイフに“張り付いた”。

リヨウが右腕を引っ張ると、ナイフごとアダムの右腕も引っ張られた。

アダムの手からナイフが離れる。
だがナイフは宙に“止まった”。

見ると、アダムのコート内からロープが伸びておりナイフに繋がっている。

更にリヨウの手首からナイフにかけて細い糸が伸びている。

アダムがもう片方の手で拳銃を握り、糸の接触点に向けて引き金を引いた。

銃弾が粘着点にヒットし、糸が剥がれた。

ナイフを戻して持ち直し、相手は糸を巻き戻した。

「今の凄いな、何だったんだ？」

「地獄からの使者、スパイダー………ちよ、おまつ………」

魔理沙の感嘆にリヨウが何かしらのポーズを取ったが、アダムは躊躇う事無く突撃して来たので言い終える事は出来なかった。

今度は右手にやたら打撃部分が大きいハンマーを左手に真ん中に白い星のある円形の盾を持ったリヨウが迎え撃つ。

アダムの素早い攻撃だが、リーチが無い分大きい盾はその範囲によって攻撃を受け付けない。

一方リヨウのハンマーは重いが、その分一撃一撃が強いので相手がガードしても体勢を崩す事が可能だ。

おまけに盾による直接の突撃もあり、まさに攻防一体だ。

「ビブラニウムはそんなチンケなオモチャじゃ傷一つ付かないぜ。アダマンチウムでも用意するんだな。」

リヨウが煽り口調で言いながらハンマーを振り下ろす。

アダムがナイフ2本を交差させ振り下ろしを受け止めた。

だがアダムは両手が震え焼ける様な痛みを感じ、無意識にのけ反った。

その隙を逃さない様にリヨウがハンマーの頭をアダムに向けた。

稲妻が走り、アダムが反射的に両腕を胸の前で交差した

ドジャーーン！

「きゃっー」

自然現象の雷よりも弱いとはいえ強力な稲光と雷鳴が周囲を覆い、

観戦している霊夢達は思わず目を瞑り耳を手で塞いだ。

エネルギー量は落雷の100分の1にも満たないが、対人、どころか対トランセンデンド・マンには十分な威力だ。

雷に撃たれ吹き飛ばされたアダムは宙を舞い後ろに1回転して着地した。

体が少々震えているのは電撃による痙攣と思われるが、それ程攻撃を喰らっている様子は感じられなかった。

「今を受けて平気なのか?！」

慧音が驚嘆した。

「お前、今の直撃じゃないな?何かで防御しただろ。」

リヨウの質問に対し、アダムは無言でコートから腕だけを脱いだ。腕にはロープが何時の間にか巻き付いており、隙間無く覆っている。

「カンフー映画にそんな奴が居たな。あれは鉄の輪だったけど。」

アダムは袖を戻し、リヨウはハンマーと盾をしまい代わりに長剣を持った。

鏢は無いがその太い刀身や柄は誰が見ても日本刀と思うだろう。

だが、「斬る」事を重視した日本刀には反りがあるが、この刀には反りが一切無い、つまり「刺す」事を求められているのか。

アダムが短い2本で目にも止まらぬ連撃を放ち、リヨウが1本で正確にそして強力に攻撃を撃ち出す。

リヨウの振り下ろしを左で受け止め、右で腹に向けて突き出す。

受け止められたアダムのナイフを払い除けながら突きを逸らし、更に動きを加え袈裟斬りを繰り返した。

体を逸らし避けながらナイフを逆手に持った左手をフックを打つ様に伸ばした。

リヨウは右手に腰から引き抜いた三日月形の刃を持って防ぎ、左手の刃で刺突を繰り返した。

刺突を上を逸らしたアダムはリヨウが右手に持った刃を投げるのが見えた。

刃はアダムの胸を狙って飛ばされるが呆気無く躲されたが、リヨウ

は更に刃を出し次々と投げ飛ばす。

どれも遅く簡単に避けられたが、アダムは気付いていた。

後方で活性化したエネルギーを感知したアダムは跳び上がり空中で体を回転させる。

アダムの読みは通じた。

後方のあらゆる方向から刃がそれぞれの軌道を描きアダムの身体を掠めた。

「やっぱりブレイドみたいには上手く行かん。」

その後刃はリヨウの手元に帰り、再び投げられた。

恐らくエネルギーを刃に蓄えておき、軌道を変更する時に消費するという仕組みなのだろう。

今度は後方だけでなく前後左右上下全ての方向から刃が飛んで来る。

アダムが躲す隙を突きリヨウが斬り掛かる。

状況を打破すべくアダムはナイフにロープを付け、投げ飛ばす。

回転するナイフが刃を捉え弾き落とす。

しかも長いリーチを得たアダムはリヨウを近寄せずロープの動きだけで牽制する。

攻めに転じたアダムはロープを思考通りに動かす事によって確実な攻撃を仕掛けると共に両手に握った拳銃で攻撃を加える。

「よし、アダム、そのままリヨウを懲らしめてやりなさい。」

「慧音、てめえ覚えていやがれ。」

憎まれ口を叩かれたリヨウは一言吐くと両手両足にエネルギーを送り込んだ。

掌、足の裏、4箇所から急激な圧力を感じ、それらを後ろへやると前方へ押されるのを感じる。

圧縮空気をジェット噴射しながら反作用で直進するリヨウはロープと銃弾を掻い潜り、拳を握り締め勢い良くストレートを放つ。

間一髪、アダムは体を右にスライドさせ、ストレートをギリギリで避けると共に顎へとアッパーを仕掛ける。

「と思っていたのか！」

次の瞬間、アダムの拳は勢い良く叩きつけられ、反発して吹き飛ばされた。

体勢を整えると手が赤くなっており、リヨウの額も同じく赤くなっていた。

「痛い、やっぱごり押しは効かん……俺の秘密を教えてやろうか？」

リヨウが頭を押さえ、楽しそうにしながら言った。

「……何時も笑ってる。ヒヤッハー！」

リヨウが素早く右掌を前に翳した。

バシューン！

凄まじい爆裂音と共に大量かつ高圧かつ高速の空気塊が放出された。

ほぼ至近距離で撃たれたアダムは後ろに大きく跳ね飛ばされ、リヨウも反動で体ごと勢い良く後方に吹き飛ばされた。

受け身を取って起き上がったアダムと、対照的に背中から間抜けに落ちてのろのろと立ち上がったリヨウ。

「やっぱ反動やべえ、空気舐めたもんじゃねえな。」

我ながら関心を込めた口調で呟いた。

「全く、その場の思い付きで行動するから……。」

慧音が叱る様に呆れ声で言ったが、リヨウはガン無視だ。すると突然、

「まーけたー！」

リヨウがそう叫んだのだ。

思わない出来事にアダムと観戦中の3人は拍子抜けした。

「こ、降参したの？」

「でも戦いを止めたって感じは無いつぼいが。」

「リヨウの事だからまた変な事でも企んでるんじゃないのか？」

霊夢の疑問に魔理沙が反論をし、慧音が半信半疑で2人に言った。

その気配にはアダムが最初に気付いた。

周囲のエネリオン情報を読み取る事でそれを察知し、次第に近づいて来る甲高い機械音が聞こえて来た。

その音に気付いた女3人がその方向を見る。

ギユイイイイン！

アダムが体勢を低くし、右方へ転がった。

転がりざまにアダムは猛スピードでさっきまで自分が立っていた所に突っ込むバイクを視認した。

機械音はつまり高速回転するモーターの音だった。

だがシートには誰も乗っておらず、代わりに重そうなバックパックがシートに取り付けてあった。

無人バイクは減速し、タイヤを滑らせながらリヨウの元へ止まった。

「本当は口笛でやりたかったんだが、認識するには音量足りなかったし。」

苦笑気味のリヨウはバックパックを背負いバイクに乗った。

リヨウがハンドルを握ると同時にアダムが両手に銃を持った。

アダムの銃から秒間100発、リヨウのバイクの両側面に取り付けられた銃から秒間200発。

アダムが身を捻って躲し、リヨウがそこへ容赦無く銃弾の嵐を叩きつける。

(あの連射速度は脅威だ。接近戦を仕掛けるべきか。)

そう判断したアダムは後ろにあった木を蹴り反動で突進する。

するとリヨウがバックパックから何かを取り出したのが見えた。

左手にはショットガン型の銃が、

引き金が引かれる前に銃口の位置から軌道を読み、身を捻る。

エネリオンの銃弾がアダムの足を掠めた。

怯まずナイフを持ち替え突進を続ける。

「俺の目を見ろ！」

何時もとは変わった威圧感のある声でリヨウが言った。

リヨウの右手には鎖が持たれており、その鎖が投げられた。

鎖の先に付いた分銅がアダムの掲げたナイフにぶつかった。

しかし、鎖がナイフに巻き付き、そのままはぎ取られた。

それでもアダムは迷う事無く咄嗟に残りの武器を出した。

背中に隠した3本の棒切れを取り、3本共繋がり身長を超える1本

の槍に変わった。

しなりながら振り出される鎖を同じく長い槍をしならせ弾き飛ばす。

「凄いな、あんな槍を折り畳んで隠していたなんて。」

「それが違うんだよなー。」

「慧音の眩きに魔理沙が言い返し、慧音がどういう事だ？と首を傾げた。

「まあ見てれば分かるぜ。」

鎖が槍の真ん中に巻き付いた。

そこを逃がさずリヨウが距離を詰めショットガンを持つ左手を向ける。

次の瞬間、ショットガンがリヨウの手から離れた。

リヨウは想定外の出来事に対し冷静に状況を把握した。

「三節棍か。」

アダムが左2節を持ち、残り1節をぶら下げ回している。

「なら俺も。」

リヨウは弓を手に取り、柄を持ち構えた。

正面から打撃と打撃の競争。

だがリヨウが1本なのがやはり不利なのか、アダムが3本で手数を活かし有利に攻めている。

そして自在に変形できるのを利用し弓を絡め取った。

リヨウが何故かニヤリと笑った。

手応えが消え、弓に付いていた物体を確認した。

矢先に何かが付いている矢がアダムを狙って発射された。

間一髪で弓をずらし軌道を逸らす。

矢が石畳の上で止まり、ここまでは予想内だった。

予想外だったのはその矢が爆発を起こした事だった。

爆風を喰らったアダムは地面に伏し、それから細く鋭い物体が首に当てられているのを知った。

「…………… 負けたか。」

「いやー危なかった。俺だって負けるかもと思っただんだけ。」

アダムが起き上がり、リョウが剣をしまう。

「流石にあんな多彩な武器では相手が悪かったか。」

「こっちだってあれ程武器導入したってのに苦戦したんだ。まあ俺の運が良かったって事かな。」

「それにしても変な武器ばかりだったな。一つの事に特化し過ぎとも言うか。」

「アベンジャーズは俺の夢だからな。」

アダムや霊夢達には何の事だがさっぱりだが、リョウは嬉しそうな笑みを浮かべていた。

83 蛇と酔

「どうでした?」

目を開けた時一番最初に掛けられた言葉だった。

「ここ1週間で大分分かって来た。ある仮説が有力だと思える様になったよ。」

カイルが答える。

「どんな説なんですか?」

教えて欲しいときとりがせがむ。

「それじゃあ……月は知ってるかい?」

「ええ、地上から見えるという巨大な星なんでしたっけ。見た事は無いけど。」

「その月がどの様にして出来上がったのか。それにはあらゆる説があつてどれが正しいのかは分からないけど、その中で有力なジャイアントインパクトというのがある。」

いきなり聞いた聞き慣れぬ単語にさとりが首を傾げる。

「ジャイアントインパクトというのは簡単に言えば地球が出来上がり始めた頃に別の小さな星が衝突し、そうして散らばった塵が月になったという説なんだ。」

「で、それが何か関係しているんですか?」

「そうだ。予め言う必要があると思うからね。それから、話は変わるけど、マントルって分かるかい?」

「聞いた事はありません。確かここよりもずっと地下にある層だつて……。」

「ああ。そしてそのマントルというのは1年で数cmというゆっくりした速さで流動している。稀に更に地下にある核という部分のエネルギーによって急激に速くなる事もあつてそれが地震や火山の間接的な要因にもなっている。」

「へえ。なんだか話が噛み合わないんですけど……。」

「それで、これを見てもらいたい。」

カイルがそう言うときとりの脳内に立体図が浮かんだ。

自分が思い浮かべたのではなく、目の前の青年が情報を送っている、その事は以前にもあったので慌てたりはしなかった。

さとりはその情報を読み取るなり、ある事に気付いた。

地上から地下へ、更に深く、そこに広がっていた。

「調べた範囲は半径200km。外界の情報まで入っている。この真ん中の所が幻想郷の範囲だ。」

その真ん中の地下の範囲にあった。

厳密には全体に広がっているのだがその部分には大量に集中している。

「これがユニバーシウムでしたっけ？」

「そう。通常マンツルの動きがあるならユニバーシウムは地球が出来てから十分に拡散している筈だ。だがこれは……」

「ユニバーシウムは動いていないという事ですか？」

「僕が調べた所、ユニバーシウムにはマクロ的な動きさえ何も無かった。どうしてかは不明だけど間違い無く動いてないと言ってもいい。集まっている形状も見てくれ。」

ユニバーシウムは巨大な平たいクレーター状だった。

「クレーター？でも変な形ですね？」

さとりがそう疑問を抱いたのは、クレーターが円形ではなく横に広い楕円状だったからだ。

「ジャイアントインパクトでは衝突した星は地球を浅い角度で掠める様にしてぶつかったというシミュレーション結果が存在している。」

「じゃあそのジャイアントインパクトは正しいという事ですか？」

「だろうね。それにユニバーシウムが何故幻想郷に多く存在しているか、それも説明が付く。」

「それって今まで知られてなかったんですよね。なら凄い発見じゃないですか！」

さとりが他人事なのに自分事のように嬉しそうに言った。

「でも、後はユニバーシウムが何故マンツルの影響を受けないのか、それさえ分かれば完璧なんだけど……今の所はユニバーシウムが衝突時のショックによって何かが起こり、その所為で空間中のエネルギー

を吸収し、それが移動を妨げていると考えている。」

「判明すると良いですね。」

「それだけじゃないよ。ユニバーシウムが何故衝突した星に多く含まれていたのか。そもそも、ユニバーシウムがどうやって作られるか、それさえ分かかっていない。外界の技術では大量のエネルギーによってあらゆる物質を生み出す事が可能だけど、ユニバーシウムに関してはまだ出来ていない。」

「気が遠くなりそう……。」

「別に聞かなくても良いよ。専門家の域だからね。」

カイルが苦笑しながら言ったが、

「えっ?!そんな事無いですよ。カイルさんの話は聞いていて面白いですし。」

さとりは逆に本気気味に慌てて返事した。

「そうかな?」

「そうですよ。」

カイルが分からん、と首を傾げた所で、さとりは話題を変えた。

「そうだ、この前燐が珍しくコーヒーを買って来てくれたんですよ。」

あ、後ケーキも焼いたんです。食べませんか?」

「良いね、ありがたく貰おうか。」

さとりがそう言いつつ何処からかカップと皿を持ち出した。

まずはカップの中の黒い液体を一口飲む。

「……モカか。この薄い味はミディアムかな、苦みが少なめだね。」

「カイルさんはコーヒーも詳しいんですね。」

「好きな物だね。このケーキはコーヒーの酸味に対して苦味が強めになっていて丁度良い。」

ケーキをフォークで口に運び、頬張りながら賞賛した。

(やった、喜んで貰えて良かった。燐に頼んで買って来てもらった甲斐があったわね。思考を読んだのは失礼だったかも知れないけど。)

さとりが内心でガッツポーズをしたが、カイルがそれに気付く事は無かった。

「そういえばカイルさんは科学者って聞きましたけど、休みとか何を

「されてるんですか？」

「色々だね。SFサスペンス系の映画を観たり小説を読んだり、ジャズを聴いたりピアノ演奏したり、北欧料理や地中海料理を作ったり食べ歩いたり、基本的にのんびりしてる。体は余り動かしたいとは思わないものでね、お蔭で皆からはよく老人みたいと言われる。」

カイルが苦笑いしながら答え、さとりも釣られて笑う。

「意外ですね。もっと研究熱心なイメージがあっただんですけど、マイペースなんです。」

「二つの事だけに集中したってアンバランスだ。全体的に薄くても知識があれば役に立つ機会は多い。それに少しでも予備知識があれば深く学ぶ事も難しくはない。」

落ち着いて真面目気味に言うカイルは見た目よりも年齢が上に見えるが、

「それにしてもこのケーキ、ナッツが効いているね。こちらも何かご馳走したいな。」

コーヒーとケーキを美味そうに飲食する姿を見る限り年齢相応、あるいはそれ以下、の少年なんだな、と思えてくる。

「礼なんて要らないですよ。むしろこちらからのお礼です。」

「ケーキ作るの私も手伝ったんだよ。」

不意にカイルの目の前に出現した少女が付け加えて言う。

「こいしったら、何処行ったかと思っただら急に現れて、失礼よ。」

「えへへ、ごめん。」

10代前半の体格をしたさとりが妹のこいしを優しくながらも躡ける様子は大人びて見える。

その様子を見てカイルは昔の楽しかった日の事を思い出していた。

「カイルお兄ちゃんどうしたの？」

「ん？」

こいしが自分達を微笑ましく見るカイルに気付いたのか問う。

「昔の事を思い出してね。」

「どんな？」

無邪気な笑顔でこいしが問いを加える。

「僕には弟が居るんだ。12歳でやんちゃな奴だよ。外の世界に居る。」

「へえ〜。」

「カイルさんにも弟が居たんですね。」

さとりも興味を持ったのか話題に加わる。

「別に言う事は聞かないし、自分がのんびりしたい時に限って構って来るし、ろくな事は無いよ。」

「ふふっ。私も、こいしは何時も自分勝手に言う事聞かないから。」

さとりが笑いながら自分の事も言うとかイルも同情の気持ちを浮かべ笑った。

突然、

ゴウン!

3人は地面が弱いながらも揺れたのを感じた。

「きゃっ。」

「わっ。」

姉妹は女の子らしく少々オーバーに驚きはしたが、青年の方は反応しても動じる事は無い。

「凄い揺れ……………」

「リヨウの奴、ストレス溜まってるんだな……………」

姉と兄がそれぞれ思った事を呟いた。

「あたたたたた!!!!!!」

「でやああああ!!!!!!」

ぶつかり合うのは青年の拳と少女の拳。

それも1撃1撃が岩を簡単に砕くエネルギーを持ち、しかも1秒で100発以上という速さ。

青年が長いリーチを活かし長い右フックを放つ。

少女が姿勢を低くし避けると同時に、小柄さを活かし急接近するとボディブローを繰り出す。

左腕でパンチを防ぎ、青年はまた右腕で、今度は下方方向に肘打ちを仕掛ける。

肘を空いた手で受け止め、青年に向かって膝蹴りを放つ。

少女の膝蹴りを足で蹴り止め、反動で少し戻った所で再び伸ばす。

青年の蹴りをしやがんで躲す。

「ぬはははははは！」

青年は笑い声を上げながら蹴りを出した足を連続して畳んでは伸ばし、連脚撃を繰り出す。

上下左右から動く足は遂に少女のガードをすり抜け、肩に決め地面に倒した。

「い、いててて……やるね、リョウ。」

「だろ？俺は昔からカンフー映画ばかり見ていたからな。萃香、お前もやるじゃん。」

「まあね。酒を何時でも飲んでいるからさ。」

「道理で、動きが酔拳っぽい訳か。なら俺は蛇拳で行くぜ。」

伊吹萃香は、両手を肩の高さに、左足を曲げて膝を胸まで上げ、両手は親指と人差し指を意識する様に握る。

柏リョウは、右足を前に左足を後ろに、右手を顔の高さに上げ左手を右腕の肘に添え、両手の指を蛇の頭のように尖らせる。

そして、それを楽しそうに見守るのは星熊勇儀。

萃香が右手を前に振り出し、連動して腕に付いた鎖付き分銅が鞭の様にしなりながら振り出される。

咄嗟にリョウが掲げた左腕に巻き付く。

萃香が右腕を引き、リョウも対抗して左手を引く。

リョウが体を回転させ、萃香も合わせて体を回転させる。

その隙を突くべくリヨウが鎖を手繰り寄せ一気に接近する。それに対抗して萃香が残り2つの鎖付き分銅を投げ飛ばした。もう見切ったとでも言う様に分銅を2つ蹴り返し、更に距離を詰める。

近づいて来たリヨウへ飛び掛かる様に連続蹴りを放つ萃香。

リヨウは蹴りを躲し、最後に自分に絡んだ鎖を相手の足に絡ませ、そこへ横蹴りを放つ。

蹴りを腕で受け止めた萃香だが後方へ吹き飛ばされ、鎖によって戻される。

そこにはリヨウの手から繰り出される連続突きが待っていた。

リヨウの攻撃を右、左、右、左、と交互に逸らし、反撃に裏拳を突き出す。

不意にリヨウの体が沈んだ、様に見えた。

戦闘を俯瞰的に見ていた勇儀はそれがリヨウが足を曲げて胡坐をかいて座ったという事を理解した。

萃香の腹に指がめり込み、手刀で足を刈られ、バランスを崩した所に座りながらの前蹴りが腰に決まる。

よろけた萃香はリヨウがそれから下段回し蹴りを仕掛けているのを確認し、跳んで避けた。

ジャンプした萃香は落下の勢いを合わせ降下蹴りを繰り出す。

今度はリヨウが跳び上がり、萃香が着地したと同時に飛び後ろ蹴りを決めた。

吹っ飛ばされた萃香は地面を転がり衝撃を吸収し、相手の出方に備えるべく直ぐに起き上がった。

相手は真正面から自分に向かってナックルを放っている最中だった。

受け止めようと腕を翳す。

しかし、相手の拳は途中で平手になり、胸の前に構えた腕を抑えられた。

攻撃の隙を与えず、リヨウはもう片手で手刀を頭へと突き出す。

萃香がもう片腕でそれを外側へ逸らす。

気付けばリヨウは尖らせた指をとにかく速く連続で打ち付けている。

一方で萃香はそれを防ぐべく腕を素早く左右に揺らす。単純な攻撃と単純な防御のぶつかり合いが暫く続いた。

萃香は何時の間にか腕を動かしているというのに攻撃を受け止めたという感触が無くなっているのに気付いた。

何せリヨウは途中から萃香の目の前で両手を交互に揺らしているだけだったからだ。

気付いた萃香はリヨウへ攻撃をすべく拳を握った。

だが既に遅く、リヨウの連続突きが萃香を襲った。

攻撃を受け後退した萃香へ更に攻撃をするべく接近する。

それを見た萃香がカウンターにストレートを放った。

しかし、それを予測していたかのように、

リヨウは後ろを向いた。

それと同時に体を後方へ逸らし、ストレートを躲した。

その体勢から長い腕で裏拳を数発当てる。

体を正面に向けさせ、右の親指と人差し指で相手の喉を握りつぶさない様に手加減して掴む。

「……参った。」

萃香の口から降参の言葉が出された。

「流石だな、私に勝っただけの事はあるぞ。」

観戦者の勇儀が感心した様にリヨウを讃える。

「俺も、これ程強い奴が居るとは驚きだな。」

「何なら飲もうや、戦いの後の酒は最高だぞ。」

そう言いながら勇儀が手に持つ一升盃に入った透明な液体をがぶ飲みした。

「ほら、飲みな。」

盃を受け取ったりリヨウは残り半分ほど残っていた液体を全部飲み干した。

「……ウマスが全然違う……材料は何だ？」

「知らない方が良いで。」

リヨウと勇儀が顔を合わせて笑った。

「ところでリヨウ。」

萃香が何か腑に落ちない表情をしながら自分のヒョウタンを逆さにして飲みながら言った。

「何じやい。」

「お前の戦い方さ、何か以前どこかで戦った事がある様な気がするんだよなあ。」

（ぬ、気付いたか？……）「そうか？俺はお前と戦うのは初めてだったぞ。」

「うくん…… やっぱし気のせいかな。」

「そうかい。」（やっぱ大丈夫か。以前対面したとはいえ顔は隠したし声質も変えていたし。）

萃香は疑問を抱えたままの一方でリヨウはホツとしていた。

84 W o k e U p

「うわああああん!!!」

少女は大声で泣いていた。

何せ目の前で抵抗した父親が殺され、自分を庇おうとした母親も殺されたのだから。

突然家族を失い、少女の心の中はショックに満たされている。

目の前には胸に「EMO」の文字を付けた軍服を着た兵士が居る。

「手を上げろ!」

少女は言われる通りに両手を上げた。

少女は目に涙を浮かべ、体を小刻みに震えさせていた。

「良いか、動くなよ!」

少女は情けないうめき声を上げ、兵士にされるがまま腕に手錠を掛けられた。

「…… どうしてこんな事をするの!……」

少女は弱々しくも必死に口応えした。

「知るか!」

だがそれ以上の大声で怒鳴られ、少女は何もする気を失った。

更に足にも錠を掛けられ、頭に袋まで被せる。

(私、殺されるのかな?……)

どう足掻いたってこの状態では何も出来まい。

それ以前にどうして両親を殺して自分だけど生かしたのか、それもまるで分からない。

バシユツ

突然、何か柔らかい物体が弾けた様な音がした。

それと同時に目の前に居る筈の兵士の気配がしない。

何が起こっているのか分からないまま暫くして、

「…… もう少し早ければなあ…… 大丈夫? 怪我は無い?」

前半は独り言の様だったが、後編は自分に掛けられた物なのか。

「…… は、はい。」

涙で震えながら答えた。

若々しい、というか少年の物と思われる声は少女の恐怖を少なからず和らげた。

足音も先程の兵士とは明らかに違って体格が小さいのだろうと分かる。

「待ってて、今外すから。」

少女の視界を塞いでいた袋が外された。

「心配無い、君を救う。」

その顔は……

「はっー！」

東風谷早苗は布団の上で唐突に目を覚ました。

暫く布団の上で考え込む。

(また嫌な夢を見ちゃった……)

以前、7年程前に自分が住んでいた地域が地球管理組織に制圧”されそう”になった時の事だ。

カイルから話を聞いた所によると、その地域が幻想郷に近く、外界からの転送が行い易くなる為、侵攻して来たと言う。

その時、早苗は両親を失った。

2人共管理軍の兵士の銃弾によって成す術も無くこの世を去った。

そして、何も出来なかった自分は捕えられ、連れ去られようとしていた。

しかし、誰かが助けてくれた。

その人物は誰なのかは分からない。

その後の記憶は無く、覚えているのは、自分は管理軍が撤退した後
に目を覚ました事。

神奈子から聞けば反乱軍によって助けられたという。

しかし、あの人の事は思い出せない。

さっきの様に夢に出て来るが、その顔が見えると思った所で目が覚
める。

(あの人に会いたい。お礼がしたい。)

夢を見終わって毎回思う。

助けられなかったらどんな人生になっていたんだろう。

恩人の顔や名前すら知らない、その事を思うと嫌悪感が生まれる。

それ以前に両親は自分の所為で死んだのだと考えるごとに……

不意に障子の奥から歌声が聞こえて来た。

「I've got a train to catch and
I can't be late.」

僕は自分を捕える列車を待っている、そして遅れる事は出来ない。

「I'm on my way to another state
of mine.」

僕は別の自身の途中に居る。

「I'm leaving this one behind.」

僕は後にそれを残している。

大人の落ち着きがありながら少年らしい高いトーンの声だ。

障子を開けると見慣れた人物が縁側に座っていた。

「カイルさん起きてたんですか?」

「ん? まあね。どうかしたのかい?」

座りなよとジェスチャーで勧められて早苗は隣に腰を下ろした。

「今の歌は何ですか?」

「Moving On」という1世紀以上前のレゲエの一種の曲だ
よ。これでも結構クラシック系やジャズ系が好きで良く口ずさむも
のさ。」

「へえ。」

2人の視界に満月が映り込む。

「……月つて不思議ですね。見てみると気分が和らぐというか。」

「実際は月の重力が大きく関係している。人間の体内時計が25時間周期なのは月の公転周期と一致している。満月ではあらゆる生物が活性化するという事が分かっている。海における干満潮は言うまでもないだろうね。地軸にも関係していて地球に季節があるのも月のお蔭だ。」

カイルからの小話を聞いて早苗の不安な心は幾分和らいだ。

気分が落ち着いた所で早苗は話そうと決心した。

「……カイルさん、思い出したいのに思い出せない事ってありますか?」

「あるよ。身の回りの事から昔の事まで、誰だつてあると思う。」

「でも、自分にとつてとても大切な事を思い出せないというのはおかしいんじゃないか?……」

「……僕には分からないな。」

それを聞いた早苗は顔色を更に不安に歪めた。

「でも、」

しかし、その次の言葉によって早苗の不安は取り除かれた。

「記憶というのはいわば引き出しの中の物体だ。思い出すには開ける必要がある。でも長い事使った引き出しは歪んだり擦り減つたりして開け辛くなる、それと同じだよ。思い出せないのは引き出しが開かないからさ。でも開け辛くても引っ掛かりが外れて突然開く事もあつるし、直せば開くだろう。きつかけさえあれば思い出せると僕は思うよ。」

「……カイルさんには何時も助けられてばかりで、すみません……」

「謝る事は無いよ。僕はただ最適な選択をするだけだ。」

「最適な、選択、ですか?」

「ここで言うのもなんだけど、僕は自分の所為で僕の父親を死なせてしまった。」

早苗はカイルに対し、驚きとある種の共感を覚えていた。

あの時両親が死んだのは自分が何も出来なかったから、そうと自分を責め続けていた。

「あの時もつと僕に力があれば、と思ったよ。そうすれば物事を一番良い方向に導けた筈だった……。」

普段カイルが浮かべている爽やかな笑みがこの時消えた。

それを見た早苗はこんな込んだ話にするんじゃないやなかった、と後悔し同時にどうにか彼を慰めようと考えていた。

「けど、その事は僕にとって必然だったのかもしれない。そうした過去があつて今の僕がある。「過去」は感情的に捉える物じゃない、知識とすべきだ。そのお蔭で僕はそれ以来の事について正しい判断が出来るようになった。」

早苗は無意識にカイルの話を集中して聞いていた。

「感情は「今」に存在する。その場で何を感じるかだ。思考は「未来」に存在する。最善の選択をする為だよ。僕にとって父の死は悲しむべき事だけど、そのお蔭で僕は未来を考えられる様になった。僕は未来の為に戦うよ。罪滅ぼしなんて考えなくて良い。まあ最終的な選択はその場の感情に左右されると思うけどね…… まあ要するに何が言いたいかというと、未来を見据えるんだ、という事だよ。」

話を聞き終わった早苗は暫くの間息をするのも忘れていた。

「僕は人生相談なんて出来やしない。僕が何を思っているのか、参考までに伝えただけさ。」

「……私、前向きに生きる事が出来る気がします。」

「生きれるさ。」

早苗が希望を見出した様に言い、カイルは何時もの微笑を浮かべて答えた。

悪いのはお前だ。

俺は奴を殴った。

奴も怒って俺を殴ろうとする。

だが俺が傷付く事は無い。

俺は「特別」だったが、この時の俺には知る術も無い。

殴る、殴る、殴る、殴る、殴る……

気付けば奴は血まみれで床に倒れていた。

周囲には他の奴らが俺と奴を見ている。

皆が俺を恐れている。

何だ。

俺は問いかける様に他の奴らへ振り向いた。

だが他の奴らは俺に関わる事を忌避する様に俺から遠のいていく。

何だ！

俺が間違っているとでも言うのか！

すると大人が一人、誰かに聞いてやって来たのだろう。

大人は俺に向かって叱る。

だが俺に何の非があるというのか。

俺は大人の腹に1発決めてやった。

それだけで俺よりも明らかに体の大きい大人は地面に伏した。

俺は周囲の奴らを見るなり、睨んで部屋から出て行った。

頭が痛い。

何か針で刺された様に痛む。

額に手をやるが、傷は無いらしい。

体が思う様に動かない。

手だけを動かそうとしても勝手に連動して肘や肩まで動く始末だ。

まるで手の動かし方を忘れた様な……

忘れた……：：：：そう言えば此処は何処なんだ？

俺の体は和式の布団の上に寝ていた。

体を遅くながらも起こし、辺りを見回す。

俺の体はガウンの様な白い病人衣らしき服を纏っている。

床には畳、後ろに襖戸、前に障子戸、見るからに和風だな。

だが、現代においてある筈の物が無かった。

天井に照明器具が無い。

生活水準が低い地域でも照明器具が無いという家は無い筈だ。

分からず、立とうと起き上がる。

足の方も歩き方を忘れた様な感覚がしたが、すぐに慣れ立てる様になつた。

障子戸を開けると、驚くべき光景が待っていた。

竹林だ。

他の民家が無い。

一体此処はどれ程の過疎地域なんだ？

俺は裸足のまま縁側を越え地面に立った。

俺はただ走る。

何が待っているのか。

俺は知りたいたい。

2. 75 破壊神録

85 搜索

鈴仙・優曇華院・イナバの朝は早い。

彼女は永遠亭の住人の中で一番早く起きる。

師匠の永琳は医者兼薬師の仕事によって毎日忙しいので疲れているし、主である輝夜と地上の妖怪のてゐは眠気に身を任せ全然起きようとしなない。

鈴仙は眠気に打ち勝ち布団から体を起こし、身支度を始める。

永遠亭メンバー全員分の朝食の用意も彼女がする。

そして、1週間以上前に永遠亭に運び込まれた患者、と言えるのかも疑わしい者を診なければならぬ。

運び込まれた時、鈴仙はそれが死体だと思った。

医学に詳しい永琳も、瞳孔散大、呼吸停止、心停止、どれも死の証拠であった為、死んでいるかと疑った。

だが、運び込んだ者達の内カイルという青年によれば脳波が微弱にあり脳組織が再生しているのが確認された為じき目を覚ますだろう、との事らしい。

医者としての知識もある薬剤師の師匠もメスで彼の体を突き刺さうとすると、という過激なやり方で、生存を確かめた

でも本当に彼は生きているのだろうか。

彼は身長195cm近くある大男で額に大穴が空いている。

鍛え上げられた身体と目を瞑ってもなお凄味を帯びた顔は鈴仙を怖がらせるのに十分だった。

年齢は多めに見積もっても20代前半の容貌だが、まるで多くの人間を殺して来た軍人や殺し屋の様な雰囲気を感じる。

もしあの重そうな目が今にも開いたら……

患者が居る“筈”の部屋の襖戸を開けた、途端、

「ええっ!」

鈴仙がそう驚き声を上げたのも当然の反応だ。

患者の姿が無かった。

布団は無造作にめくられ、外へ出る障子戸は全開だった。部屋から暁の太陽に映る竹林、その中には何の気配も無い。

「そんな、嘘でしょ?! 師匠! 大変です!」

鈴仙は大急ぎで永琳の寝室へ駆け込んだ。

「僕達で最後か。遅れてすまない。」

「遅くなったわね。」

アダムと霊夢が入って来、全員が揃っているのを確認した。

「俺も今来た所だぜ。まあ時間通りだから大丈夫だけだよ。」

「これで皆揃った様ね。話を始めるわね。」

リョウがアダムの謝罪を軽く流し、永琳が真面目に話し始める。

この永遠亭の一室に居るのはアダム、霊夢、魔理沙、リョウ、慧音、カイル、早苗、鈴仙、永琳。

「まず今来たアダム達は知らないだろうから簡単に説明するわ、聞いて。1週間ほど前に貴方達が診て欲しいと言った患者が、逃げたのよ。」

その場に居た9人中、4人が驚いた表情をした。

驚かなかった5人は、具体的には、カイルと早苗は先に来て少しだけ内容を聞き、永琳と鈴仙は当事者だし、そもそもアダムは感情や表情が常人より遥かに乏しいので内心で少しだが驚いていても表情に表れる事は無い。

永琳は驚きが落ち着くの見計らって続きを喋った。

「まずは探し出すのを手伝って欲しいのだけど、良いかしら？」

7人はそれぞれ首を縦に振ったり、分かった、と言うなりして同意を示した。

「それで、カイル、貴方から聞いた話よりも随分と完治が早かったのだけど、これについて何か思い当たる様な事は無いかしら？」

永琳に問われたカイルは腕を組んで考えた挙句、口を開いた。

「…… 僕はそれ程詳しく彼を“視た”訳では無いので何も言えませんが、彼の頭髪か何かは残ってませんか？今からでも彼の遺伝情報を知れば何か分かるかも知れません。」

「分かったわ。鈴仙、枕か布団に彼の頭髪が付いてないか調べて来て、あつたら持つて来て頂戴。」

「は、はい。」

突然名前を呼ばれた鈴仙はやや条件反射気味に返事し、退室した。

「カイル、分かるのか？」

「やってみなければね。生物には予め本能を司る遺伝子が存在している。僕達トランセンデンド・マンの能力もその一種の本能による物という可能性まであるんだ。遺伝子次第で生物の本能が決まる訳だからその本能によって生物の能力までも変化する。きっかけ自体は分からないだろうけど彼がどんな人物なのか大まかには分かる筈だ。」

「ほえ、流石天才。」

「天才は止めてくれよ。」

説明を聞いたリヨウの賞賛にカイルが嫌そうに苦笑いを浮かべて否定した。

「ありました。これで良いですか？」

「ありがとう、十分だよ。」

丁度鈴仙が部屋に戻って来、カイルに患者の頭髪を1本渡した。

「どれ程掛かる？」

「30分って所かな。それまでは集中してやる必要があるから、皆に搜索を任せたいけど良いかな？」

アダムは質問から返って来た答えを聞いて頷き、早速行動を取るつ

もららしい。

「2人組、出来るだけ気付かれぬ様に、見つけたら連絡して皆を呼んでから対処に入るんだ。行こう。」

アダムの意見に他の皆が了解の意を伝えた。

「で、何か心当たりがあるって事？」

「とつかほんの思い付きだ。これを使う。」

アダムが取り出したのは何時もコートの下に隠し持っている銃を片方だけ。

「僕達トランセンデンド・マンはエネルギーを感知する。それも直感的にも五感としてもだ。知覚処理に優れた者ならばこの拳銃から出せる程度のエネルギーでも数km離れていても感じ取れるだろう。視覚的には限りあるかも知れないが、聴覚的には相手が優れているならば数kmからのエネルギーも、聞こえる筈だ。」

「って事はこちらからおびき出すって訳？」

「そうだ。」

「それで、近づいて来たとして、こちらを襲ってきたらどうするの？」

「別に連続的にやる訳じゃない。断続的にすれば隠れる余裕もある。」

「言うのは良いけど、もしやって駄目だったらって事は無いでしょうね……………」

「患者」の恐ろしさを知ってるからこそ心配して言ったのだが、

「少なくとも向こうが数百m先に居れば僕でも視認出来る。視認した

「らこちらから接近すれば良いだけだ。」

アダムに「言うは易し、行方は難し」の文字は無いらしい。

心配する霊夢を余所にアダムは銃を上空へ向け、引き金を引いた。

「まずは片っ端から調べなければな。俺は奴の事あんまし分からんし。」

「全く、大ざっぱで無計画なのはお前らしいな。」

「じゃあお前は何か名案でもあるとでも言うのか？」

「そう言ってるんじゃない、行動する前に考えておくべきだ、と言ってるんだ。」

「これだから年配は、こういうのは何も分からない以上適当にやつてれば良いんだよ。」

「これだから若者は、何も考えてなくて目標なんか達成出来ないぞ。」

「何おう！」

「むむ?!」

睨み合うリョウと慧音は、本人達からすれば不本意だろうが、第三者から見れば明らかに「仲が良い」としか言えない。

しばらくこのまま2人は張り合うだけとなった。

「カイルさんが居ないとなると捜索とか不便ですね。」

「だな。あいつは1里も離れた所から狙撃するんだってさ。それだけじゃなくこの前の地底の異変も地底の僅かなエネルギーを感じ取って異変に気付いたとか。全く、どんな頭してるんだ？ 感覚は優れてるし、頭は良いし、優しいし、イケメンだし。」

早苗の不安気味な呟きに対し、魔理沙はこの場に居ないカイルに賞賛を送っていた。

「私達に出来る範囲でも良いですから少しでも多くやりましょうよ。」

「そうだな。ところで早苗、」

「はい？」

「お前とカイルってさ、何かさ、何時も一緒じゃないか？」

魔理沙が何気なさを“装った”風に言っていると、早苗の方は何故か顔を赤らめた。

「そ、そうですか？ でもカイルさんが仕事中の時は別々ですよ？」

魔理沙の意図が分からず疑問形で返した早苗。

「それって仕事中だけの事で他の時間は……」

それを聞き早苗は更に顔を赤くした。

「何でそんな事を聞くんですか?!」

「…… 何となく。ま、何でもいいや。」

魔理沙は無関心な見た目で内心では楽しんでいた。

(リヨウが言った通りカイルが鈍感な以上は無理っぽそうだな。)「それにしても探すつたって何処探せば良いのか分かんないぜ。」

「そうですね……。」

話題を変えた所、早苗の赤くなった顔は戻っていた。

「そういうや早苗、お前、自分から積極的になつたらどうだ？」

「へっ?」

「いや、聞かなくても良いぜ。まあ、がんばれ。」
「えっ、いや…………。」

魔理沙は、最初は聞いて訳が分からなかったが理解(?)したのか次第に慌て顔を赤らめる早苗を見て満足した。

「師匠は何か見当が付いたりしませんか?」

搜索から少し経って鈴仙は永琳に考えを求めた。

「そうね………… 彼は1週間の治療によって身体的な疲労を感じているとすれば、きっと彼は第一に食糧を求める筈よ。それも動物性タンパク質をね。」

「じゃあ、動物の食べられた死体があれば、って事ですか?うえ…………。」

鈴仙が気分悪そうにそう言うのは、死体を見て気分を悪くしたくないという思いだろう。

「そうよ。そんな顔をしたって駄目よ。医療知識があるなら死体位慣れなさい。」

「そうじゃなくって、齧られて血が付いた死体だったら流石に…………。」

「ハア………… まあ我慢なさい。悪いけど私にはこれしか言えないわ。」

「は、はい…………。」

元気なさげに鈴仙が返事をし、暫く会話は無かった。

患者を発見する十数分後までは。

最初に鈴仙が遠目にそれらしき姿を発見し、確認する為に気付かれぬ様近づく。

2人はその姿のある地点から100m後方にある木の後ろに身を潜めた。

トランセンデンド・マン程では無いが人間よりも高い能力を持つ2人は遠くでもその姿を確認出来た。

隣の木から判断しても高身長と思われる体格、それを包む病人着、何よりそれらを覆う直感的なオーラ。

まるで怒っている様だが、何故なのか。

すると、その奥にあった木の影から何かしらの動く物を確認した。

それも1つだけでなく、その数や10を超す。

四足歩行で体表が毛に覆われた獣。

全長3mの身体と時々二足歩行で歩く所を見るとただの動物では無くある程度知能を持った妖怪の一種だろうと推測出来る。

「大変、助けなきゃ。」

「待ちなさい。」

木の後ろから飛び出そうとする鈴仙を制止する永琳。

「まずは、様子を見ましよう。動くのはそれからよ。」

(何だコイツらは。)

彼の目の前に突然現れ、全方向を塞いだ10体の獣はこちらに向

かって吠えた。

「俺は逃げられないとでも言うのか?」

「グガアアアア!!!」

彼の呟きを肯定する様に正面の1頭が吠える。

見た目や2本足で立つ所は大型霊長類を思わせるが、こうして彼を囲み狩りをする様な動作を見れば肉食か。

真後ろの1頭が2本足で跳び上がり、爪を剥き出して襲い掛かろうとする。

彼は後ろも見ずに後方へ2歩動き、肘を後ろへ突き出した。

跳び掛かっている最中だった獣の腹に肘にぶつかり、それだけで獣はその場にぐったりと倒れた。

それをきっかけに他の9頭がそれぞれの方向から走って掛かる。

「止めろ。」

彼の命令を無視し、獣たちが牙をむき出し襲い掛かる。

彼が手を向ける。

獣達はその行為が理解出来ずそのまま向かって行くが、すぐに行動の理由を理解した。

正面の3頭の足が消えたのだ。

走れなくなつた獣達はその場に倒れる。

右3頭はその不思議な光景を気にせず手に力を込め襲い掛かる。

彼は獣達から繰り出されるラッシュをいとも容易く躲し、パンチを3発放った。

それだけで3頭は昏倒し、今度は左3頭が彼を囲い襲い掛かる。

右前方をフックでなぎ倒し、左前方を水平蹴りで吹き飛ばし、

残った後方は彼が右手を向け、途端に左胸に大穴が空いて地面に倒れ込んだ。

こうして10頭の妖怪は追い詰めたと思っていながら逆にその命を全て奪われた。

彼は辺りを見回し、10体の死体に目を付けた。

(……………哺乳類なら食えるよな。)

そう心の中で呟き、死体の1つを持ち抱えた。

爪で皮を剥ぎ、手を手刀の形にして肉をなぞると、なぞった所が切断され、食べるのに丁度良い大きさになった。
そして何の躊躇いも無く生のまま齧り付いた。

「……人が妖怪を食べてるなんて……。」

「ウドンゲ。」

「あつ、はい。」

鈴仙は彼が妖怪を殺し、それを食べるのを見てショツキングになり、永琳から声を掛けられて我を取り返した。

「で、どうするんですか？」

「皆にはさつき連絡したわ。後は皆が来るのを待つてそれからよ。」

だが、永琳の考えはことごとくぶち壊される事となった。

「師匠、あの人、こつちを見てませんか？もしかして……。」

気付かれたと思い慌てる鈴仙。

確かに彼はこちらを向いているのが永琳にも確認できた。

「待ちなさい、気まぐれかもしれないし、下手にこちらが動けばそれこそ気付かれるわ。」

逃げ出そうとする鈴仙を抑えようとする永琳だが、それとは別に彼はこちらへ確実に歩いていった。

「こつちに向かって来てるーやっぱり……。」

「だから落ち着きなさい！」

鈴仙が遂に声を上げ、永琳も釣られて大声を上げてしまった。

「で、でも……ってあれ？」

ふと前方を見ると、彼の姿は消えていた。

「やっぱり気の所為だったか……。」

鈴仙が安堵の一息をつく。

「でも変ね、見えない所へ移動するにしても一瞬過ぎないかしら。」

一方、永琳は疑問を抱えていた。

通常、空気中を移動する物体は空気抵抗により音速を超えるとソニックブームが発生する。

だがトランセンデンド・マンの自分を包む「防御殻」の作用には、自分に掛かるエネルギーをある程度遮断する、という効果がある。

それは移動中の空気抵抗にも当てはまる。

つまり、空位抵抗が軽減されればソニックブームも発生しないという事だ。

彼が一瞬にして鈴仙達の視界から音も立てずに消えたのもそれが理由であろう。

だとすれば、彼は何処へ向かったのか。

それはすぐ2人の知る所となった。

「おい。」

背後から低く冷たい声。

トーンからは若々しさが感じられず、しかも怒っている様な感じまでする。

「お前達、」

2人が後ろを振り向く。

1 m先に彼が居た。

「ヒエッ……。」

鈴仙の叫びは途中でかき消された。

何故なら、彼は鈴仙の襟首を掴み、引き寄せたからだ。

「……お前は何故俺を助けた！」

「何故って……。」

言う前に鈴仙は投げ落とされ、言い切る事が出来なかった。

彼は2人を睨むとその姿を消した。

86 驚け

リヨウのズボンのポケットから振動を感じた。

ポケットにある通信端末を取り、耳に当てる。

そこから聞いた音声により、リヨウは声を上げずにはいられなかった。

「何？逃げられた？」

『ええ、隠れていても完全に気付かれたわ。身体能力だけでなく感知能力も異常な程よ。これはもう皆で囲むしかないかしら。それと彼は北上して逃走し続けている。』

「了解、じゃあ俺達は左側から行くぜ。」

『分かったわ。他の皆には私から伝えておくわね。じゃあ。』

通信が切れ、端末をポケットにしまったリヨウは慧音からの、何があったのか、という視線に答える事にした。

「鈴仙ちゃん達が奴と接触して逃げられてしまったそうさ。それで、皆で囲もうって作戦だ。北へ逃げたんだってよ。俺達は左側へ行く事になっている。」

「分かった。それで囲むは良いんだが、それからの勝算はあるのか？」
「さあな。せめてもっと人数居たら良いんだが、今から呼ぶにしても遅くなるだろうな。」

「うーむ、リヨウ、お前もあの男の「力」を見ただろう。下手をすればこちらの命すら危うい。暴れ出したりでもすれば幻想郷自体が危ない。」

「分かっているよ。でも今の奴が俺達を攻撃する理由も無いんじゃないか？カイルが奴は操られていたとか言ってただろ。命令が無ければ危険な行動はしないだろうし、何より鈴仙ちゃん達が奴と接触して生きているって事なら敵意がある訳じゃなくただ警戒しているだけかもよ。」

慧音は感心してリヨウの話を聞いていた。

「成程…… お前にしてはちゃんとした考えじゃないか。」

「それどういう意味だよ。」

先程まで喧嘩していたのが嘘の様に、2人共笑い合った。

「そんじゃあ、行くとしますかね。」

「…… リヨウ、訊いておきたい事がある。」

慧音に呼ばれて歩こうとしていた足を止めた。

「ん？何だ？こんな時に愛の告白か？それ俺ら死ぬって事か？」

「違う！質問だ。全く、何時も冗談ばかりなんだから。」

「オーケーオーケー、それで何だ？」

慧音は少しの間躊躇う様な仕草を見せ、口を開いた。

「…… お前があのお男を受け入れたのは、それはお前が”自分”を抑えられない事と何か関係しているのか？」

リヨウはそれを聞いて少し呆れ気味の様子だったが、質問に答える事にした。

「…… まあな。俺と奴は”自分”を制御しなきゃならない部分とか似通っている。俺なら奴を助ける事が出来ると思う…… 勿論理由はそれだけじゃないが。味方に出来れば頼もしい戦力だし、カイルは奴について興味があるそうだ。アダムも俺と同じく奴に自分と同じ所を見つけたんだってさ…… まあ、何と言うか、俺の事は心配しなくて良い。」

「そうか、良かった……。」

慧音は本当に安心した様な表情を見せていた。

「にしても慧音、お節介焼きやがって。お前は人のどんな部分でも向き合う、俺からすればウザいぜ。だが、俺みたいな足を踏み外すクソツタレな奴にも関わってくれる、それはお前の長所だ。」

「ふふっ、お前も言う様になったじゃないか。お前は私の長所とやらにでも惚れたとでも言うのか。」

「俺が言った冗談を使い回しやがって。許可料取るぞ。」

2人は再び笑い合った。

右手を真っ直ぐ上空に向かって上げる。

その手に握る拳銃の引き金を引き、エネルギーの銃弾が1発発射された。

まず、アダムは銃弾状のエネルギーが秒速1700mで上空へ発射された事を感じに知った。

細い針状の銃弾が銃口から音速の5倍で飛び出す様に見えた。

甲高い発射音が“聞こえるのを感じ”、銃を持つ手にもエネルギーを発射した“反動を錯覚した”。

この場合、嗅覚と味覚について話す事は無いだろう。

“見えない筈”のマズルフラッシュと“聞こえない筈”の発射音が周囲に広がり、拡散する。

アダムは更に周囲数百mの範囲にわたってエネルギー情報を読み取る。

カイル程精巧で正確な感知は無理だが、大まかな、例えばトランセンデンド・マンのよるエネルギーの活性化程度なら分かる。

だが、

「…… 感じない。僕達は今北側へ偶々居る訳だが、まだこちらまでは迫って来ていないらしい。」

「そう。で、これからは？」

「もう一度やろう。」

霊夢に問われ、アダムは再び拳銃を上げた。

宇宙空間目掛けて銃弾が発射され、“発射光”と“発射音”が広がる。

心を静かにし、“感じ取る”アダム。

「…… 居た。銃弾に気付きこちらに興味に向いたのか近づいてい

る。」

「本当？じゃあ隠れなきや。」

2人は少し離れた所の木の後ろへ隠れた。

アダムは2丁拳銃を構え、霊夢もお祓い棒と呪符を用意する。

少し時間が経ち、森の奥から1つの人影を発見した。

その大柄な体躯と威圧感のある風貌は紛れも無かった。

足を止めた彼は何かを探す様に周囲を見回した。

(やはり銃弾に気付いたらしい。)

彼はゆつくりとした足取りで歩きながら何かを探す様に見回り始めた。

(不味いな、こちらに向かって来ている。)

アダムは彼から死角になる所を慎重に移動する。

一方の向こう側も偶然なのか勘付いているのか、アダムを追う様なルートを進んでいた。

逃げると同時にアダムは通信端末を操作していた。

音声通信では無くテキスト送信、指を素早くスライドし「現在目標を引き留めている」と書き、送信を完了した。

因みに位置情報に関しては幻想郷なのでGPSやLPSは使えないが、相対位置を利用して端末から別の端末に表示も可能だ。

だが安心は出来ない。

アダムは気配を察知され無い為に僅かな物音にも注意する為遅く移動するが、相手はこちらの存在を探す為にキビキビと動いている。

(あの調子じゃあ追いつかれちゃう……。)

懸念した霊夢は偶々近くに落ちていた石ころを拾い、アダムとは反対側へ投げた。

コッソ

石が何らかの物体(霊夢視点では見えない)に当たった音が聞こえ、彼は振り向いた。

彼はさつきよりも速く、音源へと近づいた。

霊夢は今の内に、と隠れる場所を変えた。

「……………」

木々の影から男が何かを呟くのが見えたが、聞き取れない。
何時の間にか男の姿が消えていた。

(見失った?)

ガサツ

後ろから落ち葉を踏む音が聞こえ、次の瞬間霊夢は背筋をゾクツとさせた。

振り向くと、

男が霊夢の襟首にかけて腕を伸ばす。

その男の表情からは怒りと同時に疑問らしき物を感じた。

掴まれる、と思い目を瞑る。

だがその瞬間は訪れなかった。

目を開けると、アダムが男の伸びる途中の腕を受け止めていた。

「止めろ！」

アダムが珍しく声を上げた。

目付きも普段より幾分強みを感じた。

だが、次の男の行動は予想だにしない物だった。

男は諦める様に腕を引っ込め、1歩後ろに下がった。

男はアダムと霊夢に向かって何か意味ありげな視線を送った。

「……俺みたいになるな。大事にしろ。」

男は怒りと悲しみと懐かしみと命令をミックスさせた様な口調で言い残し、この場を去った。

2人は暫く呆然とし、その間は追いつける気にもならなかった。

最初に我に戻ったアダムは失敗の報告をした。

カイルは冥想から急に驚く様に立ち上がった。

(……何という事だ。これならあんな通常よりも並外れた力を持つているのも頷ける。)

カイルは男の髪の毛一本からある重大な事を発見した。

(皆、彼の遺伝情報が分かったから重要な事を伝える。それと今から僕も捜索に加わるよ。それじゃあ……)

『結論から言うと、彼は地球人じゃない。』

カイルからの通信に早苗は思わず声を上げて驚いた。

「ええー?! 一体どういう事なんですか?!」

『僕にも分からない。でも明らかに地球上の生物には存在しないアミノ酸があったんだ。地球上の全ての生物のDNAがアデニン、チミン、シトシン、グアニン、この4つで構成されているんだけど、彼らはそれに2種類加えられたアミノ酸で構成されている部分があったんだ。それも現在発見されていない構成だ。それでもDNAの99.998%以上は普通の人間と同じと不思議なんだ。この2種類によって人格の一部は殆ど分からない。』

『対処出来ないのか?』

これはリヨウの思考だった。

『いや、少し話が逸れていたね。まあ大部分は同じだからある程度は

分かる。彼は自己防衛、敵処理、他の拒絶に関して強い本能を持つ。あの攻撃的な性格も説明が付くよ。』

『他に分かった事は？』

と、これはアダム。

『すまないけど、それ以上は分からなかった。やはり不明な点の遺伝情報を知らない限りは無理だろうね。少なくとも彼に敵意を示さなければ交渉は出来るかもしれない。』

「うーん……………」

『では僕も……………』

テレパシーが切れ、魔理沙が早苗に話し掛けた。

「さっさと済ませたい所だったが、そうも行かないみたいだな。」

「ですネ……………」

此処は何処なんだ。

俺は森林を抜け、この開けた場所へ来た。

平屋の民家が多いな。

文明も発達していない事が道端の様子を見るだけで分かった。

何せ道が舗装されていない時点でどれ程の未開拓地だろうか。

住人から必要な事を色々聞き出す事も出来るだろうか、

(問題は奴らも俺の事について知っているかどうか……………)

人が多い所は目立ってリスクが大きい、ので人気の無い郊外でそれとなく様子を見るか。

数分程歩き、辿り着いたのは墓地らしき所。

(……逆に人が居ないと……待ってみるか。)

俺は墓地の石畳の上で胡坐をかいた。

一人の唐傘妖怪が男を観察していた。

彼女の名は多々良小傘。

水色のショートボブに同色のワンピース、水色の右眼と赤い左眼、そしてその少女らしい体格よりも大きい茄子色の傘、しかも傘には大きい目玉と舌付きだ。

小傘は人間を驚かし、それを糧に生きる妖怪だ。

だが最近の里の人間と来れば、小傘の驚かしにすっかり慣れて人が驚くのを見て喜ぶ小傘にとっては当然不満足だ。

(でもこの人、里で見た事もないなあ……驚くかな?)

好奇心を持てば後は子供も同然、小傘は早速行動に移すつもりだ。

目標の男はずつと前を向いて座ったままこちらを向かないが、それでも後ろから見える大柄な体軀は怖さを感じる。

だがそれに物怖じないのは無邪気な小傘の利点か欠点か。

気付かれない様に後ろから近づき、

「……おどろけー!!!」

大声と共に男の視界内に飛び込んだ。

「おどろけー!!!」
「……………は?」

何だこいつは。

俺の目の前にいきなり現れたと思ったら、大声で俺に、驚け、だと?
?

「ふざけるなー!」

俺は何時の間にか怒っていた。

俺に驚いたのか向こうのガキが呆然とした表情をした。

だがすぐに拗ねる様な表情に変わったかと思うと、

「何でみんな驚かないのよー!」

驚く?何の事だが分からんが、実に下らない。

これだから子供というのは、自分勝手に理不尽で合理性が無さ過ぎる。

「何で驚かないの!何か言ってみよー!」

あ?

『おい、何か言えっつてんだ!』

幻聴だ。

そうは分かっているでも自分が止められない。

俺の目の前には少年が数人。

「もう詰まんない……………」

『こいつ詰まんねえや、殴ってやろうぜ。』

少年達は俺に殴り掛かろうとする。

死ね。

眩いた瞬間、幻覚は消えた。

同時に少女の横にあった誰かの墓石が消えた。

砕かれるのではなく、溶けるのではなく、爆発するのではなく、ただ静かに消えた。

墓石があつた場所には大量の塵が積もっていた。

「お前もあの墓石の様に消えたいか。」

少女は震えていた。

まあそうなるな。

俺の能力は「破壊する」事。

これを見て恐れ慄かない奴など居るまい。

「消えろ。俺の前に現れるな。」

俺は少女など気にせず前に歩いた。

後ろは見えないが、足音も何も聞こえないならば立ちすくんでいるんだろう。

俺は探している。

俺は求めている。

だが見つからない。

“2人目”に該当する奴はまだ居ない。

リョウと慧音は追跡していて里の郊外へ入った。

「奴の行った方向からしてこの辺通ったかも知れんな。」

「里の皆は大丈夫か？」

「別にそれらしき騒ぎは起きていないみたいだぜ。」
すると慧音はある人物を発見した。

その人物は墓地の真ん中で立ったまま涙をこぼしていた。

「……………うぐつ、うぐつ……………」

「小傘じゃないか。どうしたんだ？」

慧音が心配して少女に駆け寄った。

小傘は里の皆を驚かそうとする悪戯者であり里の子供達の人気者である、本来は明るい性格の筈だ。

だが、今の小傘は何か怯えきった様に、心の中は悲しみよりも恐怖が占めているみたいだった。

「小傘、これで拭きなさい。」

「う、うん……………ひぐつ……………」

小傘は慧音から渡されたハンカチで涙を拭った。

だがそれでも新しい滴が湧き、震えも収まらない。

「おい慧音、これを見てくれ。こいつを見てどう思う？」

リヨウが言った物は少し離れた所にあった。

等間隔で墓石が並んでいる中、その場所だけ墓石がすっぽりと消えており、代わりに砂らしき物体の山が出来ていた。

「これは……………あの男なのか？」

「だろうな。奴には「破壊」という能力があるからな。恐らくここにあった墓石を砂粒レベルにまで「破壊」したんだろう。」

「ふむ……………それで小傘、何があったのか教えてくれないか？」

こうして子供の小傘に尋ねる慧音はやはり寺子屋の教師だな、とリヨウが思い付く。

「……………ここに立ってた人を驚かそうとしたの……………でも……………でもそしたらその人があそこにあっただお墓を消したの……………消えろ、現れるな、つて言われた……………グズン……………」

泣きながら言った小傘はハンカチで鼻をかんだ。

「で小傘、そいつは何処に行ったか分かるか？俺達そいつを探してるんだ。」

「……………あつちに歩いてった……………」

リヨウの質問に小傘がその方向へ指を指した。

「分かった、小傘、今日はもう大人しくしていなさい。取り敢えず落ち着いて。」

「何なら後で俺の店に来るか？新メニューもあるんだ。」

「ちやっかり宣伝するな。そしてあのおかしな材料ばかりの新メニューとやらはもううんざりだ。」

「何だどつ？よし分かった、お前にはハギスを食わせてやろう。」

慧音の突っ込みにリヨウが刃向かう。

「あははっ。」

そのやり取りを見ていた小傘はそれが面白くてつい笑っていた。

87 過去

カイルは通信端末を取り出し、ある人物に通話を掛けた。送信から30秒経過して、相手が回線を開いた。

『カイル君？何の用？』

「ああ紫さん、貴方に頼みたい事があるんですけど、良いですか？」

『良いわよ、どうせ今暇だし。』

「こちらはそうも行きませんけどね。」

『ん？どういう事？』

「それは後でまとめて話します。まずは地底に行つて古明地さとおりという人物をこちらに連れて来させて下さい。話はそこで。」

『分かったわ、連れて来るわね。少し待ってて。』

紫のその声を最後に通信が切れた。

それから2分も掛からない内に、

カイルの前方の空間が引き裂かれた。

引き裂かれた暗黒空間から3人の人物が姿を現した。

まずは2分前まで通信相手だった八雲紫。

次にカイル自身が連れてきて欲しいと言つた古明地さとおり。

そして、

「お兄ちゃん。」

呼んでも頼んでも居ないのにスキマから現れ、カイルにいち早く駆け寄つた古明地こいし。

「ごめんなさい、私が行こうとするとこの子も行きたいと言つて、待つててと言つても聞かなくて仕方なく連れて来てしまつて……。」

さとおりが妹の代わりに謝罪をし、こいしはカイルに対し、遊ぼうよ、と動きで示している。

「それじゃあ、こいし、僕は今やるべき事があつてそれで君のお姉さんと呼んだんだ。だから出来るだけ邪魔しない事と僕の言う事は必ず聞いてくれ。分かつたかい？」

それに対し、こいしは本当に分かつたのか分かつていないのか、「分かつたー。」

とマイペースな返事だった。

「で、何の用で呼んだのか話してくれないかしら。」

紫が話を戻そうと言った。

「はい。それじゃあ、まずは……………」

カイルは、地球管理組織が送り込み、その中で唯一生き残った生存者が知らぬ間に怪我を治し逃げ、自分達は今その人物を探している事、を伝えた。

「私達にも捜査に加わって欲しい訳ね。それなら私の得意分野よ。藍、橙、出て来なさい。」

突然キツネとネコが紫の背後から現れたかと思うと、キツネは八雲藍に、ネコは橙に姿を変えた。

「話は聞いたわよね。」

「はい。」

主の質問に返事し、2体の式神はどこかへと行った。

「私も行って来るわね。何かあったら連絡するわ。」

「頼みます。」

カイルが返事をする時紫はスキマを開き、中の暗黒空間へと入っていき、スキマが閉じた。

「それで、私は何を？」

さとのりのサードアイによる読心は視線を定めればその方角にある人物の思考を読む事が可能で、相手の意志が強ければ強い程遠くても感知出来る。

その事はさとり自身も知っているが、カイルには知られた事も伝えた事も無い筈だと思っている。

だが回答は予想外だった。

「ああ、〃交渉〃の為だ。目的の人物の思考が分かれば相手が何を求めているのか分かる。相手の目的さえ分かればそれに応えれば良い訳だ。だから君を呼んだんだよ。」

さとりは成程、と思い、同時に別の事を伝えようかと考えた。

これまで「心を読む程度の能力」という力が他人にばれた時、それを知った者は皆自分を嫌い、蔑む視線や感情を向けるのだ。

だがこの目の前に居るカイル・ウイルソンという人物はそれを知つても嫌にも蔑みもせず、自分を受け入れてくれた。

それだけでさとりは嬉しかった。

だからこの人なら何でも受け入れてくれるかもしれない。

「私の「心を読む程度の能力」は相手が見えなくても強い意志があれば遠くでも「見える」んです。だから、その……もつと役に立ちたいって思つて……。」

カイルは感心した様な表情を一瞬見せ、少し間を置いて口が開かれた。

「どれ位の距離なら分かる？」

「うーん、あんまりやった事がないから良く分かりませんが……。」

「なら僕が周囲情報を読み取つてそれを送るから、視覚的情報だからそこから“見る”事は可能な筈だ。それでどうかな？」

「はい、良いですよ。」

さとりの返事は普段よりも元気そうだった。

「それじゃ早速……待って、こいしは何処へ？」

始めようとした所で、1人の姿が消えているのに気付いた。

「全く、何時も人を心配させるんだから……でも毎回平気に返つて来るんですよ。」

さとりは己の愚痴に近い呟きによつて苦笑した。

「僕も、外界の弟が良く言う事を聞かなくて困つてるんだ。」

カイルも同情の意を込めて喋り、2人共苦笑した。

「……………」

「どうしたの？立ち止まって、何か考え事？」

仁王立ちで腕を組むアダムは霊夢からの質問に答えなかった。

ただ黙って何かを考えている。

というのも、アダムは気になっていいる事が幾つかあるのだ。

(…………… 僕が霊夢をカバーした時、奴から敵意が消えた……………)

『俺みたいになるな。大事にしろ。』

あの男の言葉が蘇った。

(何故あの様な事を言ったのだろうか。意味が理解出来ない。)

そして、もう一つ、

(奴と対峙した時、僕は不安だった。)

これまで自身が死に肉迫した場面は何度もあったが、その時でさえアダムには殆どの感情を表に出さなかった。

だが今回だけは違う。

あの男の手が霊夢に向けて伸びる時、焦り、苛立ち、不安、ある種の恐怖すら感じた。

対面した時から僅かに震えているが、まだ残っている。

自分が死に近づいてもこの様な事は無かった。

以前「破壊神」と呼ばれるあの男と戦った事は2度もあったが、その時も圧倒的な力の前に怯む事は無かった。

だが、今は……………

「アダム、大丈夫？顔色が変わじゃない？」

不意に声を掛けられ、アダムは勢い良く振り向いた。

「ん？ああ、大丈夫だ。」

突然の事だがすぐに冷静さを取り戻し、何とも無かったかのように振る舞うアダム。

しかし、彼はある事に気付かなかった。

自分の体の震えが治まっていた事に。

誰かに見られている。

気の所為では無い、確かだ。

その距離は100mもあるまい。

だが方角が分からない。

「何処だ！」

俺は無意識に怒鳴り、右手を突き出した。

エネルギーと呼ばれる素粒子が俺の周囲の空間から俺自身へ吸収され、俺の脳を通り、俺の腕から発射されるのが“分かる”。

エネルギーに当たった分子構造物が原子に分解される。

結果、手を伸ばした延長50mにあった物体が消える。

エネルギーの流れ道に土や木を構成していた元素が塵となって積もり、風に飛ばされた。

「何処だ！何処だ！」

エネルギーを乱射し、半径50m以内は森林から荒地となった。

手応えは無い。

「……そこに居るんだろ。」

後方10m、地面から数m。

「良く気付いたわね。見破られた事なんて余程付き合いが長い知人でも無いわ。」

若い女性の声だがやけに落ち着いた声だ。

「誤魔化すな、姿を見せろ。何のつもりだ？」

「はいはい、今出て来るから。」

空中に黒い、何と言うべきか、時空を繋ぐワームホールを巨大化する
とこんな風になるのか？

何も存在しない空間に暗黒の窓の様に浮かんでいて、そこから俺に
声を掛けたと思われる女が黒い空間に腰かけている。

「私は八雲紫。私達は貴方に協力して貰いたいだけよ。」

「協力？ふざけるな。第一何に協力しろと言うのだ。」

「具体的には、貴方が居る此処、幻想郷を地球管理組織とやらから守つ
て欲しいのよ。」

「幻想郷…… 地球管理組織……」

前者は少し耳にした事がある様な…… だが後者は俺が憎むべき
対象……

「……」

「別に貴方を利用しようって事じゃないわ。取引に応じてくれれ
ば……」

「じゃあアイツらは何だ？」

紫の台詞を遮り後ろで明らかに敵意を見せている奴らを指差した。
キツネみみたいな奴とネコみみたいな奴が攻撃態勢を解いたのが見え
る。

「あの時と何も変わらん、二度と同じ手には食わんど。前だってそう
だった。良いか、何度でも言うてやるぞ。俺に関わるな！」

最後に怒鳴り、俺は立ち去ろうとした。

「やっと見つけたぜ。少し待って話だけでも聞いてくれや。」

不意にこの場に割り込んで来たのは俺より6、7年位年上と思われ
る男。

隣にはそれより少し若く見える女。

「待て待て、そう睨むなよ。何もしないってば。」

俺が睨んでもこの男は飄々とした態度を取っている。

気に入らん。

「俺達は平和を望んでいる。お前も同じだろ？ならお互い平和にする
べきだ。だろ？」

「お前達は何が出来る。」

「少なくともアンタが管理軍の奴らを憎んでいるのは分かっている。俺達共和軍や此処幻想郷の奴らも奴らとは対立関係、つまり協力して打ち勝ってやろうって事だ。そして、お前の頼みならある程度は聞いてやる。悪くないだろ？で、望みは何だ？」

馴れ馴れしく口を聞きやがって、舐めてるのか？

気付けば目の前には荒れ果てた土地の幻覚が見えていた。

『どうだ？私達の目的を共に達成しないか？世界はお前の望むがままだ。失った物すら取り戻せる。』私達”にはそれが実現できる力を持つている。』

目の前の男が俺に話し掛ける。

『本当か？何でも出来るのか?!』

訊かれたガキ1人が半信半疑で問い返した。

『勿論だ。もはや”私達”は地球上で最高等生物の人間を桁違いに上回っている。お前がこの世界最大の都市を一瞬で壊滅させた様にな。何ならその逆だって可能だ。』

『本当か?!ならーっただけ頼みがある。それを……』

冷静さの無いガキは疑わずに話に乗掛かった。

だがガキは最後まで言い切る事が出来なかった。

ガキは警戒心を解いてしまっていた。

背中に尖った物体が突き刺さる感覚がした。

1発、2発、それぞれでは無く、気付けば無数の針が背中に刺さっていた。

分かっている、これも幻覚だ。

「なら俺の目の前から消えろ！」

俺は何時の間にか拳を握りしめていた。

自身が前進しながら腰の位置にあった右手は前に伸びる。

ドスッ！

重たい打撃音と共に俺は手応えを感じた。

この男の両手に受け止められたが、威力を殺しきれず自分の手ごと腹にめり込んでいる。

「ぐっ！」

「リョウ、大丈夫か？」

目の男がふらつき、隣の女がそれを見て心配そうに声を掛けた。だが、この男は強い力で俺の拳をその場から放さない。

すると、俺の腕を掴むこの男の手から冷たい感覚が走った。

「俺もお前と同じだ。これは俺以外の他の奴に知らせた事は無い。よって今知っているのは俺とお前だけだ。」

冷たい感覚は確かな物となり、腕先の体温が奪われ冷たくなるのが分かる。

(冷却か?..... 何か何処かで聞いた事が.....)

無言で俺は腕を引き離した。

「..... 秘密なら何故俺に明かした？」

「俺はコイツの所為で色んな物を失った。お前も、自分で制御出来ないだろう。お前は昔の俺に似ている。だからお前を助けてやりたい。」

先程の軽薄そうな態度に対し、今はやけに真面目な顔つきだ。

「.....」

俺は無言で地面を蹴り、奴らの姿はあつという間に見えなくなつた。

『ごめん、逃げられたわ。』

紫から端末越しに声を聞き、カイルはやはりか、という表情をした。「分かりました。僕からでは場所を特定したので後は僕達に任せて下

さい。」

『すまんカイル、俺からもどうかしようと言を持って掛けたが、途中で逃げられた。』

今度は珍しくリヨウからの謝罪を聞いた。

「良いよ。敵対して攻撃して来る可能性まであったのに、意味のある会話を少し出来た程度でも十分と言えるよ。」

スピーカーからありがとよ、と聞こえ、今度は別の人物から通信が掛かって来た。

『カイル、目標の正確な位置を教えてください。僕が交渉する。』

アダムが自身があるのか無いのかも分からない様な感情が読み取れない声で言った。

「今送るよ。それと交渉には僕も加わりたい。」

『構わない。』

データを脳からテレパシー経由で端末に送り、アダムからの短い返事の直後、通信が切れた。

「急ごう。君のペースに合わせるよ。」

「あ、はい。」

一応飛行能力のあるさとりだが、それ程速くは無いのを考慮してカイルが言ったのだろう。

「……カイルさんは、何で皆にそんなに気遣ってくれるんですか？」

移動中にさり気なくさとりが訊いた。

「……昔、僕は自分のミスで父親を死なせてしまった事があったんだ。」

(しまった、込み入った話にしてしまったわ。どうしよう……。)

心を読めばカイルから後悔という負の感情を感じ取れた。

また、心を読めばその時の記憶までも読める。

見えるのは目の前に倒れる1人の大人、そしてそこからナイフを引き抜くもう1人の大人。

(この倒れている人がカイルさんのお父さんなのかしら。)

急に視界が揺さぶられた。

その中に見える確かな2本の細い腕とそれに握られる銃。そして白い閃光。

発光した僅かな時間で目の前には2つの死体が横たわっていた。

視界は今度は地面を向いた。

更に視界に水滴が地面に落ちる様まで追加された。

(こんなに泣いているなんて……………)

今のカイルは大丈夫か、とさとりが顔を見上げた。

だがカイルは悲しみを表情に出さず、何時ものにはかんだ笑みを浮かべた顔だった。

「僕はもう既に助けられた身だ。だから僕も父の様に今度は自分が他人を助ける必要がある、そう思っているよ。」

「……………ごめんなさい、そんな悲しい話にするつもりは無かったのに……………」

「気にしないで、そんなつもりじゃない事は分かっているよ。別に過去の事はどうだって良いさ。」

「……………カイルさんは偉いんですね。私なんか人に拒絶された過去ばかり気にしてしまっ……………」

逆にさとりが鬱に沈み、何時の間にか足が止まってしまっていた。

「……………私、今まで私が心を読める事が他人に知られた時、皆揃って私を嫌い、差別されて、誰も居ない地底の奥深くでひっそりと暮らす様になって……………」

カイルは話を逸らそうともせず真面目になって聞いていた。

「……………でもカイルさんは私の能力を知った時、拒絶しなかった。それどころか私の為になってくれて……………私、こんなに優しくされた事が無くて……………」

さとりは目から液体が湧き出ているのに気付いた。

カイルは何を話そうかと腕を組み考える様を見せた。

「……………差別なんて外の世界でだって幾らでもある。違いは髪の色や肌の色、出身地、血筋、遺伝子、何だって差別の理由になる。違いは生まれつきある、それは自然界の摂理と言えるだろうね。でも君に非は無いですよ。」

カイルはここでわざとか、無意識か、間を取った。

「人は皆、自分が崩れるのを恐れている。自分が自分じゃなくなるのは誰だって同じだ。それは対人関係でもね。違いがあればある程拒絶するのも当然だ。でも大事なのは受け入れる事。程度の差はあれど不可能では無い。意識の違いだ。捉え方次第で欠点は利点にも成り得る。さととり、君の能力だって別の人から見れば嫌かも知れないが、僕から見れば興味を引くし凄い能力だと思う。結局は物の見方だ……。その、根本の解決にはなっていないと思うけど、君自身の考え方を変えるだけでも周囲は変わる、僕はそう思う。」

さととりは話を真面目に聞き、ある種の感動を覚えていた。

「……私、こんなに人から励まされると思わなくて……ありがとう
とうございます！」

涙を拭いながら礼を言い、さととりは自分が止まった所為で目的を忘れかけていたと我に戻った。

「しまった、ほんの思い付きで話したのに……。」

「大丈夫、今からでも間に合う。行こう。」

「はい。」

さととりは嬉しそうに返事をし、前を進む青年の後について行った。

88 受け入れ

俺は猛スピードで自分に向かって来る2体を感じていた。
振り切るか、止まるか。

俺は何故か止まる方を選んでいた。

やがて森林から現れたのは、あの時隠れて俺の様子を窺っていたガキ2人。

小柄で目付きが鋭く表情が垣間見えない少年と、アジア人らしい小柄な、何だこの赤い服、儀式にでも使うのか?.....みたいな服着た少女。

少年の方は相変わらず鋭い眼光を見せ、少女の方は少年を心配そうに見ていた。

「何故来た。」

こちらから喋った。

「訊きたい事がある。」

「..... 何だ?」

「僕達がお前と以前接触した時、お前は僕達を助けた。その理由が知りたい。」

「.....」

俺は親近感と同時に警戒心も覚えていた。

「..... 知ってどうする。」

「知れば僕にとってはそれで良い。」

訳が分からん、理由も無しにただ知りたいだど?

俺は地面を蹴ろうとした。

だが、俺が行こうとしていた先には別の誰かが居た。

「間に合ったみたいだね。」

声を発したのは正面の金髪で穏やかな表情のこれまた小柄な少年。

隣に薄紫のショートヘアで、あの漂っている目玉みたいな奴は何だ?..... まあその目玉の少女。

何故こいつらは俺に構う?

『さとり、彼の記憶を辿って彼の素性を知りたい。』
『はい……………』

脳内で了解の意を示し、さとりは神経を自分の周りを漂うサードアイに集中した。

『…………… あの、分かりました。それで、何処から話せば……………。』
『いや、既にテレパシーを通して君が得た情報を共有して貰ったから結構。』

カイルは受け取った情報を整理する一方、さとりは読み取った記憶を見て青ざめてしまっていた。

(一体どうしてあんな事に……………)

見たのは怒りの少年と破壊。

最後には何処か発達した文明が一瞬で閃光に包まれると共に消滅した、のが見えた。

(やはり彼がニューヨークテロの原因か?)

カイルはこの破壊現象について疑問を抱いていた。

だが今は別な問題、すぐに切り替える。

「僕はカイル・ウィルソンだ。」

カイルは友好的に自分を名乗った。

「…………… だから何だと言うのだ。俺の何を知っている?」

だが男は反発し、ますます警戒心を高めた。

「…………… ブライアン…………… ブライアン・スミス。それが君の名前の筈だ。」

男は無表情だったが、僅かに動揺が見えた。

「……確かに、俺は人間共にそう呼ばれていた……何故知っている？」

「僕は誰よりも真実を知りたい。だから知る事が出来る。」

「……願望とやらか。」

「そうだ。だから君の願望も聞きたい。」

「……。」

男は黙ったままだった。

(彼、とても苦しんでいる……。)

心が読めるさとりにはそれがはつきりと分かった。

「人が信じられないの？」

さとりが自分から無意識に喋っていた。

返事は無い。

「私だって同じだった。心が読めるという能力の所為で散々嫌われて来た。でも、この人は私を受け入れてくれ……。」

「違う！」

さとのりの主張をバツサリと切り捨てられ、さとりは怖気づいて黙ってしまった。

「もうあいつは居ない！この世にもう居ない！」

怒りと言うより悲しみの咆哮だった。

ふと彼の脳内は記憶に包まれ、その様子をさとりは見ていた。

彼を取り囲む大量の兵士、そして彼は誰か人、小柄な少女を抱えていた。

直後、爆発。

(彼は一体どんな人生を歩んで来たと言うの?!)

「それが僕達を助けた理由か。」

「ここで割って来たのはアダムだった。」

「……ああ、俺の様になって欲しくなかった……不思議だなガキ、お前は昔の俺に何処となく似ている。」

男は静かになって答えた。

(やはり僕が思った通りだ。奴には僕に似た何かがある。)

「俺は二度と俺と同じ奴をこの世に居させたくない。俺を苦しめて来た奴ら、そして俺を利用して来た、地球管理組織……奴らは俺の力を知ってわざとああやった。全ては奴らの計画だった。俺はあの忌々しい地球管理組織を滅ぼす。」

「どうやらまだ分からない話があるらしい。」

「僕達人類共和軍は君に協力する。だからまずは君の事、そして君が知る限りの管理軍の事を教えて欲しい。」

「カイルがこの場を代表して提案した。」

「良いだろう。改めて名乗る、俺の名はブライアン・スミス。」

「水をくれ。」

「は、はい。」

ブライアンの頼みに鈴仙がおずおずと立ち上がり、廊下へ出て行った。

「それで、まずは教えてくれ。今は何年だ？秋だと言うのは分かるが、管理軍に飽きる程実験させられた所為で日付が全く分からない。」

「……今は地球歴0018年、西暦で言う2117年だ。」

「……あの日からもう50年も経っていたのか……。」

「あの日」とは何の事か、話し合いの先頭に居るカイルは分かっている。

「その時の爆発は現在では管理軍が起こした史上最悪のテロだと言われている、本当に君が起こしたのかい？」

「最終的にはそうなるだろうな。」

「最終的に？」

「詳しくは後で言うが、俺は管理軍の罠にはまったのさ。今は少々言う気になれなくてな。」

「それで良いよ。それで、管理軍に捕まっただけからはどんな実験をされたんだい？」

「……余り思い出したくはないが、変な機械に掛けられたり、おかしな薬を飲まされたり、“能力”を使わされたり。恐らく何十年とされ続けて来ただろうな。だが何も進歩らしき物は感じなかった。だが最近やつと何か変化があるかと思っただけなら力を抑えられる拘束具を付けられ、気付けばこの、幻想郷と言う世界に来ていた。」

「それで、その何か“変化”みたいな事は分かるかい？」

「そうだな……そう言えば何かと研究者の奴らに焦りっぽいのが見えていたか。」

「具体的には？」

「別にただの直感だが、チーフにディックって奴が居たが、そいつの様子が苛立っていた感じだったな。」

「ディック……アルフレッド・ディックの事か。」

「知っているのか？」

「まあね。間違いが無ければ管理組織所属のトランセンデンド・マンの研究に関しては一流の研究者だった筈だ。」

「……済まんが、それ以上は分からん。」

「分かっている範囲で結構だよ。それじゃあ次は……」

ここでカイルとブライアンの会話に加わったのは、
「待ってくれ、そのアルフレッド・ディックという人物について教えてくれないか？」

アダムが驚きを込めた声で尋ねた。

「アダム、何か心当たりでもあるのかい？」

「ディック中佐という人物が僕が見た夢の中に出て来る。僕に何らかの関係があるのかもしれない。」

カイルは話をすべく自分の持っている情報を整理する為少し間が

置かれた。

「アダムは早くしてくれ、と言わんばかりに冷静さを失っている。

「アルフレッド・ディック、管理組織の人類能力開発研究を主な功績に残している科学者だ。詳しくは極秘情報で分からないが、トランセンデンドマンの能力を上げる薬品の開発やトランセンデンド・マンのクローン製造技術、他にも……。」

「クローン製造だと?!」

「アダムの声は完全に落ち着きを失っていた。

「落ち着いてアダム、君がそれ程声を上げるとは余程の事だ。訳を話してくれないだろうか。」

カイルの台詞に、ハッ、となったアダムは普段通り冷静さを取り戻していた。

「……分かった。まだ話していなかったな。以前、僕が「ブラッククリーナー」の一人のガミジンに接触した時、奴は僕がクローンだと言った。声の波形から見て嘘では無かった。ならば僕はその研究によって作られたという事か?」

カイルは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに表情を戻し、話を聞いた。

「成程、その可能性はあるだろうね。でも具体的な根拠が無ければ……。」

「待て、何か少し耳にした程度なんだか、そのディックとやらに息子が居るらしい。なんでも、その息子が父親の研究材料にされたとか。名前は確かマルクとか言ってたかな。奴の顔写真を見た事あるが、そう言えばお前、髪と目の色を赤くしたら奴にソックリだ。」

「ブライアンが更に情報を追加した。」

「マルク……。」（奴はどこまで僕に関わりがあると言うんだ? 奴が僕を憎む理由がまるで見えて来ない……。）

「アダムは話を忘れ自分の考えに没頭していた。」

「で、アダム、君からは何か言うべき事は……。」

「……ん? ああ済まない。こちらの事だ。気にしないでくれ。」

「そうか、分かった。」

「あのー……………」

そこへコップに入った水を持って来たは良いが、話が込み入っている様で渡すタイミングを見計らっていた鈴仙が恐る恐る訊いた。

「水を……………」

「そうか。」

ブライアンは鈴仙からコップを無造作に奪い取った。

コップを横取りされた鈴仙は思わず声を上げそうになったが思い止まった。

「…………… 他にあるか？」

コップの中を10割飲み干し、質問を求める。

「そうだな……………君の頭髮から調べたデータなんだが、DNAが明らかに地球上の生物どころか人間、トランセンデンド・マンにさえ共通しないアミノ酸を発見した。」

「何？…どういう事だ?！」

カイルの言葉の意味を知ってか、驚いた声で問う。

「違う、と言つても普通の人間と0.01%程度の誤差だが、アデニン、チミン、グアニン、シトシン、これ以外に未知のアミノ酸が2種類もあるんだ。」

「待て。それじゃあ俺の遺伝子の一部は地球の物では無いとでも言うのか?!」

「あれ程複雑なアミノ酸は突然変異や放射線変異で起こったとは考えにくい。突然変異にすれば地球環境下ではまず作れないし、放射線にしても普通の人間どころかトランセンデンド・マンの致死量を超える量が必要だ。そしてそのアミノ酸の構造が何を意味しているのか分からないんだ。」

「…………… つまり俺は宇宙人って事か?」

「そうかも知れない。せめて不明な部分のDNAが分かれば……………」

『お前は俺達とは違うんだよ!』

バリーン!

何かが割れた音がし、その方向を向く。

ブライアンが持っていたコップが大量の破片になっていた。

「ヒエッ！」

鈴仙が驚いて思わず声を上げた。

その声を聞いて我に戻ったのか、ブライアンが済まん、と態度で示した。

ただし、コップを割った事では無く、自分が突然動揺した事に。

「この話は後にしてくれ。あまり気分では無い。」

俯くブライアンの顔は不機嫌そのものであり、今にも怒鳴りそうな表情だった。

「……分かった。今はまだ僕達を信じなくても良い。でも君が必要になる時が必ず来る。」

「ああ……。」

カイルに優しく言われたブライアンはまだ顔を怒りに引きつらせたままだった。

「貴方達は呑気で良いわよねえ。」

「うるせえ、今ジャスガ間に合わなかっただろうが。」

「永琳、黙ってて。今こいつをぶち殺すから。」

永琳が皮肉るのは、リヨウと輝夜の対決だった。

対決、と言っても2人はテレビ画面から目を離さない。

「全く、ゲームをすると性格まで変わるんだから……。」

呆れた永琳がやれやれ、と腕を放り首を横に振った。

近づいてえええ！

画面端いいっ！

バースト読んでええっ！

まだ入るうう！

…… つつ近づいてえっ！

「決め……………」

「うるさいぞ。」

何時の間にかリヨウの後ろに立っていた慧音がリヨウの頭を叩いた。

頭を揺らされたリヨウはコントローラーのボタンを押し損ねた。

「なっ！てめっ！」

「決めたあああー！！！！」

リヨウが慧音へ反抗する隣で輝夜が大声で勝利を叫んだ。

「お前、俺がししやもになったじゃねえか！」

「お前の言ってる事は分からんが、後ろがから空きだったぞ。」

「次からはバックミラーを付ける事にする。」

若干キレてはいたが普段通り冗談を返したリヨウ。

「アダム達あの男と話し合ってるけど、大丈夫かしら？」

霊夢が心配を呟いた。

「カイルさん達は大丈夫って言ってましたけど……………でもカイルさんなら良い案があると思いますし。」

「これは早苗の台詞。」

「……………今の所何も問題は無いみたいですよ。」

「良く分かるなあ。その心を読むとかいう能力って便利そうだな。」

さとりが能力を使い状況を伝えると魔理沙が感心した様に呟いた。

「それでもありませんよ。知りたくない事まで読んでしまう

し……………」

『ケンタツキー下さい。』

「へっ？」

不意に誰かの思考が流れ込み、さとりが間の抜けた声を上げた。

「俺だつての。ファミチキよりもから揚げクン派なんでね。」

「は、はあ……………」

リヨウの発言の意味が分からなく、呆然とした。
パリン

ガラスか何か割れる音が壁の奥からした。
続けて、ヒツ、と短い悲鳴。

「鈴仙つたらうっかかりコップでも割ったのかしら。」

永琳が聞き覚えのある声を聞き、呆れ気味に言った。

「ぎゃっ！」

今度はさとりが悲鳴を上げた番だった。

「奴に異常か？」

リヨウが飄々とした普段の姿を捨て、戦闘の体勢に入っていた。

さとりは壁を突き抜けて来る殺気を一番強く感じていた。

(これは憎悪……とても執念深い憎しみ……。)

それを感じ取ったのか、紫も顔を真剣そうにした。

「割れた音はあの男がコップを握り潰したからみたいね。」

「良く分かるなあ。何で分かったんだ？」

「式神よ。紫は普段からこうして人様の様子をこっそり覗き見してるのよ。」

魔理沙の質問に対して紫の代わりに霊夢が嫌味を込めて答えた。

「人間きが悪いわね。私はただ情報を集めているだけよ……何とか向こうは収まったみたいね。でもこれ以上深い話は無理みたいだわ。」

紫は霊夢の嫌味に反論し、切り替えて状況を話した。

(さて、彼は私達の味方になってくれるのかしら。それとも……。)

紫は幻想郷の管理者として未来に不安を抱いていた。

それは果たしてブライアン・スミスが「破壊神」と呼ばれるだけの事あつてか。

3 星蓮船

89 予兆

幻想郷外。

「リヨウ達が管理側の極秘人物を仲間にしたと言ってますが、大丈夫でしょうかね？」

「判断にはカイルも居るし、幻想郷の住人も知っている筈だ。」

デスクに座る短髪の東洋人の質問に答えたのは、傍に立っている銀髪で褐色肌の男。

「何でも能力が「破壊」、しかもあのニューヨークテロを引き起こした人物だそうで、俺は心配ですよ。」

「他に詳しい事は聞いていないのか？」

「カイルから聞けば、名前がブライアン・スミス、管理軍が捕獲し50年以上も極秘研究の対象にされ、他人に対して信用を見せず警戒心と自己防衛本能が強い。」

「ロウ、お前からも他に何か調べてくれぬか？」

「ドニーさんも酷ですねえ。管理組織の極秘情報を扱うコンピュターはそれはもうバチカンを攻め落とせと言ってるような物ですよ。前にリヨウから頼まれてアダムという少年の事を調べましたが、全く戦果は得られませんでしたし。」

「そうか……………」

ドニーと呼ばれた男は腕を組んで暫く黙り込んだ。

それを見てロウと呼ばれた青年が声を掛けた。

「何か考え事ですか？」

「そうだ………… お前に訊くが、ここ最近で管理組織が大きな動きを見せた事があったか？」

ロウは思い出す様な仕草を見せ、やがて答えた。

「精々5年前の北アフリカであったカイロ戦位でしょうか。我々からは2年前のロサンゼルス戦が最後だったと思います。」

地球歴0018年現在、人類共和軍の主な活動範囲としているのは

ヨーロッパ北部、アフリカ大陸、アメリカ中南部、東・東南アジア、オーストラリア。

勢力に関しては散在的で中心都市以外の場所ではゲリラ的に小規模な勢力すらある。

そもそも人類の全人口が10億人に対して共和軍は1億人。

ならば残り9億人は必然的に管理組織側だ、とは一概には言えない。

というのも、「地球管理組織」自体の勢力（政策を起こす側）は僅か2000万人、それに服属する（政策を強制的に受けている）のが8億8000万人というだけで、1億人が従わず反抗しているというだけだ。

ちなみに管理組織が使う「反乱軍」と言う名称も1億人全体を指しただけで「人類共和軍」を必ず含む訳では無く、ただ管理組織の圧政を受けず逆らうだけなのが8000万人、「人類共和軍」自体は2000万人。

実は地球管理組織は出来るだけ争いを好まなく、その為、服属者達は戦争に参加させず自分らの軍備だけで戦闘を行う。

その為、実質的には軍事力だけに関しては同等という訳だ。

ちなみに「反乱軍」には各地で局所的に行うゲリラ的な存在もあるが、それは2つの勢力にとっては微々たる物だ。

「私が恐れているのは、奴らにはいざとなれば強制的に服属させている8億8000万人を兵員にする可能性だってある事だ。だが、奴らからは何も意図が見えて来ない。」

「確かに、その気になれば我々を制圧する事も可能な筈なのに、向こうはまるで戦力を温存しているかの様に見えますね。」

「……この前、ノアが“見た”と言った。」

「……本当にですかそれ？」

更に深刻な表情をする2人。

「我々が力を得るか、滅びるかの瀬戸際だそうだ。」

「大変な事じゃないですか！……で、詳しい事は？」

「最悪、ノアが死ぬらしい。」

ドニーは何の躊躇いも無く残酷な“可能性”を述べた。

「……………最良のケースは？」

「自分が生き延びる以外に分からないそうだ……………生き残るのは分かっているもそこから先に何があるのかは……………」

「……………で、肝心のノアはどこに……………」

「今居ますよ。」

ロウが質問を言い終える前に、少年の声が返って来た。

年齢は見た感じ大人の体格だが顔に幼さが残っているのは18歳前後だろうか、身長は此処に居るロウとドニーよりも少し小柄、170cm後半か。

「少なくともまだぼんやりとした“見え方”ですから事件が起こるまで数か月は掛かるでしょうし、はつきり“見えて”くれば対処だって出来ますでしょう。」

「そうだな、視覚記憶再現ソフトってあれ予知夢に使えるっけ。」

「ノア。」

「何でしょう?。」

ドニーが指揮者然とした風格を漂わせながらノアと呼ばれる少年に声を掛けた。

「その意気だ、物事を前向きに考えられる様になっているぞ。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「礼は要らんぞ。何時も言っているが、まずは己を知れ、次に理を学べ、最後は無に戻れ。」

「水こそが究極、ですね。」

「この世は錯覚。錯覚を破れ。」

ノアは頷き、ドニーの話をしつかり聞いていた。

幻想郷内。

季節は既に雪が降り始める頃となっていた。

森林のど真ん中、1人が堂々と立っていた。

それを背後から忍び寄る影。

影はその人間を獲物に定め、注意深く観察する。

向こうは振り向いていない。

筈なのに、まるでこちらに気付いているかのような佇まいを見せている。

気付かれない様身を木に隠しながら近づく。

それでも相手は立ったまま動かない。

決断すれば後は早かった。

20mも無い距離を一気に詰め、爪を立て牙を剥き出し、標的に襲い掛かる。

突然、獲物の姿が目の前から消えた、様に見えた。

胸に走った鋭い感覚。

人間が自分のナイフを胸に突き刺しているのが見え、そのままがつくりと倒れ、視界が暗闇に塗り潰された。

アダム・アンダーソンは里を歩く途中、里の住人から注目されていた。

アダムは幻想入りから1年以上幻想郷で生活し、住人達にも馴染まれた。

だが、普段と違って住人達は馴染みの無い、賞賛と恐ろしさを含む視線を送っていた。

というか視線はどちらかというアダムの方よりもその背中に背負っている物に向けられている。

何故なら、アダムが背負っているのは、体長3mの熊なのだ。

自分から獲物を誘い込み、それをナイフ1本で仕留めた、と聞けば更に驚くだろう。

しかもアダムは1tもあるであろう熊を1人で難無く持ち上げ、運んでいる。

「これ売りしたい。」

取引先の商売人がこの少年から途轍もない威圧感を受けたが、すぐに我に返ると計量器と金を持って来た。

アダムが肉をナイフで豪快に部位ごとに切り分け、計量がなされる。

本当は肉を自分と霊夢で食べても良いのだが、霊夢の好みか幻想郷の風習か知らないが肉は好かないらしく、食べるのは少しだけで良く後は売れと霊夢に指示されている。

骨や内臓等売れない部位を除いて約600kgが、西暦2000年代の価値で表すと360000ドルに相当する。

「凄え金だなアダム。ところでアダム、お前紐に束ねた札束見てないか？まさかそれじゃあるまい。」

「さあ、落としたのか？」

「紐だけが見つかったものでね。」

リヨウは笑っていたが、アダムはその意味が理解出来ず黙り込んだ。

「お前冗談通じねえな。もっと気楽に生きろよ。」

「気楽に、か……僕にはそうするべき理由が分からない。」

「お前にとってはそういう物なのか？まあ良いさ。楽しめよ。」

リヨウはそう言う店に戻ったのか去り、アダムは暫くその場にとり残されていた。

「楽しい…………… どういう物なんだ？」

アダムにはリヨウの言葉の意味が分からなかった。

その様子をリヨウは気付かれない物陰から窺っていた。

(あいつ、本当に楽しそうな顔をした事無いよな…………… アダムは今、余程辛いだろうか……………)

「…………… で使用量はこれだけで…………… だから値段は……………」

一通り説明し終わり、相手が料金を持って来た。

「どうもありがとう。貴方って永遠亭の新入りさんですか？」

「そうだ。」

「成程、〃 4人目〃 なのが貴方な訳ですね。」

「そうらしいな。」

「こちらは本を書いている身として、貴方を知りたいのだけれど、良いでしょうか？私は稗田阿求。」

俺はやはり躊躇ったが、答える事にした。

「…………… ブライアン・ウイリス。」

相変わらず必要最低限の無愛想な返事だ。

あの阿求という見た目はガキだが中身はやけに大人な奴に取材され、結構時間を食ったが今日も予定通り終わらせる事が出来た。取材と言っても、カイルという奴に話した程深くは話してはいないが。

「あつ、ブライアン君。終わったの？」

俺の右側から聞き覚えのある声が掛かり、振り向く。

「そうだ。」

振り向きながら声の主が鈴仙・優曇華院・イナバという人物である事を確認した。

俺はこの幻想郷という世界に来てから今まで2、3ヶ月、永遠亭を住居として借りる代わりに永遠亭の主である八意永琳から依頼された仕事をしている。

それがさっきまでやっていたこの里の配置薬の供給と代金のやり取りだ。

どうでも良いが、正確には永遠亭の主は実際は永琳では無く、何時も部屋に籠っている蓬莱山輝夜という何もしないガキだった。

「なら丁度良かった。師匠に帰りに買い物行くように言われてて、手伝ってくれない？」

普段の俺ならば断わっていただろう。

「……分かった。」

……俺は何をしているんだ。

「ありがと。それじゃあブライアン君はこれと……。」

鈴仙がメモ紙を取り出し、書いてある事を指し示しながら話す。

「分かった、行こう。」

「それじゃあお願いね。てゐはこういうの全然手伝ってくれないから助かるわ。」

目的を果たす為一度別れ、目的地へ向かおうとする。

気に入らんぬ。

命令ではないと分かっているが、他人の指示に従っているというだけで嫌気がする。

「どうした、考え事か？」

「……………」

突然俺に声を掛けたのは相変わらず馴れ馴れしい柏リヨウという男だ。

「待てったら無視せんでも…………… 全くドイツ人は怒りっぽいんだから。」

「出身はボストンだ。」

「お堅いねえ。そう言わず俺んどこでコーヒーでもどうだ？」

「要らん。」

「まあ落ち着け、そんな怒鳴られてはビビッて話もできやしねえ。」

「お前と話すつもりは無い。」

「どうしてイライラしたまま何もしないんだ？コーヒーを飲めばスッキリするのに。」

「知るか。」

俺は振り向きもせず立ち去った。

これではまるで何も変わらんぬ……………。

「アダムといい、ブライアンといい、俺の周りは何でこんな暗い奴ばかりなんだ？」

「お前は何時も人の事考えず気ままに生きているからだだろう。お前だって辛い過去があっただろうに。」

「…… お前良くその話持ち込んで来るなあ。何だ、お前人の傷口弄って楽しいか？お前あれか？好きな奴に意地悪するって奴か？」

「そんな冗談が言えるなら何時も通りだな。傷口から目を逸らしたって傷が治るとは限らないだろう。向き合う事が大事だ。」

「はいはい、ありがてえお説教は後にしてくれクソ真面目教師さんよ。」

カフェ「ザイオン」のカウンターで向かい合うリヨウと慧音の2人は傍から見れば毒つき合っている様にも見える。

と、そこへ入って来た1人の客。

「何時ものエメラルドマウンテンのイタリアンにしてくれ。ブラックで頼む。」

「OK、一番濃いうえに何も入れないとか珍しいな。」

リヨウが注文を用意しに行き、カイルが慧音に挨拶してから隣に座った。

「ところでリヨウ、その豆を入れてるのは何だ？浅い鍋か？」

新しく話題を切り出したのは慧音だった。

「おう、フライパンだ。これで豆の表面を焦がしてるのさ。」

「へえー、何でそんな事をするんだ？」

「豆が酸素に触れない様にですよ。焙煎前におけば余計に酸素と反応しないで済むから劣化しにくくなるんですよ。」

次の慧音の疑問に答えたのはカイルだった。

それを慧音は素直に賞賛した。

「まだ18歳なんだろう？以前からお前の知恵や頭の良さは改めて凄いな。」

「本当は、豆を完全に酸素に触れない環境下で焙煎すれば完璧なんで

すけどね。」

「だからカイル、そんな装置作ってくれや。」

「人使いが荒いなあ。」

「カイル、もつと愚痴を言ってやって良いぞ。」

カイルの苦笑を込めた呟きに慧音が便乗する。

「ところでカイル、お前何か言いたそうだが、何かあったのか？」

リヨウが話題を変えたのは自分が不利状況だったのもあるが、リヨウは友人としてカイルの僅かな変化に気付いていた。

「ああそうだった。少々気に掛かる事があってね。」

「お前とはもう7年ももの付き合いだからな。そりやあ気付くぜ。」

カイルは促されて本題を持ち出す事にした。

「異変と思われる幻想郷空間内のエネルギーの変化を察知した。」

「本当か？」

リヨウは無意識に声を潜めカウンターに乗り出し気味だった。

「それで、詳しく分かるか？」

「まだそれ程激しい変化は見られないけど。ここ数週間でエネルギー変化のパターンが「スペースマシン」で空間に位相学的な影響を与えた時のパターンと同じ。」

「つまり何だ？また別な奴が幻想郷にでも来るってのか？」

「簡単に言えばそういう事だ。知つての通り幻想郷の結界は異変が起こる度に結界の幻想郷を外界から切り離す為の力が薄れる。だが、今回はそのエネルギー変化が比べて少ない。僕の仮説では外界とは違う幻想郷の繋がりを持つ別な空間がある、という考えなんだが……」

「それだったら、魔界かも知れないな。」

ここで話に割って入ったのは慧音だった。

「魔界だって？睡を敵に付けて石化させる魔王とか、黄金の鎧を着た騎士にでも出会えるのか？」

「少し黙ってなさい。」

リヨウが冗談入りの突っ込みを入れ、慧音が子供をなだめる様子に言う話を再開した。

「かつて昔、妖怪達が今までより栄えていた頃、人間達がその妖魔を一か所に集め、封印した事があった。その後もあらゆる魔がそこへ封印されている。」

「じゃあ黄金騎士も居るじゃねえか。」

「全く、人の話を邪魔するな……それで、魔界は内側からその結界を突き破る事は殆ど無いと言って良い。昔一度結界の力が薄れ、妖魔達が逃げ出した事があったが、それは例外として、今の所霊夢からも紫からも異常は無いと聞いている。だが、それでもカイルの言う通り変化があるのだとすればそれは外側から誰かが破ろうとしているのかも知れない。」

「成程、分かりました。」

「それでカイル、具体的な見当は付いているのか？」

「結界の揺らぎに合わせてそれらしき動きは確認しているよ。まだ何も積極的に起こそうとはしていないらしいけど、まだ大きく広がらない内にこの件は終わらせたい。だからせめてリョウと慧音さんにだけでも話す事にした。2人が一番動きやすいと思うからね。一応これは同じ理由でアダム、霊夢、魔理沙にも伝えている。」

「了解。」

「それとカイル、私よりも紫や霊夢の方が魔界について詳しいと思うのだが、霊夢から何か聞かなかったのか？紫にも聞いてみたらどうだ？」

「霊夢は特に何も言ってませんでしたけど……」

「霊夢の奴、ここ最近は何も異変が起きていなくて退屈だろうから知らないんだろなあ……」

「はあ……それと、実は紫さんに関しては連絡が付かなかったんですよ。」

「どういう事だ？」

「代わりに通信機を取ってくれた式神の話では紫さんは外界へ調査へ行ったそうです。」

「成程な。」

「で、カイル、一番の要件は俺達は騒ぎを起こさない様に解決に当たっ

てくれ、という事か？」

「その通りだよ。慧音さんの知識も大いに役に立ちますからお願いします。」

「勿論だ。それにしても、何処かのバイクだかステレオだか変な機械ばかり使って騒いでいる喫茶店の店長とは違ってカイルは礼儀正しいなあ。」

慧音の憎まれ口にリョウはお手上げた。だつた。

90 宝船

霧雨魔理沙の朝は気まぐれだ。

早く起きる事も、遅く起きる事も、とにかく魔理沙は自由気ままに生きている。

昔、魔理沙は魔法を学びたいが為に家族と対立し挙句家出した、それ程まで魔理沙は自由を好んだのだ。

ところで、今日は普段より早め、6時半過ぎに目を覚ました。

「今日は何故か早いな…… まあ早起きは三文の得って言うし。」

寝間着を普段着に着替え、朝食は何を食べようかと考えていた。

「リョウのところが朝早くから開いていればそこで良かったかも知れんけどなー…… それからは霊夢とこ行ってアダムに修行付けてもらって……」

不意に魔理沙は黙り込んだ。

考えるのを放棄したからでは無い、考えているからこそ黙ったのだ。

家の外から聞こえる、確かな轟音。

小さ過ぎる音だが、恐らくそれ程まで離れているのだろう。

音源を探るべく外へ出た魔理沙は手に取った箒に跨り、上昇した。

魔理沙の自宅がある魔法の森は数十m上昇しただけでは木々以外に何も見えない、それ程広く何も無いと言っても良い空間だ。

だから轟音の正体はすぐに判明した。

上空に遠く霞んでいるが、その影は間違い無かった。

「…… でかい！船か?!浮いているのか?!」

船、らしき物体は更に遠くへ行ったのか次第にその影すらもぼやけていき、やがて雲に隠れて見えなくなった。

早速知らせようと魔理沙は箒を博麗神社へ向けて飛ばした。

「それ本当？」

「それもでかかった。あれは宝船に違いない。」

「宝船?!じゃあ見つけて中に入れば……」

「ああ、大儲けだ！」

「やったー！」

興奮してすっかり落ち着きを失った霊夢と魔理沙をアダムが横から落ち着け、と割り込んだ。

「遠目だから確定とは限らないだろう。それに、この前カイルから異変の可能性を伝えられただろう。その可能性もあるぞ。」

「アダム、お前って何時も悲観的だよな。もつと前向きに考えてみろよ。」

だが魔理沙はそう反論した辺り、浮かれているのかも知れない。

「でもまずは調べに行けば良いんじゃない。アダムも、行ってみれば分かるわよ。異変だったら解決すれば良い、それだけよ。」

「……………」

霊夢から追い打ちを掛けられ、アダムはこれらの楽観的な理由を理解出来なかったが反論も出来なかった。

空を飛ぶ船は幻想郷のあらゆる場所で目撃されていた。

それは妖怪の山の山頂付近に位置する守矢神社に住む人物達もそうだった。

「今の見えましたか？」

「見えたよ、明らかに船だと言って良い。全長45m、船幅15m、船高12m、後方に大きいマストが1つだけ。エネリオンの一種を利用して飛行している。」

「良くそんな一瞬で、いや、透視能力か。どちらにせよ便利な物だねえ。」

早苗の質問にカイルが説明を付けて答え、神奈子がカイルの能力を称賛した。

「あの大きさなら既に里の住人に目撃されているだろうし、諏訪子、丁度良いんじゃないか？」

「そうだね、これを発見し異変を解決し神社のPRだよ、早苗。でもまだ修行段階だから無理しないで良いよ。」

「はい。」

神奈子に促され諏訪子が早苗へ命令を与えた。

「僕も行きます。この前から続いている結界の揺らぎと関係あるかも知れない。」

「それは頼もしい。早苗を任せたよ。」

これは神奈子の台詞。

「でもカイルさんって空を飛べないんじゃないやなかったでしたっけ？」

早苗からの質問。

「これを使うさ。」

カイルがそう言いながら指し示したのは手に握る直径2cmの球体。

以前トレバーがこの球体を遺し、アダムが受け取り、カイルがそれを調べく預かっていた物だ。

カイルが球を握る右手に自身の意志とエネリオンを込める。

フワツ、とカイルが床から10cmの所にゆっくりと浮いた。

服や髪が重力を失った様にたなびかなかったのは、重力を中和する力ではないらしい。

「ちなみにこの球体は使用者が意志を込める事でエネルギーの変換する他エネルギーを決める事が出来る、というのは前に話したと思うけど、これには明確なイメージの必要があるらしい。例えば僕はこうして地面から浮いているが、まず自重を上回る力で自分を定位置に浮かばせ、その後は自重と同じ力で浮かばせ続けなければならない、その為に必要なエネルギーやベクトルや範囲を明確に理解しなければならないんだ。意志が途切れてしまえば変換も途切れてしまう、使い勝手が良いとは言えない。」

説明しながら意志とエネルギーの供給を止めると床に着陸した。

「で、これで行けるって事なんですよね？」

「まあそういう事。」

早苗が一言で要約し、カイルが蛇足だったと苦笑いした。

「論じるのは後にして、2人共行っておいで。」

「大した脅威では無いと思うが、気を付けるんだよ。」

2柱から（諏訪子、神奈子、の順）言われ、2人は出発する事にした。

宝船？

「……それが空を飛んでたって里中で噂なんだって、ブライアン君

は聞かなかったの？」

「知らん。」

そう俺が言い返した時、鈴仙が僅かにビビった顔をしたのは気の所為ではあるまい。

「で、何だと言うのだ？」

「い、いや、別に聞いてみただけだけど……………」

俺から質問をしても鈴仙は怯えた様な顔つきで答えた。

まあガキだった頃から顔が怖いだの喋り方が怖いだの言われていたからな。

暫く何も話さず里を歩く俺達。

今日は薬の配送が無いらしく休日だと永琳は言っていた、いや、配達を別の日に回す分休日を作ったのだろう。

そして、永琳から行って来いと言われるがまま俺達は里へ行き何もする事無くただ歩いている。

まあ俺のこんな性格を直す為だろうと見当は付いている。

「……………ね、ねえ、あの団子屋、里の外に住む仙人が美味しいって言うてたんだけど……………」

「行かん。」

鈴仙が言い終わる前に俺は即答していた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………何だ？」

俺がそう問いかけたのは、鈴仙が俺の機嫌を窺い見る様な視線を向けて来たからだ。

「……………ブライアン君は何かしたい事は無いの？」

何？したい事？

「……………考えた事が無いな……………」

俺は立ち止まり考え始め、鈴仙も俺に合わせて止まった。

今まで俺が求めて来た物……………」

「……………平穩、それだけだ。」

「そ、そうなの？」

「だから今が不愉快だ！」

怒鳴ると同時に俺は拳を力強く握り地面を大きく踏み込んだ。

「きゃっ！」

鈴仙が思わず顔を下に向かせながら1歩下がり、短い悲鳴を上げた。

そして、俺とその足元を交互に見る。

俺も足元を見る、すると俺が踏み付けた地面の箇所が大穴が空いていた。

そして俺を凝視するあらゆる方向に居る群衆。

「ハア……………」

俺がため息をつくとき群衆は知らぬふりをして離れて行った。

「……………そ、そのつ、ご、ごめんなさいっ！」

固まっていた鈴仙が解凍したかと思ったら俺に謝罪しやがった。

何故こうなる。

俺は何もしたくない。

だが奴らがそうさせない。

俺が“奴ら”と“違う”のは分かっている。

だから奴らは俺を認めない。

俺は“消した”、俺を拒む奴を。

だが今は消したくない。

二度とあんな惨劇は起こしたくない。

その為にも俺は誰とも関わりたくなかった。

「こらっ、女の子が謝ってるのに許さんとは何事だ。」

後ろから不意に聞き覚えのある声を掛けられたかと思い、振り向く。

相変わらずヘラヘラしやがって。

「お前こそ俺の癩に障る様な事ばかりしやがって。」

だが俺が今にも怒鳴りそうな態度をしても目の前に居るリョウはまるで動じない。

「まあ俺んこの新メニューでも食ってリラックスしな。鈴仙ちゃん

の面倒は俺が見てやるからさ。ちなみに……」

止めろ。

それはリヨウに対する言葉か、それとも俺自身に対するのか。

ドガツ！

次に俺が確認した映像は、側頭部を両手で押さえうずくまるリヨウとそれを心配そうに見る鈴仙。

「何故だ。」

分からない。

「痛えや…… アイツ行っちゃったな……」

「リヨウさんが不真面目な態度だからですよ。もう、どうするんですか……」

リヨウは鈴仙から愚痴の様に言われ、ため息をついた。

「伝える事があつたんだが、鈴仙ちゃん、アイツに伝えてくれねえか？ お前さつきでけえ船を見ただろ。」

「あ、宝船は私は見なかったけど、里中で噂になっていましたよ。」

「カイルが現在調べに行つてて必要だったら俺達を呼び出して俺達が行かなければならんかも知れんだとよ。通信機はあるだろ？カイルから協力の依頼が来るかもしれないって訳。それをブライアンにも伝えといてくれんか？」

「良いですよ。でもブライアン君は私や他の皆の言う事を全然聞かない時があるんですけど……」

「心配すんな、ブライアンはあれでもやるべき事は分かっているだ。」

心配する鈴仙を余所に、リョウは自分の考えが正しいかのように発言した。

9 1 飛倉

「そろそろ雲を抜ける。目標物は1時の方向に見えるところだよ。」
「はい。」

水蒸気が上空へ昇る事によって凝固点に達し液体となり光を反射して白く見える水、即ち雲、それが今まで視界を覆っていたのが、急に晴れた。

カイルの言う通り、1本だけの巨大なマストが特徴的な巨大な船が前方から右へ約30度の方向にあった。

推定40mという全長から見るとまだ小さく見えるのは、距離はまだ100m程離れているだろうか。

早苗はカイルが飛行する隣を並行し、やがて船は目の前から5mも離れていなくなった。

「大きさは予想通りみたいですね。」

「…… 妙だな、中に誰も居ない。」

「え？動いているのですか？」

「遠隔操作か自動操縦か…… 取り敢えず調べよう。」

提案したカイルが宝船の甲板に足を着け、続いて早苗も着地した。

甲板の中央から後ろ寄りには倉と思われる建築物が載っていた。

「…… 結界の揺らぎの原因はこれと見て良いと思う。」

目を閉じたカイルがエネリオン構造情報を読み、すぐに目を開けて言った。

「それにこの船は完全な自動操縦であるらしい。」

「でも船ですし、誰か今まで乗っていた、とかは無いですか？」

「そうだね、船室はあるからには人が乗るのを前提として設計されている筈だし、それに関係者が戻ってくるかも…… 待て。」

カイルが急に柔らかな口調から真剣な口調に変わった。

その変化を受け取った早苗は思わず身構える。

「…… 何か来る。気を付けて。」

「はい……。」

それは突然だった。

「カイルさん後ろ！」

早苗が注意すると同時にカイルが振り向く。

甲板から上に数m、船の縁から数十m、“それ”はそこにあった。

「あれってUFOじゃないですか?！」

「UFO? 僕にはUAVに見えるけど。」

「でもプロペラも何も見当たらないから……。」

「いや、推進器がそこに…… ちよつと待ってくれ。」

早苗の主張が違っても言う様にカイルが考え込み、能力を活用して“それ”を調べ始めた。

(明らかに同じ位置にあった筈だが、僕と早苗が見た物は別物だとも言うのか?…… いや、僕達は“同じ”物を見ていたのか。しかも……。)

カイルが思索を巡らしていた時間は3秒にも満たなかった。

「あれは幻影だ。」

真つ先に結論を述べたカイル。

早苗が、えっ? という表情をしたのは無理も無い。

「木片を媒体にして幻影を映し出している。幻影はどうやら観測者によって変化する仕組みらしい。元の木片の方は何者かの意志によって操作されている。」

カイルが説明しながら船の上に建っている倉に目をやった。

「その操作している人がその中に、って事ですか?」

「その通りなだけで、結界らしき物に阻まれて内部が分からない…… 結界の揺らぎの原因もこの内部にあるんだろうけど……。」

言うより実際確かめるべく、2人は倉の前にまで歩み寄った。

戸は木製らしく、トランセンデンド・マンであるカイルは当然、早苗にも壊せそうだ。

だが、

「問題は、壊した後どうなるか……。」

中身を知らずに無理矢理開けるのはやはりリスクが高いからだ。だがそれだけでは無い。

「もしここが慧音さんの言う「魔界」だとすれば、その入り口を強引に開ける事によってこちら側の世界に悪影響を与えるかもしれない。宇宙と別次元の宇宙の扉を開くみたいは何が起きるか分からない。」

「それじゃあどうすれば……。」

「まずは関係者を待つか探すか…… その前に色々”見て”おう。」

カイルはその場に座り込んで目を瞑り、早苗もその傍に座った。

霊夢が魔理沙の乗る箒の横に並行し、アダムはまたしてもその箒の世話となっている。

「アダムはさ、カイルみたいに相手の居場所が分かる、みたいな能力とか無いのか?」

魔理沙が首だけ後ろを向いて訊いた。

「数千mという距離は無理だ。数百mから1、2kmの距離でも一か所に集中する必要がある。レーダーの様に周囲全体を調べるには精々100m以内だろう。現にその空を飛ぶ船の居場所どころか方向さえ分からないなら探知にはかなりの時間が掛かる。」

「全く、魔理沙が何も情報が無いまま伝えるから結局探すのに時間掛かってしまうじゃない。」

すかさず霊夢が愚痴をこぼす。

「悪かったな、突然だったから慌ててたんだよ……で、どうすりゃいい?」

無愛想に謝った魔理沙は、困った時に取り敢えず何かやる癖の様にアダムを頼る。

「これ以上このままの探索では非効率的だ……カイルに訊いてみるか。彼ならば既に気付いているかも知れない。」

そう言いつつアダムはポケットから薄い長方形の通信機を取り出すなり液晶画面に多少指を当てたりスライドしたり、やがて耳に当たった。

コールは1回だけだった。

「カイルか？アダムだ。今どこに居る？」

『ええと、君は空を飛ぶ船を見たか？』

「直接見ては無いが、魔理沙から話は聞いた。僕達は今それを探している所だ。」

『僕は今その船に居る。』

「本当か？で、何か分かった事は無いか？」

『船には誰も居ない、オートパイロットだ。この前からあった結界の乱れもこの船が発生源と見て間違いない。更に、船には半壊した倉らしき建造物があって正確な異変源はそれらしい。倉の内部は恐らく魔界、別次元の空間の様になっていて、つまり倉の扉が開けば空間内にエネルギーが漏れ出し、結界が不安定になる可能性がある。僕は今船を更に深く調べている所だ。ところで丁度良かったから、君には恐らく地上に居るであろう船に関係した人物を探し出して欲しい。』

「何かその人物の事についての情報はあるか？」

『済まないが、1つも無い。だが君は対人戦闘能力や人物洞察能力に適性がある。だから怪しい行動をする人物を特定までは行かなくても候補に絞り出すだけで良い。それに霊夢や魔理沙は幻想郷の異変に詳しいだろうし彼女達の情報力も役に立つ筈だ。頼めるかい？』

「分かった。」

返事をして速攻で通信を切ったアダムは2人へ訊いた。

「2人共、例の船についてはカイルが既に発見し到達し解析中だとの事だ。それで僕達はその船の関係者を探すように依頼された。」

「何？カイルの奴既に見つけたんだな。やっぱ凄いや。」

「で、そいつの手掛かりは何か無いの？」
「無い。」

アダムの解答に2人は脱力して思わずこけそうに、はならなかったが空中に居たので、代わりに急停止した。

「そんな断言されてもなあ……………」

「無いって、探しようがないじゃない。」

「探し出さなくても候補を割り出すだけで十分だと言っていた。それらしい変わった行動をする者に注目すれば良い。」

「…………… まあ、異変が起きたときつて毎回何も分からん状態で始まるし……………」

魔理沙が呟き、

「それなら、少し前から見掛けない奴がウロチョロしていたのを見たかしら。行動も怪しかったわ。」

霊夢が提言して残る2人がその話を聞くべく向き、霊夢は詳しく話す事にした。

「確か、前地底で異変があった後から、小規模な異変とか妖魔退治とかであちこち移動していた時に妙だなーって思った奴が居たのよ。まづは変な棒を持った妖怪鼠、それに周囲に桃色の雲を纏った尼つぽい人、それから白い水兵つぽい服の奴と、あとは妖怪虎…………… 何かやかしたみたいな感じだったけど、まあこれ位かしら。その皆何かを探している雰囲気だったわ。しかもそいつらが接触しているのを見た事あったから4人は間違いなく関係があるわね。」

「あつ、鼠と虎は私も見た事があるな。この前里で虎の方が、また落とってしまった、とか言つてドジつてた感じだったな。」

「それで、居場所か良く目撃する場所は分かるか？」

今度はアダムが質問をする番だった。

「そうね…………… はつきりとした事は言えないけど、どれも里からそう離れていなかったわ。」

「いや待て、まず1人は探す必要が無くなったらしいぜ。」

魔理沙が提言し、視線で示した先には、

「何でご主人は何時もおつちよこちよいなんだか……………」

愚痴らしき言動をしながら何かを探しているらしい。

頭に鼠のものと思われる耳があり、両手にはダウジング棒、80cmの金属棒を持ち手が30cmになる様に折り曲げた2対の棒、が握られていた。

「やつばあいっだ。霊夢、どうする?」

「そりやあ聞き出すに決まってるでしょ。」

どのようなにして、とは言わず接触を試みる2人。

「ちよつとあんだ。」

この霊夢の一声を聞いたアダムは顔を顰めそうになった。

いきなり声を掛けられた妖怪鼠の方は不愉快そうな顔をして返事をした。

「に、人間?な、何だい?」

「あんだ今朝空を飛ぶ船を見たかしら?」

「さ、さあ……………」

「知ってるわよ、あなたその船を知っているでしょう。」

(これじゃあ恐喝だな……………)

(これでは聞き出せる事も聞き出せないぞ……………)

魔理沙とアダムがそれぞれ心の中で呟いた。

「いや、ちよつと待つてくれよ。そんな怖い目で睨まれても……………」

妖怪鼠は更に困った表情になり、魔理沙がため息をつき、とうとうアダムが立ち上がった。

「霊夢、僕にやらせてくれ。」

「でもアダム。」

「下がっていきな。」

霊夢は主張できないままアダムの抑揚の無い言葉に従うままとなった。

「僕はアダム・アンダーソン。君は何と言う?」

すると妖怪鼠はアダムの冷静な声に困惑が消えたのか、

「ナズーリンだ……………で、私に何を求めてるっていうんだい?」

「まずは君の目的を教えてください。」

アダムはそう問いかけながらナズーリンという鼠妖怪が手に持つ

ている物を見つけた。

多分ボロボロになった建築材だろうか。

「それは？」

アダムの更なる質問にナズーリンの方は、

「……………その船にある飛倉の破片だよ。ある人物を復活させる為に使うんだ。」

警戒心は残していても質問には正直に答えた。

（倉……………じゃあ破片はそれを直す為か。ならば……………）「……………悪いがこちらにも都合がある。その倉を直し魔界への通行口を開くのだらう。結果、幻想郷の結界が乱れ、最終的に幻想郷を滅ぼす事に繋がる。僕達はそれを防ぎたい。」

「げ、幻想郷が滅びるだつて?!」

「出来るならばそちらの行動を止めてもらいたい。何も……………」

丁度その時、ナズーリンはある事に気付いた。

自分の後ろにネズミが1匹、ランプ型の物体を持って自分に差し出していた。

ナズーリンは自分の搜索能力に加え、大量の子ネズミを遣う事によっても探し出す事が出来る。

そして、このランプもどきこそ今ナズーリンが探していた物だった。

（この人間達は私達に敵対するだろう……………ならば排除するまでの話。）

そう考えたナズーリンはネズミからランプ型の物体を素早く受け取った。

92 飛倉

「棒符「ビジーロット」！」

ナズーリンがスペルカードを唱えた事で状況が急変した。

スペルカードが弾幕を撒き散らし、至近距離に居たアダムが跳び上がったかと思うと体を捻って躲す。

後方に1回転して着地したアダムは既に両手に拳銃を握っていた。

「どうしても私達は「聖」を復活させなければならぬ。だけど君達は私達に敵対するみたいだね。」

（やはり先に霊夢が余計に刺激させたのが悪かったか、それとも……）「仕方ない。2人共、下がっていてくれ。」

呼び掛けると霊夢と魔理沙が距離を取ったのが見えた。

「次は私にやらせてくれよー。詰まんないからさー。」

魔理沙が、約策だぞ、とばかりに言う。

アダムは頷きもせず目の前の相手から目を離さない。

「搜符「レアメタルディテクター」！」

ナズーリンの詠唱に対し咄嗟に拳銃を突き出したアダム。

弾幕が銃弾に次々と撃ち落され、銃弾もまた弾幕に阻まれて届かない。

（宝塔の力はまだこんな物じゃ無い筈。）「もつとだ、視符「ナズーリンペンデュラム」！」

今度の弾幕は明らかに規模が違っていた。

「やるわね、あの妖怪。」

霊夢が素直な感嘆を漏らした。

その量はアダムが2丁の拳銃から放つ秒間100発の銃弾を飲み込み、襲い掛かる。

右へ頭を傾け、左へ体を傾け、後ろへ体を逸らし、前へ姿勢を低くし、躲す。

後ろへ手を着けないカポエイラ式のバック転をしながら避けると同時に距離を取る。

最低限の動きで銃弾を避け、アダムは銃を持つ手を1発放つごとに

位置や角度を変更して連射する。

攻撃に集中して防御が疎かになっていたナズーリンは弾幕の合間を縫って出て来た銃弾に被弾してしまった。

「いたたた……宝塔があつて良かった……。！」（もつともつと……。）

被弾して速攻で起き上がったナズーリンはスペルカードを発動させる。

弾幕が嵐の様に規模を増して襲い掛かって来る。

「前よりやばくなつてるぞー！」

と、魔理沙の驚き。

アダムは銃をナイフに持ち替え、刃で次々と光弾を叩き斬る。

上下左右前後にナイフを動かし、更に体の動きも加える。

前方に跳びながら体を前に1回転、同時に両手を広げながらナイフを薙ぐ。

弾幕の一部がかき消され、その僅かな隙間を潜り抜ける。

上半身から着地し、地面を転がった先にも弾幕は待ち構えていた。

今度は体を横へ半回転、ナイフの軌跡に従って真横の弾幕が消えた。

次は地面から足を離して体軸を地面と平行な向きに、そのまま回転して右から上、そして左方向の弾幕をかき消した。

（予想を大きく超えている…… 攻撃の暇が無い……。）

前方からの弾幕を腕を左右に回して刃を当てる事によって弾幕を防ぐあるいは逸らし、遅いが着実に1歩1歩距離を詰めていく。

防御しながらもアダムはある事に気付いていた。

（……あの手に持っている、ランプか？）

ランプらしき物体、即ち宝塔がナズーリンの意志を受け取り、宝塔は空間からエネルギーをナズーリンへ流し込んでいる。

（さてはユニバーシウムか。自律機関としてでは無く人が使う事を目的とした補助機関としての役割らしい。しかし不思議だ、幻想郷にユニバーシウムの加工技術があるのか？それどころか幻想郷にはユニバーシウムという存在自体知られていない筈だ。）

疑問をさておき、アダムは目の前の攻撃を避け続けなければならぬ。

前方へ跳び上がりながら今度は後ろ方向に宙返りをする。弾幕がアダムの身体をギリギリ掠め、半回転して上下逆になったアダムの両手は銃に持ち替えられていた。

回転中であつても的確に狙いを定め、連射した。

ナズーリンが危機を直感的に察知して重心を後ろに傾けた。

驚くべき事にナズーリンは衝撃波を発生させながら後ろ向きに急発進したかと思うと、急減速してバランスを失いそのまま倒れた。

(あの調子ならば知覚が追いついていないらしい。後は簡単だ。)

勝利を確信したアダムは宙返りから着地、そして地面を勢い良く蹴り付け一気に接近する。

(不味い!)「宝塔「グレイテストトレジャー」!」

ナズーリンは自分の出せる中で最強の技を繰り出した。

だが、アダムは迫り来る弾幕を無視するかの様に真っ直ぐに突進する。

「あんなん無茶だ!」

「危ないわよっ!」

観戦している魔理沙と霊夢も驚きの声を上げる。

それはアダムと対立するナズーリンも同じく動揺している。

(本当にあんな中を突破するつもりか?)

アダムに迷いは無く、突っ切るつもりらしい。

突然アダムが何も持たずに両腕を前に突き出した。

弾幕が突き出された両腕の小手に当たって消滅した。

交互に右、左、右、左、と弾を払い除ける様に突き出しながら勢い良く前進する。

「良く何も持たないで弾幕が防げるなあ。一体どうやってるんだ?」
感心する魔理沙が同時に疑問を漏らす。

それはナズーリンも同じだった。

(まさか宝塔の力が通じないとしても言うのか?!)

気付けばアダムはナズーリンより3m前方に居た。

アダムは軽く跳び上がり、真正面からの弾幕を避けると同時に体を丸めながら後ろ方向へ回転し、ナズーリンはそれに見とれていた。着地すると同時に改めて地面を勢い良く蹴り、音速を超えて跳び掛かる。

膝蹴りを腹に決めると同時に肘打ちを頭頂部に決めた。

何が起こったのかも分からないナズーリンは打撃を受けた衝撃で思考が鈍くなり、ただ打たれるのみとなった。

平手にした手の甲を左右交互に打ち出し、顔面に連続ヒットさせる。

相手の膝を真っ直ぐに蹴り折り、バランスを崩して倒れそうになったナズーリンの首を抱える。

そのまま相手の首に全体重を加えながら、プロレス技の要領で肘の裏側でナズーリンを勢い良く顔面から地面に叩きつけた。

地面から起き上がったアダムは、最接近しているナズーリンを一目見るなり、

「…… 気絶している。それ以外は問題無い。」

と断言し、ナズーリンが持っていたランプ型の物体を奪い取った。

「それ何?」

と霊夢の疑問。

「流石、仕事が早いな。腕でどうやって弾幕を受け止めたんだ?」

これは魔理沙の感嘆。

アダムはまず簡単に返答できる魔理沙の質問の方に答えた。

無言でロングコートの袖をめくり、腕にはアダムの引き締まった体にフィットした黒いインナーの上に、これまた黒いロープが巻き付いていた。

「成程、前にもなんか使ってた事があったっけ。」

「スマート・アナコンダ」と呼ばれるロープの用途は、アダムが発見した中で4つもある。

1つ目は普通のロープと同じ様に使える事、2つ目はロープに繋いだ先にエネリオンを送り込む事が出来る事、3つ目はロープ自体を自在に操る事。

そして4つ目、先程の様にロープを利用して防御に利用出来る事。ロープは鎖帷子と同じ様に局所的な圧力を加えられてもそれを分散して崩壊を防ぎ、ロープそのものもエネルギーによって強化されるので大抵の攻撃は受け付けない。

それはさておき、アダムは霊夢の質問にも答えなければならぬ。「それで、このランプ？についてはまだ詳しい事は分からないが、僕はこれをユニバーシウムだと考える。」

「えっ、それが？……形から見て宝塔かしら。随分と小さいのね。」
「でも幻想郷の連中は皆ユニバーシウムの事なんか知らない筈じゃないのか？」

「魔理沙の言う通りだと思うが、現にこのユニバーシウムは「加工」されていた。エネルギーを特定のエネルギーに変換する様にだ。明らかに知っているとしたら考えられない。」

「アダム、幻想郷にユニバーシウムという「名前」は無かったとしても、それが何か別な名前として伝えられていたかも知れないわ。霊力や魔力だつて突き詰めればエネルギーなんですよ？」

「……一理ある……だがこれがユニバーシウムである事の確認やユニバーシウムが知られている事は今はどうでも良い……これがある人物を復活させる為に使うとか言っていたな。」

「飛倉つて言ってたか？じゃあ宝船はその飛倉の事を指すのか？」

「一致する情報がこれだけあれば可能性は高い……。」

魔理沙が横から割る様に質問し、アダムが自分の考えを言うと思り込んだ。

アダムが考え込んだのを見ると、霊夢が訊いた。

「何か良い考えでもあるの？」

「……そのナズーリンという奴は僕達の目的を伝えた瞬間に攻撃して来た。対等な話し合いは無理だと思う。だがこちらには……。」

アダムが飛倉の破片と宝塔を見詰める。

「……他にもまだ確認していない人物も居るだろう。そこで考えだが、この宝塔と飛倉の破片を交渉材料にする訳だ。」

「人質代わりって訳か。相変わらずお前の考えている事って何か怖いな……。」

「でもそれで異変を防げるなら良いんじゃない？」

魔理沙は苦笑気味だったが、霊夢は割と乗り気らしい。

「そうか？ 霊夢、お前もアダムみたいに少々非情に…… いや、元からか。」

霊夢が間を入れずに平手で魔理沙の頭を叩いた。

「余計な事は言わない。」

「へいへい……。」

3人は横たわったナズーリンを何事も無かったかのように置いてきぼりにし、次の候補を探す為、再び上空に飛び上がった。

ハア…… 結局何も変わらん。

リヨウを殴って抜け出して来たが、どうすべきか……。

誰も傷つけないと言いながら結局傷つけてしまっているのは分かっている。

「だが、仕掛けたのは向こうだ！」

弱気になった俺に喝を入れようと俺は怒鳴った。

何をやっている。

俺は変わりたいんだ。

それを俺自身が、

「違う！奴らが俺をそうさせない！」

クソッ！

自棄になった俺は目の前の木に向かって拳を突き出した。軽く当たった、という程度の手応えが返って来て、一瞬で反発が無くなり、俺の右腕はストレートを伸ばし終えた。

俺に殴られた木の幹は原型を留める事無く破碎され大穴が空き、すぐ下の地面に木屑が散乱している。

そして後ろの気配に俺はとづくに気付いていた。

「俺から隠れているつもりか？」

問い掛けながら振り向くと明らかに隠しきれない紫色の傘が木の影からはみ出していた。

ガサツ、とこける音がしたのは慌てて俺から逃げる為だろう。

呆れたため息をついた俺は構ってやる事にした。

早足に歩くと、早速姿が見えた。

やはりだ、以前俺に向かって、驚け、と言いやがったガキだ。

姿を見せてしまっても尚、奴は俺から逃げようと俺の顔を見て怯えながら後ろに下がる。

本来なら俺はそいつを何ともせず無視しているだろう。

だが、どうする？

「……ハア……待て、何もせん。」

そうは言ったが、当然俺の言う事など信用しないだろう。

奴は立ち止まって半分涙目で警戒しながらこちらを窺い見ている。

「そう泣くな……一応聞くが、何故俺に付いて来た？」

「……。」

何故答えん！

危うく怒鳴る所だった。

「……濟まんが、俺は気分が悪い。」

まだだ……これからだ……。

地面を蹴れば視界が変わり、当然さっきの傘のガキも消えた。

93 イカリ

「……鍵、ですか？」

早苗がカイルの発言を確認する為に訊き返した。

「この扉を開くには鍵となるエネルギー源と、そしてあの倉を修復する必要があるらしい。」

カイルが自信あって予測するのは、自身の演算能力があつての事だ。

空間から情報を読み取るだけでなく、現在の情報を受け取った事による過去の推測や未来の予測まで可能になる。

「まず、倉を修復する為にはっと……」

論じるよりも実際にやった方が早い、とカイルは首にぶら下げたトレバールの宝玉を握った。

狙いは既に定められ、後はエネルギーを送り標的にどんな状態を加えるのか。

エネルギーの弾丸が宝玉を握る掌から発射され、宙に浮かんでいる物体へ向かって命中した。

命中した目標を甲板に墜とし、物体を覆う幻影、即ちエネルギーを打ち消す。

それは、先程早苗がUFOと見間違え、カイルがその正体を幻影であると突き止めた木片だった。

早苗視点からだ空を飛んでいたUFOが突然撃ち落され、甲板に墜落したのが見えた。

「あっ！」

それだけでなく早苗は目の前の出来事に驚き声を上げた。

UFOが突然和風の建築材らしき木片に姿を変えたからだ。

「カイルさんの言う通り幻影だったんですね。それで、倉を修復するにこれが必要って事ですか？」

「ああ。だけど木片は見るからにここにある分では足りない。恐らく地上に散らばっていて、それを探しにこの船の人達が地上に降り、船が自動操縦になっているのかも知れない。」

「私達も探しに行きますか？」

「そうしよう。扉を開けるのに必要なエネルギー源もまだ分かっていないし、探さなければ何も動かなさそうだ。」

早苗の提案にカイルが賛成し、2人は船の縁から飛び降りた。

幻想郷には自然がありふれているが、俺は嫌いだな。

心が落ち着くとは良く言うが、俺は心が静まる度に余計な事を考えてしまう。

だからといって俺は文明が好きないでも、というか寧ろ嫌いだ。

人間共の忌々しい音を聞かない代わりに、自分の事ばかり考える。

俺は自分が何なのか分からない。

俺がこの世に生まれてから「あの日」までの13年間、管理組織に実験され50年余、結論が出ない。

俺の両親は難病で死んだらしく、俺はとある科学者夫妻に引き取られ、育てられた。

俺は両親の事を知りたかった、が誰も教えてくれなかった。

俺は次第に自分の事に気付き始めていた。

人間の形だが、人間を遥かに越えている。

だが自分ではそこまですりか分からない。

「あの日」以来から俺は更に自分の事を知りたくなった。

ビルを殴り壊し、音速を超える速さで動き、爆撃に耐え、銃弾すら見える、何より俺が念じた物が「破壊」される。

俺が何かの人間以外の怪物だってならまだ分かる。
だが俺は人間だった。

カイルの奴によればDNAは殆ど人類と一致しているらしい。
だがその僅かに違う部分は、俺が地球上の生物では無いという証拠
でもあるのだ。

誰か教えろ！

心の叫びを誰かが聞いてくれる訳でも無いが……

「あくあ、探すのもう疲れたく。」

河原に寝そべるのは船幽霊の村紗水蜜。

黒のショートヘアに青緑の瞳、特徴的なのは彼女か着るセーラー
服と、隣に置かれている長さ1mはあるかという錨。

「あんまり見つからないし、やっぱ船長としてあの船に居たかったか
な……。まああれ自動だけど。」

昔、水難事故によって死んだ村紗は、霊となって来る日も来る日も
水辺に近寄る人物や船を水の中に沈めた。

その所為である人物によって遥か昔に封印されたのだが、その封印
が解かれ、反省して幻想郷に居る今でも悪戯しようという程度に本能
は残っている。

その本能は、河原に別な人影を見つけた事によって刺激された。

大柄で凄味のある顔の青年、この人物にしようか。

向こう岸に居る男はこちらには気付かず、川の水面を覗き込んでい

る。

男はそのまま水に手を突っ込んで飲み始めた。

(始めるなら今だね！)

男よりも上流に居る村紗は川に手を触れ、静かに流れる水の心地良い感触が伝わって来る。

突如として穏やかな川はまるで雨が降った後の様にその水量を増し、下流の男へ襲い掛かった。

これから起こる出来事を思い浮かべ、村紗は悪戯を成功させた子供の様な笑顔を浮かべた。

ドドドドド

洪水？何だあれは？

俺が見たのは静かに流れる川の上流から急に大量の波が押し寄せて来た所だった。

まるで俺がここに着いたのに気付き、俺を飲み込もうとばかりにしている。

だが、俺が驚きもせず逃げもせず、この場に立っているのは無謀では無い。

大自然を人間が操るのは不可能と良く言われるが、俺はそうは思わん。

試しに俺と同じ「力」を持ってみると良い、それだけで自然さえ崩す事が可能だ。

落ち着きながら右手を前に差し出す。

右手から発射されたエネリオンが大波に命中し、一部の水が“破壊”された。

言い換えれば水が酸素と水素に分かれた事だが、液体の密度のまま気体に分解されれば、気体は周囲の空気と圧力を均等にしようとするから周囲に爆発的に拡散する。

後続の水が気体の圧力で押しつけられ、俺の正面には何も流れないスペースが出来上がる。

後はエネリオンを撃ち込み続ければ良いだけ、それだけで俺は自然災害から簡単に身を守る事が出来た。(そもそもトランセンデンド・マンは洪水程度では死にはしないが、ブライアンがこうやって防いだのは水流に身を晒すよりも楽だったからだ。)

水流に気を取られて後から気付いた事だが、上流でエネリオンが活性しているのを見るとこれは人為的な洪水らしい。

静かな海を割って突き進むモーゼとは違って荒れ狂う洪水を割って俺は上流へと登って行く。

すると、不意に洪水が止んだかと思うと、俺の正面に水兵服を着たガキが見えた。

「何のつもりだ、言え。」

「……ひよ、ひよつとして今ので全然無事だった訳？しかも濡れてもいないし……」

おどけた年相応の女のガキらしい声だ。

早く答えろ。

「早くしろー！」

「ひっ！……その、ちよつと悪戯でもしようかと、ね……うわっ！」

ガキが2度も悲鳴を上げたのは、前者は俺が怒鳴ったから、後者は俺がガキから50cmと離れていない距離まで接近したから。

「……二度とするなクズガキ！」

俺の腕は無意識にガキの襟まで伸びていた。

「村紗！危ないっ！」

この場で状況が一変したのは、俺でも目の前のガキでも無く、第三者の声から始まった。

声のした後ろへ振り向くと、そこに見えたのは薄いピンクの煙だった。

慌てる事も無く右手を前に伸ばした俺はそこからエネルギーを発射する。

煙が俺を覆おうとしていた体積分だけ消え去り、残りは俺を避ける様にして広がった。

すると、煙が急に1か所に集まったかと思うと、秩序状態の雲から無秩序状態の人の形をした。

下半身は無いらしいが、上半身は白く長い髭を生やした、筋肉があつて体格の良い老男、しかも雲が元々ピンクだった為肌もピンク色となつている、それが宙に浮いていた。

「雲山、大丈夫ですか?」

「危なかったが、次からは油断せんぞ。」

低く威厳のある声で言う雲男の後ろには別の女性。

東アジアに多い女性仏教徒(ブライアンは「尼」という言葉を知らなかった)がする様な格好だが、この女も仏教徒なんだろうか。

「ありがと一輪、雲山。」

「それより、私が見た限りでは貴方にあの男が襲っている様に見えるのですが……。」

「そうだよ!だから助けて!」

咄嗟に答えた村紗に対し、一輪の目つきが変わった。

「仲間に手を出すのは許しません!」

あの水兵の馬鹿ガキが、適当に答えやがったお蔭でこちらが悪人みたいに思われたじゃねえか!

「溺符「ディープヴォーテックス」!」

「稲妻「帯電入道」!」

俺は咄嗟に身を捻り、迫り来る低速(ブライアン視点)の光弾を難無く避ける。

まあこんな攻撃など避けるまでも無いが……

手を着き後転しながら俺はどうするか考える。
殺さんようにせねば、俺は殺したくないんだ。

心に決め、俺は更なる攻撃を受け流す。

「とおっー」

不意に低く唸るような男の声、振り向くと先程の人型の雲が拳をこちらに向けて殴り掛かっている最中だった。

俺がすぐさま頭の前に掲げた腕は雲の太い腕を受け止めた。

雲のくせにやたら堅いパンチだな。殴る時だけ固まっているのだろうか。

そんな事はどうでも良く、俺は次に来る拳撃を連続して受け止める。

相手が拳を左右連続させると俺も左右に合わせ拳を逸らす。

次の1発、俺は雲の拳を自分の拳で迎え撃った。

予想通り、雲は俺の拳を受け、しかも自分の放ったパンチの反動に勢いを追加され後方に吹き飛んだ。

今度は左右をちらと見る。水兵のガキと仏教徒の女がそれぞれから俺を挟み撃ちにするように弾幕を放つ。

俺は慌てもせず、腕でそれらの攻撃を全て弾いた。

「弾幕をいとも簡単に腕で防ぐなんて……」

「なら、転覆「撃沈アンカー」！」

水兵のガキが手にカードらしき物を持って何か唱えたかと思うと、巨大な錨の形をした弾幕が俺目掛けて発射された。

臆する事はない。俺は何時も通りにすれば良い。右手を錨に向ける。

俺を踏みつぶそうとしていた錨が突如その形を失い、消えた。

「今のは一体?!」

今度は雲が俺の背後を取って俺を手で掴もうとしている。

俺は逆にその腕を掴んでやろうと思ひ、相手の腕を潜り抜けその腕を掴んだ。

だが手応えが無く、掴めない。まあ雲だから当然か。

「油断したな！」

雲が俺に言いながら手を手刀にして殴り掛かる。

だから俺も言い返した。

「油断では無い。余裕だ。」

俺は左裏拳を顔面へと雲が俺に攻撃を当てる前にヒットさせていた。

よろけた雲は怯みを見せず更に俺に向かって拳を撃ち込む。

俺はそれに合わせて雲の肩、に当たる部位へ、そこへ攻撃を当てる事を出端をくじくと同時に攻撃を当ててもいる。

一步、といつても足が無いのでその分だけという意味、下がった雲は俺の様子を窺おうと腕を胸の前に構えてじつと動かない。

雲が前に出した左手を着き出そうとする、それと同時に俺が前に出している左足が動いた。

結果、俺の蹴りが雲のジャブを蹴り止め、そのまま同じ足で雲の側頭部へ蹴りを決めた。

「雲山！」

「分かつとるわい。」

「神拳「天海地獄突き」！」

「ぬおおおお！」

仏教徒がまたあのカードらしき物を持つと、雲の方が凄まじい勢いで俺に突進しつつ連撃を繰り返し、仏教徒の方からは援護に後方から弾幕を張る。

元々どちらも大した事が無かったから合わさったって大した事はあるまい、と思っていたが、中々強い。片方に攻撃の隙があってももう片方がそれを許さない。

まあ大した事はないのは事実だが。

俺は掌を没教徒の方へ向けた。

「きゃっ！」

女らしい甲高い悲鳴を上げたのは、突然今まで立っていた地面が何の前触れも無く消滅したからだ。大した深さでは無い（1m）が仏教徒はバランスを崩し、穴に落ちた。

「二輪！」

雲が後ろの仏教徒を心配して振り向くと同時に、俺は地面を蹴った。

直後、目の前には穴に落ちた女が居て、俺はそれを迷う事無く持ち上げる。

女の首を左手で掴み、もう片方は近くにあった川原の岩へ向けた。

エネルギーを発射、それだけで左手の先にあった岩はケイ素原子や酸素原子、その他金属原子へ分解され、すぐに風で飛ばされてしまった。それらの現象が一瞬で起こった結果、奴らには岩が一瞬で姿を消したと見えるだろう。

「今度はこの女が消えるぞ。」

「ぬぬ〜……」

「汚い真似をしておって……」

水兵のガキ、雲がそれぞれ言う。

汚い手だというのは俺も認めるが、実戦などどんな手段でも相手を殺さねばならん。甘っちょろい奴らめ。

「俺の頼みを聞けばコイツを放してやる。」

俺は2人を睨み付けた。

「た、頼みって何なのさ？」

水兵のガキが俺に怯えながら言った。

「二度と俺に関わるな、クソ共。出来なければお前達も消えろ。」

俺は乱雑に女を投げ捨て、奴らの前から姿を消した。

雲居一輪は仲間の村紗と相棒の雲山に助け起こされた。

彼女は入道遣い、何時も彼女の隣に居る入道雲の雲山は遙か昔、自分を認め慕った。

彼女の目的も村紗と同じくある人物を蘇らせる事。

その為に飛倉の破片を集めている。他に2人仲間が居るが、その2人も同じく探し続けている事だろう。

一輪が偶々村紗の担当範囲を通り過ぎた時、あの男を見つけた。

村紗は、自分を襲つて来た、と主張していたが、あの男からは罪を感じなかった。

だがとても怒っていた。

きつと彼は迷っている。

一輪はブライアンが仏教徒だと推測していた通り、尼でもある。

仏教は宗教の一種であるように、心に安らぎを与える物。仏教信者として、一輪は彼を心配していた。助けたいとも思った。

だが、彼女自身の力では足りない。もっと強い力が……

そのためにも「聖」を……